鋳師屋遺跡群

十二遺跡

—長野県北佐久郡御代田町十二遺跡発掘調査報告書—

1988

御代田町教育委員会

鋳師屋遺跡群

十二遺跡

—長野県北佐久郡御代田町十二遺跡発掘調査報告書—

1988

御代田町教育委員会

巻頭図版 1
鋳師屋遺跡群遠景

巻頭図版 2
鋳師屋遺跡群

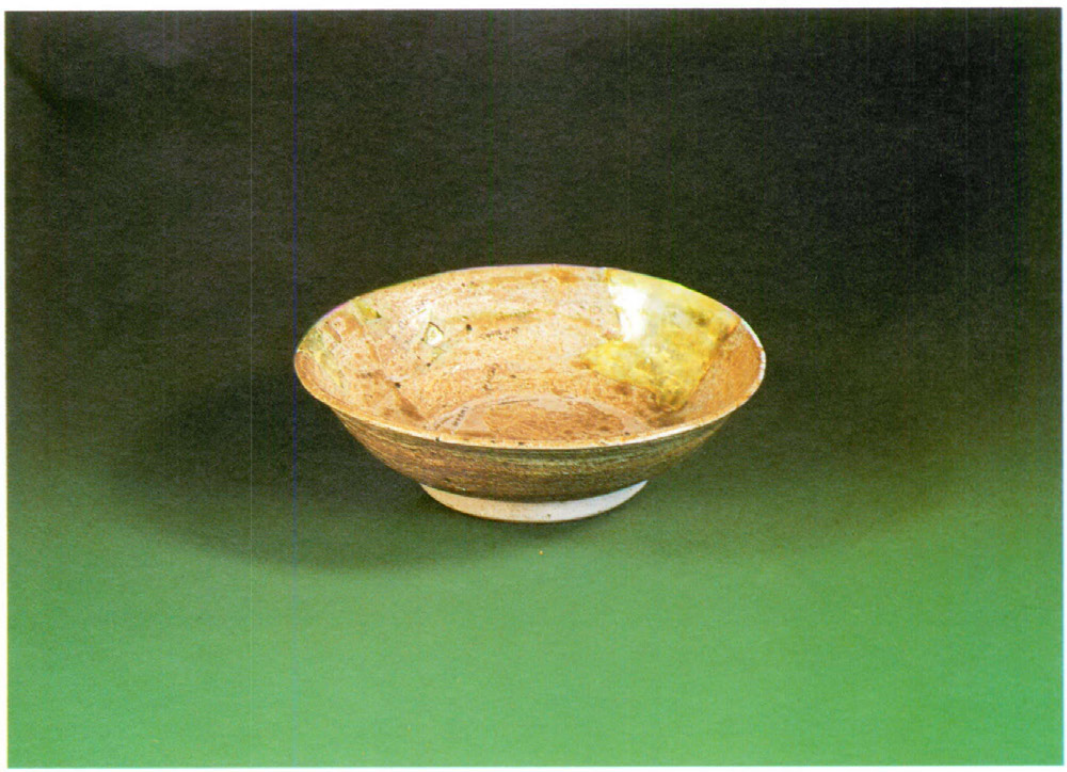
巻頭図版 3
十二遺跡第Ⅰ区

巻頭図版 4
十二遺跡第Ⅰ区

巻頭図版 5
十二遺跡第II区

巻頭図版 6
十二遺跡第II区

1．第Ⅰ区ヒ・フ－32・33グリッド付近



2．灰釉陶器（H－55）

1．出土遺物（H－25）

2．出土遺物（H－25）

序

常時白い噴煙をなびかせている浅間山の南麓にひろがる御代田町では、水田経営の合理化・生産の向上を目的とする県営圃場整備事業が昭和54年から実施されています。

一方この通称小田井・御影地区は、御代田町・佐久市・小諸市の三市町にかかる地域でありますが、遠く奈良・平安時代を中心とする大集落「鋳師屋遺跡群」をいだく場所でもあり、圃場整備事業に伴うその破壊が懸念されました。そこで関係各部局の話し合いがもたれ、この遺跡群について発掘調査による記録保存をとりおこなうことで折合いがつきました。

御代田町では、佐久考古学会長由井茂也氏を発掘調査団長とする発掘調査団にお願いし、昭和59年の野火付遺跡の調査を皮切りに、昭和60年には前田遺跡の発掘調査を進めてまいりました。翌昭和61年に発掘調査が実施されたのが本十二遺跡であります。

十二遺跡の18,000m²にもおよぶ調査区からは、奈良・平安時代の竪穴住居址・掘立柱建物址の70棟余の検出をみ、その中からは貴重な遺物も続々と出土しております。

その結果をまとめたのが本発掘調査報告書です。本書が、御代田町の黎明を知るうえでのささやかな一助となることを願ってやみません。

本調査・報告にあたり深いご理解・ご協力を賜りました皆様に厚く御礼申し上げ序とさせて頂きます。

昭和63年3月

御代田町教育委員会

教育長　小　林　正　人

例　　言

1　本書は、長野県北佐久郡御代田町大字御代田所在の鋳師屋遺跡群十二遺跡の発掘調査報告書である。

2　本発掘調査は、北佐久地方事務所の委託を受け、御代田町教育委員会が実施した。

3　本発掘調査の概要については、第Ⅰ章に記してある。

4　本発掘調査報告書作成の作業分担は以下のとおりである。

◎　遺　物　復　原　伴野有希子、小山内玲子、角張憲子、鳥居　亮。

◎　遺　物　実　測　鳥居　亮、小林美智明、茂木勝等、古越敏彦、角張憲子。

◎　遺　物　拓　本　熊田すみ子、高山玲子、茂木勝等、小山内玲子、伴野有希子。

◎　遺物トレース　鳥居　亮（土器）、角張憲子（石器）。

◎　遺構他トレース　鳥居　亮。

◎　遺　物　写　真　鳥居　亮。

◎　遺物観察表作成　堤　　隆。

◎　版　　組　　み　熊田すみ子、高山玲子、茂木勝等、小山内玲子、角張憲子。

5　本書に使用した航空写真は、巻頭図版１は㈱たつのこが、他は㈱協同測量社が撮影したものである。

6　本書の本文編は、第Ⅱ章１を除き、堤　　隆が執筆した。

7　本書の本文編は、第Ⅱ章１「御代田町の自然環境と地質」については、長野県小諸高等学校樋口和雄先生に玉稿を賜った。厚く御礼申し上げる次第である。

8　本書の付編については以下の各位より玉稿を賜った。厚く御礼申し上げる次第である。

◎　付編１　帯広畜産大学　近藤錬三先生　　◎　付編３　㈱　パリノサーヴェイ

◎　付編２　㈱　パリノサーヴェイ　　◎　付編４　奈良教育大学　三辻利一先生

9　本書の編集は、御代田町教育委員会の責任のもとに、堤　　隆がおこなった。

10　本調査・本報告書作成に際しては、以下の方々から貴重な御助言・御配慮を得た。御芳名を記して厚く御礼申し上げる次第である。順不同・敬称略）

梅村弘、田中正二郎、笹沢浩、戸沢充則、岡本東三、西山克己、桐原健、芦部公一、太田喜幸宮下健司、川島雅人、林原利明、諏訪間順、諏訪間伸、樫田誠、坪井清足、新田浩三、林幸彦羽毛田卓也、高村博文、小山岳夫、三石宗一、郷道哲章、福島邦男、村沢正弘、丸山敞一郎、大上周三、山下誠一、花岡弘、石上周蔵、小平和夫、近藤尚義、岩崎直也、中田英、臼田武正寺島俊郎、木内捷、原明芳、織笠昭、伊丹徹、斎藤孝正、宮崎憲二、山口英男、辻本崇夫

凡　　例

1　遺構の名称

H　→　竪穴住居址　　F　→　掘立柱建物址　　D　→　土壙　　M　→　溝状遺構

2　遺構のナンバーは、時代別・時期別になっておらず、ランダムである。

3　挿図の縮尺

竪穴住居址＝1：80　　掘立柱建物址＝1：80　　カマド＝1：40　　土器＝1：4

以上が基本的なものである。これ以外についても挿図中にその縮尺を明示してある。

4　図版の縮尺

遺構写真の縮尺については統一されていない。

遺物写真の縮尺については、土器が1：3、これ以外の遺物ついては挿図の縮尺と同一にしてある。

顕微鏡写真については、挿図中にスケールを入れるか、その縮尺を明示してある。

5　遺構面積の計測にはプラニメーターを用い、3回の計測の平均値を面積として示した。

6　出土遺物一覧表〈土器〉の法量は、上から口径・器高・底径の順に記載し、無記載は不明、（　）は推定値、〈　〉は大幅な推定値を示す。単位はcmである。

7　出土遺物一覧表〈鉄器・石器〉の法量は、無記載は不明、（　）が現存値、（　）がない場合は完存値を表す。単位は、cm・gである。

8　遺構の層序説明は本文中に記した。

9　土層の色調、遺物胎土の色調については、『新版標準土色帖』の表示に基づいて示した。

10　挿図中におけるスクリーントーンは以下のものを表す。

（1）遺構

遺構断面＝斜線　ただし、切り合いによる破壊部分は斜線を逆方向にした。

カマド＝網点（太）　　火床＝網点（細）

（2）遺物

土器断面　　須恵器断面＝網点（太）　　灰釉陶器断面＝網点（細）

土器内外面　　黒色処理＝網点（太）　　赤色塗彩＝網点（細）　　灰釉範囲＝斑点

石器外面　　使用痕範囲＝網点（細）

本 文 目 次

序　文
例　言
凡　例
目　次
I　発掘調査の概要……1
1　発掘調査の概要……3
(1)　調査に至る動機……3
(2)　発掘調査の概要……4
(3)　発掘の設定と遺構の検出……5
(4)　発掘調査の経緯……6
II　遺跡の環境……11
1　御代田町の自然環境と地質……13
(1)　自然環境……13
(2)　地　質……13
2　十二遺跡の歴史的環境……20
III　層　序……25
1　層　序……27
IV　遺構と遺物……29
1　竪穴住居址……31
(1)　H－1号住居址……31
(2)　H－2号住居址……33
(3)　H－3号住居址……36
(4)　H－4号住居址……38
(5)　H－5号住居址……38
(6)　H－6号住居址……40
(7)　H－7号住居址……43
(8)　H－8号住居址……44
(9)　H－9号住居址……46
(10)　H－10号住居址……49
(11)　H－11号住居址……53
(12)　H－12号住居址……56
(13)　H－13号住居址……59
(14)　H－14号住居址……63
(15)　H－15号住居址……67
(16)　H－16号住居址……73
(17)　H－17号住居址……75
(18)　H－18号住居址……79
(19)　H－19号住居址……83
(20)　H－20号住居址……87

(21) H－21号住居址……92
(22) H－22号住居址……94
(23) H－23号住居址……96
(24) H－24号住居址……99
(25) H－25号住居址……102
(26) H－26号住居址……108
(27) H－27号住居址……113
(28) H－28号住居址……115
(29) H－29号住居址……119
(30) H－30号住居址……122
(31) H－31号住居址……125
(32) H－32号住居址……127
(33) H－33号住居址……129
(34) H－34号住居址……131
(35) H－35号住居址……134
(36) H－36号住居址……138
(37) H－37号住居址……141
(38) H－38号住居址……144
(39) H－39号住居址……147
(40) H－40号住居址……150
(41) H－41号住居址……152
(42) H－42号住居址……153
(43) H－43号住居址……157
(44) H－44号住居址……161
(45) H－45号住居址……164
(46) H－46号住居址……166
(47) H－47号住居址……171
(48) H－48号住居址……175
(49) H－49号住居址……176
(50) H－50号住居址……181
(51) H－51号住居址……184
(52) H－52号住居址……185
(53) H－53号住居址……189
(54) H－54号住居址……191
(55) H－55号住居址……194
(56) H－56号住居址……197
(57) H－57号住居址……200
(58) H－58号住居址……203
(59) H－59号住居址……208
(60) H－60号住居址……210
(61) H－61号住居址……213
(62) H－62号住居址……215
(63) H－63号住居址……216
(64) H－64号住居址……218
(65) H－65号住居址……221
(66) H－66号住居址……224
(67) H－67号住居址……226
(68) H－68号住居址……229
(69) H－69号住居址……232
(70) H－70号住居址……235
(71) H－71号住居址……238

2 掘立柱建物址……241
(1) F－1号掘立柱建物址……241
(2) F－2号掘立柱建物址……242
(3) F－3号掘立柱建物址……242
(4) F－4号掘立柱建物址……244
(5) F－5号掘立柱建物址……245
(6) F－6号掘立柱建物址……246
(7) F－7号掘立柱建物址……247
(8) F－8号掘立柱建物址……248
(9) F－9号掘立柱建物址……249
(10) F－10号掘立柱建物址……250

(11) F－11号掘立柱建物址……251
(12) F－12号掘立柱建物址……252
(13) F－13号掘立柱建物址……253
(14) F－14号掘立柱建物址……254
(15) F－15号掘立柱建物址……255
(16) F－16号掘立柱建物址……256
(17) F－17号掘立柱建物址……257
(18) F－18号掘立柱建物址……257
(19) F－19号掘立柱建物址……258
(20) F－20号掘立柱建物址……259
(21) F－21号掘立柱建物址……260
(22) F－22号掘立柱建物址……261
(23) F－23号掘立柱建物址……262
(24) F－24号掘立柱建物址……263
(25) F－25号掘立柱建物址……264
(26) F－26号掘立柱建物址……265
(27) F－27号掘立柱建物址……266
(28) F－28号掘立柱建物址……267
(29) F－29号掘立柱建物址……268
(30) F－30号掘立柱建物址……269
(31) F－31号掘立柱建物址……270
(32) F－32号掘立柱建物址……271
(33) F－33号掘立柱建物址……272
(34) F－34号掘立柱建物址……273
(35) F－35号掘立柱建物址……274
(36) F－36号掘立柱建物址……275
(37) F－37号掘立柱建物址……276
(38) F－38号掘立柱建物址……276
(39) F－39号掘立柱建物址……277
(40) F－40号掘立柱建物址……278
(41) F－41号掘立柱建物址……279
(42) F－42号掘立柱建物址……279
(43) F－43号掘立柱建物址……281
(44) F－44号掘立柱建物址……282
(45) F－45号掘立柱建物址……283
(46) F－46号掘立柱建物址……284
(47) F－47号掘立柱建物址……285
(48) F－48号掘立柱建物址……286
(49) F－49号掘立柱建物址……287
(50) F－50号掘立柱建物址……288
(51) F－51号掘立柱建物址……289
(52) F－52号掘立柱建物址……290
(53) F－53号掘立柱建物址……291
(54) F－54号掘立柱建物址……292
(55) F－55号掘立柱建物址……293
(56) F－56号掘立柱建物址……294
(57) F－57号掘立柱建物址……295
(58) F－58号掘立柱建物址……296
(59) F－59号掘立柱建物址……297
(60) F－60号掘立柱建物址……298
(61) F－61号掘立柱建物址……299
(62) F－62号掘立柱建物址……300
(63) F－63号掘立柱建物址……301
(64) F－64号掘立柱建物址……301
(65) F－65号掘立柱建物址……302
(66) F－66号掘立柱建物址……303
(67) F－67号掘立柱建物址……304
(68) F－68号掘立柱建物址……305
(69) F－69号掘立柱建物址……306
(70) F－70号掘立柱建物址……307
(71) F－71号掘立柱建物址……308
(72) F－72号掘立柱建物址……309
(73) F－73号掘立柱建物址……310
(74) F－74号掘立柱建物址……310

(75) F－75号掘立柱建物址……312
3 井戸址……319
(1) I－1号井戸址……319
4 土 壙……321
(1) D－1号土壙……321
(2) D－2号土壙……321
(3) D－3号土壙……321
(4) D－4号土壙……322
(5) D－5号土壙……322
(6) D－6号土壙……323
5 溝状遺構……324
(1) M－1号溝状遺構……324
6 旧河川……326
7 表面採集遺物……328
V 総 括……331
1 十二遺跡における土器様相……333
(1) はじめに……333
(2) 器種・形態分類……333
1） 蓋……333
2） 坏……334
3） 椀……339
4） 皿……340
5） 高坏……341
6） 鉢……341
7） 瓶……341
8） 壺・甕……342
9） 甕……343
(3) 土器組成の抽出とその段階的把握……348
1） はじめに……348
2） 土器組成の諸段階……351
3） 奈良・平安時代の土器編年……353
2 十二遺跡の石器・鉄器等について……356
(1) 石器……356
(2) 土製品……357
(3) 鉄器……358

3　十二遺跡における遺構および集落の様相……360
(1)　竪穴住居址の形態……360
1）　火拠のあり方……360
2）　主柱穴のあり方……360
3）　平面形……361
4）　面積分布……361
5）　カマド……362
(2)　竪穴住居址の形態変遷……362
(3)　掘立柱建物址の形態……363
(4)　掘立柱建物址の時期……365
(5)　集落の様相……366
(6)　集落と可耕地の問題……368
(7)　集落の性格……369
VI　付　編……373
自然科学分析にあたって……375
(1)　はじめに……375
(2)　付編1　十二遺跡土壌の植物珪酸体分析にあたって……375
(3)　付編2　十二遺跡の花粉分析にあたって……376
(4)　付編3　十二遺跡出土炭化材の樹種同定にあたって……376
(5)　付編4　十二遺跡出土須恵器の蛍光X線分析にあたって……376
付編1　十二遺跡土壌の植物珪酸体分析……377
(1)　植物珪酸体の分離・定量法……377
(2)　植物珪酸体の形態的特徴……377
(3)　植物珪酸体の形態別組成……379
引用文献……380
付編2　十二遺跡の花粉分析……385
(1)　目　　的……385
(2)　試　　料……385
(3)　分析方法……385
(4)　結　　果……389
(5)　考　　察……389
付編3　十二遺跡出土炭化材の樹種同定……393

(1) 試　　料……393
(2) 方　　法……393
(3) 結　　果……393
付編4　十二遺跡出土須恵器の蛍光X線分析……401
(1) はじめに……401
(2) 分析結果……402
1）　窯跡出土須恵器……402
2）　遺跡出土須恵器……405
付編5　十二遺跡における須恵器供給の問題……417
(1) 問題の所在……417
(2) 在地窯の検討……418
(3) 消費地での検討……418
(4) おわりに……420
引用・参考文献……421

挿　図　目　次

第1図　十二遺跡発掘調査対象区……3
第2図　バックホー搬入……6
第3図　バックホーによる試掘開始……6
第4図　発掘調査区……6
第5図　激しい湧水の中での調査……6
第6図　発掘調査区……7
第7図　井戸址の調査……7
第8図　竪穴住居址の精査……7
第9図　遺物出土状態の実測……7
第10図　出土遺物の復原……8
第11図　出土遺物の実測……8
第12図　出土遺物写真撮影……8
第13図　ワードプロセッサによる原稿執筆……8
第14図　発掘調査区……9・10
第15図　浅間火山の変遷……14
第16図　浅間火山の地質図……15・16
第17図　追分火砕流・軽石流の分布概念図……18
第18図　前田遺跡出土初期須恵器……21
第19図　野火付遺跡神功開寶……21
第20図　十二遺跡と周辺の遺跡分布……22
第21図　前田遺跡円面硯……24
第22図　野火付遺跡埋葬馬配置概念図……24
第23図　十二遺跡各地区土層断面図……28
第24図　H－1号住居址実測図……31
第25図　H－1号住居址カマド実測図……32
第26図　H－1号住居址出土遺物……32
第27図　H－2号住居址実測図……34
第28図　H－2号住居址カマド実測図……34
第29図　H－2号住居址出土遺物……35
第30図　H－3号住居址実測図……37
第31図　H－3号住居址出土遺物実測図……37
第32図　H－4号住居址実測図……38
第33図　H－5号住居址実測図……39
第34図　H－5号住居址カマド実測図……40
第35図　H－5号住居址出土遺物……40
第36図　H－6号住居址実測図……41
第37図　H－6号住居址カマド実測図……42
第38図　H－6号住居址出土遺物……42

第39図　H－7号住居址実測図……43
第40図　H－40号住居址カマド実測図……44
第41図　H－7号住居址出土遺物……44
第42図　H－8号住居址実測図……45
第43図　H－8号住居址出土遺物……45
第44図　H－8号住居址出土遺物……45
第45図　H－9号住居址カマド実測図……46
第46図　H－9号住居址実測図……47
第47図　H－9号住居址出土遺物……48
第48図　H－10号住居址実測図……50
第49図　H－10号住居址カマド実測図……51
第50図　H－10号住居址出土遺物……52
第51図　H－10号住居出土遺物……53
第52図　H－11号住居址実測図……54
第53図　H－11号住居址カマド実測図……55
第54図　H－11号住居址出土遺物……55
第55図　H－12号住居址実測図……56
第56図　H－12号住居址出土遺物……57
第57図　H－13号住居址実測図……59
第58図　H－13号住居址カマド実測図……60
第59図　H－13号住居址出土遺物……61
第60図　H－13号住居址出土遺物……62
第61図　H－13号住居址出土遺物実測図……63
第62図　H－14号住居址実測図……64
第63図　H－14号住居址カマド実測図……65
第64図　H－14号住居址出土遺物……65
第65図　H－14号住居址出土遺物……66
第66図　H－14号住居址出土遺物……67
第67図　H－15号住居址実測図……68
第68図　H－15号住居址カマド実測図……69
第69図　H－15号住居址出土遺物……70
第70図　H－15号住居址出土遺物……71
第71図　H－16号住居址実測図……73
第72図　H－16号住居址出土遺物……74
第73図　H－17号住居址実測図……76
第74図　H－17号住居址カマド実測図……76
第75図　H－17号住居址出土遺物……77
第76図　H－17号住居址出土遺物……78
第77図　H－18号住居址実測図……80
第78図　H－18号住居址カマド実測図……81
第79図　H－18号住居址出土遺物一覧表……82
第80図　H－19号住居址カマド実測図……83
第81図　H－19号住居址実測図……84
第82図　H－19号住居址出土遺物……86
第83図　H－19号住居址出土遺物……87
第84図　H－20号住居址カマド実測図……87
第85図　H－20号住居址実測図……88
第86図　H－20号住居址出土遺物……89
第87図　H－20号住居址出土遺物実測図……90
第88図　H－21号住居址実測図……92
第89図　H－21号住居址カマド実測図……93
第90図　H－21号住居址出土遺物……93
第91図　H－22号住居址実測図……94
第92図　H－22号住居址カマド実測図……95
第93図　H－22号住居址出土遺物……95
第94図　H－23号住居址実測図……97
第95図　H－23号住居址カマド実測図……98
第96図　H－23号住居址出土遺物……98
第97図　H－23号住居址出土遺物……99
第98図　H－24号住居址実測図……100
第99図　H－24号住居址カマド実測図……100
第100図　H－24号住居址出土遺物……101
第101図　H－25号住居址実測図……102
第102図　H－25号住居址遺物分布図……102
第103図　H－25号住居址カマド実測図……103
第104図　H－25号住居址出土遺物……104
第105図　H－25号住居址出土遺物……105
第106図　H－25号住居址出土遺物……106
第107図　H－26号住居址実測図……109
第108図　H－26号住居址カマド実測図……110
第109図　H－26号住居址出土遺物……110
第110図　H－26号住居址出土遺物実測図……111
第111図　H－26号住居址出土遺物……112
第112図　H－27号住居址実測図……113
第113図　H－27号住居址カマド実測図……113
第114図　H－27号住居址出土遺物……114
第115図　H－28号住居址実測図……115
第116図　H－28号住居址カマド実測図……116
第117図　H－28号住居址出土遺物……117
第118図　H－28号住居址出土遺物……118
第119図　H－29号住居址実測図……119
第120図　H－29号住居址カマド実測図……120

第121図　H－29号住居址出土遺物……121
第122図　H－30号住居址実測図……123
第123図　H－30号住居址カマド実測図……123
第124図　H－30号住居址出土遺物……124
第125図　H－31号住居址実測図……125
第126図　H－31号住居址カマド実測図……126
第127図　H－31号住居址出土遺物……126
第128図　H－32号住居址実測図……127
第129図　H－32号住居址カマド実測図……128
第130図　H－32号住居址出土遺物……128
第131図　H－33号住居址実測図……130
第132図　H－33号住居址出土遺物……130
第133図　H－34号住居址実測図……131
第134図　H－34号住居址カマド実測図……132
第135図　H－34号住居址出土遺物……133
第136図　H－34号住居址出土遺物……133
第137図　H－35号住居址実測図……135
第138図　H－35号住居址カマド実測図……136
第139図　H－35号住居址出土遺物……136
第140図　H－35号住居址出土遺物……137
第141図　H－36号住居址実測図……139
第142図　H－36号住居址カマド実測図……139
第143図　H－36号住居址出土遺物……140
第144図　H－37号住居址実測図……141
第145図　H－37号住居址カマド実測図……141
第146図　H－37号住居址出土遺物……142
第147図　H－38号住居址実測図……144
第148図　H－38号住居址カマド実測図……145
第149図　H－38号住居址出土遺物……146
第150図　H－39号住居址実測図……147
第151図　H－39号住居址カマド実測図……148
第152図　H－39号住居址出土遺物……149
第153図　H－40号住居址カマド実測図……150
第154図　H－40号住居址実測図……151
第155図　H－40号住居址出土遺物……151
第156図　H－41号住居址実測図……152
第157図　H－42号住居址実測図……153
第158図　H－42号住居址カマド実測図……154
第159図　H－42号住居址出土遺物実測図……154
第160図　H－42号住居址出土遺物……155
第161図　H－43号住居址実測図……156
第162図　H－43号住居址カマド実測図……157
第163図　H－43号住居址出土遺物……157
第164図　H－43号住居址出土遺物……158
第165図　H－44号住居址実測図……160
第166図　H－44号住居址カマド実測図……161
第167図　H－44号住居址出土遺物……162
第168図　H－44号住居址出土遺物……163
第169図　H－45号住居址カマド実測図……164
第170図　H－45号住居址実測図……165
第171図　H－45号住居址出土遺物……166
第172図　H－46号住居址実測図……167
第173図　H－46号住居址カマド実測図……167
第174図　H－46号住居址出土遺物……168
第175図　H－46号住居址出土遺物……169
第176図　H－47号住居址カマド実測図……171
第177図　H－47号住居址実測図……172
第178図　H－47号住居址出土遺物……173
第179図　H－47号住居址出土遺物……174
第180図　H－48号住居址カマド実測図……175
第181図　H－49号住居址実測図……176
第182図　H－49号住居址カマド実測図……177
第183図　H－49号住居址出土遺物……178
第184図　H－49号住居址出土遺物……179
第185図　H－49号住居址出土遺物……181
第186図　H－50号住居址実測図……182
第187図　H－50号住居址カマド実測図……182
第188図　H－50号住居址出土遺物……183
第189図　H－51号住居址実測図……184
第190図　H－51号住居址カマド実測図……184
第191図　H－51号住居址出土遺物……185
第192図　H－52号住居址実測図……186
第193図　H－52号住居址カマド実測図……186
第194図　H－52号住居址出土遺物……187
第195図　H－53号住居址実測図……189
第196図　H－53号住居址カマド実測図……190
第197図　H－53号住居址出土遺物……190
第198図　H－54号住居址実測図……192
第199図　H－54号住居址カマド実測図……192
第200図　H－54号住居址出土遺物……193
第201図　H－55号住居址実測図……194
第202図　H－55号住居址カマド実測図……195

第203図　Ｈ－55号住居址出土遺物……196
第204図　Ｈ－56号住居址実測図……198
第205図　Ｈ－56号住居址カマド実測図……198
第206図　Ｈ－56号住居址出土遺物……199
第207図　Ｈ－57号住居址実測図……200
第208図　Ｈ－57号住居址馬歯出土状態……201
第209図　Ｈ－57号住居址カマド実測図……201
第210図　Ｈ－57号住居址出土遺物……202
第211図　Ｈ－58号住居址実測図……203
第212図　Ｈ－58号住居址炭化材及び遺物分布図……204
第213図　Ｈ－58号住居址カマド実測図……205
第214図　Ｈ－58号住居址出土遺物……206
第215図　Ｈ－58号住居址出土遺物……207
第216図　Ｈ－59号住居址実測図……208
第217図　Ｈ－59号住居址カマド実測図……209
第218図　Ｈ－59号住居址出土遺物……210
第219図　Ｈ－60号住居址実測図……211
第220図　Ｈ－60号住居址カマド実測図……211
第221図　Ｈ－60号住居址出土遺物……212
第222図　Ｈ－61号住居址実測図……213
第223図　Ｈ－61号住居址出土遺物……214
第224図　Ｈ－61号住居址カマド実測図……214
第225図　Ｈ－62号住居址実測図……215
第226図　Ｈ－62号住居址カマド実測図……215
第227図　Ｈ－62号住居址出土遺物……216
第228図　Ｈ－63号住居址実測図……216
第229図　Ｈ－63号住居址カマド実測図……217
第230図　Ｈ－63号住居址出土遺物……217
第231図　Ｈ－64号住居址実測図……218
第232図　Ｈ－64号住居址カマド実測図……219
第233図　Ｈ－64号住居址出土遺物……220
第234図　Ｈ－65号住居址実測図……221
第235図　Ｈ－65号住居址カマド実測図……222
第236図　Ｈ－65号住居址出土遺物……223
第237図　Ｈ－66号住居址実測図……224
第238図　Ｈ－66号住居址カマド実測図……224
第239図　Ｈ－66号住居址出土遺物……225
第240図　Ｈ－67号住居址実測図……226
第241図　Ｈ－67号住居址カマド実測図……227
第242図　Ｈ－67号住居址出土遺物……228
第243図　Ｈ－68号住居址実測図……229
第244図　Ｈ－68号住居址カマド実測図……230
第245図　Ｈ－68号住居址出土遺物……231
第246図　Ｈ－69号住居址実測図……233
第247図　Ｈ－69号住居址カマド実測図……233
第248図　Ｈ－69号住居址出土遺物……234
第249図　Ｈ－70号住居址実測図……236
第250図　Ｈ－70号住居址カマド実測図……237
第251図　Ｈ－70号住居址出土遺物……237
第252図　Ｈ－71号住居址実測図……238
第253図　Ｈ－71号住居址カマド実測図……238
第254図　Ｆ－１号掘立柱建物址実測図……241
第255図　Ｆ－２号掘立柱建物址実測図……242
第256図　Ｆ－３号掘立柱建物址実測図……243
第257図　Ｆ－４号掘立柱建物址実測図……244
第258図　Ｆ－５号掘立柱建物址実測図……245
第259図　Ｆ－６号掘立柱建物址実測図……246
第260図　Ｆ－７号掘立柱建物址実測図……247
第261図　Ｆ－７号掘立柱建物址実測図……247
第262図　Ｆ－８号掘立柱建物址実測図……248
第263図　Ｆ－９号掘立柱建物址実測図……249
第264図　Ｆ－10号掘立柱建物址実測図……250
第265図　Ｆ－11号掘立柱建物址実測図……251
第266図　Ｆ－12号掘立柱建物址実測図……252
第267図　Ｆ－13号掘立柱建物址実測図……253
第268図　Ｆ－14号掘立柱建物址実測図……254
第269図　Ｆ－15掘立柱建物址……255
第270図　Ｆ－16号掘立柱建物址実測図……256
第271図　Ｆ－17号掘立柱建物址実測図……257
第272図　Ｆ－18号掘立柱建物址実測図……257
第273図　Ｆ－19号掘立柱建物址実測図……258
第274図　Ｆ－20号掘立柱建物址実測図……259
第275図　Ｆ－21号掘立柱建物址実測図……260
第276図　Ｆ－22号掘立柱建物址実測図……261
第277図　Ｆ－23号掘立柱建物址実測図……262
第278図　Ｆ－24号掘立柱建物址実測図……263
第279図　Ｆ－25号掘立柱建物址実測図……264
第280図　Ｆ－26号掘立柱建物址……265
第281図　Ｆ－27号掘立柱建物址実測図……266
第282図　Ｆ－28号掘立柱建物址実測図……267
第283図　Ｆ－28号掘立柱建物址出土遺物……267
第284図　Ｆ－29号掘立柱建物址実測図……268

第285図　Ｆ－30号掘立柱建物址実測図……269
第286図　Ｆ－31号掘立柱建物址実測図……270
第287図　Ｆ－32号掘立柱建物址実測図……271
第288図　Ｆ－33号掘立柱建物址実測図……272
第289図　Ｆ－34号掘立柱建物址実測図……273
第290図　Ｆ－35号掘立柱建物址実測図……274
第291図　Ｆ－35号掘立柱建物址出土遺物……275
第292図　Ｆ－36号掘立柱建物址……275
第293図　Ｆ－37号掘立柱建物址実測図……276
第294図　Ｆ－36号掘立柱建物址実測図……276
第295図　Ｆ－39号掘立柱建物址実測図……277
第296図　Ｆ－40号掘立柱建物址出土遺物……278
第297図　Ｆ－40号掘立柱建物址実測図……278
第298図　Ｆ－41号掘立柱建物址実測図……279
第299図　Ｆ－42号掘立柱建物址実測図……280
第300図　Ｆ－43号掘立柱建物址実測図……281
第301図　Ｆ－44号掘立柱建物址実測図……282
第302図　Ｆ－45号掘立柱建物址実測図……283
第303図　Ｆ－46号掘立柱建物址実測図……284
第304図　Ｆ－47号掘立柱建物址……285
第305図　Ｆ－48号掘立柱建物址実測図……286
第306図　Ｆ－49号掘立柱建物址実測図……287
第307図　Ｆ－50号掘立柱建物址実測図……288
第308図　Ｆ－51号掘立柱建物址実測図……289
第309図　Ｆ－52号掘立柱建物址実測図……290
第310図　Ｆ－53号掘立柱建物址実測図……291
第311図　Ｆ－54号掘立柱建物址実測図……292
第312図　Ｆ－55号掘立柱建物址実測図……293
第313図　Ｆ－56号掘立柱建物址実測図……294
第314図　Ｆ－57号掘立柱建物址実測図……295
第315図　Ｆ－58号掘立柱建物址実測図……296
第316図　Ｆ－58号掘立柱建物址出土遺物……297
第317図　Ｆ－59号掘立柱建物址実測図……297
第318図　Ｆ－60号掘立柱建物址実測図……298
第319図　Ｆ－61号掘立柱建物址実測図……299
第320図　Ｆ－62号掘立柱建物址実測図……300
第321図　Ｆ－63号掘立柱建物址実測図……301
第322図　Ｆ－64号掘立柱建物址実測図……302
第323図　Ｆ－65号掘立柱建物址実測図……302
第324図　Ｆ－65号掘立柱建物址出土遺物……303
第325図　Ｆ－66号掘立柱建物址実測図……303
第326図　Ｆ－67号掘立柱建物址実測図……304
第327図　Ｆ－68号掘立柱建物址実測図……305
第328図　Ｆ－68号掘立柱建物址実測図……305
第329図　Ｆ－69号掘立柱建物址実測図……306
第330図　Ｆ－70号掘立柱建物址実測図……307
第331図　Ｆ－71号掘立柱建物址実測図……308
第332図　Ｆ－72号掘立柱建物址実測図……309
第333図　Ｆ－73号掘立柱建物址実測図……310
第334図　Ｆ－74号掘立柱建物址実測図……311
第335図　Ｆ－75号掘立柱建物址実測図……312
第336図　Ｉ－１号井戸址出土遺物……320
第337図　Ｉ－１号井戸址実測図……320
第338図　Ｄ－１号土壙実測図……321
第339図　Ｄ－２号土壙実測図……321
第340図　Ｄ－３号土壙実測図……322
第341図　Ｄ－４号土壙実測図……322
第342図　Ｄ－５号土壙実測図……322
第343図　Ｄ－６号土壙実測図……323
第344図　Ｍ－１号溝状遺構出土遺物……324
第345図　Ｍ－１号溝状遺構実測図……325
第346図　旧河川……326
第347図　旧河川出土遺物……327
第348図　表面採集遺物……328
第349図　表面採集遺物……329
第350図　須恵器蓋分類図……334
第351図　土師器蓋……334
第352図　須恵器坏の法量分化……335
第353図　須恵器坏分類図……335
第354図　須恵器高台付坏の法量分化……336
第355図　須恵器高台付坏……336
第356図　土師器坏分類図……338
第357図　土師器坏形態Ｄの法量分化……339
第358図　須恵器埦……339
第359図　土師器埦……340
第360図　灰釉陶器埦……340
第361図　土師器皿……340
第362図　灰釉陶器皿……340
第363図　土師器高坏……341
第364図　土師器鉢……341
第365図　須恵器長頸瓶……341
第366図　須恵器短頸壺……342

第367図　須恵器壺……342
第368図　須恵器四耳壺……342
第369図　須恵器甕……343
第370図　土師器長胴甕Ⅰ類……343
第371図　土師器甕Ⅱ類分類図……344
第372図　土師器甕Ⅱ類分類図……345
第373図　土師器球胴甕Ⅰ類分類図……346
第374図　土師器球胴甕Ⅱ類分類図……346
第375図　土師器台付甕……347
第376図　土師器その他の甕……347
第377図　土師器甑……348
第378図　佐久地方における奈良時代を中心とした
　　土器編集年……349・350
第379図　十二遺跡出土砥石……356
第380図　十二遺跡出土遺物……357
第381図　十二遺跡出土鎌……358
第382図　十二遺跡出土鋤鍬先……359
第383図　竪穴式住居の主柱穴のあり方……360
第384図　竪穴住居の長幅比……361
第385図　竪穴住居の形態別面積分布……361
第386図　掘立柱建物址（総柱）形態一覧……363
第387図　掘立柱建物址（側柱）形態一覧……364
第388図　掘立柱建物址形態別面積分布……365
第389図　竪穴住居址の時期別分布……367
第390図　十二遺跡の集落と可耕地……368
第391図　鋳師屋遺跡群付近の歴史地図……370
付　編
第１図　十二遺跡植物珪酸体分析および花粉分析
　　サンプル採取位置……375
図版１　十二遺跡植物珪酸体顕微鏡写真……381
図版２　十二遺跡植物珪酸体顕微鏡写真……382
図版３　十二遺跡植物珪酸体顕微鏡写真……383
第１図　十二遺跡試料花粉化石群集分布……388
図版１　十二遺跡試料花粉化石顕微鏡写真……391
図版２　十二遺跡試料顕微鏡下状況写真……392
第１図　Ｈ－58号住居址炭化材分布状況……394
図版１　材の顕微鏡写真……395
図版２　材の顕微鏡写真……396
図版３　材の顕微鏡写真……397
図版４　材の顕微鏡写真……398
第１図　地元窯須恵器のRb－Sr分布図……403
第２図　地元窯出土須恵器のＫ量……404
第３図　地元窯出土須恵器のCa量……404
第４図　地元窯出土の須恵器のFe量……405
第５図　十二遺跡出土須恵器のRb－Sr分布量……405
第６図　十二遺跡出土須恵器のＫ量……406
第７図　十二遺跡出土須恵器のCa量……406
第８図　十二遺跡出土須恵器のFe量……406
第９図　搬入品の須恵器のＫ因子……408
第10図　搬入品の須恵器のCa因子……408
第11図　搬入品の須恵器のFe因子……409
第12図　根岸・前田遺跡出土須恵器のRb－Sr分布図……410
第13図　根岸・前田遺跡出土土器のＫ因子……411
第14図　根岸・前田遺跡出土土器のCa因子……411
第15図　根岸・前田遺跡出土土器のFe因子……411
第16図　胎土分析資料……415
第17図　胎土分析資料……416
第１図　御牧原・八重原における古窯址の分布……417
第２図　十二遺跡への須恵器等の搬入……419

付　表　目　次

第１表　浅間火山の編年……17
第２表　十二遺跡と周辺の遺跡地名表……23
第３表　Ｈ－１号住居址出土遺物一覧表〈石器〉……32
第４表　Ｈ－１号住居址出土遺物一覧表〈土器〉……33
第５表　Ｈ－２号住居址出土遺物一覧表〈土器〉……35
第６表　Ｈ－３号住居址出土遺物一覧表〈石器〉……37
第７表　Ｈ－５号住居址出土遺物一覧表〈土器〉……40
第８表　Ｈ－６号住居址出土遺物一覧表〈土器〉……42
第９表　Ｈ－７号住居址出土遺物一覧表〈土器〉……44
第10表　Ｈ－８号住居址出土遺物一覧表〈土器〉……46
第11表　Ｈ－８号住居址出土遺物一覧表〈石器〉……46
第12表　Ｈ－９号住居址出土遺物一覧表〈石器〉……47
第13表　Ｈ－９号住居址出土遺物一覧表〈土器〉……49
第14表　Ｈ－10号住居址出土遺物一覧表〈土器〉……51

第15表　H－10号住居址出土遺物一覧表〈鉄器〉……53
第16表　H－11号住居址出土遺物一覧表〈土器〉……55
第17表　H－12号住居址出土遺物一覧表〈土器〉……58
第18表　H－12号住居址出土遺物一覧表〈石器〉……58
第19表　H－13号住居址出土遺物一覧表〈土器〉……62
第20表　H－13号住居址出土遺物〈鉄器〉……62
第21表　H－14号住居址出土遺物一覧表〈土器〉……66
第22表　H－14号住居址出土遺物一覧表〈鉄器〉……67
第23表　H－15号住居址出土遺物一覧表〈土器〉……72
第24表　H－16号住居址出土遺物一覧表〈土器〉……75
第25表　H－17号住居址出土遺物一覧表〈土器〉……79
第26表　H－17号住居址出土遺物一覧表〈石器〉……79
第27表　H－18号住居址出土遺物一覧表〈土器〉……81
第28表　H－19住居址出土遺物一覧表〈土器〉……85
第29表　H－19号住居址出土遺物一覧表〈石器〉……87
第30表　H－20号住居址出土遺物一覧表〈石器〉……90
第31表　H－20号住居址出土遺物一覧表〈土器〉……91
第32表　H－21住居址出土遺物一覧表〈土器〉……93
第33表　H－22号住居址出土遺物一覧表〈土器〉……96
第34表　H－23号住居址出土遺物一覧表〈土器〉……99
第35表　H－23号住居址出土遺物一覧表〈鉄器〉……99
第36表　H－24号住居址出土遺物一覧表〈土器〉……101
第37表　H－25住居址出土遺物一覧表〈土器〉……107
第38表　H－25号住居址出土遺物一覧表〈土器〉……108
第39表　H－25号住居址出土遺物一覧表〈石器〉……108
第40表　H－26号住居址出土遺物一覧表〈土器〉……112
第41表　H－26号住居址出土遺物一覧表〈鉄器・石器〉112
第42表　H－27号住居址出土遺物一覧表〈土器〉……114
第43表　H－28号住居址出土遺物一覧表〈土器〉……118
第44表　H－29号住居址出土遺物一覧表〈石器〉……121
第45表　H－29号住居址出土遺物一覧表〈土器〉……122
第46表　H－30号住居址出土遺物一覧表〈土器〉……124
第47表　H－31号住居址出土遺物一覧表〈土器〉……127
第48表　H－32号住居址出土遺物一覧表〈土器〉……129
第49表　H－33号住居址出土遺物一覧表〈土器〉……130
第50表　H－34号住居址出土遺物一覧表〈石器・鉄器〉133
第51表　H－34号住居址出土遺物一覧表〈土器〉……134
第52表　H－35号住居址出土遺物一覧表〈土器〉……138
第53表　H－36号住居址出土遺物一覧表〈土器〉……140
第54表　H－36号住居址出土遺物一覧表〈鉄器〉……140
第55表　H－37号住居址出土遺物一覧表〈土器〉……143
第56表　H－38号住居址出土遺物一覧表〈土器〉……146
第57表　H－38号住居址出土遺物一覧表〈鉄器・石器〉147
第58表　H－39号住居址出土遺物一覧表〈土器〉……150
第59表　H－40号住居址出土遺物一覧表〈土器〉……152
第60表　H－40号住居址出土遺物一覧表〈石器〉……152
第61表　H－42号住居址出土遺物一覧表〈土器〉……155
第62表　H－42号住居址出土遺物一覧表〈土器〉……156
第63表　H－43号住居址出土遺物一覧表〈土器〉……159
第64表　H－44号住居址出土遺物一覧表〈土器〉……163
第65表　H－45号住居址出土遺物一覧表〈土器〉……166
第66表　H－46号住居址出土遺物一覧表〈石器〉……169
第67表　H－46号住居址出土遺物一覧表〈土器〉……170
第68表　H－47号住居址出土遺物一覧表〈鉄器〉……174
第69表　H－47号住居址出土遺物一覧表〈鉄器〉……174
第70表　H－49号住居址出土遺物一覧表〈土器〉……180
第71表　H－49号住居址出土遺物一覧表〈土器〉……181
第72表　H－49号住居址出土遺物一覧表〈鉄器〉……181
第73表　H－50号住居址出土遺物一覧表〈土器〉……183
第74表　H－50号住居址出土遺物一覧表〈石器〉……183
第75表　H－51号住居址出土遺物一覧表〈土器〉……185
第76表　H－52号住居址出土遺物一覧表〈土器〉……188
第77表　H－52号住居址出土遺物一覧表〈鉄器・石器〉188
第78表　H－53号住居址出土遺物一覧表〈石器〉……190
第79表　H－53号住居址出土遺物一覧表〈土器〉……191
第80表　H－54号住居址出土遺物一覧表〈土器〉……193
第81表　H－55号住居址出土遺物一覧表〈土器〉……197
第82表　H－56号住居址出土遺物一覧表〈土器〉……199
第83表　H－57号住居址出土遺物一覧表〈土器〉……202
第84表　H－58号住居址出土遺物一覧表〈土器〉……207
第85表　H－58住居址出土遺物一覧表〈土器〉……208
第86表　H－59号住居址出土遺物一覧表〈土器〉……210
第87表　H－60号住居址出土遺物一覧表〈土器〉……213
第88表　H－61号住居址出土遺物一覧表〈土器〉……214
第89表　H－62号住居址出土遺物一覧表〈土器〉……216
第90表　H－63号住居址出土遺物一覧表〈土器〉……217
第91表　H－64号住居址出土遺物一覧表〈石器〉……219
第92表　H－64号住居址出土遺物一覧表〈土器〉……220
第93表　H－65号住居址出土遺物一覧表〈土器〉……222
第94表　H－66号住居址出土遺物一覧表〈土器〉……225
第95表　H－67号住居址出土遺物一覧表〈石器〉……227
第96表　H－67号住居址出土遺物一覧表〈土器〉……227

第97表　H－68号住居址出土遺物一覧表〈土器〉……232
第98表　H－68号住居址出土遺物一覧表〈石器〉……232
第99表　H－69号住居址出土遺物一覧表〈土器〉……234
第100表　H－69号住居址出土遺物一覧表〈石器〉……235
第101表　H－70号住居址出土遺物一覧表〈土器〉……237
第102表　F－7号掘立柱建物址出土遺物一覧表〈石器〉247
第103表　F－28号掘立柱建物址出土遺物一覧表〈土器〉267
第104表　F－35掘立柱建物址出土遺物一覧表〈土器〉…275
第105表　F－40号掘立柱建物址出土遺物一覧表〈土器〉278
第106表　F－58号掘立柱建物址出土遺物一覧表〈土器〉297
第107表　F－65号掘立柱建物址出土遺物一覧表〈鉄器〉303
第108表　掘立柱建物址ピット一覧表……313
第109表　I－1号井戸址出土遺物一覧表〈土器〉……320
第110表　M－1号掘立柱建物址出土遺物一覧表〈土器〉325
第111表　旧河川出土遺物一覧表〈土器〉……327
第112表　表面採集遺物一覧表〈土器〉……328
第113表　表面採集遺物一覧表〈石器・鉄器〉……329
第114表　十二遺跡竪穴住居址の所属期……354
第115表　各期における鉄器の保有……358
第116表　遺跡毎における鉄製農具出土数……359
第117表　時期別住居形態一覧表……362
第118表　掘立柱建物址の帰属期の可能性……366
付　編
第1表　十二遺跡土壌の植物珪酸体分析……379
第1表　十二遺跡花粉分析試料一覧表……385
第2表　十二遺跡試料花粉分析結果……387
第1表　十二遺跡出土炭化材の樹種……393
第1表　十二遺跡にみられる地元産須恵器の年代別変動407
第2表　胎土分析結果一覧表……414
第1表　須恵器の産地……419

図　版　目　次

図版　一　十二遺跡付近の航空写真
図版　二　第Ⅰ区航空写真
図版　三　第Ⅰ・Ⅱ区航空写真
図版　四　第Ⅰ・Ⅱ区航空写真
図版　五　H－1号住居址
図版　六　H－1号住居址・H－2号住居址
図版　七　H－2号住居址
図版　八　H－3号住居址・H－4号住居址
図版　九　H－5号住居址
図版　十　H－6号住居址
図版　十一　H－7号住居址
図版　十二　H－7号住居址・H－8号住居址
図版　十三　H－9号住居址
図版　十四　H－9号住居址・H－10号住居址
図版　十五　H－10号住居址
図版　十六　H－10号住居址・H－11号住居址
図版　十七　H－11号住居址・H－12号住居址
図版　十八　H－12号住居址・H－13号住居址
図版　十九　H－13号住居址
図版　二十　H－14号住居址
図版　二十一　H－14号住居址・H－15号住居址
図版　二十二　H－15号住居址・H－16号住居址
図版　二十三　H－16号住居址・H－17号住居址
図版　二十四　H－17号住居址
図版　二十五　H－18号住居址
図版　二十六　H－19号住居址
図版　二十七　H－19号住居址
図版　二十八　H－20号住居址
図版　二十九　H－20号住居址・H－21号住居址
図版　三十　H－21号住居址・H－22号住居址
図版　三十一　H－22号住居址
図版　三十二　H－23号住居址
図版　三十三　H－24号住居址
図版　三十四　H－25号住居址
図版　三十五　H－25号住居址
図版　三十六　H－25号住居址・H－26号住居址
図版　三十七　H－26号住居址・H－27号住居址
図版　三十八　H－27号住居址
図版　三十九　H－28号住居址
図版　四十　H－29号住居址
図版　四十一　H－29号住居址・H－30号住居址
図版　四十二　H－30号住居址・H－31号住居址
図版　四十三　H－31号住居址・H－32号住居址
図版　四十四　H－32号住居址・H－33号住居址

図版　四十五　H－34号住居址
図版　四十六　H－35号住居址
図版　四十七　H－35号住居址・H－36号住居址
図版　四十八　H－36号住居址・H－37号住居址
図版　四十九　H－37号住居址
図版　五十　H－38号住居址
図版　五十一　H－39号住居址
図版　五十二　H－40号住居址
図版　五十三　H－41号住居址・H－42号住居址
図版　五十四　H－42号住居址・H－43号住居址
図版　五十五　H－43号住居址
図版　五十六　H－43号住居址・H－44号住居址
図版　五十七　H－44号住居址・H－45号住居址
図版　五十八　H－45号住居址・H－46号住居址
図版　五十九　H－46号住居址・H－47号住居址
図版　六十　H－47号住居址・H－48号住居址
図版　六十一　H－49号住居址
図版　六十二　H－49号住居址・H－50号住居址
図版　六十二　H－50号住居址・H－51号住居址
図版　六十四　H－51号住居址・H－52号住居址
図版　六十五　H－52号住居址・H－53号住居址
図版　六十六　H－53号住居址・H－54号住居址
図版　六十七　H－54号住居址・H－55号住居址
図版　六十八　H－55号住居址
図版　六十九　H－56号住居址
図版　七十　H－57号住居址
図版　七十一　H－57号住居址・H－58号住居址
図版　七十二　H－58号住居址
図版　七十三　H－58号住居址
図版　七十四　H－59号住居址
図版　七十五　H－60号住居址
図版　七十六　H－61号住居址
図版　七十七　H－62号住居址
図版　七十八　H－63号住居址
図版　七十九　H－64号住居址
図版　八十　H－64号住居址・H－65号住居址
図版　八十一　H－65号住居址・H－66号住居址
図版　八十二　H－66号住居址・H－67号住居址
図版　八十三　H－67号住居址
図版　八十四　H－68号住居址
図版　八十五　H－68号住居址
図版　八十六　H－68号住居址・H－69号住居址
図版　八十七　H－69号住居址
図版　八十八　H－70号住居址
図版　八十九　H－71号住居址
図版　九十　F－1号掘立柱建物址
図版　九十一　F－2号掘立柱建物址・F－3号掘立柱建物址
図版　九十二　F－4号掘立柱建物址
図版　九十三　F－5号掘立柱建物址
図版　九十四　F－6号掘立柱建物址・F－7号掘立柱建物址
図版　九十五　F－8号掘立柱建物址
図版　九十六　F－9号掘立柱建物址・F－10号掘立柱建物址
図版　九十七　F－10号掘立柱建物址
図版　九十八　F－11号掘立柱建物址
図版　九十九　F－12号掘立柱建物址
図版　百　F－13号掘立柱建物址
図版　百一　F－14号掘立柱建物址
図版　百二　F－15号掘立柱建物址
図版　百三　F－16号掘立柱建物址・F－17号掘立柱建物址
図版　百四　F－18号掘立柱建物址
図版　百五　F－19号掘立柱建物址
図版　百六　F－20号掘立柱建物址
図版　百七　F－21号掘立柱建物址
図版　百八　F－22号掘立柱建物址
図版　百九　F－23号掘立柱建物址
図版　百十　F－24号掘立柱建物址
図版　百十一　F－25号掘立柱建物址
図版　百十二　F－26号掘立柱建物址・F－27号掘立柱建物址
図版　百十三　F－27号掘立柱建物址・F－28号掘立柱建物址
図版　百十四　F－29号掘立柱建物址・F－30号掘立柱建物址
図版　百十五　F－30号掘立柱建物址・F－31号掘立柱建物址
図版　百十六　F－31号掘立柱建物址・F－32号掘立柱建物址
図版　百十七　F－33号掘立柱建物址

図版　百十八　Ｆ－34号掘立柱建物址
図版　百十九　Ｆ－35号掘立柱建物址
図版　百二十　Ｆ－36号掘立柱建物址
図版　百二十一　Ｆ－37号掘立柱建物址・Ｆ－38号掘立柱建物址
図版　百二十二　Ｆ－38号掘立柱建物址・Ｆ－39号掘立柱建物址
図版　百二十三　Ｆ－39号掘立柱建物址・Ｆ－40号掘立柱建物址
図版　百二十四　Ｆ－41号掘立柱建物址・Ｆ－42号掘立柱建物址
図版　百二十五　Ｆ－42号掘立柱建物址・Ｆ－43号掘立柱建物址
図版　百二十六　Ｆ－43号掘立柱建物址・Ｆ－44号掘立柱建物址
図版　百二十七　Ｆ－44号掘立柱建物址・Ｆ－45号掘立柱建物址
図版　百二十八　Ｆ－46号掘立柱建物址・Ｆ－47号掘立柱建物址
図版　百二十九　Ｆ－47号掘立柱建物址・Ｆ－48号掘立柱建物址
図版　百三十　Ｆ－49号掘立柱建物址
図版　百三十一　Ｆ－50号掘立柱建物址・Ｆ－51号掘立柱建物址
図版　百三十二　Ｆ－51号掘立柱建物址・Ｆ－52号掘立柱建物址
図版　百三十三　Ｆ－52号掘立柱建物址・Ｆ－53号掘立柱建物址
図版　百三十四　Ｆ－54号掘立柱建物址
図版　百三十五　Ｆ－55号掘立柱建物址
図版　百三十六　Ｆ－56号掘立柱建物址・Ｆ－57号掘立柱建物址
図版　百三十七　Ｆ－58号掘立柱建物址・Ｆ－59号掘立柱建物址
図版　百三十八　Ｆ－60号掘立柱建物址
図版　百三十九　Ｆ－61号掘立柱建物址
図版　百四十　Ｆ－62号掘立柱建物址
図版　百四十一　Ｆ－63号掘立柱建物址
図版　百四十二　Ｆ－64号掘立柱建物址
図版　百四十三　Ｆ－65号掘立柱建物址
図版　百四十四　Ｆ－66号掘立柱建物址・Ｆ－67号掘立柱建物址
図版　百四十五　Ｆ－67号掘立柱建物址・Ｆ－68号掘立柱建物址
図版　百四十六　Ｆ－68号掘立柱建物址・Ｆ－69号掘立柱建物址
図版　百四十七　Ｆ－69号掘立柱建物址・Ｆ－70号掘立柱建物址
図版　百四十八　Ｆ－71号掘立柱建物址
図版　百四十九　Ｆ－72号掘立柱建物址・Ｆ－73号掘立柱建物址
図版　百五十　Ｆ－73号掘立柱建物址・Ｆ－74号掘立柱建物址
図版　百五十一　Ｆ－75号掘立柱建物址
図版　百五十二　Ｉ－１号井戸址
図版　百五十三　Ｄ－１号土壙・Ｄ－２号土壙
図版　百五十四　Ｄ－３号土壙・Ｄ－４号土壙
図版　百五十五　Ｄ－５号土壙・Ｄ－６号土壙
図版　百五十六　Ｍ－１号溝状遺構
図版　百五十七　Ｈ－１・２号住居址出土遺物
図版　百五十八　Ｈ－５・７・９・10号住居址出土遺物
図版　百五十九　Ｈ－10・12号住居址出土遺物
図版　百六十　Ｈ－12・13号住居址出土遺物
図版　百六十一　Ｈ－13・14号住居址出土遺物
図版　百六十二　Ｈ－14・15号住居址出土遺物
図版　百六十三　Ｈ－15・16号住居址出土遺物
図版　百六十四　Ｈ－16・17号住居址出土遺物
図版　百六十五　Ｈ－17・18号住居址出土遺物
図版　百六十六　Ｈ－18・19号住居址出土遺物
図版　百六十七　Ｈ－19・20号住居址出土遺物
図版　百六十八　Ｈ－20・21・22号住居址出土遺物
図版　百六十九　Ｈ－23・24・25号住居址出土遺物
図版　百七十　Ｈ－25号住居址出土遺物
図版　百七十一　Ｈ－25号住居址出土遺物
図版　百七十二　Ｈ－25号住居址出土遺物
図版　百七十三　Ｈ－25・26号住居址出土遺物
図版　百七十四　Ｈ－27・28号住居址出土遺物
図版　百七十五　Ｈ－28号住居址出土遺物
図版　百七十六　Ｈ－28・29号住居址出土遺物
図版　百七十七　Ｈ－30・32・33号住居址出土遺物
図版　百七十八　Ｈ－32・34号住居址出土遺物
図版　百七十九　Ｈ－35号住居址出土遺物

図版　百八十　Ｈ－35・36号住居址出土遺物
図版　百八十一　Ｈ－36・37号住居址出土遺物
図版　百八十二　Ｈ－37・38・39号住居址出土遺物
図版　百八十三　Ｈ－39・40・42号住居址出土遺物
図版　百八十四　Ｈ－42・43号住居址出土遺物
図版　百八十五　Ｈ－43・44・45号住居址出土遺物
図版　百八十六　Ｈ－46号住居址出土遺物
図版　百八十七　Ｈ－47・49号住居址出土遺物
図版　百八十八　Ｈ－49号住居址出土遺物
図版　百八十九　Ｈ－49・50・51・52号住居址出土遺物
図版　百九十　Ｈ－52号住居址出土遺物
図版　百九十一　Ｈ－52・53・55号住居址出土遺物
図版　百九十二　Ｈ－55号住居址出土遺物
図版　百九十三　Ｈ－55・56号住居址出土遺物
図版　百九十四　Ｈ－56・57号住居址出土遺物
図版　百九十五　Ｈ－58号住居址出土遺物
図版　百九十六　Ｈ－58・59号住居址出土遺物
図版　百九十七　Ｈ－59・60・61号住居址出土遺物
図版　百九十八　Ｈ－63・64・65号住居址出土遺物
図版　百九十九　Ｈ－65・66・67号住居址出土遺物
図版　二百　Ｈ－67・68号住居址出土遺物
図版　二百一　Ｈ－69号住居址・Ｆ－35・40・58号掘立柱建物址・Ｉ－１号井戸址出土遺物
図版　二百二　Ｍ－１号溝状遺構・表採遺物・整理作業
図版　二百三　古銭・石器
図版　二百四　石器
図版　二百五　石器・鉄器
図版　二百六　鉄器
図版　三百七　土器細部写真
図版　二百八　土器細部写真
図版　三百九　土器細部写真
図版　二百十　土器細部写真
図版　二百十一　土器細部写真
図版　二百十二　土器細部写真
図版　二百十三　土器細部写真

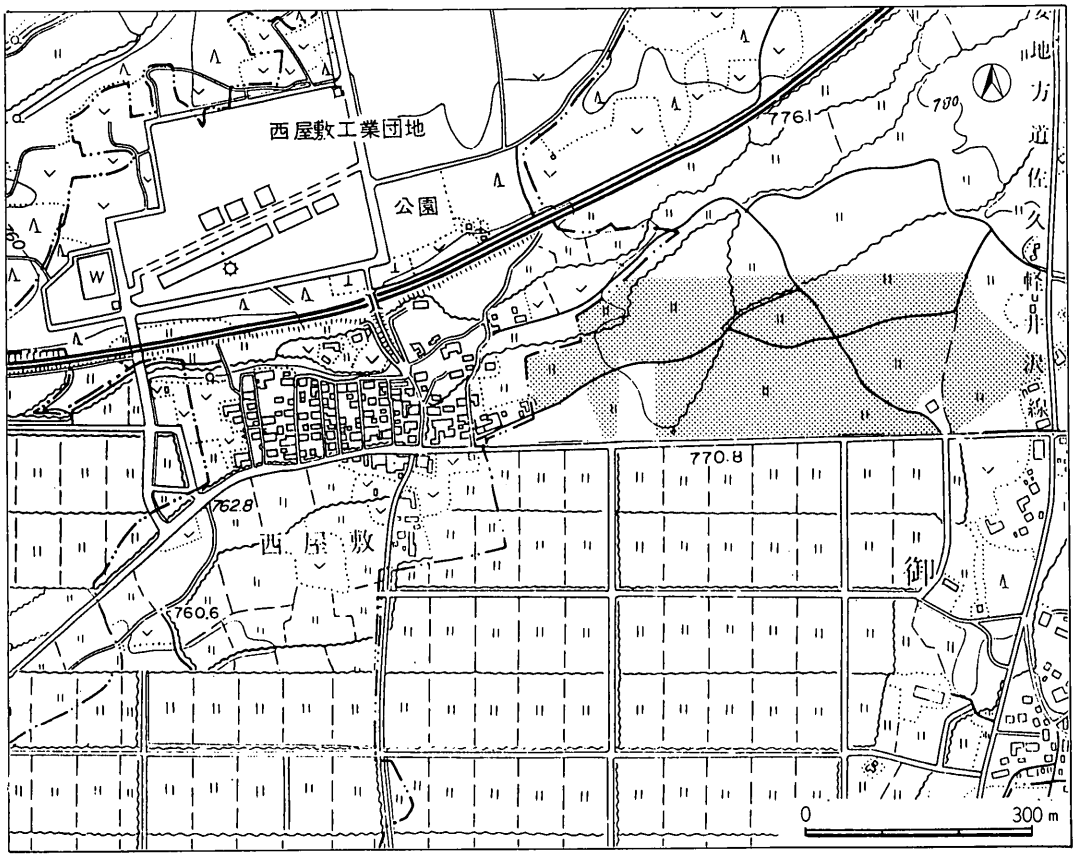
Ⅰ　発掘調査の概要

1　発掘調査の概要

（1）　調査に至る動機

長野県北佐久郡御代田町大字御代田・佐久市大字小田井・小諸市大字御影新田にかかる一帯小田井・御影地区において、水田経営の合理化を目的とした、長野県営圃場整備事業が昭和54年より実施された。

一方、この地区においては、鋳師屋遺跡群として埋蔵文化財の包蔵が確認・周知されており、その保護問題が表面化してきた。このため、その原因者である東信土地改良事務所と保護部局である長野県教育委員会、御代田町・佐久市・小諸市の各教育委員会の三者において話し合いがもたれ、該当する遺跡について緊急発掘調査を実施し記録保存を行なうことで折合いがついた。



第1図　十二遺跡発掘調査対象区（網点）（1：10,000）

これを受けて、昭和57年の小諸市教育委員会による曽根城遺跡の発掘調査を皮切りに、昭和59年には野火付遺跡（御代田町）・鋳師屋遺跡の一部（佐久市）、昭和60年には前田遺跡の一部（御代田町・佐久市）の発掘調査が実施された。翌昭和61年に発掘調査されたのが、本十二遺跡（御代田町）と鋳師屋遺跡・前田遺跡の一部（佐久市）である。

（2）　発掘調査の概要

1　遺跡名　鋳師屋遺跡群（いもじやいせきぐん）　十二遺跡（じゅうにいせき）

2　所在地　長野県北佐久郡御代田町大字御代田字下十二

3　発掘期間　昭和61年４月14日～昭和61年８月26日（昭和61年度）

4　整理期間　昭和61年８月27日～昭和62年３月31日（昭和61年度）
昭和62年４月３日～昭和63年３月31日（昭和62年度）

5　発掘理由　昭和62年度小田井・御影地区長野県営圃場整備事業に伴い、十二遺跡の破壊が予想されるため、緊急発掘調査を実施し記録保存を行なう。

6　発掘方針　広大な調査対象区について、居住域・生産域・墓域等全体の検出に努める。

7　費用負担　調査費用総額のうち、72.5％は原因者である農政部局（北佐久地方事務所）が負担し、残りの27.5％については文化財補助事業として文化財保護部局が負担した（国庫補助金50％、県補助金15％、町費35％）。

8　事務局　◎　教育次長　市川誠、桜井定巳　　◎　社会・同和教育係長　萩原茂
◎　社会・同和教育係　　内堀篤志、堤　　隆

9　調査団

顧　　問　古越顕助（御代田町長）　原田正夫（前教育長）　小林正人（教育長）

参　　与　桜井為吉、田村泉、内山俊雄、柳沢恒三郎、小林五郎、山本宣夫、大井源寿
内堀達人、（故）堀篭源、（御代田町文化財審議委員）

団　　長　由井茂也　（佐久考古学会会長）

副団長　尾台卓一　（前御代田町文化財審議委員長）

担当者　堤　　隆　（御代田町教育委員会）

調査員　白倉盛男、井上行雄、大井今朝太、羽毛田伸博（佐久考古学会）
鳥居　亮、菅谷みのぶ、下角圭司

補助員　伴野有希子

協力者　小林美智明、太田和子、茂木勝等、高山玲子、今井みさ子
熊田すみ子、角張憲子、小山内玲子、田村祐子、古越敏彦、高地正雄、

桝形カズヨ、山口ひろ子、茂木千代子、花里きしの、鈴木五郎、桜井和人、
萩原フサ、並木ことみ、遠藤しずか、田中夏江、橋詰けさよ、井出百合子、
重田文枝、飯田すえの、尾沼けさと、甘利隆志、小沢さよ子、竹内安子、
並木吉三郎、山口晴子、関口康、碓井勝子、宮沢節子、尾台久美子（一般）
柳沢晃、奥田一寿、渡辺一也、小松千浩、若林京子、広岡恵美子（高校生）

（3）　発掘区の設定と遺構の検出

本調査の対象区については、第１図に示したとおりで、図の網点部の約11万m²が該当することになる。

この広大な調査の対象区を、鋳師屋遺跡群全体のなかで把握できるように、国家座標第Ⅷ系を用い、25m四方のグリッドを設定した。したがってグリッドのＸ軸は真北を指すようになっている。また、グリッド名は、野火付遺跡・前田遺跡に継続する名称となる（第２図）。

調査は、広大な調査対象区について居住域・生産域・墓域等全体の検出に努めるという発掘方針に則り、まずは自然地形と遺跡の範囲をみきわめるため、重機により南北の試掘トレンチを入れてみた。その結果おおよその自然地形と遺跡の範囲をとらえることができたので、つぎに遺跡全部分の表土を重機によって除去した。

調査地区については、便宜的に区分けをして把握した。グリッドのへ列以前で、32列以降を第Ⅰ区、29列以降を第Ⅱ区、22列以降を第Ⅲ区、15列以降を第Ⅳ区、15列未満を第Ⅴ区とした。なお、このなかで、第Ⅱ区ネ・ノ・ハ－31列近辺は、圃場整備対象区外であるため調査を実施しなかった。

遺構は、第Ⅰ・Ⅱ区において検出された。その概要は以下のとおりである。

第Ⅰ区	面積	9000m²	竪穴住居址	42軒	掘立柱建物址	57棟	土壙	3基	溝	1基
第Ⅱ区	面積	8800m²	竪穴住居址	29軒	掘立柱建物址	18棟	土壙	3基		
計	面積	17800m²	竪穴住居址	71軒	掘立柱建物址	75棟	土壙	6基	溝	1基

なお、遺構の名称については、第Ⅰ・Ⅱ区あわせて遺構ごとに通し番号とした。

第Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ区は、前田遺跡より続く低地で、竪穴住居址・掘立柱建物址の他、水田等の生産遺構も検出されなかった。ただしこの地区において、水田存在の可能性を考えるためプラントオパール分析・花粉分析等の自然科学分析をおこなった。その成果は付編として掲載してある。

本遺跡の第Ⅰ区は、さらに西へ延び、西屋敷の集落にかかるものと考えられる。また、第Ⅰ区第Ⅱ区の南側は、昭和60年に調査を実施した前田遺跡第Ⅳ区へと続いている。第Ⅱ区北側は、浅い谷をはさんで昭和62年に調査を実施した根岸遺跡へと続いている。

（4）　発掘調査の経緯

昭和61年

4月10日

発掘調査開始。バックホーの搬入。バックホーにより、遺跡の範囲確認のための試掘トレンチをあける。

第Ⅰ区において住居址2軒を確認。

4月15日

バックホーにより第Ⅰ区を拡張開始。ヌ・ネ・ノ－32・33グリッドにおいて、住居址2軒、掘立柱建物址5棟を確認。

4月18日

作業員を徐々に投与。遺構調査開始。H－1号住居址・F－3号掘立柱建物址の調査。

4月30日

本日までに住居址5軒、掘立柱建物址6棟の調査終了。

5月3日

休日ではあるが、調査期限にせまられているため、第Ⅰ区プラン確認作業を行なう。

5月10日

調査開始より1カ月経過。これまでの確認遺構は住居址28軒、掘立柱建物址30棟。

本日までに住居址9軒、掘立柱建物址10棟の調査終了。

5月24日

ブルドーザによる第Ⅰ区押し土。H－27・H－37・H－39号住居址等の調査。

6月3日

第Ⅰ区プラン確認作業を行なう。

調査区西端の湧水がかなり激しく、作業が困難をきたす。

6月10日

第Ⅱ区プラン確認作業を開始。

Ⅰ－1号井戸址の調査。

6月14日

第Ⅰ区航空写真撮影のための精査。

第Ⅰ区航空写真撮影。

6月28日

第Ⅱ区プラン確認作業の継続。

第Ⅰ区、住居址・掘立柱建物址の調査継続。

7月3日

雨天のため、焼失家屋であるH－58号住居

第2図　バックホー搬入

第3図　バックホーによる試掘開始

第4図　発掘調査区（第Ⅰ区）

第5図　激しい湧水の中での調査

址の調査のみをおこなう。

作業員による作業は中止。

7月14日

第II区プラン確認作業の継続。

第Ⅰ・II区、住居址・掘立柱建物址の調査継続。

7月23日

文化庁岡本東三調査官（現千葉大学）・県教育委員会文化課小林孚指導主事視察。

7月27日

梅雨明け。

第Ⅰ・II区、住居址・掘立柱建物址の調査継続。

7月30日

長野県埋蔵文化財センター樋口昇一調査部長・臼田武正調査研究員視察。

8月1日

明治大学戸沢充則教授視察。

第Ⅰ・II区、住居址・掘立柱建物址の調査継続。

8月2日

小田原市教育委員会諏訪間順氏視察。

8月3日

台風上陸。遺跡の低地部が水浸しとなる。

8月7日

第Ⅰ区航空写真撮影のための精査。

前奈良国立文化財研究所長坪井清足氏視察。

8月10日

十二遺跡現地説明会。

8月11日

第Ⅰ・II区、住居址・掘立柱建物址・土壙の調査継続。

8月23日

第Ⅰ・II区航空写真撮影。

8月26日

器材撤収。

発掘調査終了。

8月27～30日

発掘調査の残務整理。

9月～11月

前田遺跡遺物整理のため、十二遺跡の遺物整理等すべての作業中止。

12月

遺物整理再開。

第6図　発掘調査区（第Ⅰ区）

第7図　井戸址の調査

第8図　竪穴住居址の精査

第9図　遺物出土状態の実測

土器の註記・復原をおこなう。

昭和62年

1月

土器の註記・復原・実測をおこなう。

2月

土器の註記・復原・実測をおこなう。

3月

土器の註記・復原・実測をおこなう。

4月

根岸遺跡の調査開始日（4月15日）前まで遺物整理をおこなう。

4月15日～8月1日

根岸遺跡・広畑遺跡発掘調査のため遺物整理中断。

8月2日

遺物整理再開。土器復原、土器拓本、土器実測をおこなう。

9月12日

遺構トレース。土器復原、土器拓本、土器実測をおこなう。

9月25日

住居址・カマド、トレース終了。

10月13日

住居址原稿執筆開始。遺構トレース。土器復原、土器拓本等継続。

10月26日

遺物トレース開始。

11月16日

遺物一覧表校正。遺構・遺物トレース。土器復原、土器拓本等継続。

12月23日

住居址原稿執筆完了。遺構・遺物トレース。土器復原、土器拓本等継続。

1月8日

遺構・遺物トレース完了。

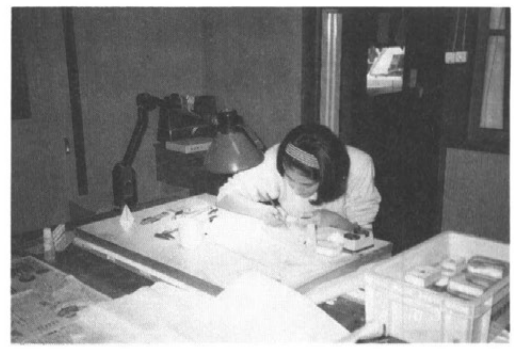
2月29日

遺物写真撮影完了。原稿執筆完了。

3月31日

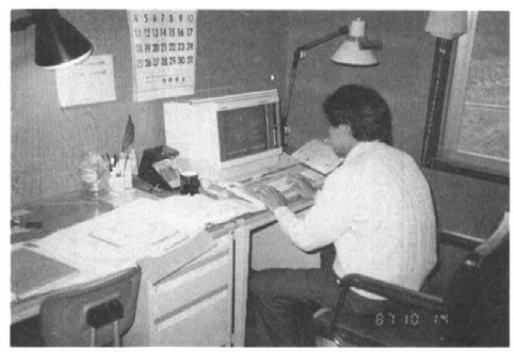
発掘調査報告書刊行。

第10図　出土遺物の復原

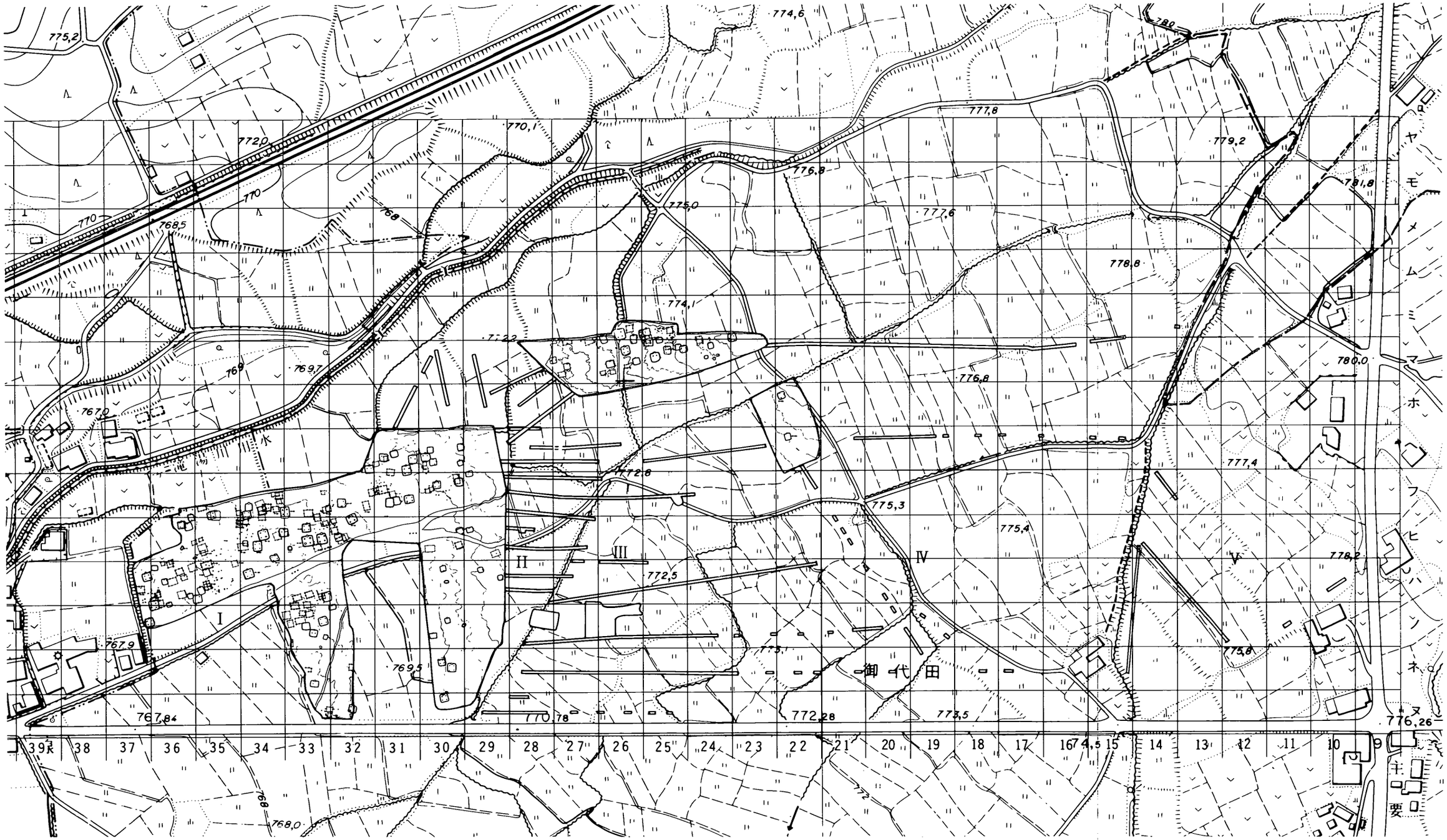


第11図　出土遺物の実測

第12図　出土遺物写真撮影



第13図　ワードプロセッサによる原稿執筆



第14図　発掘区（試掘トレンチと拡張区）（1：2,500）

II　遺跡の環境

1　御代田町の自然環境と地質

（1）　自然環境

御代田町は活火山浅間山（海抜2560m）の南麓に位置する。

浅間連峰は分水界で北麓の水は太平洋に流れる。東側は軽井沢町で群馬県境はやはり分水界となっている。南には八風山、森泉山、平尾富士の低い山稜があり、西側は浅間山の裾野で小諸市に接している。山麓のなだらかな斜面は南西方向に傾き佐久平へと続いているが、十二遺跡はこの山麓斜面から平坦な佐久平へと移る境界に位置し標高は768～771mである。

御代田町はそのほとんどが火山の噴出物で覆われている。町の南部を深い谷を刻んで南西方向に流れる湯川の南部は志賀凝灰岩で約300万年前の第三紀鮮新世の噴出によるものであり、北側は浅間山の最近の噴出物に覆われている。

年間降水量は軽井沢の約1300㎜から1000㎜を割る小諸・佐久へと漸減する中間にある。夏期には東寄りの風も多くなるが年間の卓越風は西寄りの風である。被害を生ずるような風は台風が西側を通過する時に、低平部を吹く東風と、山麓を吹き降りる北寄りの風である。日照時間は５月に極大、７月に極小を示す。霧は６・７・８・９月と夏に碓氷峠を越える滑昇霧が多いのが特徴である。

表土は黒土が多く、母材は火山灰でとくに後述する追分火砕流に覆われた地域は1281年の噴火による火砕流堆積物で、粗粒の黒土からなり肥沃度の低い土壌であった。農家の努力によって土壌改良がすすみ高原野菜の産地となっている。

植生は現在、人工林のアカマツとカラマツが多いが、かつてはブナやコナラ等の落葉広葉樹林であった。昭和34年、57年のそれぞれ７号、10号台風により夥しい風倒木の被害に見舞われた。特にカラマツは根張りが浅いからであるが、カラマツの一斉林は生態系が単純になり、自然環境を貧しいものにしている。治山・治水・水源涵養の機能の改善と生態系の多様性を求めて広葉樹林の良さが見直されてきている。町では農業と精密工業が主要な産業となっている。

（2）　地　　質

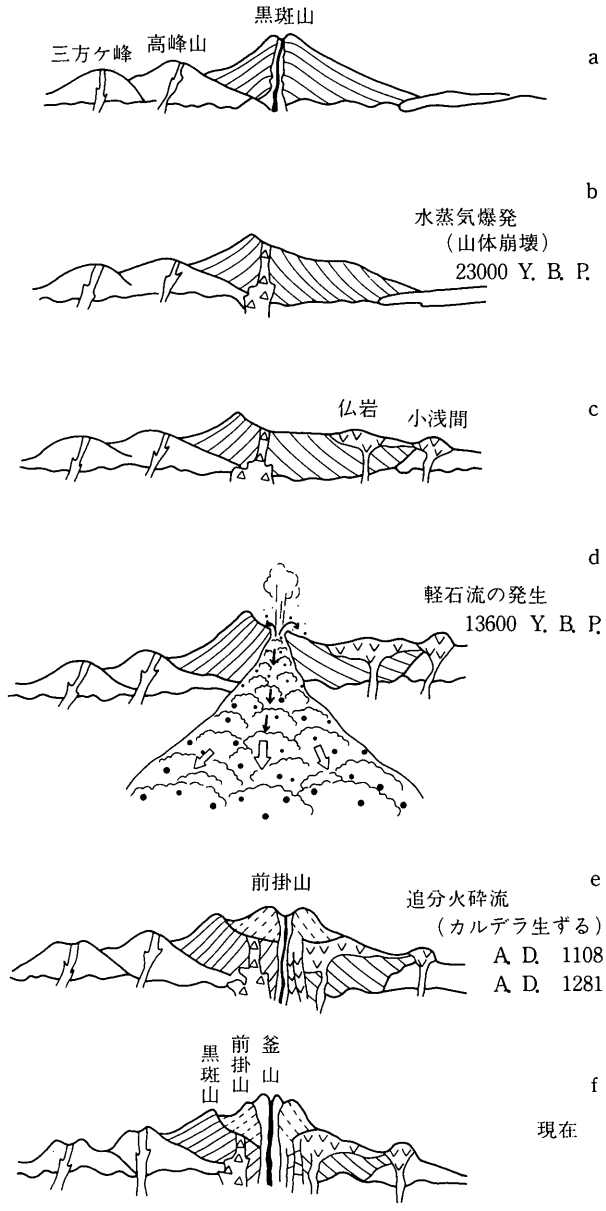
浅間山は本州中部を横断するフォッサ・マグナと呼ばれる大地溝帯の東の縁に位置している。また、浅間山はプレートの沈み込みに関係する火山フロントの屈曲点に位置する。すなわち、太平洋プレートがユーラシアプレートの下に沈み込んでできる那須火山帯と、フィリピンプレート

にかかわる富士火山帯との交点に位置するので、浅間山はユーラシアプレート、太平洋プレート、フィリピンプレートの三つのプレートが接触する特異な位置にあることになる。

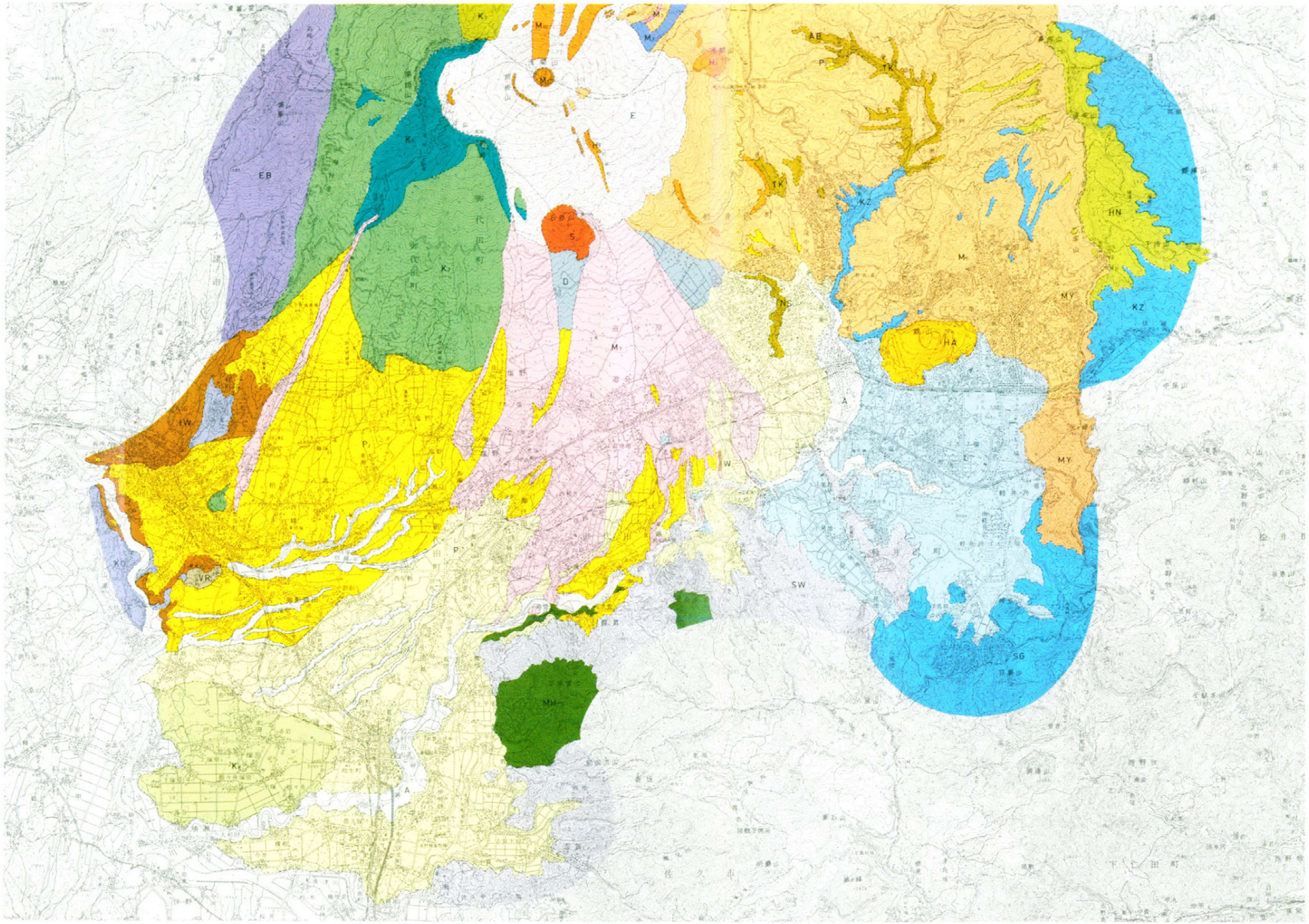
浅間火山群は西より東へ、黒斑山、前掛山、釜山、石尊山、小浅間山と続くが、最も古い山体は黒斑山である。黒斑山の西には更に古い高峰、籠ノ登、三方ケ峯等の烏帽子火山群が連なっている。第15図、第１表は浅間火山の成長史を示す。黒斑山は、かつて富士山型の成層火山で標高は約2900mに達していたものと思われる（第15図ａ）。石尊山はこの黒斑山の寄生火山として生じた溶岩円頂丘である。

黒斑山はおよそ23,000年前に水蒸気爆発により山体の東半分が崩壊した。（第15図ｂ）

この時の崩壊堆積物は黒斑山を構成する岩塊が雑多に入り混ったもので、数十メートルを超すブロックもあり爆発の規模が大きかったことを示している。佐久市岩村田の西方、中佐都地区の「流れ山」がそれで塚原泥流と呼ばれている。軽井沢に達したものは塩沢岩屑流と呼ばれ、やはり「流れ山」がみられる。この山体崩壊の年代は佐久市根々井の湯川の右岸から採取した木片の放射性炭素14法により求めたものである。塩沢岩屑流は湯川を堰止め南軽井沢地区に一時的な湖をつくった。御代田町では、この時の崩壊堆積物の厚さは20mを超えているものと考えられるが、その後の噴出物に覆われていて見ることはできないが、久保沢川では厚さ約30mの第１軽石流を刻む谷壁の下に塚原泥流が姿をみせている。水蒸気爆発のあと、西側に残されたのが現在の黒斑山であり、南西側に剣ケ峰が残った。山体崩壊の規模は1888年の磐梯山



第15図　浅間火山の変遷



凡　例

浅間火山の本体

- A　河川堆積物　シルト，砂，礫等
- 前掛山噴出物
  - E　前掛山と釜山の最近の噴出物　火山灰，火山礫，火山岩塊
  - M_{10}　鬼押出熔岩（1783）　熔岩流
  - M_5　降下砕屑物の堆積物（1783のものを含む）　火山灰，火山礫，火山岩塊；大部分軽石質
  - M_3　追分火砕流の堆積物　熔結していない本質火山灰，火山礫，火山岩塊の堆積物
  - M_2　古澗火砕流の堆積物　熔結した本質火山灰，火山礫，火山岩塊の堆積物
  - M_1　前掛山の熔岩類　熔岩流と少量の火山砕屑物
  - D　火山砕屑物（細分していないもの）　固結していない火山灰，火山礫，火山岩塊
- 軽石流および火砕流堆積物
  - L　湖底堆積物　軽石質粘土，砂，礫岩等
  - P_2　第2軽石流の堆積物　軽度に固結した軽石質本質火山灰，火山礫，火山岩塊の堆積物
  - P_1　第1軽石流の堆積物　軽度に固結した軽石の本質火山灰，火山礫，火山岩塊の堆積物
  - S　石尊山熔岩円頂丘　塊状の熔岩円頂丘
- 仏岩熔岩
  - H_2　小浅間熔岩円頂丘　塊状の熔岩円頂丘
  - H_1　仏岩熔岩流　熔岩流；黒曜岩を含む
- 黒斑山噴出物
  - K_4　塚原泥流の堆積物　火山灰，火山礫，火山岩塊，巨大な岩塊の堆積物
  - K_3　黒斑山上部層（仙人グループ）　熔岩流と少量の降下軽石堆積物
  - K_2　黒斑山中部層（三ツ尾根グループ）　熔岩流，凝灰角礫岩，固結しない火山砕屑物
  - K_1　黒斑山下部層（牙グループ）　本質凝灰角礫岩，熔岩流，凝灰岩

浅間火山の基盤

- 第4紀基盤岩類
  - VR　細分されていない火山岩類　熔岩流，凝灰角礫岩，凝灰岩等
  - EB　鳥帽子火山の噴出物　熔岩流，凝灰角礫岩，固結していない火山灰，火山礫，火山岩塊
  - IW　岩尾層　礫，砂，シルト等
  - NS　西千ケ滝層群　熔岩流および凝灰角礫岩
  - TK　高度山層群　凝灰角礫岩，熔岩流，火山礫凝灰岩等
  - AB　浅間牧場層群（白糸火砕流の堆積物を含む）　本質凝灰角礫岩，軽度に熔結した又は熔結していない本質火山灰，火山礫，火山岩塊の堆積物
  - HA　離山熔岩円頂丘　塊状の熔岩円頂丘と厚く短かい熔岩流
  - HN　鼻曲火山の噴出物　熔岩流および凝灰角礫岩
- 第3紀基盤岩類（中新世～鮮新世）
  - VR　細分されていない火山岩類　熔岩流，凝灰角礫岩，凝灰岩等
  - MY　妙義火山の噴出物　固結した本質凝灰角礫岩，熔岩流等
  - KO　小諸層群　凝灰角礫岩，熔結凝灰岩，凝灰岩，シルト岩等
  - SW　志賀熔結凝灰岩　熔結凝灰岩，火山礫凝灰岩，凝灰角礫岩等
  - MH　森泉山と平尾富士の安山岩類　熔岩流，凝灰角礫岩等
  - SG　志賀層群　凝灰角礫岩，熔岩流，凝灰岩，シルト岩等
  - KZ　霧積層群　凝灰角礫岩，熔岩流，凝灰岩，シルト岩等

第16図　浅間火山の地質図（1：100,000）（荒牧　1962）に準拠

のそれを遙かに凌ぎ、1980年のセント・ヘレンズに匹敵する第一級のものであった。

黒斑山の大崩壊のあと、離山の噴火がおこり南軽井沢一帯に雲場火砕流が拡がった。いまからおよそ二万年前のことである。そのあと、あまり間隔をおかずに粘性の高いマグマの噴出があり厚い溶岩流を流し緩傾斜の盾状火山ができた。これが仏岩溶岩流である。

仏岩溶岩流は前掛山の噴出物に覆われているが、断層運動で生じた仏岩の崖や大窪沢の崖でみることができる。ここにはガラス質の黒曜岩がみられる。時を同じくして軽石と火山灰の噴出のあと溶岩円頂丘の小浅間山が生じた。（第15図ｃ）

仏岩溶岩流と小浅間山の生成が終ってから数千年の休止期を経て大噴火がはじまった。

第１表　浅間火山の編年

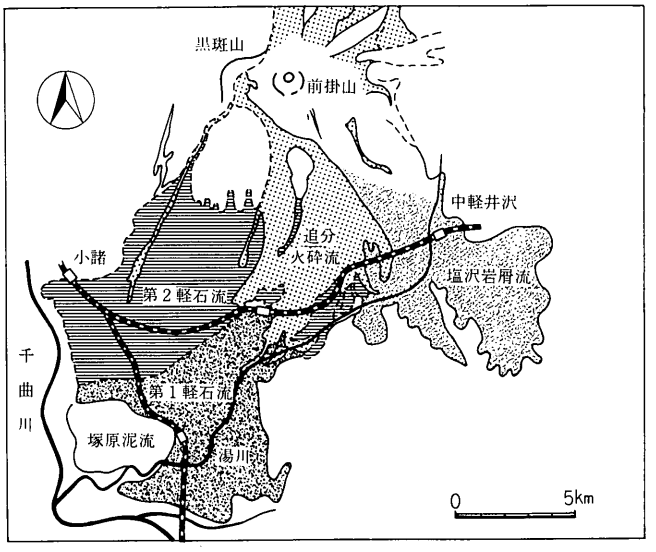
前掛山	鬼押出溶岩流 鎌原吾妻火砕流 Ａ－降下軽石	1783※A.D.（天明３年）
	舞台溶岩流 追分火砕流 Ｂ－降下スコリア・軽石	1281A.D.（弘安４年） 1108A.D.（天仁元年）
	Ｃ－降下軽石	
	Ｄ－降下軽石	
	古滝火砕流	約4500※（Y.B.P.）
	Ｈ－降下軽石	
軽石流	第２軽石流（Ｐ２） 妻恋降下軽石 第１軽石流（Ｐ１）	約11000（Y.B.P.） 約13600（Y.B.P.）
仏岩溶岩流　－　小浅間円頂丘　－　白糸降下軽石		
塚原泥流（水蒸気爆発） 黒斑山		約23000（Y.B.P.）

爆発のエネルギーは大きく、多量の軽石が成層圏まで吹き上げられた。この噴出物は上空の偏西風によって東方に流され北関東の広い範囲に板鼻黄色軽石層（Y.P）と呼ばれる軽石の堆積層をつくった。更に大量の軽石が噴出され、火山灰とともに高速で斜面を流下する火砕流となった。数次にわたる噴出により厚い堆積層ができたが、特に多量の噴出をみたものに第１軽石流、第２軽石流の名前がつけられている。その噴出年代は、それぞれ、約13600年前と約11000年前であった。（第15図ｄ）　第１軽石流は第２軽石流よりも規模が大きく、南軽井沢一帯では湯川が堰とめられて浅い湖水となったし、佐久平でも千曲川が堰とめられて大きな湖が出現した。軽石流は地表の凹凸を埋め、なだらかな斜面をつくっている。十二遺跡はこの第１軽石流の上にのっている。第１軽石流は湯川の谷を埋め対岸にも厚い堆積層を残しているが、湯川の右岸では軽井沢町から御代田町にかけて切り立った崖をなしている。南の滑津川の右岸にも、また、小諸市小原の千曲川右岸にもみごとな崖をみることができる。軽石流堆積物の中には炭化した木片があり、周縁部では炭化しない木片も認められる。10～20mの高さの垂直に近い崖をもった田切地形は堅くしまっていない軽石流が流水や霜等による侵食を受けたものである。

軽石流の噴出のあと、数千年におよぶ休止期を経て前掛山の活動がはじまった。東麓一帯に分

布する降下軽石、火山灰堆積層は約10層が識別されるという。そのうち最上部のものは1783年（天明3年）の活動によるもので、この降下火砕堆積物は「A」層と略称されている。

北麓には吾妻火砕流、鎌原火砕流、鬼押出溶岩流などが流下したが、南麓では火山弾、軽石、火山灰等の降下があっただけであった。活動のようすを伝える詳細な記録が残されている。



第17図　追分火砕流・軽石流の分布概念図

これより前の本格的な活動は軽石と褐色スコリアの「B」層を堆積させた。この噴火は前掛山の活動のなかで最大規模のものの一つであった。噴出された多量のマグマは5～600度以上の高温の黒色スコリア質の岩塊や火山灰となって秒速50～60mの速さで山腹を流れ下った。これが追分火砕流である。前掛山の南斜面を流下した追分火砕流は石尊山に衝究し、二分したあと下流で再び合流し、東西幅7kmもの広い範囲に展開した。信越線をすぎるあたりからは地形にそって谷を埋めながら流下し湯川に達し一時堰とめた。国道18号を小諸から登っていくと馬瀬口をすぎるあたりで田切地形がなくなっている。これは軽石流に刻まれた谷地形を追分火砕流が埋めたためである。平均の厚さは8mとされているが谷筋に近いところでは30mもの厚さが確認されている。追分原一帯は透水性が良いので濁川以外に目ぼしい河川は存在しないが、御代田町や小諸市の水田のために御影用水堰等が江戸時代初期から開削されている。濁川源泉の湧水は追分火砕流堆積物中から湧出している。この水は二酸化炭素を多量に含むが鉄分も多く酸化鉄の沈澱物が赤いので、源泉付近に血の池と呼ばれる池をつくり、濁川の名もそこからきている。追分火砕流は蛇堀川に沿っても流下し小諸市加増まで到達している。

この噴火については次の二つの記述がある。

1108年（天仁元年）

上野国司進解状に云わく「国中高山存り、麻間峰と称す。　治暦年間（1065～1069）より峰中煙出で来り其後微々たり、今年七月廿一日より猛火山嶺を焼き、其煙天に沖し、砂礫国に満つ。猥炉積庭国内田畠之に依り滅亡す。　一国災未だ斯の如きことあらざるなり稀に之あり、怪なる

により記し置く所なりと」（中右記）

「八月廿五日寅卯時許東方天色甚赤し」（中右記）　「九月三日、天晴早旦東方天甚赤し、此七八日許此の如し、誠に寄となし尋知すべきか」（中右記）

1281年（弘安四年）

六月九日暮方、山より西黄なる雲出で、人倫草木迄金色の光となる。　同夜、四ツ時より山焼出し信州追分小諸より南四里の間灰降り、今に其跡残れり、北は山の麓まで押出し、今に其處を石どまりと云う。　此辺亡村多し。（浅間焼大変記）

これ等古文書の記述や「B」スコリア堆積物が覆う遺跡の特徴などから、この噴火の発生年代は1281年説から1108年説へと揺れ動いてきた経過があった。放射性炭素による年代測定では、蛇堀川沿いの二つの測定値と軽井沢町三石での測定値の平均値は837年であり、1950－837＝1113A.Dの値を示した。

軽井沢町追分と三石からの測定値の平均は700年で、1950－700＝1250A.Dとなる。これ等の値は、それぞれ、1108年と1281年に近い値である。すなわち、追分火砕流は1108年（天仁元年）と1281年（弘安四年）の二回の噴火によって形成されたことがわかる。噴火の前には、小諸の清水駅から軽井沢長倉駅を経て碓氷峠へと続く東山道があったものと思われるが、最初の1108年の噴火で埋められたので、迂回を余儀なくされたに相違ない。鎌倉時代の「宴曲抄」に鎌倉から善光寺参詣の道順が記されているが、軽井沢町の離山から、おそらく湯川の左岸を通って佐久市の桜井を経て望月から東部町の海野宿への道のりは、追分火砕流を避けたためと思われる。

本稿は東京大学地震研究所荒牧重雄教授の「浅間火山の地質」地学団体研究会1968、と「軽井沢町誌」自然編、軽井沢町誌刊行委員会1987、を参考にさせていただいた。放射性炭素14法による年代測定は表１の※印以外のものは、20個を超える試料について京都産業大学理学部、山田治教授に測定をお願いしたものである。

（樋口和雄）

2　十二遺跡の歴史的環境

日本列島における人類の歴史は、今や確実に遡りつつある。そして日本の歴史の出発点であり、また最も長かった時代が旧石器時代である。

旧石器時代の遺跡は、長野県においても数多く発見されている。この佐久地方では、野辺山高原を中心とする八ケ岳東麓に分布している。しかし、佐久の平野部、および浅間山麓一帯においては、旧石器時代の遺跡は現在のところ未確認である。

この十二遺跡の存在する浅間山南麓は、前項でも記されているように浅間火山の噴出物で覆われている。第16図にみる第１軽石流（B.P13600ｙ）・第２軽石流（B.P11000ｙ）・追分火砕流（A.D1108ｙ・A.D1281ｙ）がそれである。したがって１万年以上前の旧石器時代の遺跡を探すとなるとこれらの噴出物が除かれた場所でなければならない。このような条件の悪さに災いされて、旧石器時代遺跡の存否が本地域においていまだ確認されないのである。

さて、続く縄文時代の遺跡は、御代田町でも数多く発見されている。

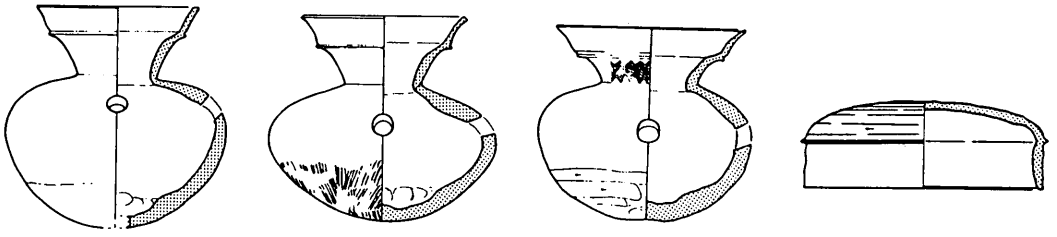
そのなかで、もっとも古く位置付けられるのが、早期の楕円押型文土器の破片を出土した塩野地籍の滝沢遺跡である。これ以外には、現在のところ縄文時代早期の遺跡は確認されていない。また、縄文時代前期の遺跡も確認されていない。

縄文時代中期になると、浅間山南麓の標高900m内外にみられる湧水地帯に沿って、集落が形成されるようになる。昭和60年に発掘調査が実施された大沼遺跡(御代田町教育委員会　1985)、昭和62年に発掘調査が実施され中期後半の埋甕等が検出された広畑遺跡を筆頭に、西荒神遺跡・東荒神遺跡・西城西遺跡・西城東遺跡等が散見される。

一方、浅間山南麓と相対する八風山北麓の湯川沿いにも、縄文時代中期から後期にかけての遺跡が点々と残されている。軽井沢町の茂沢南石堂遺跡もそのうちのひとつである。茂沢地区より湯川をやや下ると、御代田町豊昇地区にいたる。この豊昇地区には、宮平遺跡が存在している。

宮平遺跡は、古くから出土遺物の豊富さで人々の関心をひいていた。昭和５年には、日本における旧石器文化存在の可能性をいちはやく説いていたことでも知られるＮ・Ｇ・マンローも、この遺跡を訪れている。昭和56年には、農道舗装事業に際し宮平遺跡の発掘調査が実施され、中期後半から後期にかけての竪穴住居址27軒が検出されている。

さて、縄文時代に続く弥生時代の遺跡は、現在のところ御代田町においては確認されていない。冷涼な気候の御代田においては、当時の生産基盤であった稲作も対応できず、したがってその集落もみられないということになろうか。



1（H−61　1）　2（H−61　2）　3（H−60　1）　4（H−65　1）

第18図　前田遺跡出土初期須恵器（1：4）

古墳時代になると当地においても集落が形成されるようになる。

古墳時代中期の住居址5軒が本遺跡に隣接する鋳師屋（イモジヤ）遺跡群前田遺跡（第20図10）において検出されている。このうちのいくつかの住居址からは、5世紀後半の所産と考えられるいわゆる初期須恵器4点が出土している（第18図）。奈良教育大学三辻教授による胎土分析によれば、このうち、1・2が猿投産、3・4が陶邑産であるという結果がでている。

続く古墳時代後期の住居址は、同じ前田遺跡において数多く認められている。水稲耕作の技術等が向上し、佐久の平野部より冷涼な本地域へと耕地が拡大してきたのはこの頃だったのであろうか。

さて、いわゆる終末期古墳が本遺跡の周辺に散在している。

その北隣には、根岸古墳（30）・後原1・2号墳（6・7）（佐久市教育委員会1972）と、やや離れて下原古墳群（御代田町教育委員会　1975）が、南隣には野火付古墳（13）（小諸市教育委員会　1983）と、やや離れて皎月古墳（25）が存在している。

さて、奈良・平安時代にあってこの地域は、信濃国佐久郡に属することがわかるが、「和名妙」によればこの佐久郡には、美理（ミトリ）・大村（オオムラ）・大井（オオイ）・餘戸（アマリベ）・青沼（アオヌマ）・刑部（オサカベ）・茂理（モタリ）・小沼（オヌマ）の八郷がみえる。このうち本地域は小沼もしくは大井郷に属する地域ではなかったかと考えられる。

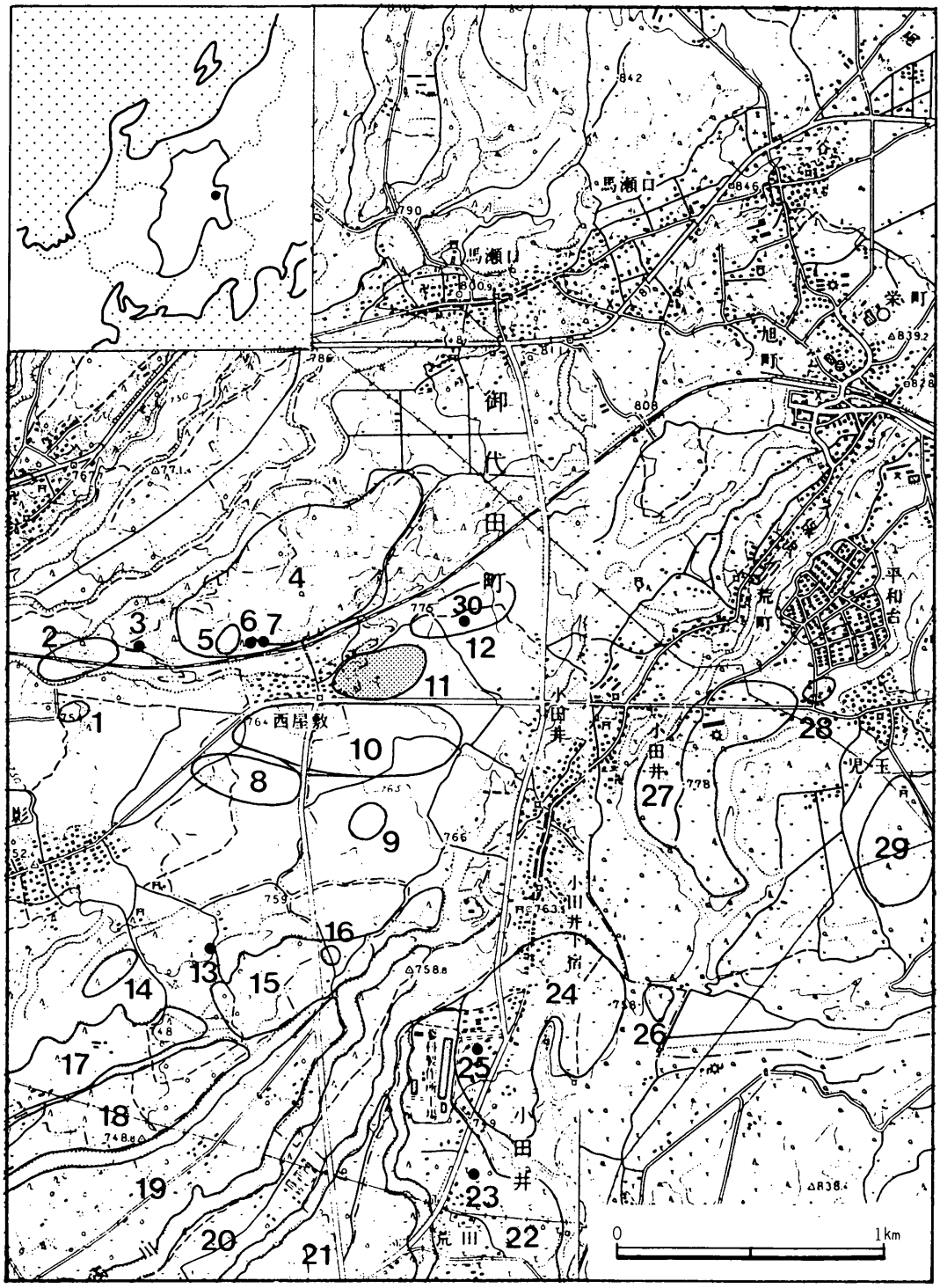
この時代になると、本地域には飛躍的に集落が拡大する。

本遺跡を含めた鋳師屋遺跡群は、この奈良・平安時代を中心とする集落址で、野火付（9）・鋳師屋（8）・前田（10）・十二（11）・根岸（12）の5遺跡から構成されるものである。

この5遺跡は、県営圃場整備事業によって破壊を余儀なくされたため、本昭和62年度までに発掘調査が実施され、多大なる成果がおさめられた。本報告書もその成果の一部である。

第19図　野火付遺跡神功開宝（1：1）

昭和59年度に発掘調査のなされた野火付遺跡では、奈良・平安

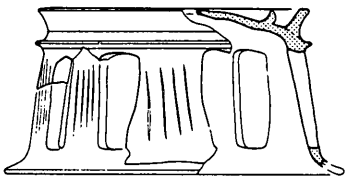


第20図　十二遺跡（網点）と周辺の遺跡分布（1：10000）

第2表　十二遺跡と周辺の遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	旧石器	縄文	弥生	古墳	歴史	中世	備考
1	宮ノ反遺跡	小諸市大字御影字宮ノ反				○	○		昭和59年度発掘調査
2	長野原遺跡	〃　平原字大豆田					○		
3	長野原塚古墳	〃　長野原				○			
4	下前田限遺跡群	佐久市大字小田井字前田原				○	○		
5	後原遺跡	〃　字後原		○					昭和57年度発掘調査
6	後原1号墳	〃				○			昭和47年度発掘調査
7	後原2号墳	〃				○			
8	鋳師屋遺跡	〃　字鋳師屋					○		昭和59年度発掘調査
9	野火付遺跡	御代田町大字御代田字野火付					○	○	昭和59年度発掘調査
10	前田遺跡	〃　字前田原 佐久市大字小田井字前田原				○	○	○	昭和60年度発掘調査
11	十二遺跡	御代田町大字御代田字下十二					○		昭和61年度発掘調査
12	根岸遺跡	〃　字根岸					○		昭和62年度発掘調査
13	野火付古墳	小諸市大字御影字野火付				○			昭和56年度発掘調査
14	野火付遺跡	〃					○		
15	曽根城遺跡群	〃　曽根城					○		
16	曽根城遺跡	〃					○		昭和57年度発掘調査
17	近津遺跡群	佐久市大字長土呂字北近津			○	○	○		
18	周防畑遺跡群	〃　字周防畑		○	○	○	○		
19	芝宮遺跡群	〃　字北上中原			○	○	○		
20	長土呂遺跡群	〃　字長土呂			○	○	○	○	
21	栗毛坂遺跡群	〃　大字小田井字笹群			○	○	○		
22	跡坂遺跡群	〃　字跡坂			○	○	○		
23	島原古墳	〃　字下金井				○			
24	中金井遺跡群	〃　字中金井			○	○	○		
25	皎月古墳	〃　字皎月				○			昭和45年度発掘調査
26	唄坂遺跡	〃　字唄坂		○	○	○	○		
27	小田井城跡	御代田町大字御代田字城の内						○	
28	児玉遺跡	〃　字児玉		○			○		
29	池尻遺跡	〃　字池尻		○					昭和53年度発掘調査
30	根岸古墳	〃　字根岸				○			新発見

時代の竪穴住居址15軒が検出された。その竪穴住居址１軒からは神功開寶１点も検出されている(第19図)。また、その翌年に発掘調査された前田遺跡では奈良・平安時代の竪穴住居址・掘立柱建物址がそれぞれ100棟をゆうに越えて検出されている。その中からは円面硯１点も検出されている(第21図)。



第21図　前田遺跡円面硯（１：４）

この他、野火付遺跡では、特筆すべき発見がなされた。平安時代初頭と考えられる埋葬馬５頭が検出されたのである（第22図)。

ところで、この時代には、本遺跡の北方には「延喜式」記載の御牧・塩野牧、東方には御牧・長倉牧が存在していたものと考えられる。また官道として整備された東山道が本地域のいずれかを通過していたものとみられ、その駅のひとつである長倉駅が本地域に設置されたという説もだされている（一志　1957)。ちなみに長倉駅では駅馬15頭がおかれたという。

その歴史的環境を鑑みるとき、野火付遺跡において発見された埋葬馬５頭は、その御牧や駅に関連する馬ではなかったかとも考えさせられるのである。そして、その馬を埋葬したと考えられる本集落の住人もまた、それら御牧や駅の運営に携わっていたであろう可能性も想定された（堤1987)。

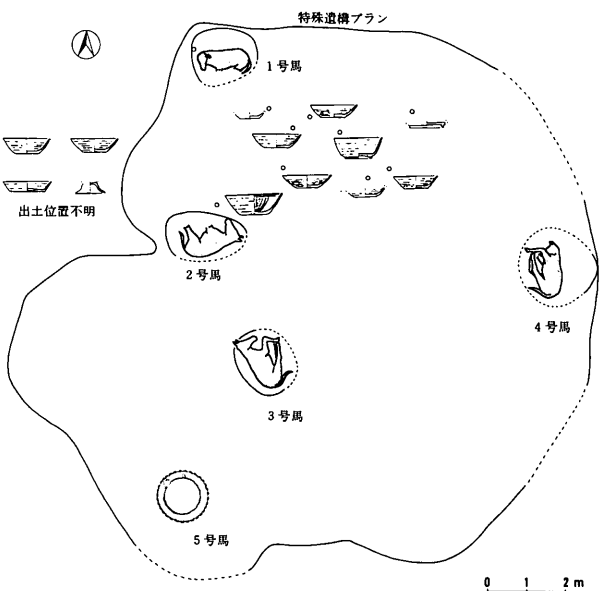
いずれにしても、このような歴史的環境は、本遺跡群の成立に深く関与することが十分に考えられ、今後とも注意がなされなければならない。

さて、13～15世紀にかけての遺構と遺物が、野火付遺跡と前田遺跡から検出されている。

遺構は、200基以上にもおよぶ竪穴状遺構、遺物では貿易陶磁である青磁・白磁、渡来銭等である。

中世においては、本遺跡の南には八条院領大井庄の直営田である佃が存在していたといわれている。これらの遺構・遺物は間接的なりとも佃に関連して残された可能性もある。

以上、歴史的環境について簡略にふれてみた。



第22図　野火付遺跡埋葬馬配置概念図

III 層　　序

1 層　序

十二遺跡における層序は、第23図に示してある。

1は第Ⅰ区ノ－33グリッド付近の土層断面図、2は第Ⅰ区ヒ－36グリッド付近の土層断面図、3は第Ⅲ区ノ－26グリッド付近の土層断面図、4は第Ⅴ区ハ－10グリッド付近の土層断面図である。以下、1～4の順に層序説明を行なおう。

1　第Ⅰ区ノ－33グリッド付近

Ⅰ層は、黒色（10YR 2/1）の水田耕作土で、厚さ20cm前後を測る。Ⅱ層は、パミス・スコリアを全く含まない、やや粘性のある黒褐色土層（10YR 3/1）で、厚さ20cm前後を測る。Ⅲ層は粘性のあまりない褐色ローム層（10YR 4/4）で、厚さ40cm前後を測る。Ⅳ層は、十二遺跡の基盤をなす灰黄褐色（10YR 5/2）の第1軽石流（P 1）で、B.P13600年の年代があたえられている。

2　第Ⅰ区ヒ－36グリッド付近

Ⅰ層は、褐灰色（10YR 5/1）の水田耕作土で、厚さ15cm前後を測る。Ⅱ層は、粘性のある水田床土の黒褐色土層（10YR 3/1）で、厚さ15cm前後を測る。Ⅲ層はパミス・スコリアをあまり含まない黒色土層（10YR 1.7/1）で、厚さ30cm前後を測る。Ⅳ層は、粘性のあまりない褐色ローム層（10YR 4/4）である。いずれも本Ⅳ層上面が遺構の確認面となっている。

3　第Ⅲ区ノ－26グリッド付近

Ⅰ層は、褐色（10YR 3/1）の現水田耕作土で、厚さ15cm前後を測る。Ⅱ層は、粘性のある水田床土の黒褐色土層（10YR 2/2）で、厚さ12cm前後を測る。Ⅲ層はパミス・スコリアをあまり含まない黒色土層（10YR 1.7/1）で、厚さ10cm前後を測る。Ⅳ層は、粘性のある褐黄褐色シルト層（10YR 4/2）で、厚さ12cm前後を測る。Ⅴ層はパミス・スコリアを含まない黒色土層（10YR 1.7/1）で、厚さ12cm前後を測る。

Ⅵ層はパミス・スコリアを含まない粘性のある黒色土層（10YR 2/1）で、厚さ8cm前後を測る。Ⅶ層は粘性のある黒色土層（10YR 2/1）で、厚さ10cm前後を測る。プラントオパール分析および花粉分析の資料サンプルNo.1は本土層より採取している。Ⅷ層はパミス・スコリアをあまり含まない黒色土層（10YR 1.7/1）で、厚さ5cm前後を測る。Ⅸ層はザラザラとした黒色砂質層（10YR 1.7/1）で、厚さ10cm前後を測る。本層は第Ⅰ・Ⅱ区の旧河川の覆土に対応できるものと考え

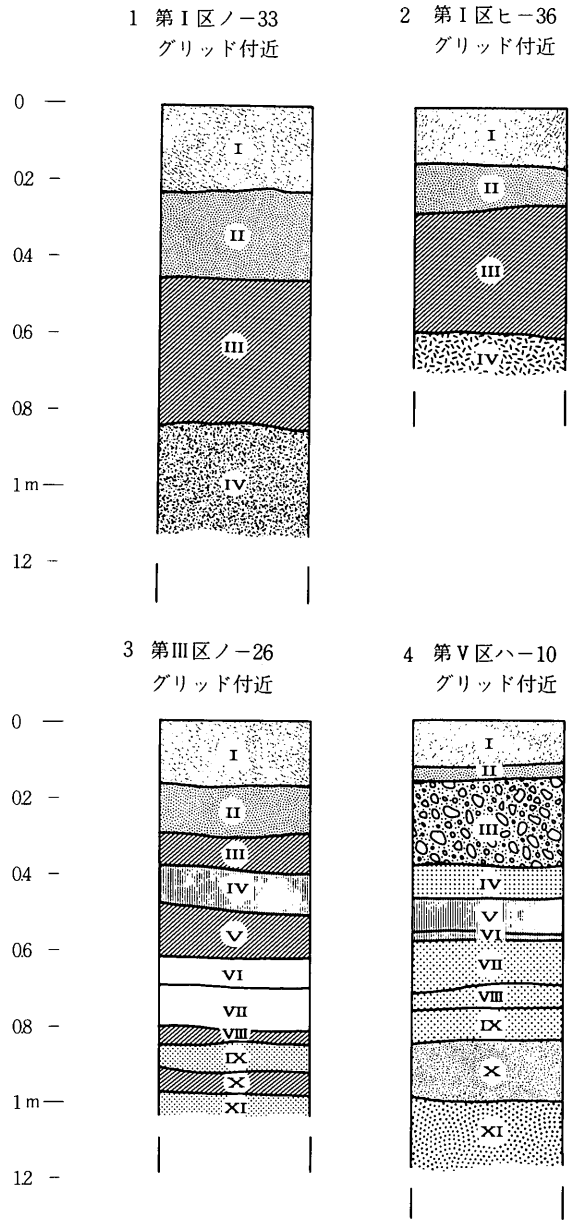
られる。

X層はパミス・スコリアを含まない黒色土層（10YR 1.7/1）で、厚さ8cm前後を測る。プラントオパール分析および花粉分析の資料サンプルNo.2は本土層より採取している。XI層はザラザラとした黒色砂質層（10YR 2/1）である。

4　第V区ハ－10グリッド付近

I層は、黒褐色（10YR 2/2）の現水田耕作土で、厚さ12cm前後を測る。II層は、粘性のある水田床土のにぶい黄褐色土層（10YR 4/3）で、厚さ5cm前後を測る。III層は鉄分の浸透の激しい暗赤褐色砂利層（5YR 3/6）で、厚さ20cm前後を測る。IV層は、黒褐色砂層（10YR 3/2）で、厚さ10cm前後を測る。V層はにぶい黄褐色シルト層（10YR 4/3）で、厚さ8cm前後を測る。VI層は灰黄褐色シルト層（10YR 4/2）で、厚さ2cmを測るのみである。

VII層は黒色砂層（10YR 2/1）で、厚さ10cm前後を測る。VIII層は、VII層よりやや粘性のある黒色砂層（10YR 2/1）で、厚さ5cm前後を測る。IX層は、VII層よりやや粘性のある黒色砂層（10YR 2/1）で、厚さ8cm前後を測る。



第23図　十二遺跡各地区土層断面図（1：20）

X層は黒褐色砂利層（10YR 2/3）で、厚さ15cm前後を測る。XI層はパミス・スコリアを含まない粘性のある黒褐色土層（10YR 3/2）で、プラントオパール分析および花粉分析の資料サンプルNo.4は本土層より採取している。

なお本遺跡においては、年代決定のための有効な鍵層となる浅間の火山灰、A（A.D1783）・B（A.D1108）・C（4世紀前半）は検出されなかった。

Ⅳ　遺構と遺物

1　竪穴住居址

（Ｉ）　Ｈ－１号住居址

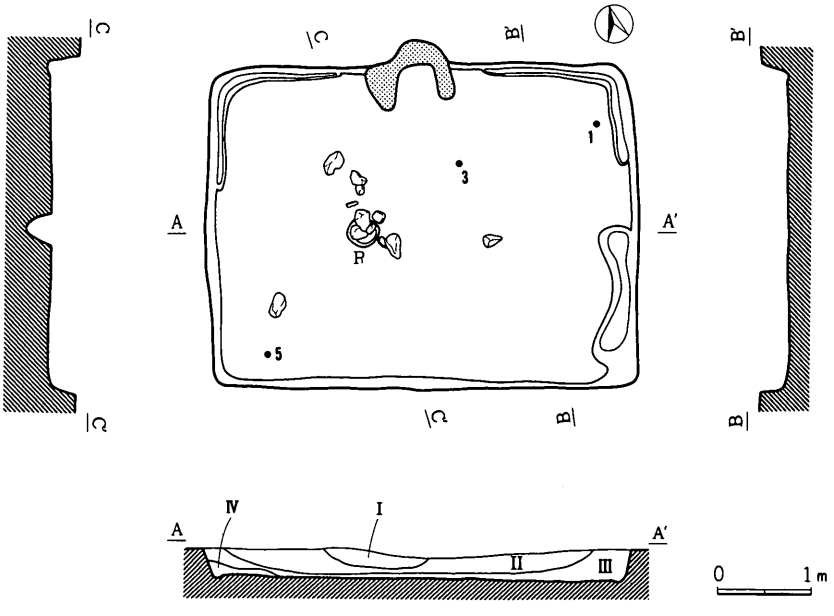
住居址　第24図

Ｈ－１号住居址は、第Ｉ区ネ－33グリッドにおいて検出された。南北3.4m 東西4.6m 隅丸長方形を呈し、床面積14.1m²を測り、南北軸方向はＮ－８°－Ｅを指す。壁高は、25～30cmを測る。壁溝は、西北コーナーおよび東北コーナー・東壁の南半分において認められる。床面は、貼り床ではないが全体に硬質なものである。

ピットは、住居址の中央よりやや西よりにP_1が検出されたのみである。P_1は、35×30cmで深さ25cmを測る。P_1の周囲には、10個ほどの礫が散在していた。

遺物は、１の須恵器蓋が東北コーナー、２の土師器高坏はカマド前、５の砥石は西南コーナーのそれぞれ床面直上より出土した。

覆土は、４層に分層された。Ｉ層は黒色土層（7.5YR 2/1）でパミスを含み、II層は暗褐色土層（7.5YR 3/3）でパミス・スコリアを多く含み、III層は黒色土層（7.5YR 1.7/1）でパミスを含み、IV層は暗褐色土層（7.5YR 3/3）でパミス・スコリアを多く含む層であった。



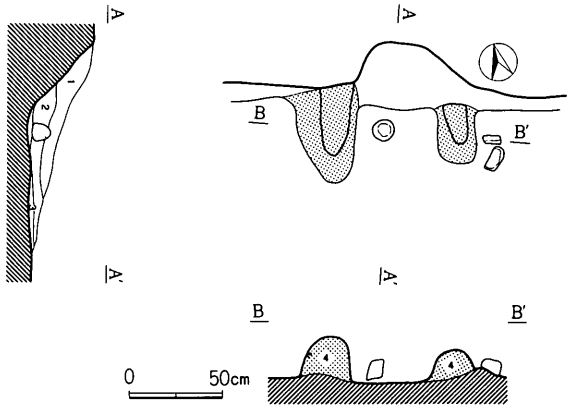
第24図　Ｈ－１号住居址実測図（１：80）

カマド　第25図

カマドは、住居址の北壁中央に存在している。

本カマドは、左右両袖の一部をとどめていた。袖は、僅かにロームの混じる灰白色粘土層（4層　10YR 7/1）によって構築されていた。また、火床には軽石製の支脚が残置されていた。火床部は、図の薄い網点部分である。

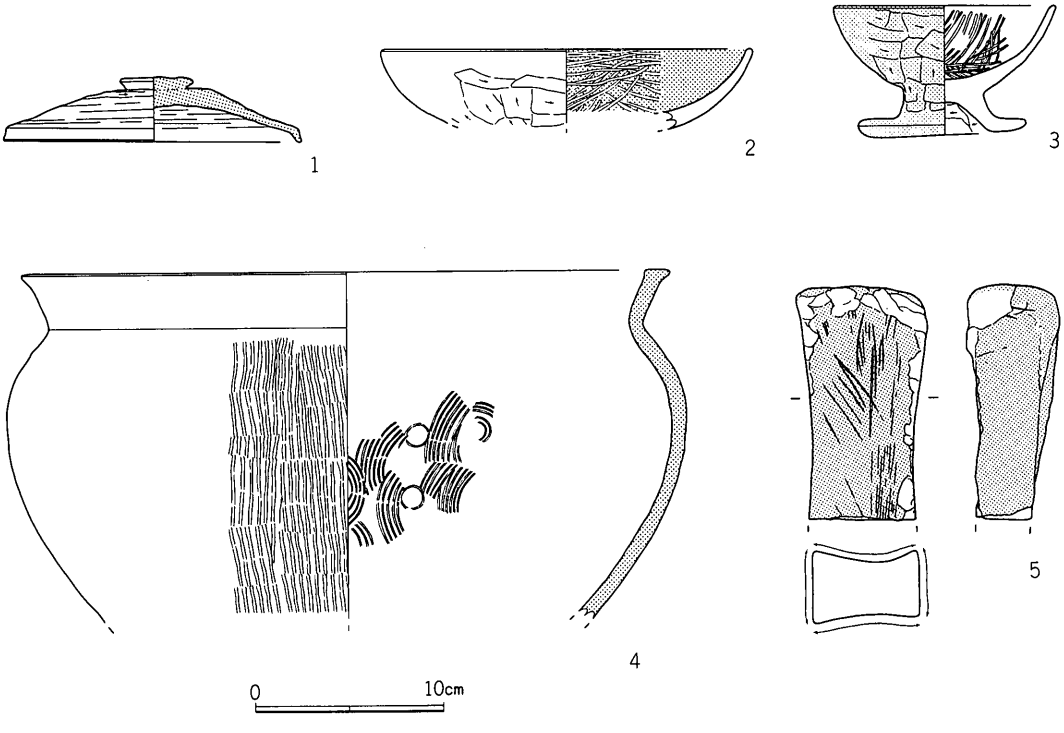
本カマドの覆土は、3層に分層された。1層は灰白色粘土層（10YR 7/1）で、天井部の崩落層と考えられる。2層は黒褐色土層（7.5YR 3/2）で、若干のカーボンを含んでいた。3層は黒色土層（7.5YR 1.7/1）で、カーボンをよく含み、若



第25図　Ｈ－１号住居址カマド実測図（１：40）

第３表　Ｈ－１号住居址出土遺物一覧表〈石器〉

挿図番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備　考
5	砥　石	砂　岩	(12.5)	7.0	4.9	(555)	一部欠損



第26図　Ｈ－１号住居址出土遺物（１：４）

第4表　H－1号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1（完）	蓋（須）	3.9 3.4 15.7	つまみ部は偏平なボタン状を呈する。	外面　ロクロヨコナデの後、天井部回転ヘラケズリ 内面　ロクロヨコナデ （ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み灰白色（7.5Y7／1）完形
2（完）	皿（土）	19.7 — —	底部は偏平な丸底を呈するものと思われ体部はゆるやかに外反する。 あるいは高坏の坏部か。	外面　口辺部ヨコナデの後、体部から底部にかけてヘラケズリ 内面　黒色研磨（一部黒色とならない部分もある）	胎土は不良で砂粒を多く含み浅黄橙色(10YR8/3)
3（完）	高坏（土）	11.8 6.8 8.2	坏部はゆるやかに外反し、脚部は短く太い寸づまりな高坏 外面の一部には赤色塗彩が観察される。	外面　口辺部ヨコナデ、脚部裾ヨコナデの後、坏部から脚部胴ヘラケズリ 内面　坏部ヘラミガキ、脚部胴ヘラケズリ、脚部裾ヨコナデ	胎土は砂粒を多く含み、にぶい橙色（7.5YR7/4）ほぼ完形
4（回）	甕（須）	〈34.4〉 — —	口唇部は偏平に面をなし、頸部でくの字状に外反し、胴部上方でふくらみ、ゆるやおに底部へと続く器形を呈する。	外面　胴部格子叩き、口縁部ヨコナデ 内面　胴部には青海波文が認められる。 口縁部ヨコナデ	胎土は砂粒を多く含み浅黄橙色（7.5YR8/4）

干の焼土を含む層である。

遺　物　第26図

遺物の出土量は、総じて少ないが、須恵器では蓋・甕、土師器では坏・高坏・甕、石器では砥石が検出されている。

1は、扁平なボタン状ツマミをもつ完形の須恵器蓋、2は内面黒色研磨のなされた土師器坏、3は外面に赤色塗彩のなされた土師器高坏、4は、外面に平行叩き、内面に青海波の当て具痕の認められる須恵器甕である。

この他、図示しえなかったが、外面平行叩きの認められる土師器甕があった。

5は、砂岩の砥石で、4面のすべてが研砥に供されたものである。半分を古く欠損する。

時　期

本住居址は、八世紀第Ⅰ四半期、十二遺跡第Ⅰ期に位置付けられよう。

（2）　H－2号住居址

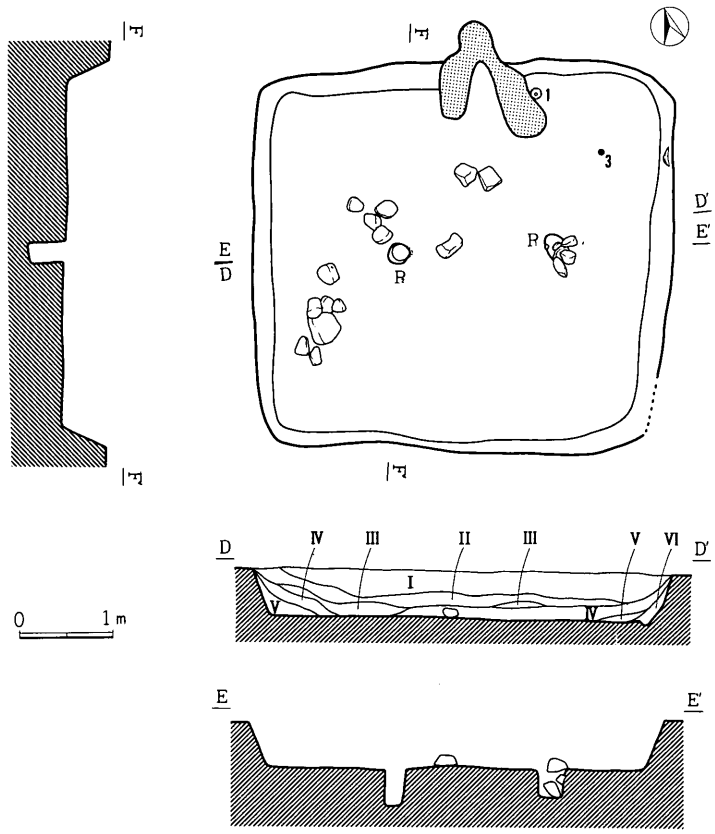
住居址　第27図

H－2号住居址は、第Ⅰ区ノ－33グリッドにおいて検出された。南北4.15m 東西4.45m の隅丸方形を呈し、床面積14.6m²を測り、南北軸方向はN－11°－Eを指す。壁高は、45～50cmを測る。壁溝は認められない。床面は、貼り床ではないが全体に硬質なものである。

ピットは、住居址の中央よりやや東よりにP_1が検出され、住居址の中央よりやや西よりにP_2が検出された。P_1は35×20cm深さ30cmを測り、P_2は25×25cm深さ40cmを測る。P_1中には安山岩礫数個が落ち込んでいた。P_2の周囲の床面直上にも安山岩礫が認められた。

遺物は、1の須恵器蓋がカマド東袖部分より、3の須恵器坏がカマド斜め前床面より20cm浮いて出土した。

覆土は、6層に分層され、プライマリーな堆積状況を示していた。Ⅰ層は灰黄褐色土層（10YR 4/2）で小粒パミスを若干含み、Ⅱ層は褐色土層（10YR 4/4）でローム粒子をよく含み、Ⅲ層は黒色土層（10YR 1.7/1）でパミスを少量含み、Ⅳ層はにぶい黄褐色土層（10YR 5/4）でローム粒子をよく含み、Ⅴ層は灰黄褐色土層（10YR 4/2）でパミスをあまり含まない、Ⅵ層はにぶい黄褐色土層（10YR 6/4）でローム粒子をよく含む層であった。

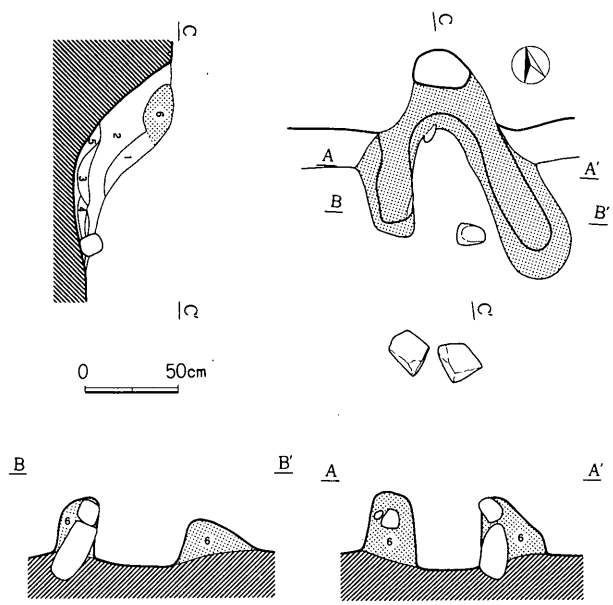


第27図　Ｈ－２号住居址実測図（１：80）

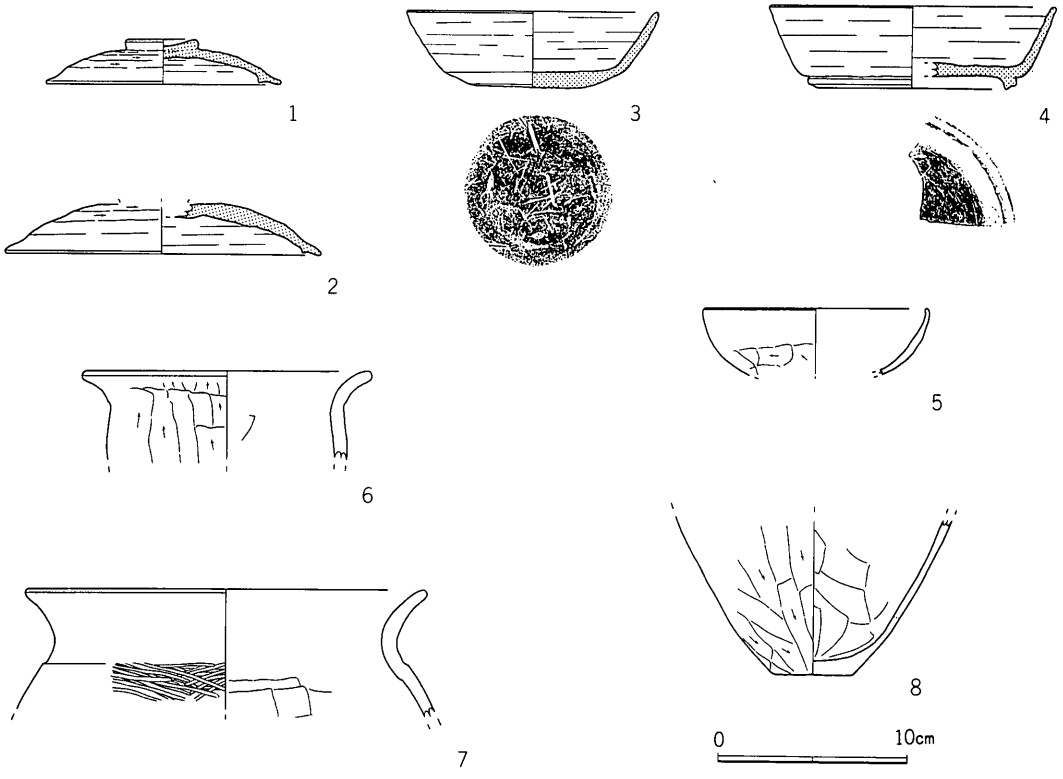
カマド　第28図

カマドは、住居址の北壁中央に存在している。　本カマドは、左右両袖の一部と、天井部の一部をとどめていた。袖は、面取り軽石と安山岩礫を芯に、カーボン・黒色土粒子の若干混じるにぶい黄橙色粘土層（６層　10YR 7/3）を貼って構築されていた。また、火床には安山岩製の支脚が残置されていた。カマドの前には、カマドの構材と考えられる面取り軽石２個がみられた。

本カマドの覆土は、５層に分層された。１層は灰褐色粘土層（５ YR 6/2）で、天井部の崩落層と考えられる。２層は黒褐色土層（５ YR3/1）で、若干



第28図　Ｈ－２号住居址カマド実測図（１：40）



第29図　Ｈ－２号住居址出土遺物（１：４）

第５表　Ｈ－２号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1（完）	蓋（須）	3.9 2.3 12.4	つまみ部は中央のくぼんだ皿状を呈する。内面にはかえりをもつ	外面　ロクロヨコナデの後ほぼ全面に回転ヘラケズリ 内面　ロクロヨコナデ　（ロクロ左回転）	胎土は比較的精選され青灰色（5Ｂ6/1）ほぼ完形
2（完）	蓋（須）	― ― 16.7	つまみ部の形状不明 内面にかえりを有する	外面　ロクロヨコナデの後、天井部回転ヘラケズリ 内面　ロクロヨコナデ （ロクロ右回転）	胎土は不良で砂粒を多く含み焼成も完全な還元炎焼成となっていない。にぶい橙色(75YR7/4)
3（完）	坏（須）	13.3 4.0 6.5	やや丸味をおびた平底から、ゆるく変換し外反する体部へと続く。	外面　体部ロクロヨコナデ。底部回転ヘラキリ。未調整。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み灰白色（10Ｙ７/１）
4（回）	坏（須）	〈15.1〉 4.3 〈11.0〉	底部には高台が貼り付けられる。	外面　体部ロクロヨコナデ。底部回転ヘラケズリ。切り離し方法不明。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は比較的精選され焼成良好、青灰色（5B6/1）
5（回）	坏（土）	〈12.0〉 ― ―	体部は丸味をおびて外反する。	外面　口辺部ヨコナデ。体部～底部ヘラケズリ。 内面　ヨコナデ。	胎土は砂粒を含みにぶい橙色（7.5ＹＲ７/４）
6（回）	甕（土）	15.3 ― ―	口縁部はくの字状に外反したのち、ほぼ垂直に胴部へと下降する。肉厚。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部縦のヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は精選されず砂粒を多く含む。にぶい橙色（5YR7/4）
7（回）	甕（土）	〈21.2〉 ― ―	口縁部は外反し、胴上部のふくらむ器形。やや肉厚。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヨコヘラミガキ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は比較的精選され浅黄橙色（7.5ＹＲ８/３）
8（回）	甕（土）	― ― （4.1）	底部平底。肉薄。	外面　ヘラケズリ。 内面　ヘラナデ。	胎土は比較的精選され橙色（5ＹＲ６/６）

のカーボン・焼土を含んでいた。3層は橙色土層（5 YR 6/6）で焼土層、4層は明褐灰色粘土層（5 YR 7/1）で若干の焼土を含み、5層は層（7.5YR 1.7/1)で、カーボンをよく含み、若干の焼土を含む層である。

遺　物　第29図

遺物の出土量は、総じて少ないが、須恵器では蓋・坏・高台付坏・甕、土師器では坏・甕が検出されている。

1・2は、カエリのある須恵器蓋で、1は皿状ツマミをもつものである。

3は回転ヘラキリの須恵器坏、4は須恵器高台付坏である。

5は土師器坏、7・9は、土師器甕である。このうち7・9の甕はやや肉厚なもので、7の外面胴部にはヘラミガキがなされている。

時　期

本住居址は、八世紀第Ⅰ四半期、十二遺跡第Ⅰ期に位置付けられよう。

（3）　H－3号住居址

住居址　　第30図

H－3号住居址は、第Ⅰ区ノ－33グリッドにおいて検出された。

本住居址は、掘立柱建物址F－4に北壁西半分を切られている。

本住居址は、南北4.2m 東西4.4m の隅丸方形を呈し、床面積13.4m²を測り、南北軸方向はN－8°－Wを指す。壁高は、40～50cmを測る。壁溝は認められない。床面は、貼り床ではないが全体に硬質なものである。

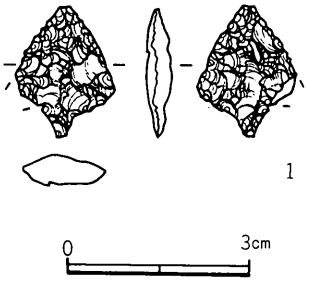
ピットは、住居址の第Ⅳ区中央よりP_1が検出され、住居址の第Ⅲ区中央よりP_2が検出された。P_1は25×25cm深さ30cmを測り、P_2は30×30cm深さ20cmを測る。

覆土は、5層に分層され、プライマリーな堆積状況を示していた。Ⅰ層は黒褐色土層（10 YR 3/2）で細粒パミスを若干含み、Ⅱ層は明黄褐色土層（10YR 5/8）でローム粒子・パミス・スコリアを多く含み、Ⅲ層は黒褐色土層（10YR 3/2）でパミス・スコリアをよく含み、Ⅳ層は黒色土層（10YR 2/1）でパミス・スコリアを含まない、Ⅴ層は明黄褐色土層（10YR 5/8）でローム粒子を多く含む層である。また、本住居址の覆土中には、20cm前後の礫が10個ほど散布していた。

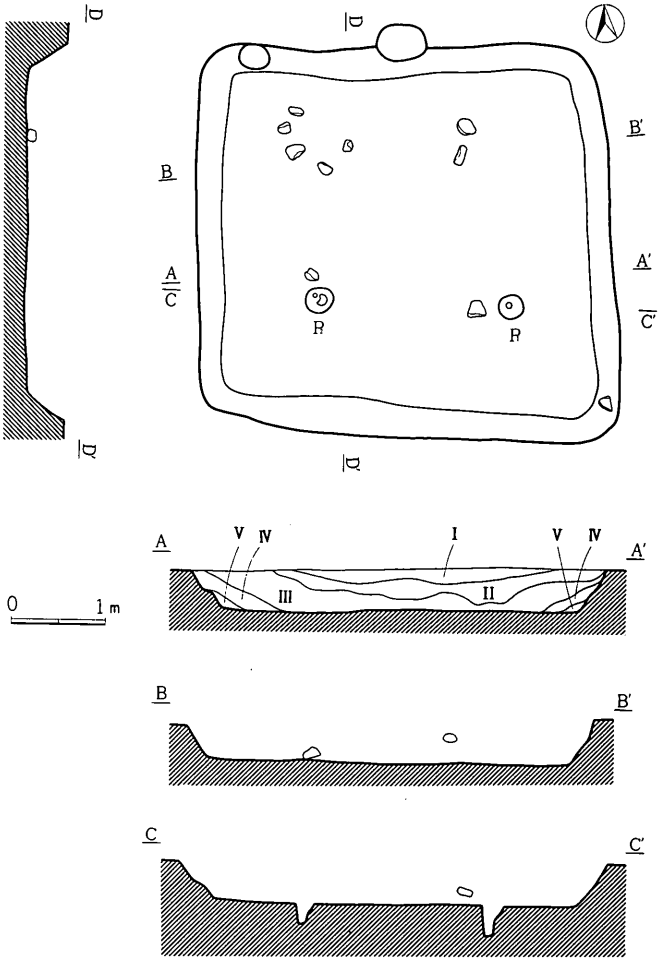
カマド

本住居址は、カマドをもたないものであった。

遺　物　第31図



第31図　H－3号住居址出土遺物実測図（4：5）



第30図　H－3号住居址実測図（1：80）

土器の出土量は、きわめて少なく、須恵器では坏・甕、土師器では坏・甕の破片数十片が検出されたのみにとどまり、いずれも図示しえなかった。

その中には、畿内系暗文を有する土師器坏の破片も認められた。

このほか、第31図1の黒曜石の有茎石鏃が、第III区覆土中より出土している。

時　期

本住居址は、伴出遺物がきわめて少ないため、その時期決定が非常に困難である。

第6表　H－3号住居址出土遺物一覧表〈石器〉

挿図番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備　考
1	石　鏃	黒曜石	2.1	(1.6)	0.4	(1.1)	有茎

なお、本住居址は、掘立柱建物址F－4に切られているものであり、F－4より古い時期のものといえる。また、その占地をみると、H－2号住居址ときわめて近接しているため、両者が共存していた可能性は考えられず、したがって本住居址は、H－2号住居址の存在していた八世紀第I四半期以外の所産とみることができる。

そのような遺構の切りあい関係と、僅かな遺物から、本住居址は八世紀第II四半期、十二遺跡第II期に位置付けることが妥当かと考えられるが、とりあえず所属期不明としておく。

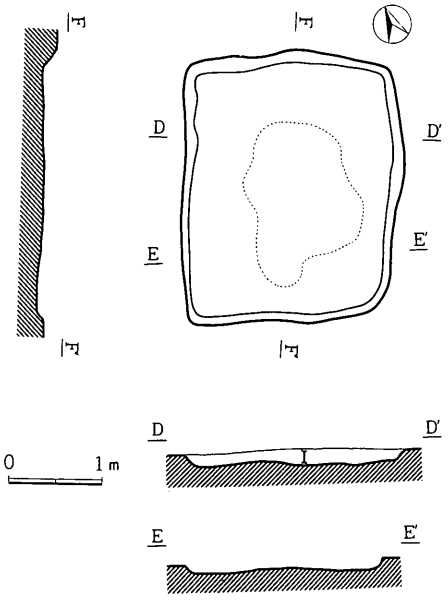
（4）　Ｈ－４号住居址

住居址　第32図

Ｈ－４号住居址は、第Ｉ区ノ－33グリッドにおいて検出された。本址は、非常に小形であるゆえ、居住施設としてよいものかどうか問題が残るが、ここではとりあえず住居址と呼称した。

本址は、南北3.3m 東西2.8m の小形の隅丸長方形を呈し、床面積5.2m²を測り、南北軸方向はＮ－16°－Ｅを指す。壁高は、10～15cmを測る。壁溝は認められない。ピットは認められなかった。なお、図の破線内は硬い床の範囲である。

覆土は、Ｉ層のみで、パミスを若干含む黒褐色土層（10YR 2/2）であった。



第32図　Ｈ－４号住居址実測図（Ｉ：80）

カマド

本址は、カマドをもたないものであった。

遺　物

本址より検出された遺物は、土師器甕の破片一片のみであった。

時　期

本址は、伴出遺物がないため、その時期決定が非常に困難である。

なお、その位置関係からは、Ｈ－２号住居址との配列性が窺えないこともない。よって本址の時期は、Ｈ－２号住居址の存在していた八世紀第Ｉ四半期の可能性も残る。

（5）　Ｈ－５号住居址

住居址　第33図

Ｈ－５号住居址は、第Ｉ区ノ－33グリッドにおいて検出された。南北5.15m 東西5.1m の隅丸方形を呈し、床面積22.4m²を測り、南北軸方向はＮ－15°－Ｅを指す。壁高は、15～20cmを測る。壁溝は認められない。床面は全体に硬質な貼り床であった。

ピットは、基本的にはP_5からP_8の四個が対で存在していたが、これは柱の立替前の旧ピットで、これが埋め戻され、新たにP_1からP_4の四個のピットが設けられたものとおもわれる。P_1は35×30cm深さ50cm、P_2は40×35cm深さ65cm、P_3は37×32cm深さ67cm、P_4は35×40cm深さ60cm、P_5は30×30cm深さ55cm、P_6は35×30cm深さ57cm、P_7は45×35cm深さ60cm、P_8は42×40cm深さ55

cmを測る。

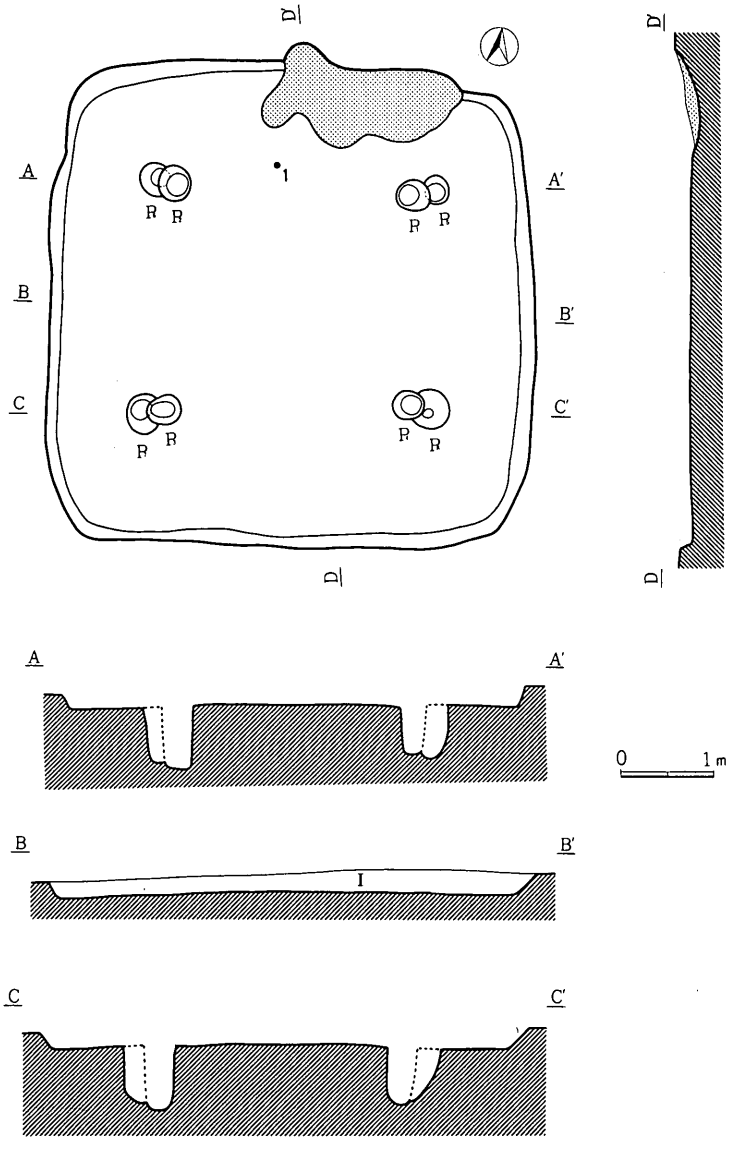
遺物は、1の須恵器坏がカマド前の床面よりやや浮いて出土した。また、P_7の西の床面直上からは砥石が出土した。

覆土は、Ⅰ層のみで、小粒パミスをよく含む黒褐色土層（10YR 3/1）であった。

カマド　第34図

カマドは、住居址の北壁中央に存在しているが、ほぼ全体を破壊された状態にあった。カマドの構材である粘土とカマド使用に伴う焼土は、カマドの東側に流出していた。

本カマドの土層は、3層に区分された。1層はカマドの構材と考えられる浅黄橙色粘土層（10YR 8/3）、2層は若干のカーボン・焼土を含む灰黄褐色土層（10YR 5/2）、3層は多量の灰を含むにぶい黄橙色土層（10YR 7/2）であった。また、4層は、ロームと黒色土の混じる黒色土層（10YR 2/3）で、張り床の層である。



第33図　H－5号住居址実測図（1：80）

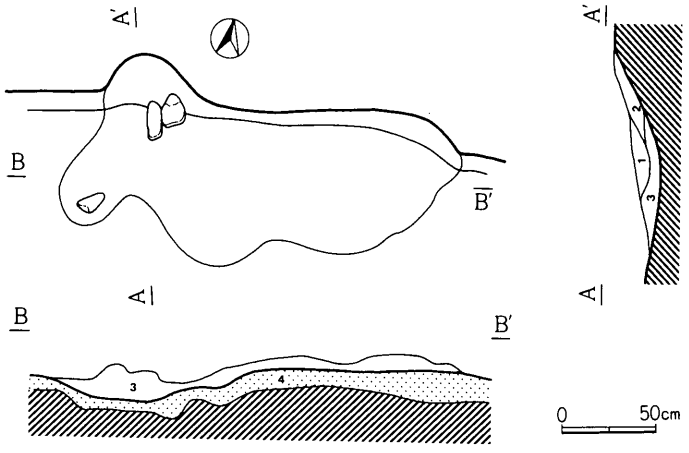
遺　物　第35図

遺物の出土量は、総じて少ないが、須恵器では蓋・坏・甕、土師器では甕が検出されている。

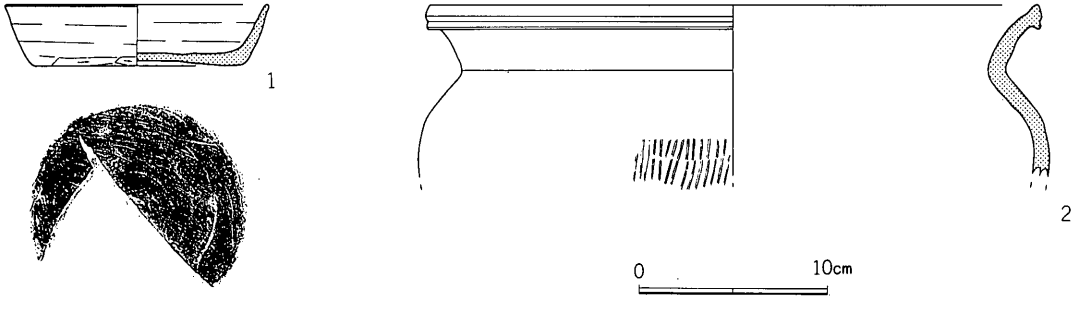
1は、盤状の須恵器坏で、回転ヘラキリの後手持ちヘラケズリのなされた底部をみせている。

2は、須恵器甕である。

時　期



第34図　Ｈ－５号住居址カマド実測図（１：40）



第35図　Ｈ－５号住居址出土遺物（１：４）

第７表　Ｈ－５号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1（完）	坏（須）	13.9 3.2 11.0	体部は直線的に外反し、底部平底の盤状の器形。	外面　体部ロクロヨコナデ。底部回転ヘラキリの後全面手持ちヘラケズリ。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み灰白色（10Y８／１）
2（回）	甕（須）	(32.1) — —	口唇部は帯状に縁取られ、胴部肩のやや張る器形。	外面　胴部叩きの後、口縁部ロクロヨコナデ。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	完全な還元炎焼成となっておらず、浅黄橙色（10YR８／３）

本住居址は、八世紀第Ⅱ四半期、十二遺跡第Ⅱ期に位置付けられる可能性が大である。

（６）　Ｈ－６号住居址

住居址　　第36図

Ｈ－６号住居址は、第Ⅰ区ハ－33グリッドにおいて検出された。

その西半分を掘立柱建物址Ｆ－12に切られて存在している。

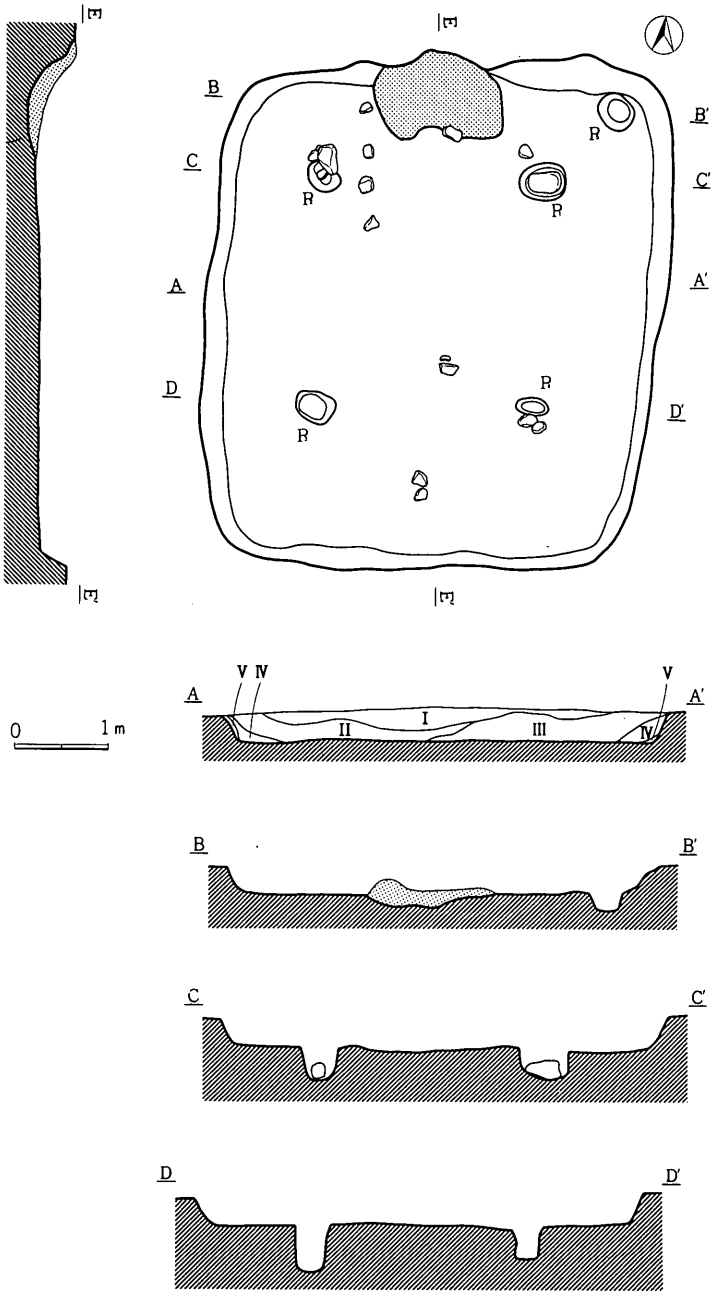
本住居址は、南北5.3m 東西4.9m の隅丸方形を呈し、床面積21.0m²を測り、南北軸方向はＮ－

7°－Wを指す。壁高は、30～35cmを測る。壁溝は認められない。床面は全体に硬質な貼り床であった。

ピットは、P_1からP_4の四個のピットが対で認められ、また、東北コーナーにP_5が存在していた。P_1は50×40cm深さ30cm、P_2は35×30cm深さ35cm、P_3は40×32cm深さ50cm、P_4は35×17cm深さ33cm、P_5は40×35cm深さ20cmを測る。なお、P_1・P_2の底面には、安山岩の礎石が一個づつ認められた。

遺物は、良好な出土状態を示すものがなく、いずれも覆土中から出土している。

覆土は、5層に分層され、プライマリーな堆積状況を示していた。I層は黒色土層（10YR 1.7/1）で小粒パミスを含み、II層は黒褐色土層（10YR 3/1）で小粒パミスをよく含み、III層は暗褐色土層（10YR 3/3）でパミス・スコリアを多量に含み、IV層は黒色土層（10YR 1.7/1）でにぶい黄褐色土層（10YR 5/4）でパミス・スコリアをあまり含まない、V層は褐色土層（10YR 4/4）でローム粒子をよく含む層であった。



第36図　H－6号住居址実測図（1：80）

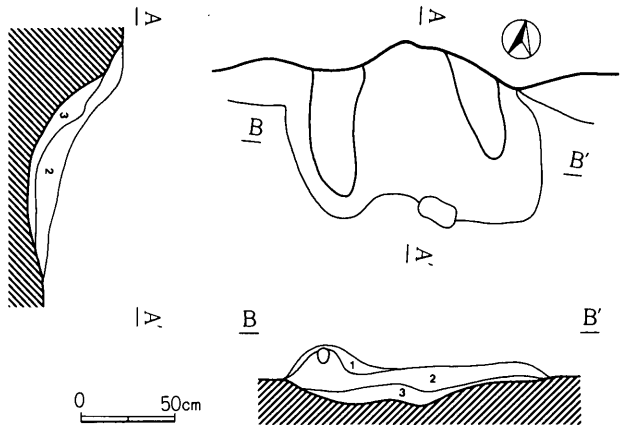
カマド　第37図

カマドは、住居址の北壁中央に存在しているが、ほぼ全体を破壊された状態にあった。

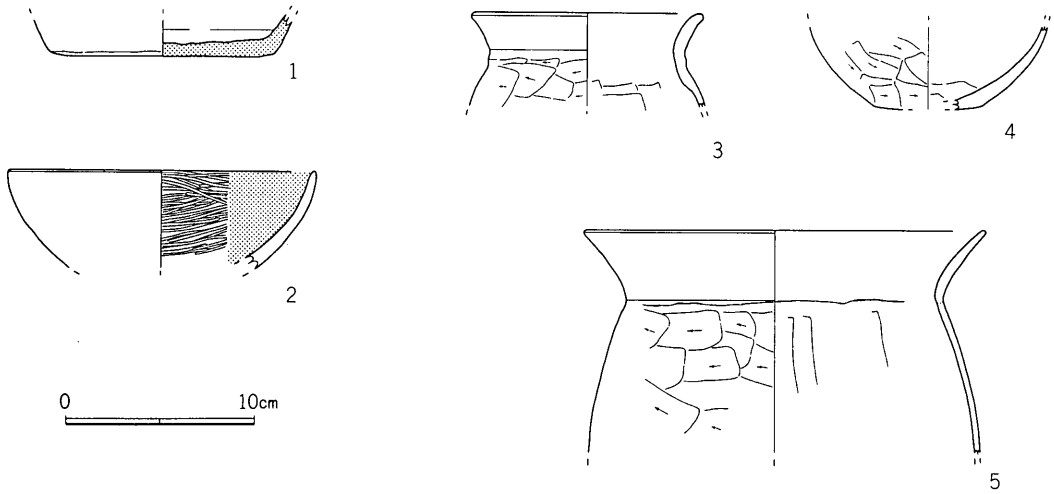
本カマドの土層は、3層に区分された。1層はカマドの構材と考えられる2層を含む灰黄褐色土層（10YR 4/2）、2層は浅黄橙色粘土層（10YR 8/3）、3層は若干のカーボン・焼土を含む黒褐色土層（10YR 3/2）であった。

遺　物　第38図

遺物の出土量は、総じて少ないが、須恵器では蓋・坏・甕、土師器では



第37図　H－6号住居址カマド実測図（1：40）



第38図　H－6号住居址出土遺物（1：4）

第8表　H－6号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1（回）	坏（須）	— — 〈12.0〉	底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。底部回転ヘラケズリ。（切離し方法不明） 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	完全な還元炎焼成となっておらず、橙色（5YR 6/6）の断面。
2（回）	坏（土）	〈16.4〉 — —	体部は丸味を帯びて外反する。底部の形状不明	外面　ロコナデ（ロクロ？） 内面　黒色研磨がなされるが、一部黒色とならない部分もある。	胎土は砂粒を含み橙色（5YR 6/6）
3（回）	甕（土）	（12.3） — —	口縁部は外反し、胴部球状を呈する小形の器形。あるいは4と同一個体か。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は細砂粒を含み、暗赤褐色（5YR3/6）
4（回）	甕（土）	— — （5.1）	胴部は球状を呈し、底部平底。3と同一個体か。	外面　胴部および底部ヘラケズリ。 内面　ヘラナデ	胎土は砂粒を含み明赤褐色（5YR5/6）
5（回）	甕（土）	（21.2） — —	口縁部はくの字状に外反する。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は比較的精選され、にぶい橙色（5YR6/4）

坏・甕が検出されている。

1は回転ヘラキリの須恵器坏、2は内面黒色研磨のなされた土師器坏である。

3～5は、土師器甕である。このうち3・4の甕は小形なもので、4は球状の胴部を呈している。5は、くの字状口縁の長胴甕である。

時　期

本住居址は、遺物が少なく時期決定が困難であるが、その西半分を掘立柱建物址F－12に切られて存在していることから、F－12の時期よりは古いものといえそうである。とりあえずは八世紀第Ⅰ四半期、十二遺跡第Ⅰ期に位置付けておこう。

（7）　H－7号住居址

住居址　第39図

H－7号住居址は、第Ⅰ区ノ－32グリッドにおいて検出された。

本住居址は、南北2.8m東西3.9mの隅丸長方形を呈し、床面積9.5m²を測り、南北軸方向はN－5°－Wを指す。壁高は、35～45cmを測る。壁溝は認められない。ピットはまったく認められなかった。床面は全体に平坦で、貼り床ではないが全体に硬質なものであった。

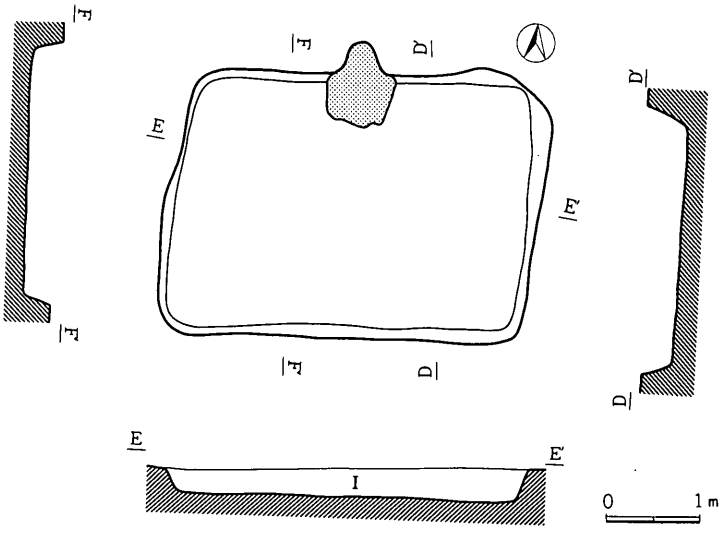
遺物は、良好な出土状態を示すものがなく、いずれも覆土中から出土している。

覆土は、Ⅰ層のみで、パミス・ローム粒子をよく含み、若干の黒色土粒子を含む灰黄褐色土層（10YR 4/2）であった。

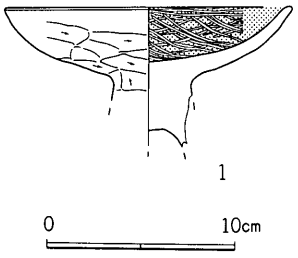
カマド　第40図

カマドは、住居址の北壁中央に存在しているが、比較的良好な状態で検出された。

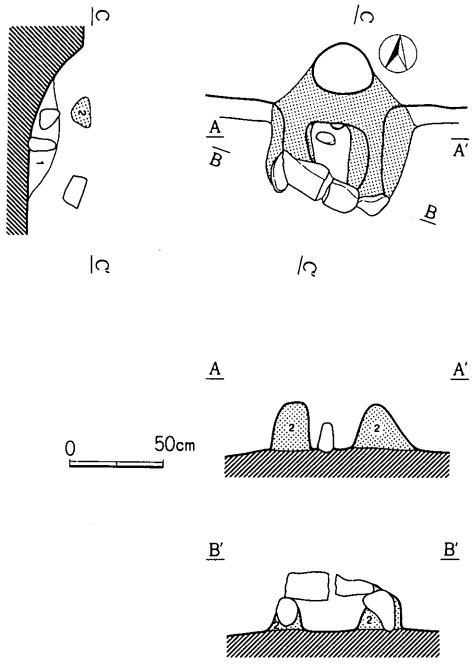
本カマドの左右両袖は、安山岩礫が据えられた後、若干の黒色土を含む灰白色粘土層（2層　10YR 7/1）が貼られて構築されていた。また、前方の天井には面取り軽石が左右両袖から渡されていた。火床からは、細



第39図　H－7号住居址実測図（1：80）



第41図　Ｈ－７号住居址出土遺物（１：４）



第40図　Ｈ－40号住居址カマド実測図（１：40）

長い安山岩の支脚石が立ったままの状態で検出された。

カマドの覆土は、カマドの構材である２層（灰白色粘土層）を含む、黒褐色土層（10YR 3/1）であった。

カマド中からは、１の土師器高坏が検出された。

遺　物　第41図

遺物の出土量は、きわめて少なく、須恵器では甕の破片２片、土師器では１の高坏と、甕の破片十数片が検出されたのみにとどまった。

１は、内面黒色研磨のなされた土師器高坏の坏部である。

時　期

本住居址は、１の土師器高坏を手掛かりに、八世紀第Ⅰ四半期、十二遺跡第Ⅰ期に位置付けられよう。

第９表　Ｈ－７号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1（完）	高坏（土）	15.2 — —	坏体部は丸味を帯びて外反する。 脚部の形状は不明。	外面　坏部口縁ヨコナデ。体部以下ヘラケズリ。 内面　直線状の黒色研磨。	胎土は砂粒を多く含み、浅黄橙色（7.5YR8/4）

（８）　Ｈ－８号住居址

住居址　　第42図

Ｈ－８号住居址は、第Ⅰ区ヌ－32グリッドにおいて検出された。

その東半分の一部は、現在の暗渠排水によって破壊されていた。

本住居址は、南北4.1m 東西4.3mの隅丸方形を呈し、床面積16.0m²を測り、南北軸方向はN－14°－Eを指す。壁高は、10～15cmを測る。壁溝は認められない。

ピットは、P_1からP_4の四個のピットが対で認められた。P_1は推定55×45cm深さ55cm、P_2は70×60cm深さ60cm、P_3は70×50cm深さ55cm、P_4は48×45cm深さ60cmを測る。なお、P_3の底面には、自然石が一個認められた。

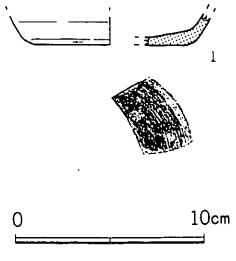
遺物は、良好な出土状態を示すものがなく、いずれも覆土中から出土している。

覆土は、Ⅰ層のみで、小粒パミスを含む黒褐色土層（10YR 2/2）であった。

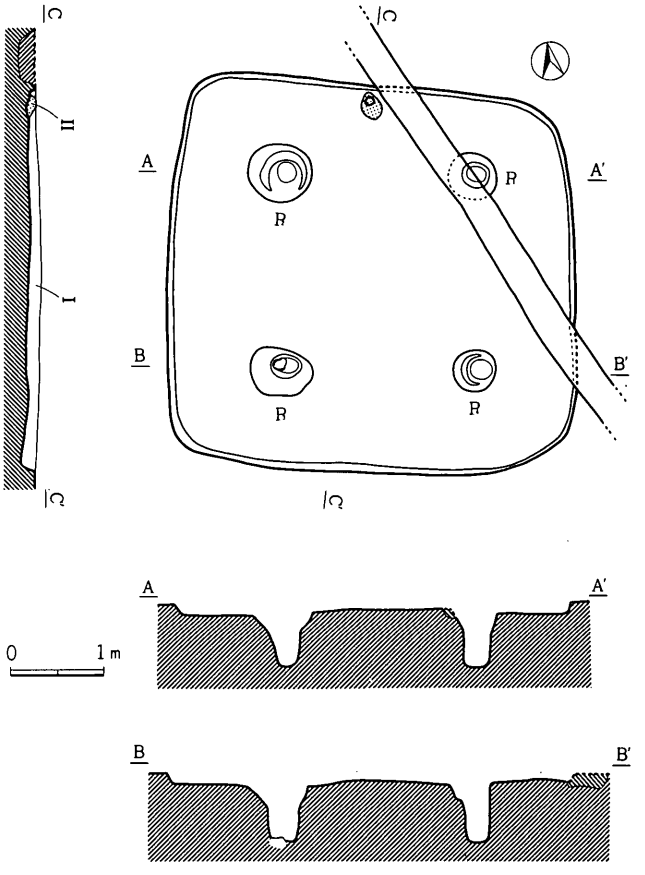
カマド　第43図

カマドは、住居址の北壁中央に存在しているが、ほぼ全体を破壊された状態にあり、その構材と考えられる褐灰色粘土層（10YR 4/1）を僅かにとどめるのみであった。

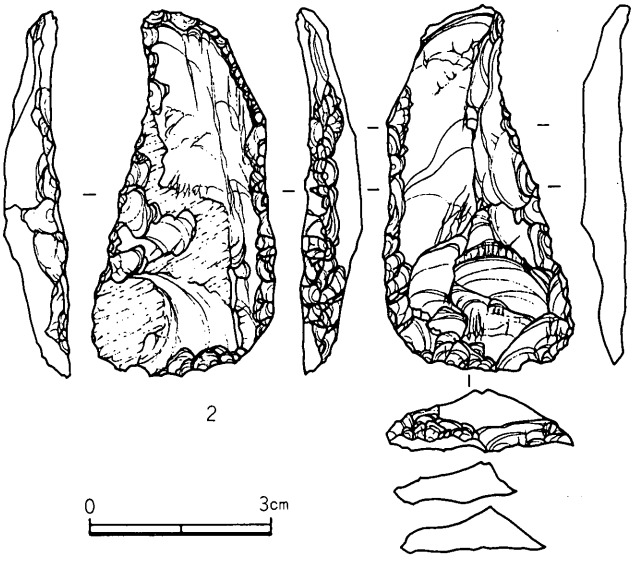
遺　物　第43・44図



第43図　H－8号住居址
出土遺物（1：4）



第42図　H－8号住居址実測図（1：80）



第44図　H－8号住居址出土遺物（2＝4：5）

第10表　Ｈ－８号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1 (回)	坏 (須)	― ― 〈8.0〉	底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。底部回転ヘラケズリ。切り離し方法不明。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ左回転）	胎土は砂粒を含み灰白色 （Ｎ７/０）

遺物の出土量は、きわめて少なく、須恵器では坏・甕、土師器では坏・甕の破片数十片が検出されたにすぎない。

第11表　Ｈ－８号住居址出土遺物一覧表〈石器〉

挿図番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
2	スクレイパー	チャート	6.0	3.0	0.8	13.7	

１は、回転ヘラケズリのなされた底部をみせる、須恵器坏の小破片である。

２は、チャートの横長剝片を素材としたスクレイパーで、そのほぼ全周にわたって表裏両面から刃づけのなされたものである。

時　期

本住居址は、遺物が少なく時期決定が非常に困難であり、ここではその所産期については不明としておく。

（９）　Ｈ－９号住居址

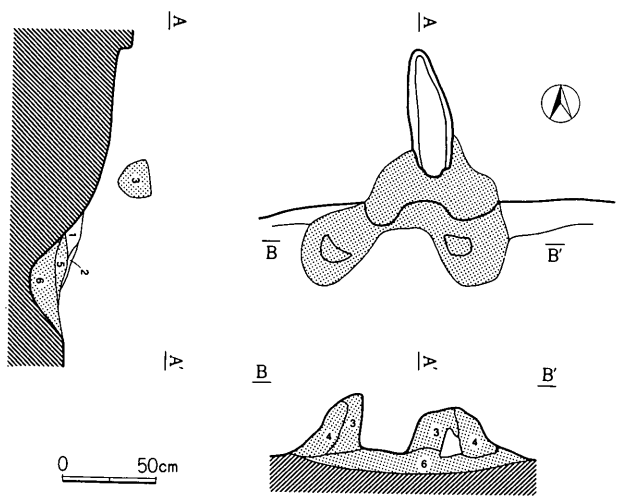
住居址　第46図

Ｈ－９号住居址は、第Ｉ区ヒ－33グリッドにおいて検出された。

本住居址は、南北4.85m 東西4.8ｍのいびつな隅丸方形を呈し、床面積20.2m²を測り、南北軸方向はＮ－７°－Ｗを指す。壁高は、30～40cmを測る。壁溝は認められない。床面は、貼り床で全体にかなり硬質なものであった。

ピットは、P_1からP_4の四個のピットが対で認められた。P_1は50×45cm深さ60cm、P_2は55×45cm深さ70cm、P_3は45×35cm深さ37cm、P_4は50×40cm深さ76cmを測る。

遺物は、３の須恵器高台付坏が、カマド西脇の床面直上より正常位で出土している。この他遺物は、いず



第45図　Ｈ－９号住居址カマド実測図（Ｉ：40）

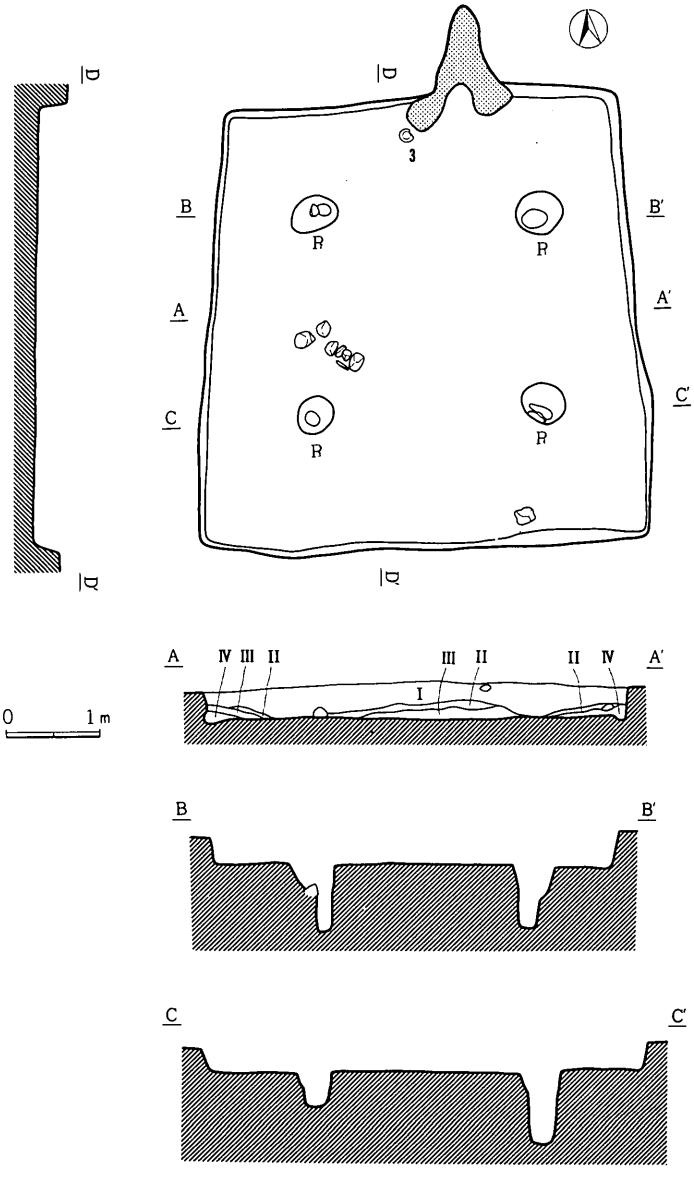
れも覆土中からの出土である。

覆土は、4層に分層され、埋土的な堆積状況を示していた。I層は黒褐色土層(10YR 3/1)でスコリアを多く小粒パミスを若干含み、II層は黄橙色ローム層(10YR 7/8)で黒色土粒子を若干含み、III層は黒色土層(10YR 2/1)でスコリアを多く含み、IV層は褐色土層(10YR 4/6)でローム粒子を多量に含む層であった。

カマド　第45図

カマドは、住居址の北壁中央よりやや東よりにあり、天井部と左右両袖の一部をとどめていた。また、東側の袖の芯には、面取り軽石がみられた。

本カマドの土層は、6層に分層された。1層は焼土等をまったく含まない黒色土層(7.5YR 2/1)、2層は焼土を多く含む鈍い橙色土層(7.5YR 7/4)、3層は若干の粘土が混じるカマドの構材である黒褐色土層(10YR 2/2)、4層はカマドの構材であるにぶい黄橙色粘土層(10YR 7/4)、5層はカマドの構材である褐灰色粘土層(10YR 6/1) 6層はカマドの構材で若干の焼土・灰を含む灰黄褐色土層(10YR 4/2)であった。



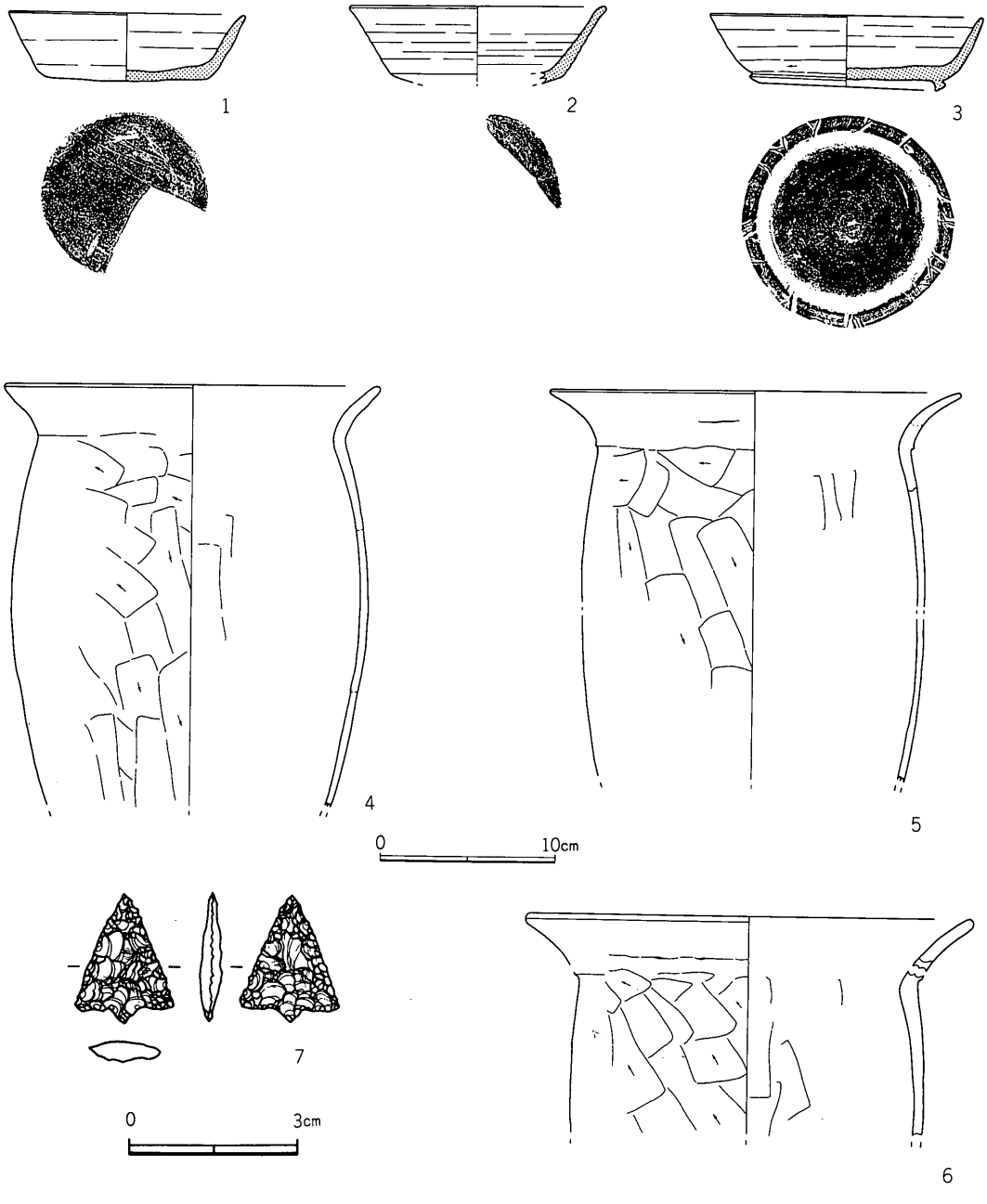
第46図　H－9号住居址実測図(1：80)

第12表　H－9号住居址出土遺物一覧表〈石器〉

挿図番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備　考
7	石　鏃	黒曜石	2.2	1.7	0.4	0.9	有茎

遺　物　第47図

遺物の出土量は、総じて少ないが、須恵器では坏・高台付坏・甕、土師器では甕が検出されて



第47図　Ｈ－９号住居址出土遺物（１～６＝１：４　７＝４：５）

いる。

１・２は回転ヘラキリによる須恵器坏で、このうち1は底部全面に手持ちヘラケズリがなされるものである。

４は、底部全面に回転ヘラケズリがなされる須恵器高台付坏である。

第13表　H－9号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1 (完)	坏 (須)	(13.5) 3.8 9.2	体部は外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。底部回転ヘラキリの後全面手持ちヘラケズリ 内面　ロクロヨコナデ。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み褐灰色 (10YR4/1)
2 (回)	坏 (須)	〈14.6〉 — 〈9.8〉	体部は外反する。	外面　体部ロクロヨコナデ。底部回転ヘラキリのまま未調整。 内面　ロクロヨコナデ。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み灰白色 (10Y8/1)
3 (完)	坏 (須)	15.5 4.0 11.2	体部は外反し、底部平底で、高台が貼り付けられる。	外面　体部ロクロヨコナデ。底部回転ヘラケズリ。切り離し方法不明。 内面　ロクロヨコナデ。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み灰白色 (N7/0)
4 (回)	甕 (土)	〈20.7〉 — —	口縁部はくの字状に外反し、あまり肩が張らず弓なりに下降する胴部へと続く。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含み明赤褐色 (5YR5/6)
5 (回)	甕 (土)	〈20.3〉 — —	口縁部はくの字状に外反し、あまり肩が張らず弓なりに下降する胴部へと続く。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みにぶい褐色 (7.5YR5/3)
6 (回)	甕 (土)	〈25.5〉 — —	口縁部はくの字状に外反し、胴部上半は直線的に下降する。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みにぶい橙色 (7.5YR6/4)

5・6は、くの字状口縁の土師器甕である。いずれもその口縁部に最大径をもつものである。

7は、黒曜石の両面加工の有茎石鏃である。

時　期

本住居址は、八世紀第Ⅰ四半期、十二遺跡第Ⅰ期に位置付けられよう。

(10)　H－10号住居址

住居址　第48図

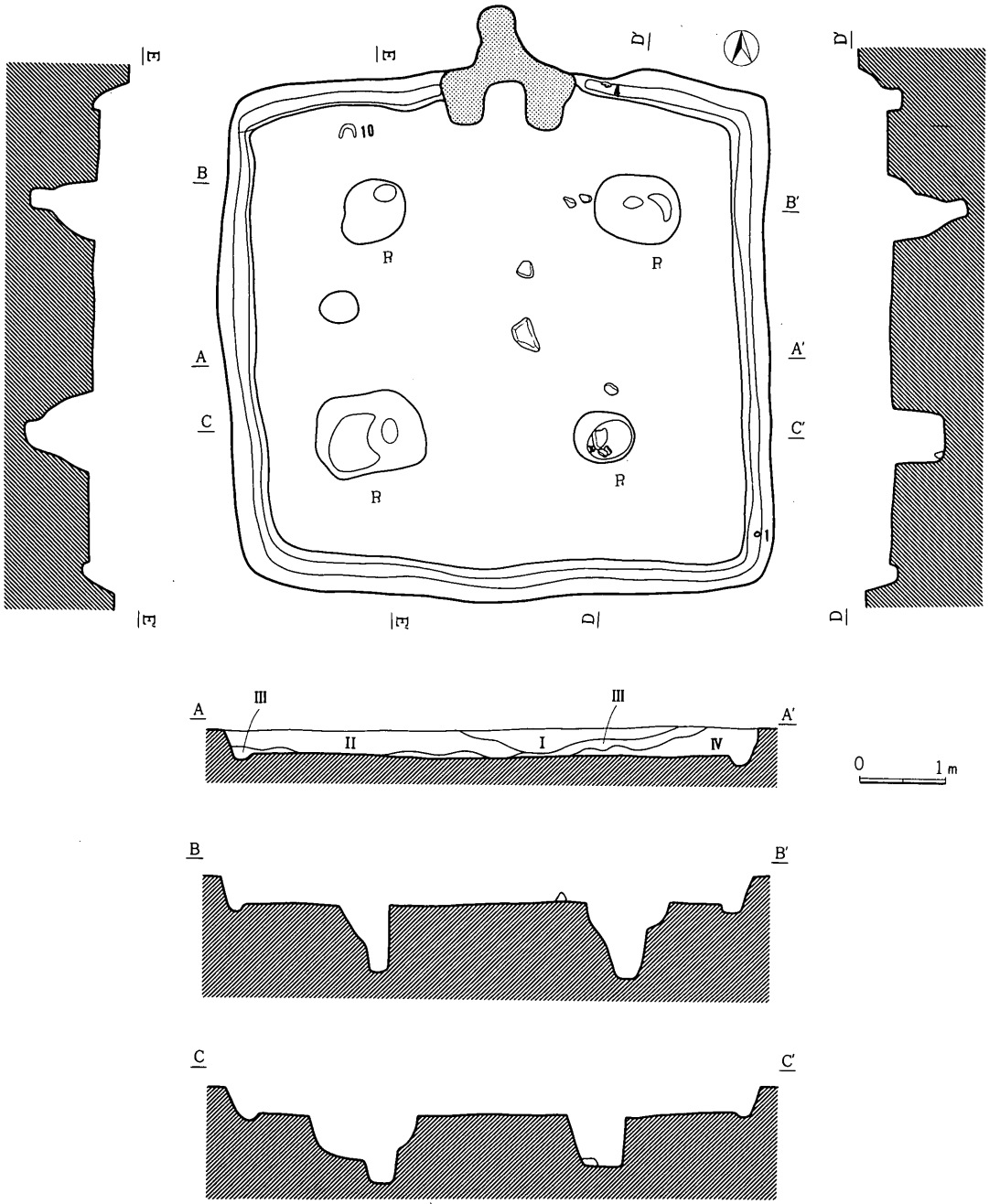
H－10号住居址は、第Ⅰ区ヒ－33グリッドにおいて検出された。

本住居址は、南北6.0m東西6.4mの隅丸方形を呈し、床面積28.9m²を測り、南北軸方向はN－11°－Wを指す。壁高は、30～35cmを測る。壁溝は，幅約20cm深さ10～15cmを測るものがほぼ全周する。床面は、貼り床で全体にかなり硬質なものであった。

ピットは、P_1からP_4の四個のピットが対で認められた。P_1は100×80cm深さ90cm、P_2は85×70cm深さ80cm、P_3は125×90cm深さ80cm、P_4は70×60cm深さ60cmを測る。その堀り方はいずれも大きいものであった。

遺物は、10の鋤鍬先が西北コーナーから、床面よりやや浮いて出土している。また、カマド東壁際からは、4の坏が出土した。この他の遺物は、いずれも覆土中からの出土である。

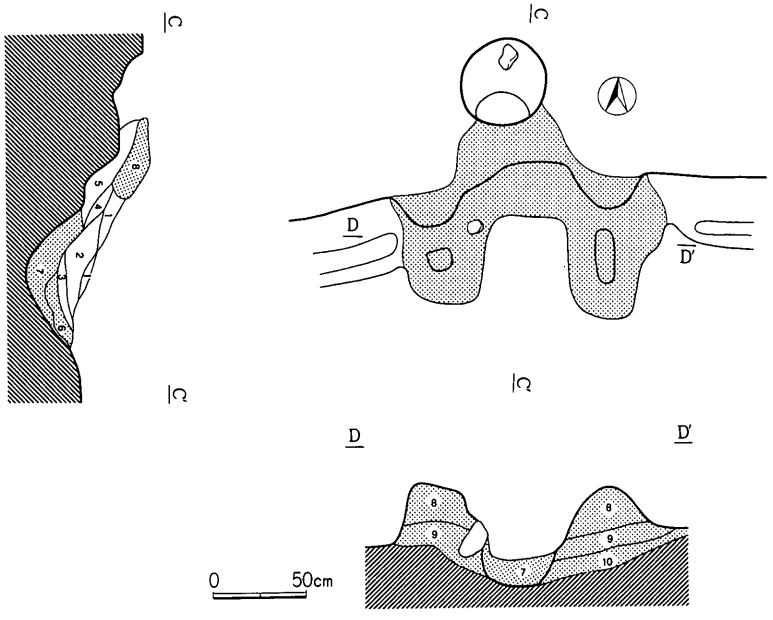
覆土は、4層に分層され、埋土的な堆積状況を示していた。Ⅰ層は黒褐色土層（10YR 2/2）でスコリア・小粒パミスを含み、Ⅱ層は暗褐色土層（10YR 3/3）でスコリア・小粒パミス・ローム



第48図　H－10号住居址実測図（1：80）

ブロックを含み、III層は大量のロームブロックで構成される明黄褐色土層（10YR 6/8）、IV層はローム粒子・パミスをよく含む褐色土層（10YR 4/4）であった。

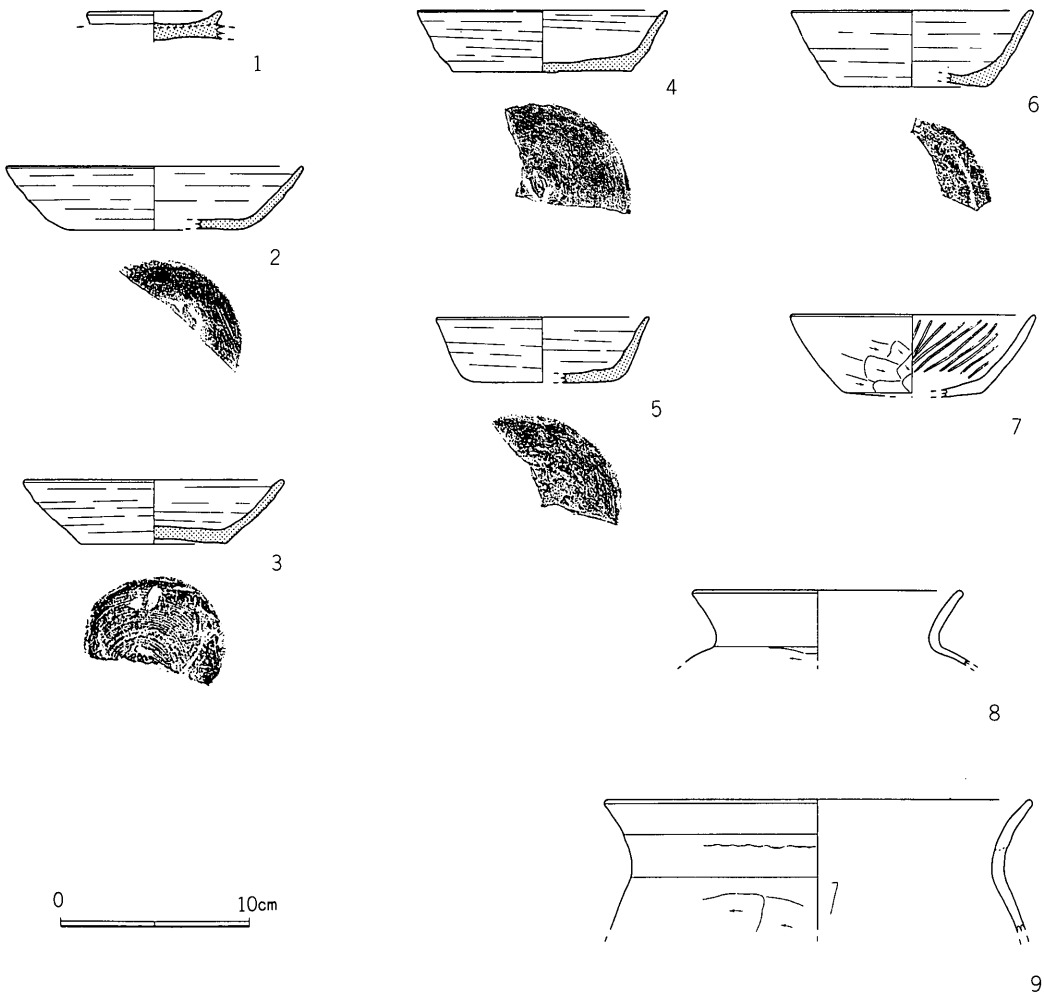
カマド　第49図



第49図　H－10号住居址カマド実測図（1：40）

第14表　H－10号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1（完）	蓋（須）	7.1 — —	偏平な皿状のつまみ部	外面　ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ （ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み灰白色（N7/0）
2（回）	坏（須）	〈15.6〉 3.3 〈9.0〉	体部は外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。底部回転ヘラキリの後手持ちヘラケズリ。 内面　ロクロヨコナデ（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み灰白色（10Y8/1）
3（回）	坏（須）	〈13.7〉 3.4 〈7.6〉	体部はは外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。底部回転糸切りのまま、未調整。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み灰色（N6/0）
4（回）	坏（須）	（13.2） 3.2 （9.4）	体部は外反し、底部平底の盤状の器形。	外面　体部ロクロヨコナデ。底部回転ヘラキリのまま未調整。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み灰白色（7.5YR8/1）～（7.5YR8/2）
5（回）	坏（須）	（11.2） 3.4 （7.4）	体部は外反し、底部平底の盤状の器形。	外面　体部ロクロヨコナデ。底部回転ヘラキリの後手持ちヘラケズリ。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み青灰色（5PB5/1）
6（回）	坏（須）	〈12.8〉 4.0 〈8.0〉	体部は外反し、底部平底の盤状の器形。	外面　体部ロクロヨコナデ。底部回転ヘラキリのまま未調整。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み灰白色（10Y7/1）
7（回）	坏（土）	〈13.0〉 4.3 〈7.0〉	体部は外反し、底部平底。	外面　口縁部ヨコナデ。体部下半～底部ヘラケズリ。 内面　ヨコナデの後、体部に放射状暗文。見込み部にラセン暗文を施す。	胎土は赤褐色の砂粒を特徴的に含みにぶい橙色（7.5YR7/4）
8（回）	甕（土）	〈14.3〉 — —	口縁部は強くくの字状に外反する。胴部は球状を呈するものと思われる。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。	胎土は砂粒を含みにぶい橙色を呈する。（5YR6/4）
9（回）	甕（土）	22.5 — —	口縁部はゆるくくの字状に外反する。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みにぶい橙色（5YR6/4）



第50図　H－10号住居址出土遺物（1：4）

カマドは、住居址の北壁中央にあり、天井部と左右両袖の一部をとどめていた。また、東側の袖には、礫が埋め込まれていた。

本カマドの土層は、10層に分層された。

1層はその構材に用いられいた粘土の崩落層である灰白色土層（10YR 8/2)、2層は焼土・カーボンを若干含むにぶい橙色土層（10YR 7/2)、3層は橙色焼土層（5 YR 6/8)、4層は焼土・粘土をよく含むにぶい橙色土層（5 YR 7/3)、5層は若干の粘土が混じる黒褐色土層（10YR 2/2）であった。

6層以下は、カマドの構築土である。

6層は焼土・粘土をよく含むにぶい橙色土層（5 YR 7/3)、7層は若干の粘土が混じる黒褐色土層（10YR 2/2)、8層は灰が多量に混じる橙色粘土層（7.5YR 7/6)、9層は若干の黒色土が混

第15表　H－10号住居址出土遺物一覧表〈鉄器〉

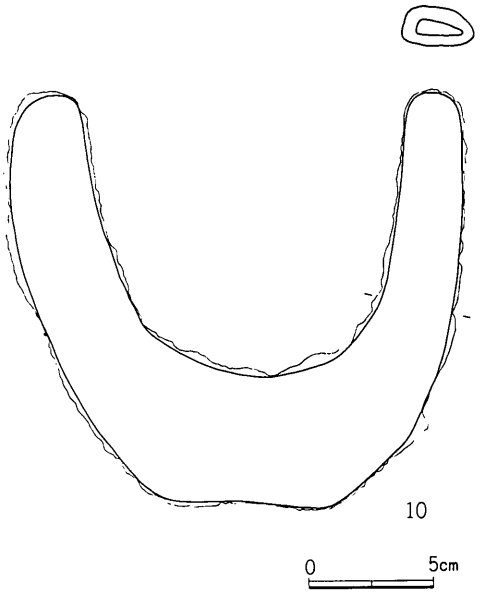
挿図番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備　考
10	鋤鍬先	鉄	16.3	5.4	1.6	(550)	

じる褐灰色粘土層(7.5YR 5/1)、10層はローム粒子をよく含む黒褐色土層（7.5YR 3/2）であった。

遺　物　第50・51図

遺物の出土量は、総じて少ないが、須恵器では蓋・坏・高台付坏・甕、土師器では坏・甕が検出されている。

1は、須恵器蓋の皿状のつまみ部である。2～6は、須恵器坏である。このうち3を除くものは、いずれも回転ヘラキリのまま未調整の底部をみせている。3は回転糸切りによる底部をみせるものであるが、他の遺物の状況からみておそらく混入品とみなされよう。7は、体部に放射状の暗文をもつ畿内系暗文土器である。底部がほとんど残っていないためわからないが、見込部にはラセン暗文をもつものと考えられよう。8は、土師器小形球胴甕である。9は、くの字状口縁の土師器甕である。10は、鉄製の鋤鍬先である。



第51図　H－10号住居出土遺物（1：3）

時　期

本住居址は、八世紀第II四半期、十二遺跡第II期に位置付けられよう。

(11)　H－11号住居址

住居址　第52図

H－11号住居址は、第I区ヒ－34グリッドにおいて検出された。

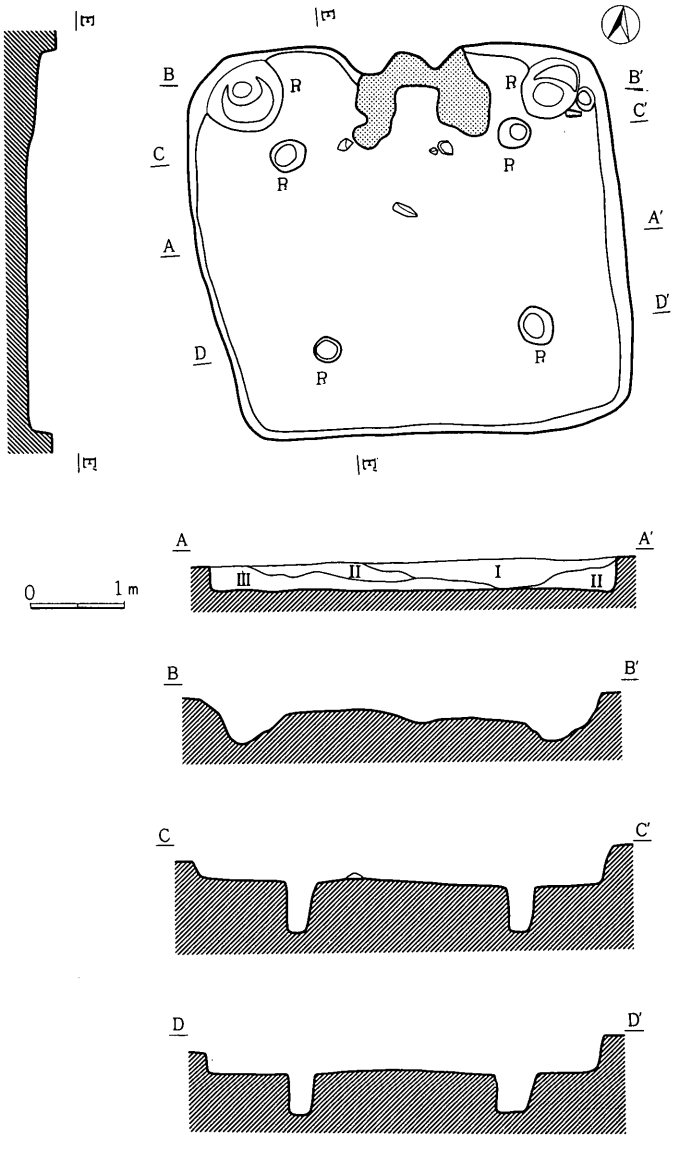
本住居址は、南北4.1m東西4.5mのややいびつな隅丸方形を呈し、床面積15.5m²を測り、南北軸方向はN－25°－Wを指す。壁高は、15～35cmを測る。壁溝は認められない。床面は、貼り床で全体にかなり硬質なものであった。

ピットは、P_1からP_4の四個のピットが対で認められた。また、東北コーナー・西北コーナーのそれぞれからP_5・P_6が検出された。P_1は35×35cm深さ45cm、P_2は40×35cm深さ52cm、P_3は30×28cm深さ45cm、P_4は42×35cm深さ45cmを測る。P_5は70×60cm深さ30cm、P_6は85×70cm深さ35cm

を測る。

遺物は、いずれも覆土中からの出土である。なお、東北コーナーには17cmを計る面取り軽石の支脚が残置されていた。

覆土は、3層に分層された。Ⅰ層は褐色土層（10YR 4/6）でローム粒子・スコリア・パミスを多く含み、Ⅱ層は黒褐色土層（10YR 3/2）でスコリアを多く含み、Ⅲ層はスコリア・パミスを多く含む褐色土層（10YR 4/3）であった。



第52図　H－11号住居址実測図（1：80）

カマド　第53図

カマドは、住居址の北壁中央にあり、左右両袖の一部をとどめているのみで、他の部分は破壊されていた。その東側の袖には、礫が埋め込まれていた。

本カマドの土層は、3層に分層された。1層はその構材に用いられいた粘土の崩落層である灰褐色土層（10YR 4/2）、2層は焼土・灰多量に含む褐色土層（10YR 4/4）、3層はカマドの構築土で焼土・灰を含まない褐灰色土層（10YR 6/1）であった。

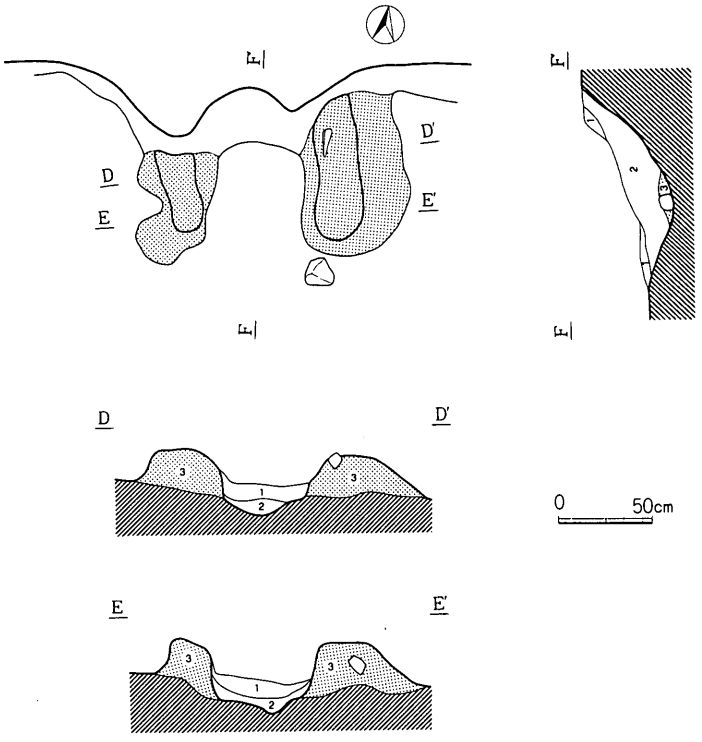
遺　物　第54図

遺物の出土量は、総じて少ないが、須恵器では坏・甕、土師器では坏・甕が検出されている。

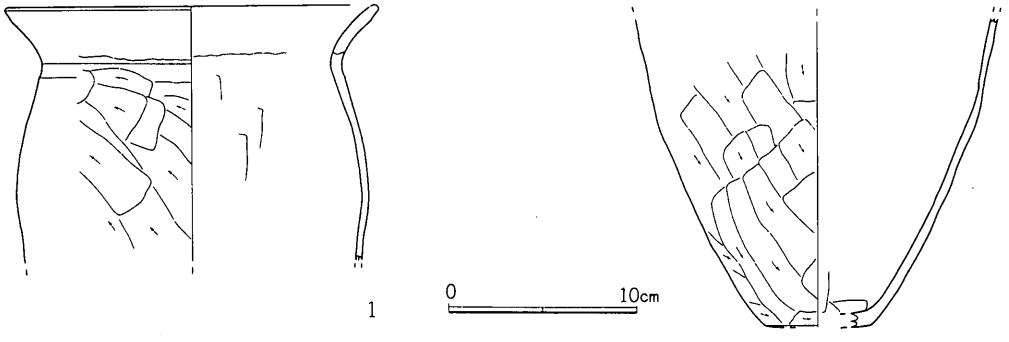
1は、くの字状口縁の土師器甕で、最大径を口縁部にもつものである。2も同様な甕の底部とみられる。

このほか図示できなかったが、体部に放射状の暗文をもつ畿内系暗文土器の破片も認められた。

時　期



第53図　H－11号住居址カマド実測図（1：40）



第54図　H－11号住居址出土遺物（1：4）

第16表　H－11号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1 (回)	甕 (土)	〈19.7〉 — —	口縁部はくの字状に外反する。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みにぶい橙色（5YR6/4）
2 (回)	甕 (土)	— — 〈5.5〉	胴下半部はゆるくすぼまり、平底に至る。	外面　胴部および底部ヘラケズリ。 内面　ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みにぶい橙色（5YR6/4）

本住居址は、八世紀前半代のものと考えられるが、所属期は不明である。

(12)　H－12号住居址

住居址　第55図

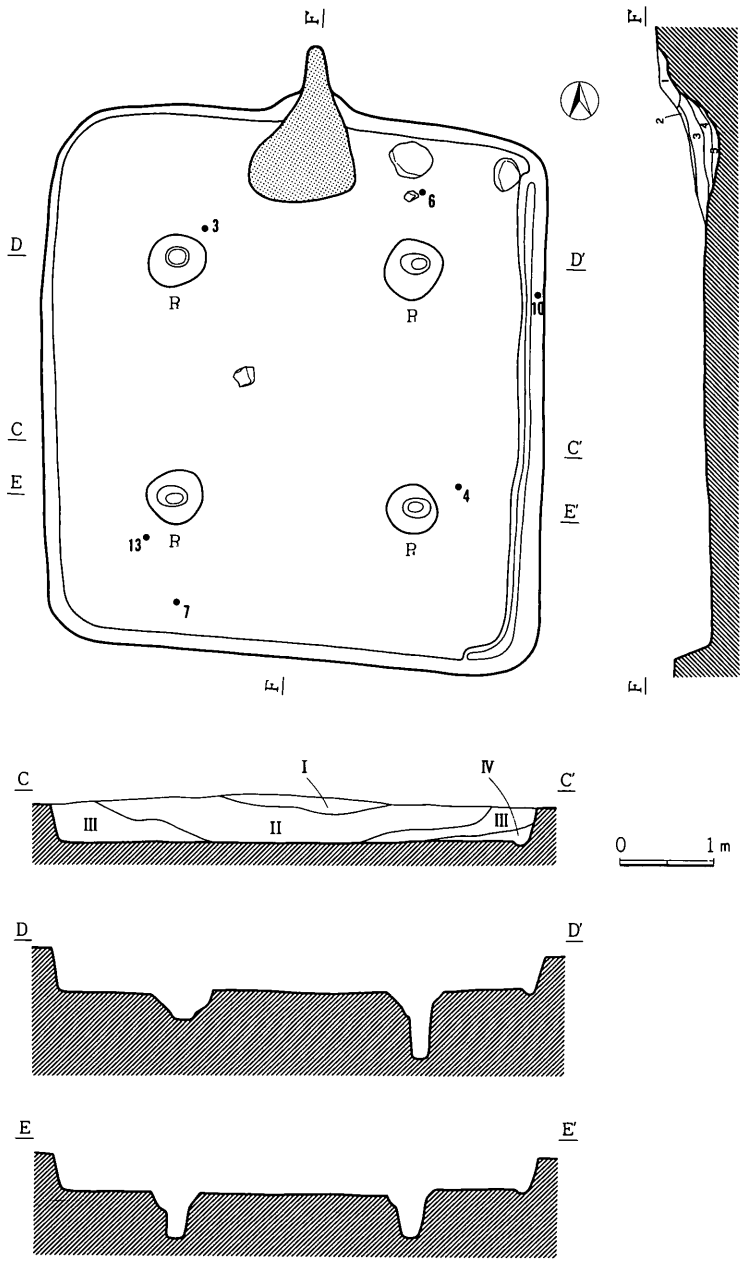
H－12号住居址は、第Ⅰ区ヒ－33・34グリッドにおいて検出され、H－41号住居址の大部分を切って存在している。

本住居址は、南北5.7m東西5.3mの隅丸方形を呈し、床面積26.1m²を測り、南北軸方向はN－3°－Wを指す。壁高は、35～45cmを測る。壁溝は東壁側のみに認められ、幅10～15cm深さ5～10cmを測る。床面は、貼り床で全体にかなり硬質なものであった。

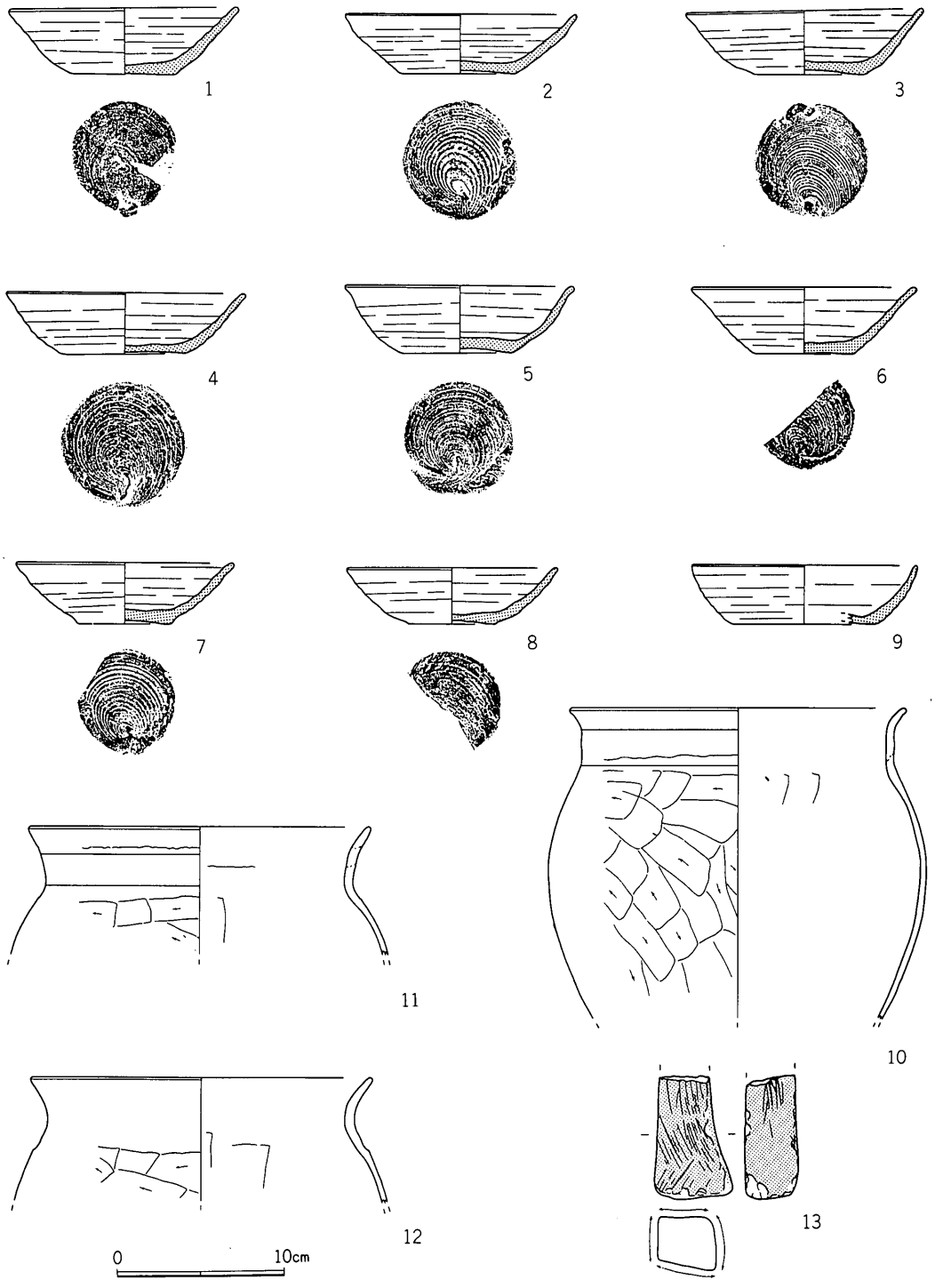
ピットは、P_1からP_4の四個のピットが対で認められた。P_1は65×65cm深さ70cm、P_2は60×55cm深さ30cm、P_3は60×55cm深さ45cm、P_4は50×50cm深さ50cmを測る。

遺物は、ドットで上げたものは、3・4・6・7・10・13である。このうち3・4・6は床面より20cm、7は5cm、10は13cm、13は2cmういた状態で検出された。この他の遺物は、いずれも覆土中からの出土である。

覆土は、4層に分層さ



第55図　H－12号住居址実測図（1：80）



第56図　H－12号住居址出土遺物（1：4）

第17表　H－12号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1（完）	坏（須）	13.7 4.0 6.2	体部は外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。底部回転糸切り、未調整 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒をよく含み灰白色（10Y7／1）
2（完）	坏（須）	13.8 3.5 6.9	体部は外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。底部回転糸切り、未調整 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒をよく含み灰白色（7.5Y7／1）
3（完）	坏（須）	14.2 3.8 6.6	体部は外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。底部回転糸切り、未調整 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	完全な環元炎焼成となっていない。にぶい褐色（7.5YR 6/4）
4（完）	坏（須）	14.3 3.7 7.0	体部は外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。底部回転糸切り、未調整 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を多く含み灰白色（7.5Y7／1）
5（完）	坏（須）	13.7 4.0 6.5	体部は外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。底部回転糸切り、未調整 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	完全な環元炎焼成となっていない。にぶい橙色（7.5YR7/3）
6（回）	坏（須）	(13.5) 4.0 (5.8)	体部は外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。底部回転糸切り、未調整 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み灰色（10Y6／1）
7（回）	坏（須）	(13.0) 3.6 5.6	体部は外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。底部回転糸切り、未調整 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み灰白色（10Y8／1）
8（回）	坏（須）	〈12.6〉 3.3 〈5.2〉	体部は外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。底部回転糸切り、未調整 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を多く含みオリーブ灰色(2.5GY6/1)
9（回）	坏（須）	〈13.5〉 3.5 〈8.5〉	体部は外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。底部回転ヘラキリ、未調整 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み灰白色（N 7／0）
10（回）	甕（土）	〈20.1〉 — —	口縁部はコの字状に外反し、胴部は上半でふくらむ。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は比較的精選され、焼成良好で、赤褐色（5YR4／8）
11（回）	甕（土）	〈20.3〉 — —	口縁部は僅かコの字状に外反する。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みにぶい橙色（7.5YR7／4）
12（回）	甕（土）	〈20.4〉 — —	口縁部はくの字状に外反する。 あるいは11と同一個体か。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みにぶい橙色（7.5YR7／4）

第18表　H－12号住居址出土遺物一覧表〈石器〉

挿図番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
13	砥石	砂岩	(7.4)	4.7	3.2	(160)	一部欠損

れた。Ⅰ層は黒褐色土層（10YR 3/1）で小粒パミスを含み、Ⅱ層は中粒パミスを多量に含む黒色土層（10YR 2/1）、Ⅲ層は小粒パミス・ローム粒子含む褐色土層（10YR 4/4）、Ⅳ層はローム粒子を含む黒褐色土層（10YR 3/1）であった。

カマド

カマドは、住居址の北壁中央にあるが、ほぼ全体を破壊されていた。その構材に用いられていたと考えられる安山岩礫が数個住居内に残っていた。

本カマドの土層は、5層に分層された。1層は焼土・灰を多量に含む灰白色土層（10YR 7/1）、2層は焼土・灰よく含む褐灰色土層（10YR 5/1）、3層は灰を若干含む黒褐色土層（10YR 3/

1)、4層は灰をよく含む黒褐色土層（10YR 2/2)、5層は焼土層で黄褐色土層（10YR 5/8）であった。

遺　物　第56図

遺物は、須恵器では蓋・坏・甕、土師器では坏・甕が検出されている。

1～9は、須恵器坏である。このうち切り離し方法の不明な9を除くすべては、回転糸切りのまま未調整の底部をみせている。

10・11はコの字状口縁の土師器甕で、最大径を胴部上半にもつものである。12の口縁は完全なコの字とはなっていないが、やはり同様な甕とみられる。

このほか図示できなかったが、内面黒色の土師器坏底部も認められた。

石器では、13の砥石が検出されている。

時　期

本住居址は、九世紀前葉、十二遺跡第Ⅴ期に位置付けられよう。

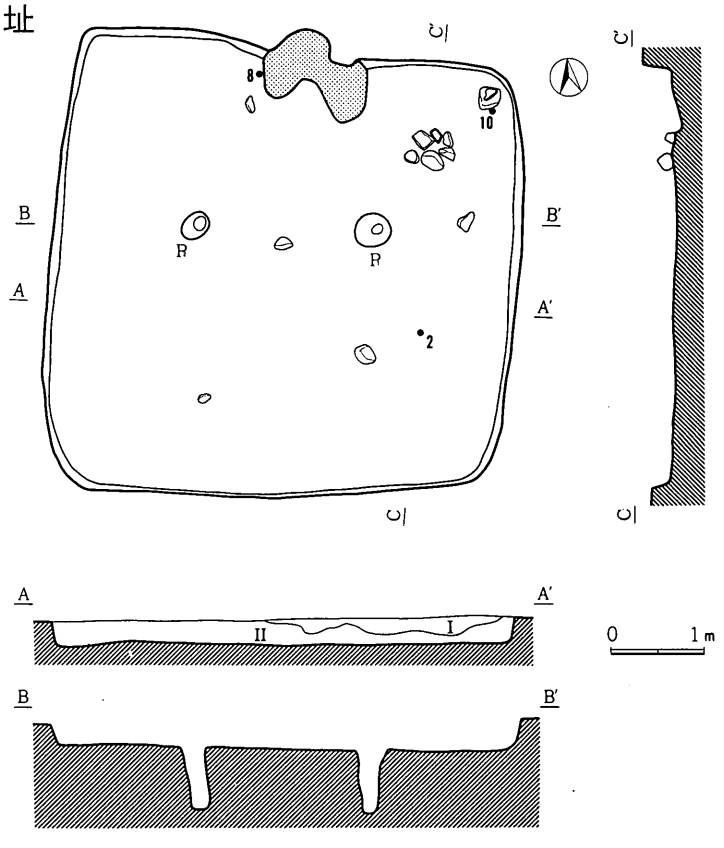
(13)　H－13号住居址

住居址　第57図

H－13号住居址は、第Ⅰ区ヒ－33・34グリッドにおいて検出された。

本住居址は、F－16・F－17号の2基の堀立柱建物址と重複するが、この三者の切り合い関係は非常に微妙で、把握することが困難であった。あるいはF－16・F－17は、本址に先行する可能性が考えられよう。

本住居址は、南北4.9m東西5.0mのいびつな隅丸方形を呈し、床面積21.3m²を測り、南北軸方向はN－0°－Sを指す。壁高は、



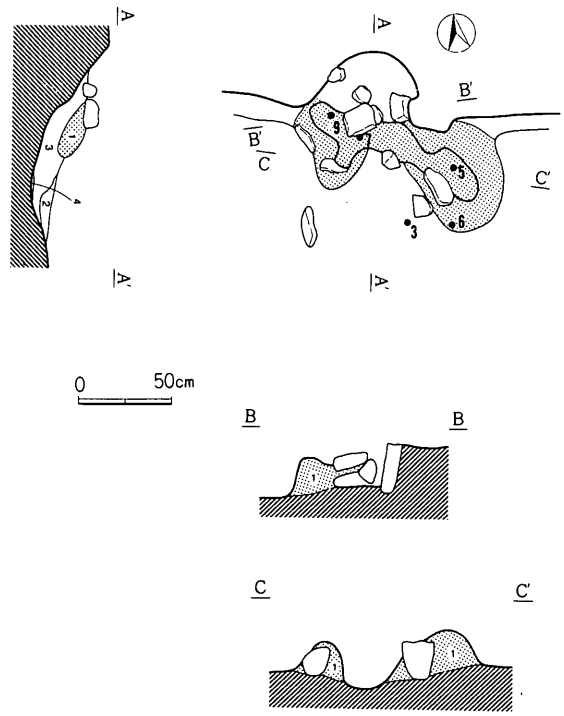
第57図　H－13号住居址実測図（1：80）

20～30cmを測る。壁溝は認められない。床面は、全体に硬質で薄い貼り床となっている。

ピットは、P_1・P_2の二個のピットが対で認められた。P_1は40×35cm深さ65cm、P_2は33×25cm深さ65cmを測る。

遺物は、２の須恵器坏が第Ⅳ区床面上より16cm浮いて、８の須恵器坏がカマド西脇の床面上より、10の土師器高台付皿が東北コーナーの床面直上より出土している。この他遺物は、いずれも覆土中からの出土である。

覆土は、２層に分層された。Ⅰ層は小粒パミス・スコリアを多量に含む暗褐色土層（10YR 3/3）Ⅱ層は小粒パミス・スコリアをよく含む黒褐色土層（10YR 2/3）であった。



第58図　Ｈ－13号住居址カマド実測図（１：40）

カマド　第58図

カマドは、住居址の北壁中央にあり、天井部と左右両袖の一部をとどめていた。また、左右両袖の芯には、面取り軽石と安山岩が埋められていた。また、その各所にカマドの構材である面取り軽石が露呈していた。

カマド本体の上部からは、５・６・７の須恵器坏が出土している。また、その前庭部からは３の須恵器坏が出土した。

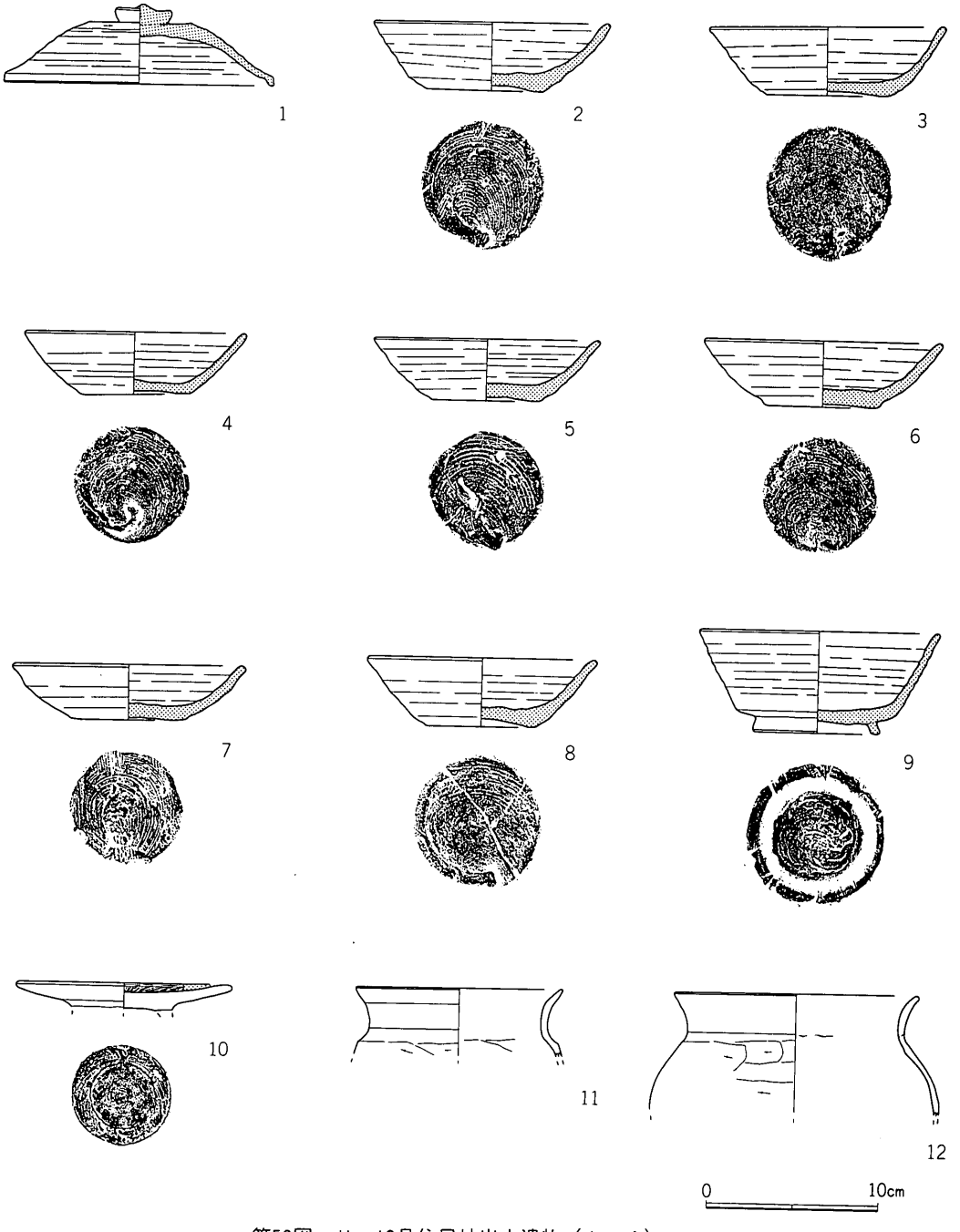
本カマドの土層は、４層に分層された。1層は若干の粘土が混じるカマドの構材である褐灰色土層（10YR 4/1）、２層は１層の崩落層と考ええられる褐灰色土層（10YR 4/1）、３層は焼土・灰・カーボンをまったく含まない黒色土層（10YR 2/1）、４層は明赤褐色焼土層（2.5YR 5/8）であった。

遺　物　第59・60・61図

遺物の出土量は、他の住居址とくらべて多い。須恵器では蓋・坏・高台付坏・甕・四耳壺、土師器では坏・高台付皿・甕が検出されている。

1は須恵器蓋で、宝珠ツマミの貼り付けられる平坦な天井部には回転糸切り痕を残している。

２～８は、回転糸切り未調整の底部をみせる須恵器坏である。



第59図　H－13号住居址出土遺物（1：4）

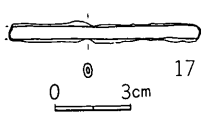
9は、底部に回転糸切り痕をみせる須恵器高台付坏である。

10は、内面黒色研磨のなされた土師器高台付皿である。

11・12は土師器小形甕である。

第19表　Ｈ－13号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

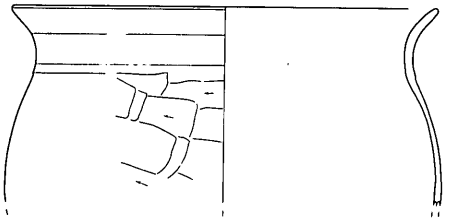
挿図番号	器重	法量	器形の特徴	調整	備考
1（回）	蓋（須）	3.3 4.6 15.7	平らな天井部に、擬宝珠形のつまみ部が貼り付けられる。	外面　ロクロヨコナデ。天井部には回転糸切り痕が残る。体部と天井部の変換点には手持ちヘラケズリがなされる。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を多く含み灰白色（10Y7／1）
2（完）	坏（須）	13.8 3.9 6.8	体部は外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。底部回転糸切り、未調整 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は精選されず砂粒を多く含み灰白色（10Y7／1）
3（完）	坏（須）	13.8 4.0 7.4	体部は外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。底部回転糸切り、未調整 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は精選されず砂粒を多く含み灰色（7.5Y6／1）
4（完）	坏（須）	12.9 3.6 6.4	体部は外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。底部回転糸切り、未調整 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み灰色（N5／0）
5（回）	坏（須）	(13.2) 3.6 6.5	体部は外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。底部回転糸切り、未調整 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は精選されず砂粒を多く含み灰色（N6／0）
6（回）	坏（須）	(13.9) 3.8 6.9	体部は外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。底部回転糸切り、未調整 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は精選されず砂粒を多く含み灰白色（10Y8／1）
7（回）	坏（須）	〈13.6〉 3.3 6.3	体部は外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。底部回転糸切り、未調整 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は精選されず砂粒を多く含み灰白色（7.5Y7／1）
8（回）	坏（須）	〈13.4〉 4.1 6.4	体部は外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。底部回転糸切り、未調整 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は精選されず砂粒を多く含み浅黄橙色(10YR8/3)又完全な還元炎焼成となっていない
9（完）	坏（須）	14.0 6.0 7.4	体部は直線的に外反し、底部には高台が貼り付けられる。	外面　体部ロクロヨコナデ。底部回転糸切りの後、高台部貼り付け 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み灰色（10Y6／1）
10（完）	皿（土）	12.5 — —	皿部は偏平な盤状を呈する。底部には高台が貼り付けられたものと考えられる。	外面　体部ロクロヨコナデ。底部回転糸切りの後、高台部貼り付け 内面　放射状のヘラミガキの後、黒色処理（ロクロ右回転）	胎土は比較的精選され、浅黄橙色（7.5YR8/6）
11（回）	甕（土）	(12.1) — —	口縁部は僅かコの字状に外反する小形な器形。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みにぶい褐色（7.5YR5／4）
12（回）	甕（土）	(14.2) — —	口縁部はゆるく外反し、胴部球状を呈する小形な器形。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。	胎土は砂粒を含み明赤褐色（5YR5／6）
13（回）	甕（土）	〈22.6〉 — —	口縁部は僅かコの字状に外反する。胴部はゆるく膨らむ。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含み明褐色を呈する(7.5YR5/6)
14（回）	甕（土）	〈21.3〉 — —	口縁部は丸味を帯びて外反し、胴部は球状に膨らむ。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含み明赤褐色（5YR5／6）
15（回）	甕（土）	〈19.5〉 — —	口縁部はコの字状に外反し、胴部上半に最大径がくる肩の張った器形。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みにぶい黄橙色（10YR7/3）
16（回）	甕（土）	〈21.5〉 — —	口縁部は短く強く外反し、胴部は比較的直線的に下降する。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含み明赤褐色（5YR5／6）



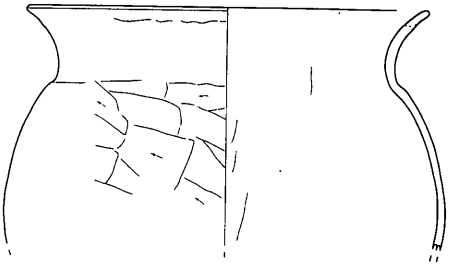
第60図　Ｈ－13号住居址出土遺物（１：３）

第20表　Ｈ－13号住居址出土遺物〈鉄器〉

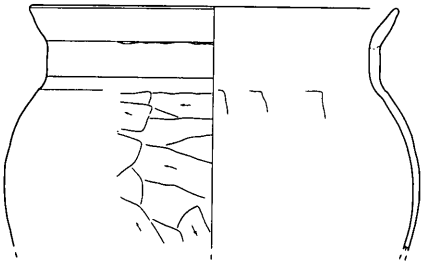
挿図番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
17	鉄鏃？	鉄	(7.5)	0.5	0.3	(6.3)	基部



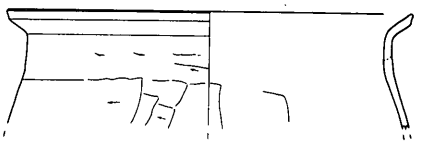
13



14



15



16

0　10cm

第61図　H－13号住居址出土遺物実測図（1：4）

13・15・16は、コの字状口縁の土師器甕である。いずれもその胴上半部に最大径をもつものである。

この他、須恵器四耳壺・土師器坏が検出されているが、双方とも図示しえなかった。

17は、鉄鏃の基部と考えられるものである。

時　期

本住居址は、九世紀前葉、十二遺跡第Ⅴ期に位置付けられよう。

(14)　H－14号住居址

住居址　第62図

H－14号住居址は、第Ⅰ区ヒ－34グリッドにおいて検出された。

本住居址は、H－15号住居址と重複とはいえないまでも、きわめて近接して存在している。

本住居址は、南北5.7m東西4.95mの隅丸方形を呈し、床面積23.0m²を測り、南北軸方向はN－2°－wを指す。壁高は、20～30cmを測る。壁溝は、南壁において60cmほどとぎれるのみで、ほぼ住居を全周する。床面は、全体に平坦で硬質な貼り床となっている。

ピットは、P_1からP_4の四個のピットが対で認められた。P_1は42×32cm深さ52cm、P_2は40×40

cm深さ60cm、P_3は43×40cm深さ40cm、P_4は40×35cm深さ34cmを測る。

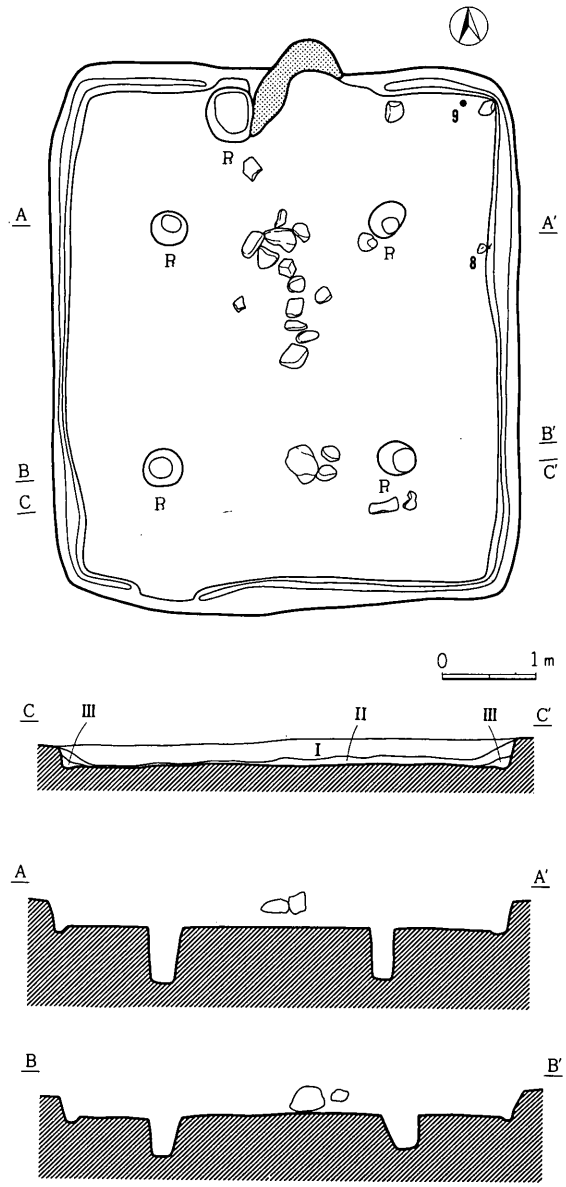
遺物は、8の土師器高台付皿が第Ⅰ区東壁際の張り床中より、9の土師器高台付皿が東北コーナーの張り床中より出土している。この他遺物は、いずれも覆土中からの出土である。

覆土は、3層に分層された。Ⅰ層は小粒パミス・スコリアを多く含む黒褐色土層（10YR 2/3）、Ⅱ層は小粒パミス・スコリアを含む黒色土層（10YR 2/1）、Ⅲ層はローム粒子を多く含む暗褐色土層（10YR 3/3）であった。

カマド　第63図

カマドは、住居址の北壁中央にあるが、その大半は破壊されており、僅かに左袖の一部をとどめているのみであった。住居址の床面には、その構材である面取り軽石と安山岩礫が30個近く散乱している状況にあった。カマドの左袖前方の張り床中からは、13の刀子が出土している。

本カマドの土層は、4層に分層された。1層は若干の粘土・焼土が混じる暗褐色土層（10YR 3/4）、2層は粘土を多く含むにぶい黄褐灰色土層（10YR 5/4）、3層は黄褐色焼土層（10YR 5/8）、4層は若干の粘土が混じるカマドの構材である暗褐色土層（10YR 3/3）であった。



第62図　H－14号住居址実測図（1：80）

遺　物　第64・65・66図

遺物の出土量は、他の住居址とくらべて多くない。須恵器では蓋・坏・高台付坏・甕・四耳壺、土師器では坏・高台付皿・甕が検出されている。

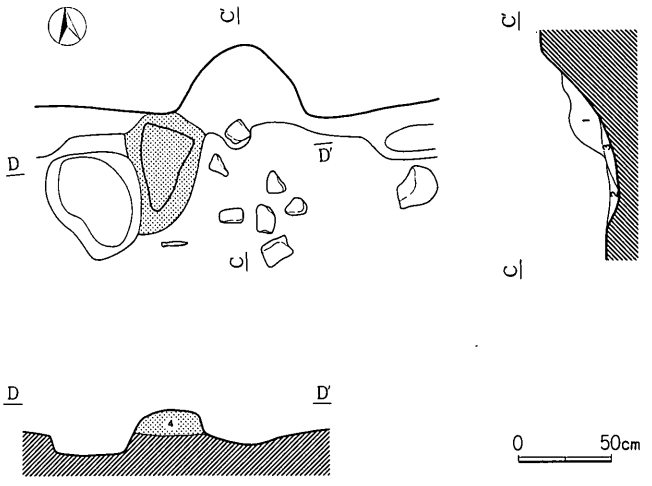
1は須恵器蓋で、宝珠ツマミの貼り付けられるものである。

2～4は、回転糸切り未調整の底部をみせる須恵器坏である。

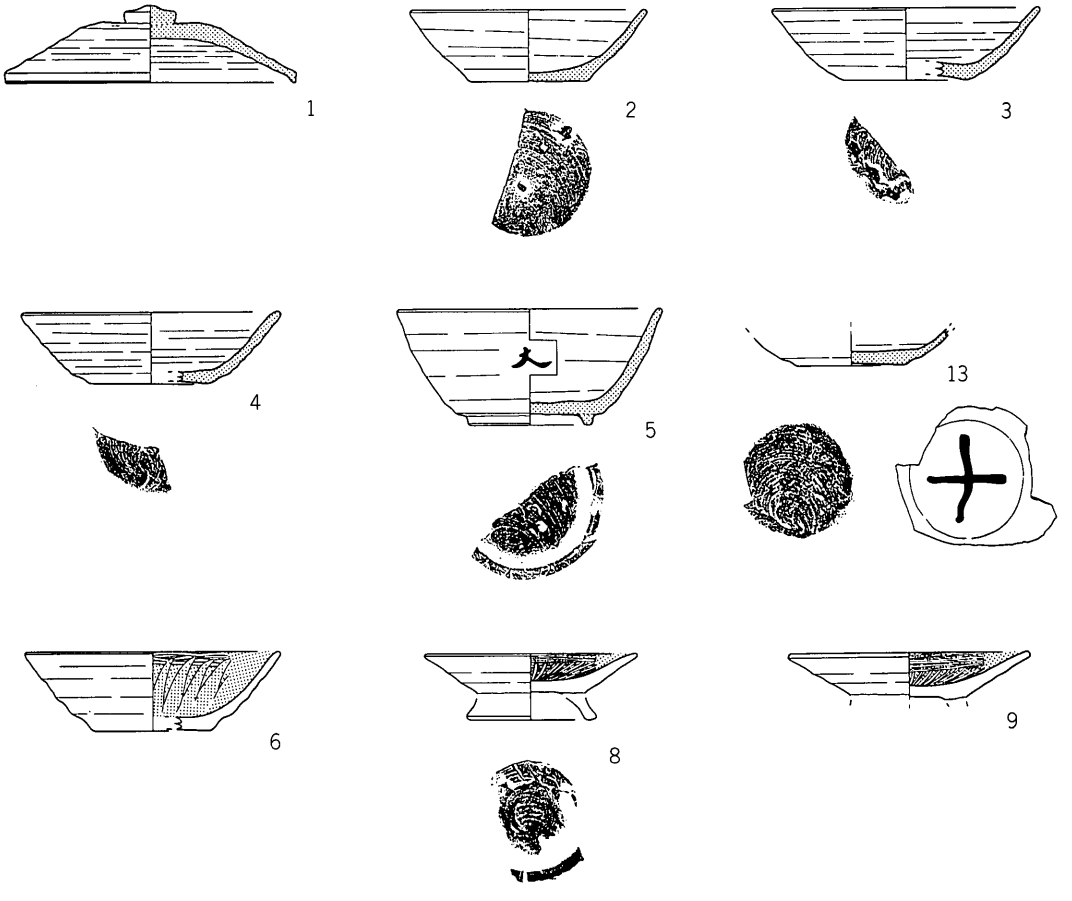
5は、底部に回転糸切り痕をみせる須恵器高台付坏である。高台部は転用硯となっており、墨の付着が著しい。また、体部には「大」の墨書がみられる。

6・7は、内面黒色研磨のなされたロクロ土師器坏である。

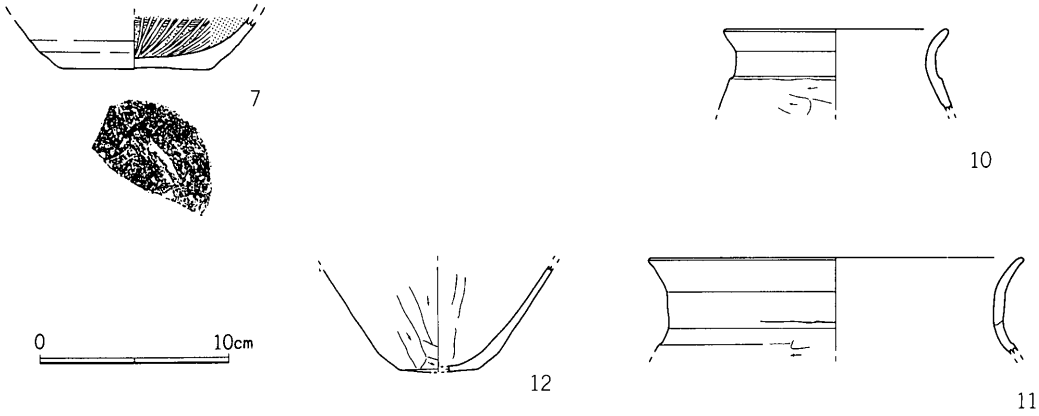
8・9は、内面黒色研磨のなされた土師器高台付皿である。



第63図　H－14号住居址カマド実測図（1：40）



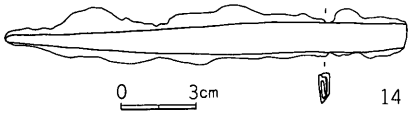
第64図　H－14号住居址出土遺物（1：4）



第65図　Ｈ－14号住居址出土遺物（１：４）

第21表　Ｈ－14号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1（回）	蓋（須）	2.7 4.1 〈15.4〉	つまみ部は偏平な擬宝球形を呈する。	外面　ロクロヨコナデ。天井部回転ヘラケズリ。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み灰色(10Y6/1)墨書？あり
2（回）	坏（須）	(12.6) 3.9 6.4	体部は外反し、底部平底。	外面　ロクロヨコナデ。底部回転糸切りのまま、未調整 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み灰色（10Y6／1）
3（回）	坏（須）	〈14.2〉 3.9 〈6.6〉	体部は外反し、底部平底。	外面　ロクロヨコナデ。底部回転糸切り、未調整 ロクロヨコナデ。 （ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み灰白色（10Y8／1）
4（回）	坏（須）	〈13.7〉 3.8 〈6.4〉	体部は外反し、底部平底。	外面　ロクロヨコナデ。底部回転糸切り、未調整 内面　ロクロヨコナデ。 （ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み灰白色（10Y8／1）
5（回）	坏（須）	(14.1) 6.2 (7.6)	体部は外反し、底部平底。 底部には高台が貼り付けられる。	外面　ロクロヨコナデ。底部回転糸切り 内面　ロクロヨコナデ。 （ロクロ右回転）	底部には墨の付着があり転用硯と考えられる。体部に「大○」の墨書あり
6（回）	坏（土）	〈13.5〉 4.2 〈6.4〉	体部は外反し、底部平底。	外面　ロクロヨコナデ。底部回転糸切り未調整 内面　ロクロヨコナデの後、黒色研磨 菊花状の暗文がみられる。 （ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含みにぶい黄橙色（10YR7／4）
7（回）	坏（土）	— — (7.8)	体部はゆるく外反し、底部平底。	外面　ロクロヨコナデ。底部手持ちヘラケズリ （切り離し方法不明） 内面　黒色研磨。（ロクロ左回転）	胎土は砂粒を含みにぶい黄橙色（10YR7／4）
8（回）	皿（土）	(11.3) 3.5 〈6.8〉	体部は外反し、底部には高台が貼り付けられる。	外面　ロクロヨコナデ。底部回転糸切りの後、高台部貼り付け 内面　黒色研磨。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含みにぶい橙色（7.5YR6／4）
9（完）	皿（土）	12.8 — —	体部は外反し、底部には高台が貼り付けられたものと思われる。	外面　ロクロヨコナデ。底部切り離し方法不明 内面　黒色研磨。 （ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含みにぶい黄橙色（10YR7／4）
10（回）	甕（土）	〈11.9〉 — —	口縁部はコの字状に外反する。	外面　口縁部ヨコナデ。 胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。	胎土は砂粒を含み橙色（5YR6／8）
11（回）	甕（土）	〈19.8〉 — —	口縁部は僅かコの字状に外反する。	外面　口縁部ヨコナデ。 内面　口縁部ヨコナデ。	胎土は砂粒を含み橙色（7.5YR6/6）
12（回）	甕（土）	— — 〈4.1〉	底部平底。	外面　ヘラケズリ。 内面　ヘラナデ。	胎土は砂粒を含み明赤褐色（5YR5/8）
13（完）	杯（須）	— — 5.8	底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。底部回転糸切り未調整。 内面　ロクロヨコナデ。 （ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み灰白色（10Y7/1）底部に「＋」の墨書あり。



第66図　H－14号住居址出土遺物（1：3）

第22表　H－14号住居址出土遺物一覧表〈鉄器〉

挿図番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備　考
14	刃子？	鉄	(15.9)	1.2	0.4	(52.0)	一部欠損

10はコの字状口縁の土師器小形甕である。11も、コの字状口縁の土師器甕である。

13は、底部に回転糸切り痕をみせ、「十」の墨書がみられる須恵器坏である。

14は、錆の付着が著しく形態がよくとらえられないが、刀子と考えられよう。

時　期

本住居址は、九世紀前葉、十二遺跡第Ⅴ期に位置付けられよう。

(15)　H－15号住居址

住居址　第67図

H－15号住居址は、第Ⅰ区ヒ－34グリッドにおいて検出された。

本住居址は、H－14号住居址と重複とはいえないまでも、きわめて近接して存在している。

本住居址は、南北5.9m東西5.95mの隅丸方形を呈し、床面積26.7m²を測り、南北軸方向はN－12°－wを指す。壁高は、40～50cmを測る。壁溝は、西北コーナーおいてとぎれるが、それ以外はほぼ住居を巡っており、幅20～25cm、深さ10cmを測る。床面は、全体にあまり硬質でない、薄い貼り床となっている。また、南壁際には、入り口部と何らかの関係があるのであろうか平石が認められた。

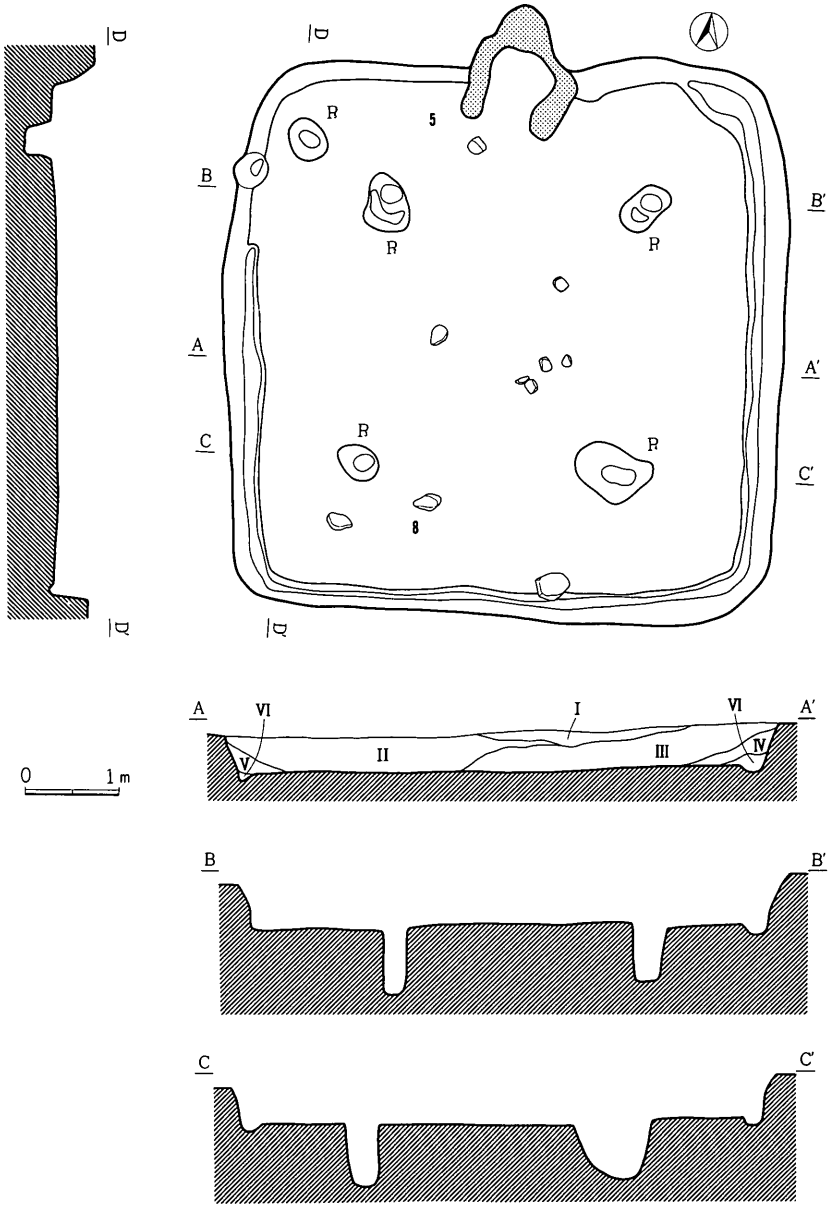
ピットは、P_1からP_4の四個のピットが対で認められた。また、西北コーナーおいてはP_5が認められた。P_1からP_4の四個は主柱穴、P_5はいわゆる粘土土坑かと考えられる。

P_1は60×33cm深さ56cm、P_2は65×50cm深さ70cm、P_3は48×35cm深さ64cm、P_4は85×55cm深さ60cm、P_5は45×38cm深さ28cmを測る。

遺物は、5の土師器坏がカマド西脇の床面直上より、8の須恵器甕が第Ⅲ区南壁際の床面直上より出土している。この他遺物は、いずれも覆土中からの出土である。

覆土は、6層に分層された。

Ⅰ層は小粒パミス・スコリアを多く含む黒色土層（10YR 2/1)、Ⅱ層は小粒パミス・スコリア・ローム粒子を多く含む暗褐色土層（10YR 3/3)、Ⅲ層は小粒パミス・スコリアを多く含む黒褐色土層（10YR 2/2)、Ⅳ層は小粒パミス・スコリアを多く含む黒色土層（10YR 1.7/1)、Ⅴ層は小粒パミス・スコリアを含む黒色土層（10YR 2/1)、Ⅵ層は小粒パミス・スコリア・ローム粒子を

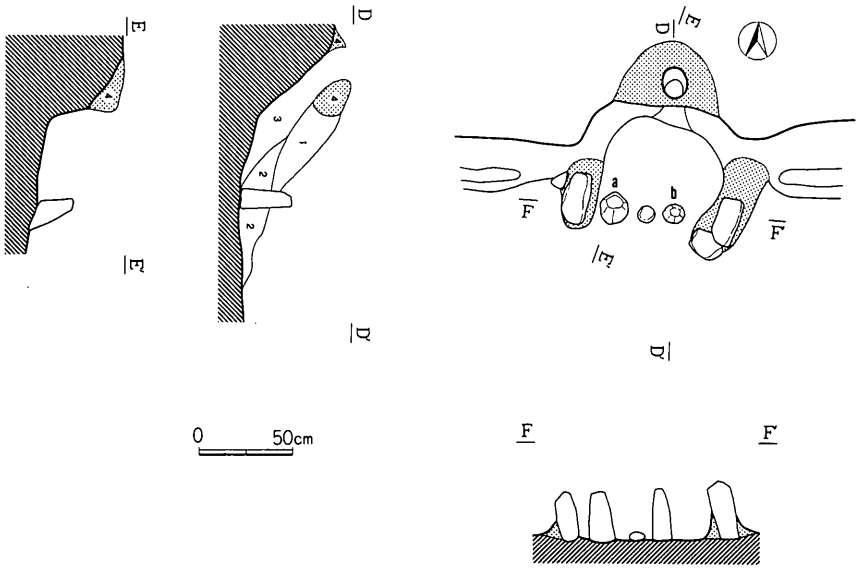


第67図　H－15号住居址実測図（1：80）

多く含む褐色土層（10YR 4/4）であった。

カマド　第68図

カマドは、住居址の北壁中央にあり、その天井部は破壊されていたが、左右両袖の一部と煙道部天井、支脚石（a・b）をとどめていた。また、住居址の床面には、その構材である面取り軽石と安山岩礫の一部が散乱している状況にあった。カマドの左右両袖の芯と支脚石には、角柱状



第68図　H－15号住居址カマド実測図（1：40）

に面取りのなされた軽石が据えられていた。

本カマドの土層は、4層に分層された。1層は、4層の崩落層と考えられる褐色粘土層(7.5YR 4/6)、2層は焼土を多く含み若干の粘土の混じる暗褐色土層(7.5YR 3/4)、3層は焼土を多く含み若干の粘土の混じる暗褐色土層（7.5YR 3/4)、4層はカマドの構材である焼けた褐色粘土層（7.5YR 4/6）であった。

遺　物　第69・70図

遺物は、須恵器では蓋・坏・高台付坏・甕、土師器では坏・甕が検出されている。

1は須恵器蓋の皿状のツマミ部分である。

2～4は、須恵器坏である。2・3は回転ヘラキリの後底部全面に手持ちヘラケズリのなされたもの、4は切り離し方法不明で底部全面に手持ちヘラケズリのなされたものである。

5は、内面黒色研磨のなされた完形のロクロ土師器坏で、底部全面に手持ちヘラケズリがなされているためその切り離し方法は不明である。その内面には有機物の付着が認められる。

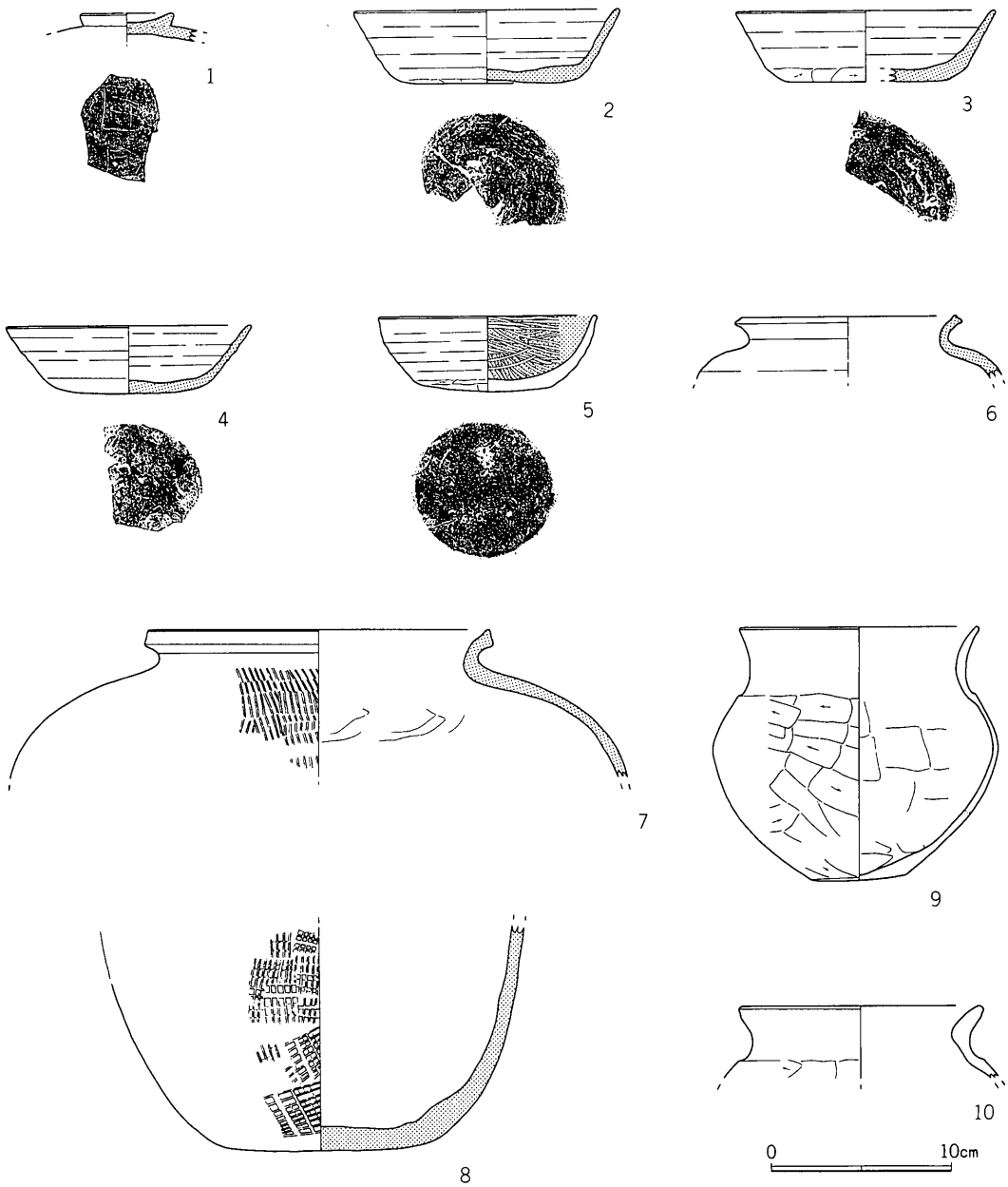
6・7は帯状の口唇部をみせる須恵器甕で、同一形態で法量の異なるものである。

9・10は土師器小形甕である。

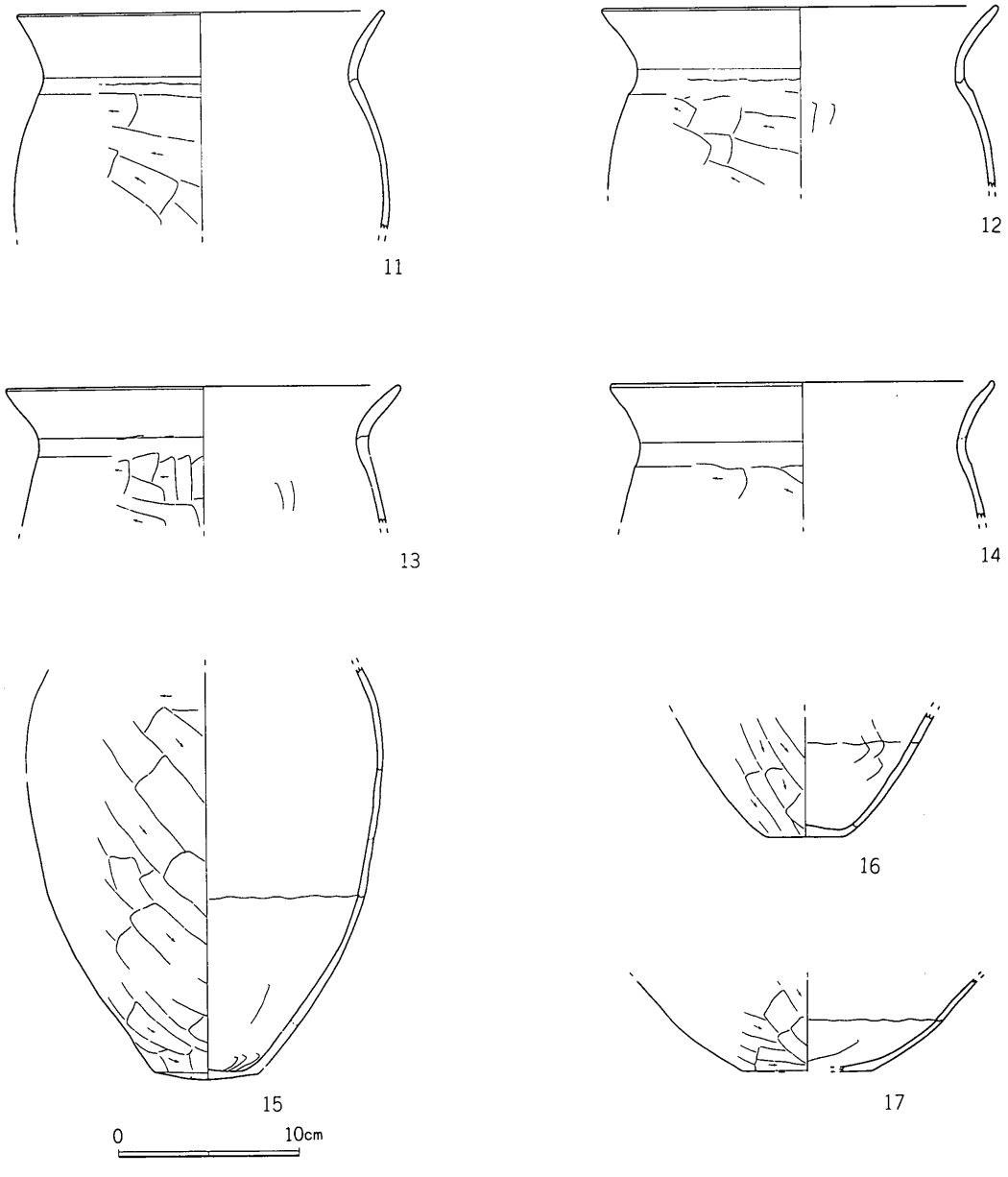
11～14はくの字状口縁の土師器甕で、15・16はその胴部以下と考えられるものである。

時　期

本住居址は、八世紀第II四半期、十二遺跡第II期に位置付けられよう。



第69図　H－15号住居址出土遺物（1：4）



第70図　H－15号住居址出土遺物（1：4）

第23表　H－15号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1 (回)	蓋 (須)	5.2 — —	つまみ部は偏平な皿状を呈する。	外面　ロクロヨコナデ。 内面　ロクロヨコナデ。 （ロクロ右回転）	胎土は灰白色 （10Y7/1） 内面に「四」のヘラ記号あり
2 (回)	坏 (須)	〈14.8〉 4.0 〈8.0〉	体部は外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。底部回転ヘラキリの後全面手持ちヘラケズリ。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み灰白色 （10Y8/1）
3 (回)	坏 (須)	〈14.4〉 3.9 〈9.0〉	体部は外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。底部回転ヘラキリの後全面手持ちヘラケズリ。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み灰色 （10Y6/1）
4 (回)	坏 (須)	〈13.7〉 3.7 〈8.1〉	体部は外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。底部手持ちヘラケズリ切り離し方法不明。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み灰色 （10Y6/1）
5 (完)	坏 (須)	12.2 4.2 7.4	体部は丸味を帯びて外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。底部手持ちヘラケズリ切り離し方法不明。 内面　ロクロヨコナデの後黒色研磨。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み浅黄橙色 （10YR8/3）
6 (回)	甕 (須)	〈12.5〉 — —	口縁部はゆるく外反し、口唇部は平担に縁取られる。小形な器形。	外面　ロクロヨコナデ。 内面　ロクロヨコナデ。 （ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含みにぶい赤褐色 （2.5Y4/3）
7 (回)	甕 (須)	〈19.1〉 — —	口縁部はゆるく外反し、口唇部は平担に縁取られる。	外面　口縁部ロクロヨコナデ。胴部叩き。 内面　口縁部ロクロヨコナデ。胴部アテ。 （ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み灰色 （10Y6/1）
8 (完)	甕 (須)	— — 12.4	底部は丸味を帯びた平底。 胴部は球状を呈する。	外面　胴部～底部格子叩き。 内面　ヨコナデ。	胎土は砂粒を含み灰色 （7.5Y6/1）
9 (回)	甕 (土)	〈13.3〉 14.1 5.4	口縁部はゆるく外反し、胴部球状、底部平底の小形な器形。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みにぶい橙色 （7.5YR6/4）
10 (回)	甕 (土)	〈13.5〉 — —	口縁部は外反し、胴部は球状を呈するものと思われる。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。	胎土は金雲母を特徴的に含み、にぶい褐色 （7.5YR6/3）
11 (回)	甕 (土)	〈20.2〉 — —	口縁部はくの字状に外反する。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みにぶい橙色 （7.5YR7/3）
12 (回)	甕 (土)	〈21.8〉 — —	口縁部はくの字状に外反する。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みにぶい赤褐色 （5YR5/4）
13 (回)	甕 (土)	〈21.7〉 — —	口縁部はくの字状に外反する。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含み明赤褐色 （5YR5/8）
14 (回)	甕 (土)	〈21.1〉 — —	口縁部はゆるくくの字状に外反する。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含み赤褐色 （2.5YR4/6）
15 (回)	甕 (土)	— — 5.7	胴部は弓なりにゆるく膨らみ、底部平底	外面　ヘラケズリ。 内面　ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みにぶい橙色 （5YR7/4）
16 (回)	甕 (土)	— — 4.6	底部平底。	外面　ヘラケズリ。 内面　ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みにぶい橙色 （7.5YR7/4）
17 (回)	甕 (土)	— — —	胴部は球状を呈し、底部平底。	外面　ヘラケズリ。 内面　ヘラナデ。	胎土は砂粒を含み橙色 （5YR6/6）

(16)　H－16号住居址

住居址　第71図

H－16号住居址は、第Ⅰ区フ－33グリッドにおいて検出された。

本住居址は、F－14号掘立柱建物址を切って存在している。

本住居址は、南北3.4m東西3.0mの小形隅丸方形を呈し、床面積9.0m²を測り、南北軸方向はN－0°－Sを指す。壁高は、5～10cmを測る。壁溝は、認められない。床面は、全体に硬質で、平坦な貼り床となっている。

ピットは、東南コーナーおいてP_1が認められたのみである。

P_1は85×70cm深さ10cmを測る。

遺物は、3の土師器高台付坏がカマド北の床面直上より出土している。この他遺物は、いずれもカマド中からの出土である。

覆土は、Ⅰ層のみで、小粒パミス・スコリアをよく含む黒色土層（10YR 2/1）であった。

カマド　第71図

カマドは、住居址の東壁中央よりやや南よりにあり、完全に破壊されている状況にあった。また、住居址の床面とP_1上面には、その構材である面取り軽石と安山岩礫の一部が散乱している状況にあった。

本カマドの土層は、2層に分層された。1層・2層ともに、焼土を多量に含む橙色土層（5 YR 6/4）であった。

遺　物　第72図

遺物は、土師器では坏・高台付坏・甕が検出されている。須恵器は小破片が僅かに検出されているのみである。

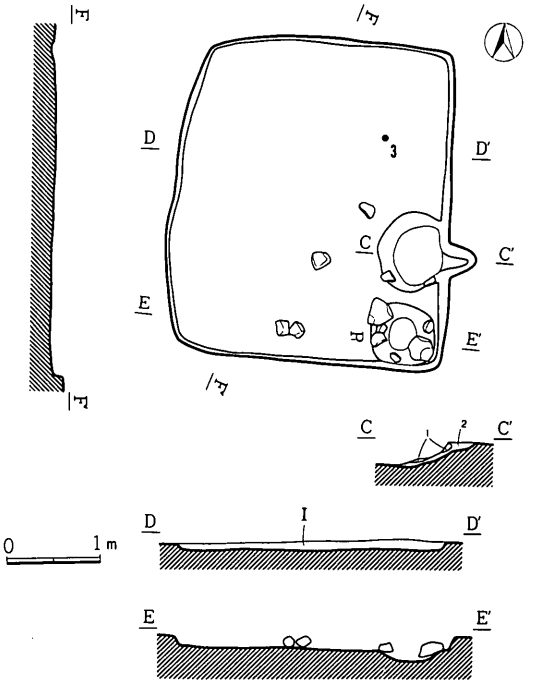
1は、内外面に黒色処理のなされたロクロ土師器坏で、その法量の比較的大きいものである。

2は、内面黒色研磨のなされたロクロ土師器坏で、底部全面に手持ちヘラケズリがなされているためその切り離し方法は不明である。

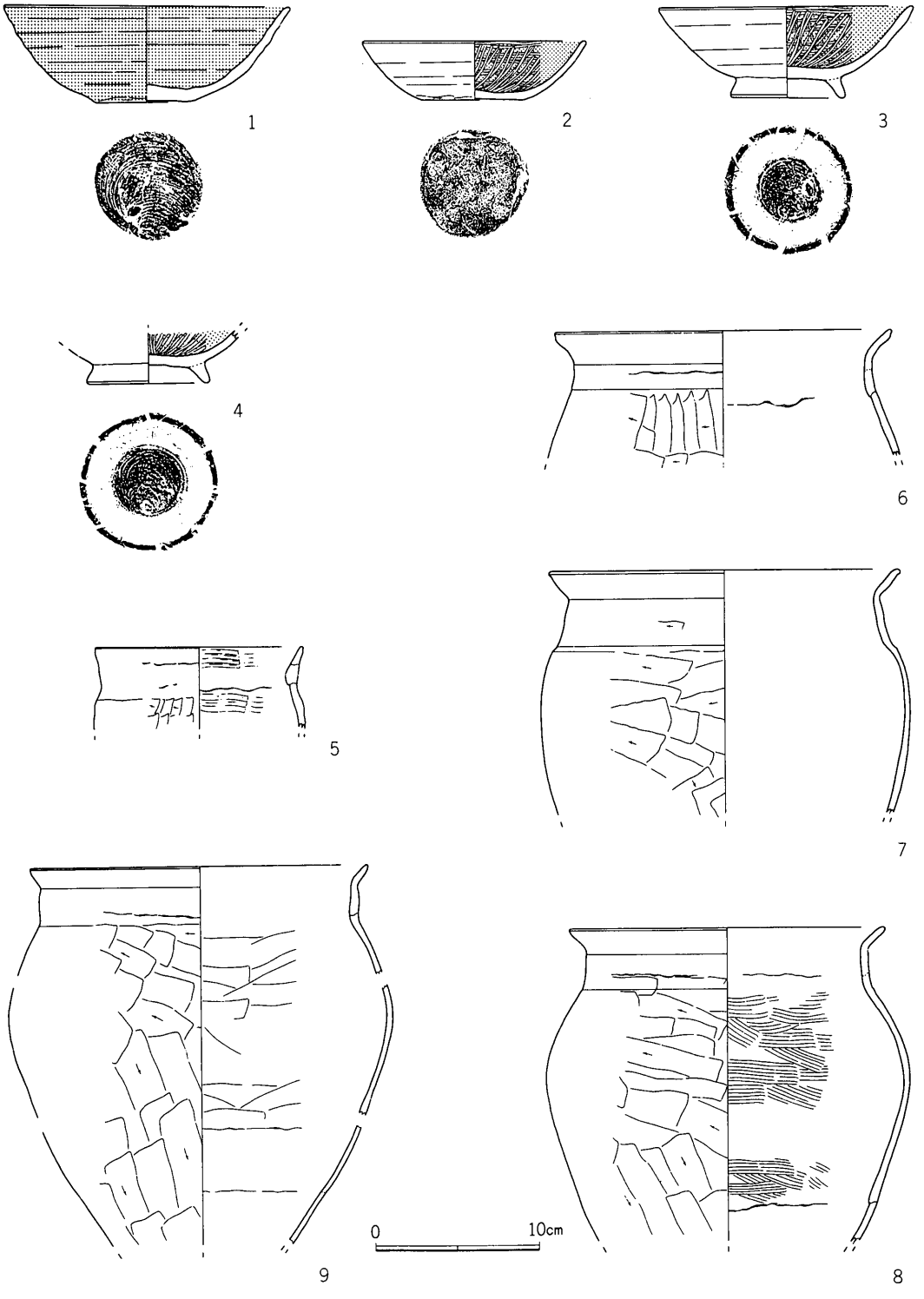
3・4は、内面黒色研磨のなされたロクロ土師器高台付埦である。

6～9はコの字状口縁の土師器甕である。

時　期



第71図　H－16号住居址実測図（1：80）



第72図　Ｈ－16号住居址出土遺物（１：４）

第24表　H－16号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1（完）	坏（土）	17.5 5.8 6.0	体部は外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。底部回転糸切り 内面　ロクロヨコナデ。内外面黒色処理 （ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み浅黄橙色（10YR8/3）
2（完）	坏（土）	13.7 3.6 6.2	体部は外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。 底部手持ちヘラケズリ。(切り離し方法不明) 内面　ロクロヨコナデの後、黒色研磨 （ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含みにぶい橙色（7.5YR7/4）ほぼ完形。
3（完）	埦（土）	15.5 5.5 7.0	体部は外反し、底部には高台が貼り付けられる。	外面　体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切りの後、高台貼り付け 内面　ロクロヨコナデの後、黒色研磨。 （ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含みにぶい橙色（5YR7/4）
4（完）	埦（土）	— — 7.4	体部は外反し、底部には高台が貼り付けられる。	外面　体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切りの後、高台貼り付け 内面　ロクロヨコナデの後、黒色研磨。 （ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含みにぶい橙色（7.5YR7/4）
5（回）	甕（土）	〈12.6〉 — —	口縁部はゆるく外反する。 小形な器形。	外面　口縁部ヨコナデ。 胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部及胴部粗い刷毛目状調整	胎土は砂粒を含みにぶい黄橙色（10YR7/3）
6（回）	甕（土）	〈17.5〉 — —	口縁部はコの字状に外反する。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。	胎土は砂粒を含みにぶい橙色（7.5YR7/4）
7（回）	甕（土）	〈21.3〉 — —	口縁部はコの字状に外反する。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みにぶい橙色（7.5YR7/3）
8（回）	甕（土）	〈19.2〉 — —	口縁部はコの字状に外反し、胴部はやや肩の張る器形を呈する。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部粗い刷毛目状のナデ。	胎土は砂粒を含み橙色（5YR6/6）
9（回）	甕（土）	〈20.6〉 — —	口縁部はコの字状に外反し、胴部はやや肩の張る器形を呈する。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は比較的精選されにぶい橙色(5YR7/4)

本住居址は、九世紀末葉、十二遺跡第VII期に位置付けられよう。

(17)　H－17号住居址

住居址　第73図

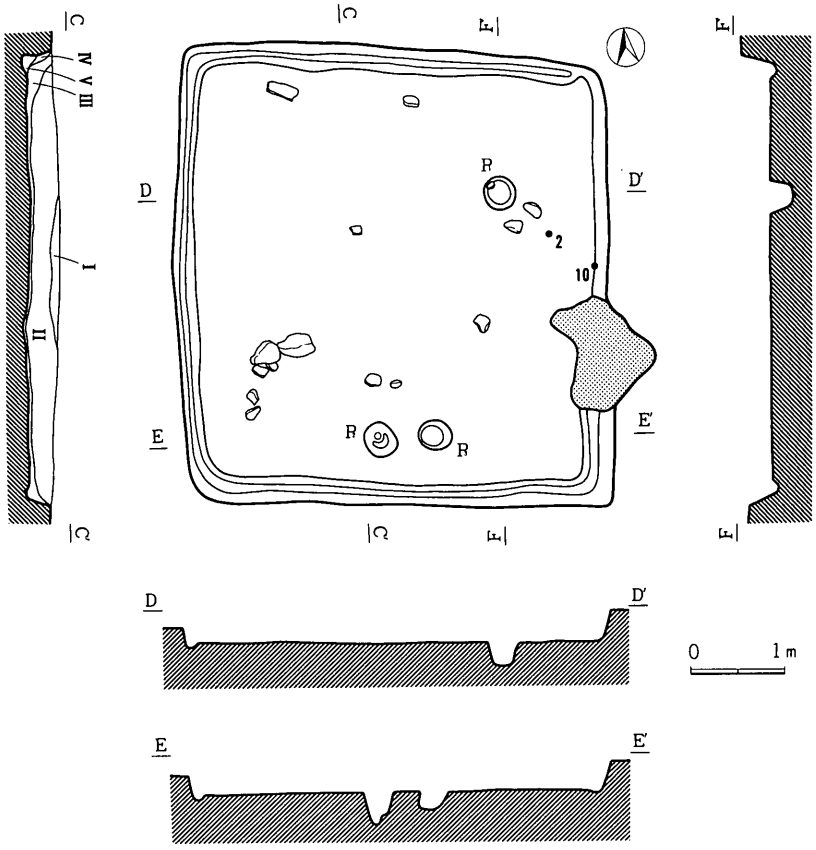
H－17号住居址は、第I区ヒ－32グリッドにおいて検出された。

本住居址は、南北4.8m東西4.6mの隅丸方形を呈し、床面積17.8m²を測り、南北軸方向はN－0°－Sを指す。壁高は、15～25cmを測る。壁溝は、幅10～20cm深さ3～5cm程度のものが、東壁のカマド北側を除くと住居址をほぼ全周する。床面は、全体にかなり硬質な貼り床となっている。

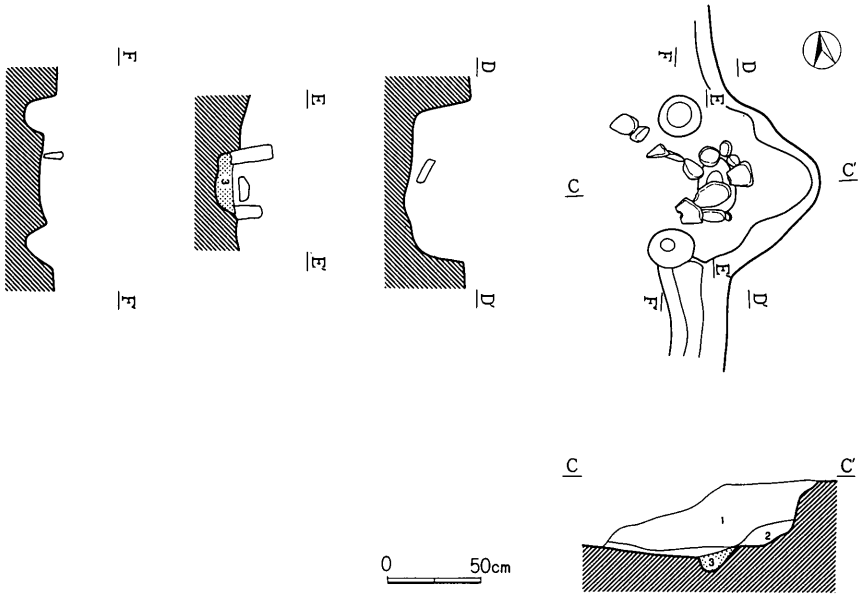
ピットは、P_1・P_2・P_3の三個のピットが認められた。P_1は35×35cm深さ25cm、P_2は37×36cm深さ34cm、P_3は36×30cm深さ18cmを測る。

遺物は、2の須恵器高台付坏と、10の砥石がカマド北側の床面直上より出土している。この他遺物は、いずれも覆土中からの出土である。

覆土は、5層に分層された。I層は小粒パミス・スコリアを含む黒褐色土層（10YR 3/2)、II層は小粒パミス・スコリアをよく含む黒褐色土層（10YR 2/3)、III層はスコリアを若干含む黒色



第73図　Ｈ－17号住居址実測図（１：80）



第74図　Ｈ－17号住居址カマド実測図（１：40）

土層（10YR 1.7/1）、Ⅳ層はロームブロック、Ⅴ層は黒色土層（10YR 1.7/1）であった。

カマド　第74図

カマドは、住居址の東壁中央よりやや南よりにあるが、ほぼ完全に破壊された状態にあった。ただし支脚石二個は、ほぼ原位置をとどめていた。また、その各所にカマドの構材である面取り軽石が散乱していた。なお、図のP_1・P_2は、袖石が抜き去られた後のピットと考えられる。

本カマドの土層は、3層に分層された。1層は多量の灰を含むにぶい黄橙色土層（10YR 7/4）、2層は焼土・灰・カーボンをまったく含まない黒色土層（10YR 2/1）、3層は焼土・灰をまったく含まずローム粒子を多量に含むカマドの構材である黒褐色土層（10YR 3/4）であった。

遺　物　第75・76図

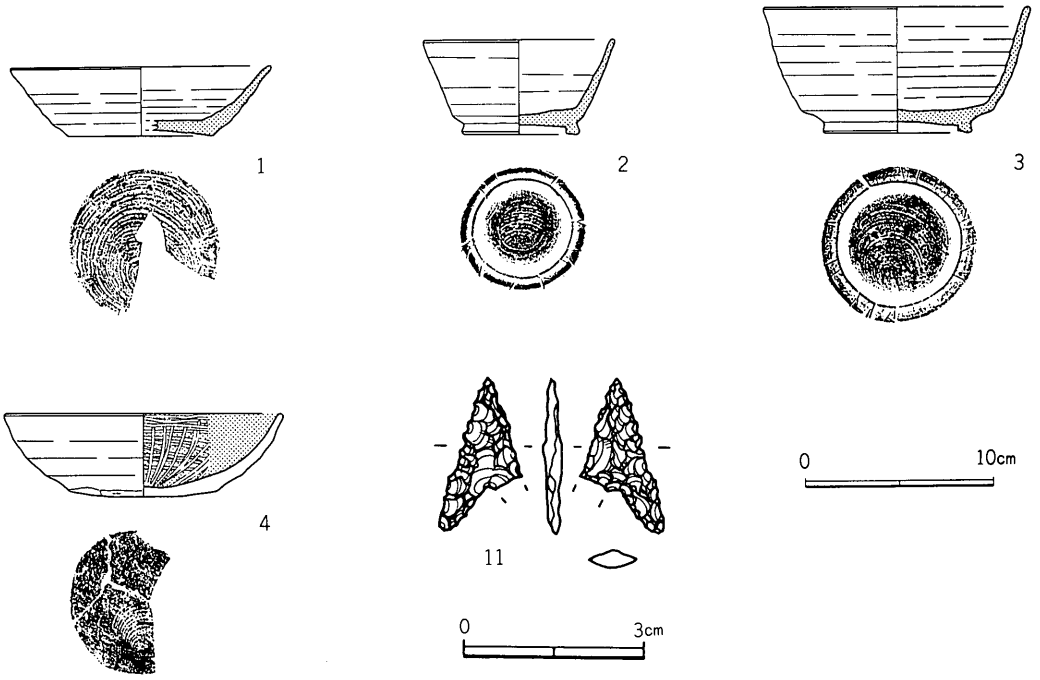
遺物の出土量は、他の住居址とくらべると少ない。須恵器では坏・高台付坏・甕、土師器では坏・甕が検出されている。

1は、底部に回転糸切り痕をみせる須恵器坏である。

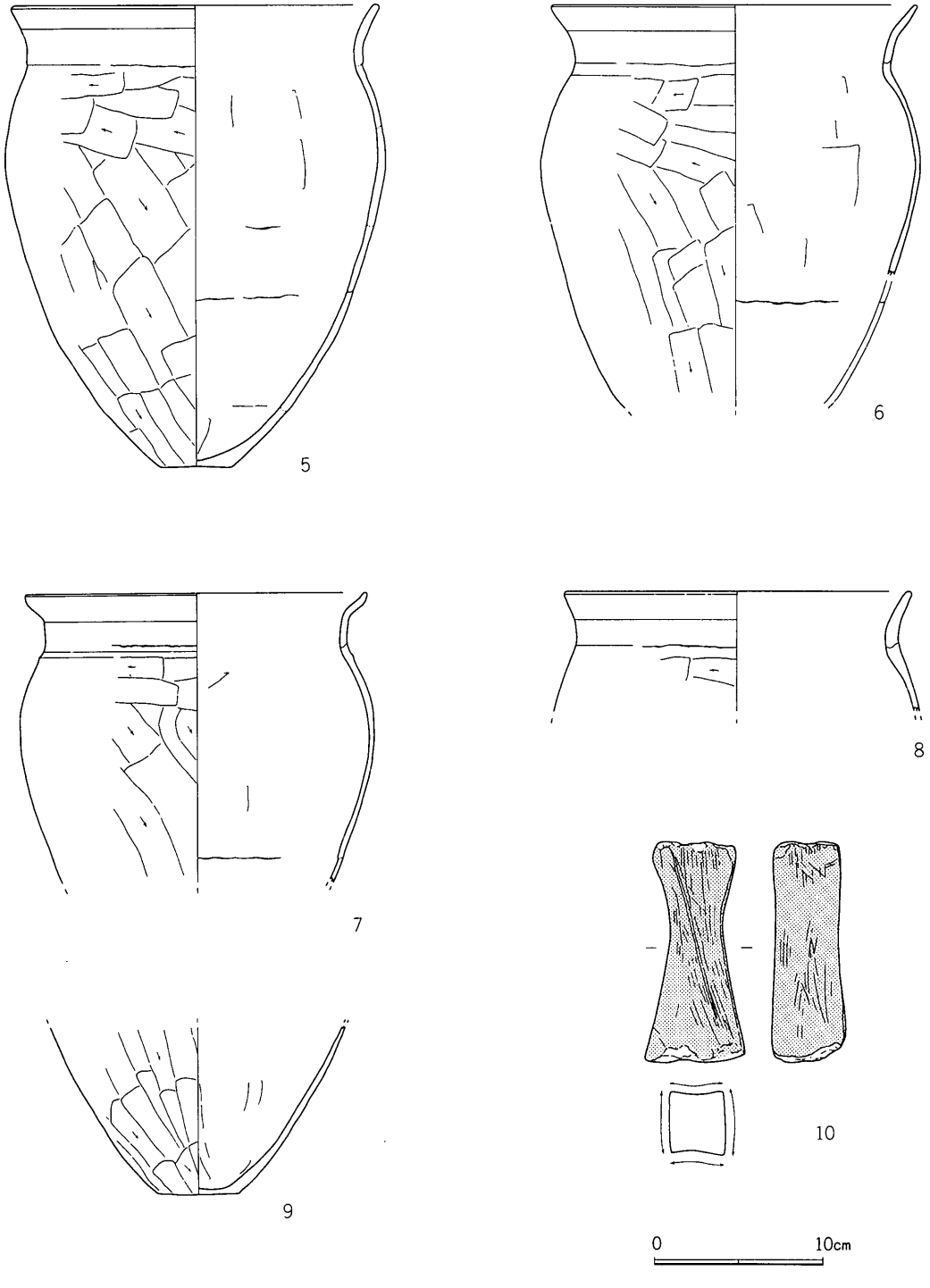
2・3は、底部に回転糸切り痕をみせる須恵器高台付坏である。

4は、内面黒色研磨のなされたロクロ土師器坏である。

5・8は、コの字状口縁の土師器甕である。いずれもその胴上半部に最大径をもつものである。9は、その胴下半部と考えられる。



第75図　H－17号住居址出土遺物（1～4＝1：4　11＝4：5）



第76図　Ｈ－17号住居址出土遺物（１：４）

第25表　H－17号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1（回）	坏（須）	〈13.8〉 3.7 7.7	体部は外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り、未調整。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み黄灰色（2.5Y6/1）
2（完）	坏（須）	10.2 5.0 6.3	体部は外反し、底部には高台が貼り付けられる。小形な器形。	外面　体部ロクロヨコナデ。底部回転糸切りの後、高台部貼り付け。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み灰色（10Y6/1）
3（回）	坏（須）	〈14.2〉 6.7 7.9	体部は外反し、底部には高台が貼り付けられる。	外面　体部ロクロヨコナデ。底部回転糸切りの後、高台部貼り付け。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み灰色（10Y6/1）
4（回）	坏（土）	〈14.8〉 4.3 〈7.8〉	体部は外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。底部回転糸切りの後、手持ちヘラケズリ。 内面　黒色研磨。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み浅黄橙色（10YR8/3）
5（回）	甕（土）	〈21.8〉 2.7 〈4.1〉	口縁部は僅かコの字状に外反し、最大径が胴部上半にくる器形。	外面　口縁部ヨコナデ。 胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含み明赤褐色（5YR5/6）
6（完）	甕（土）	21.6 — —	口縁部は僅かコの字状に外反し、最大径を胴上部にもつ器形	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は比較的精選され明赤褐色（5YR5/6）
7（回）	甕（土）	〈20.2〉 — —	口縁部はコの字状に外反し、胴上部のふくらむ器形。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は比較的精選されにぶい赤褐色(10YR5/4)
8（回）	甕（土）	〈20.5〉 — —	口縁部は僅かコの字状に外反する。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含み明赤褐色（5YR5/8）
9（回）	甕（土）	— — 4.8	胴下半部は除々にすぼまり、底部平底。	外面　胴部・底部ヘラケズリ。 内面　ヘラナデ。	胎土は砂粒を含み明赤褐色（5YR5/6）

10は、四面とも研砥に供されている砂岩の砥石である。11は、カマド中から出土した黒曜石の石鏃である。

第26表　H－17号住居址出土遺物一覧表〈石器〉

挿図番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
10	砥石	砂岩	13.1	5.9	4.1	425	No.2
11	石鏃	黒曜石	2.5	(1.3)	0.3	(0.4)	脚部片側欠損

時　期

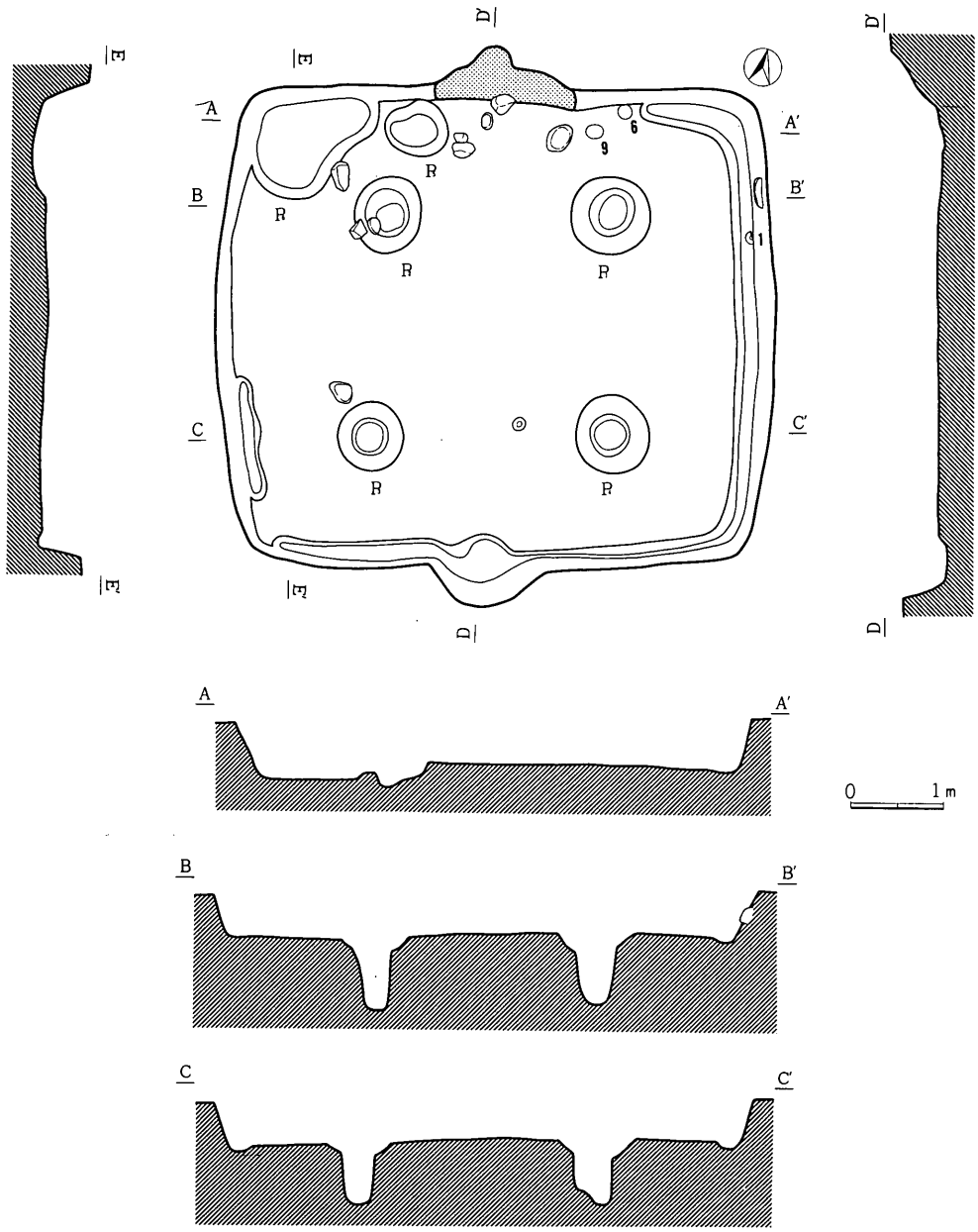
本住居址は、八世紀第IV四半期～九世紀初頭、十二遺跡第IV期に位置付けられよう。

(18)　H－18号住居址

住居址　第77図

H－18号住居址は、第Ⅰ区ヒ・フ－32グリッドにおいて検出された。

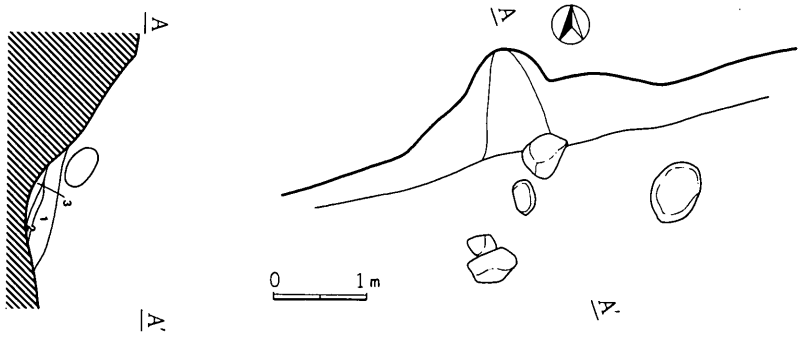
本住居址は、南北5.1m東西6.0mの隅丸方形を呈し、床面積24.1m²を測り、南北軸方向はN－22°－Wを指す。壁高は、45～55cmを測る。壁溝は、幅10～30cm深さ5～10cm程度のものが、西壁の一部を除くと住居址をほぼ全周する。床面は、貼り床ではないが、全体にかなり硬質なものとなっている。また、カマドと相対する南壁には、入り口部と関連するのだろうか張り出しが認められた。



第77図　H－18号住居址実測図（1：80）

ピットは、P_1～P_4の四個のピットが対で認められた。このほか、カマドの西脇にはP5が、西北コーナーにはP_6が認められた。P_1は85×85cm深さ75cm、P_2は80×70cm深さ78cm、P_3は73×70cm深さ65cm、P_4は85×80cm深さ70cm、P_5は70×60cm深さ27cm、P_6は155×100cm深さ15cmを測る。

遺物は、1の須恵器蓋が東壁溝中から、6の土師器坏と9の土師器甕がカマド東側の床面直上



第78図　H－18号住居址カマド実測図（1：40）

第27表　H－18号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1（完）	蓋（須）	3.7 2.4 11.8	つまみ部は偏平な皿状を呈し、内面にかえりを有する小形な蓋。	外面　ロクロヨコナデの後、天井部回転ヘラケズリ 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み灰色(10Y6/1)焼成良好
2（回）	坏（須）	(12.1) 3.4 (7.6)	体部は外反し、底部平底の盤状の器形を呈する。	外面　体部ロクロヨコナデ。底部回転ヘラケズリ、切り離し方法不明 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み灰色(10Y6/1)焼成良好
3（回）	坏（須）	〈13.6〉 — 〈7.5〉	体部は外反し、底部は平底を呈するものと思われる。	外面　体部ロクロヨコナデ。底部回転ヘラキリ、未調整 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み灰色(10Y5/1)焼成不良
4（回）	坏（須）	(15.4) 3.7 (12.2)	盤状の器形を呈し、高台が貼り付けられる。	外面　体部ロクロヨコナデ。底部回転ヘラケズリ、切り離し方法不明 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み灰白色(10Y7/1)焼成良好
5（回）	埦（須）	〈13.7〉 6.1 5.6	体部は丸味を帯びて外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。体部下半～底部回転ヘラケズリ。切り離し方法不明 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	完全な還元炎焼成とならずにぶい褐色(7.5YR6/3)しかし焼成は良好
6（完）	埦（土）	13.5 5.3 5.5	体部は丸味を帯びて外反し、底部も丸味を帯びた平底。均整のとれた器形のためロクロ整形によるかもしれない。	外面　口縁部ヨコヘラミガキ。体部～底部ヘラケズリ。 内面　黒色研磨。	胎土は砂粒を含み淡黄色（2.5Y7/3）
7（回）	甕（須）	〈20.6〉 — —	口縁部はくの字状に外反し、口唇部は平担に縁取られる。	外面　胴部格子目叩き。口縁部ロクロヨコナデ。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み灰色（10Y6/1）
8（回）	甕（須）	— — —	胴部は球状を呈し、底部丸底。	外面　叩き→ロクロヨコナデ→一部ヘラケズリ 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み明赤褐色(5YR5/6)外面は灰色(10Y5/1)
9（完）	甕（土）	15.3 — —	口縁部はくの字状に外反し、胴部は球状を呈するものと思われる。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は金雲母を特徴的に含み、にぶい褐色（7.5YR6/3）
10（回）	甕（土）	〈24.4〉 — —	口縁部はくの字状に外反する。最大径は口縁部にある。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は精選されずにぶい褐色（7.5YR6/3）

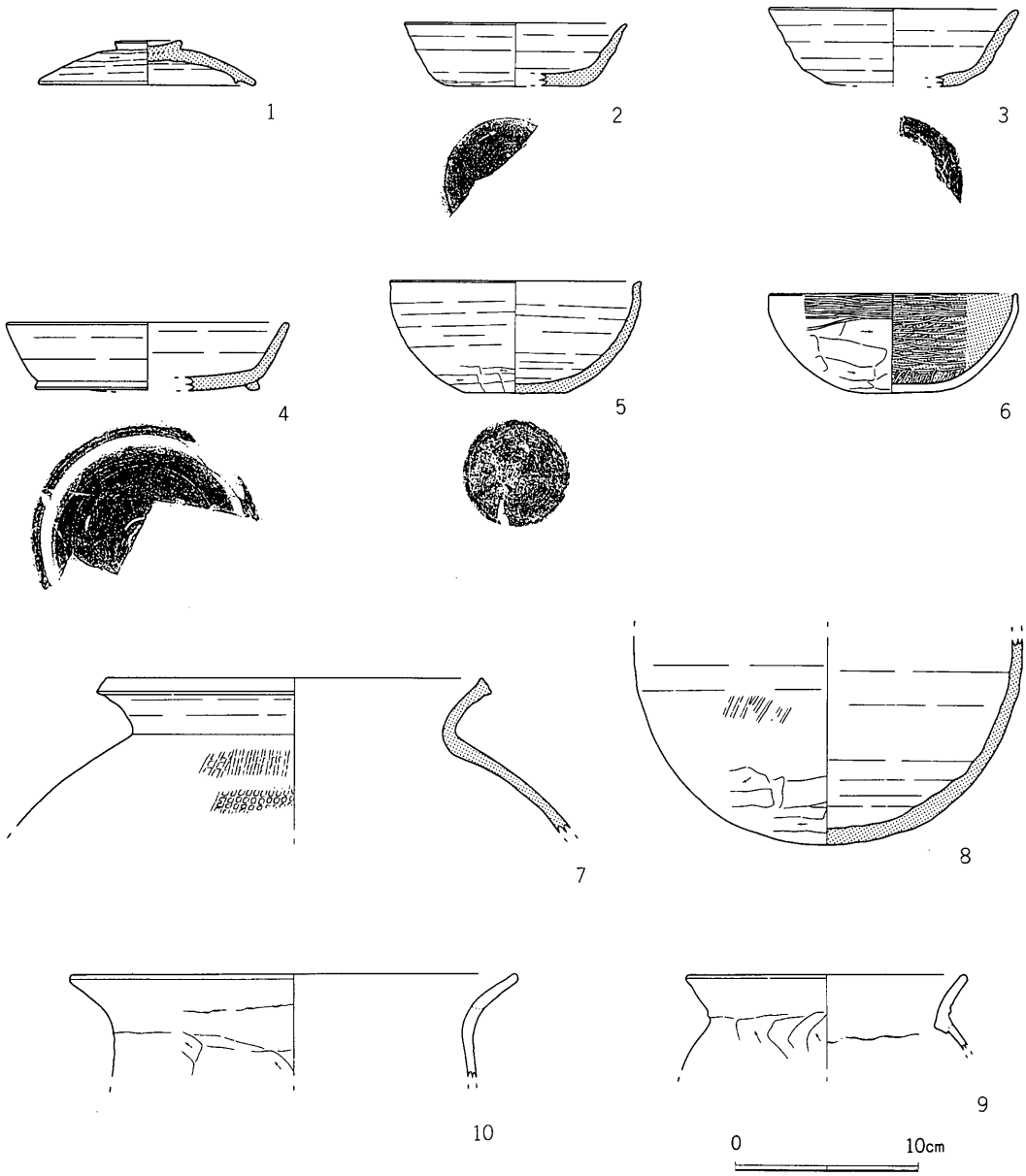
より出土している。この他遺物は、いずれも覆土中からの出土である。

覆土は、分層されず、小粒パミス・スコリアを含む黒褐色土層（10YR 3/2）Ⅰ層のみであった。

カマド　第78図

カマドは、住居址の北壁中央にあるが、ほぼ完全に破壊された状態にあった。その付近にカマドの構材である面取り軽石と安山岩礫が散乱していた。

本カマドの土層は、3層に分層された。1層はカマドの構材である粘土を多く含み若干カーボ



第79図　Ｈ－18号住居址出土遺物一覧表（１：４）

ンを含む灰褐色土層（5 YR 6/2)、２層は橙色焼土層（5 YR 6/8)、３層は焼土・灰・カーボンをまったく含まない黒褐色土層（10YR 2/1）であった。

遺　物　第79図

遺物は、須恵器では坏・高台付坏・埦・甕、土師器では坏・高坏・甕が検出されている。

１は、皿状ツマミのカエリのある須恵器蓋である。

2・3は須恵器坏、4は底部に回転ヘラケズリ痕をみせる須恵器高台付坏である。

5は底部に回転ヘラケズリ痕をみせる須恵器埦である。

6は、内面黒色研磨のなされた土師器坏である。

7・8は須恵器甕9・10は土師器甕である。

時　期

本住居址は、八世紀第Ⅰ四半期、十二遺跡第Ⅰ期に位置付けられよう。

(19)　H－19号住居址

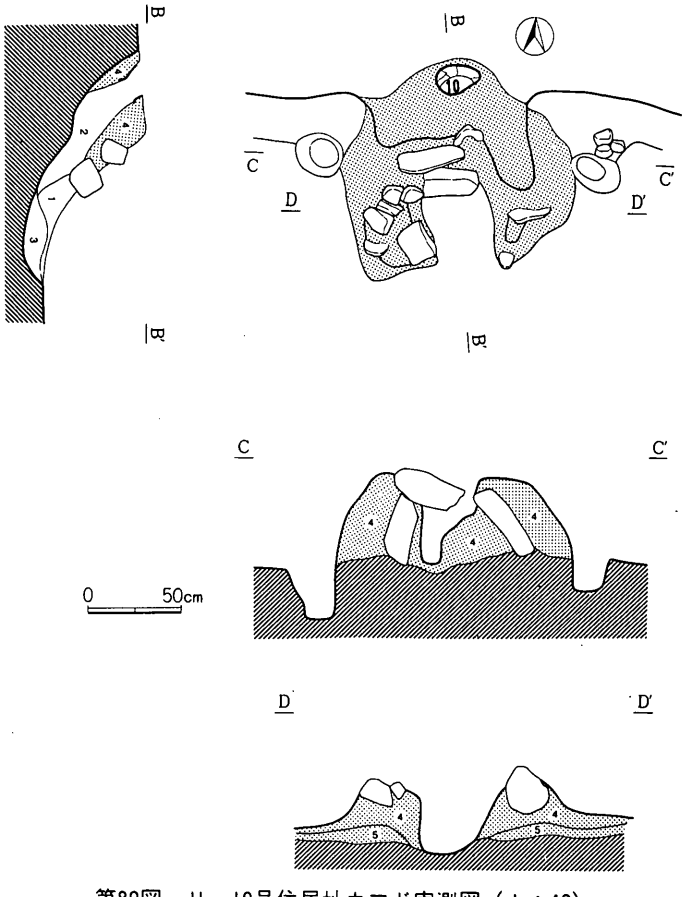
住居址　第81図

H－19号住居址は、第Ⅰ区ヒ－33グリッドにおいて検出された。

本住居址は、南北6.0m東西5.7mの隅丸方形を呈し、床面積26.9m²を測り、南北軸方向はN－9°－Wを指す。壁高は、40～50cmを測る。壁溝は、幅15～20cm深さ5～10cm程度のものが、西壁・東壁・南壁の一部をめぐっている。床面は、全体にかなり硬質な貼り床となっている。

ピットは、P_1～P_4の四個のピットが対で認められた。このほか、カマドの両脇にはP_5・P_6が、壁溝中にはP_7～P_9が認められた。P_1は90×75cm深さ55cm、P_2は80×80cm深さ65cm、P_3は80cm×75cm深さ60cm、P_4は75×70cm深さ55cm、P_5は30×30cm、P_6は25×25cm、P_7は23×18cm、P_8は30×20cm、P_9は25×23cmを測る。

遺物は、1の土師器盤・7の土師器坏・9の土師器小形甕・12の磨石が床面直上より出土している。この他遺物は、いずれも覆土中からの出土で



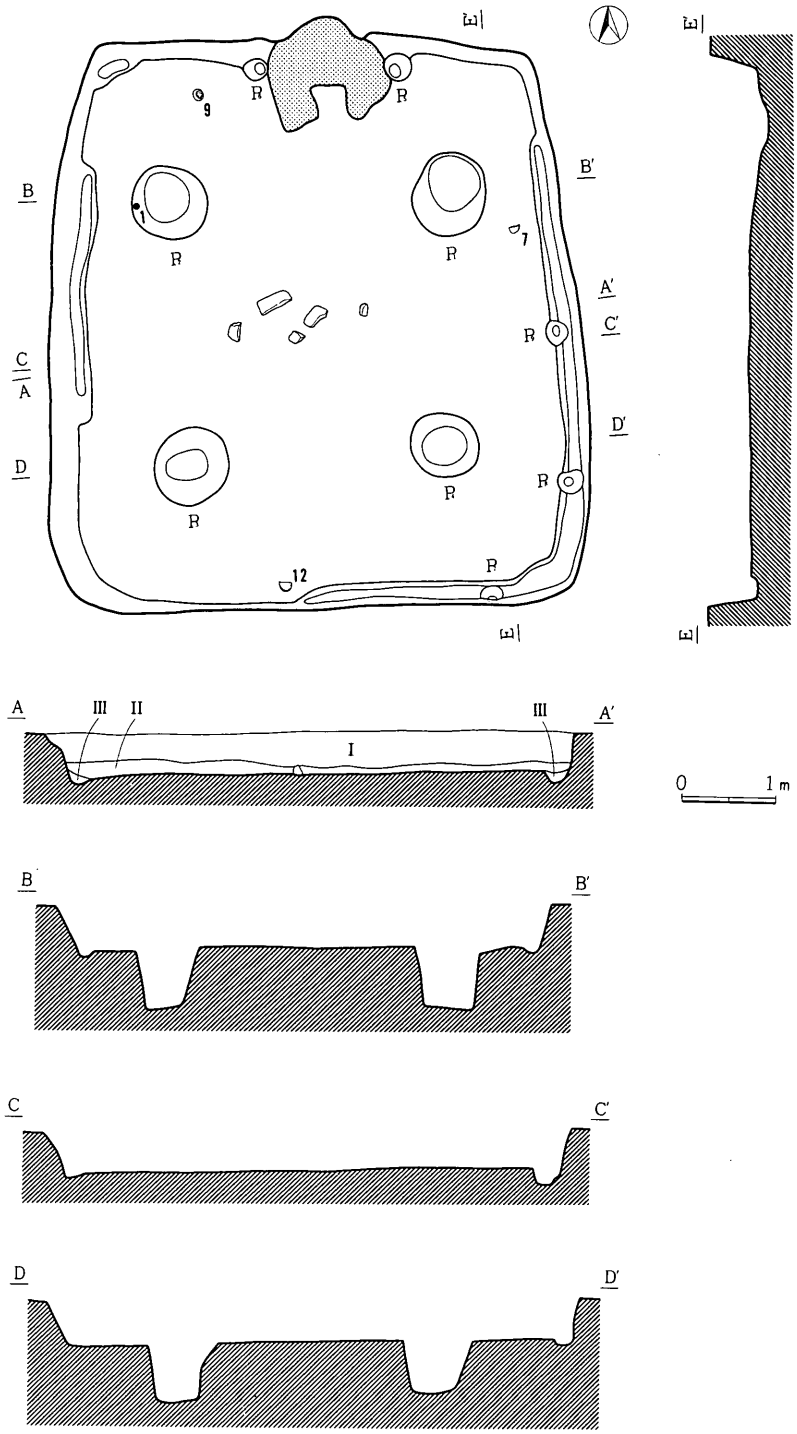
第80図　H－19号住居址カマド実測図（1：40）

ある。

覆土は、3層に分層された。Ⅰ層は小粒パミスをよく含みスコリアを若干含む黒褐色土層（10YR 2/3)、Ⅱ層は小粒パミスを若干含む黒色土層(10YR 1.7/1)、Ⅲ層はローム粒子をよく含む暗褐色土層(10YR 3/3)であった。

カマド　第80図

カマドは、住居址の北壁中央にあり、ほぼ完全に近い状態で遺存していた。その天井部および袖部の芯となる構材には面取り軽石が用いられ、黒色土を若干含む灰黄色粘土層（4層　10YR 6/2)・黒色土と砂の混じる明黄褐色土層（5層　10YR 6/6）で固められていた。また、煙道部の煙筒として10の土師器甕が埋め込まれていた。



第81図　H－19号住居址実測図（1：80）

本カマド内の土層は、3層に分層された。1層はカマドの構材である粘土を多く含む淡橙色土層（5 YR 8/4)、2層は焼土を多く含む褐灰色

第28表　H－19住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1 (完)	(土)	6.2 1.8 4.8	盤状を呈し、小形な器形。	外面　黒色研磨。 内面　黒色研磨	焼成良好で、内・外・断面ともに黒色 (10YR1.7/1)
2 (完)	坏 (須)	14.2 3.6 9.6	体部は外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。底部回転ヘラキリ、未調整 内面　ロクロヨコナデ。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み灰色 (10Y6/1)
3 (回)	坏 (須)	〈13.7〉 4.0 〈8.7〉	体部は外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。底部回転糸切りの後、回転ヘラケズリ。 内面　ロクロヨコナデ。(ロクロ右回転)	胎土は比較的精選され灰白色 (10Y7/1) 焼成良好
4 (回)	坏 (須)	〈13.3〉 3.5 〈6.8〉	体部は外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。底部切り離し方法不明 内面　ロクロヨコナデ。 (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み灰色 (10Y6/1)
5 (回)	坏 (須)	〈13.8〉 3.9 9.2	体部は外反し、底部には高台が貼り付けられる。	外面　体部ロクロヨコナデ。底部切り離し方法不明 内面　ロクロヨコナデ。 (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み、暗青灰色 (5B4/1)
6 (回)	坏 (土)	〈16.2〉 4.9 〈11.2〉	体部は丸味を帯びて外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。 底部手持ちヘラケズリ、切り離し方法不明 内面　ロクロヨコナデの後、黒色研磨。 (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み浅黄橙色 (10YR8/3)
7 (完)	坏 (土)	— — 〈8.6〉	体部は丸味をおびて外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。 底部手持ちヘラケズリ、切り離し方法不明 内面　ロクロヨコナデの後、黒色研磨 (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み浅黄橙色 (7.5YR8/4)
8 (回)	(須)	— — 〈6.6〉	底部には高台が貼り付けられる。 器種は長頸瓶と考えられる。	外面　ロクロヨコナデ。 内面　ロクロヨコナデ。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み灰色 (10Y5/1)
9 (回)	小形甕 (土)	(9.6) 8.1 7.0	口縁部は直立気味に外反し、胴部は球状、底部は丸味を帯びた平底の小形な器形。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土はあまり精選されず、にぶい橙色(5YR6/4)焼成も良好でない
10 (完)	甕 (土)	21.8 — —	口縁部はくの字状に外反する。 最大径は口縁部にある。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含み橙色 (5YR6/6)
11 (回)	甕 (土)	— — 4.6	胴部は弓なりにすぼまり、底部平底。	外面　胴・底部ヘラケズリ。 内面　ヘラナデ。	胎土は砂粒を含み明赤褐色 (5YR5/6)

土層(5 YR 4/1)、3層は橙色焼土層(5 YR 6/6)であった。

遺　物　第82・83図

遺物は、須恵器では坏・高台付坏・長頸瓶・甕、土師器では盤・坏・甕が検出されている。

1は、内外面ともに黒色研磨のなされた土師器で小形の盤とでも呼びえようか。

2～4は須恵器坏で、2は回転ヘラキリ、3は回転糸切り、4は切り離し方法不明である。

5は底部に回転ヘラケズリ痕をみせる須恵器高台付坏である。

6・7は、内面黒色研磨のなされたロクロ土師器坏で、その切り離し方法は不明である。

8は須恵器長頸瓶の底部である。

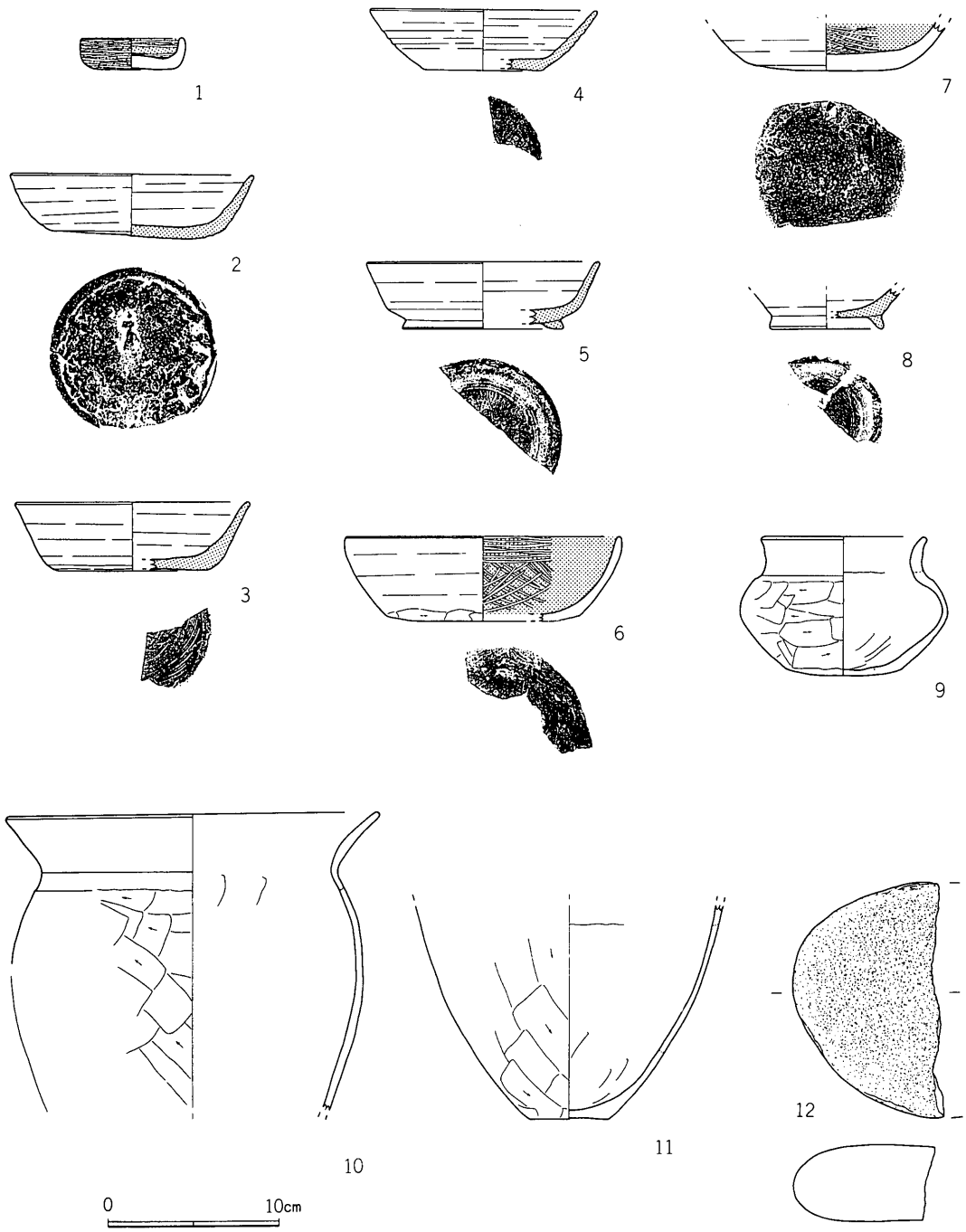
9は土師器小形甕、10はくの字状口縁の土師器甕である。

12は、磨石の断片と考えられようか。

13は、板状礫の縁片を加工した打製石斧の断片である。

時　期

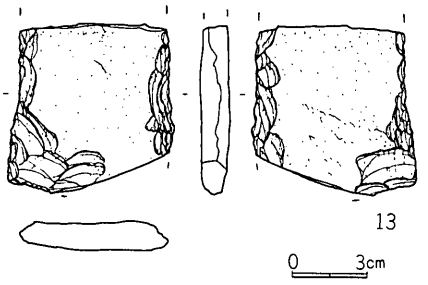
本住居址は、八世紀前半代のものと思われるが、所属期は不明である。



第82図　H－19号住居址出土遺物（1：4）

第29表　H－19号住居址出土遺物一覧表〈石器〉

挿図番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備　考
12	磨　石	輝　石 安山岩	(8.5)	13.8	4.5	(760)	一部欠損
13	打　製 石　斧	玄武岩質 安山岩	(6.6)	6.6	1.1	(77)	一部欠損



第83図　H－19号住居址出土遺物（1：3）

(20)　H－20号住居址

住居址　第85図

H－20号住居址は、第I区ハ－34グリッドにおいて検出された。

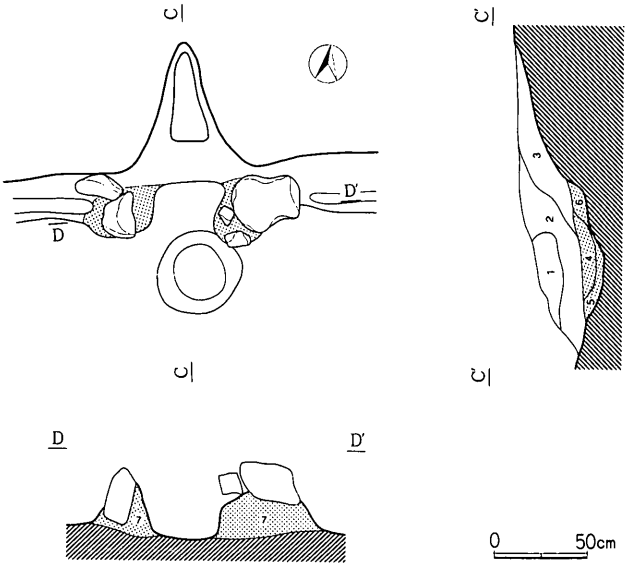
本住居址は、南北5.3m東西5.6mの隅丸方形を呈し、床面積21.7m²を測り、南北軸方向はN－16°－Wを指す。壁高は、30～40cmを測る。壁溝は、幅15～30cm深さ5～10cm程度のものが、住居址を全周している。床面は、全体にかなり硬質な貼り床となっている。

ピットは、P_1～P_4の四個のピットが対で認められた。このほか、カマドと相対する南壁中央にはP_7が認められた。また、壁溝中にはP_5・P_6が認められた。P_8はカマドの火床部のピットである。

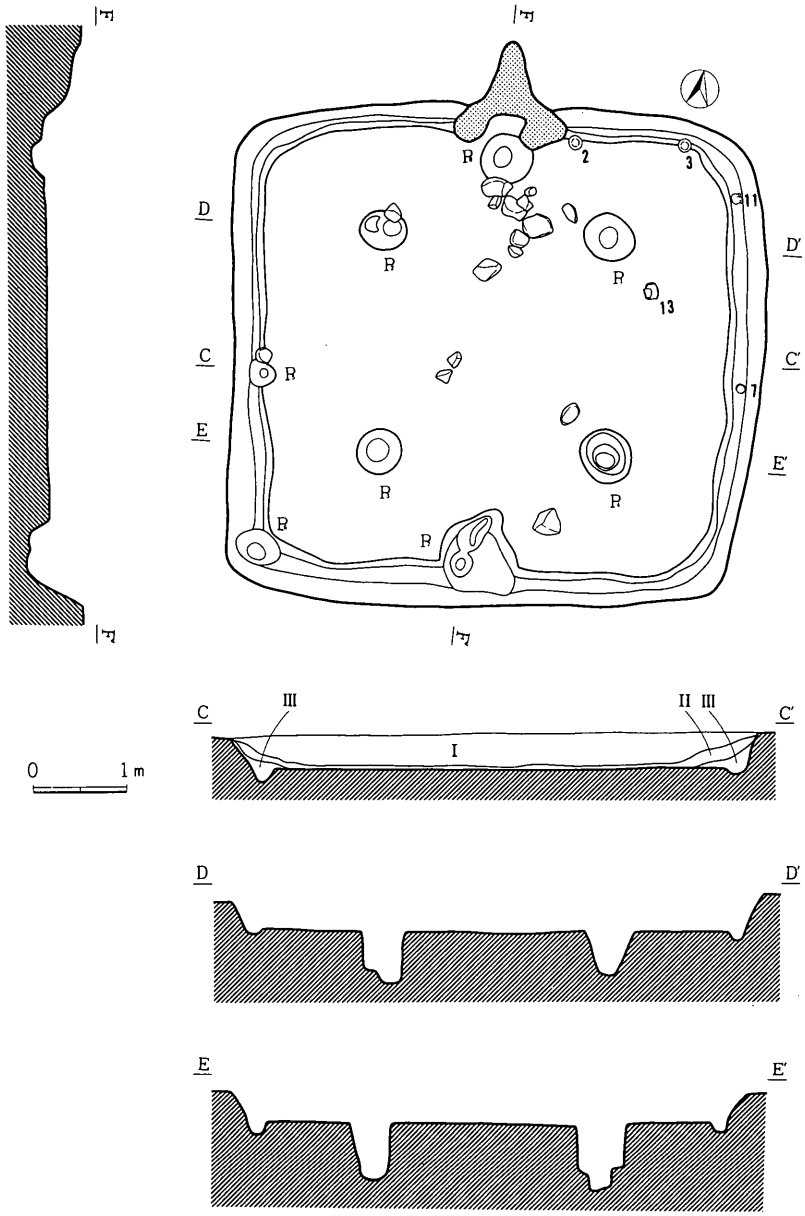
P_1は55×50cm深さ45cm、P_2は50×40cm深さ55cm、P_3は50×45cm深さ60cm、P_4は60×50cm深さ70cm、P_5は30×25cm深さ15cm、P_6は50×35cm、P_7は95×85cm深さ25cm、P_8は60×55cm深さ15cmを測る。

遺物は、2の須恵器坏がカマド脇の床面直上より、3の須恵器坏・7の須恵器長頸瓶底部・11の土師器小形甕が壁溝中より出土している。この他遺物は、いずれも覆土中からの出土である。

覆土は、3層に分層された。I



第84図　H－20号住居址カマド実測図（1：40）

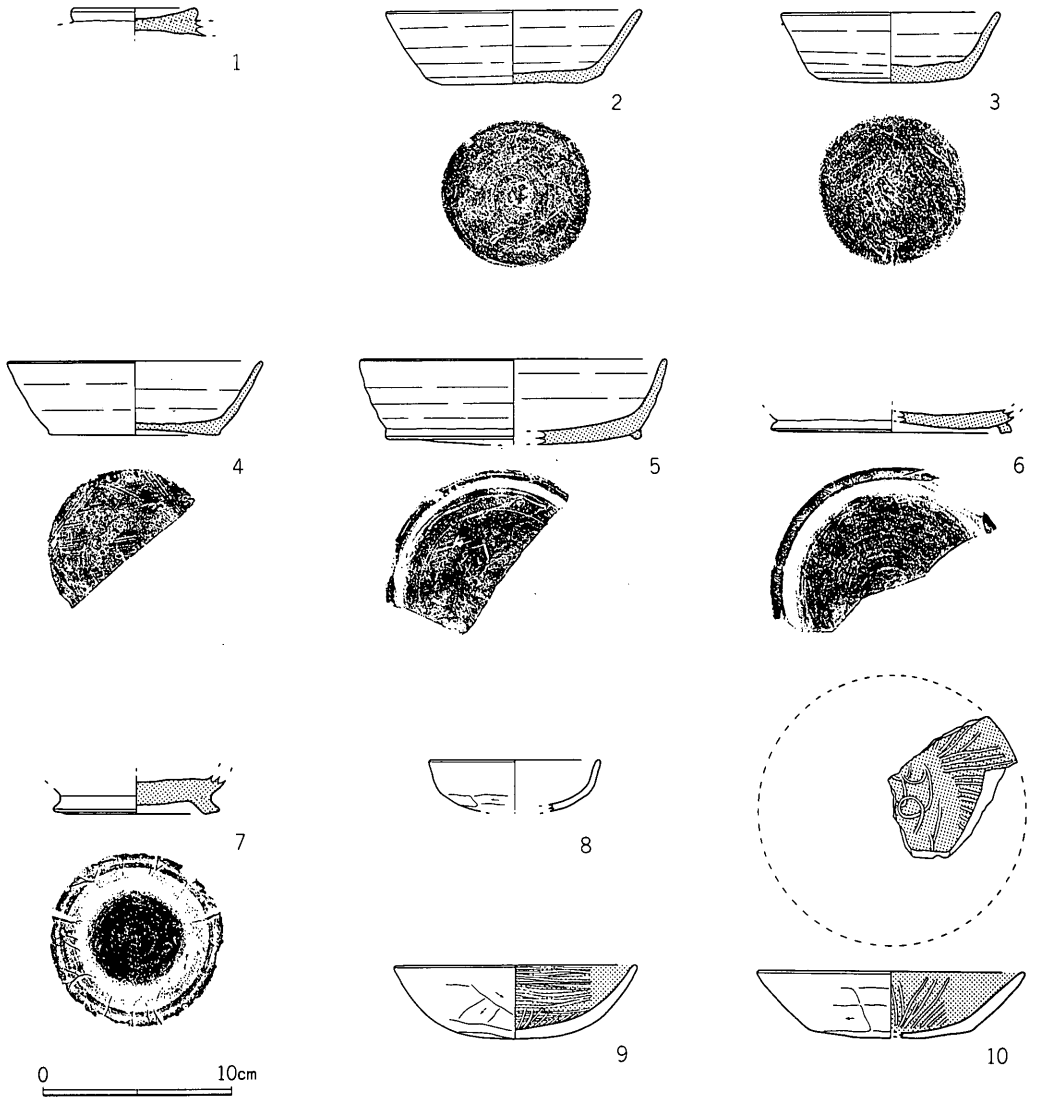


第85図　H－20号住居址実測図（1：80）

層は小粒スコリアをよく含む暗褐色土層（10YR 3/3）、II層は小粒スコリアをよく含む黒褐色土層（10YR 2/2）、III層はローム粒子をよく含むにぶい黄褐色土層（10YR 4/3）であった。

カマド　第84図

カマドは、住居址の北壁中央にあり、その大部分を破壊されている状態にあった。ただし、僅かにその袖部の根本は残っていた。その袖部の芯には面取り軽石と溶結凝灰岩が用いられ、褐灰色粘土層（7層　5 YR 6/1）で固められていた。また、カマドの火床部には、若干の粘土を含む



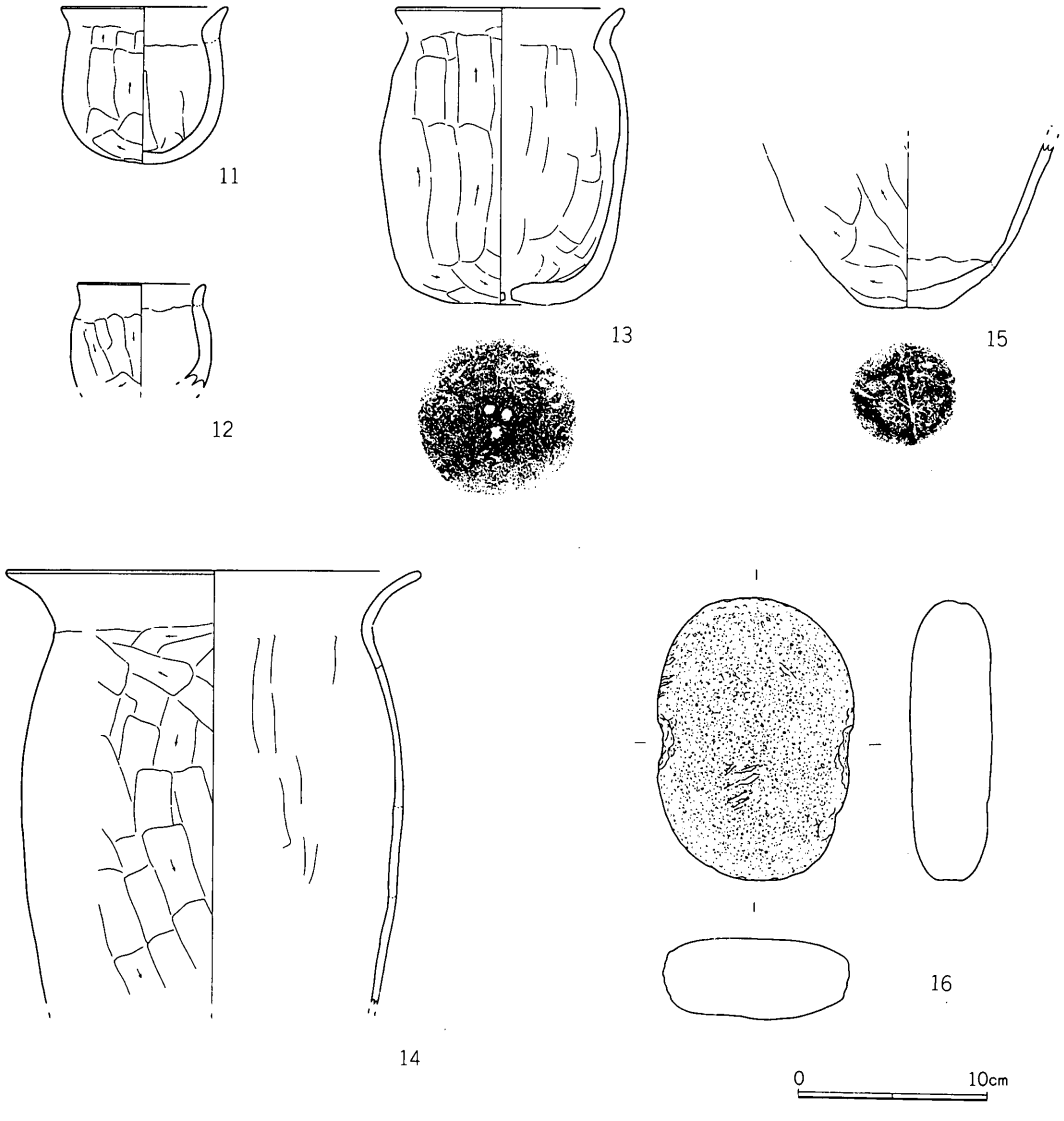
第86図　H－20号住居址出土遺物（1：4）

橙色土層（4層　5 YR 6/8）灰褐色土層（5層　5 YR 4/2）灰褐色土層（6層　5 YR 5/2）が貼られており、この3層ともに焼けが激しかった。なお、カマドの構材と考えられる安山岩礫10個がカマドの前方に散乱していた。

本カマド内の土層は、3層に分層された。1層はカマドの構材である粘土を若干含む褐灰色土層（7.5YR 4/1）、2層もカマドの構材である粘土を若干含む黒褐色土層（7.5YR 3/1）、3層は焼土をよく含む褐灰色土層（7.5YR 4/1）であった。

遺　物　第86・87図

遺物は、須恵器では蓋・坏・高台付坏・長頸瓶・甕、土師器では坏・甕・甑が検出されている。



第87図　Ｈ－20号住居址出土遺物実測図（１：４）

第30表　Ｈ－20号住居址出土遺物一覧表〈石器〉

挿図番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備　考
16	石　錘	輝　石 安山岩	14.9	10.4	4.2	1,015	

1は、須恵器蓋の皿状ツマミ部である。

2～4は回転ヘラキリによる須恵器坏である。

5・6は底部に回転ヘラケズリ痕をみせる須恵器高台付坏である。このうち、5は高台部より底部がとび出る形態的特徴をみせている。

7は、須恵器長頸瓶の底部である。

8～10は非ロクロ調整による土師器坏である。このうち、9・10には内面黒色研磨がなされて

第31表　H－20号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1 (完)	蓋 (須)	6.7 — —	つまみ部は偏平な皿状を呈する。	外面　ロクロヨコナデ。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み灰白色 （7.5Y7/1）
2 (完)	坏 (須)	13.6 3.9 7.4	体部は外反し、底部平底。	外面　ロクロヨコナデ。 底部回転ヘラキリ、未調整。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	完全な還元炎焼成となっておらず浅黄橙色(10YR8/3)を呈する。完形
3 (完)	坏 (須)	11.6 3.7 7.7	体部は外反し、底部平底。	外面　ロクロヨコナデ。底部手持ちヘラケズリ、切り離しは回転ヘラキリによるものと思われる 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	完全な還元炎焼成となっておらず浅黄橙色(10YR8/3)を呈する。ほぼ完形
4 (回)	坏 (須)	〈13.6〉 3.9 (9.0)	体部は外反し、底部平底。 2.3と比べ底部から体部への変換点が明瞭	外面　ロクロヨコナデ。 底部回転ヘラキリの後、若干のナデ。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み灰白色 （7.5Y7/1）
5 (回)	坏 (須)	〈16.3〉 4.6 〈13.6〉	体部は外反し、底部には高台が貼り付けられる。底部は高台部よりも飛び出す。	外面　ロクロヨコナデ。底部回転ヘラケズリ。 切り離し方法不明 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み灰色 （10Y6/1）
6 (回)	坏 (須)	— — (12.8)	底部には高台が貼り付けられる。	外面　底部回転ヘラケズリ。切り離し方法不明。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み灰色 （N5/0）
7 (完)	(須)	— — 8.8	底部には高台が貼り付けられる。 器種は長頸瓶と考えられる。	外面　底部回転ヘラケズリの後、高台部貼り付け。 切り離し方法不明。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み灰褐色 （7.5YR4/2）
8 (回)	坏 (土)	〈9.1〉 — —	体部は丸味を帯びて外反する。 底部は丸底となるものと思われる。	外面　体部ヨコナデ。底部ヘラケズリ。 内面　ヨコナデ。	胎土は砂粒を含みにぶい橙色 （7.5YR7/4）
9 (回)	坏 (土)	〈13.0〉 — —	体部はゆるく外反し、底部は丸底	外面　口縁部ヨコナデ。 体部～底部ヘラケズリ。 内面　黒色研磨 （ロクロ整形によるものかどうか不明）	胎土は砂粒を含みにぶい黄橙色 （10YR7/4）
10 (回)	坏 (土)	〈14.2〉 — —	体部は外反し、底部は丸味をおびた平底。	外面　口縁部ヨコナデ。 体部～底部ヘラケズリ。 内面　体部に放射状、見込み部にラセン暗文が施される。黒色処理。	胎土は砂粒を多く含みにぶい黄褐色(10YR7/4)
11 (完)	小形甕 (土)	8.8 8.2 —	口縁部は短く外反し、胴～底部は球状を呈する小形な器形。肉厚。	外面　口縁部ヨコナデ。胴～底部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は精選されず砂粒を多く含み灰黄褐色(10YR4/2)内面にスス付着
12 (回)	小形甕 (土)	(6.8) — —	口縁部は短く外反する、肉厚で小形な器形。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヨコナデ。	胎土は精選されず砂粒を多く含みにぶい赤褐色 （5YR5/4）
13 (完)	甑 (土)	(12.1) 15.6	口縁部は短く外反し、胴部は中央でやや膨らみ、底部は偏平な丸底を呈する肉厚な器形。底部には焼成後の3つの穿孔あり	外面　口縁部ヨコナデ。胴部～底部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部～底部ヘラナデ。	胎土は精選されず砂粒を多く含みにぶい黄橙色 （10YR7/4）
14 (回)	甕 (土)	(22.0) — —	口縁部はくの字状に外反する。 最大径は口縁部にある。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含み橙色を呈する （7.5YR7/6）
15 (完)	甕 (土)	— — 4.4	底部平底で、肉厚な器形。	外面　胴部～底部ヘラケズリ。 内面　胴部～底部ナデ	胎土は精選されず砂粒を多く含み橙色(7.5YR7/6)焼成は良好でなく脆い

いるが、10には体部に放射状・見込部にラセン状のいわゆる畿内系暗文がみとめられる。

11・12は、きわめて小形な土師器甕である。

13は、土師器小形甕に焼成後に三個の穴を穿ち、甑としたものである。

14はくの字状口縁の土師器甕である。

16は、河床礫の縁片の両側を加工した石錘と考えられる。

時　期

本住居址は、八世紀第Ⅰ四半期、十二遺跡第Ⅰ期に位置付けられよう。

(21)　Ｈ－21号住居址

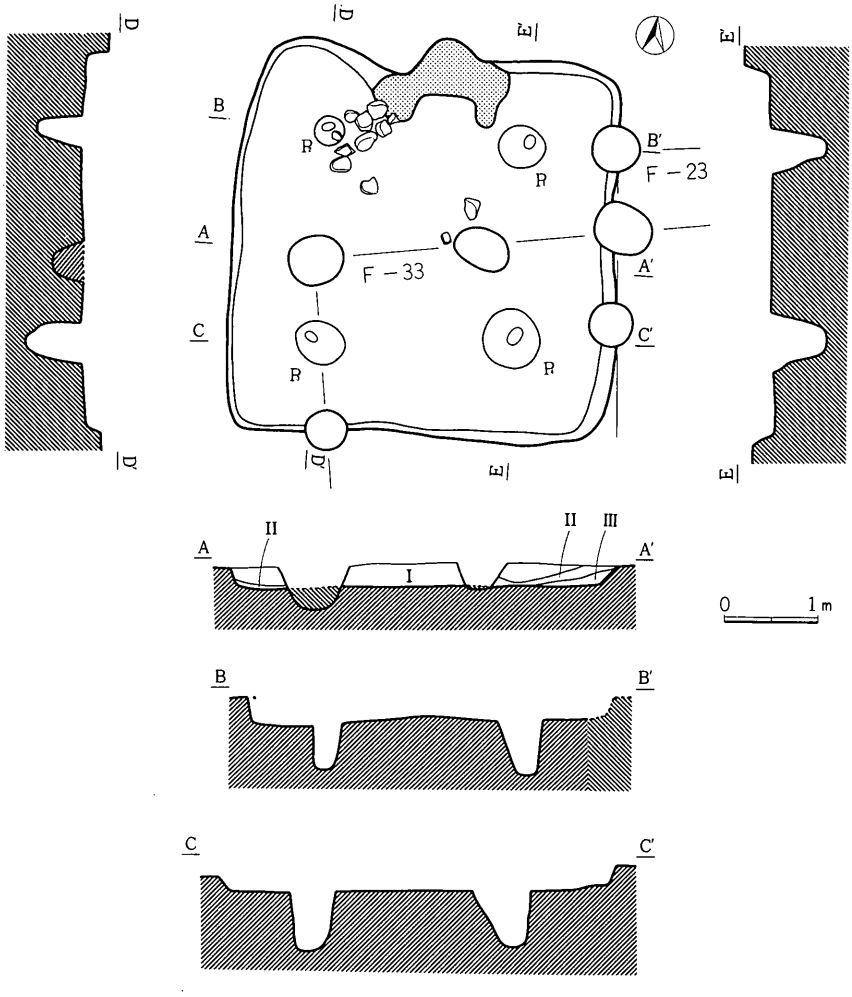
住居址　第88図

Ｈ－21号住居址は、第Ⅰ区ヒ－32グリッドにおいて検出された。

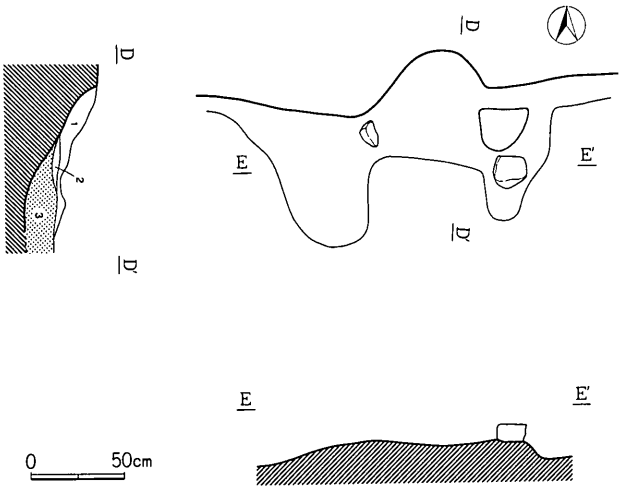
本住居址は、Ｆ－23・Ｆ－33号の２基の堀立柱建物址と重複するが、この両者に切られて存在するのが本住居址である。

本住居址は、南北4.1m東西4.1mの隅丸方形を呈し、床面積14.3m²を測り、南北軸方向はＮ－13°－Ｗを指す。壁高は、15～20cmを測る。壁溝は認められない。床面は、中央部は硬質で、周辺部がやや軟弱な貼り床となっている。

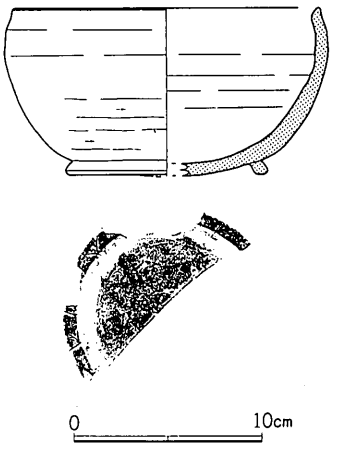
ピットは、P_1～P_4の四個のピットが対で認められた。P_1は50×45cm深さ55cm、P_2は33×30cm深さ45cm、P_3は55×45cm深さ60cm、P_4は65×60cm深さ60cmを測る。



第88図　Ｈ－21号住居址実測図（１：80）



第89図　H－21号住居址カマド実測図（1：40）



第90図　H－21号住居址出土遺物（1：4）

第32表　H－21住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1（完）	埦（須）	〈16.3〉 9.1 （10.7）	半球状を呈する体部に、高台が貼り付けられる。	外面　体部ロクロヨコナデ。底部回転ヘラケズリ、切り離し方法不明。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は比較的精選され灰白色（10Y7/1）焼成良好

遺物は、いずれも覆土中からの出土である。

覆土は、3層に分層され、埋土的な堆積状況を呈していた。I層はローム粒子・小粒パミス・スコリアを多量に含む暗褐色土層（10YR 3/3）、II層はローム粒子・小粒パミス・スコリアを大量に含む褐色土層（10YR 4/4）、III層はローム粒子をよく含むにぶい黄褐色土層（10YR 4/3）であった。

カマド　第89図

カマドは、住居址の北壁中央にあり、ほぼ完全に破壊された状態にあった。その各所にカマドの構材である面取り軽石と安山岩が露呈していた。

本カマドの土層は、3層に分層された。1層は粘土・焼土・灰・カーボンが混じるにぶい赤褐色土層（10YR 4/3）、2層は赤褐色焼土層（5 YR 4/8）、3層は火床部の埋土である黒褐色土層（5 YR 2/1）であった。

遺　物　第90図

遺物の出土量は、他の住居址とくらべてきわめて少ない。須恵器片十数片と土師器片数十片が検出されているのみである。

このうち図示し得たのは1の須恵器埦のみで、半球状の形態を呈するものである。

この他の遺物は、図示しえなかった。

時　期

本住居址は、遺物が少ないため時期決定が非常に困難である。おおよそ八世紀代のものとみられるが所属期は不明である。

(22)　H－22号住居址

住居址　第91図

H－22号住居址は、第Ⅰ区ハ－35グリッドにおいて検出された。

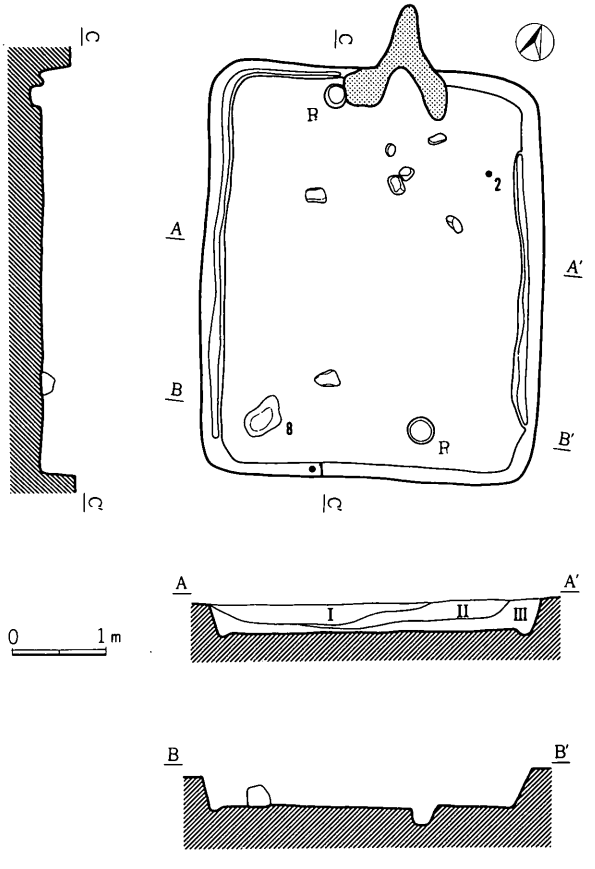
本住居址は、H－23号住居址の東北コーナーを切って存在している。

本住居址は、南北4.3m東西3.6mの隅丸長方形を呈し、床面積12.4m²を測り、南北軸方向はN－20°－Wを指す。壁高は、30～40cmを測る。壁溝は、東壁においてのみ、幅10～20cm深さ5cmほどのものがみられた。床面は、全体に硬質な貼り床となっている。

ピットは、P_1 P_2の二個のピットが認められたのみである。P_1は30×28cm深さ20cm、P_2は25×25cm深さ15cmを測る。

遺物は、1の須恵器蓋が南壁に貼り付いて、2の須恵器坏が東北コーナーの床面より20cm浮いて出土した。この他はいずれも覆土中からの出土である。なお、本住居址西南コーナーには表面にくぼみのみられる大形の安山岩礫が据え置かれていた(8)。工作用にでも用いられたのであろうか。

覆土は、3層に分層された。Ⅰ層は小粒スコリアを多く含む黒色土層（10YR 2/1)、Ⅱ層はローム粒子・小粒パミス・スコリアを大量に含む黒褐色土層(10YR 3/2)、Ⅲ層は小粒スコリア・パミスを多く含む黒色土層（10YR 2/1）であった。



第91図　H－22号住居址実測図（1：80)

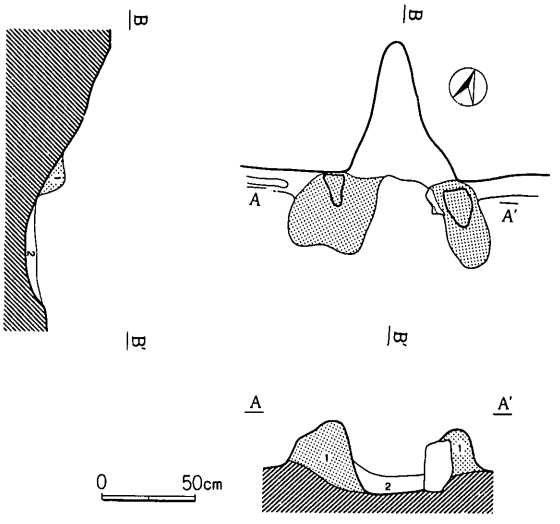
カマド　第92図

カマドは、住居址の北壁中央にあるが、ほぼ完全に破壊された状態にあり、僅かに左右両袖の一部をとどめるのみであった。本カマドの袖には、面取り軽石と赤褐色粘土（1層　5 YR 4/8）が用いられていた。なお、前方には、カマドの構材である面取り軽石と安山岩が散乱していた。

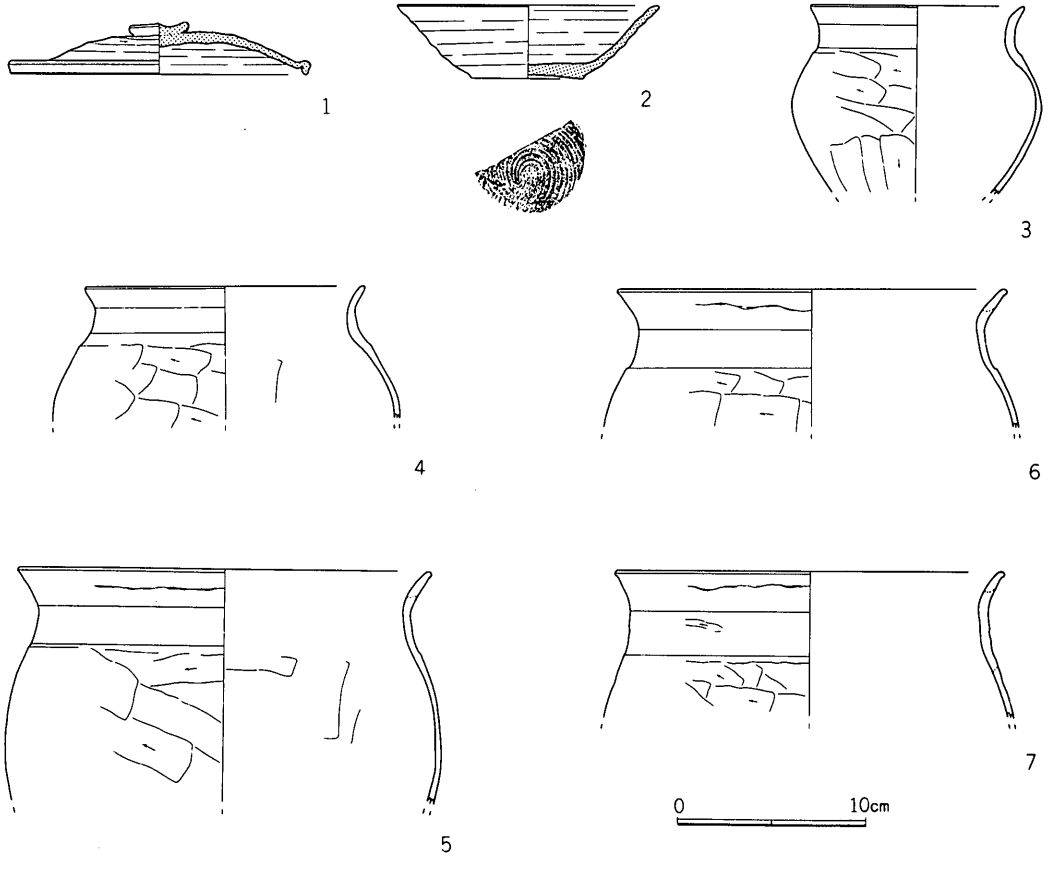
本カマド内の土層は、2層の明赤褐色焼土層（5 YR 5/8）のみであった。

遺　物　第93図

遺物の出土量は、他の住居址とくらべてきわめて少ない。須恵器片十数片と土師器



第92図　H－22号住居址カマド実測図（1：40）



第93図　H－22号住居址出土遺物（1：4）

第33表　Ｈ－22号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1（完）	蓋（須）	3.1 2.8 15.8	つまみ部は偏平な擬宝珠形を呈する。	外面　体部ロクロヨコナデ。 天井部回転ヘラケズリ。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は比較的精選され赤褐色（5YR4/8）焼成良好
2（回）	坏（須）	〈13.9〉 4.0 （5.9）	体部は外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り、未調整。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	完全な還元炎焼成となっておらず黄橙色(10YR8/6)の断面をみせている
3（回）	甕（土）	〈11.4〉 — —	口縁部が僅かコの字状に外反する小形甕あるいは台が付けられるか。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みにぶい褐色を呈する(7.5YR5/4)
4（回）	甕（土）	〈14.9〉 — —	口縁部はコの字状に外反し、胴部は球状に膨らむ。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含み褐色（7.5YR4/3）
5（回）	甕（土）	〈22.0〉 — —	口縁部はコの字状に外反する。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みにぶい橙色（7.5YR6/4）
6（回）	甕（土）	〈20.6〉 — —	口縁部はコの字状に外反する。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は比較的精選されにぶい橙色(7.5YR7/4)
7（回）	甕（土）	〈20.7〉 — —	口縁部は僅かコの字状に外反する。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みにぶい橙色（7.5YR7/4）

片数十片、このほか図示した遺物が検出されているのみである。

1は宝珠ツマミ須恵器蓋、2は須恵器坏である。

3～7は、コの字状口縁をみせる土師器甕である。このうち3は台付甕、4は小形球胴甕となろうか。

時　期

本住居址は、遺物が少ないため時期決定が困難であるが、とりあえずは、八世紀第Ⅳ四半期～九世紀初頭、十二遺跡第Ⅳ期に位置付けておこう。

(23)　Ｈ－23号住居址

住居址　第94図

Ｈ－23号住居址は、第Ⅰ区ハ－35グリッドにおいて検出された。

本住居址は、Ｈ－24号住居址に西北コーナーを、Ｈ－22号住居址に東北コーナーを切られて存在している。

本住居址は、南北4.5m東西5.0mの隅丸方形を呈し、床面積16.9m²を測り、南北軸方向はＮ－9°－Ｗを指す。壁高は、30～40cmを測る。壁溝は、幅20～30cm深さ10cmほどのものが全周に認められた。床面は、全体に硬質な貼り床となっている。

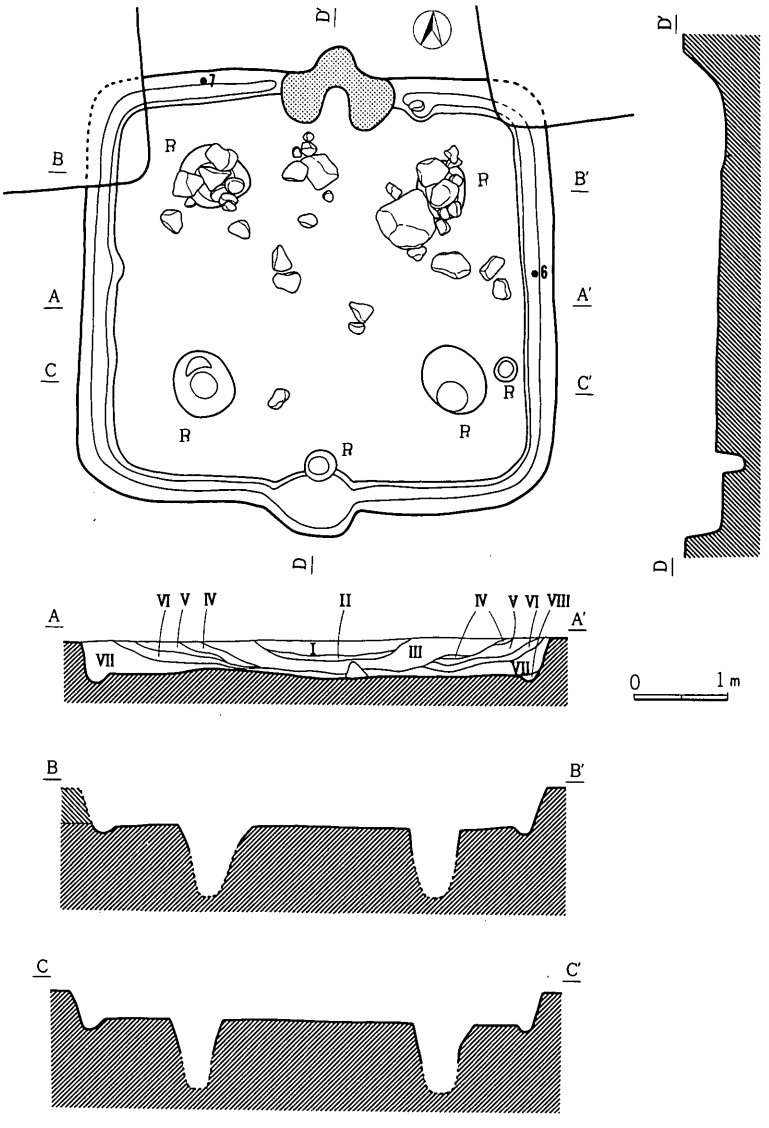
なお、住居址Ⅰ区Ⅱ区の床面直上には、安山岩礫三十数点が認められた。なかでもP_1に接して

みられた礫は径60cmをこえるもので、大人二人でようやく抱えることができるだけの大きさであった。このような礫は、おそらく住居廃絶後そのくぼみに廃棄されたものであろうと考えられよう。

ピットは、P_1～P_4の四個のピットが対で認められたほか、P_4の脇にはP_5が、南壁際中央にはP_6が認められた。

P_1は60×50cm深さは推定で70cm、P_2は75×60cm深さは推定で75cm、P_3は70×60cm深さは推定で75cm、P_4は75×60cm深さは推定で70cm、P_5は25×25cm、P_6は35×30cm深さ30cmを測る。

遺物は、6の鎌が壁溝中から出土している。また、自然遺物として、7の馬歯が北壁東側に貼り付いて出土している。これ以外は、いずれも覆土中からの出土である。



第94図　H－23号住居址実測図（1：80）

覆土は、8層に分層された。I層は小粒スコリアを多く含み小粒パミスを若干含む黒褐色土層（7.5YR 3/2 ）、II層は小粒スコリアを多く含み小粒パミスを若干含み灰を含む黒色土層(10YR 2/1)、III層は小粒スコリアを多く含み小粒パミスを若干含む黒褐色土層(7.5YR 3/2)、IV層は小粒スコリアを多く含み小粒パミスを若干含む黒色土層（10YR 2/1)、V層は小粒スコリアを多く含み小粒パミスを若干含む黒褐色土層（7.5YR 3/2 ）、VI層は小粒スコリアを多く含み小粒パミスを若干含む黒色土層（10YR 2/1)、VII層は小粒スコリアを多く含み小粒パミスを若干含む黒褐色土層（7.5YR 3/2)、VIII層はローム粒子を若干含む褐色土層（7.5YR 4/3）であった。

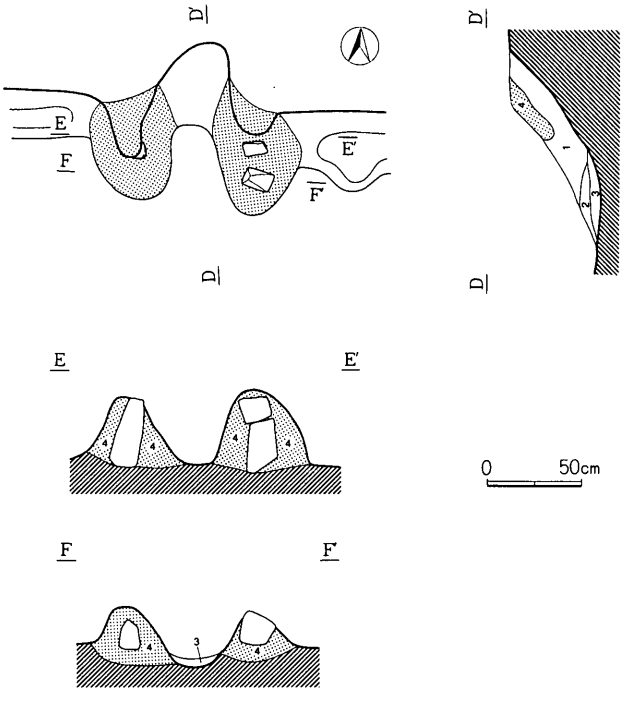
カマド　第95図

カマドは、住居址の北壁中央にあるが、左右両袖と天井部の一部をとどめるのみで、その他は破壊された状態にあった。本カマドの構材には、面取り軽石と灰黄褐色粘土（4層 10YR 4/2）が用いられていた。

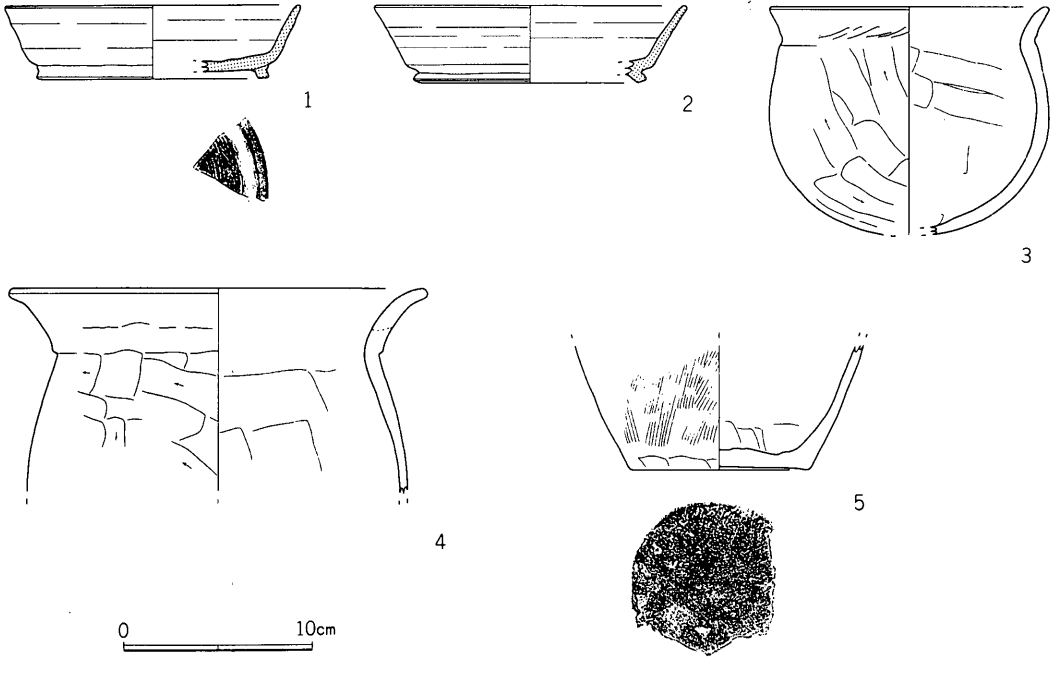
本カマドの土層は、3層に分層された。1層は若干の粘土・焼土が混じる黒褐色土層（10YR 2/2）2層は粘土をよく含む黒褐色土層（10YR 3/2）、3層は明褐色焼土層（7.5YR 5/8）であった。

遺　物　第96・97図

遺物の出土量は、他の住居址とくらべて少ない。須恵器片には蓋・坏・



第95図　H－23号住居址カマド実測図（1：40）



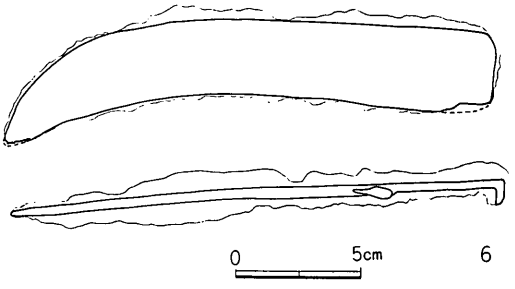
第96図　H－23号住居址出土遺物（1：4）

第34表　H－23号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1 (回)	坏 (須)	〈15.6〉 3.9 〈12.3〉	体部は直線的に外反し、底部には高台が貼り付けられる。	外面　体部ロクロヨコナデ。 底部回転ヘラケズリ。切り離し方法不明。 内面　ロクロヨコナデ、（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み灰白色(10Y 7/1)焼成良好
2 (回)	坏 (須)	〈16.6〉 4.1 〈12.3〉	体部は直線的に外反し、底部には高台が貼り付けられる。	外面　体部ロクロヨコナデ。 内面　ロクロヨコナデ （ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み灰色 (10Y 4/1)
3 (回)	甕 (土)	〈14.8〉 12.1 —	口縁部は短く外反し、胴～底部は球状を呈する。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みにぶい黄橙色 (10YR7/4)
4 (回)	甕 (土)	〈22.2〉 — —	口縁部はくの字状に外反する。 この種の甕にしてはやや肉厚。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みにぶい黄橙色 (10YR7/4)
5 (回)	甕 (土)	— — (9.5)	底部平底。	外面　胴部刷毛目状のナデ。底部ヘラナデ。 内面　ヘラナデ。	胎土は石英粒子を特徴的に含み橙色 (10YR7/4)

第35表　H－23号住居址出土遺物一覧表〈鉄器〉

挿図番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
6	鎌	鉄	19.5	3.3	0.5	(95)	



第97図　H－23号住居址出土遺物（1：3）

高台付坏・甕が、土師器片には坏・甕が認められた。図示した遺物が主だったものである。

1・2は須恵器高台付坏である。

3は、土師器小形球胴甕である。

4は、くの字状口縁をみせる土師器甕である。5は外面に刷毛目状調整をみせる土師器甕の底部である。

6は、鎌で、先端部の湾曲がさほど強くないものである。

時　期

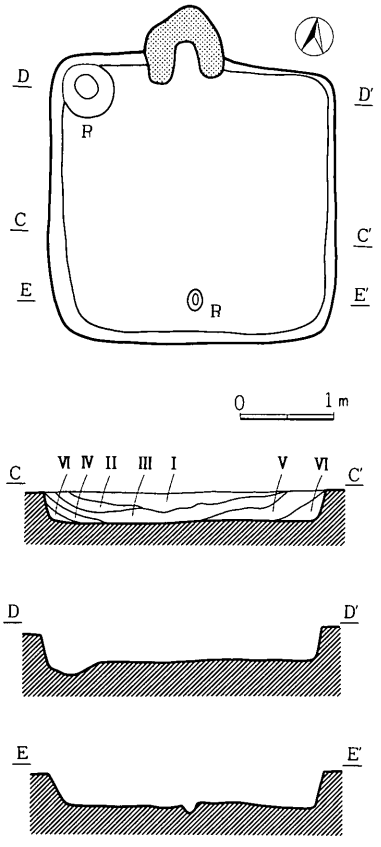
本住居址は、八世紀第Ⅰ四半期、十二遺跡第Ⅰ期に位置付けておこう。

(24)　H－24号住居址

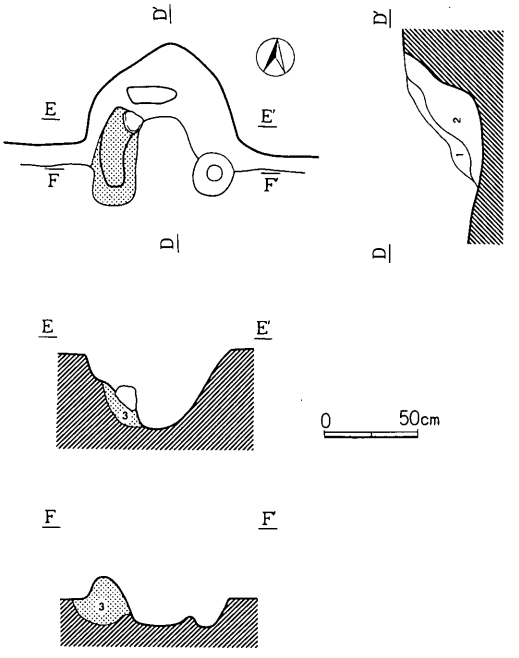
住居址　第98図

H－24号住居址は、第Ⅰ区ハ－36グリッドにおいて検出された。

本住居址は、H－23号住居址の西北コーナーを切って存在している。



第98図　H－24号住居址実測図（1：80）



第99図　H－24号住居址カマド実測図（1：40）

本住居址は、南北3.0m東西3.0mの隅丸方形を呈し、床面積7.6m²を測り、南北軸方向はN－15°－Wを指す。壁高は、30～35cmを測る。壁溝は認められない。床面は、貼り床ではないが、全体に硬質な床となっている。

ピットは、西北コーナーにP_1が、南壁際中央にP_2が認められたのみである。

P_1は60×55cm深さ15cm、P_2は22×15cm深さ10cmを測る。

遺物は、いずれも覆土中からの出土である。

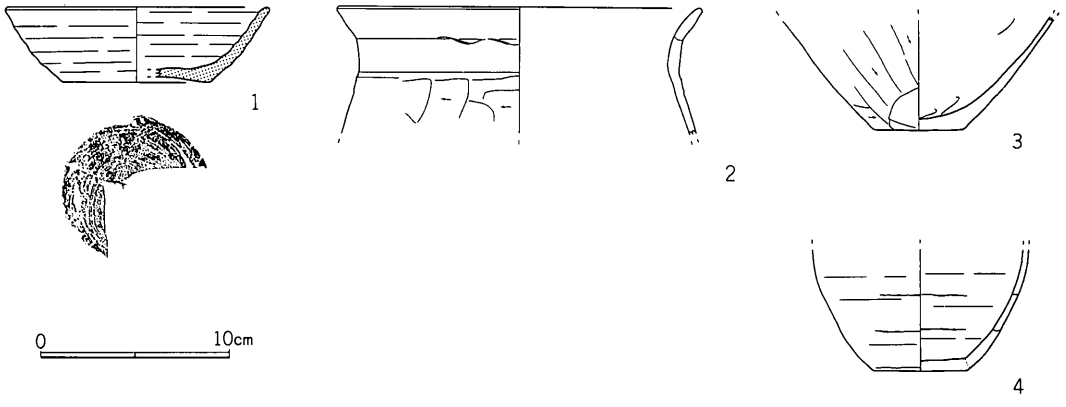
覆土は、6層に分層された。I層は小粒スコリアを多く含む黒褐色土層（10YR 3/2）、II層はローム粒子をまったく含まない黒色土層(10YR 2/1)、III層はローム粒子・パミスを多く含むにぶい黄褐色土層（10YR 4/3)、IV層はローム粒子をまったく含まない黒色土層（10YR 1.7/1)、V層はパミスをよく含む黒褐色土層（10YR 3/2)、VI層はローム粒子を多く含む暗褐色土層（10YR 3/4）であった。

カマド　第99図

カマドは、住居址の北壁中央よりやや西よりにあるが、左袖の一部をとどめるのみで、その他

第36表　H－24号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1（回）	坏（須）	〈13.9〉 4.0 〈7.8〉	体部は外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り、未調整。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み灰白色（10Y7/1）
2（回）	甕（土）	〈19.3〉 — —	口縁部はコの字状に外反する。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含み明赤褐色（5YR5/8）
3（回）	甕（土）	— — 4.6	底部平底。	外面　胴部～底部ヘラケズリ。 内面　ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みにぶい黄橙色（10YR7/4）
4（回）	甕（土）	— — 5.0	底部平底。	外面　胴部ロクロヨコナデ。 底部ナデ、切り離し方法不明 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み橙色（7.5YR7/6）



第100図　H－24号住居址出土遺物（1：4）

は破壊された状態にあった。本カマドの袖の構材には、にぶい橙色粘土（3層　7.5YR 7/4）が用いられていた。

本カマド内の土層は、2層に分層された。1層は灰をよく含み若干カーボンを含む褐色土層(7.5YR 4/6) 2層は多量の焼土を含む黒褐色土層（7.5YR 2/2）であった。

遺　物　第100図

遺物の出土量は、他の住居址とくらべて少ない。須恵器片には坏・甕・四耳壺が、土師器片には坏・甕が認められた。図示した遺物が主だったものである。

1は須恵器坏で、回転糸切り未調整の底部をみせている。

2はコの字状口縁をみせる土師器甕である。

4は外面にロクロによるカキ目状調整をみせる土師器甕の底部である。

時　期

本住居址は、九世紀前葉、十二遺跡第V期に位置付けておこう。

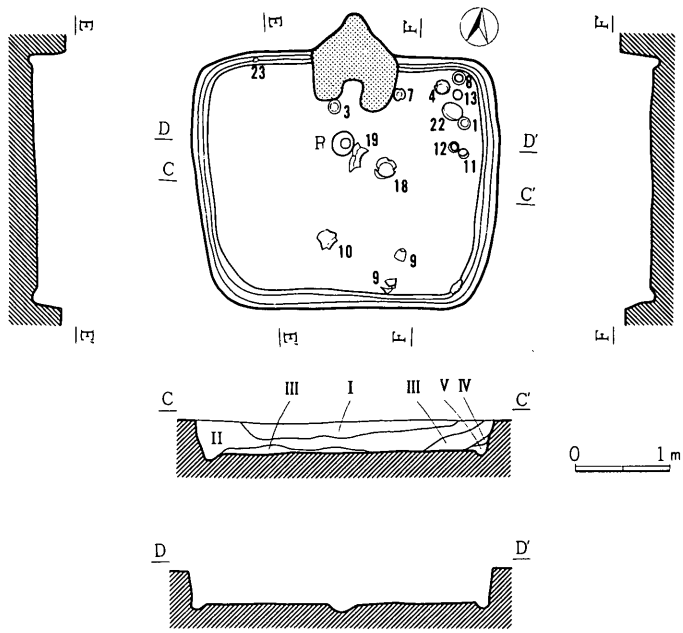
(25)　H－25号住居址

住居址　第101図

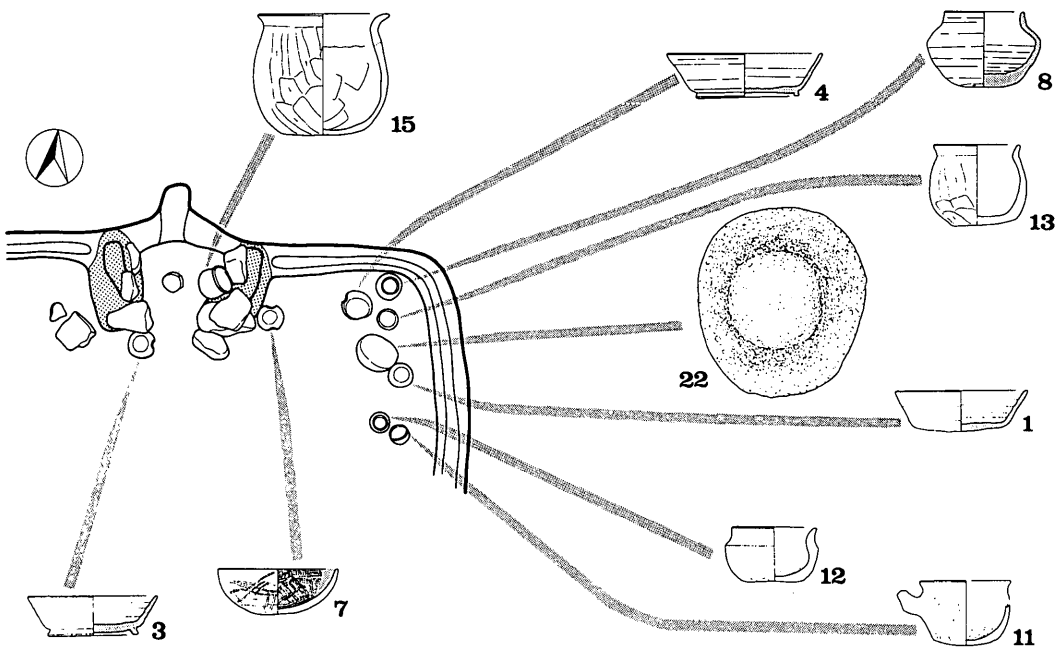
H－25号住居址は、第Ⅰ区ノ・ハ－36グリッドにおいて検出された。

本住居址は、南北2.7m東西3.25mの小形隅丸方形を呈し、床面積6.5m²を測り、南北軸方向はN－14°－Wを指す。壁高は、25～35cmを測る。壁溝は、幅10～15cm深さ8cm程のものが住居を全周する。床面は、貼り床ではないが全体に硬質な床となっている。

ピットは、住居の中央付近にP_1が認められたのみである。P_1は25×25cmを測り、深さは7



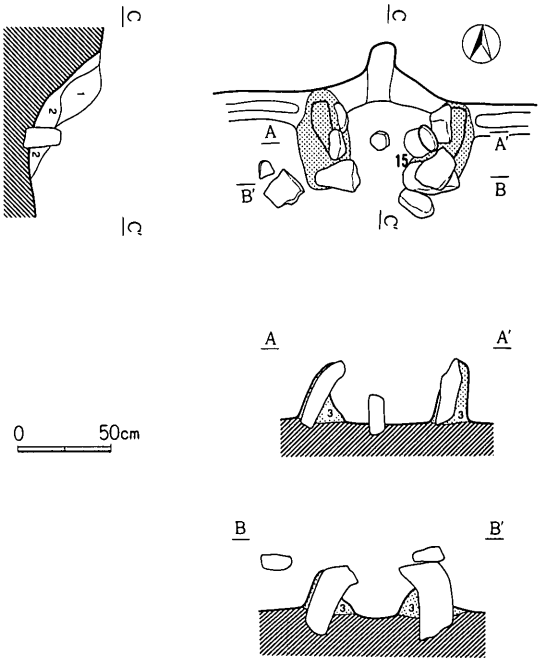
第101図　H－25号住居址実測図（1：80）



第102図　H－25号住居址遺物分布図（1：40）

cmときわめて浅い。

遺物は、カマド東の東壁際に、きわめて良好な状態で一括資料が検出された(第102図・図版三十五)。7・4・8・13・22・1・12・11は、いずれも完形もしくはそれに近い床面直上の出土遺物で、このうち、1の坏と22石鉢が伏せた状態で、それ以外は正常位で検出されている。これらの遺物は、何らかの理由で一括遺棄されたものと考えられる。また、3の高台付坏もカマド前の床面直上の出土遺物である。なお、これ以外の18・19・10・9の大形破片等は、床面よりやや浮いた状態で検出されている。



第103図　H－25号住居址カマド実測図（1：40）

覆土は、5層に分層され、2層以上は埋土的な堆積状況を呈していた。I層は小粒パミス・スコリアを含む黒褐色土層（10YR 3/2)、II層は大量のローム粒子・スコリアを含むにぶい黄褐色土層（10YR 4/3)、III層はローム粒子をまったく含まない黒色土層（10YR 1.7/1)、IV層はローム粒子を若干含むにぶい黄褐色土層（10YR 4/3)、V層はローム粒子を多く含むにぶい黄褐色土層（10YR 4/3）であった。

カマド　第103図

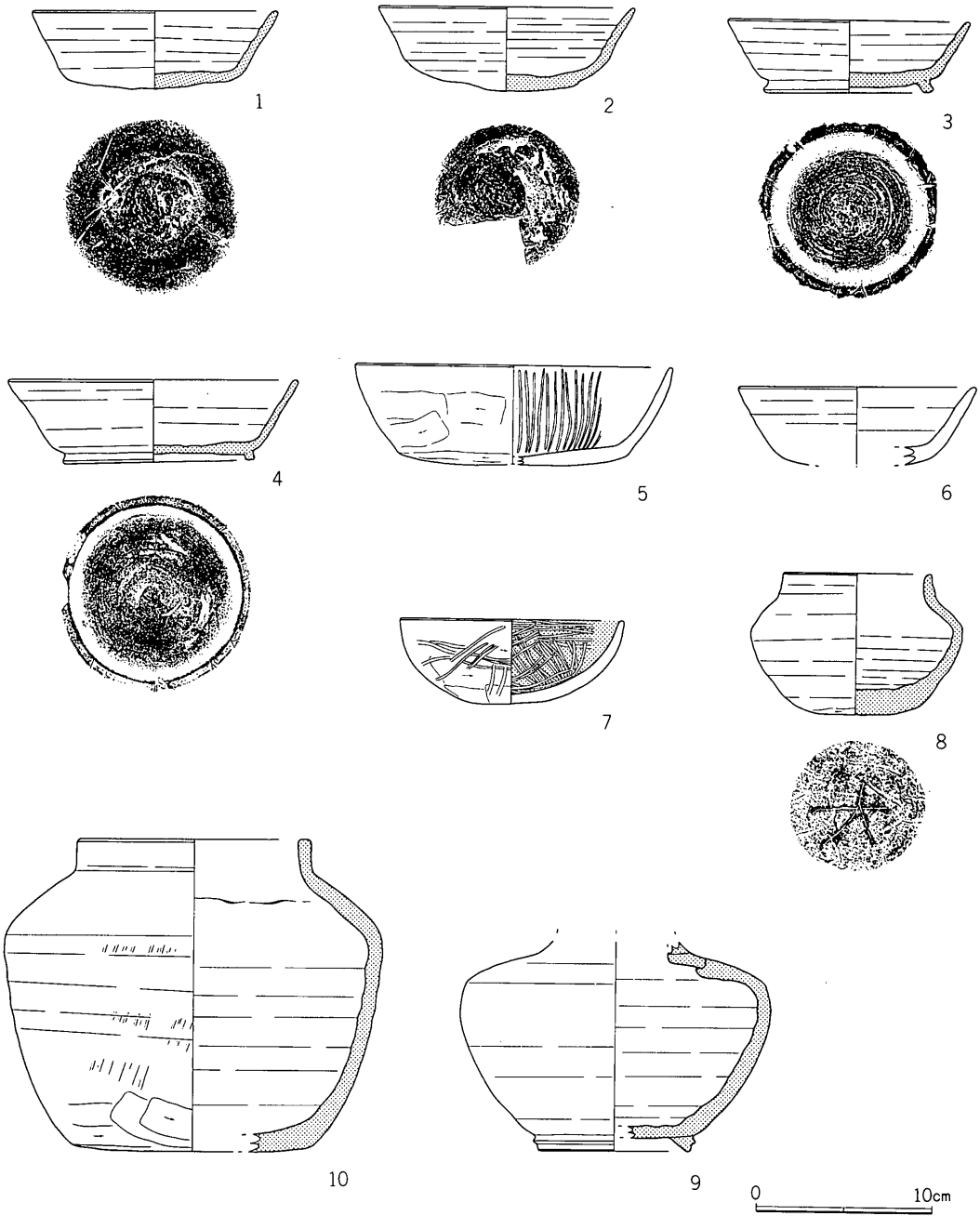
カマドは、住居址の北壁中央にあり、比較的良好な状態で残っていた。前述した遺物が何らかの理由で一括遺棄されたのと同様、破壊されずに残されたのかもしれない。その袖部の芯には面取り軽石と安山岩礫が用いられている。そのなかで、ことにBのエレベーションにみられる面取り軽石は『状の形態に整形されたものであった。これら芯となる礫は3層（粘土）によって固められていた。なお、火床部の中央には面取り軽石の支脚が立っていた。また、カマド内からは15の土師器甕が検出されている。

本カマド内の土層は、2層に分層された。1層は若干の灰・カーボンが混じる黒褐色土層（10YR 2/2)、2層は粘土をよく含み若干の灰を含むにぶい黄褐色土層（10YR 4/3）であった。

遺　物　第104・105・106図

本住居址は、遺物の出土量は他の住居址とくらべてさほど多いわけではないが、完形もしくは遺存度の高い遺物が数多く出土している。

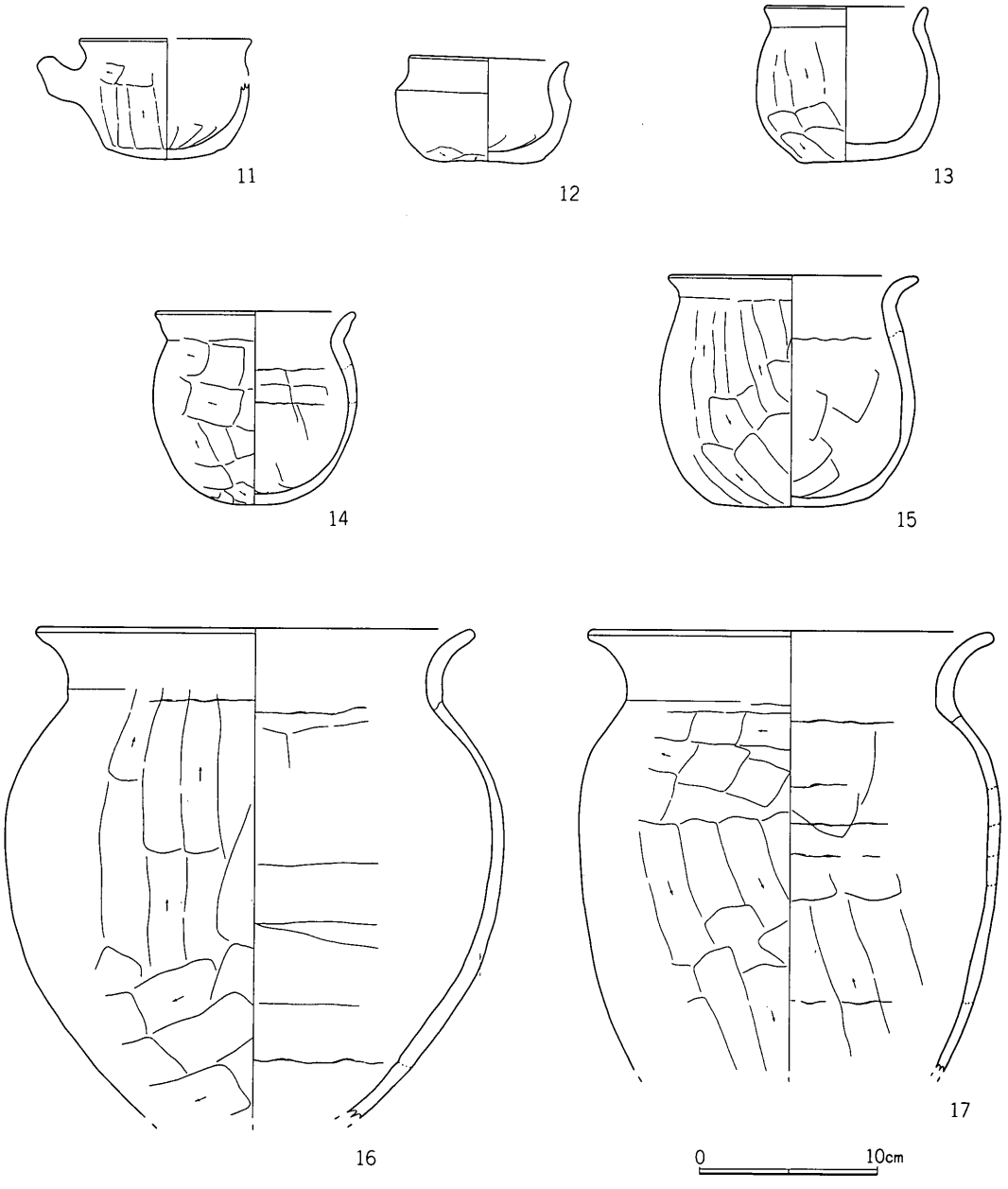
1・2は、回転ヘラキリによる底部をみせる須恵器坏である。



第104図　Ｈ－25号住居址出土遺物（１：４）

３・４は、回転ヘラケズリによる底部をみせる須恵器高台付坏である。

５は、体部に放射状暗文をみせる畿内系の土師器坏である。その見込部については、剝落が激しいが、僅かにラセン暗文が観察された。

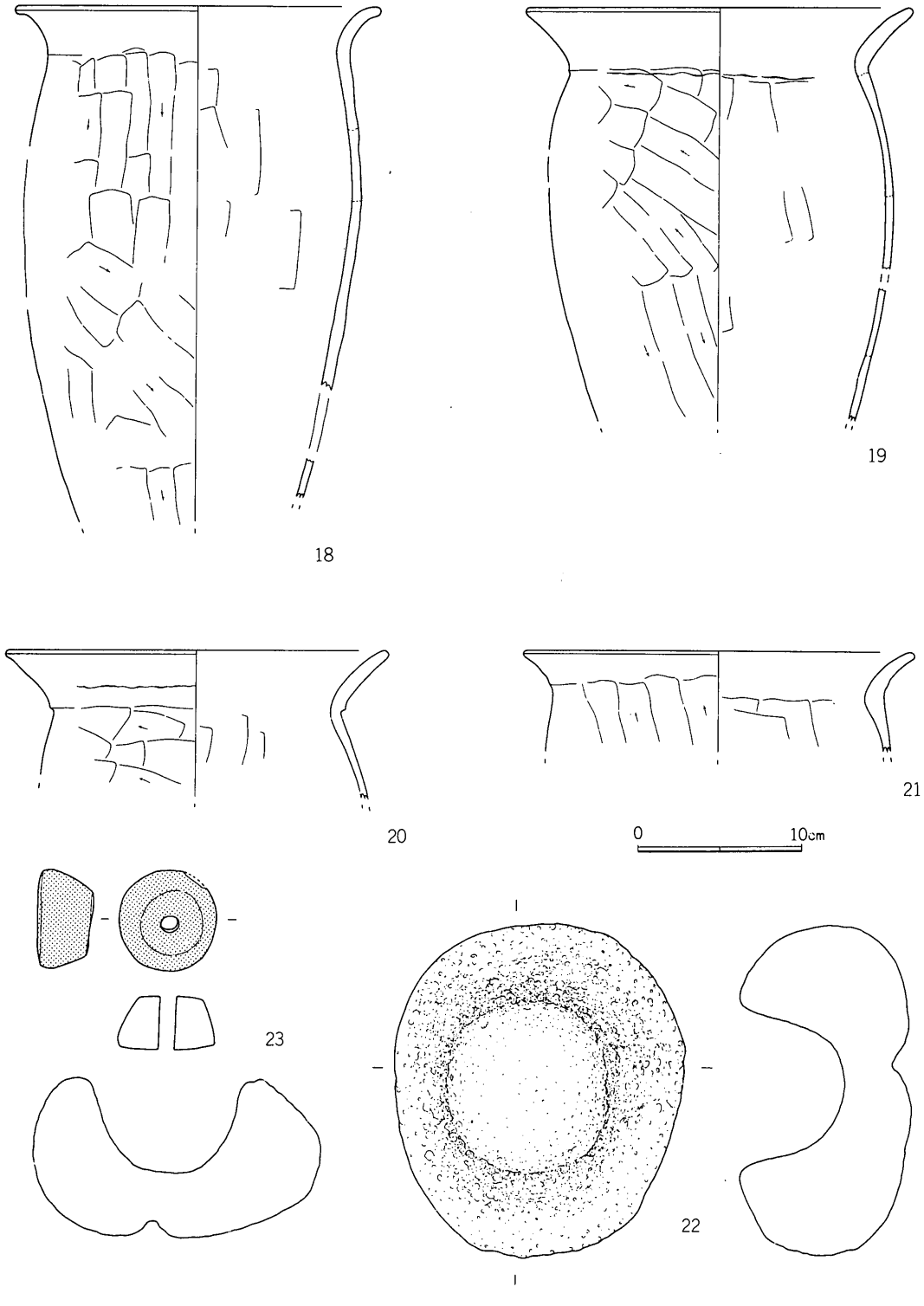


第105図　H－25号住居址出土遺物（1：4）

6は問題となる資料で、ロクロ整形による土師器坏の破片である。形態的には、1・2などの須恵器坏のプロポーションが模されたものと考えられる。その切り離し手法は不明であるが、おそらくは回転ヘラキリによるものとおもわれる。カマド内出土。

7は土師器埦で、内面黒色研磨のなされるものである。

8・10は須恵器短頸壺で、8は小形、10は大形な器形を呈している。



第106図　Ｈ－25号住居址出土遺物（１：４　23のみ１：３）

第37表　H－25住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1 (完)	坏 (須)	14.0 4.4 9.4	体部は外反し、底部は丸味を帯びた平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。 底部回転ヘラキリ、未調整。 内面　ロクロヨコナデ。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み灰白色(10Y8/1)完形。
2 (完)	坏 (須)	14.6 4.7 8.1	体部は外反し、底部は丸味を帯びた平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。 底部回転ヘラキリ、未調整。 内面　ロクロヨコナデ。(ロクロ右回転)	完全な還元炎焼成となっておらずにぶい褐色(7.5YR5/4)
3 (完)	坏 (須)	13.8 4.1 9.7	体部は直線的に外反し、底部には高台が貼り付けられる。	外面　体部ロクロヨコナデ。 底部回転ヘラケズリ、切り離し方法不明 内面　ロクロヨコナデ。(ロクロ左回転)	胎土は砂粒を含み灰白色(7.5Y7/1)
4 (完)	坏 (須)	16.5 4.6 10.9	体部は直線的に外反し、底部には高台が貼り付けられる。	外面　体部ロクロヨコナデ。 底部回転ヘラキリの後、回転ヘラケズリ 内面　ロクロヨコナデ。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み灰色(10Y5/1)
5 (回)	坏 (土)	〈18.0〉 5.6 〈13.0〉	体部は外反し、底部は丸味を帯びた平底。	外面　口縁部ヨコナデ。体部～底部ヘラケズリ 内面　体部に放射状、見込み部にラセン暗文が施こされる。	胎土は砂粒を含み橙色(7.5YR7/6)
6 (回)	坏 (土)	〈13.5〉 — —	体部は外反し、底部は偏平な丸底を呈するものと思われる。	外面　体部ロクロヨコナデ。 底部切り離し方法及び調整不明。 内面　ロクロヨコナデ。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み橙色(7.5YR7/6)
7 (完)	埦 (土)	12.8 4.8 4.6	体部は丸味を帯びて外反し、底部はやや偏平な丸底。小形品。	外面　口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリの後若干のヘラミガキ。底部ヘラケズリ。 内面　黒色研磨。	胎土は砂粒を含み褐色(7.5YR4/3)完形。
8 (完)	短頸瓶 (須)	8.4 8.0 —	口縁部は短く直立し、胴部は球状を呈し底部は偏平な丸底を呈する。 小形な器形。	外面　口縁部～胴部ロクロヨコナデ。底部ナデの後周囲ヘラケズリ。切り離し方法不明。 内面　ロクロヨコナデ。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み灰色(10Y5/1)底部に「木」のヘラ記号あり。完形。
9 (回)	長頸瓶 (須)	— — (8.7)	肩の張る感じの胴部となり、底部には高台が貼り付けられる。	外面　ロクロヨコナデ。自然釉が付着。 底部切り離し方法不明。 内面　ロクロヨコナデ。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み灰色(10Y5/1)三段構成のつなぎ
10 (回)	短頸壺 (須)	(13.8) 17.8 〈13.6〉	口縁部は短く直立し、肩の張る胴部。 やや丸味を帯びた平底を呈する。	外面　胴部は叩きの後ロクロヨコナデ。 胴下半～底部ヘラケズリ。 内面　ロクロヨコナデ。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み灰褐色(5YR4/2)
11 (完)	小形甕 (土)	〈9.7〉 6.7 6.9	口縁部は短く外反し、胴部は球状に膨み、底部は丸味を帯びた平底を呈する小形な器形。把手が貼り付けられる。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部～底部ヘラケズリ。 内面　口縁～胴上半ヨコナデ。底部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含み暗赤褐色(5YR3/4)を呈する
12 (完)	小形甕 (土)	9.0 5.9 6.5	口縁部は短く直立気味に外反し、丸味を帯びた平底を呈する。小形で肉厚。あるいは8のような須恵器短頸壺の模放形態か。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部～底部ヘラケズリ。 内面　口縁部～胴部ヨコナデ。底部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含み浅黄橙色を呈する(10YR8/3)完形品。
13 (完)	小形甕 (土)	9.1 8.6 6.5	口縁部は短く外反し、胴部は球状を呈し底部平底の小形で肉厚な器形。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部・底部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含み暗赤褐色(5YR3/4)完形品。
14 (回)	小形甕 (土)	〈11.2〉 10.7 —	口縁部はくの字状に外反し、胴部は球状、底部丸底の小形な器形。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部・底部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みにぶい橙色(5YR6/4)
15 (完)	甕 (土)	14.0 12.7 8.7	口縁部はくの字状に外反し、胴部は球状、底部平底。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部～底部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みにぶい黄橙色(10YR7/3)を呈する。完形品。
16 (回)	甕 (土)	〈21.0〉 — —	口縁部は外反し、胴部は球状を呈する。 底部の形状は不明。肉厚。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みにぶい黄橙色を呈する。(10YR7/4)
17 (回)	甕 (土)	〈22.7〉 — —	口縁部は丸味を帯びて外反し、やや肩の張る胴部を呈する。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を多く含みにぶい褐色を呈する。(7.5YR5/3)
18 (完)	甕 (土)	22.3 — —	口縁部はゆるく外反し、胴部は比較的直線的に下降する。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を多く含み浅黄橙色を呈する。(10YR8/3)
19 (完)	甕 (土)	23.6 — —	口縁部はくの字状に外反し、胴部は比較的直線的にすぼまる。 最大径は口縁部にある。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を多く含み明赤褐色(5YR5/6)

第38表　Ｈ－25号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
20（完）	甕（土）	23.4 — —	口縁部はくの字状に外反する。最大径は口縁部にある。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ	胎土は砂粒を含みにぶい赤褐色（5YR5/4）
21（回）	甕（土）	(23.9) — —	口縁部は比較的短く外反する。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部刷毛目状のナデ。	胎土は砂粒を多く含みにぶい赤褐色(5YR5/4)

9は須恵器長頸瓶と考えられるが、頸部を失っている。

11～14は土師器小形甕で、このうち11の片側には把手が付けられている。

第39表　Ｈ－25号住居址出土遺物一覧表〈石器〉

挿図番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
22	石鉢	輝石安山岩	20.0	17.7	10.4	4,220	完形

15は12～14と比べるとやや大ぶりであるが、土師器小形甕である。

16・17は、胴部の膨らむ、やや肉厚な土師器甕である。

18・21は、口縁部が緩く短く外反し、胴部にはタテ方向にヘラケズリの見られるやや肉厚な土師器長胴甕である。

19・20は、くの字状口縁の土師器甕で、その最大径が口縁部にあるものである。

22は、河床礫の中央部をくり抜いた石鉢である。23は、土製紡錘車である。

時　期

本住居址は、八世紀第Ⅰ四半期、十二遺跡第Ⅰ期に位置付けられよう。

(26)　Ｈ－26号住居址

住居址　第107図

Ｈ－26号住居址は、第Ⅰ区ノ・ハ－36グリッドにおいて検出された。調査時には湧水が激しくその精査には困難をきたした。

本住居址は、Ｈ－32号住居址大部分を切って存在している。

本住居址は、南北5.4ｍ東西5.4ｍの隅丸方形を呈し、床面積23.5m²を測り、南北軸方向はＮ－8°－Ｗを指す。壁高は、50～60cmを測る。壁溝は、住居址をほぼ全周すると考えられるが、湧水が激しく東壁・北壁においては確認できなかった。確認できた部分で幅20～30cm深さ10cmほどを測った。床面は、全体にかなり硬質な貼り床となっている。

ピットは、P_1～P_4の四個のピットが対で認められたほか、南壁際にはP_5・P_6のピットが対で認められた。P_1は65×60cm深さは推定で55cm、P_2は60×55cm深さは推定で50cm、P_3は70×65cm深

さは推定で55cm、P_4は70×60cm深さは推定で50cm、P_5は35×35cm深さ25cm、P_6は35×35cm深さ20cmを測る。

遺物は、8の土師器坏が北壁に貼り付いて、1・2の須恵器坏がカマド前の床面直上に伏せられた状態で出土した。6の須恵器高台付坏もカマド脇の床面直上から出土している。また、15の鎌は、南壁際床面より10cm上から出土している。この他はいずれも覆土中からの出土である。

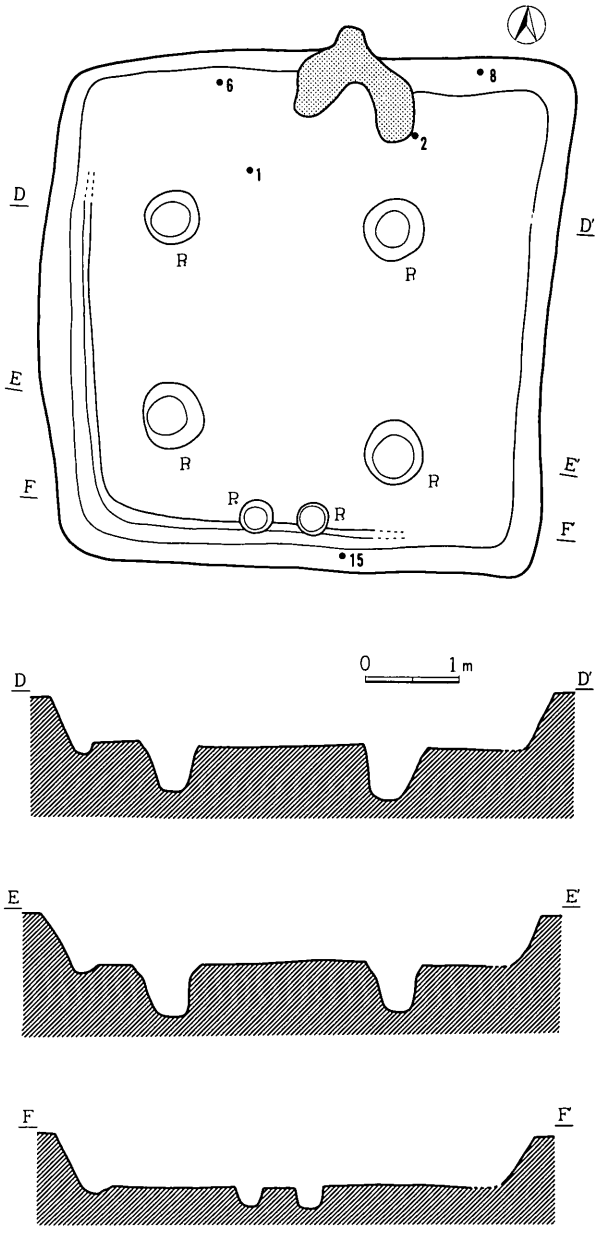
カマド　第108図

カマドは、住居址の北壁中央にあり、左右両袖の一部と天井石をとどめていた。本カマドの煙道部天井には、両脇を面取り軽石で支えられた扁平な安山岩礫が伏せられていた。左右両袖の構材にはにぶい赤褐色粘土(1層　5 YR 4/4)が用いられていた。

遺　物　第109・110・111図

遺物は、須恵器では蓋・坏・高台付坏・甕、土師器では坏・鉢・甕などが出土している。また、鉄器として、15の鎌が出土している。

1～5は回転糸切りによる底部をみせる須恵器坏、6・7は回転糸切りによる底部をみせる須恵器高台付坏である。



第107図　H－26号住居址実測図（1：80）

8・9は、ロクロ整形による土師器で、8が坏、9は鉢である。8の坏の底部には、回転糸切りの後手持ちヘラケズリが加えられている。

10も、ロクロ整形による土師器甕で、回転糸切りによる底部をみせている。

11～13は土師器甕で、12・13はコの字状口縁をみせている。

14は、扁平な河床礫の中央部に穿孔のなされたもので、紡錘車の使用時にその軸を受けるためのものと考えられようか。

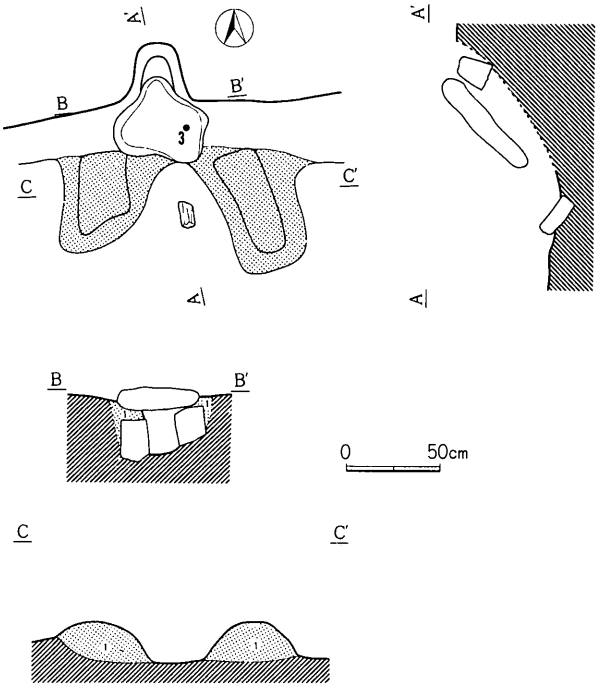
15は、大形の鎌で、その基部には柄の木質部も付着している。

16は、黒曜石の石鏃で、その先端部が乳頭状に作り出されたものである。

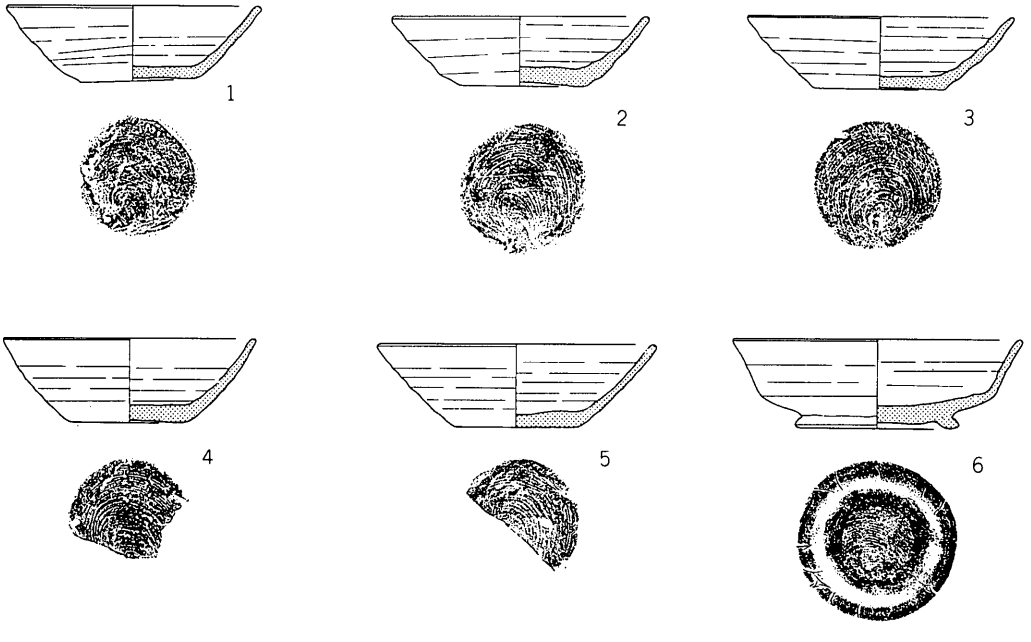
17は、玉石である。ことさら加工の加えられたものではないが装飾品だったのであろうか。

時　期

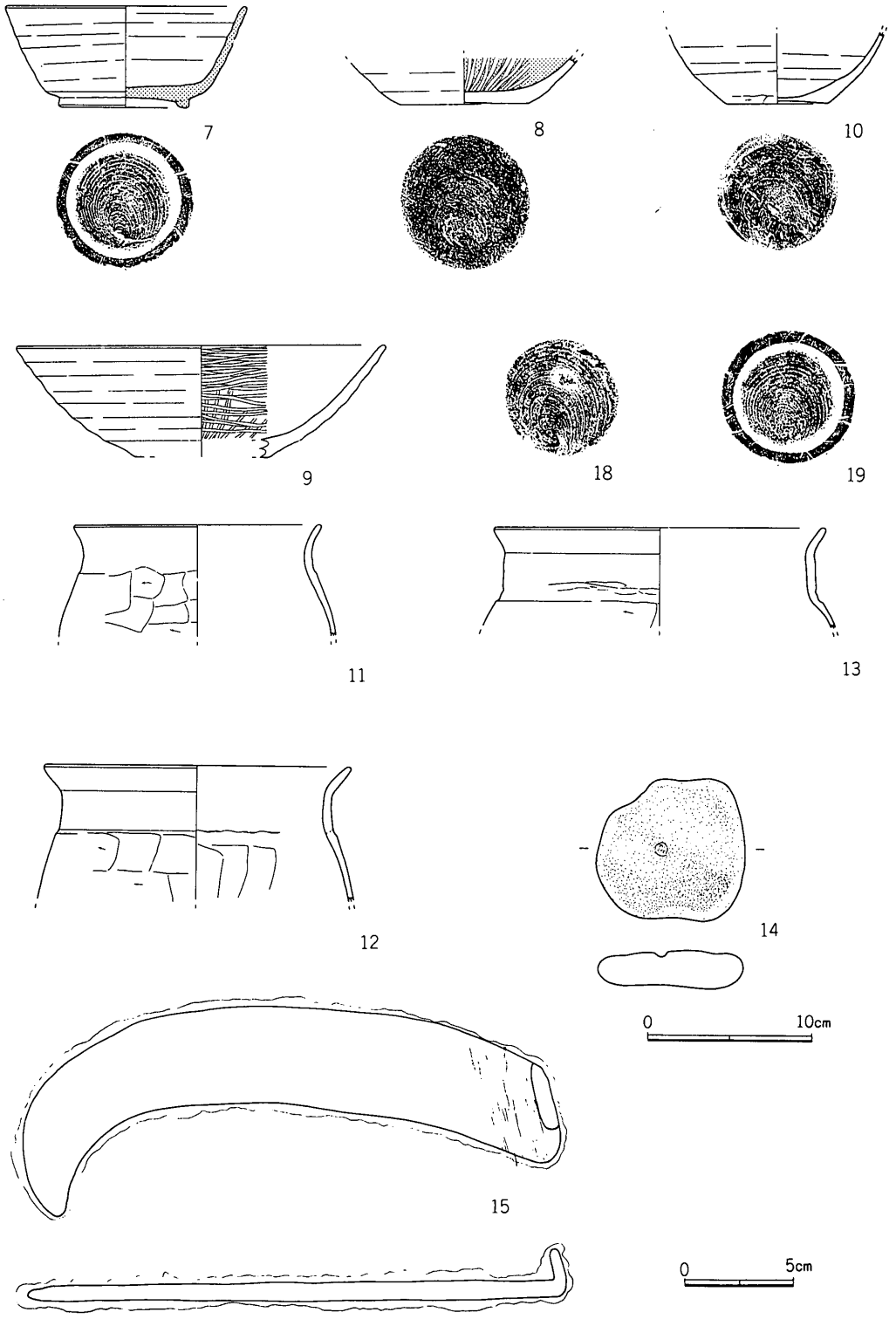
本住居址は、九世紀前葉、十二遺跡第Ⅴ期に位置付けられよう。



第108図　Ｈ－26号住居址カマド実測図（１：40）



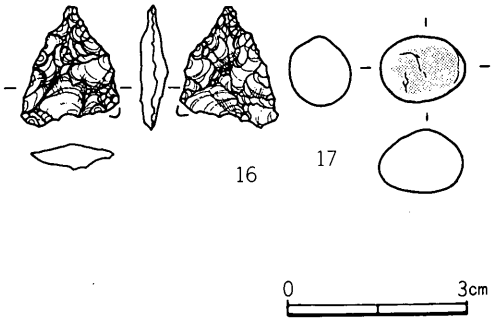
第109図　Ｈ－26号住居址出土遺物（１：４）



第110図　H－26号住居址出土遺物実測図(15＝1：3、他は1：4)

第40表　Ｈ－26号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1（完）	坏（須）	13.4 4.0 6.0	体部は外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り未調整。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み灰白色（5Y7／2）
2（完）	坏（須）	13.6 3.7 6.7	体部は外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り、未調整。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み灰白色(10Y8/1)完形品。
3（完）	坏（須）	14.0 3.8 6.8	体部は外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り、未調整。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ左回転）	胎土は砂粒を含み灰白色（7.5Y7／1）
4（回）	坏（須）	〈13.4〉 4.5 〈6.0〉	体部は外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り、未調整。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を多く含みにぶい黄褐色（10YR5／3）内外面に火襷
5（回）	坏（須）	〈14.8〉 4.4 6.4	体部は外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り、未調整。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を多く含み灰白色（10Y8／1）
6（回）	坏（須）	（15.3） 4.7 8.0	体部は稜をもって外反し、底部には高台が貼り付けられる。	外面　体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切りの後、高台部貼り付け。 内面　体部ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み灰色を呈する（10Y6／1）
7（完）	坏（須）	14.6 6.1 7.6	体部は直線的に外反し、底部には高台が貼り付けられる。	外面　体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切りの後、高台部貼り付け。 内面　体部ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み灰色を呈する（10Y6／1）
8（回）	坏（土）	— — 7.6	底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切りの後、手持ちヘラケズリ。 内面　黒色研磨。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含みにぶい黄橙色（10YR7/4）
9（回）	鉢（土）	〈22.4〉 — —	体部は丸味を帯びて外反し、平底となるものと思われる。	外面　体部ロクロヨコナデ。 底部切り離し方法不明。 内面　ヘラミガキ。（ロクロ右回転）	胎土は比較的精選され明赤褐色（5YR5／6）
10（回）	甕（土）	— — 6.0	胴部はふくらみ、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り、未調整。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み橙色（5YR6／6）
11（回）	甕（土）	〈15.0〉 — —	口縁部はゆるく外反する。 比較的小形な器形。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みにぶい橙色（7.5YR6/4）
12（回）	甕（土）	〈18.5〉 — —	口縁部はコの字状に外反する。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含み明赤褐色を呈する(5YR5/6)
13（回）	甕（土）	〈20.1〉 — —	口縁部はコの字状に外反する。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。	胎土は砂粒を含みにぶい赤褐色（5YR5／3）



第111図　Ｈ－26号住居址出土遺物（４：５）

第41表　Ｈ－26号住居址出土遺物一覧表〈金属器・石器〉

挿図番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
14	不明	玄武岩質安山岩	8.6	9.0	2.6	325	
15	鎌	鉄	24.4	4.6	0.8	(270)	
16	石鏃	黒曜石	(2.0)	(1.6)	0.4	(0.7)	
17	不明	チャート	1.0	1.3	0.9	1.8	

(27)　H－27号住居址

住居址　第112図

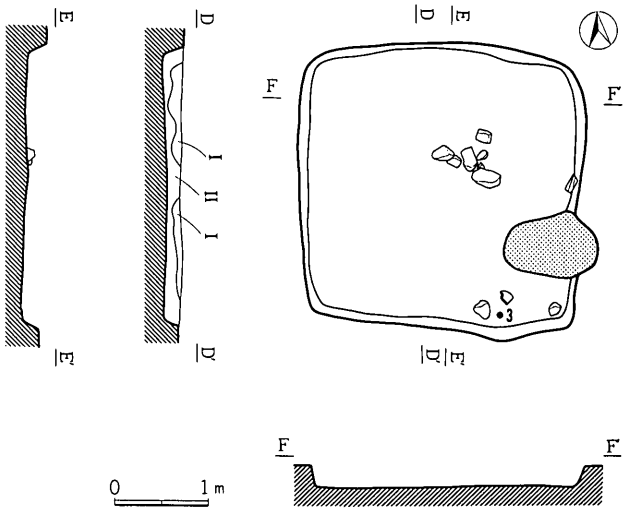
H－27号住居址は、第Ⅰ区ヒ－34グリッドにおいて検出された。

本住居址は、F－28号掘立柱建物址を切って存在している。本住居址の貼り床下からF－28のP_1 P_2が検出されており、その切り合い関係は明確である。

本住居址は、南北3.1m東西3.05mの小形隅丸方形を呈し、床面積7.6m²を測り、南北軸方向はN－0°－Sを指す。壁高は、15～20cmを測る。壁溝は認められなかった。床面は、全体にかなり硬質な薄い貼り床となっている。

ピットは認められなかった。

遺物は、3の土師器坏が南壁際の床面直上より正常位で出土した。この他はいずれも覆土中からの出土である。



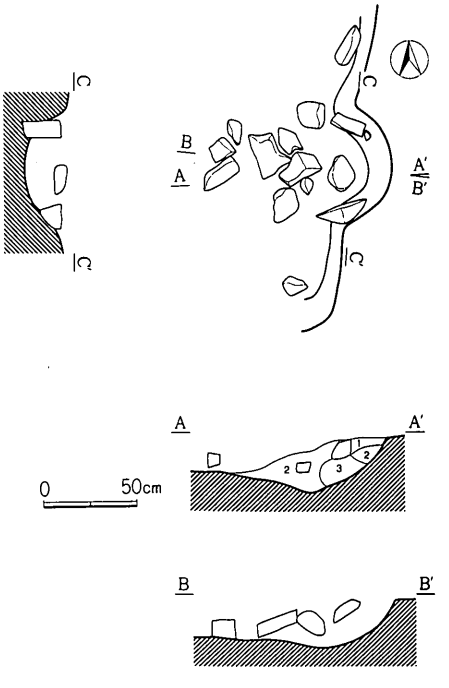
第112図　H－27号住居址実測図（1：80）

覆土は、2層に分層された。Ⅰ層は小粒パミスを多量に含む黒褐色土層（10YR 2/3）、Ⅱ層は小粒パミスを多く含む黒色土層（10YR 2/1）であった。

カマド　第113図

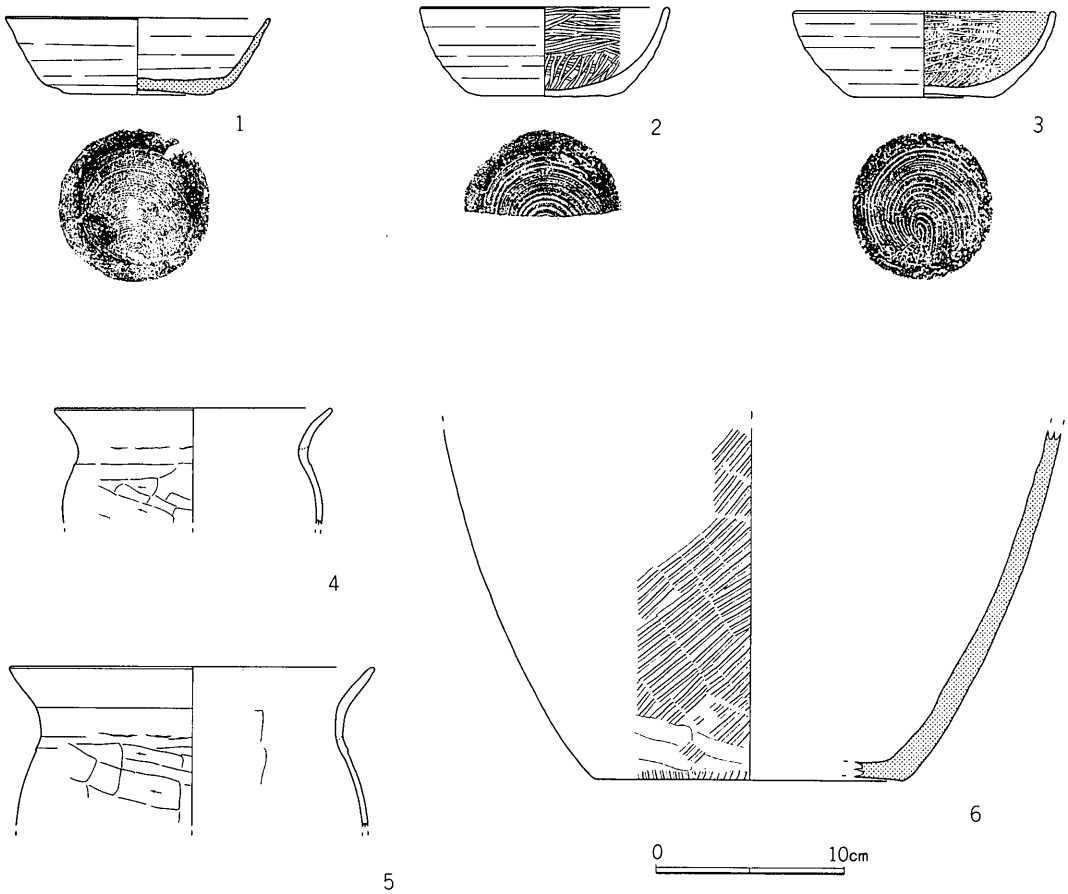
カマドは、住居址の東壁やや南よりにあるが、完全に破壊された状態にあり、住居址内にはその構材である面取り軽石・安山岩礫が散乱していた。

本カマド内の土層は、3層に分層された。1層は焼土を多く含むにぶい赤褐色土層（5 YR 4/4）、2層は焼土をあまり含まない黒色土層（5 YR 1.7/1）、3層は焼土を多く含むにぶい赤褐色土層（5 YR 4/4）であった。



第113図　H－27号住居址カマド実測図（1：40）

遺　物　第114図



第114図　Ｈ－27号住居址出土遺物（１：４）

第42表　Ｈ－27号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1（回）	坏（須）	〈14.0〉 4.0 〈6.8〉	体部は外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。底部回転糸切りの後周囲手持ちヘラケズリ。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み灰白色（10Y7/2）
2（回）	坏（土）	〈13.2〉 4.6 〈6.6〉	体部は丸味を帯びて外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。底部回転糸切りの後、周囲手持ちヘラケズリ。 内面　ロクロヨコナデの後ヘラミガキ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み浅黄橙色（7.5YR8/3）
3（回）	坏（土）	（13.8） 4.5 7.2	体部は丸味を帯びて外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。底部回転糸切り未調整 内面　ロクロヨコナデの後、黒色研磨。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含みにぶい橙色（7.5YR7/3）
4（回）	甕（土）	〈14.7〉 — —	口縁部は丸味を帯びて外反し、胴部は球状を呈する	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みにぶい褐色（7.5YR5/3）
5（回）	甕（土）	〈19.2〉 — —	口縁部は僅かコの字状に外反する。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みにぶい赤褐色（5YR5/4）
6（回）	甕（須）	— — 〈16.2〉	底部平底。	外面　叩きがなされる。自然釉が全面に付着。 内面　ナデ。	胎土は砂粒を多く含み灰色（N5/0）

遺物の出土量は総じて少ないが、須恵器では坏・甕、土師器では坏・甕などが出土している。

1は回転糸切りによる底部をみせる須恵器坏である。

2・3は回転糸切りによる底部をみせるロクロ土師器坏である。

4・5は、僅かにコの字状となる口縁をみせている土師器甕である。

6は、須恵器甕の胴部以下である。

時　期

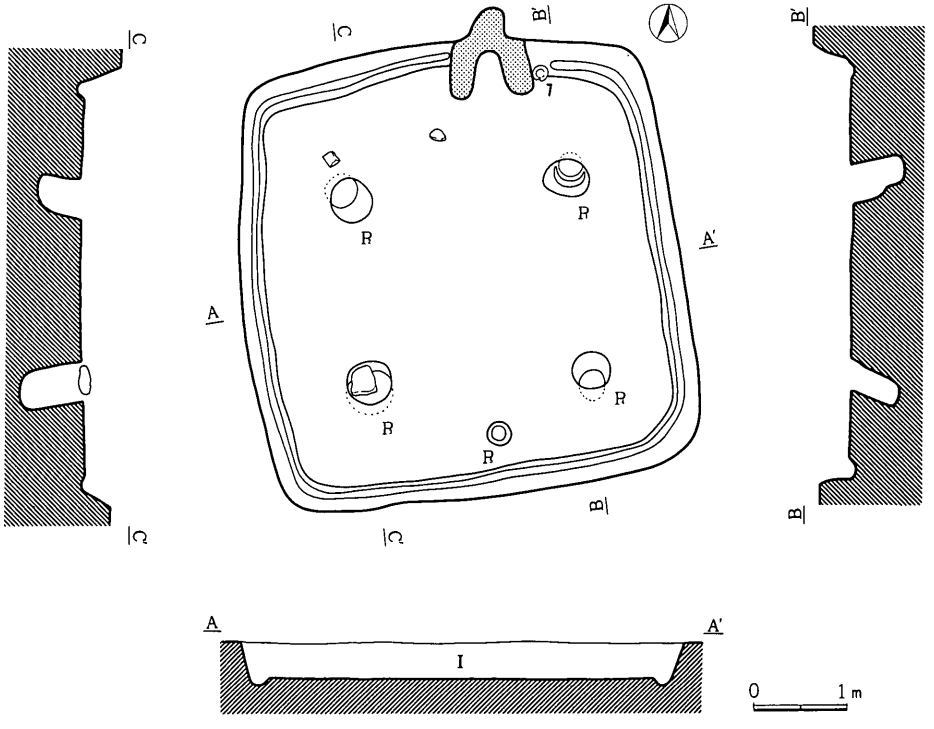
本住居址は、八世紀第IV四半期～九世紀初頭、十二遺跡第Ⅳ期に位置付けられよう。

(28)　H－28号住居址

住居址　第115図

H－28号住居址は、第Ⅰ区ノ－36・37グリッドにおいて検出された。

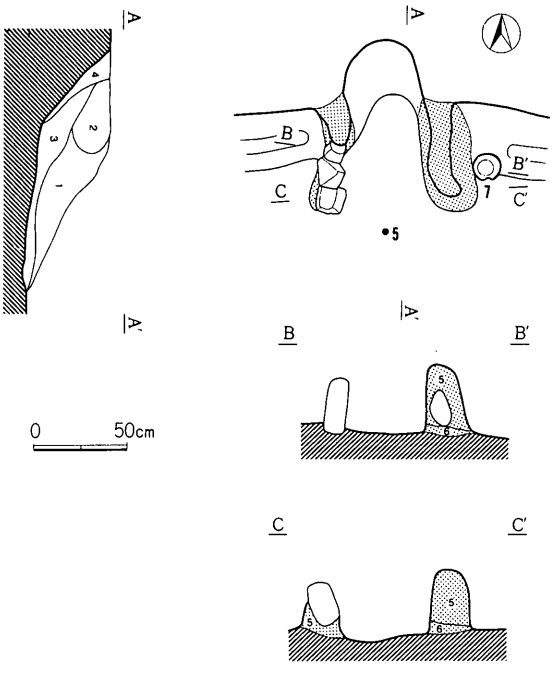
本住居址は、南北4.8m東西4.7mの隅丸方形を呈し、床面積16.5m²を測り、南北軸方向はN－11°－Wを指す。壁高は、30～40cmを測る。壁溝は幅15～20cm深さ5～10cm程度のものが、住居址を全周している。床面は、全体にかなり硬質な薄い貼り床となっている。



第115図　H－28号住居址実測図（1：80）

ピットは、P_1～P_4の四個のピットが対で認められたが、これらはいずれも住居の外側に向かって斜めに開くものであった。また、南壁際にはP_5が認められた。P_1は50×40cm深さ60cm、P_2は45×45cm深さ50cm、P_3は50×45cm深さ70cm、P_4は40×40cm深さ50cm、P_5は25×25cmを測る。

遺物は、7の土師器坏がカマド東脇北壁際の床面直上より正常位で、また5の須恵器高台付坏がカマドの火床面直上より正常位で出土した。この他はいずれも覆土中からの出土である。萬年通寶はカマド付近の覆土中からの出土である。



第116図　H－28号住居址カマド実測図（1：40）

覆土は、Ⅰ層は小粒スコリアを多く含み、極大スコリアを若干含む黒色土層（10YR 2/1）であった。

カマド　第116図

カマドは、住居址の北壁中央よりやや東よりにあり、左右両袖の一部をとどめていた。西袖の芯には面取り軽石が、東袖の芯には安山岩礫が用いられ、灰褐色粘土（5層　5 YR 4/2）と黒色土層（6層　5 YR 1.7/1）で固められていた。

本カマド内の土層は、4層に分層された。1層は若干の灰とカーボンを含む黒色土層（10YR 2/1）、2層は焼土を多く含む褐色土層（7.5YR 4/6）、3層は若干の焼土を含むカマドの構材である褐色粘土層（7.5YR 4/3）、4層もカマドの構材であるにぶい褐色粘土層（7.5YR 5/4）であった。

遺　物　第117・118図

遺物の出土量は総じて少ないが、須恵器では蓋・坏・高台付坏・甕、土師器では坏・埦・鉢・甕などが出土している。

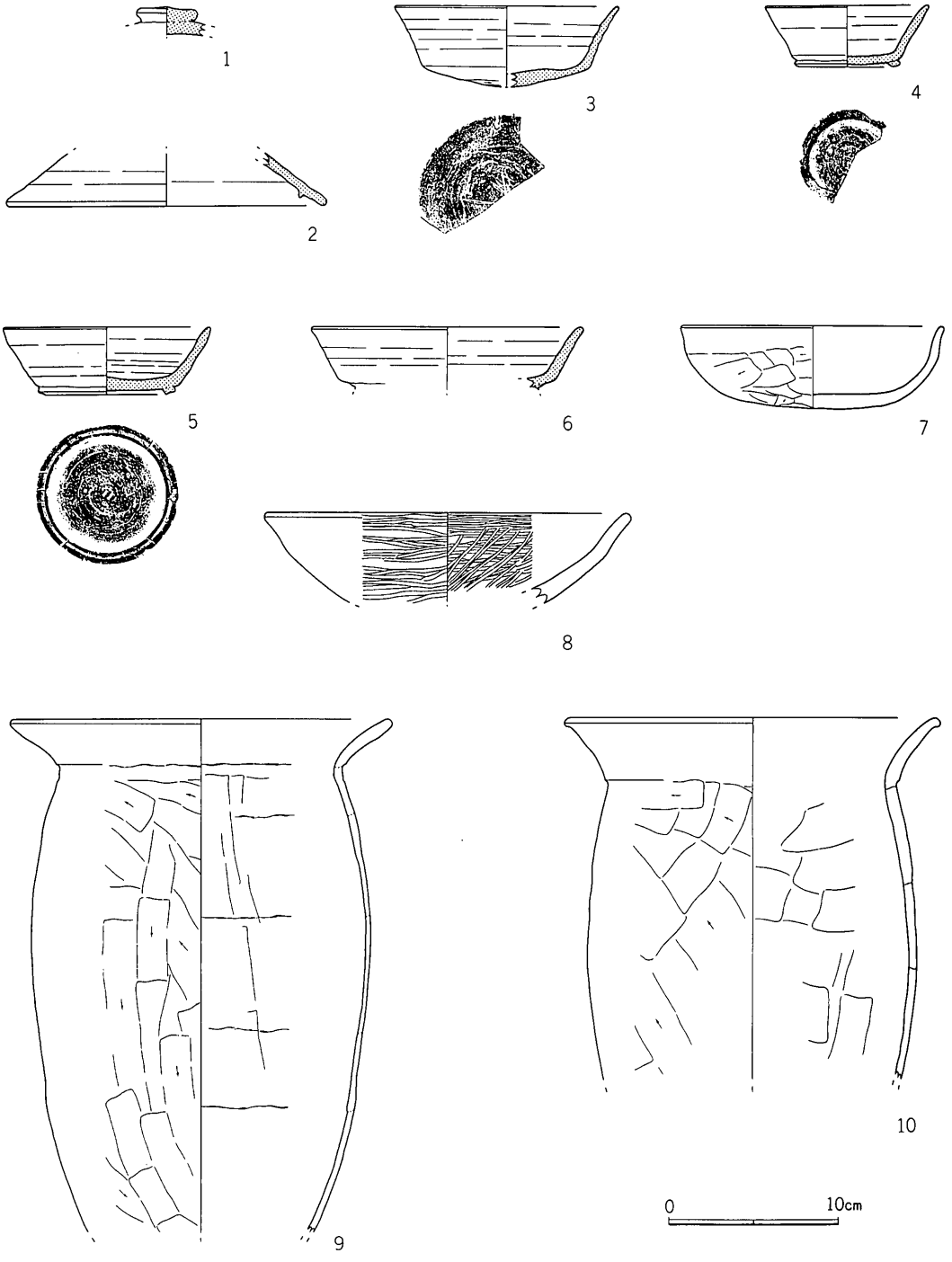
1・2は須恵器蓋で、1はボタン状のつまみ部、2はカエリのあるものである。

3は回転ヘラキリによる底部をみせる須恵器坏である。

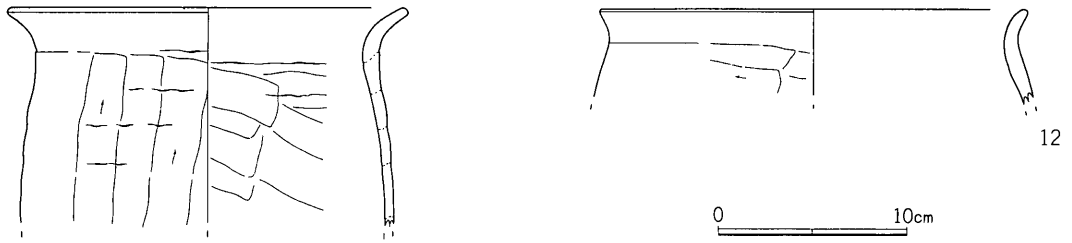
4・5・6 は、それぞれ法量の異なる須恵器高台付坏である。

7は土師器埦、8は土師器鉢と考えられる。

9・10は、くの字状口縁の土師器甕で、最大径が口縁部にあるものである。



第117図　H－28号住居址出土遺物（1：4）



第118図　Ｈ－28号住居址出土遺物（１：４）

第43表　Ｈ－28号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1（完）	蓋（須）	3.6 — —	つまみ部は偏平なボタン状を呈する。	外面　ロクロヨコナデ。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み灰白色（10Y8/1）
2（回）	蓋（須）	〈18.9〉 — —	内面にはかえりを有する。	外面　ロクロヨコナデ。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み灰白色（10Y8/1）
3（回）	坏（須）	〈13.2〉 4.7 〈9.8〉	体部は外反し、底部は丸味を帯びた平底	外面　体部ロクロヨコナデ。 底部回転ヘラキリ、未調整。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	完全な環元炎焼成となっておらずにぶい赤褐色（5YR5/3）
4（回）	坏（須）	〈9.7〉 3.6 （6.2）	体部は直線的に外反し、底部には高台の貼り付けられる小形な器形。	外面　体部ロクロヨコナデ。 底部回転ヘラケズリ、切り離し方法不明 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を多く含み灰色（10Y6/1）
5（完）	坏（須）	（12.2） 4.0 8.1	体部は直線的に外反し、底部には高台が貼り付けられる。	外面　体部ロクロヨコナデ。 底部回転ヘラケズリ、切り離し方法不明 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	完全な環元炎焼成となっておらず橙色を呈する（5YR7/8）
6（回）	坏（須）	〈16.0〉 — —	体部は直線的に外反する。 底部には高台が貼り付けられるものと思われる。	外面　ロクロヨコナデ。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み灰白色（10Y8/1）
7（完）	椀（土）	15.6 4.9 —	体部は丸味を帯びて外反し、底部は偏平な丸底。	外面　口縁部ヨコナデ。体部～底部ヘラケズリ。 内面　ヨコナデ。	胎土は砂粒を含みにぶい赤褐色（5YR5/4）
8（回）	鉢（土）	〈21.5〉 — —	体部はゆるく外反する。やや肉厚。 あるいは高坏となるか。	外面　ヨコヘラミガキ。 内面　ヨコ・ナナメヘラミガキ。	胎土は砂粒を含み浅黄橙色（7.5YR8/4）
9（回）	甕（土）	〈22.5〉 — —	口縁部はくの字状に外反し、ゆるく膨らむ長胴を呈する。最大径は口縁部にある。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みにぶい赤褐色（5YR5/4）
10（回）	甕（土）	（22.1） — —	口縁部はくの字状に外反し、ゆるく膨らむ長胴を呈する。最大径は口縁部にある。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みにぶい黄橙色（10YR7/4）
11（回）	甕（土）	〈21.2〉 — —	口縁部は短く外反し、胴上部は比較的直線的に下降する。 やや肉厚。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部タテヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は精選されずにぶい黄橙色（10YR7/4）
12（回）	甕（土）	〈22.6〉 — —	口縁部は短く外反する。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヨコナデ。 内面　口縁部ヨコナデ。	にぶに黄橙色の断面をみせる（10YR7/3）

11・12 は、口縁部が短く緩やかに外反するやや肉厚な土師器甕である。

このほか、萬年通寶がカマド付近の覆土中から出土しているが、遺存状態がきわめて悪く図示できなかった。萬年通寶の初鋳年は760年とされているが、本住居址の土器群は八世紀第Ⅰ四半期の様相を呈しており、両者は嚙み合わない。よってこの萬年通寶は、本住居址に伴わず、流入し

たものと考えられよう。

時　期

本住居址は、八世紀第Ⅰ四半期、十二遺跡第Ⅰ期に位置付けられよう。

(29)　H－29号住居址

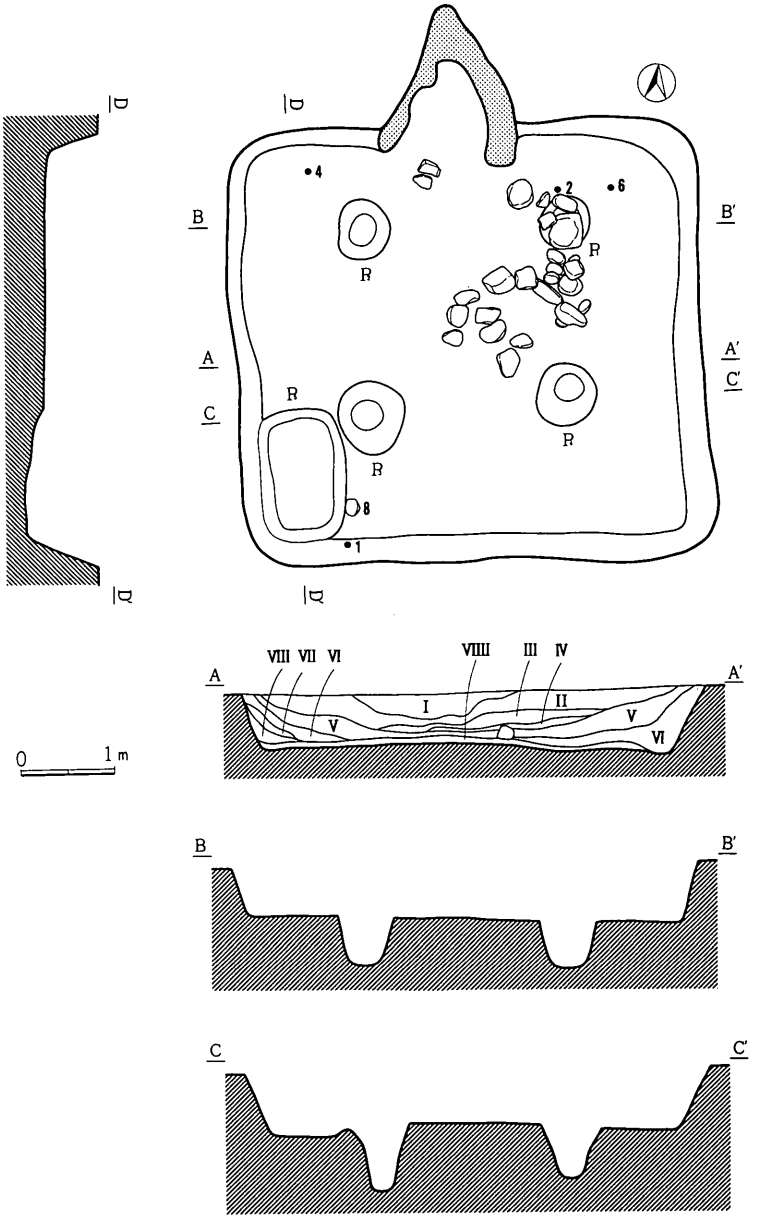
住居址　第119図

H－29号住居址は、第Ⅰ区ハ－37グリッドにおいて検出された。

本住居址は、南北4.7m東西5.0mの隅丸方形を呈し、床面積18.7m²を測り、南北軸方向はN－14°－Wを指す。壁高は、50～65cmを測る。壁溝は認められない。床面は、全体に硬質な貼り床となっている。

なお、住居址Ⅰ区の床面直上には、面取り軽石と安山岩礫二十数点が認められた。これらはカマドの構材と考えられるものである。

ピットは、P_1～P_4の四個のピットが対で認められたほか、西南コーナーには隅丸方形を呈するP_5が認められた。

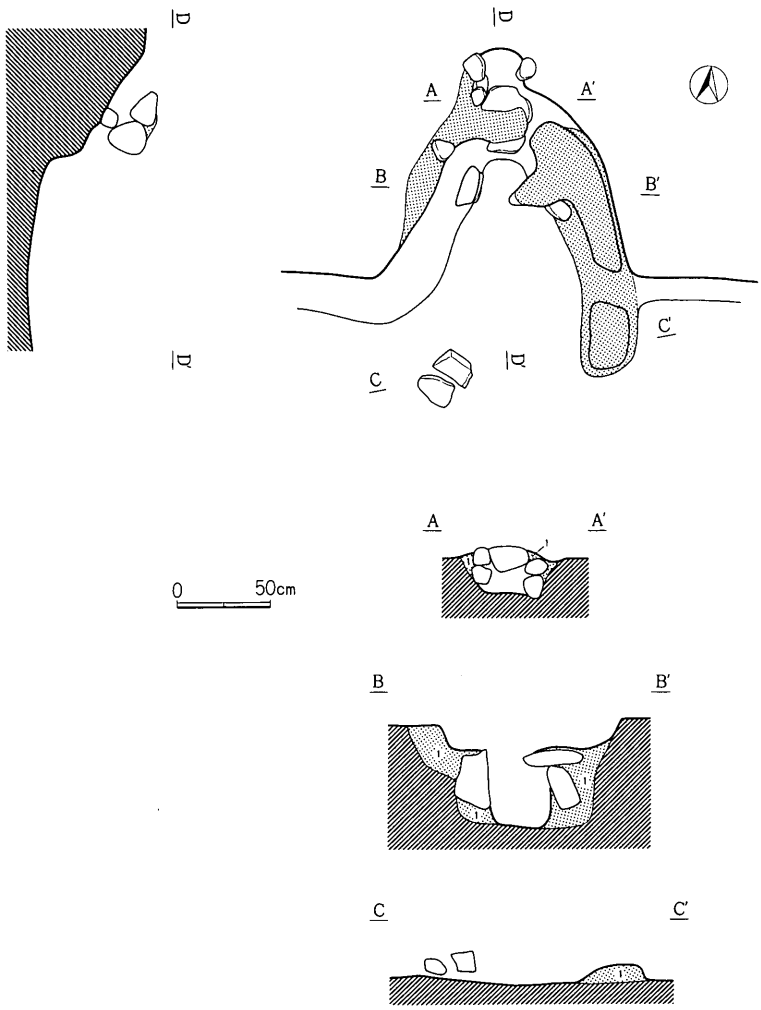


第119図　H－29号住居址実測図（1：80）

P_1は50×50cm深さ50cm、P_2は65×55cm深さ50cm、P_3は80×70cm深さ70cm、P_4は65×65cm深さ50cm、P_5は145×95cm深さ20cmを測る。

遺物は、2・4の坏、6の小形甕が床面直上から出土している。また、1の蓋は壁に張り付いて、8の石器は床面より5cm浮いて出土している。この他は、いずれも覆土中からの出土である。

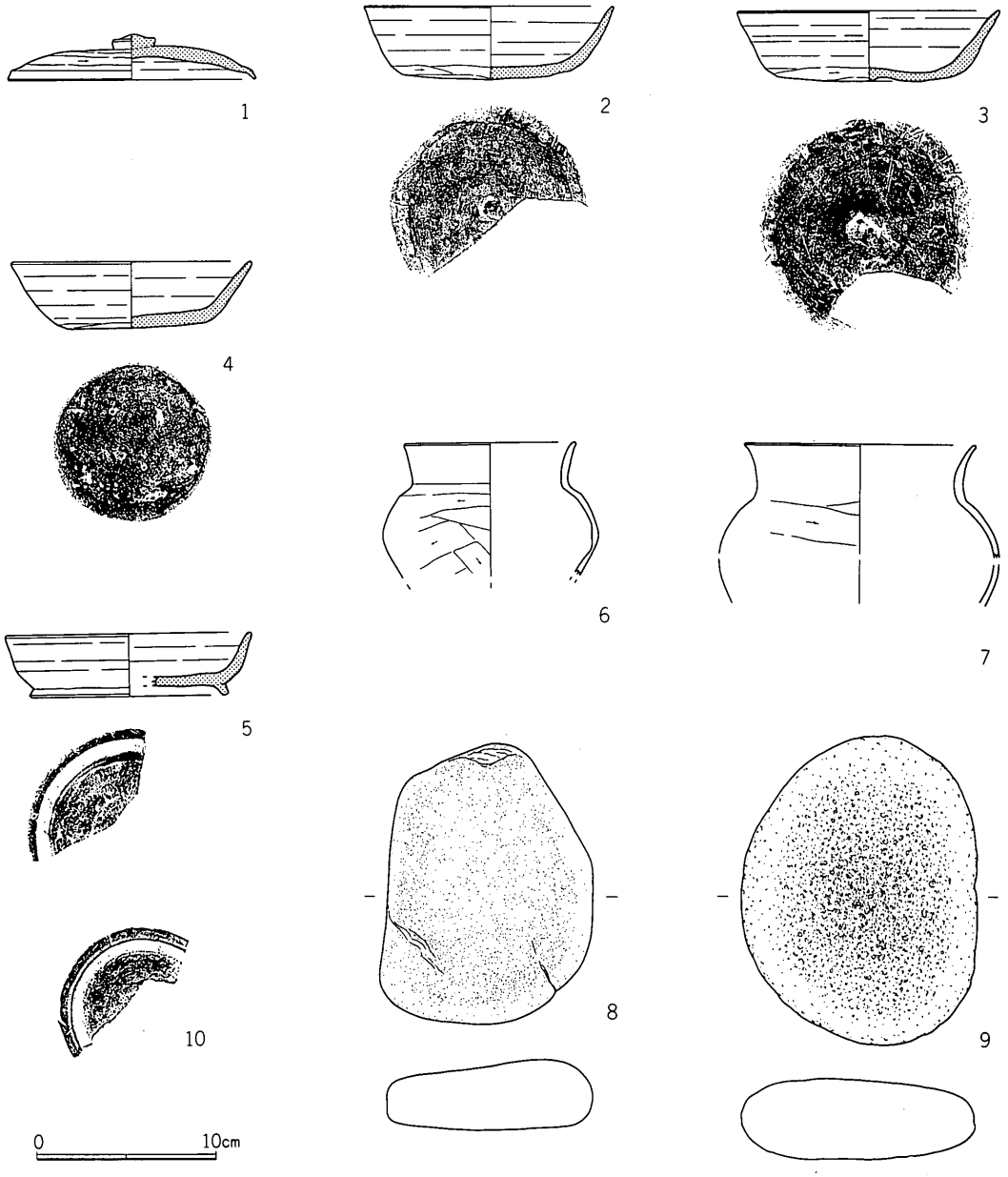
覆土は、8層に分層されたが、4層以上は埋土的な様相を呈していた。I層は黒褐色土層（10YR 3/2)、II層はパミス・ローム粒子を大量に含む暗褐色土層（10YR 3/4)、III層はパミス・ローム粒子を多く含む黒褐色土層（10YR 3/2)、IV層はパミス・ローム粒子を多く含む黒褐色土層（10YR 3/2)、V層は黒色土層（10YR 1.7/1)、VI層は黒色土層（10YR 2/1)、VII層は黒色土層（10YR 1.7/1)、VIII層は黒色土層（10YR 2/1)であった。また、IX層はローム粒子をよく含む締まりのある張り床で、にぶい褐色土層（10YR 4/3）であった。



第120図　H－29号住居址カマド実測図（1：40)

カマド　第120図

カマドは、住居址の北壁中央において壁外を大きくえぐり込むような構造となっているが、左袖と天井部の一部をとどめるのみで、その他は破壊された状態にあった。本カマドの構材には、面取り軽石および安山岩礫と明灰褐色粘土（1層　5 YR 7/2)が用いられていた。住居址I区の床面直上には、カマドの構材と考えられる面取り軽石と安山岩礫二十数点が認められた。



第121図　H－29号住居址出土遺物（1：4）

遺　物　第121図

遺物は、須恵器には蓋・坏・高台付坏・甕が、土師器片には坏・甕が認められた。図示した遺物が主だったものである。

1は須恵器蓋で、扁平なボタン状のツマミ

第44表　H－29号住居址出土遺物一覧表〈石器〉

挿図番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備　考
8	不　明	輝　石 安山岩	15.5	11.5	3.7	1,200	
9	不　明	玄武岩質 安山岩	17.0	13.0	4.5	1,400	

第45表　Ｈ－29号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1（完）	蓋（須）	2.4 2.5 13.8	つまみ部は偏平なボタン状を呈する。	外面　ロクロヨコナデの後、天井部回転ヘラケズリ。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を多く含み灰色（N6/0）
2（完）	坏（須）	14.0 4.1 9.4	体部は外反し、底部は丸味を帯びた平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。 底部回転ヘラキリの後、全面手持ちヘラケズリ 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み灰白色（10Y7/1）
3（完）	坏（須）	14.6 3.9 11.6	体部は外反し、底部は丸味を帯びた平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。底部回転ヘラキリの後、周囲手持ちヘラケズリ。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を多く含み灰色（10Y6/1）
4（完）	坏（須）	13.4 3.7 8.0	体部は外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。底部全面手持ちヘラケズリ、切り離し方法不明 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を多く含み灰色（N5/0）
5（回）	坏（須）	(13.7) 3.5 (11.0)	体部は外反し、底部には高台が貼り付けられる。	外面　体部ロクロヨコナデ。底部回転ヘラケズリ、切り離し方法不明 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を多く含み灰色（10Y6/1）
6（回）	小形甕（土）	(9.6) — —	口縁部は直立気味に外反し、胴部球状を呈する小形な器形。 あるいは台付甕か。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヨコナデ。	胎土は砂粒を多く含み、明灰褐色(7.5YR7/2)
7（回）	甕（土）	〈12.9〉 — —	口縁部はゆるく外反し、胴部は球状を呈する。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を多く含みにぶい赤褐色(5YR5/4)

部をもつものである。

２～４は、回転ヘラキリの後手持ちヘラケズリのなされた底部をみせる須恵器坏である。

５は回転ヘラケズリのなされた底部をみせる須恵器高台付坏である。

６・７は、土師器小形球胴甕である。

この他、図示しえなかったが、畿内系暗文のみられる土師器坏の破片も認められた。

なお、８・９は扁平な河床礫であるが、その用途は不明である。

時　期

本住居址は、八世紀第Ⅱ四半期、十二遺跡第Ⅱ期に位置付けられよう。

(30)　Ｈ－30号住居址

住居址　第122図

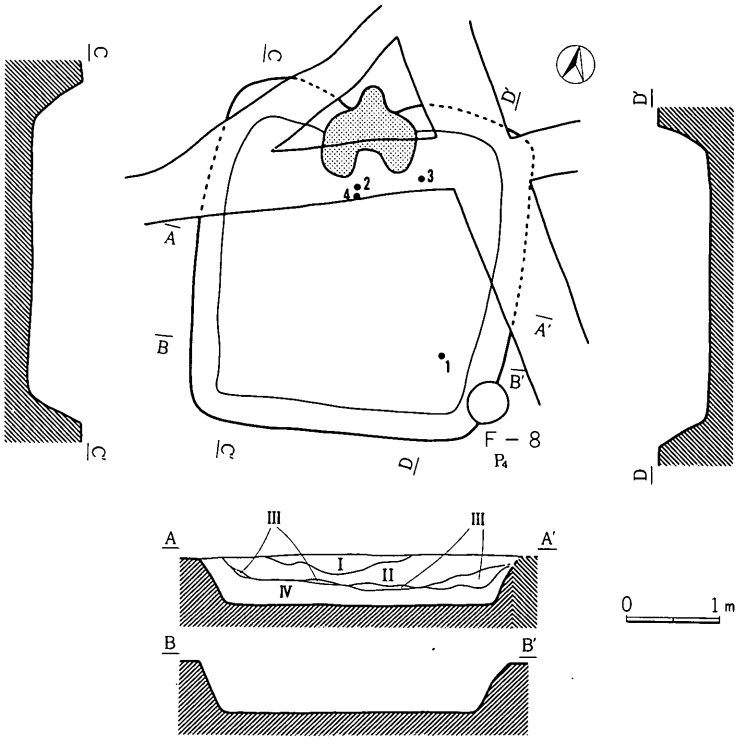
Ｈ－30号住居址は、第Ⅰ区ハ－36グリッドにおいて検出された。

本住居址は、Ｆ－８号掘立柱建物址に東南コーナーの一部を切られて存在している。また、その上部は暗渠排水によって破壊されている。

本住居址は、南北3.7m東西3.5mの隅丸方形を呈し、床面積8.1m²を測り、南北軸方向はＮ－15°－Ｗを指す。壁高は、50～60cmを測る。壁溝は認められない。床面は、貼り床ではないが、全体に硬質な床となっている。

ピットは認められなかった。

遺物は、3の土師器埦が正常位でカマド前の床面直上より出土している。また、同じくカマド前の床面直上より、割れた4の土師器甕の上に2の須恵器長頸瓶の頸部が乗るような状態で検出された。1の須恵器蓋は、床面より10cm浮いて検出されている。この他は、いずれも覆土中からの出土である。

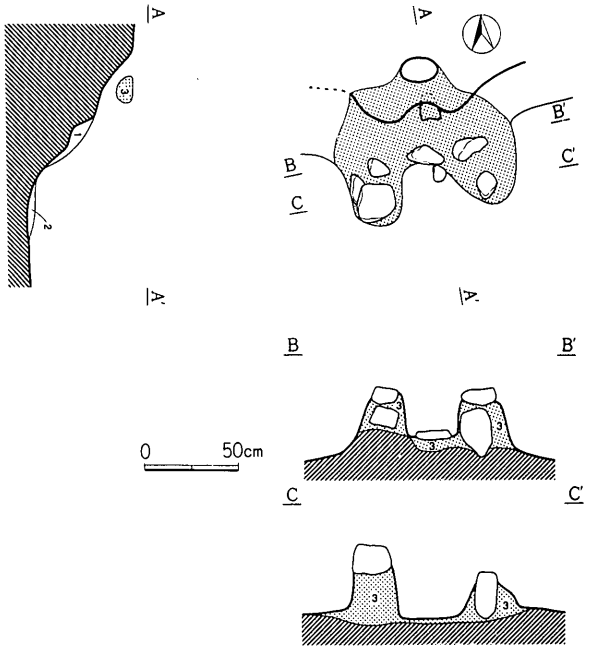


第122図　H－30号住居址実測図（1：80）

覆土は、4層に分層され、埋土的な様相を呈していた。I層はスコリアをよく含みパミスを若干含む黒色土層（10YR 2/1）、II層は大粒パミス・ローム粒子を多量に含む暗褐色土層（10YR 3/3）、III層はパミス・ローム粒子をあまり含まない黒色土層（10YR 1.7/1）、IV層はローム粒子・小粒パミス・小粒スコリアをよく含む黒褐色土層（10YR 2/3）あった。

カマド　第123図

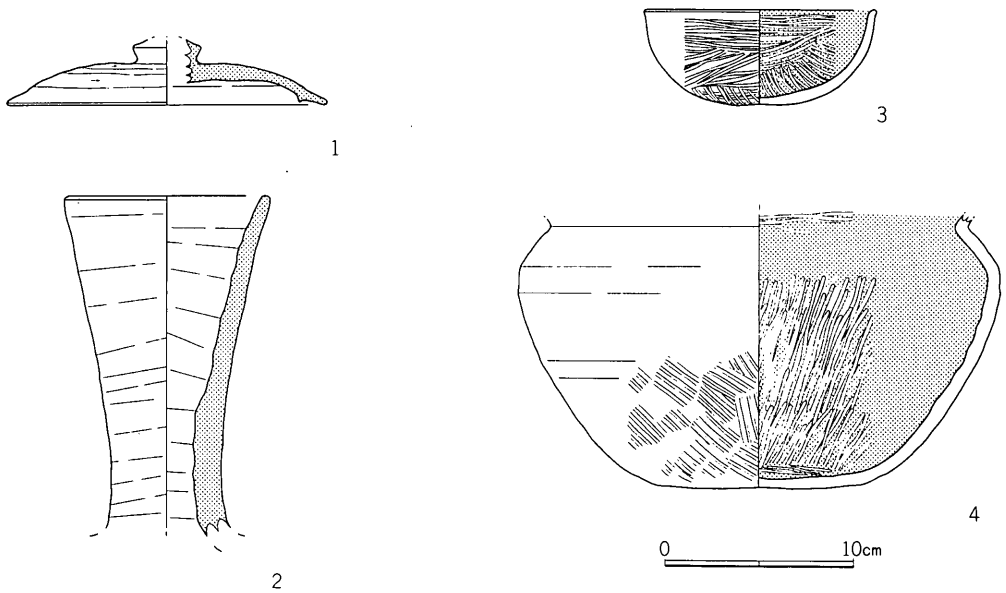
カマドは、住居址の北壁中央にあり、左右両袖と天井部の一部をとどめていた。その袖の芯には面取り軽石が据えられ、黒色土混じりの灰黄褐色粘土（3層　10YR 4/3）で固められていた。



第123図　H－30号住居址カマド実測図（1：40）

第46表　Ｈ－30号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1（回）	蓋（須）	― ― 16.8	つまみ部は宝珠形を呈し、内面にはかえりを有する。	外面　ロクロヨコナデ。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み灰白色（10Y7／1）
2（完）	長頸瓶（須）	10.9 ― ―	頸部はラッパ状に開き、素口縁を呈する。	外面　ロクロヨコナデ。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み灰色を呈する（10Y6／1）
3（回）	椀（土）	〈12.3〉 5.0 ―	体部は丸味を帯びて外反し、偏平な丸底を呈する。	外面　ヘラミガキ。 内面　黒色研磨。	胎土は砂粒を含みにぶい褐色（7.5YR5／3）
4（回）	甕（土）	― ― （11.0）	胴部はやや肩の張る形状をみせ、底部は丸味を帯びた平底。	外面　叩きの後、ロクロヨコナデ。 内面　黒色研磨。（ロクロ右回転）	胎土は浅黄橙色（10YR8／3）



第124図　Ｈ－30号住居址出土遺物（１：４）

本カマド内の土層は、２層に分層された。１層は多量の焼土を含む明黄褐色土層（10YR 6/6）、２層は明黄褐色焼土層（10YR 6/6）であった。

遺　物　第124図

遺物の出土量は、他の住居址とくらべて少ない。須恵器では蓋・坏・長頸瓶・甕が、土師器には椀・甕が認められた。図示した遺物が主だったものである。

１は須恵器蓋で、宝珠ツマミでカエリのあるものである。鋳師屋遺跡群ではカエリのある蓋は数多く検出されているが、いずれもそのツマミが皿状のものばかりで、このように宝珠ツマミのものは極めて少ない。

2は、須恵器長頸瓶の頸部である。

3は、内面黒色研磨のなされた土師器埦である。

4は、内面黒色研磨のなされた土師器甕である。本資料は、ロクロ整形によるもので、その外面には平行叩きも認められる。須恵器の製作技法を用いて製作された土師器として注目される。

時　期

本住居址は、八世紀第Ⅰ四半期、十二遺跡第Ⅰ期に位置付けられよう。

(31)　H－31号住居址

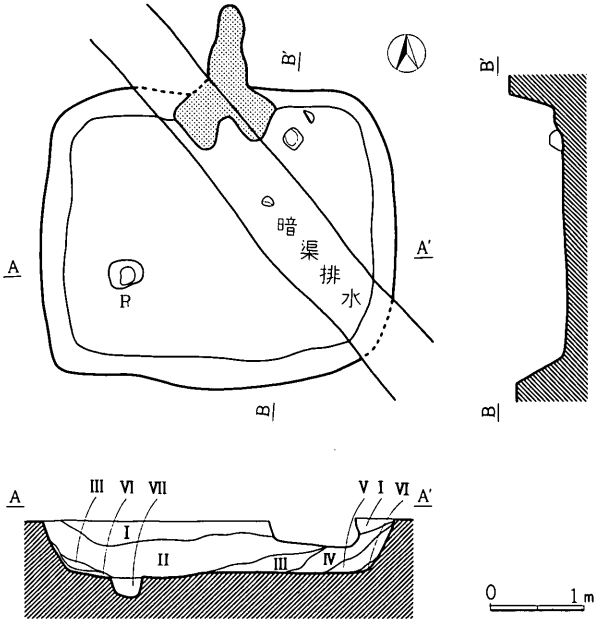
住居址　第125図

H－31号住居址は、第Ⅰ区ハ－36グリッドにおいて検出された。本住居址の上部は暗渠排水によって破壊されている。本住居址は、南北3.2m東西3.7mの隅丸方形を呈し、床面積8.1m²を測り、南北軸方向はN－0°－Sを指す。壁高は、50～55cmを測る。壁溝は認められない。床面は、貼り床ではないが、全体に硬質な床となっている。

ピットは、第Ⅱ区にP_1が認められたのみであった。P_1は35×30cm深さ20cmを測る。

遺物は、いずれも覆土中からの出土である。

覆土は、7層に分層され、埋土的な様相を呈していた。Ⅰ層はパミス・ローム粒子を多量に含むにぶい黄褐色土層（10YR 4/3)、Ⅱ層はパミス・ローム粒子を大量に含み黒色土もブロック状に含む褐色土層（10YR 4/6)、Ⅲ層はパミス・ローム粒子をよく含む黒色土層（10YR 2/1)、Ⅳ層はローム粒子・パミスを大量に含む黄褐色土層（10YR 5/6)、Ⅴ層はパミスをよく含む黒色土層（10YR 2/1)、Ⅵ層はローム粒子を多量に含む明黄褐色土層（10YR 6/8)、Ⅶ層はパミス・ローム粒子をよく含む褐色土層(10YR 4/6）であった。



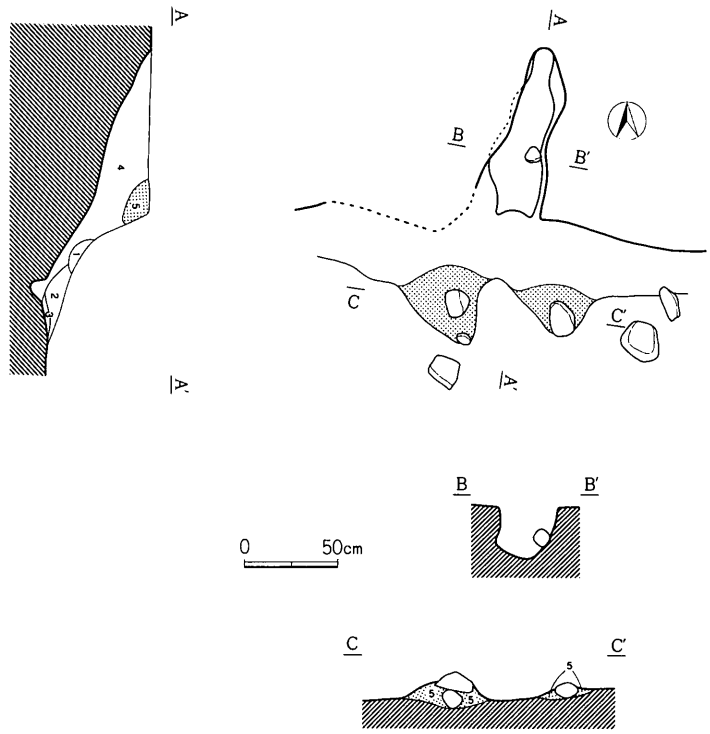
第125図　H－31号住居址実測図（1：80）

カマド　第126図

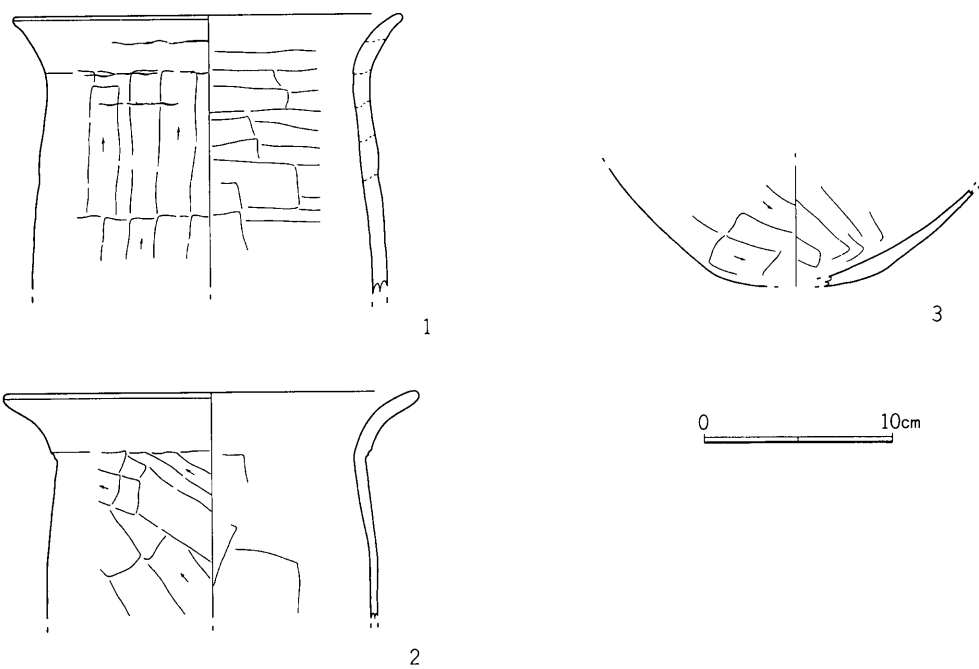
カマドは、住居址の北壁中央にあり、左右両袖と天井部の一部をとどめてい

た。その袖の芯には面取り軽石と安山岩礫が据えられ、ローム混じりの黒褐色粘土（5層　10YR 3/1）で固められていた。その煙道部は、比較的長く屋外に延びており、煙筒として2の甕が用いられていた。

本カマド内の土層は、4層に分層された。1層はカマドの構材と考えられる褐灰色粘土層（10YR 5/1）、2層はカーボン・焼土を含む黒褐色土層（10YR 3/1）、3層は明赤褐色焼土層（2.5YR 5/8）、4層はカーボン・焼土等をまったく



第126図　H－31号住居址カマド実測図（1：40）



第127図　H－31号住居址出土遺物（1：4）

第47表　H－31号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1（回）	甕（土）	〈20.6〉 — —	口縁部は外反し、胴部上半は比較的直線的に下降する。やや肉厚。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部タテヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を多く含みにぶい橙色(7.5YR7/4)
2（回）	甕（土）	〈22.0〉 — —	口縁部はくの字状に外反する。最大径は口縁部にある。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土はにぶい黄橙色を呈する（10YR7/4）
3（完）	甕（土）	— — (8.7)	底部は丸味を帯びた平底。胴部は球状を呈するものと思われる。	外面　ヘラケズリ。 内面　ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みにぶい黄橙色（10YR7/4）

含まない黒褐色土層（10YR 2/3）であった。

遺　物　第127図

遺物の出土量は、他の住居址とくらべてきわめて少ない。須恵器では甕の破片一片が、土師器には甕が認められたのみであった。図示した遺物が主だったものである。

1は、胴部に縦方向のヘラケズリのなされたやや肉厚な土師器甕である。

2は、くの字状口縁の土師器甕で、煙筒として用いられていたものである。

時　期

本住居址は、八世紀第Ⅰ四半期、十二遺跡第Ⅰ期に位置付けられよう。

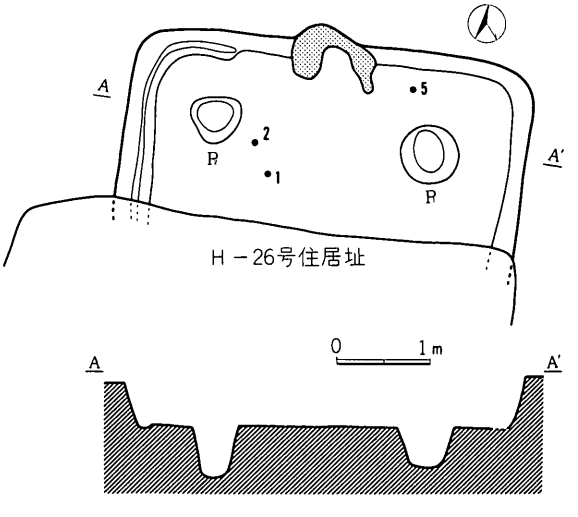
(32)　H－32号住居址

住居址　第128図

H－32号住居址は、第Ⅰ区ハ－36グリッドにおいて検出された。

本住居址の南半分は、H－26号住居址によって切られている。

本住居址は、南北2mが残存、東西4.3mで、隅丸方形のプランを呈するものとおもわれ、南北軸方向はN－8°－Wを指す。壁高は、55cm前後を測る。壁溝は、西壁において幅25cm深さ5cm程度のものが認められた。東壁においては壁溝は確認され



第128図　H－32号住居址実測図（1：80）

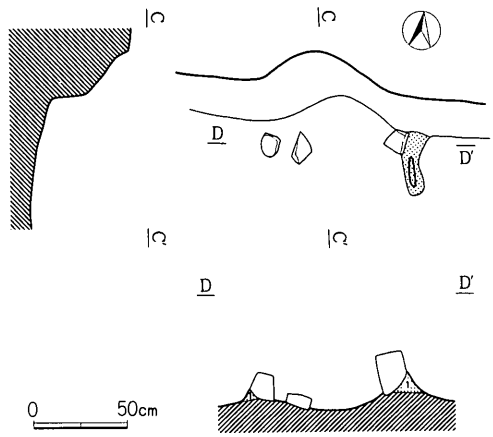
なかったが、存在した可能性はある。床面は、全体に硬質な貼り床となっている。

ピットは、P_1・P_2の二個が認められたが、基本的には四個のピットが対で存在していたものと考えられる。P_1は60×60cm深さ40cm、P_2は55×50cm深さ55cmを測る。

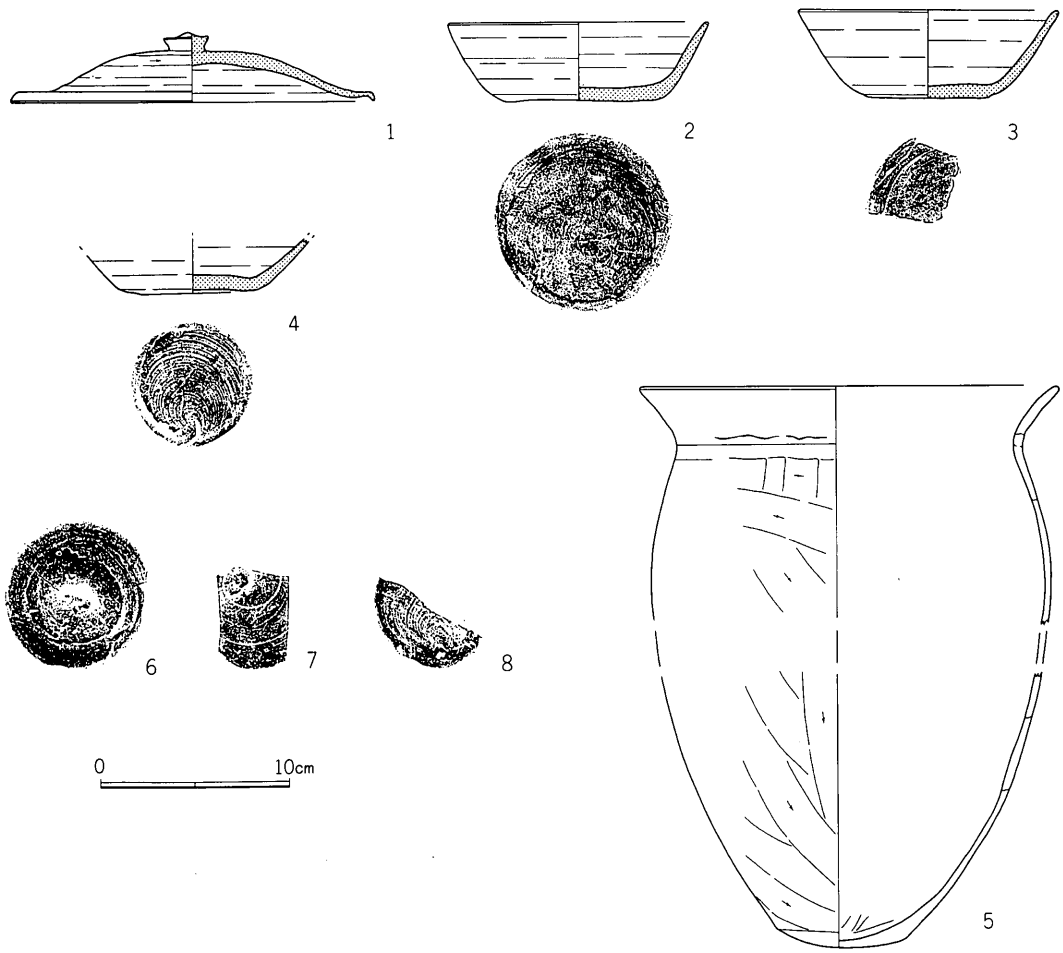
遺物は、1の須恵器蓋、2の須恵器坏、5の土師器甕が床面直上より出土している。この他は、いずれも覆土中からの出土である。

カマド　第129図

カマドは、住居址の北壁中央にあり、左右両



第129図　H－32号住居址カマド実測図（1：40）



第130図　H－32号住居址出土遺物（1：4）

第48表　H－32号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1（完）	蓋（須）	2.3 3.7 19.3	つまみ部は径が小さく、偏平な擬宝珠形を呈する。	外面　ロクロヨコナデ。 天井部回転ヘラケズリ。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	完全な還元炎焼成となっておらず淺黄橙色（10YR8/4）
2（完）	坏（須）	13.8 4.1 8.2	体部は外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。 底部回転ヘラケズリ、切り離し方法不明 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み灰色（7.5 6/1）内外面に火襷きあり
3（回）	坏（須）	〈13.7〉 4.6 〈6.7〉	体部は外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。 底部回転ヘラケズリ、切り離し方法不明 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み灰色（10Y5/1）
4（回）	坏（須）	— — 7.7	体部は外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り、未調整。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み灰色（7.5Y5/1）
5（回）	甕（土）	（23.5） （30.5） 7.0	口縁部はゆるくくの字状に外反し、胴部はゆるく弓なりに膨らみ、底部平底。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みにぶい橙色（5YR6/4）

袖の一部を僅かにとどめているのみであった。その袖の芯には面取り軽石が据えられ、灰黄褐色粘土（1層　10YR 6/2）で固められていた。

遺　物　第130図

遺物の出土量は、他の住居址とくらべて少ない。須恵器では蓋・坏・甕が、土師器では坏・甕が認められたのみであった。図示した遺物が主だったものである。

1は、須恵器蓋で、宝珠ツマミのものである。

2～4は須恵器坏で、4は回転糸切りによるもの、2・3の底部には回転ヘラケズリがなされており切り離し方法は不明である。

5は、くの字状口縁の土師器甕である。

時　期

本住居址は、八世紀第Ⅳ四半期～九世紀初頭、十二遺跡第Ⅳ期に位置付けられよう。

(33)　H－33号住居址

住居址　第131図

H－33号住居址は、第Ⅰ区フ－34グリッドにおいて検出された。

本住居址は、F－31号掘立柱建物址・F－34号掘立柱建物址・F－48号掘立柱建物址の三つの掘立柱建物址にその一部を切られて存在している。

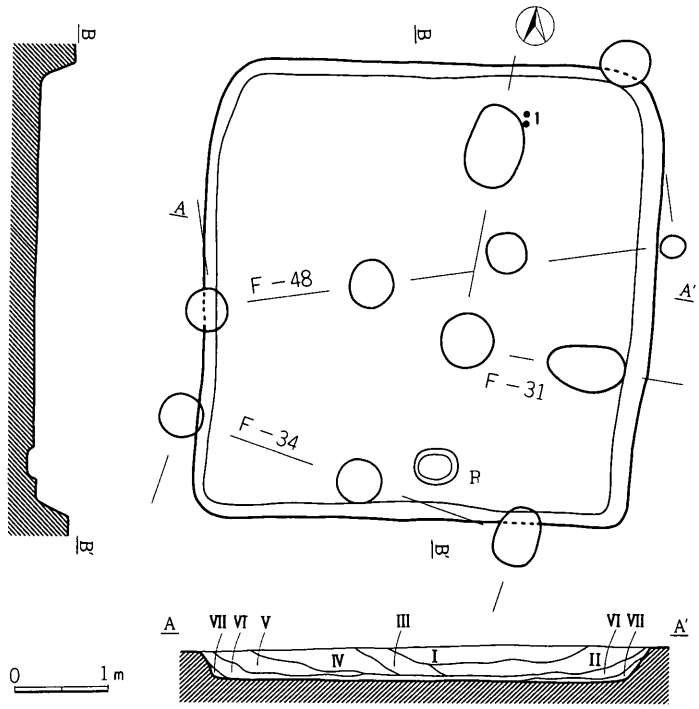
本住居址は、南北4.8m東西4.8mの隅丸方形を呈し、床面積19.7m²を測り、南北軸方向はN－10°－Wを指す。壁高は、30～40cmを測る。壁溝は認められない。床面は、貼り床ではなく全体に軟質な床となっている。

ピットは、南壁際中央にP_1が認められたのみである。

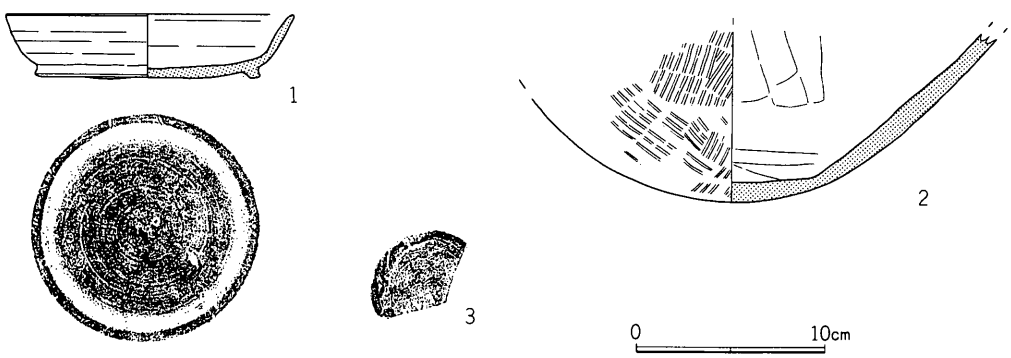
P_1は50×40cm深さ10cmを測る。

遺物は、1の高台付坏が床面直上からやや浮いて出土している。この他は、いずれも覆土中からの出土である。

覆土は、7層に分層されたが、全体的にローム粒子をよく含む埋土的な様相を呈していた。I層はパミス・ローム粒子を大量に含むにぶい赤褐色土層(2.5YR 4/3)、II層はパミス・ローム粒子を多量に含む暗赤褐色土層(2.5YR 3/2)、III層はパミス・ローム



第131図　H－33号住居址実測図（1：80）



第132図　H－33号住居址出土遺物（1：4）

第49表　H－33号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1 (完)	坏 (須)	15.3 3.4 11.9	体部は外反し、底部には高台が貼り付けられる盤状の器形。	外面　体部ロクロヨコナデ。 底部回転ヘラケズリ。切り離し方法不明。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み灰色 （10Y6/1）
2	甕 (須)	— — —	底部丸底。	外面　叩き。 内面　ナデ。	胎土は砂粒を含み灰白色 （10Y8/1）

粒子をよく含む暗赤灰色土層（2.5YR 3/1)、Ⅳ層はパミス・ローム粒子を多く含む暗赤褐色土層（2.5YR 3/2)、Ⅴ層はパミス・ローム粒子を大量に含むにぶい赤褐色土層（2.5YR 4/3)、Ⅵ層はパミス・ローム粒子をあまり含まない黒色土層（2.5YR 1.7/1)、Ⅶ層はパミス・ローム粒子をよく含む暗赤灰色土層（2.5YR 3/1）であった。

カマド

カマドは、本住居址においては検出されなかった。

遺　物　第132図

検出された遺物はきわめて少なく、図示した遺物以外には、須恵器片と土師器片数片が認められたのみである。

1は、回転ヘラケズリのなされた底部をみせる須恵器高台付坏である。

2は、須恵器甕の底部である。

時　期

本住居址の時期は、僅かな遺物よりは判断しがたいが、とりあえずは八世紀第Ⅰ四半期、十二遺跡第Ⅰ期に位置付けておこう。

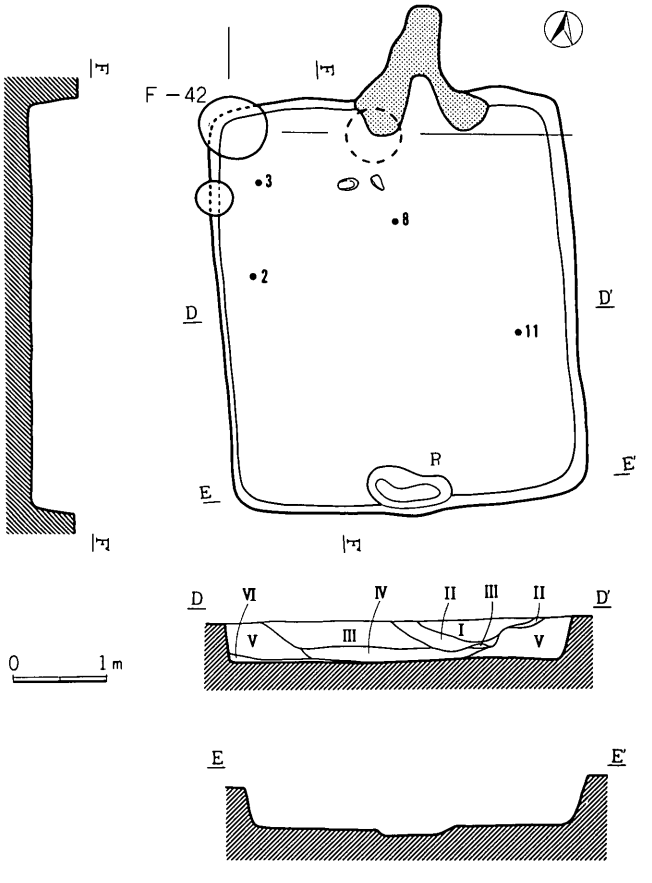
(34)　H－34号住居址

住居址　第133図

H－34号住居址は、第Ⅰ区ハ－35グリッドにおいて検出された。

本住居址は、F－42号掘立柱建物址に北壁の一部を切られて存在している。

本住居址は、南北4.4m東西3.8mの隅丸長方形を呈し、床面積14.6m²を測り、南北軸方向はN－20°－Wを指す。壁高は、40～50cmを測る。壁溝は認められない。床面は、全体に硬質な貼り床となっ



第133図　H－34号住居址実測図（1：80）

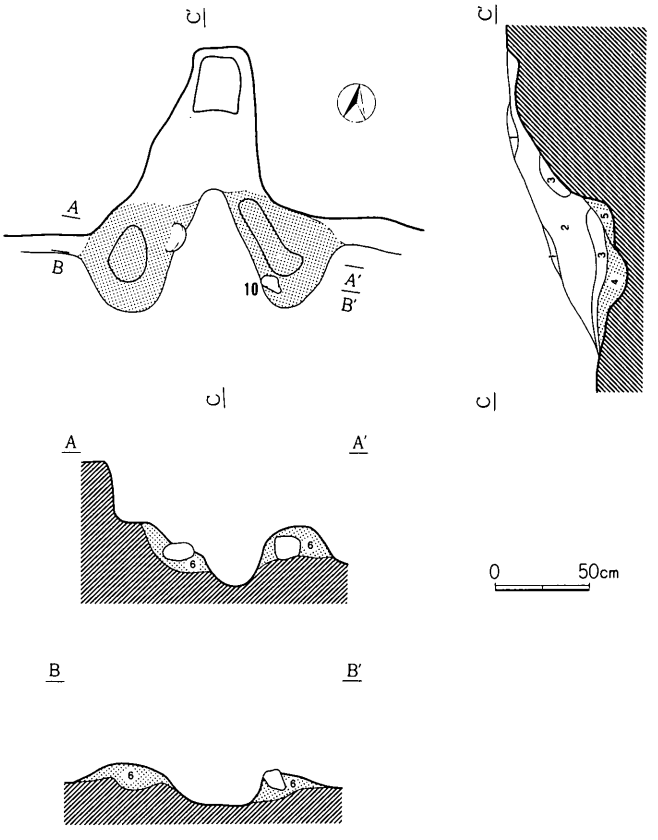
ている。

ピットは、南壁際中央にP_1が認められたのみである。

P_1は90×40cm深さ5cmを測る。

遺物は、2・3の須恵器坏が床面より10～15cm浮いて出土している。また、8の須恵器高台付坏は床面直上より検出された。この他は、いずれも覆土中からの出土である。

覆土は、6層に分層され、殊に2層以上は埋土的な様相を呈していた。I層は小粒スコリアを多く含む黒褐色土層（10YR 2/3)、II層は小粒スコリアを多く含みローム粒子を多量に含む褐色土層（10YR 4/4)、III層は小粒スコリアを多く含む黒色土層（10YR 2/1)、IV層は小粒スコリアを多く含む黒褐色土層（10YR 3/2)、V層は小粒スコリアを多く含む黒褐色土層（10YR 2/3)、VI層は小粒スコリアを多く含む黒色土層（10YR 2/1）であった。



第134図　H－34号住居址カマド実測図（1：40）

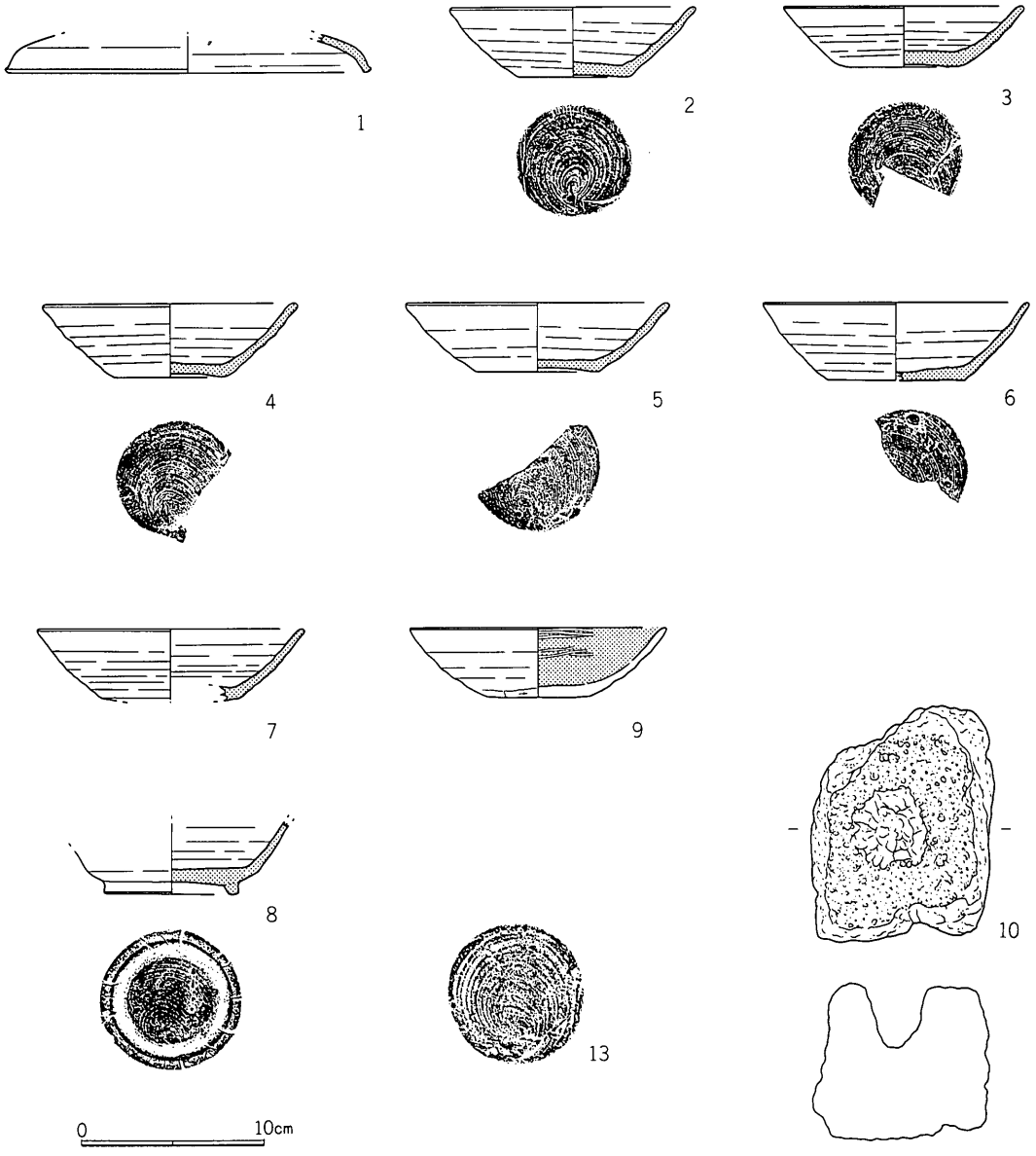
カマド　第134図

カマドは、住居址の北壁中央よりやや東にあり、左右両袖の一部をとどめていた。その袖の芯には面取り軽石と安山岩礫が据えられ、黒色土混じりの灰黄褐色粘土（6層　10YR 4/3）で固められていた。また、火床部は、褐色焼土層（4層　10YR 6/6）と黒褐色土層（10YR 3/2）で構成されていた。

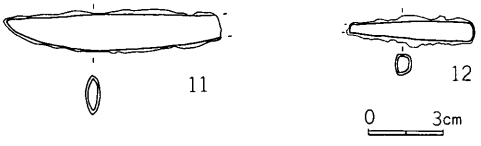
本カマド内の土層は、3層に分層された。1層はにぶい橙色の灰層（10YR 6/4)、2層は灰・焼土はまったく含まない黒褐色土層（10YR 3/1)、3層は灰・若干の粘土を含むにぶい橙色の灰層（10YR 6/4）であった。

遺　物　第135・136図

遺物の出土量は、他の住居址とくらべてあまり多くない。須恵器では蓋・坏・甕が、土師器に



第135図　H－34号住居址出土遺物（1：4）



第136図　H－34号住居址出土遺物（1：3）

第50表　H－34号住居址出土遺物一覧表

〈鉄器・石器〉

挿図番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備　考
10	不　明	軽　石	12.3	9.7	8.6	490	カマド
11	刃　子	鉄	(8.5)	1.4	0.6	(16.3)	
12	鉄　鏃	鉄	(4.9)	0.7	0.6	(4.9)	基部？

第51表　H－34号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1（回）	蓋（須）	― ― 〈20.0〉	つまみ部の形状不明。	外面　ロクロヨコナデ及びナデ 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は精選され灰色（10Y5/1）
2（完）	坏（須）	13.4 3.8 6.2	体部は外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り、未調整。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み灰色（N6/0）
3（完）	坏（須）	13.1 3.3 6.4	体部は外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り、未調整。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み灰色（10Y5/1）
4（回）	坏（須）	（13.9） 3.9 （6.2）	体部は外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り、未調整。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	完全な環元炎焼成となっておらず、にぶい褐色（7.5YR6/3）
5（回）	坏（須）	〈14.4〉 3.7 （6.6）	体部は外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り、未調整。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	完全な環元炎焼成となっておらずにぶい褐色（7.5YR5/3）
6（回）	坏（須）	〈14.6〉 4.2 〈7.5〉	体部は外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り、未調整。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	完全な環元炎焼成となっておらず橙色（7.5YR7/6）
7（回）	坏（須）	〈14.6〉 ― ―	体部は外反し、底部は平底となるものと思われる。	外面　体部ロクロヨコナデ。 内面　ロクロヨコナデ。 （ロクロ右回転）	胎土は砂粒を多く含み灰白色（10Y8/1）
8（完）	坏（須）	― ― 7.3	底部には高台が貼り付けられる。	外面　体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切りの後、高台部貼り付け 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を多く含み灰色（10Y6/1）
9（回）	坏（土）	〈14.0〉 3.8 （5.6）	体部は外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。底部全面手持ちヘラケズリ、切り離し方法不明 内面　黒色研磨。（ロクロ右回転）	胎土は精選されず砂粒を多く含み灰黄褐色（10YR6/2）

は坏・甕が認められた。図示した遺物が主だったものである。

1は須恵器蓋である。

2～7は、須恵器坏で、いずれも回転糸切り未調整の底部をみせるものである（ただし、底部の残らない7を除く）。8も、回転糸切りによる底部をみせる須恵器高台付坏である。

9は、内面黒色研磨のなされたロクロ土師器坏であるが、その切り離し方法は不明である。

10は、軽石の中央に穿孔のなされたものであるが、用途は不明である。

11は、刀子で基部を欠損する。12は鉄鏃の基部であろうか。

時　期

本住居址は、九世紀前葉、十二遺跡第Ⅴ期に位置付けられよう。

(35)　H－35号住居址

住居址　第137図

H－35号住居址は、第Ⅰ区ヒ－36グリッドにおいて検出された。

本住居址は、H－36号住居址を切って存在している。また、その北壁の上部を溝によって破壊

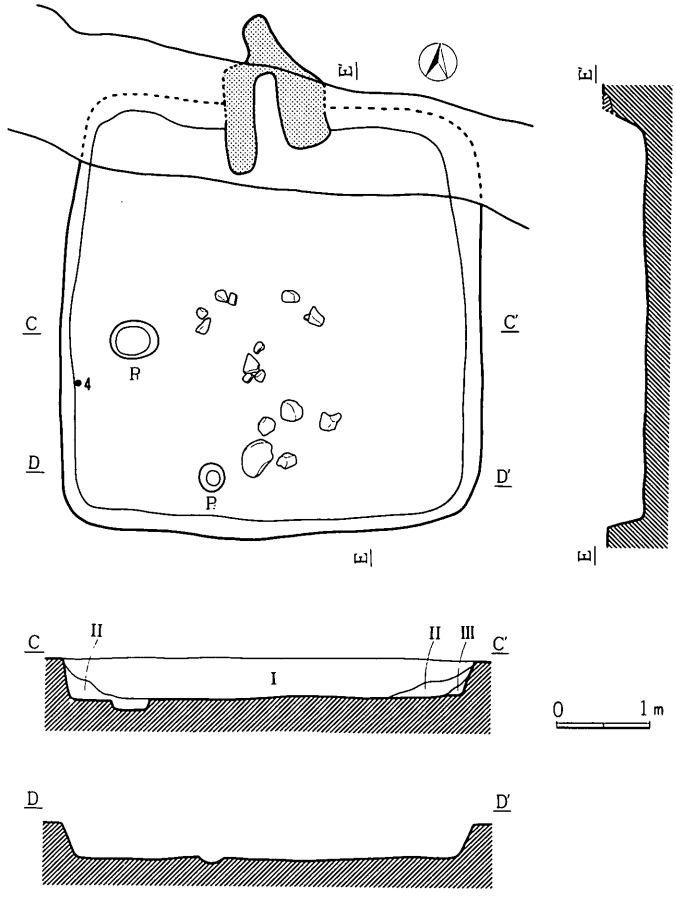
されている。

本住居址は、南北4.6m東西4.5mの隅丸方形のプランを呈し、床面積16.5m²を測り、南北軸方向はN－14°－Wを指す。壁高は、25～45cm前後を測る。壁溝は認められなかった。床面は全体に硬質な貼り床となっている。

本住居址の南半分の床面上には、カマドの構材と考えられる面取り軽石と安山岩礫が散乱していた。

ピットは、第III区にP_1・P_2が認められたのみであった。P_1は50×40cm深さ10cm、P_2は30×25cm深さ5cmを測る。

遺物は、4の須恵器高台付坏が西壁際の床面直上より検出された。その他はいずれも覆土中からの出土である。



第137図　H－35号住居址実測図（1：80）

覆土は、3層に分層され、埋土的な様相を呈していた。I層はパミス・ローム粒子を多量に含む褐色土層（10YR 4/4）、II層はパミス・ローム粒子をあまり含まない黒色土層（10YR 2/1）、III層はローム粒子を多く含む黒色土層（10YR 2/1）であった。

カマド　第138図

カマドは、住居址の北壁中央にあり、左右両袖と天井部の一部をとどめていた。その袖の一部には扁平な安山岩礫も用いられ、暗褐色土層（6層　10YR 3/3）・褐色土層（7層　10YR 4/4）・明赤褐色土層（5YR 5/8）で構築されていた。また、その煙道部天井は褐色土層（5層　10YR 4/4）、火床部はロームと黒色土の混じられたにぶい赤褐色土層（4層　10YR 4/4）で構築されていた。支脚石（a）には細長い河原石が用いられていた。

本カマド内の土層は、3層に分層された。1層は若干の粘土を含む明赤褐色焼土層（5 YR 5/8）、2層は赤褐色焼土層（5 YR 4/8）、4層は若干の焼けの認められる赤褐色土層（10YR 4/6）であった。

遺　物　第139・140図

遺物は、須恵器には蓋・坏・高台付坏・甕が、土師器には坏・甕が認められた。図示した遺物が主だったものである。

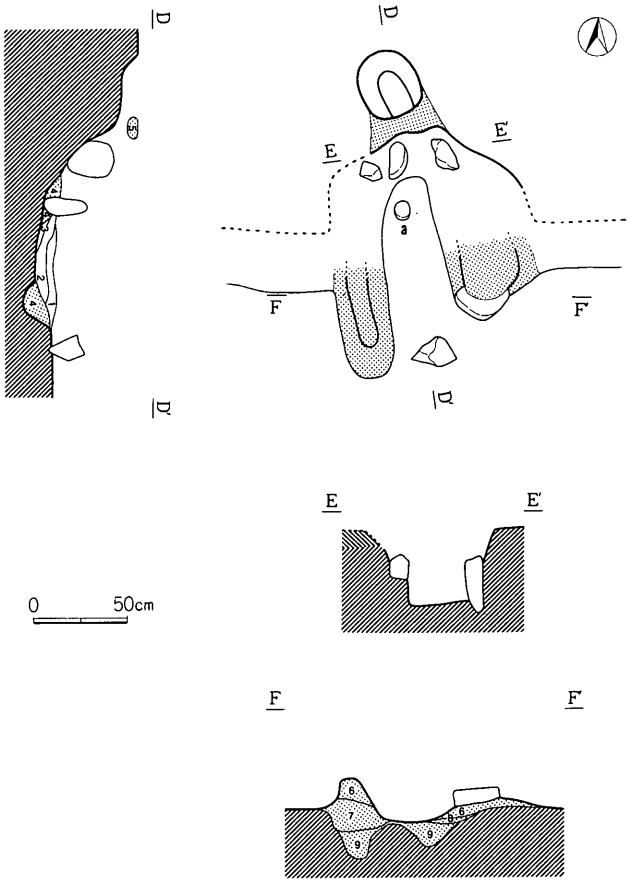
1は須恵器蓋で、宝珠ツマミをもつものである。2はカエリのある須恵器蓋で、おそらく混入品と考えられる。

3は、須恵器坏で、回転糸切り未調整の底部をみせるものである。

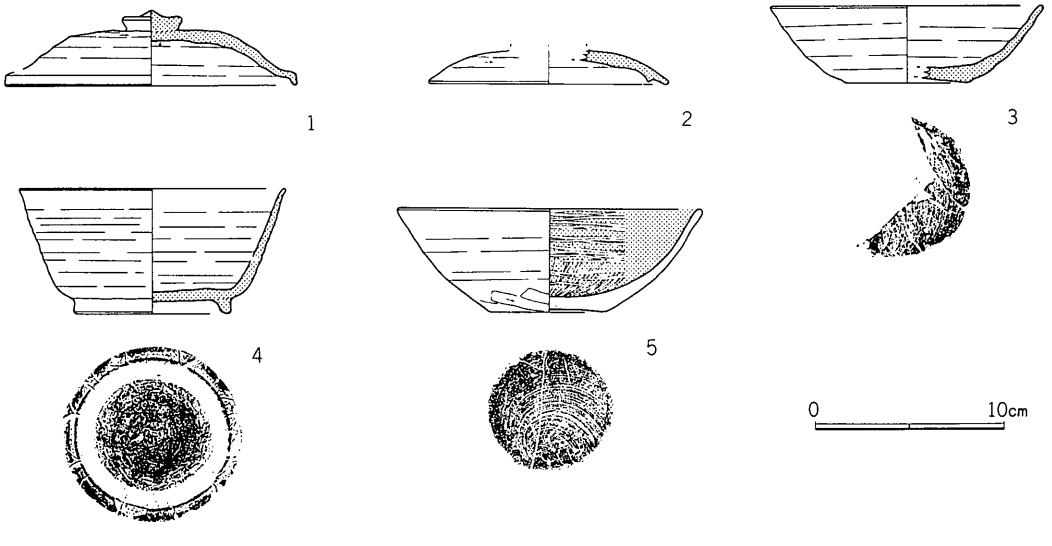
4は回転ヘラケズリのなされた底部をみせる須恵器高台付坏である。

5は、内面黒色研磨のなされたロクロ土師器坏で、回転糸切り未調整の底部をみせるものである。

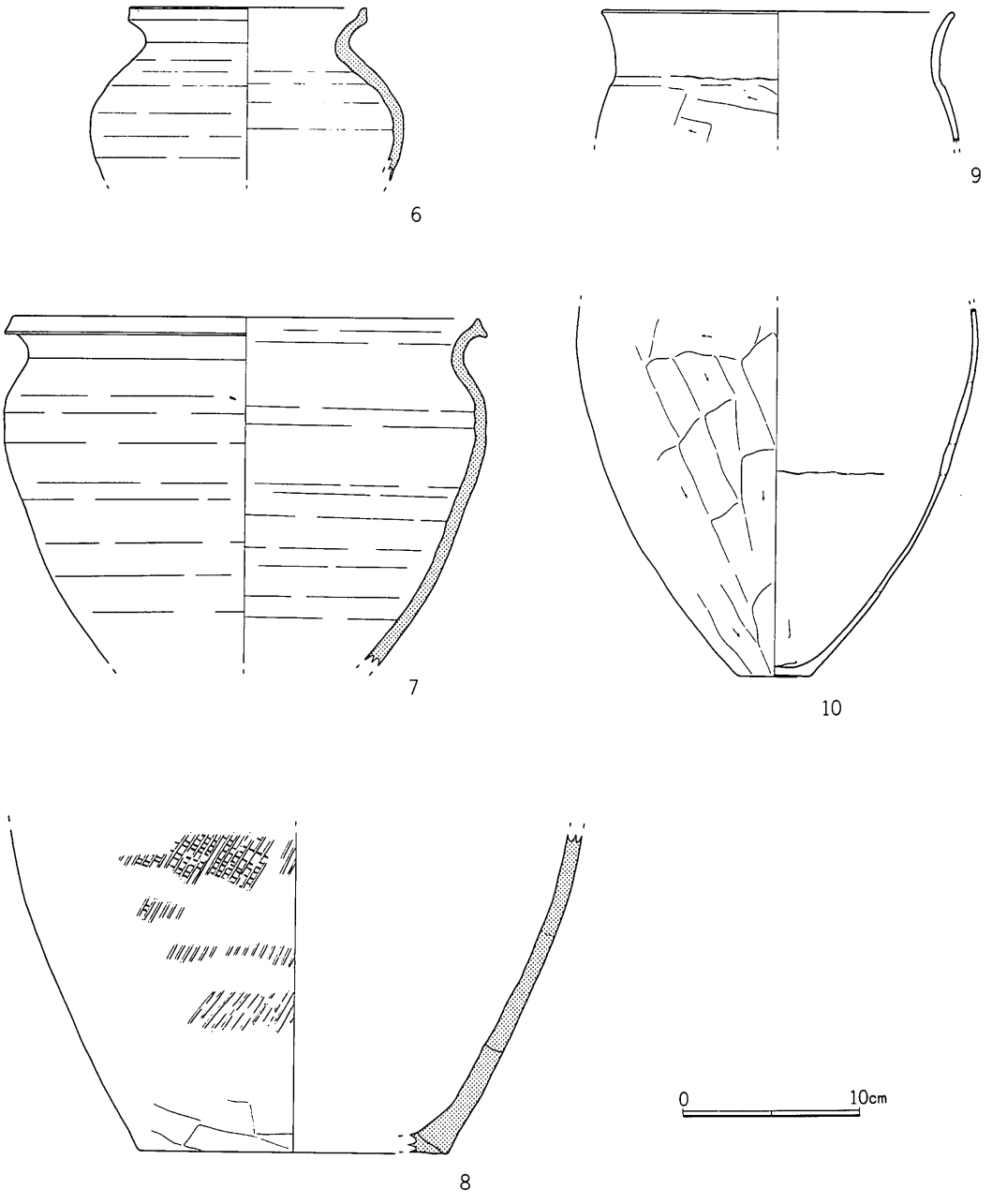
6は須恵器小形壺、7・8は須恵器甕である。



第138図　H－35号住居址カマド実測図（1：40）



第139図　H－35号住居址出土遺物（1：4）



第140図　Ｈ－35号住居址出土遺物（１：４）

９・10は土師器甕で、９はくの字状口縁部である。

時　期

本住居址は、九世紀前葉、十二遺跡第Ｖ期に位置付けられよう。

第52表　Ｈ－35号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1（完）	蓋（須）	3.2 4.0 〈15.5〉	つまみ部は偏平な擬宝珠形を呈する。	外面　体部ロクロヨコナデ。天井部回転ヘラケズリ。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み灰色（10Y5/1）
2（回）	蓋（須）	— — 〈12.7〉	内面にかえりを有する小形な蓋。	外面　ロクロヨコナデ。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み灰白色（10Y7/1）
3（回）	坏（須）	〈14.4〉 4.1 （6.7）	体部は外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り、未調整。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み灰白色（10Y7/1）
4（完）	坏（須）	〈14.1〉 6.5 8.3	体部は直線的に外反し、底部には高台が貼り付けられる。	外面　体部ロクロヨコナデ。底部回転ヘラケズリ、切り離し方法不明。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み灰色（10Y6/1）
5（完）	坏（土）	16.2 5.4 6.0	体部は外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ、一部手持ちヘラケズリ。 底部回転糸切り、未調整。 内面　黒色研磨。	胎土は砂粒を含みにぶい黄橙色（10YR7/3）
6（回）	壺（須）	〈13.4〉 — —	口縁部はゆるく外反したのち、口唇部で立ち上がる。胴部は球状を呈する。	外面　ロクロヨコナデ。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は比較的精選され灰色（10Y6/1）
7（回）	甕（須）	〈26.3〉 — —	口縁部はゆるく外反し、口唇部は帯状に縁取られる。	外面　ロクロヨコナデ。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み灰色（10Y6/1）
8（回）	甕（須）	— — 17.5	底部平底。	外面　格子叩きの後、ヨコナデ。 内面　ナデ。	胎土は砂粒を多く含み灰色（10Y6/1）
9（回）	甕（土）	〈20.0〉 — —	口縁部はゆるくくの字状に外反する。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。	胎土は砂粒を含みにぶい赤褐色（5YR5/4）
10（回）	甕（土）	— — 4.0	底部平底。	外面　ヘラケズリ。 内面　ヘラナデ。	胎土は砂粒を含み明赤褐色（5YR5/6）

(36)　Ｈ－36号住居址

住居址　第141図

Ｈ－36号住居址は、第Ｉ区ヒ－36グリッドにおいて検出された。

本住居址は、Ｈ－35号住居址に切られて存在している。また、その北半の上部を溝によって破壊されている。

本住居址は、南北4.0m東西4.2mの隅丸方形のプランを呈し、床面積16.0m²を測り、南北軸方向はＮ－4°－Ｗを指す。壁高は、30～40cm前後を測る。壁溝は認められなかった。床面は全体に硬質な貼り床となっている。

ピットは、P_1～P_4の四個のピットが対で認められたほか、南壁際中央にはＰ5が認められた。P_1は45×30cm深さ70cm、P_2は50×40cm深さ70cm、P_3は50×45cm深さ60cm、P_4は45×40cm深さ45cm、P_5は50×40cm深さ30cmを測る。

遺物は、４の鉄鏃基部かと考えられるものが床面直上から出土している。この他は、いずれも

覆土中からの出土である。

覆土は、2層に分層されたが、I層は埋土的な様相を呈していた。I層は小粒パミス・ローム粒子を多く含む黒色土層（10YR 1.7/1）、II層は小粒パミスをよく含む黒褐色土層（10YR 3/2）であった。なお、I層・II層とも極大パミスを若干含むのが特徴的であった。

カマド　第142図

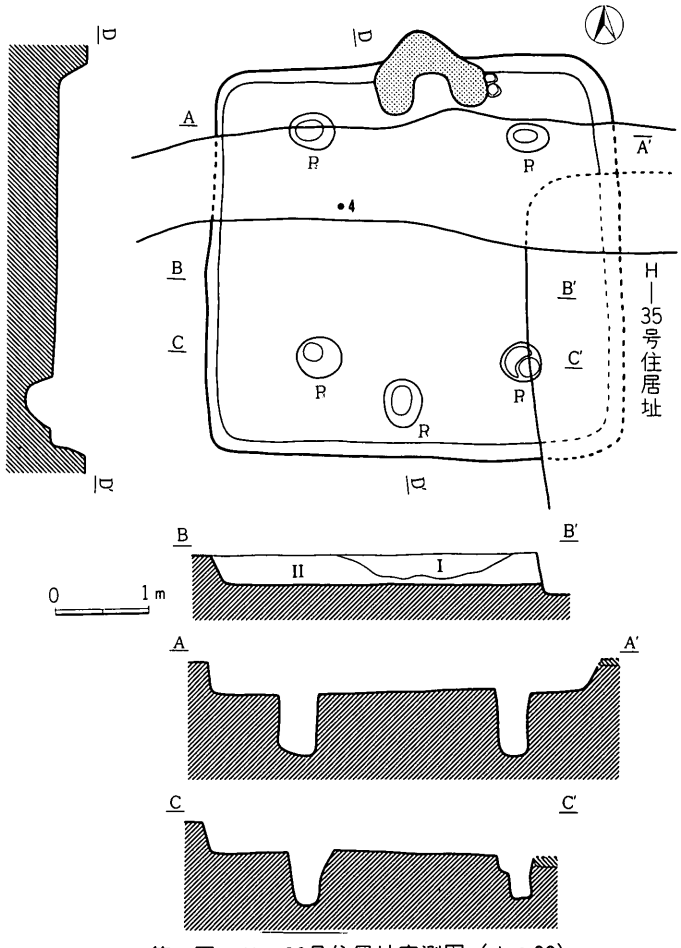
カマドは、住居址の北壁中央にあり、左右両袖の一部をとどめていた。その袖の芯には面取り軽石も入れられ、明赤褐色粘土（3層　5 YR 5/8）と黒色土（4層　10YR 1.7/1）で固められていた。

本カマド内の土層は、2層に分層された。1層は多量の粘土と若干の焼土を含む暗赤褐色粘土（5 YR 3/3）、2層は明赤褐色焼土層（5 YR 5/8）であった。

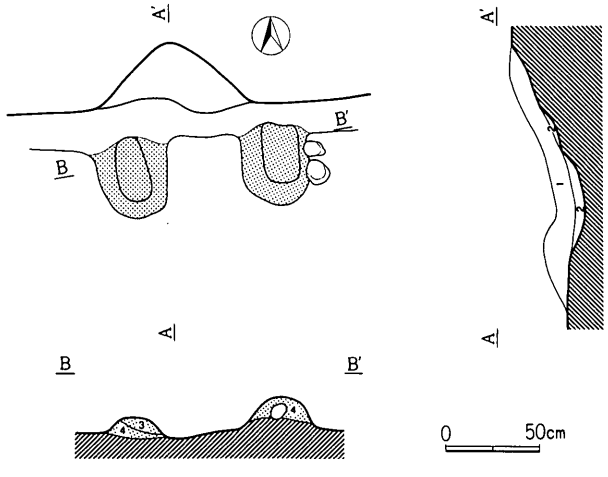
遺　物　第143図

検出された遺物は少ないが、須恵器の器種には坏・甕が、土師器片には坏・甕が認められた。図示した遺物が主だったものである。

1・2・3はくの字状口縁



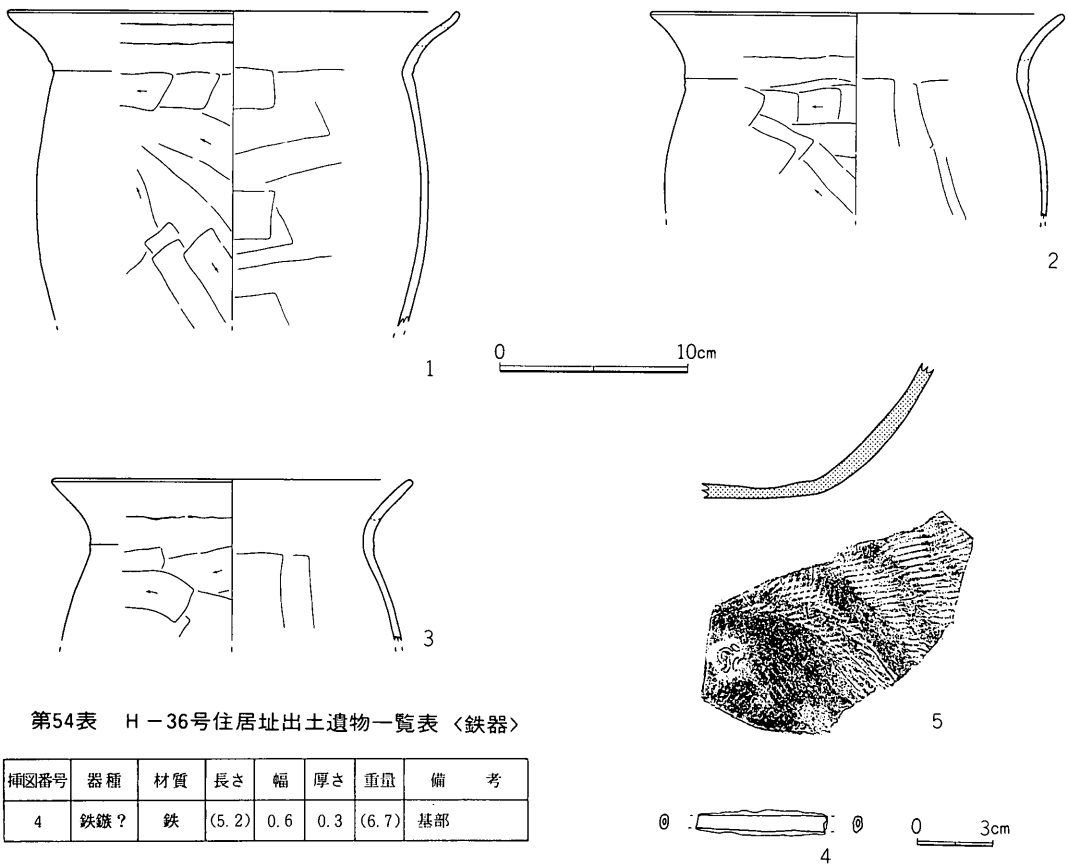
第141図　H－36号住居址実測図（1：80）



第142図　H－36号住居址カマド実測図（1：40）

第53表　Ｈ－36号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1（回）	甕（土）	〈23.9〉 — —	口縁部はくの字状に外反する。 最大径は口縁部にある。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を多く含み明赤褐色（5YR5/6）
2（回）	甕（土）	（21.8） — —	口縁部はくの字状に外反する。 最大径は口縁部にある。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を多く含み明赤褐色（5YR5/6）
3（回）	甕（土）	〈19.1〉 — —	口縁部はくの字状に外反する。 最大径は口縁部にある。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含み橙色（5YR6/6）



第54表　Ｈ－36号住居址出土遺物一覧表〈鉄器〉

挿図番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
4	鉄鏃？	鉄	(5.2)	0.6	0.3	(6.7)	基部

第143図　Ｈ－36号住居址出土遺物（1～3＝1：4　4＝1：3）

を呈する土師器甕で、最大径が口縁部にくるものである。

5は、須恵器甕の底部の線刻の拓影で、漢字の「公」にも似ている。

4は、鉄鏃基部かと考えられる

時　期

本住居址は、八世紀前半代のものと考えられる。

(37)　H－37号住居址

住居址　第144図

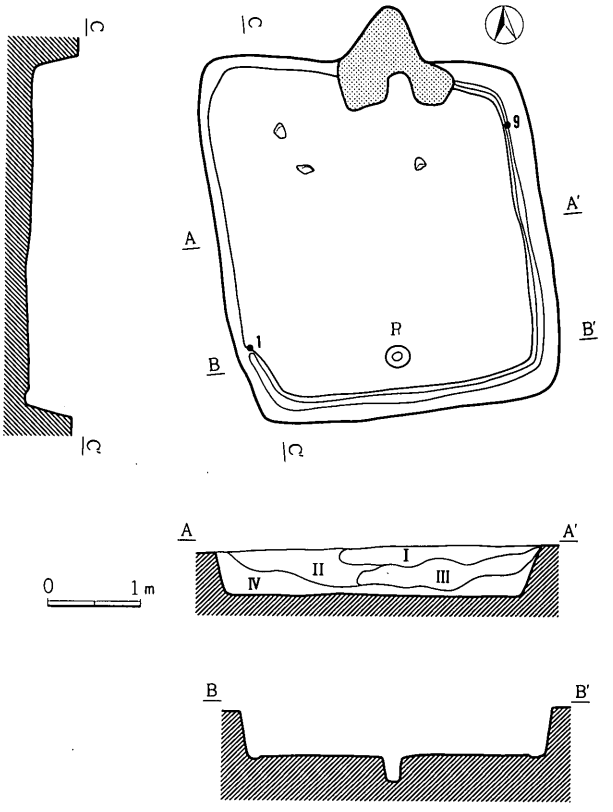
H－37号住居址は、第Ⅰ区ヒ・フ－36グリッドにおいて検出された。

本住居址は、南北3.9m東西3.5mの歪んだ隅丸方形を呈し、床面積9.9m²を測り、南北軸方向はN－14°－Wを指す。壁高は、45～55cmを測る。壁溝は東北コーナーから西南コーナーにかけて認められ、幅10～15cm深さ5cm程度を測る。床面は、全体に硬質な貼り床になっている。

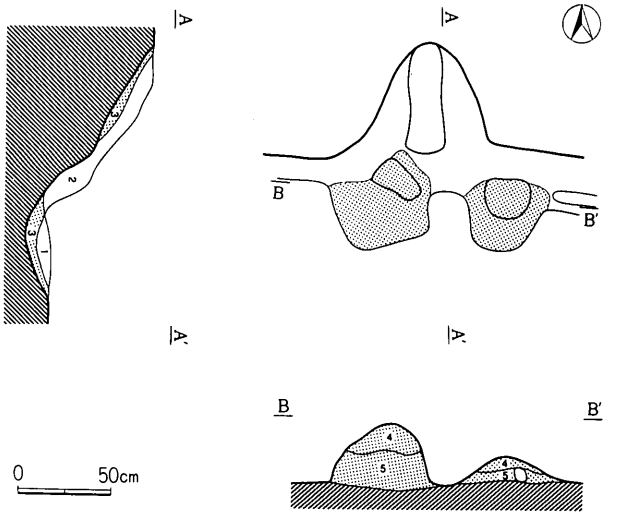
ピットは、南壁際中央にP_1が認められたのみである。P_1は25×20cm深さ25cmを測る。

遺物は、1の須恵器短頸壺が伏せられた状態で西壁際の床面直上から出土している。また、9の甕の破片は床面よりやや浮いて出土している。この他はいずれも覆土中からの出土である。

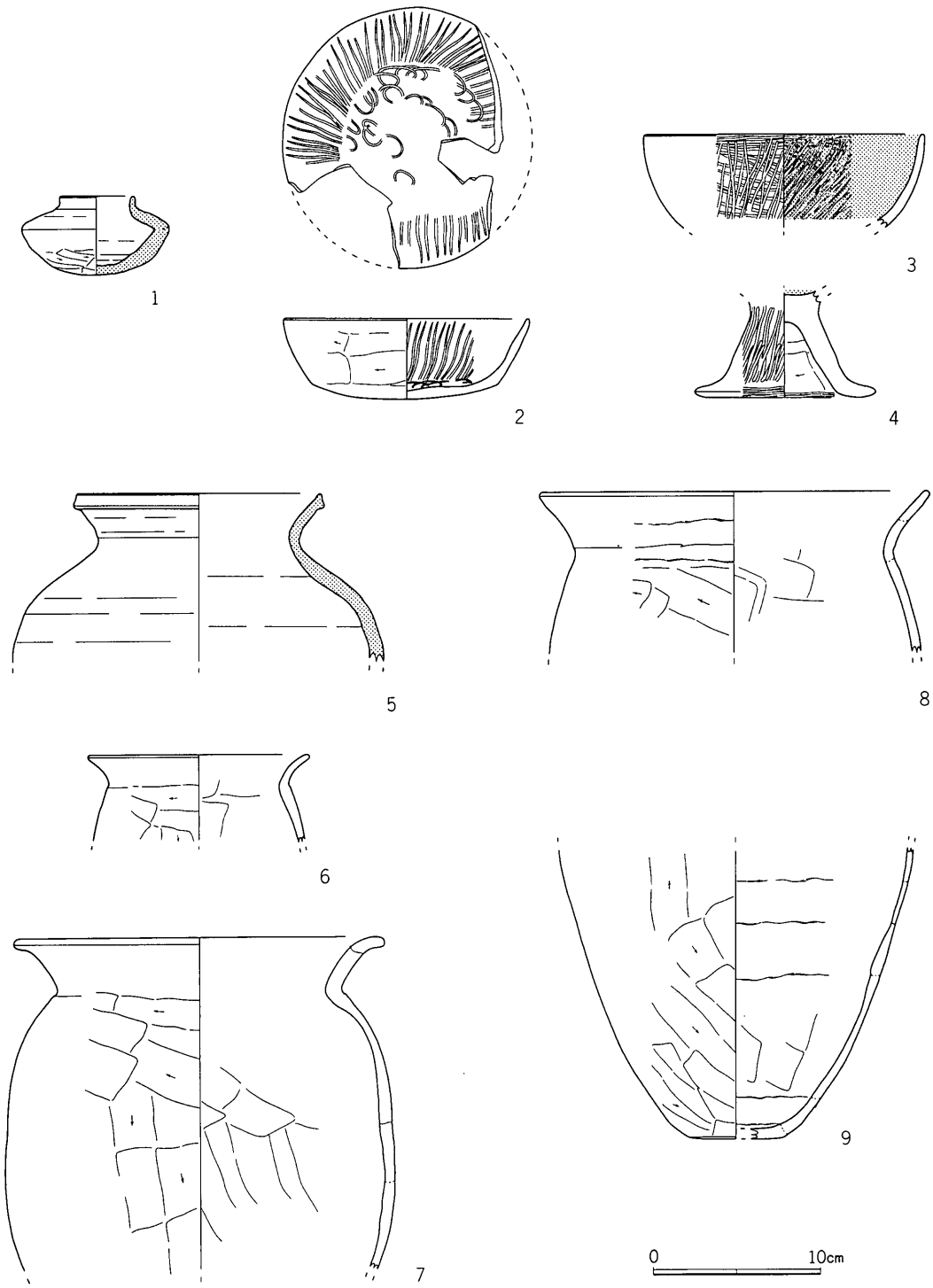
覆土は、4層に分層され、埋土的な様相を呈していた。Ⅰ層はパミス・ローム粒子を大量に含む褐色土層（10YR 4/6)、Ⅱ層は径30mm前後のパミスをよく含む黒色土層(10YR 1.7/1)、Ⅲ層はパミス・ローム粒子を多く含む黒褐色土層（10YR 2/3)、Ⅳ層はパミス・ローム粒子を多く含む黒褐色土層



第144図　H－37号住居址実測図（1：80）



第145図　H－37号住居址カマド実測図（1：40）



第146図　Ｈ－37号住居址出土遺物（１：４）

第55表　H－37号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1（完）	短頸壺（須）	4.5 4.7 —	口縁部は短く直立し、胴部中央で稜を有し、胴下半部から底部にかけて半球状を呈する小形な器形。	外面　ロクロ？ヨコナデの後、胴下半部から底部にかけてヘラケズリ。 内面　ロクロ？ヨコナデ。	外面には自然釉がかかる。胎土は灰色(10Y5/1)
2（完）	坏（土）	14.8 4.8 11.1	体部は外反し、底部は丸味をおびた平底を呈する。	外面　体部～底部ヘラケズリ。 内面　ヨコナデの後、体部に放射状暗文、見込み部にはラセン暗文が施こされる。	胎土は砂粒を多く含み橙色（5YR6/6）
3（回）	埦？（土）	〈16.7〉 — —	体部は丸味を帯びて外反する。	外面　ヘラミガキ。 内面　黒色研磨。	胎土は砂粒を含みにぶい黄橙色（10YR6/4）4と同一個体か
4（回）	高坏（土）	— — （10.8）	脚部は八の字状に開く。	外面　ヘラミガキ。 内面　裾部ヘラミガキ、胴部ヘラケズリ。	胎土は砂粒を含みにぶい黄橙色（10YR7/3）を呈する
5（回）	壺（須）	〈14.6〉 — —	口縁部は外反した後、口唇部で縁取られ、胴部は球状を呈する。	外面　ロクロヨコナデ。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み灰褐色（10YR5/1）を呈する
6（回）	甕（土）	（13.3） — —	口縁部がくの字状に外反する小形な器形。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を多く含みにぶい黄橙色を呈する（10YR6/3）
7（回）	甕（土）	〈22.0〉 — —	口縁部はくの字状に外反し、胴部は球状を呈する。やや肉厚。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みにぶい橙色（7.5YR6/4）
8（回）	甕（土）	〈23.2〉 — —	口縁部はくの字状に外反する。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みにぶい赤褐色（5YR5/4）
9（回）	甕（土）	— — （5.7）	胴部は弓なりに湾曲し、底部平底。	外面　胴部ヘラケズリ。底部ヘラケズリ。 内面　ヘラナデ。	胎土は砂粒を含み橙色を呈する（5YR6/6）

（10YR 3/2）であった。

カマド　第145図

カマドは、住居址の北壁中央よりやや東にあり、左右両袖の一部をとどめていた。その袖の芯には面取り軽石と安山岩の小礫が埋められ、灰褐色粘土（4層　5 YR 6/2）、黒褐色粘土（5層　5 YR 2/2）で固められていた。また、その火床部には黄褐色土層（10YR　5/6）が貼られていた。

本カマド内の土層は、2層に分層された。1層は暗赤褐色焼土層（5 YR　3/3）、2層はカーボン・焼土・粘土を多量に含む明赤褐色土層（5 YR 5/8）であった。

遺　物　第146図

遺物の検出量は少ないが、須恵器の器種には坏・短頸壺・甕が、土師器片には高坏・埦・甕が認められた。図示した遺物が主だったものである。

1は、須恵器短頸壺で、きわめて小形なものである。

2は、内面体部に放射状・見込部にラセン状の、畿内系暗文のみられる土師器坏である。

3は、内面黒色研磨のなされた土師器埦である。

4は、土師器高坏の脚部である。

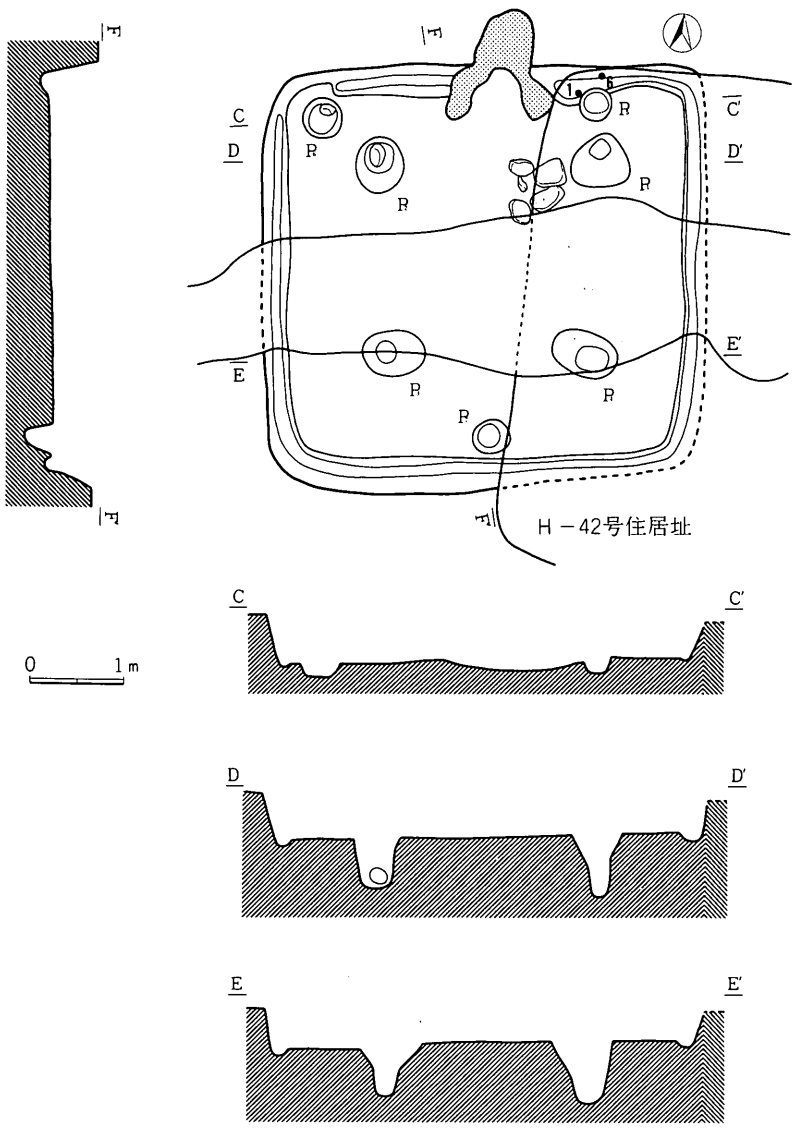
5は、須恵器壺の上半部である。

6は土師器小形甕、7はやや肉厚な土師器小形甕、8はくの字状口縁の土師器甕である。

時　期

本住居址は、八世紀第Ⅰ四半期、十二遺跡第Ⅰ期に位置付けられよう。

(38)　H－38号住居址



第147図　H－38号住居址実測図（1：80）

住居址　第147図

H－38号住居址は、第Ⅰ区フ－36グリッドにおいて検出された。

本住居址の東半分の上部は、H－26号住居址によって切られている。また、本住居址の中央上部は溝によって破壊されている。

本住居址は、南北4.5m東西4.7mの隅丸方形を呈し、床面積15.7m²を測り、南北軸方向はN－14°－Wを指す。壁高は、40～50cmを測る。壁溝は西北コーナーを除き住居址をほぼ全周する。床面は張り床ではないが、全体に硬質な床となっている。第Ⅰ区では、床面より20cm上から安山岩礫5点が検出されている。カマドの構材と考えられようか。

ピットは、P_1～P_4の四個のピットが対で存在しており、カマドの東脇にはP_5が、西北コーナーにはP_6が、また、南壁際中央にはP_7が認められた。

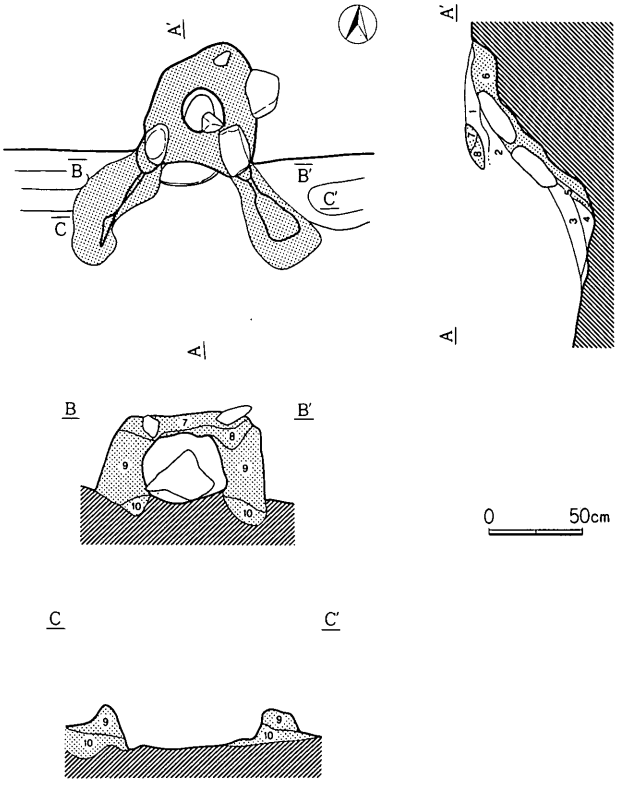
P_1は60×55cm深さ65cm、P_2は60×50cm深さ50cm、P_3は70×50cm深さ50cm、P_4は70×45cm深さ65cm、P_5は35×35cm深さ15cm、P_6は40×40cm深さ15cm、P_7は40×35cm深さ30cmを測る。

遺物は、1の須恵器蓋と6の石製品がカマド東脇の床面直上より出土している。この他は、いずれも覆土中からの出土である。

カマド　第148図

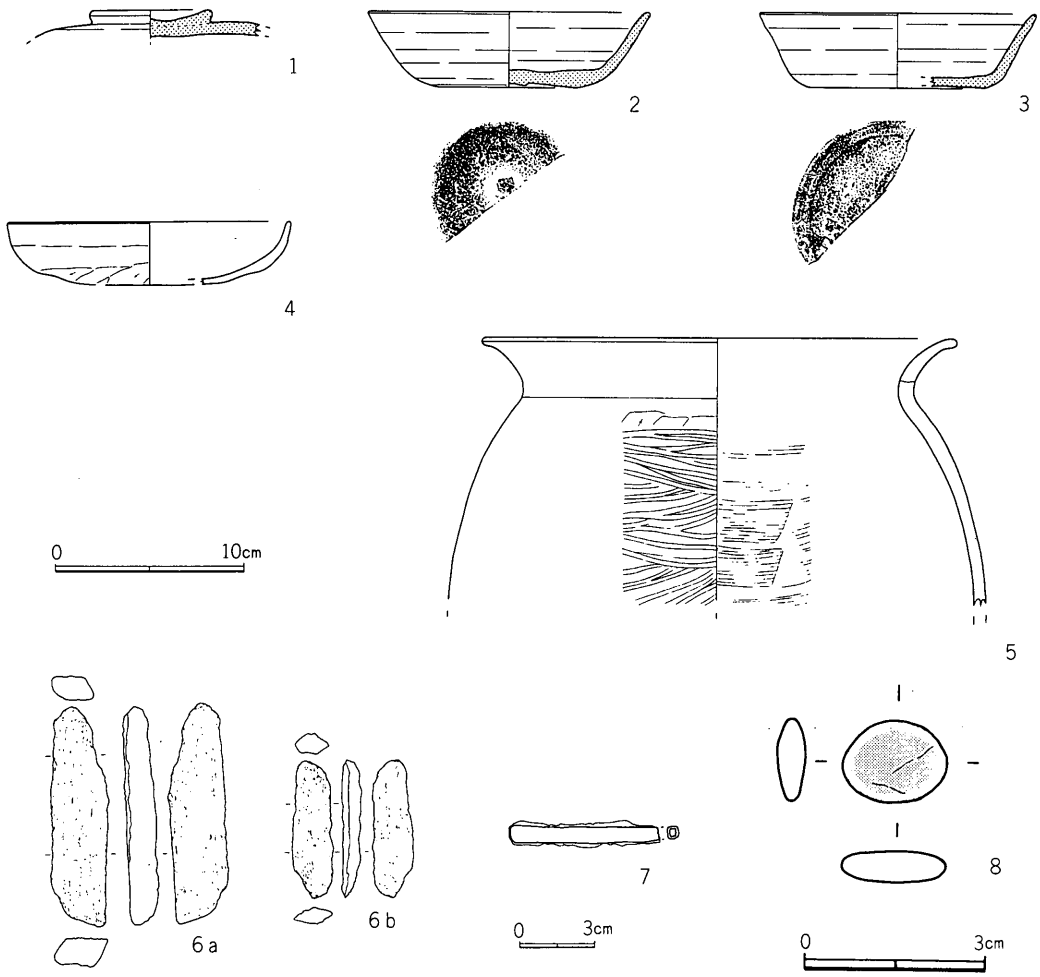
カマドは、住居址の北壁中央にあり、左右両袖と天井部の一部をとどめていた。その袖の一部には面取り軽石が据えられ、明赤褐色土（7層　5 YR 5/6）、暗赤褐色土（8層　5 YR 5/3）、粘土とロームの混じる暗赤褐色土（9層　5 YR 5/4）で固められていた。

本カマド内の土層は、4層に分層された。1層は、8層の崩落土層である暗赤褐色土層（5YR 5/3）、2層はカーボン・焼土を含む黒褐色土層（5 YR 3/1）、3層は焼けたにぶい褐色粘土層（7.5YR 5/4）、4層は褐色焼土層（7.5YR 4/6）であった。



第148図　H－38号住居址カマド実測図（1：40）

遺　物　第149図



第149図　Ｈ－38号住居址出土遺物（１～５＝１：４　６・７＝１：３　８＝４：５）

第56表　Ｈ－38号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1（完）	蓋（須）	6.5 — —	つまみ部は径が大きく、偏平な皿状を呈する。	外面　ロクロヨコナデ。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み灰白色（N 7/0）
2（回）	坏（須）	(15.0) 3.9 (8.0)	体部は外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。 底部回転ヘラキリ、未調整。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み灰黄色（2.5Y 7/2）
3（回）	坏（須）	(14.6) 3.9 (9.2)	体部は外反し、底部平底の盤状の器形。	外面　体部ロクロヨコナデ。 底部回転ヘラキリ、未調整。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み灰白色（5Y 7/1）
4（回）	坏（土）	(15.0) — —	体部は丸味を帯びて外反し、底部は偏平な丸味を呈するものと思われる。	外面　口縁部ヨコナデ。 体部～底部ヘラケズリ。 内面　ヨコナデ。	胎土は砂粒を含みにぶい橙色（7.5YR 6/4）
5（回）	甕（土）	(25.2) — —	口縁部はくの字状に外反し、胴部は球状を呈する。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラミガキ。 内面　口縁部ヨコナデ。 胴部刷毛目状調整。	胎土は砂粒を含みにぶい黄橙色（10YR 7/4）

遺物は、須恵器では蓋・坏・甕が、土師器には坏・甕が認められた。図示した遺物が主だったものである。

1は須恵器蓋で、皿状態のツマミである。

2・3は、須恵器坏で、回転ヘラキリのなされた底部をみせるものである。

4は、土師器坏である。

5は、胴部にヘラミガキのなされた土師器甕である。

6a・bは、片麻岩片で祭祀遺物と考えられようか。

7は鉄鏃基部と考えられようか。

9は、玉石で、装飾品もしくは祭祀遺物と考えられようか。

第57表　H－38号住居址出土遺物一覧表

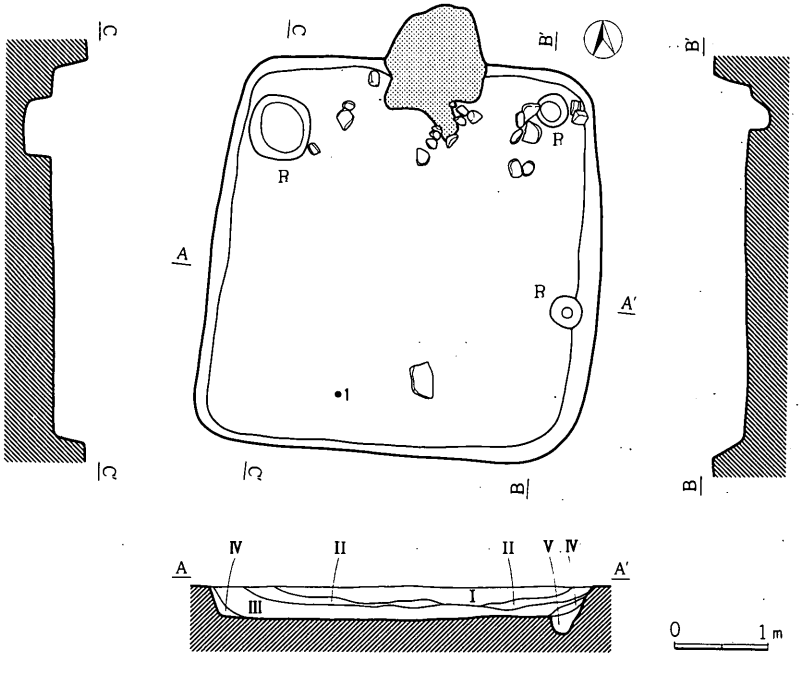
〈鉄器・石器〉

挿図番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
6a	不明	片麻岩	(8.6)	(2.3)	(1.3)	(32.0)	祭祀遺物か
6b	不明	片麻岩	(5.4)	(1.6)	(0.8)	(7.8)	〃
7	鉄鏃？	鉄	(5.9)	0.7	0.5	8.1	基部
8	不明	チャート	1.3	1.7	0.5	1.5	

時　期

本住居址は、八世紀第Ⅰ四半期、十二遺跡第Ⅰ期に位置付けられよう。

(39)　H－39号住居址



第150図　H－39号住居址実測図（1：80）

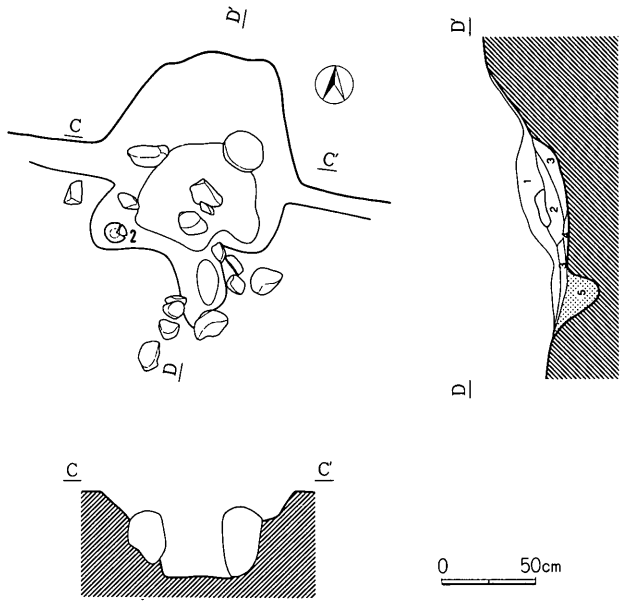
住居址　第150図

H－39号住居址は、第Ⅰ区フ－34グリッドにおいて検出された。

本住居址は、H－40号住居址を切って存在している。

本住居址は、南北4.1m東西4.1mの隅丸方形を呈し、床面積14.3m²を測り、南北軸方向はN－0°－Sを指す。壁高は、30～40cmを測る。壁溝は認められない。床面は全体に硬質な貼り床となっている。

ピットは、東北コーナーにはP₁が、西北コーナーにはP₂が、また、東壁際中央にはP₃が認められた。P₁は35×35cm深さ20cm、P₂は75×70cm深さ30cm、P₃は35×30cm深さ20cmを測る。



第151図　H－39号住居址カマド実測図（1：40）

遺物は、1の須恵器蓋が床面より5cm浮いて出土している。この他は、いずれも覆土中からの出土である。

覆土は、5層に分層され、埋土的な様相を呈していた。Ⅰ層は小粒パミス・スコリアを多く含みロームをブロック状に含む黒褐色土層（10YR 2/3）、Ⅱ層は小粒パミス・スコリアを多く含む黒色土層（10YR 2/1）、Ⅲ層は小粒パミス・スコリアを多く含む黒褐色土層（10YR 2/3）、Ⅳ層は小粒パミス・スコリアを多く含みロームをブロック状に含む黒色土層（10YR 2/1）、Ⅴ層は小粒パミス・スコリアを多く含みロームをブロック状に含む黒褐色土層（10YR 3/3）であった。

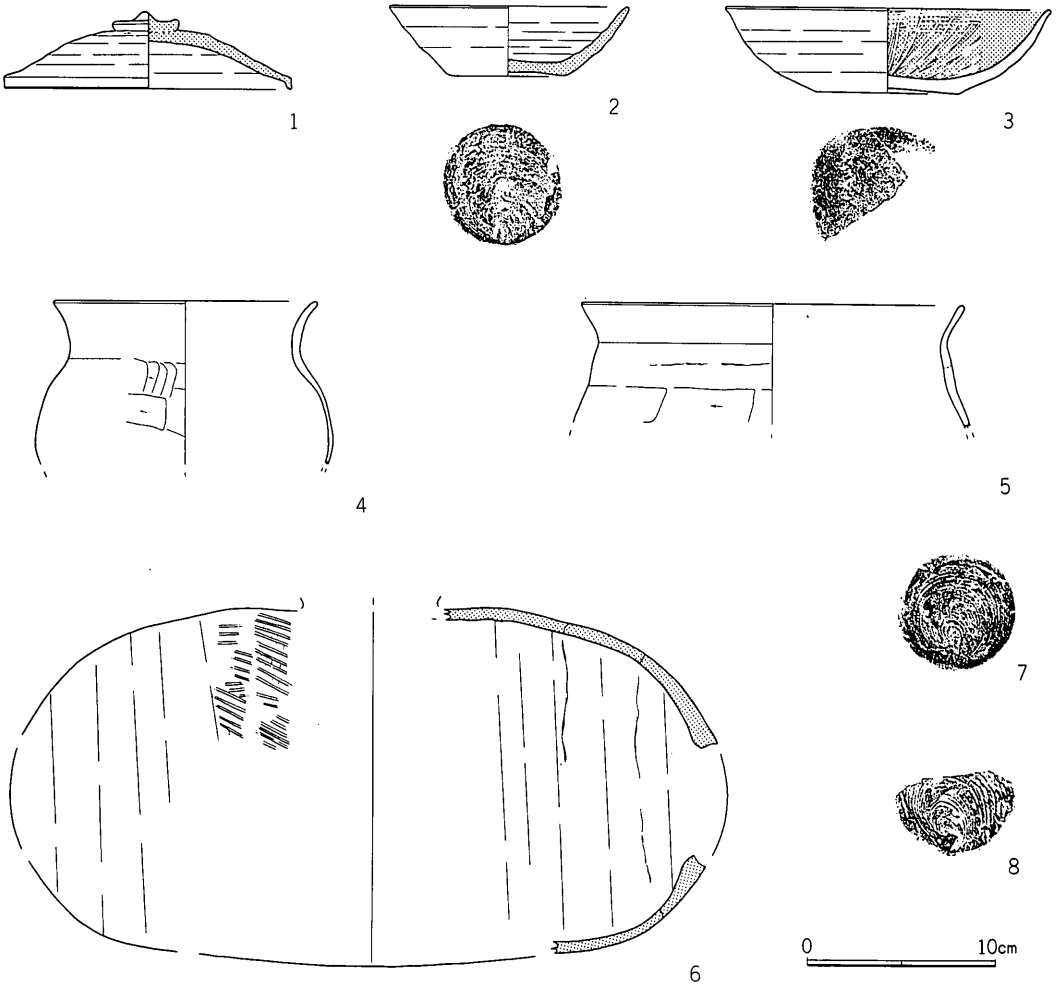
カマド　第151図

カマドは、住居址の北壁中央にあるが、ほぼ完全に破壊された状態にあった。その構材と考えられる面取り軽石と安山岩礫がカマド近辺に散乱していた。本カマドの火床部はローム混じりの黒色土（5層　7.5YR 1.7/1）で固められていた。

本カマド内の土層は、4層に分層された。1層はカマドの構材と考えられる粘土を含む黒褐色土層（7.5YR 3/2）、2層はカマドの構材と考えられる粘土を含む褐色土層（7.5YR 4/3）、3層はカーボン・焼土等をまったく含まない黒色土層（7.5YR 1.7/1）、4層は明赤褐色焼土層（5 YR 5/8）であった。

遺　物　第152図

遺物の出土量は、他の住居址とくらべて少ない。須恵器では蓋・坏・横瓶・甕が、土師器では



第152図　H－39号住居址出土遺物（1：4）

坏・甕が認められたのみであった。図示した遺物が主だったものである。

1は、須恵器蓋で、宝珠ツマミのものである。

2は須恵器坏で、回転糸切りによるものである。

3は、内面黒色研磨のなされた土師器坏である。

4は、土師器小形球胴甕である。

5は、コの字状口縁の土師器甕である。

6は、胴部半分と頸部を失うが、須恵器横瓶である。

時　期

本住居址は、九世紀前葉、十二遺跡第Ⅴ期に位置付けられよう。

第58表　Ｈ－39号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1（完）	蓋（須）	3.5 4.1 15.2	つまみ部は擬宝珠形を呈する。	外面　ロクロヨコナデ。天井部回転ヘラケズリ。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み灰色（10Y5／1）
2（完）	坏（須）	12.7 3.7 6.2	体部は外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り、未調整。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み灰色（10Y5／1）
3（回）	坏（土）	(17.8) 4.2 (7.6)	体部は丸味を帯びて外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。底部全面手持ちヘラケズリ、切り離し方法不明。 内面　ヘラミガキ（一部黒色）（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み明黄褐色（10YR7／6）
4（回）	甕（土）	〈14.0〉 — —	口縁部は丸味を帯びて外反し、胴部は球状を呈する。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みにぶい橙色（7.5YR6／4）
5（回）	甕（土）	(20.3) — —	口縁部はコの字状に外反する。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含み橙色（7.5YR6/6）
6（回）	横瓶（須）	— — —	胴部はカプセル状を呈する。	外面　叩きの後、（ロクロ？）ヨコナデ。 内面　（ロクロ？）ヨコナデ。	胎土は砂粒を含み灰色（10Y5／1）

(40)　Ｈ－40号住居址

住居址　第154図

Ｈ－40号住居址は、第Ｉ区フ－34グリッドにおいて検出された。

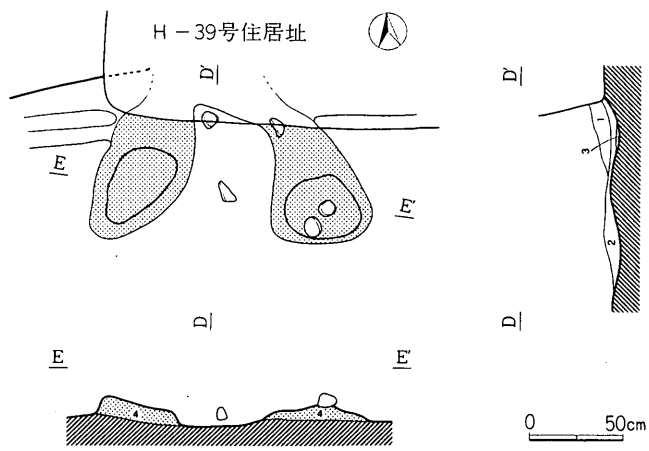
本住居址の北壁は、Ｈ－39号住居址によって切られている。また、南半分はＦ－53号掘立柱建物址によって切られている。

本住居址は、南北4.8m東西4.8mの隅丸方形を呈し、南北軸方向はＮ－８°－Ｗを指す。壁高は、50～55cm前後を測る。壁溝は、西壁中央・南壁東・北壁東においてとぎれるが、それ以外には幅15～25cm深さ５cm程度のものが認められた。床面は、全体にあまり硬質でない薄い張り床となっている。

ピットは、P_1～P_4の四個のピットが対で認められた。

P_1は45×40cm深さ40cm、P_2は40×35cm深さ35cm、P_3は65×60cm深さ40cm、P_4は45×40cm深さ35cmを測る。

遺物はいずれも覆土中からの



第153図　Ｈ－40号住居址カマド実測図（１：40）

出土である。

カマド　第153図

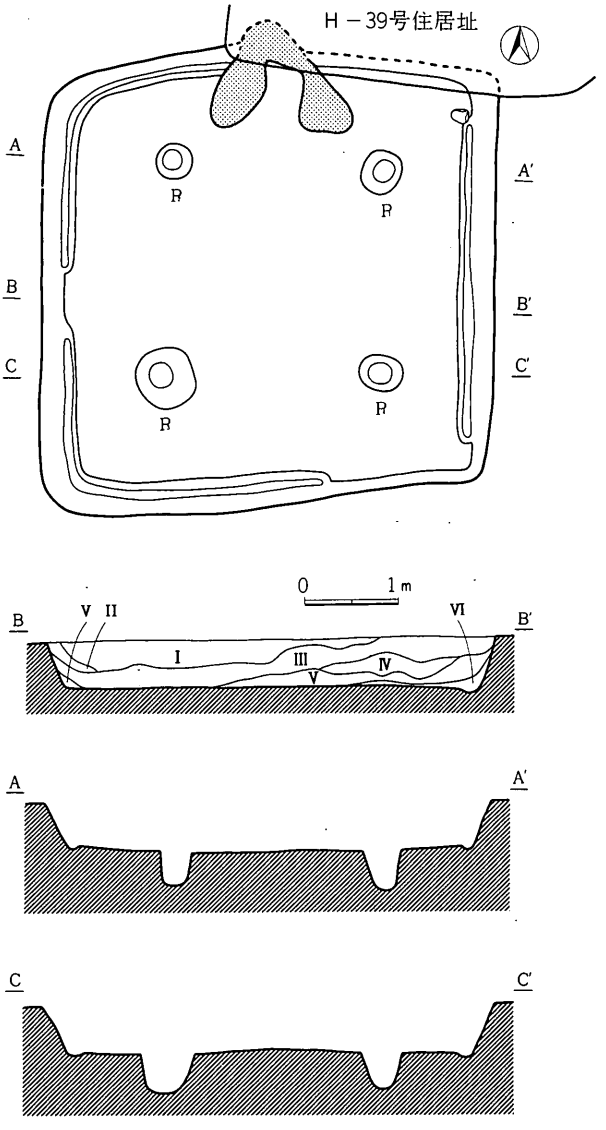
カマドは、住居址の北壁中央にあり、左右両袖の一部を僅かにとどめているのみであった。その袖はにぶい赤褐色粘土（4層　5 YR 5/3）で固められていた。

本カマド内の土層は、3層に分層された。1層はカマドの構材と考えられる粘土と焼土を含む褐色土層（7.5YR 4/4）、2層はカマドの構材と考えられる粘土を含むにぶい褐色土層（7.5YR 5/4）、3層は暗赤褐色焼土層（2.5YR 3/6）であった。

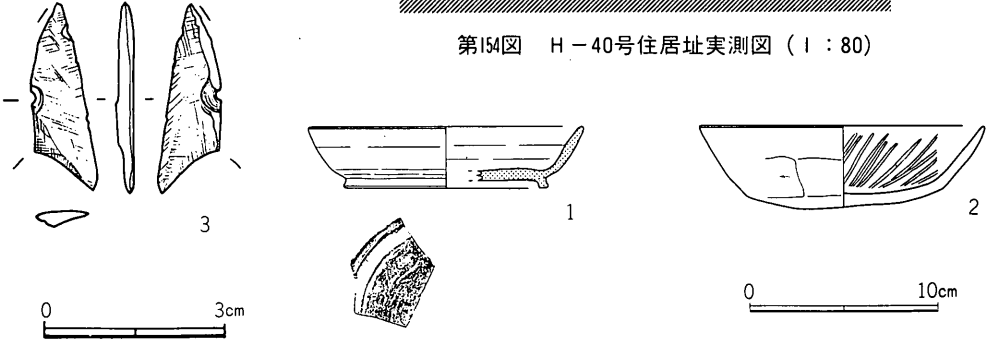
遺　物　第155図

遺物の出土量は、他の住居址とくらべてきわめて少ない。須恵器では坏・高台付坏の破片が、土師器では坏と甕の破片が認められたのみであった。図示した遺物が主だったものである。

1は、須恵器高台付坏で、底部に



第154図　H－40号住居址実測図（1：80）



第155図　H－40号住居址出土遺物（1・2＝1：4　3＝4：5）

第59表　Ｈ－40号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1（回）	坏（須）	〈14.6〉 3.3 〈10.9〉	体部は外反し、底部には高台が貼り付けられる。	外面　体部ロクロヨコナデ。底部回転ヘラケズリ、切り離し方法不明。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は比較的精選され灰色（10Y6/1）
2（完）	坏（土）	15.1 4.3 10.4	体部は外反し、底部は丸味のある平底。	外面　口縁部ヨコナデ。体部～底部ヘラケズリ。 内面　体部に放射状、見込み部にラセン暗文が施こされる。	胎土は精選されず赤褐色粒子を特徴的に含み、浅黄橙色（10YR8/3）

第60表　Ｈ－40号住居址出土遺物一覧表〈石器〉

挿図番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
3	磨製石鏃	粘板岩	3.0	(1.0)	(0.2)	(0.7)	半分欠損

は回転ヘラケズリがなされており、切り離し方法は不明である。

2は、体部に放射状暗文のみられる土師器坏である。見込部は剝落がはげしく暗文の有無が不明であるが、畿内系土器と考えられる。

3は、半分を欠損する有孔磨製石鏃である。Ⅲ区覆土中出土。

時　期

本住居址は、八世紀第Ⅱ四半期、十二遺跡第Ⅱ期に位置付けられよう。

(41)　Ｈ－41号住居址

住居址　第156図

Ｈ－41号住居址は、第Ⅰ区フ－33・34グリッドにおいて検出された。

本住居址の大半は、Ｈ－12号住居址によって切られている。

本住居址は、南北60cmが残存、東西は4.5mを測り、隅丸方形のプランを呈するものとおもわれ、南北軸方向はＮ－3°－Ｗを指す。壁高は、40cm前後を測る。壁溝は認められない。床面は壁際でもあり軟質であった。

ピットは残存部分には認められなかった。

遺物はまったく出土していない。

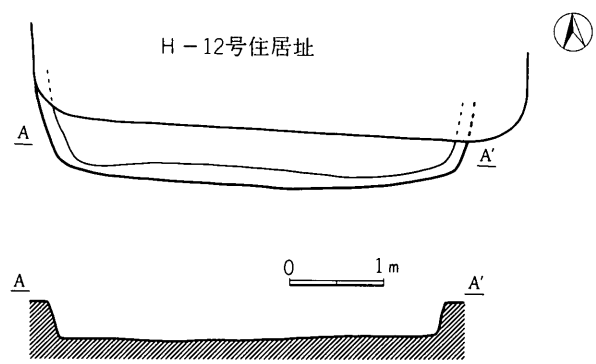
カマド

カマドの存在は確認されなかった。

遺　物

遺物はまったく出土していない。

時　期



第156図　Ｈ－41号住居址実測図（1：80）

本住居址の時期は、遺物の出土が無いため、切り合い関係等をもってしか判断できず、不明としておきたい。

(42)　H－42号住居址

住居址　第157図

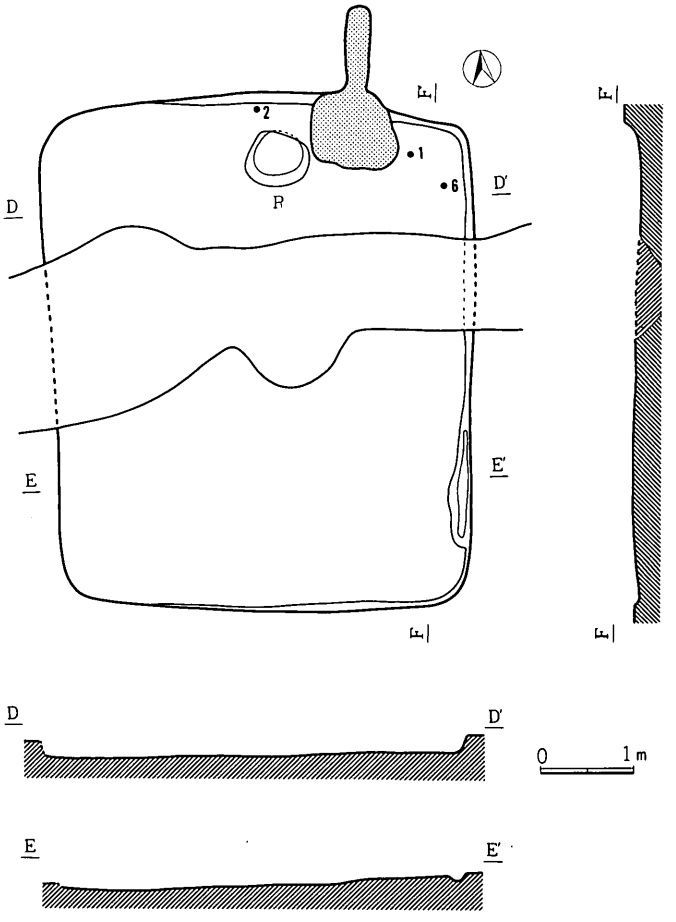
H－42号住居址は、第Ⅰ区フ－35グリッドにおいて検出された。

本住居址は、H－38号住居址の上部を切って存在している。また、その中央部は溝によって破壊されている。

本住居址は、南北5.4m、東西は推定で4.4m程度を測るものと考えられる。隅丸長方形を呈するものとおもわれ、推定床面積は22.5m²である。南北軸方向はN－0°－Sを指す。壁高は、最深部で15cmを測る。壁溝は、東壁において僅かに認められた。床面は全体に硬質な貼り床となっている。

ピットはカマドの西脇にP_1が認められたのみである。P_1は70×60cmを測る。

遺物は、1の灰釉陶器が正常位でカマド脇の床面直上より出土している。2の須恵器坏は、床面より10cm浮いて検出されている。また、6の土師器坏はカマド東脇の床面よりやや浮いて出土している。カマド中からは5の土師器坏が正常位で検出された。この他は、いずれも覆土中からの出土である。



第157図　H－42号住居址実測図（1：80）

カマド　第158図

カマドは、住居址の北壁中央より東よりにあり、左右両

袖の一部をとどめていた。その袖の芯には面取り軽石（e～g）と安山岩礫（c・d）が据えられ、また支脚には角柱状の面取り軽石二個（a・b）が用いられていた。

本カマドの煙道は、壁外に90cmほど細長くのびていた。

遺　物　第159・160図

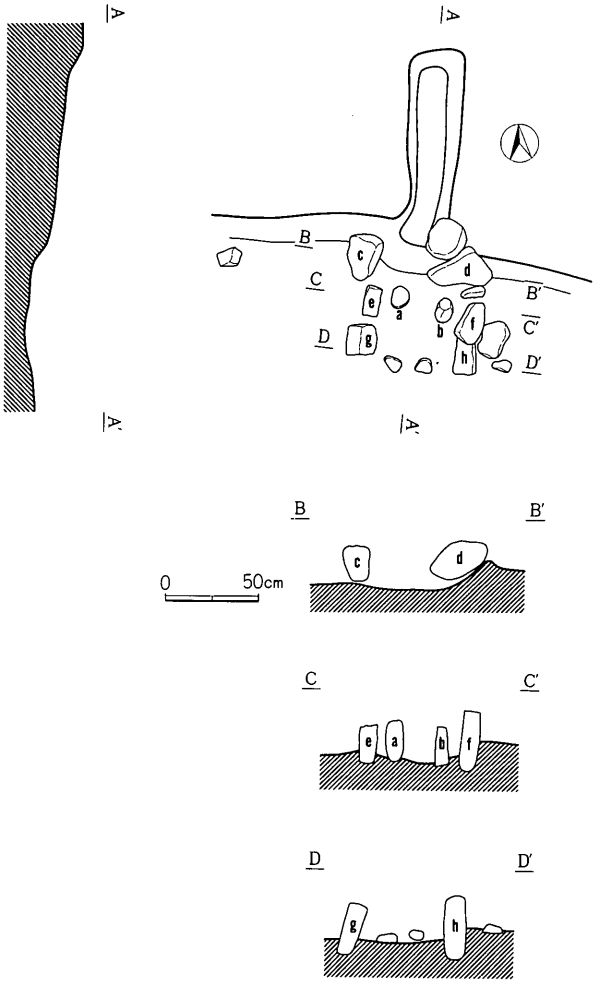
遺物の出土量は、他の住居址とくらべて少ない。灰釉陶器では皿が、須恵器では坏と・甕の破片が、土師器には坏・甕が認められた。図示した遺物が主だったものである。

1は、灰釉陶器段皿で、内外面ともに釉は刷毛掛けによっている。

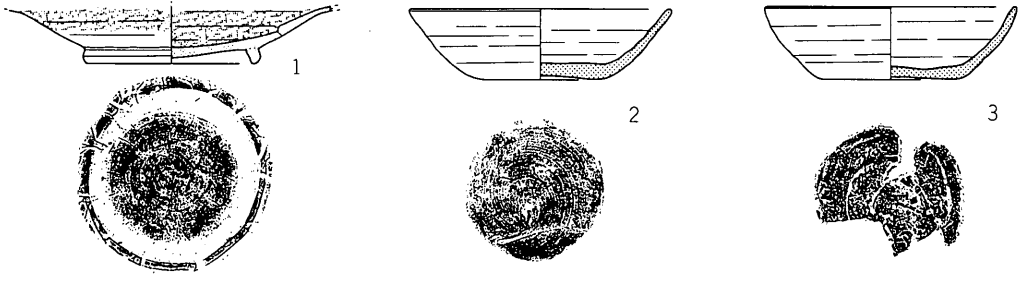
2～4は須恵器坏で、いずれも回転糸切りによるものである。

5～7は、内面黒色研磨のなされた土師器坏で、いずれも回転糸切りによるものである。

8～10は、コの字状口縁の土師器甕で、このうち8・9は小形球胴甕である。



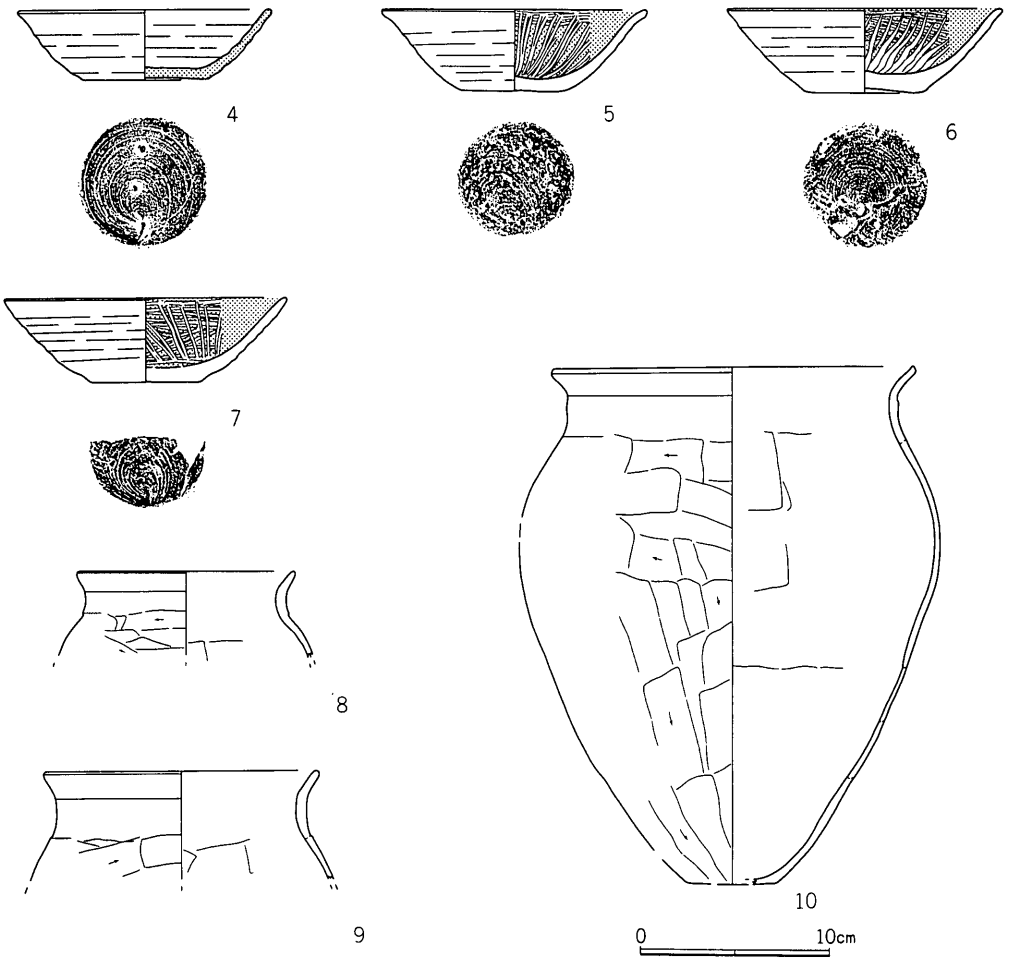
第158図　H－42号住居址カマド実測図（1：40）



第159図　H－42号住居址出土遺物実測図（1：4）

時　期

本住居址は、九世紀後葉、十二遺跡第VI期に位置付けられよう。



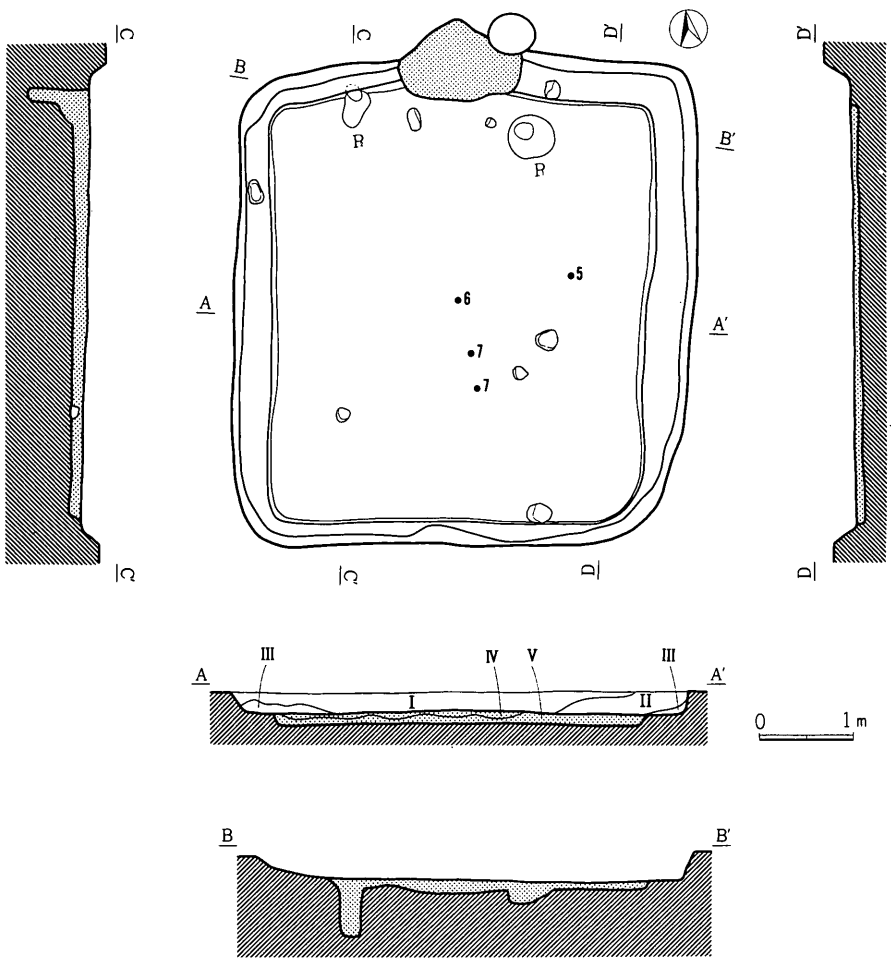
第160図　H－42号住居址出土遺物（1：4）

第61表　H－42号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1（回）	皿（灰）	― ― 8.9	内面に段を有し、底部には高台が貼り付けられる。	外面　体部ロクロヨコナデ。底部回転ヘラケズリ、切り離し方法不明。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は精選され灰白色(10Y8/1)釉は内外面に刷毛掛けによる。
2（回）	坏（須）	〈13.9〉 3.8 6.9	体部は外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り、未調整。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み灰色（10Y6/1）
3（回）	坏（須）	(13.3) 3.9 (7.5)	体部は外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。 底部回転ヘラキリ？未調整 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は比較的精選され灰白色（2.5Y8/2）
4（完）	坏（須）	13.5 3.7 6.6	体部は外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り、未調整。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み灰色（10Y5/1）内外面に火襷きあり

第62表　Ｈ－42号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

5 (完)	坏 (土)	14.1 4.3 5.7	体部は外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り、未調整。 内面　黒色研磨。	胎土は砂粒を含み浅黄橙色 (7.5YR8/4)
6 (回)	坏 (土)	(14.6) 4.4 6.6	体部は外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り、未調整。 内面　黒色研磨（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み黄橙色 (10YR8/6)
7 (回)	坏 (土)	〈15.0〉 4.4 (6.0)	体部は外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り、未調整。 内面　黒色研磨（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含みにぶい黄橙色 (10YR7/4)
8 (回)	甕 (土)	〈11.5〉 — —	口縁部はコの字状に外反し、胴部は球状を呈する小形の器形。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みにぶい赤褐色 (5YR5/4)
9 (回)	甕 (土)	〈14.6〉 — —	口縁部はコの字状に外反し、胴部は球状を呈するものと思われる。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みにぶい橙色 (7.5YR6/4)
10 (完)	甕 (土)	19.2 27.2 (4.7)	口縁部はコの字状に外反し、胴部は弓なりに湾曲、底部平底。 最大径は胴部上半にある。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は比較的精選され、明赤褐色(5YR5/6) 焼成良好



第161図　Ｈ－43号住居址実測図（１：80）

(43)　H－43号住居址

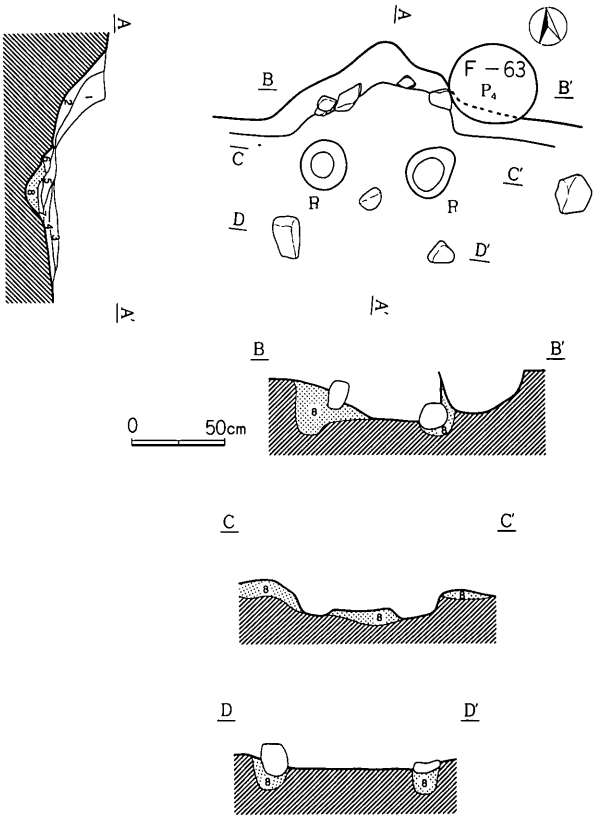
住居址　第161図

H－43号住居址は、第II区フ－31グリッドにおいて検出された。

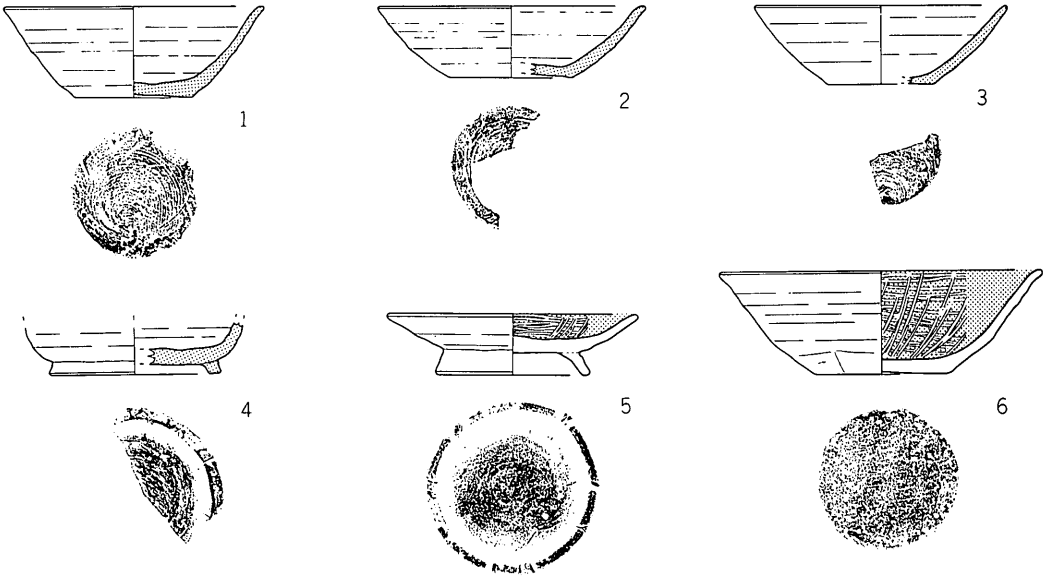
本住居址は、H－44号住居址を切って存在している。また、そのカマドの脇をF－63号掘立柱建物址のP_4によって切られている。

本住居址は、南北5.2m東西4.9mの隅丸方形を呈し、床面積22.1m²を測り、南北軸方向はN－0°－Sを指す。壁高は、20～35cmを測る。壁溝は認められない。床面は、全体に硬質な貼り床となっている。ピットは認められない。

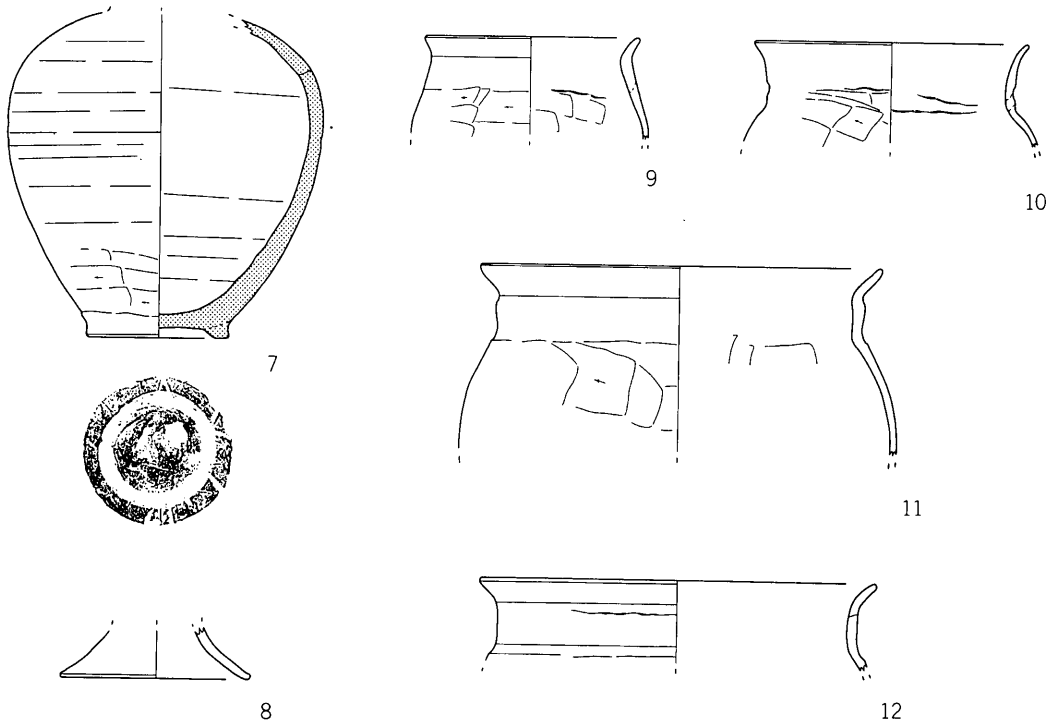
なお、本住居址の現プランは拡張後のものと考えられ、旧プランが現



第162図　H－43号住居址カマド実測図（1：80）



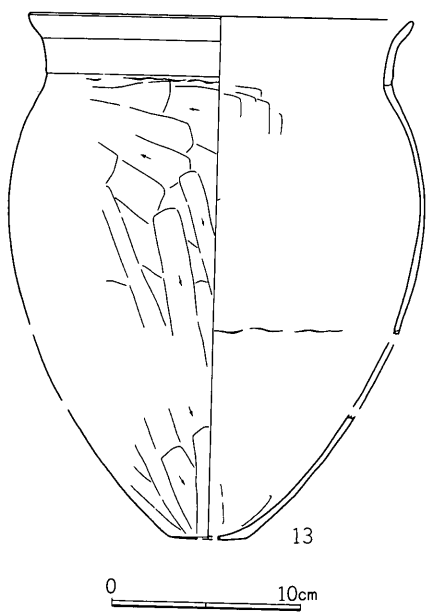
第163図　H－43号住居址出土遺物（1：4）



床面下より検出された。旧プランは、南北4.6m東西4.1mの隅丸方形を呈し、床面積17.1m²を測る。旧プランに伴うピットは、北壁側にP_1・P_2が認められた。P_1は50×50cm深さ15cm、P_2は40×30cm深さ50cmを測る。

遺物は、5の土師器高台付皿が伏せられた状態で旧床面直上より出土している。6も、旧床面中からの出土である。これ以外はいずれも覆土中からの出土である。

覆土は、3層に分層され、埋土的な様相を呈していた。I層は細粒パミスを多量に含む褐色土層（10YR 2/2）、II層はローム粒子を多く含む暗褐色土層（10YR 3/4）、III層は黒色土層（10YR 1.7/1）であった。また、張り床としての埋土はIV層・V層で、IV層はローム粒子を大量に含む褐色土層（10YR 4/6）、V層は黒色土層（10YR 2/1）であ



第164図　H－43号住居址出土遺物（1：4）

第63表　H－43号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1 (回)	坏 (須)	〈13.8〉 4.8 6.2	体部は外反し、底部平底で、比較的深い器形。	外面　体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り、未調整。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	完全な環元炎焼成となっておらずにぶい褐色 （7.5YR6/3）
2 (回)	坏 (須)	(14.2) 3.8 (6.5)	体部は外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り、未調整。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み灰白色 （7.5Y7/1） 3と同一個体か
3 (回)	坏 (須)	〈13.4〉 4.2 〈5.6〉	体部は外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り、未調整。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み灰白色 （7.5Y7/1） 2と同一個体か
4 (回)	坏 (須)	― ― (9.1)	底部には高台が貼り付けられる。	外面　体部ロクロヨコナデ。 底部回転ヘラケズリ、切り離し方法不明。 内面　ロクロヨコナデ（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み灰色 （10Y6/1）
5 (完)	皿 (土)	13.4 3.2 8.2	偏平な皿の底部に高台が貼り付けられる。	外面　体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切りの後、ヨコナデ。 内面　黒色研磨。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含みにぶい橙色 （7.5YR7/3）
6 (回)	坏 (土)	〈17.1〉 5.4 7.0	体部は外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。底部全面手持ちヘラケズリ、切り離し方法不明。 内面　黒色研磨。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を多く含みにぶい橙色(7.5YR7/4)
7 (完)	長頸瓶 (須)	― ― 7.5	胴部はやや肩の張った球状を呈し、底部には高台が貼り付けられる。 頸部を欠損する。	外面　胴部ロクロヨコナデの後、胴部最下部にヘラケズリ、底部ヨコナデ。 切り離し方法不明。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は比較的精選され灰褐色 （5YR6/2）
8 (完)	甕 (土)	― ― 10.1	台付甕の脚部と考えられ、八の字状に開く形態を呈する。	外面　ヨコナデ。 内面　ヨコナデ。	胎土は比較的精選されにぶい橙色(7.5YR7/4)
9 (回)	甕 (土)	(11.4) ― ―	口縁部は直線的に内傾したあと短く外反する。小形な器形。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みにぶい褐色 （7.5YR5/3）
10 (回)	甕 (土)	(14.5) ― ―	口縁部はゆるく外反し、胴部は球状を呈する。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みにぶい橙色 （7.5YR6/4）
11 (回)	甕 (土)	(21.2) ― ―	口縁部はコの字状に外反し、胴部上半は球状に膨らむ。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みにぶい橙色 （7.5YR6/4）
12 (回)	甕 (土)	(21.3) ― ―	口縁部はコの字状に外反する。	外面　口縁部ヨコナデ。 内面　口縁部ヨコナデ。	胎土は砂粒を含み明赤褐色 （5YR5/6）
13 (回)	甕 (土)	〈20.3〉 27.5 〈4.0〉	口縁部はコの字状に外反し、胴部は弓なりに湾曲する。底部平底。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部～底部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みにぶい橙色 （5YR6/4） 焼成良好。

った。

カマド　第162図

カマドは、住居址の北壁中央にあるが、ほぼ全体を破壊されていた。周囲に散乱していた安山岩礫がその袖の芯に用いられていたものと考えられる。またその火床はローム混じりの極暗赤褐色土層（5 YR 2/4）で固められていた。

本カマド内の土層は、7層に分層された。1層は焼土・灰を含む褐灰色土層（10YR 6/1)、2層は焼土を多量に含むにぶい赤褐色土層（5 YR 5/3)、3層は焼土・灰・カーボンを含む灰褐色焼土層（5 YR 6/2)、4層はカーボン・焼土・灰を含む黒褐色土層(5 YR 2/1)、5層はカーボン・焼土・灰を含む黒褐色土層（5 YR 2/2)、6層はロームブロック、7層は焼土を含む赤褐色土層

（5YR 4/6）であった。

遺　物　第163・164図

遺物は、須恵器では坏・高台付坏・長頸瓶・甕が、土師器では高台付皿・坏・甕が認められた。図示した遺物が主だったものである。

1～3は、回転糸切りによる須恵器坏である。4は、須恵器高台付坏で、底部には回転ヘラケズリがなされており切り離し方法は不明である。

5は、土師器高台付皿で内面黒色研磨のなされたものである。6は、内面黒色研磨のなされた土師器坏である。

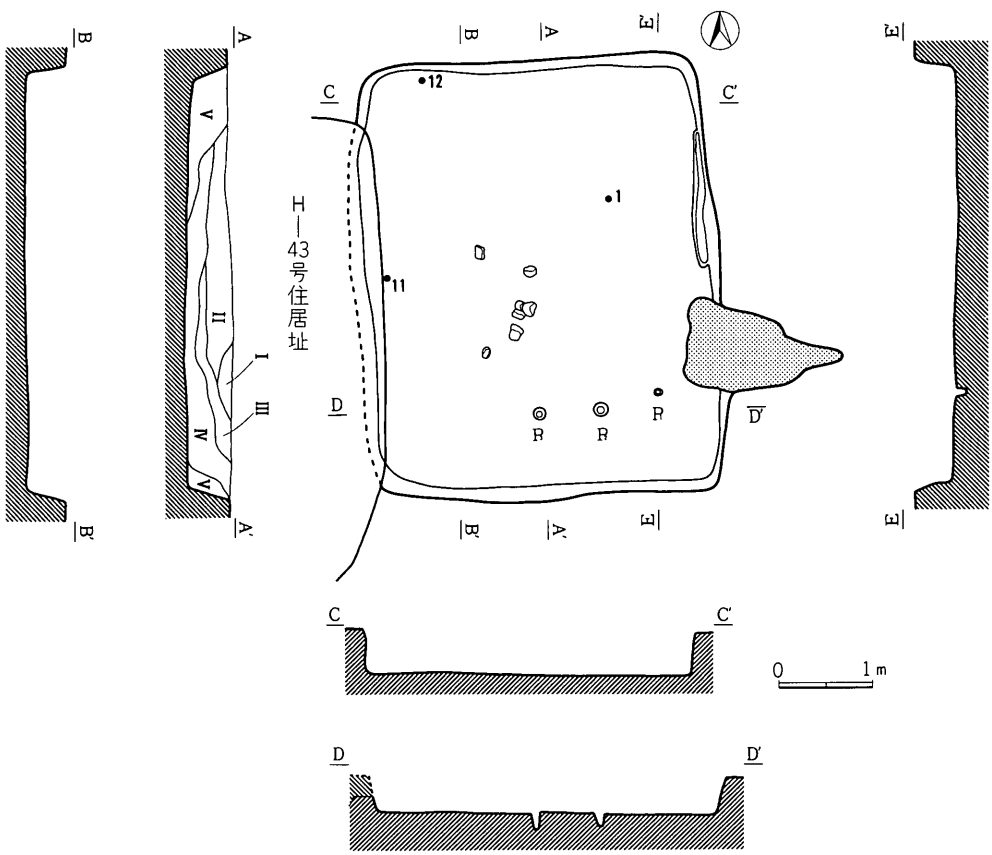
7は、頸部を失うが須恵器長頸瓶と考えられる。

8は、土師器台付甕の脚部と考えられる。

9～13は、土師器甕で、このうち11～13はコの字状口縁を呈するものである。

時　期

本住居址は、九世紀後葉、十二遺跡第Ⅵ期に位置付けられよう。



第165図　H－44号住居址実測図（1：80）

(44)　H－44号住居址

住居址　第165図

H－44号住居址は、第II区フ－31グリッドにおいて検出された。

本住居址の西壁は、H－43号住居址によって切られている。

本住居址は、南北4.6m東西3.9mの隅丸長方形を呈し、床面積15.7m²を測り、南北軸方向はN－7°－Wを指す。壁高は、40～45cmを測る。壁溝は、東壁のカマド脇において、幅10～15cm程度のものが認められた。床面は、張り床ではないが全体に硬質なものとなっている。

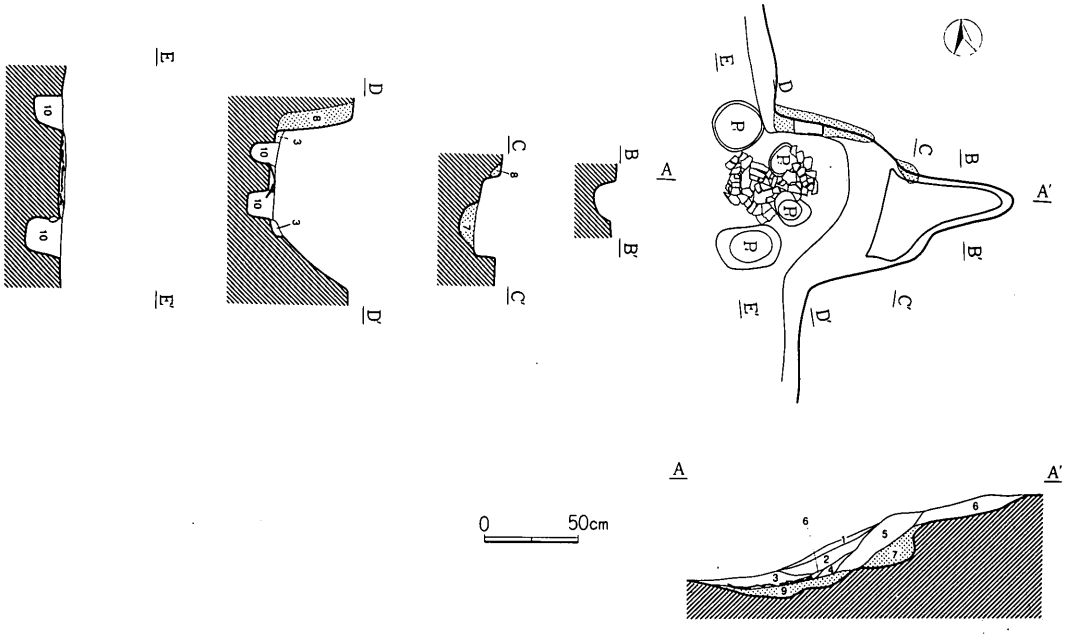
ピットは、非常に小形なP_1 P_2 P_3の三個が認められた。P_1は8×6cm深さ10cm、P_2は14×13cm深さ13cm、P_3は12×12cm深さ20cmを測る。

遺物は、1の須恵器坏が床面より15cm上から、11の土師器甕が床面直上より正常位で出土している。この他は、いずれも覆土中からの出土である。

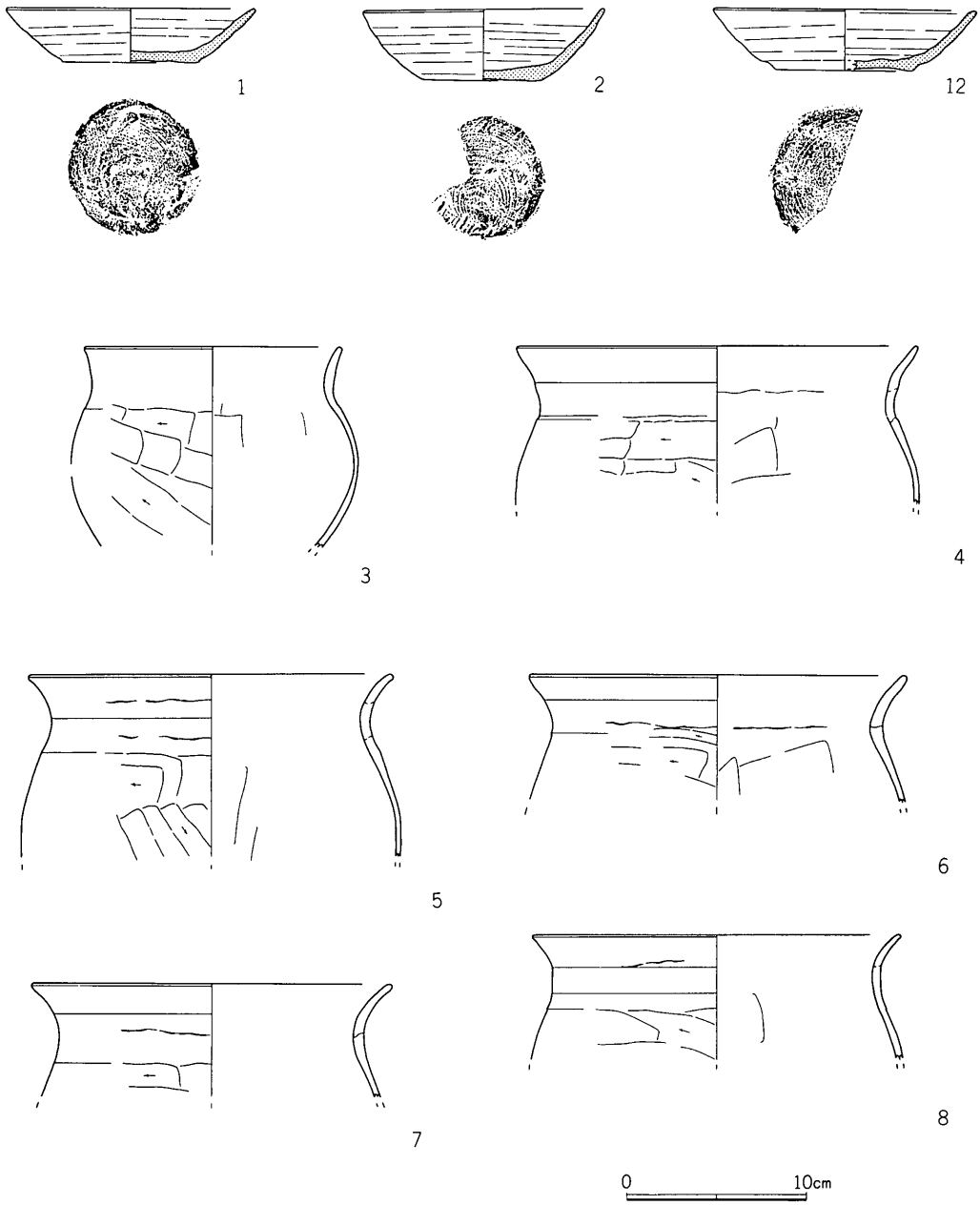
覆土は、5層に分層され、埋土的な様相を呈していた。I層はローム粒子を若干含む黒色土層（10YR 2/1）、II層はローム粒子を大量に含む暗褐色土層（10YR 3/3）、III層はローム粒子をよく含む黒褐色土層（10YR 3/2）、IV層はローム粒子を大量に含む暗褐色土層（10YR 3/3）、V層はローム粒子をよく含む黒褐色土層（10YR 3/2）であった。

カマド　第166図

カマドは、住居址の東壁中央よりやや南よりにあるが、ほぼ全体を破壊された状態にあった。



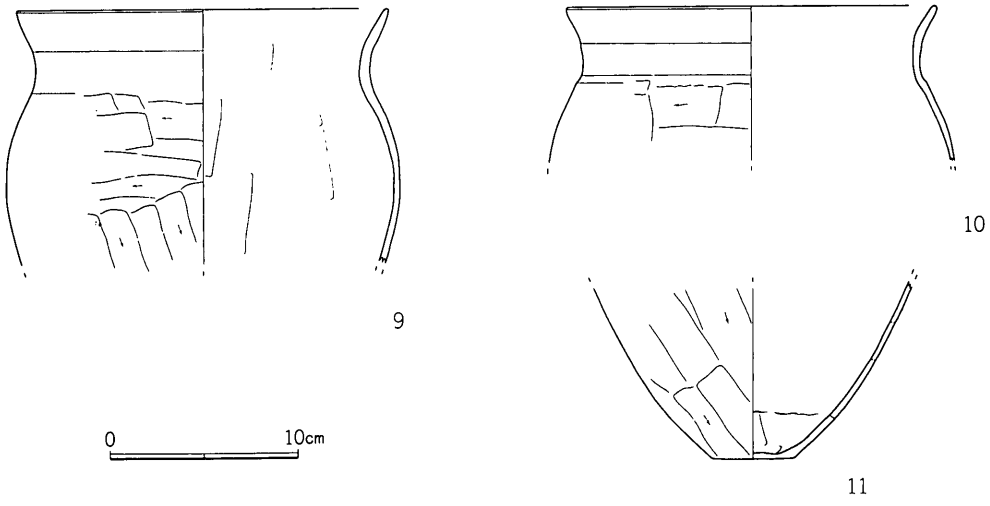
第166図　H－44号住居址カマド実測図（1：40）



第167図　Ｈ－44号住居址出土遺物（１：４）

その構材は、ローム粒子を若干含む褐色土（７層　10YR 4/4)、ローム粒子　黒褐色土　白色粘土を含む灰黄褐色土（８層　10YR 5/2)、ローム粒子　黒褐色土を含むにぶい褐色土（９層　10YR 4/3）であった。

本カマド内の土層は、７層に分層された。１層・３層は焼土・灰を含む灰褐色土層（7.5YR 4/



第168図　H－44号住居址出土遺物（1：4）

第64表　H－44号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1 (回)	坏 (須)	(13.8) 3.0 7.3	体部は外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り、未調整。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み灰色 (10Y6/1)
2 (完)	坏 (須)	13.4 3.9 6.5	体部は外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り、未調整。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は精選されず砂粒を多く含み灰色(N4/0)
3 (完)	甕 (土)	14.4 — —	口縁部は比較的直線的に外反し、胴部は球状を呈する。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みにぶい赤褐色 (5YR5/4)
4 (回)	甕 (土)	(22.2) — —	口縁部はコの字状に外反し、胴上部の膨らむ器形。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みにぶい橙色 (7.5YR7/4)
5 (回)	甕 (土)	〈20.2〉 — —	口縁部はくの字状に外反し、胴上部の膨らむ器形。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みにぶい橙色 (5YR6/4)
6 (回)	甕 (土)	(20.9) — —	口縁部は僅かコの字状に外反する。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みにぶい赤褐色 (5YR5/4)
7 (回)	甕 (土)	(20.0) — —	口縁部は僅かコの字状に外反する。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みにぶい赤褐色 (5YR5/4)
8 (回)	甕 (土)	〈20.4〉 — —	口縁部はコの字状に外反する。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は比較的精選され浅黄橙色 (10YR8/3)
9 (回)	甕 (土)	〈19.6〉 — —	口縁部は僅かコの字状に外反する。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みにぶい橙色 (5YR6/4)
10 (回)	甕 (土)	〈19.6〉 — —	口縁部はコの字状に外反する。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みにぶい赤褐色 (5YR5/4)
11 (回)	甕 (土)	— — 4.3	底部平底。	外面　胴～底部ヘラケズリ。 内面　ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みにぶい橙色 (7.5YR7/3)
12 (回)	杯 (須)	(14.5) 3.4 (7.5)	体部は外反し、底部平底	外面　体部ロクロヨコナデ。底部回転糸切り未調整。 内面　ロクロヨコナデ。 （ロクロ右回転）	完全な環元炎焼成となっておらず、にぶい黄橙色 (10YR7/4)

2)、2層は焼土を多量に含むにぶい赤褐色土層（5 YR 4/4)、4層はカーボン・焼土・灰を含む褐色土層（7.5YR 4/3)、5層は焼土を含む褐色土層（10YR 4/6)、6層はカーボン・焼土・灰を含まない褐色土層（7.5YR 4/3）であった。

なお、カマド部分のP_1・P_2は支脚石の抜取り痕、P_3・P_4は袖石の抜取り痕である。

遺　物　第167・168図

遺物は、須恵器では坏・甕が、土師器では甕が認められた。図示した遺物が主だったものである。

1・2・12は、回転糸切りによる須恵器坏である。

3は、土師器小形胴球甕である。

4～10は、コの字状口縁の土師器甕で、11はその底部と考えられる。

時　期

本住居址は、八世紀第Ⅳ四半期～九世紀初頭、十二遺跡第Ⅳ期に位置付けられよう。

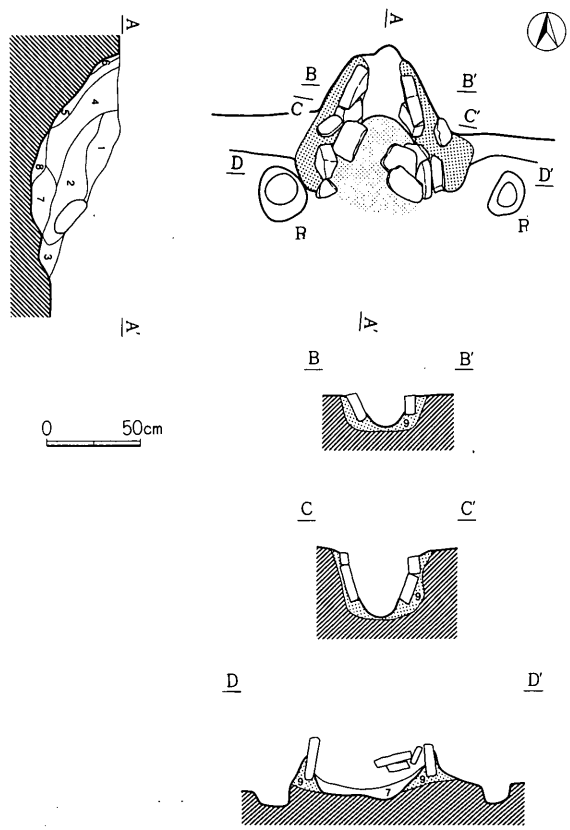
(45)　H－45号住居址

住居址　第170図

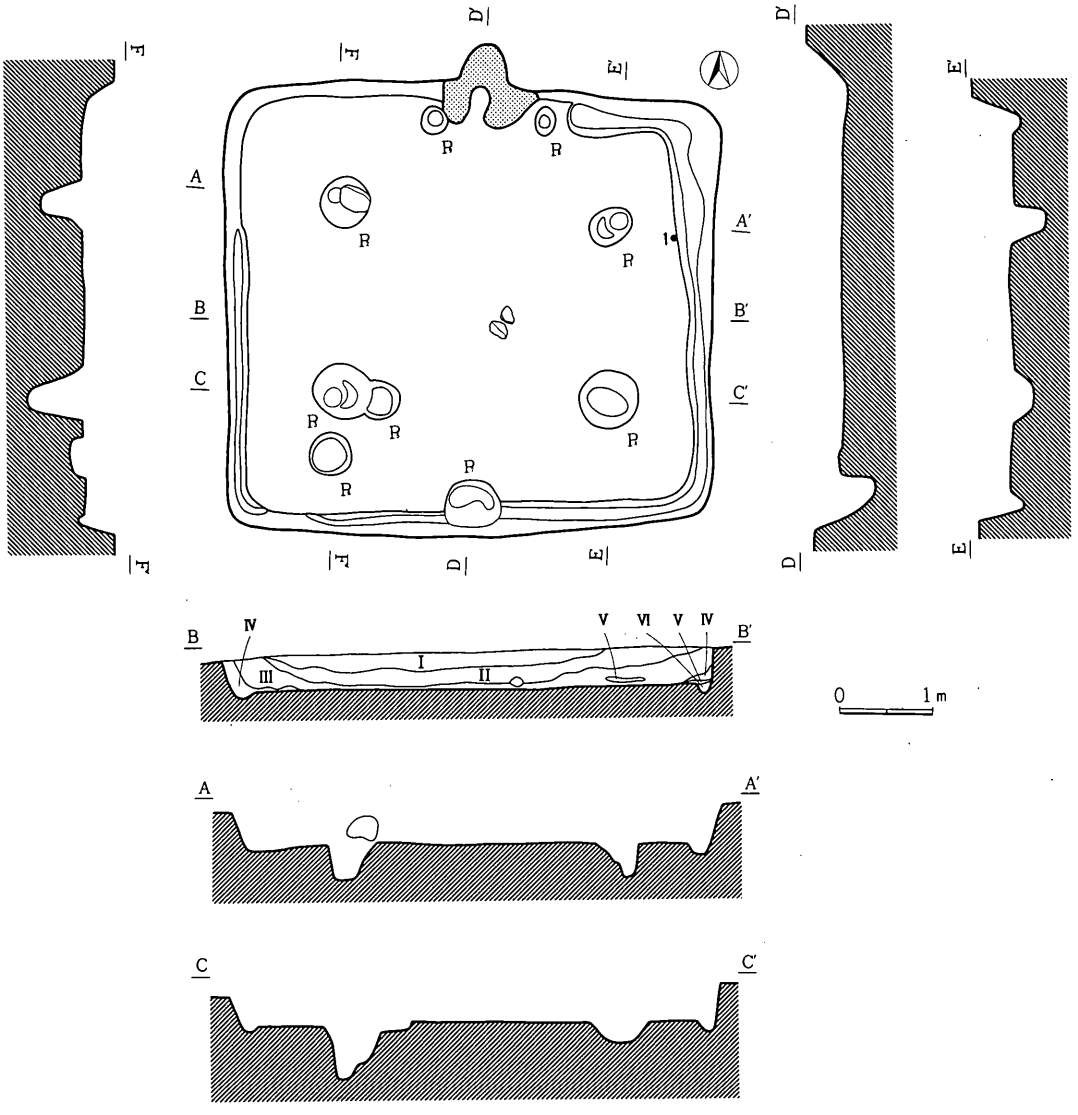
H－45号住居址は、第Ⅱ区フ－31グリッドにおいて検出された。

本住居址は、南北4.8m東西5.2mの隅丸方形を呈し、床面積20.2m²を測り、南北軸方向はN－9°－Wを指す。壁高は、30～40cmを測る。壁溝は、第Ⅱ区を除き、幅35～15cm深さ5～15cm程度を測るものが認められた。床面は、貼り床ではないが、全体に硬質なものである。

ピットは、P_1～P_4の四個のピットが対で認められたほか、P_3に付属してP_5が、P_3の南隣りにP_6が、南壁際中央にP_7が認められた。P_1は55×35cm深さ35cm、P_2は50×50cm深さ40cm、P_3は65×55cm深さ55cm、P_4は65×65



第169図　H－45号住居址カマド実測図（1：40）



第170図　H－45号住居址実測図（1：80）

cm深さ20cm、P_5は40×45cm深さ10cm、P_6は45×45cm深さ15cm、P_7は60×45cm深さ35cmを測る。

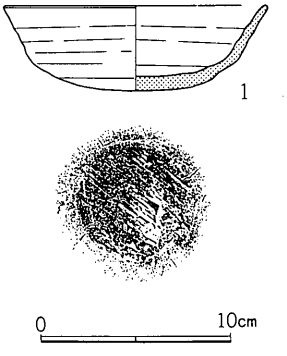
遺物は、1の須恵器坏が、東壁際床面より36cm上で出土している。この他遺物は、いずれも覆土中からの出土である。

覆土は、6層に分層された。I層は黒色土層（10YR 2/1）でスコリア・細粒パミスをよく含み、II層は暗褐色土層（10YR 3/3）でスコリア・細粒パミス・ローム粒子をよく含み、III層は黒色土層（10YR 2/1）でスコリア・細粒パミスをよく含みローム粒子を若干含み、IV層は黒色土層（10YR 1.7/1）でスコリア・細粒パミスをあまり含まない、V層は黄褐色ロームブロック（10YR

第65表　Ｈ－45号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1（完）	坏（須）	13.9 4.5 6.0	体部は直線的に外反し、底部は丸味を帯びた平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。 底部は回転ヘラキリの後、ナデ。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含みにぶい赤褐色（5YR5/3）

5/8)、Ⅵ層は暗褐色土層（10YR 3/4）でローム粒子をよく含む層であった。



第171図　Ｈ－45号住居址出土遺物（1：4）

カマド　第169図

カマドは、住居址の北壁中央にあり、左右両袖の一部をとどめていた。その袖の芯には、面取り軽石がみられ、灰赤褐色土で固められていた。

本カマドの土層は、8層に分層された。1層はローム粒子をよく含むカマド天井部の構材と考えられる橙色土層（5 YR 7/6)、2層は褐灰色土層（5 YR 4/1)、3層は灰褐色土層（5 YR 4/2)、4層はにぶい赤褐色土層（5 YR 4/4)、5層はにぶい橙色土層（5 YR 7/4）でいずれも焼土・灰を含むものであった。6層は黄橙色土層（5 YR 7/8)、7層は明赤褐色焼土層（5 YR 5/8）8層は焼土・灰・カーボンを含む灰褐色土層（5 YR 4/2）であった。

遺　物　第171図

遺物の出土量は、総じて少ないが、須恵器では坏・甕、土師器では甕が検出されているが、図示し得たのは1のみであった。

1は回転ヘラキリによる須恵器坏である。

時　期

本住居址は、八世紀第Ⅰ四半期、十二遺跡第Ⅰ期に位置付けられよう。

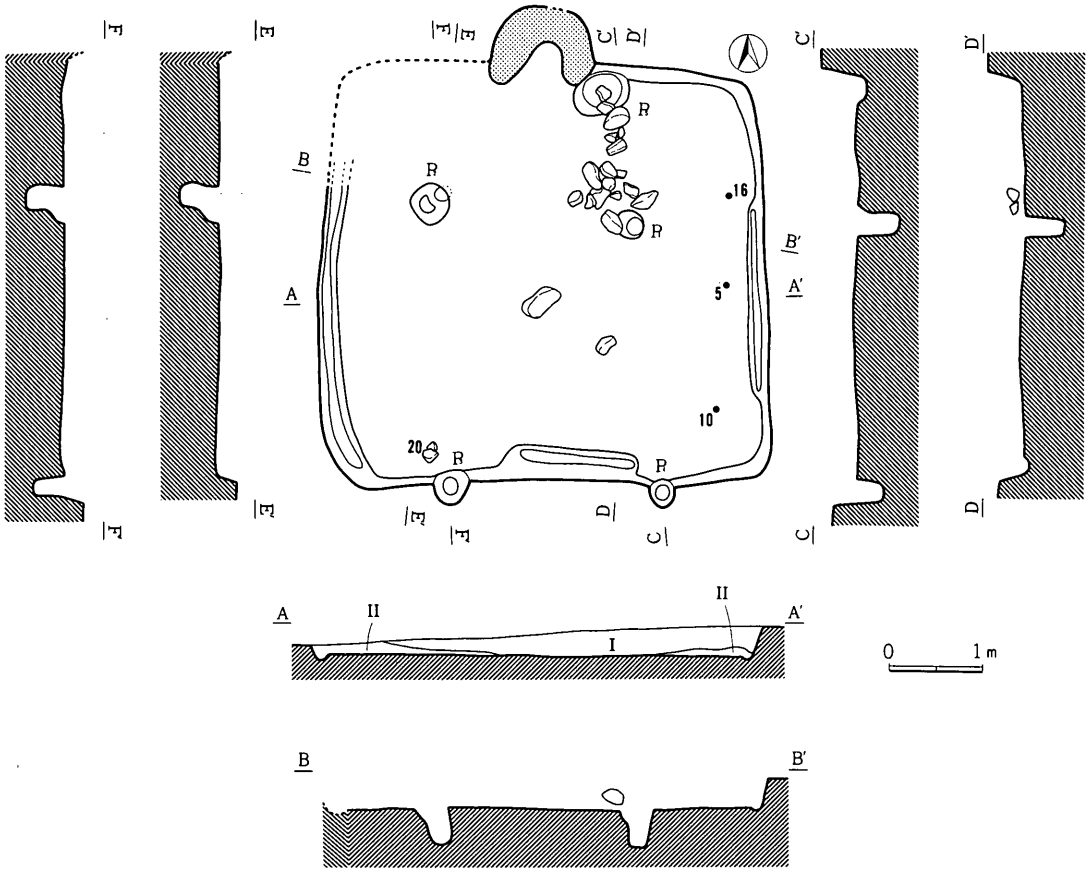
(46)　Ｈ－46号住居址

住居址　第172図

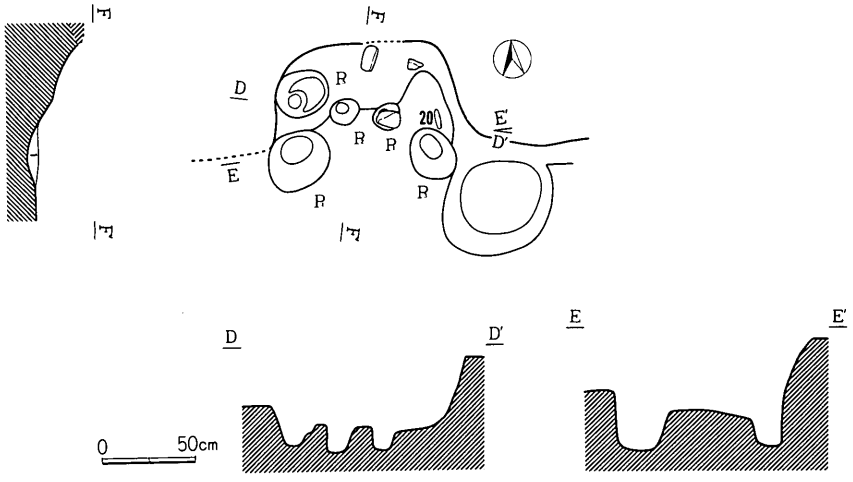
Ｈ－46号住居址は、第Ⅱ区ヘ－32グリッドにおいて検出された。

本住居址は、Ｆ－64号掘立柱建物址と重複するが、両者の新旧関係はとらえられなかった。また、本住居址の西北コーナーは溝によって破壊されている。

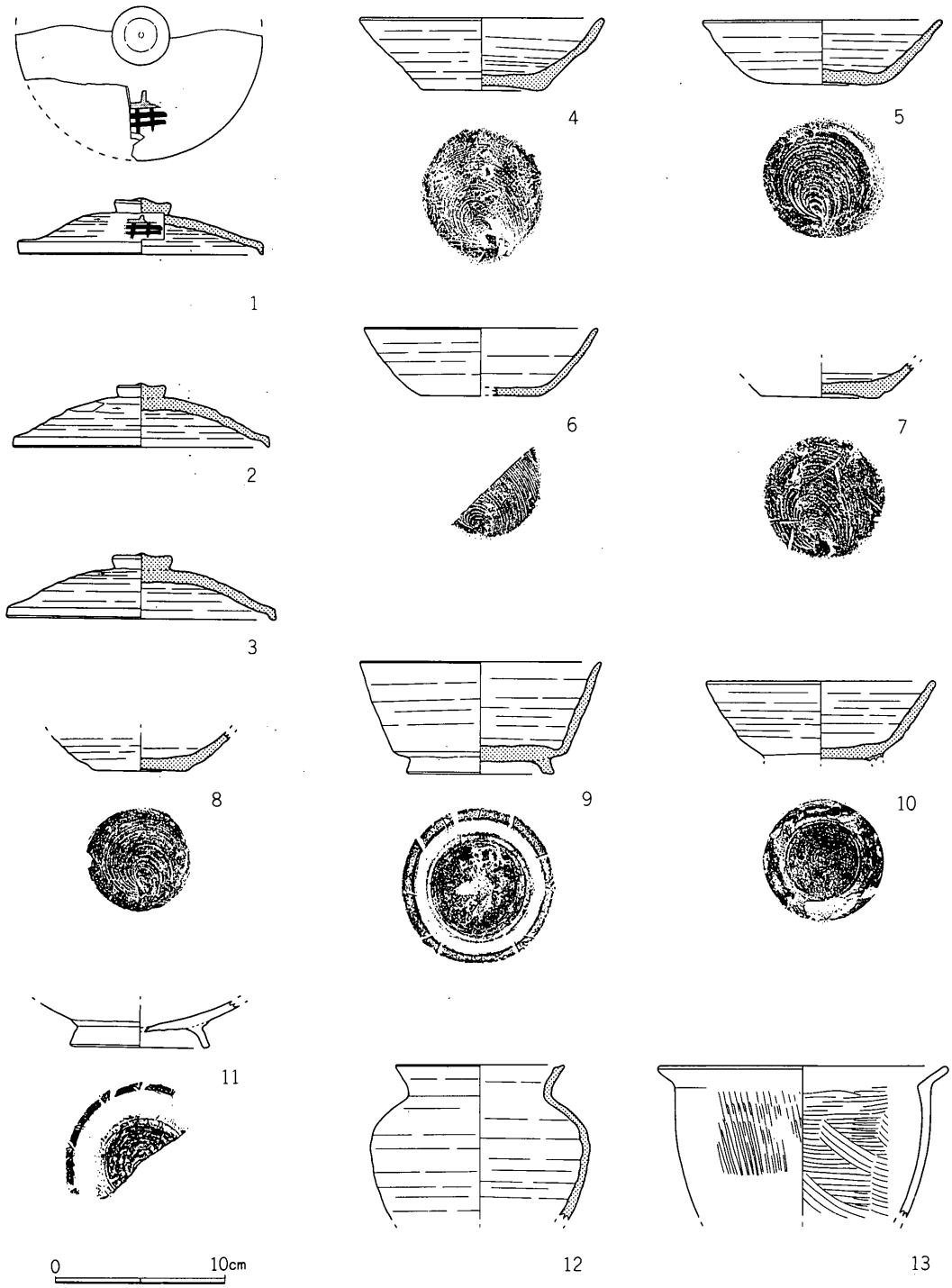
本住居址は、南北4.4m東西4.8mの隅丸方形を呈し、床面積17.8m²を測り、南北軸方向はＮ－



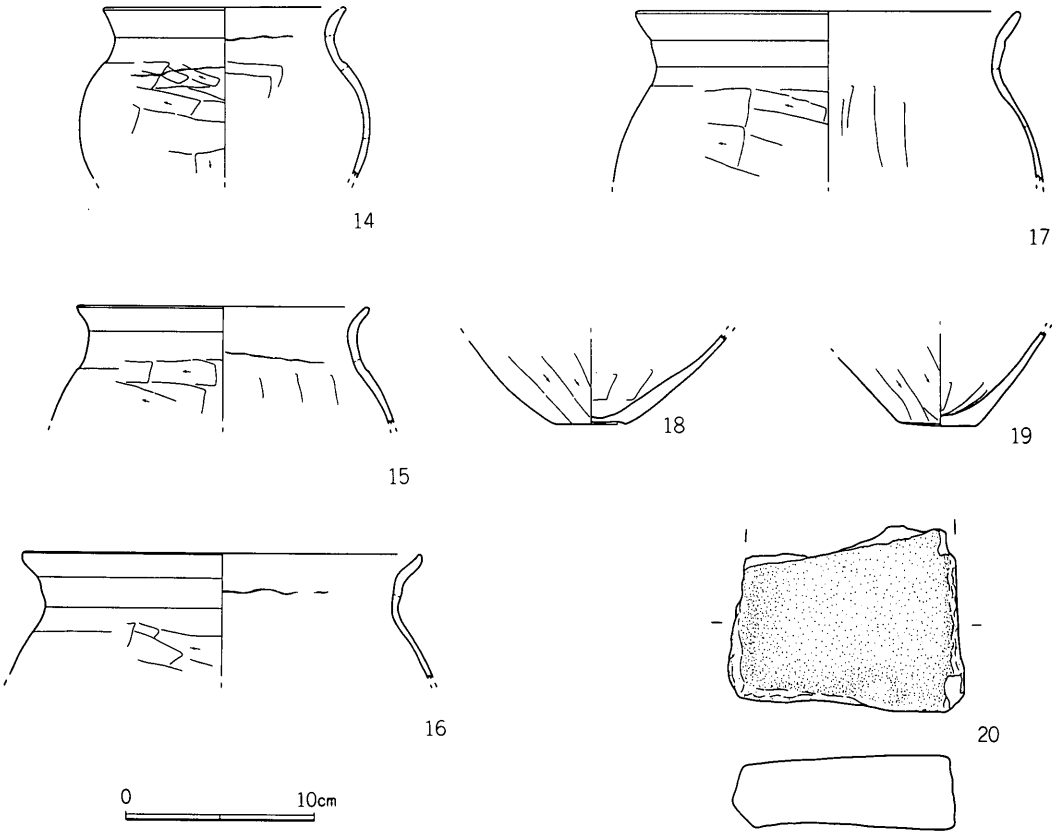
第172図　H－46号住居址実測図（1：80）



第173図　H－46号住居址カマド実測図（1：40）



第174図　Ｈ－46号住居址出土遺物（１：４）



第175図　H－46号住居址出土遺物（1：4）

7°－Wを指す。壁高は、20～40cmを測る。壁溝は，幅15～25cm深さ5cmを測るものが、東壁・南壁・西壁に認められた。床面は全体に硬質な貼り床である。

第66表　H－46号住居址出土遺物一覧表〈石器〉

挿図番号	器　種	材　質	長さ	幅	厚さ	重量	備　考
20	不　明	輝　石 安山岩	(9.7)	12.5	3.9	(900)	

ピットは、P_1～P_4の四個のピットが対で認められたが、そのあり方は一般とは異なりP_3・P_4が南壁中にあるものであった。P_1は30×30cm深さ45cm、P_2は45×40cm深さ40cm、P_3は35×35cm深さ35cm、P_4は30×25cm深さ30cm、P_5は65×45cm深さ10cmを測る。

覆土は、2層に分層された。I層は黒色土層（10YR 2/1）で小粒スコリア・細粒パミスをよく含み、II層は黒色土層（10YR 1.7/1）で小粒スコリア・細粒パミスを若干含む層であった。

カマド　第173図

カマドは、住居址の北壁中央にあり、ほぼ全体を破壊されていた。その構材に用いられいたと考えられる面取り軽石と安山岩礫が住居第I区に散乱していた。

本カマドのP_1・P_2は支脚石の抜取り痕、P_3～P_5は袖石の抜取り痕と考えられる。

第67表　Ｈ－46号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1（完）	蓋（須）	3.3 3.3 （14.4）	つまみ部は偏平な擬宝珠形を呈する。	外面　ロクロヨコナデの後、天井部回転ヘラケズリ。 内面　ロクロヨコナデ。 （ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み灰白色（10Y7/1）外面に「弃」？の墨書
2（回）	蓋（須）	2.9 3.7 〈15.1〉	つまみ部は偏平な擬宝珠形を呈する。	外面　ロクロヨコナデの後、天井部手持ちヘラケズリ。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	完全な環元炎焼成となっておらずにぶい赤褐色（5YR5/3）
3（回）	蓋（須）	3.5 3.8 〈15.9〉	つまみ部は偏平な擬宝珠形を呈する。	外面　ロクロヨコナデ。 内面　ロクロヨコナデ。 （ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み灰色を呈する（10Y5/1）
4（完）	坏（須）	14.4 4.2 7.1	体部は外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り、未調整。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は精選されず砂粒を多く含み灰白色（10Y7/1）
5（完）	坏（須）	14.1 3.7 7.0	体部は外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り、未調整。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み灰白色（10Y7/1）
6（回）	坏（須）	〈13.8〉 4.0 （6.9）	体部は外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り、未調整。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	完全な環元炎焼成となっておらず浅黄橙色（10YR8/4）
7（完）	坏（須）	— — 7.0	体部は外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り、未調整。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は精選されず砂粒を多く含み灰色（10Y6/1）
8（回）	坏（須）	— — 5.8	体部は外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り、未調整。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は精選されない。完全な環元炎焼成となっておらず灰褐色（5YR5/2）
9（回）	坏（須）	〈14.2〉 6.6 8.6	体部は直線的に外反し、底部には高台が貼り付けられる。	外面　体部ロクロヨコナデ。 底部回転ヘラケズリ、切り離し方法不明。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	完全な環元炎焼成となっておらずにぶい赤褐色（5YR5/3）
10（完）	坏（須）	13.5 — —	体部は外反し、底部には高台が貼り付けられる。	外面　体部ロクロヨコナデ。 底部回転ヘラケズリ、切り離し方法不明。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み灰白色（10Y7/1）
11（回）	皿（土？）	— — （8.2）	底部には高台が貼り付けられる。	外面　ロクロヨコナデの後、黒色処理。 内面　ロクロヨコナデの後、体部黒色処理。 （ロクロ右回転）	胎土は比較的精選され、灰白色（10Y8/1）
12（回）	壷（須）	（9.9） — —	口縁部は外反し、胴部球状に呈する小形な器形。 口唇部は平担に縁取られる。	外面　ロクロヨコナデ。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み灰色（10Y6/1）焼成良好
13（回）	甕（土）	（17.0） — —	口縁部は短く外反し、胴部はゆるくすぼまる。	外面　口縁部ヨコナデ。 胴部縦方向の刷毛目状調整。 内面　口縁部ヨコナデ。 胴部横方向の刷毛目状調整。	胎土は精選されず砂粒を多く含み灰褐色（7.5YR4/2）
14（回）	甕（土）	（12.9） — —	口縁部はコの字状に外反し、胴部球状を呈する小形な器形。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みにぶい橙色（7.5YR6/4）
15（回）	甕（土）	（15.5） — —	口縁部はコの字状に外反し、胴部球状を呈する。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みにぶい褐色（7.5Y5/3）
16（回）	甕（土）	〈21.2〉 — —	口縁部はコの字状に外反する。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みにぶい橙色（7.5YR7/3）
17（回）	甕（土）	〈20.4〉 — —	口縁部はコの字状に外反する。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みにぶい赤褐色（5YR5/4）
18（完）	甕（土）	— — 3.7	底部平底。	外面　胴部～底部ヘラケズリ。 内面　ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みにぶい赤褐色（5YR5/3）
19（完）	甕（土）	— — 4.1	底部平底。	外面　胴部～底部ヘラケズリ。 内面　ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みにぶい赤褐色（5YR5/3）

本カマド内の１層は、暗赤色焼土層（5 YR 3/6）であった。

遺　物　第174・175図

遺物は、須恵器では蓋・坏・高台付坏・甕、土師器では坏・甕が検出されている。

１～３は須恵器蓋で、１は表面に「ㅗ井」の墨書のみえるものである。図の網点部分のㅗは、はっきりとは判読できなかった。

４～８は、須恵器坏である。いずれも回転糸切りのまま未調整の底部をみせている。

９・10は、須恵器高台付坏で、いずれも回転ヘラケズリの底部をみせている。

11は、土師器？高台付皿で、内外面が黒色処理されたものである。

12は、須恵器小形壺である。

13は、土師器小形甕で、内外面に刷毛目状調整の認められるものである。このような甕は佐久平においては一般にみられず、おそらく松本平の系譜を引くものかと考えられる。

14～17は、コの字状口縁の土師器甕である。このうち14・15は球胴を呈するものである。

20は、用途不明の扁平な礫である。

時　期

本住居址は、九世紀前葉、十二遺跡第Ⅴ期に位置付けられよう。

(47)　Ｈ－47号住居址

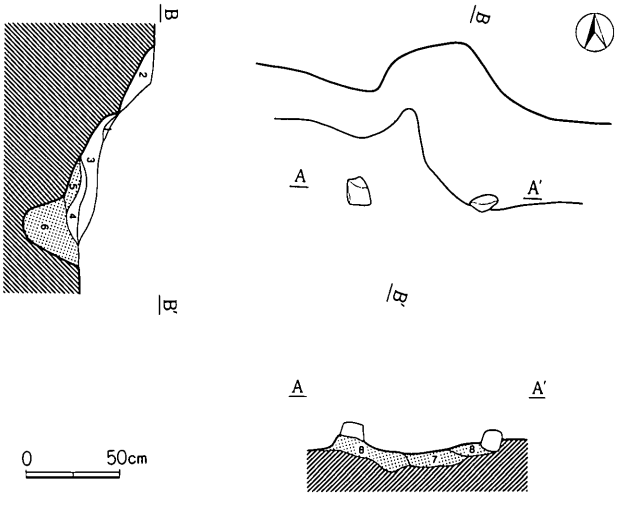
住居址　第177図

Ｈ－47号住居址は、第Ⅱ区ヘ－31グリッドにおいて検出された。

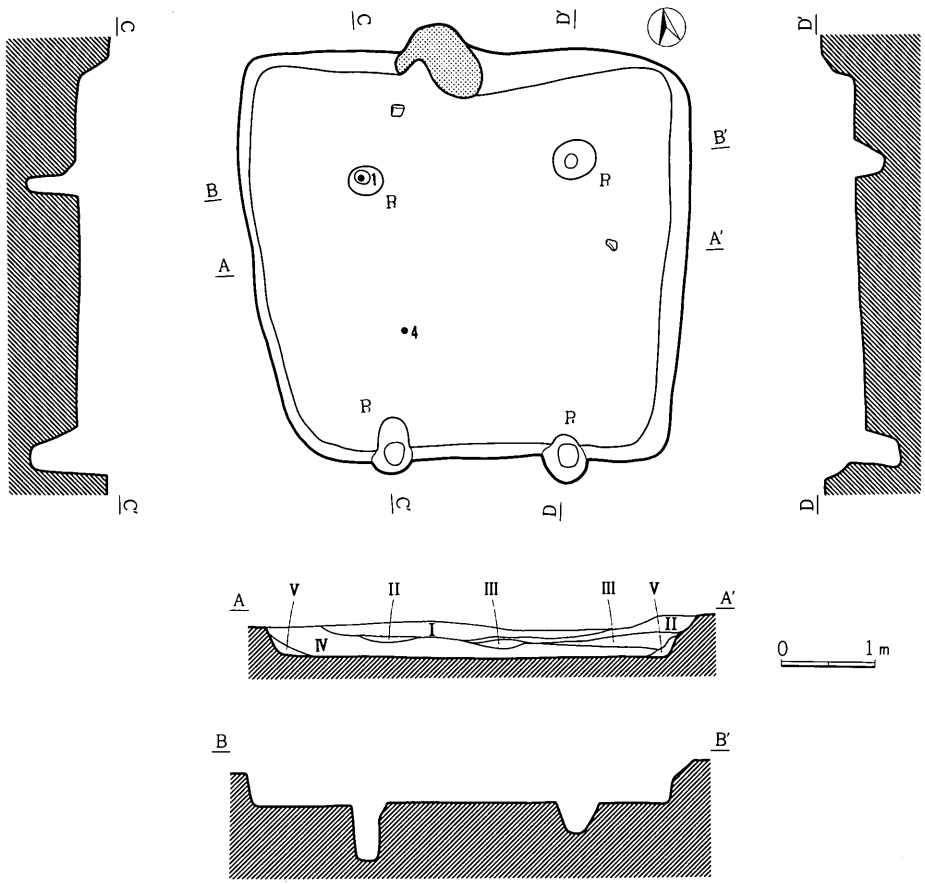
本住居址は、Ｆ－60号掘立柱建物址を切って存在している。

本住居址は、南北4.3m東西4.8mのややいびつな隅丸方形を呈し、床面積16.3m²を測り、南北軸方向はＮ－0°－Ｓを指す。壁高は、30～45cmを測る。壁溝は認められない。床面は、貼り床ではないが、全体に硬質なものである。

ピットは、P_1～P_4の四個のピットが対で認められたが、そのあり



第176図　Ｈ－47号住居址カマド実測図（１：40）



第177図　Ｈ－47号住居址実測図（１：80）

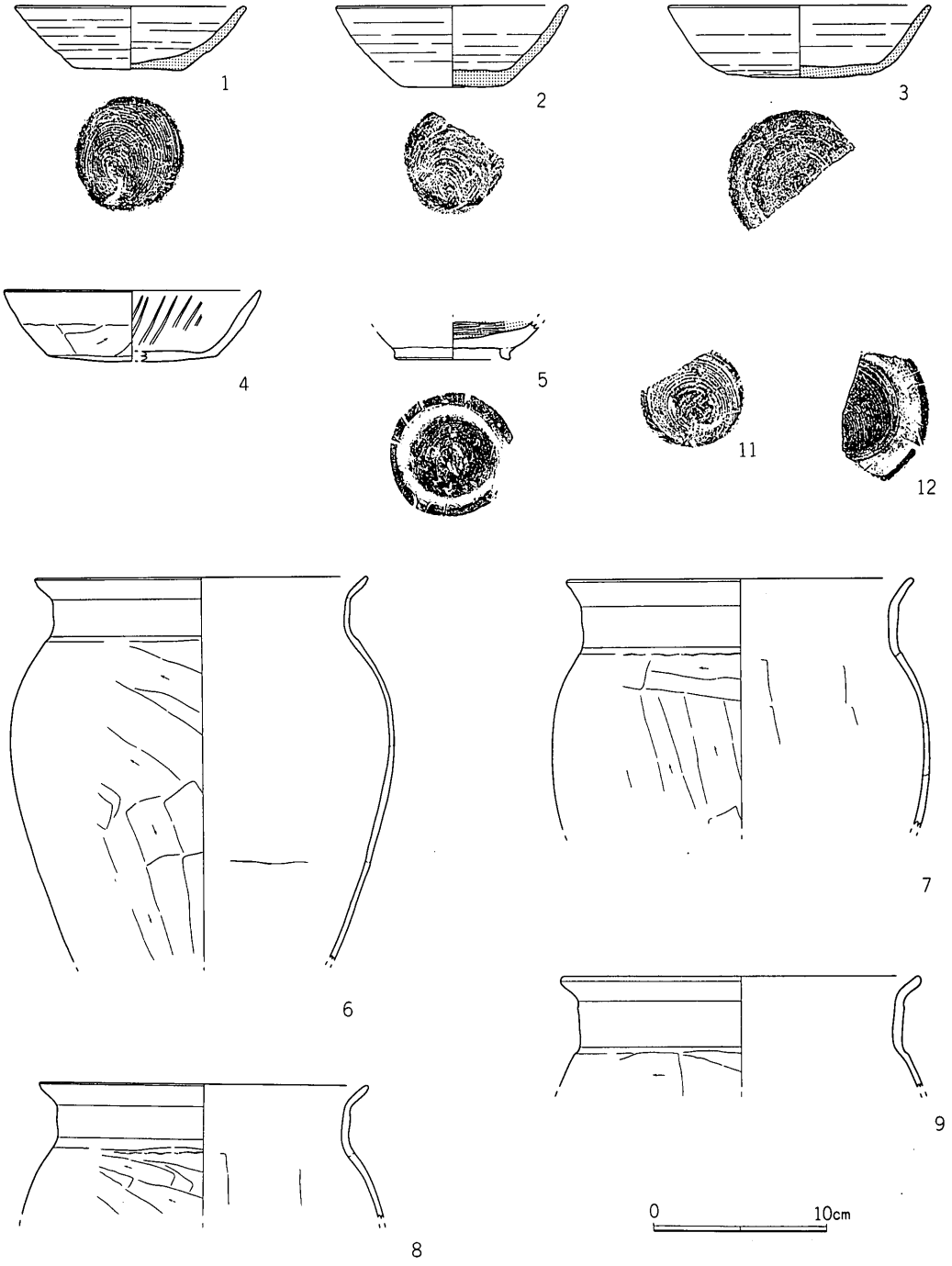
方はＨ－46号住居址と同様でP_3 P_4が南壁中にあるものであった。P_1は45×40cm深さ35cm、P_2は35×30cm深さ55cm、P_3は55×30cm深さ50cm、P_4は40×30cm深さ40cmを測る。

遺物は、１の須恵器坏がP_2中より、４の土師器坏が床面よりやや上で出土している。遺物は、いずれも覆土中からの出土である。

覆土は、５層に分層された。Ⅰ層は黒褐色土層（10YR 2/2）で小粒スコリアを多く含み、II層は暗褐色土層（10YR 3/3）で小粒スコリア・ローム粒子を多く含み、III層は黒褐色土層（10YR 2/2）で小粒スコリアを多く含み、IV層は黒褐色土層（10YR 2/3）で小粒スコリアを多く含み、Ⅴ層は褐色土層（10YR 4/4）で小粒スコリア・ローム粒子を多く含む。

カマド　第176図

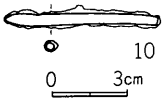
カマドは、住居址の北壁中央にあり、左右両袖の芯の一部をとどめているのみで、他の部分は破壊されていた。その袖の芯には、面取り軽石が埋め込まれていた。また、その構材には粘土を含む極暗赤褐色土（５層　5 YR 2/3）・黒色土（６層　5 YR 1.7/1）・黒褐色土（７層　5 YR



第178図　H－47号住居址出土遺物（1：4）

第68表　Ｈ－47号住居址出土遺物一覧表〈金属器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1（完）	坏（須）	13.3 3.7 6.4	体部は外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り、未調整。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み灰白色（Ｎ７／０）復原により完形
2（回）	坏（須）	〈13.4〉 4.7 (5.9)	体部は外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り、未調整。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み灰白色（7.5YR8／2）
3（回）	坏（須）	〈15.1〉 4.1 (8.3)	体部は外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。 底部回転ヘラケズリ、切り離し方法不明。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み灰白色（7.5Y7／1）
4（回）	坏（土）	〈14.8〉 4.8 (9.7)	体部は外反し、底部平底。	外面　口縁部ヨコナデ。体部～底部ヘラケズリ。 内面　体部に放射状、見込み部にラセン暗文ぶ施こされる。	胎土は精選されず赤褐色の粒子を特徴的に含みにぶい黄褐色(10YR7/3)
5（完）	坏（土）	― ― 6.7	底部には高台が貼り付けられる。	外面　体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切りの後、高台部貼り付け。 内面　黒色研磨。	胎土は砂粒を含み橙色（7.5YR7／6）
6（回）	甕（土）	〈19.2〉 ― ―	口縁部はコの字状に外反し、胴部は弓なりに湾曲する。最大径は胴上部にある。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みにぶい橙色（7.5YR 7/4）
7（回）	甕（土）	(20.0) ― ―	口縁部はコの字状に外反する。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みにぶい赤褐色（5YR5／4）
8（回）	甕（土）	〈19.0〉 ― ―	口縁部はコの字状に外反する。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含み橙色（5YR6／6）
9（回）	甕（土）	〈20.8〉 ― ―	口縁部はコの字状に外反する。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含み橙色（5YR6／6）



第179図　Ｈ－47号住居址出土遺物（１：３）

第69表　Ｈ－47号住居址出土遺物一覧表〈鉄器〉

挿図番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
10	鉄鏃？	鉄	(6.1)	0.5	0.6	(4.9)	基部

3/1)・暗赤褐色土（８層　5 YR 3/6）が用いられいた。

本カマドの土層は、４層に分層された。１層は焼土をわずかに含む暗赤褐色土層（5 YR 3/3)、２層は焼土をわずかに含む極暗赤褐色土層（5 YR 2/3)、３層は灰を多量に含む灰褐色土層（5 YR 4/1)、４層は赤褐色焼土層（5 YR 4/8）であった。

遺　物　第178・179図

遺物の出土量は、総じて少ないが、須恵器では坏・高台付坏・甕、土師器では坏・台付甕・甕が検出されている。

１・２は、須恵器坏である。いずれも回転糸切りのまま未調整の底部をみせている。

３は、須恵器坏で、回転ヘラケズリの底部をみせており切り離し方法は不明である。

４は、土師器坏で、体部に放射状、見込部にラセン状の暗文をもつ畿内系暗文土器である。

５は、土師器高台付坏で、内面が黒色処理されたものである。

6～9は、コの字状口縁の土師器甕で、最大径を胴部にもつものである。

10は、鉄鏃の基部かと考えられる。

時　期

本住居址は、九世紀前葉、十二遺跡第Ⅴ期に位置付けられよう。

(48)　H－48号住居址

住居址

H－48号住居址は、第II区へ－31グリッドに位置するが、H－49号住居址に大部分を切られており、そのカマドの半分がかろうじて存在していた。

あるいは、そのカマドは、H－49号住居址の古いカマドである可能性も残ろうが、本遺跡群においてはこれまでカマドの作り替え移動等の事例が認められないことなどを考慮し、これを別ものとしてとらえた。

カマド　第180図

本カマドは、住居址の東壁に位置するものと考えられる。その土層は、4層に分層された。

1層は焼土・灰を含まない黒褐色土層（10YR 3/1)、2層はその構材と考えられる灰褐色粘土層（7.5YR 4/1)、3層は焼土を若干含む灰褐色土層（5 YR 4/2)、4層は暗赤褐色焼土層（5 YR 3/6）であった。

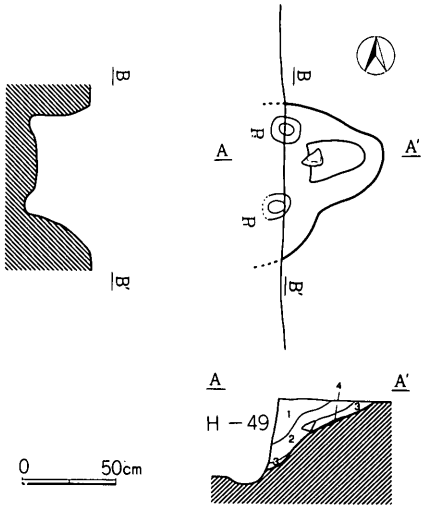
なお、本カマドのピット二個は、袖石の抜き取り痕と考えられる。

遺　物

遺物は、本カマド内から、コの字もしくはくの字状口縁をとると考えられる土師器甕の破片三片が検出されたのみである。

時　期

本住居址は、遺物からの時期決定が非常に困難である。H－49号住居址に切られておりかつカマドが東側にあることを考慮すると八世紀第IV四半紀～九世紀初頭、十二遺跡第IV期に位置付けられよう。



第180図　H－48号住居址カマド実測図（1：80）

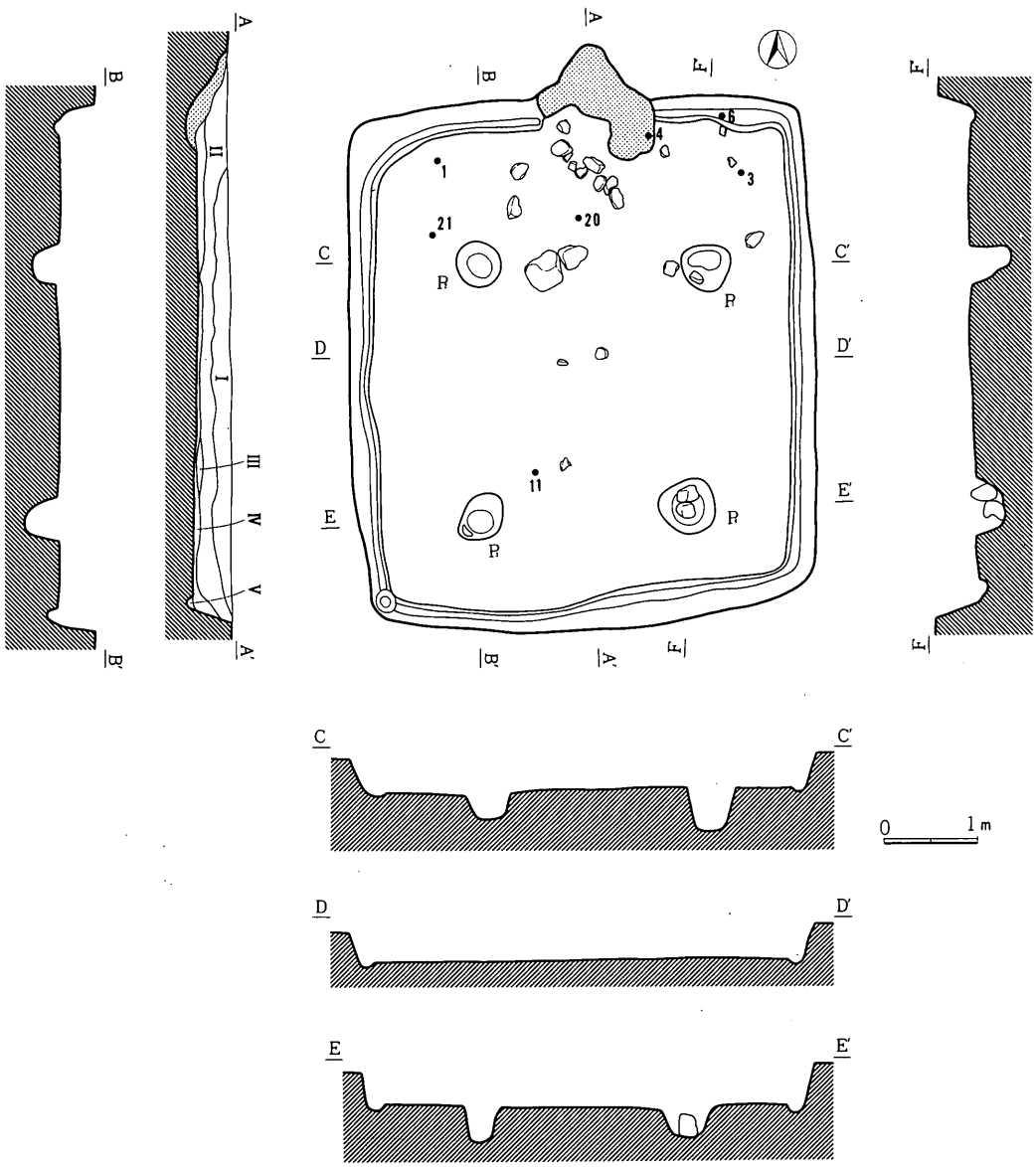
(49)　Ｈ－49号住居址

住居址　第181図

Ｈ－49号住居址は、第Ⅱ区へ－31グリッドにおいて検出された。

本住居址は、Ｈ－48号住居址の大部分を切って存在している。

本住居址は、南北5.6m東西5.0mの隅丸方形を呈し、床面積21.6m²を測り、南北軸方向はＮ－9°－Ｗを指す。壁高は、40～50cmを測る。壁溝は、幅15～20cm深さ10cm程のものが住居を全周す



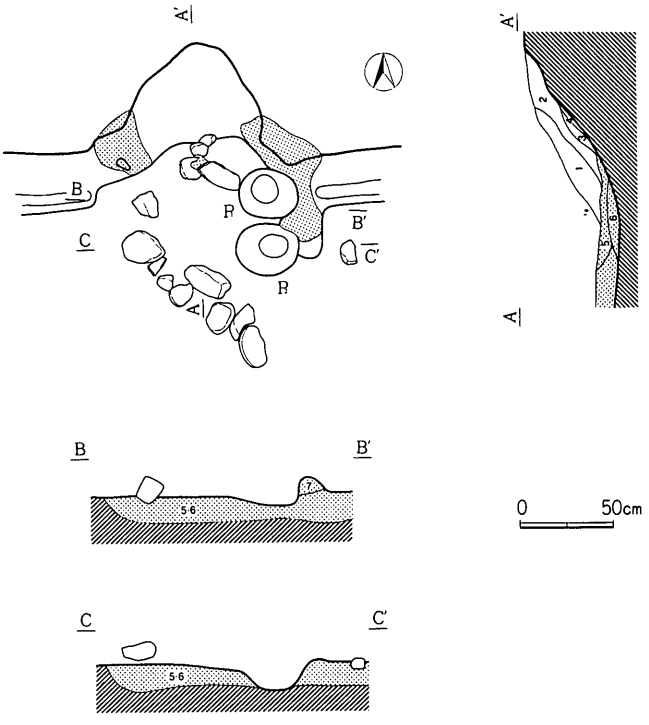
第181図　Ｈ－49号住居址実測図（１：80）

る。床面は全体に硬質な貼り床となっている。

ピットは、P_1～P_4の四個のピットが対で認められた。P_1は50×50cm深さは45cm、P_2は50×45cm深さは30cm、P_3は55×40cm深さは35cm、P_4は60×60cm深さは30cmを測りその中には安山岩礫二点が認められた。

遺物は、1・4・6・11・21は床面直上の出土遺物、3・20は、床面よりやや浮いた状態で検出されている。この他はいずれも覆土中からの出土である。

覆土は、5層に分層された。



第182図　H－49号住居址カマド実測図（1：40）

Ⅰ層は細粒パミス・小粒スコリアをよく含む黒色土層（10YR 2/1)、Ⅱ層は細粒パミス・小粒スコリアをよく含む黒褐色土層（10YR 2/3)、Ⅲ層はロームのブロック状堆積である褐色土層（10YR 4/6)、Ⅳ層は細粒パミスを含む黒色土層（10YR 2/1)、Ⅴ層はロームのブロック状堆積である褐色土層（10YR 4/6）であった。

カマド　第182図

カマドは、住居址の北壁中央にあるが、完全に破壊された状態にあり、住居址内にはその構材である面取り軽石・安山岩礫が散乱していた。また、その構材には、にぶい赤褐色粘土層（5層 5 YR 5/3)、暗赤褐色土層（6層　5 YR 5/3)、赤褐色粘土層（7層　5 YR 5/3）が用いられていたようである。

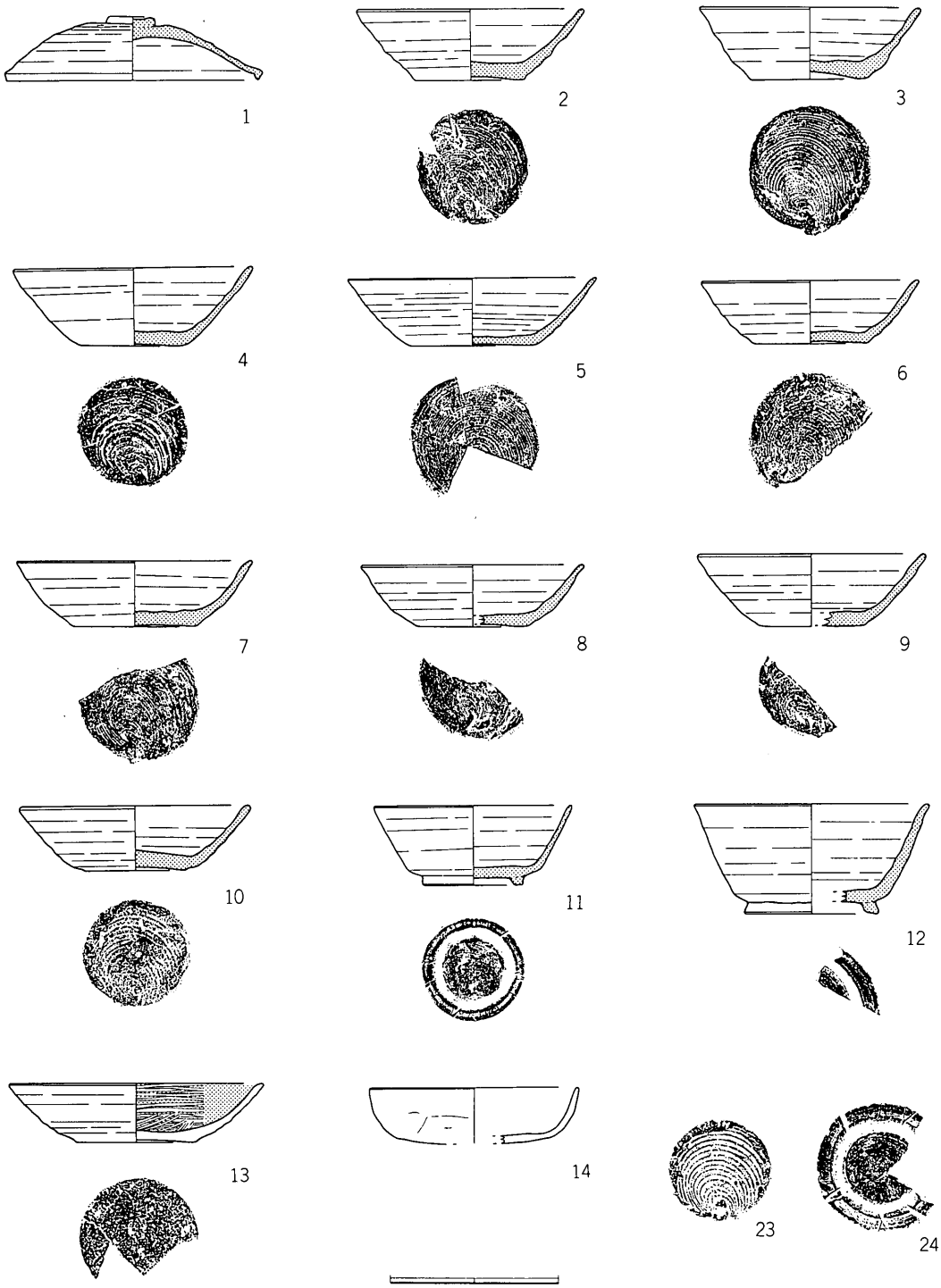
本カマド内の土層は、4層に分層された。1層は灰を多く含む黒褐色土層（5 YR 3/1)、2層は若干のカーボンを含む黒色土層（5 YR 1.7/1)、3層は焼土を大量に含む暗赤褐色土層（5 YR 3/1)、4層は焼土を僅かに含む黒色土層（5 YR 1.7/1）であった。

遺　物　第183・184・185図

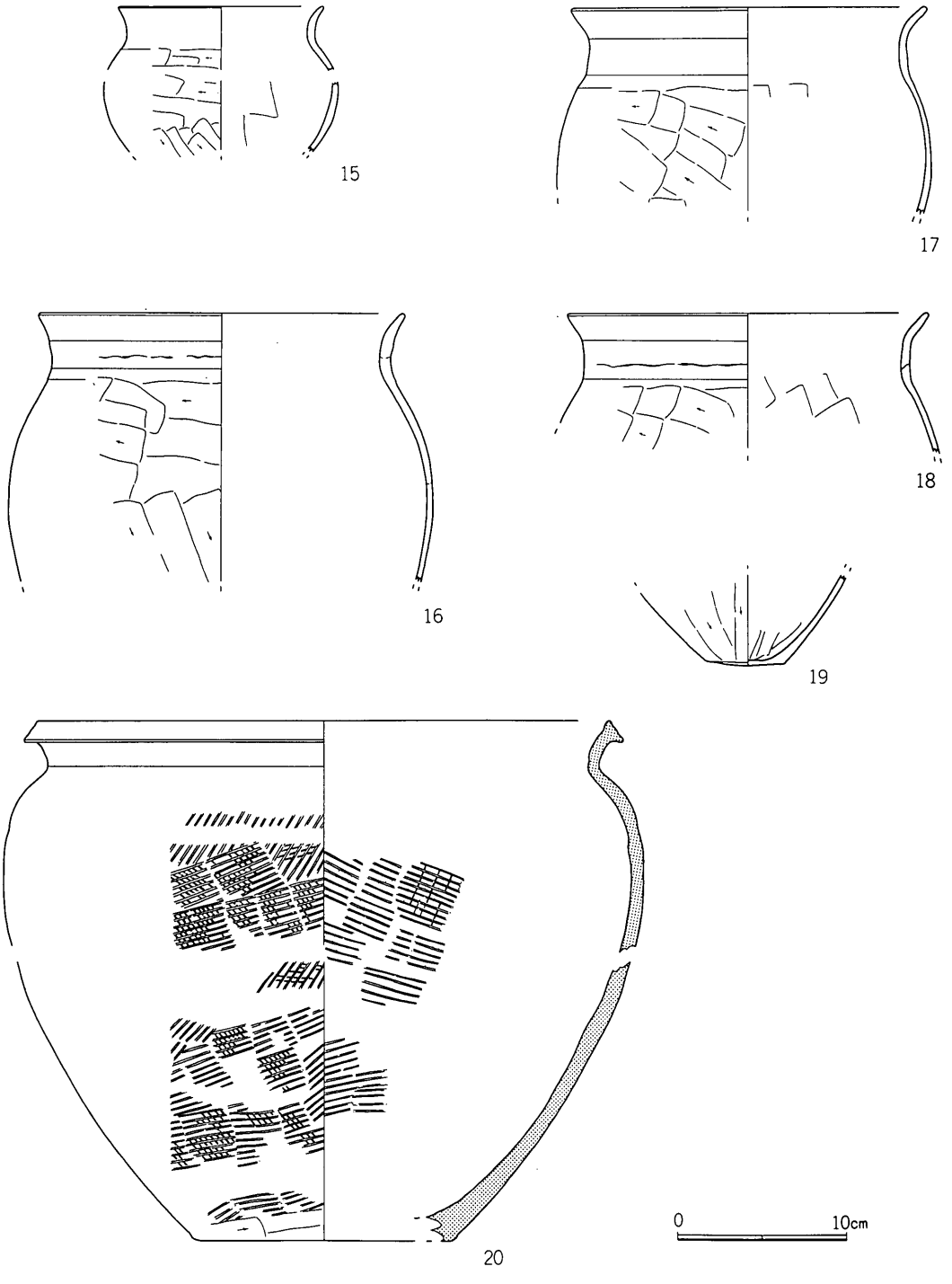
遺物は、須恵器では蓋・坏・高台付坏・甕、土師器では坏・高台付坏・甕が出土している。

1は、須恵器蓋である。

2～10は、回転糸切り未調整の底部をみせる須恵器坏である。



第183図　H－49号住居址出土遺物（1：4）



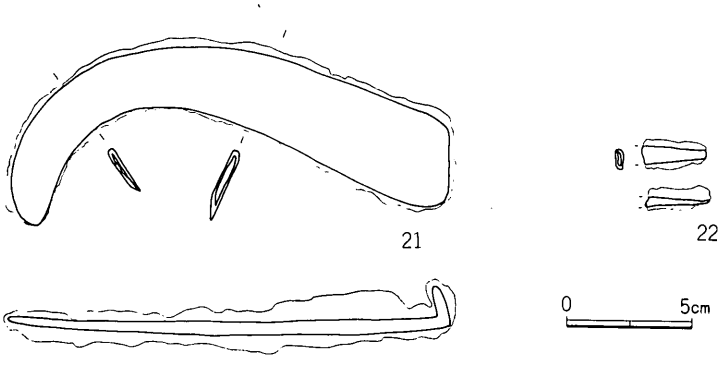
第184図　H－49号住居址出土遺物（1：4）

第70表　H－49号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1 (完)	蓋 (須)	2.8 3.7 14.9	つまみ部は中央部のへこんだボタン状を呈する。	外面　ロクロヨコナデ。 切り離しは、回転糸切りによる。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土はあまり精選されず灰色（N4／0）
2 (完)	坏 (須)	13.5 4.2 6.4	体部は外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り、未調整。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は精選されず砂粒を多く含み灰色(10Y6/1)
3 (完)	坏 (須)	13.1 4.2 7.0	体部は外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り、未調整。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み灰白色（10Y7／1）
4 (完)	坏 (須)	14.2 4.6 6.3	体部は外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り。未調整。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み灰白色（10Y7／1）
5 (回)	坏 (須)	〈14.7〉 4.0 7.4	体部は外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り、未調整。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は比較的精選され灰白色（10Y7／1）
6 (回)	坏 (須)	〈12.8〉 3.7 (6.6)	体部は外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り、未調整。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み灰白色（10Y8／1）
7 (回)	坏 (須)	〈13.9〉 3.9 (7.2)	体部は外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り、未調整。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は精選されず砂粒を多く含み灰白色(10Y8/1)
8 (回)	坏 (須)	〈13.2〉 3.6 (6.4)	体部は外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り、未調整。 内面　体部ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み灰色（10Y6／1）
9 (回)	坏 (須)	〈13.5〉 4.2 (6.2)	体部は外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り、未調整。 内面　体部ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は精選されず砂粒を多く含み灰色（10Y6／1）
10 (回)	坏 (須)	〈13.7〉 3.8 6.0	体部は外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り、未調整。 内面　体部ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	完全な環元炎焼成となっておらず橙色(7.5YR7/6) 胎土は精選されず砂粒を多く含む
11 (完)	坏 (須)	11.7 4.7 5.9	体部は比較的直線的に外反し、底部には高台の貼り付けられる小形な器形。	外面　体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り、未調整。 内面　体部ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は精選されず砂粒を多く含み灰色(10Y6/1)
12 (回)	坏 (須)	〈13.8〉 6.5 〈7.9〉	体部は比較的直線的に外反し、底部には高台が貼り付けられる。	外面　体部ロクロヨコナデ。 底部調整、切り離し方法不明。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み灰色（10Y6／1）
13 (回)	坏 (土)	〈15.0〉 3.5 (7.0)	体部は外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。 底部手持ちヘラケズリ、切り離し方法不明。 内面　黒色研磨。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み浅黄橙色（7.5YR8／4）
14 (回)	坏 (土)	〈12.4〉 3.4 —	体部は丸味を帯びて外反し、底部は偏平な丸底となる。	外面　口縁部ヨコナデ。体部～底部ヘラケズリ。 内面　ヨコナデ。	胎土は砂粒を多く含みにぶい橙色(7.5YR6／4)
15 (回)	甕 (土)	〈12.1〉 — —	口縁部はゆるく外反し、胴部球状を呈する小形な器形。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を多く含みにぶい橙色(5YR6／4)
16 (回)	甕 (土)	〈21.6〉 — —	口縁部はかるくコの字状に外反する。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みにぶい橙色（5YR6／4）
17 (完)	甕 (土)	20.9 — —	口縁部はコの字状に外反する。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は比較的精選され浅黄橙色（7.5YR8/3）
18 (完)	甕 (土)	21.2 — —	口縁部はコの字状に外反する。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は比較的精選されにぶい橙色(5YR6／4)
19 (完)	甕 (土)	— — 4.6	底部平底。	外面　胴部～底部ヘラケズリ。 内面　ヘラナデ。	胎土は比較的精選されにぶい橙色(5YR7／4)

第71表　H－49号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

20 (回)	甕 (須)	〈33.8〉 〈31.1〉 〈15.6〉	□縁部は短く外反し、□唇部は帯状に縁取られる。胴部は球状を呈し、底部平底。	外面　胴部平行叩きの後、□縁部ヨコナデ。 内面　胴部格子叩きの後、□縁部ヨコナデ。	胎土は砂粒を含み灰色 (10Y6/1)



第185図　H－49号住居址出土遺物（1：3）

11・12は須恵器高台付坏で、このうち11は回転糸切り未調整の底部をみせている。

13は、内面黒色研磨のなされたロクロ土師器坏であるが、その切り離し手法は不明である。

第72表　H－49号住居址出土遺物一覧表〈鉄器〉

挿図番号	器　種	材　質	長さ	幅	厚さ	重量	備　　考
21	鎌	鉄	17.4	3.6	0.6	130	
22	鉄鏃？	鉄	(3.1)	(0.7)	(0.3)	2.8	基部？

14は土師器坏であるが、その形態の古さから本住居址には伴わないものと考えられる。

15は、土師器小形球胴甕である。

16～18は、コの字状口縁の土師器甕で、その最大径が胴部にあるものである。

20は、須恵器甕である。

21は、先端部の湾曲の比較的強い鎌である。

22は、鉄鏃基部の破片であろう。

時　期

本住居址は、九世紀前葉、十二遺跡第Ⅴ期に位置付けられよう。

(50)　H－50号住居址

住居址　第186図

H－50号住居址は、第Ⅱ区ハ－29グリッドにおいて検出された。

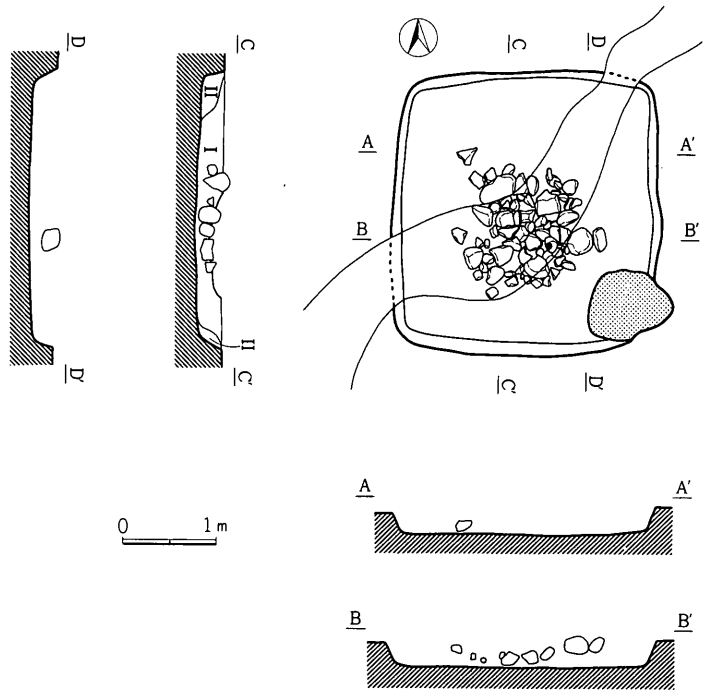
本住居址の中央上部は、新しい溝に切られている。

本住居址は、南北3.0m東西2.85mの隅丸方形を呈し、床面積6.9m²を測り、南北軸方向はN－7°－Wを指す。壁高は、20～30cmを測る。壁溝は認められなかった。床面は、全体にかなり硬質な貼り床となっている。なお、本住居址の中央部には、軽石・安山岩礫・集塊岩礫等数十個が認められた。これらはおそらく本住居址の埋没後のくぼみに廃棄されたものであろう。

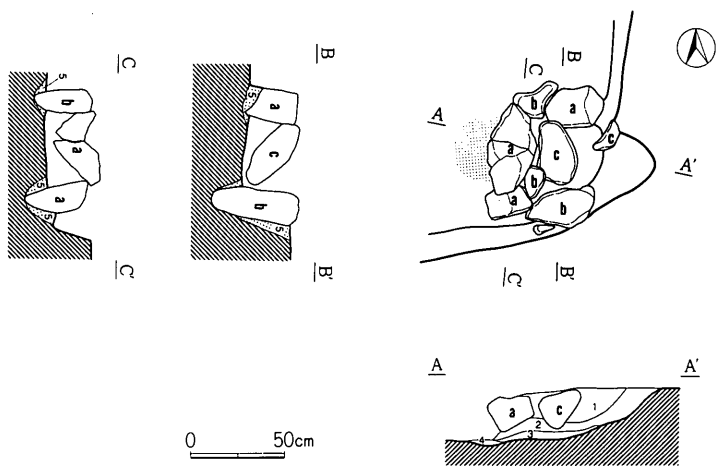
本住居址に付随するピットは認められなかった。

遺物は良好な出土状態を示すものがなく、いずれも覆土中からの出土である。

覆土は、2層に分層された。I層は小粒スコリアを含む黒色土層（10YR 1.7/1)、II層はローム粒子を多く含む黒褐色土層（10YR 3/2）であった。



第186図　H－50号住居址実測図（1：80）



第187図　H－50号住居址カマド実測図（1：40）

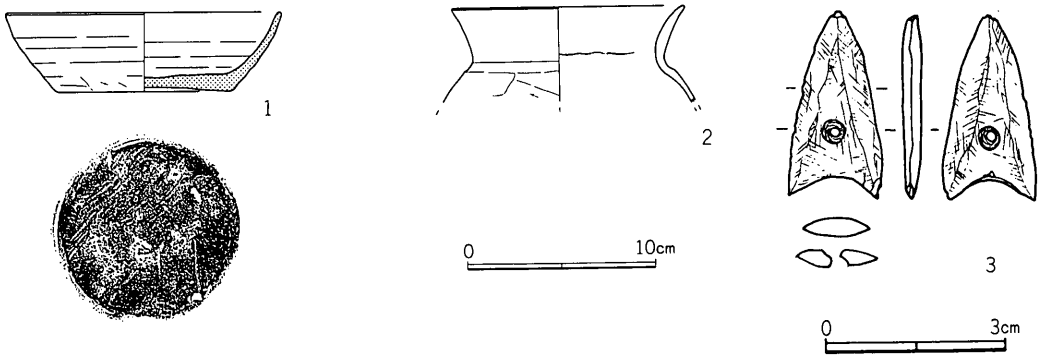
カマド　第187図

カマドは、住居址の東南コーナーにあり、左右両袖と天井石の石組をとどめていた。その石組のうち、図上aが軽石、bが安山岩、cが集塊岩である。また、それらを固定するためにロームを混じた褐色土（5層　10YR 4/6）が用いられていた。

本カマド内の土層は、4層に分層された。1層は若干のカーボンを含む黒褐色土層（10YR 2/3)、2層は焼土を僅かに含む褐色土層(7.5YR 4/3)、3層は大量のカーボンを含む黒褐色土層

第73表　H－50号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1（回）	坏（須）	14.7 4.1 9.1	体部は外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。 底部回転ヘラキリの後、手持ちヘラケズリ。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み灰白色（10Y8／1）
2（回）	甕（土）	〈12.4〉 — —	口縁部は外反し、球胴を呈する小形な器形	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みにぶい赤褐色（5YR5／4）



第188図　H－50号住居址出土遺物（1：4）

第74表　H－50号住居址出土遺物一覧表〈石器〉

挿図番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
3	磨製石鏃	粘板岩	3.1	1.5	0.3	1.4	カマド内出土

（5 YR 2/1）、4層は焼土・カーボンを僅かに含む暗赤褐色土層（5 YR 3/4）であった。

遺　物　第188図

出土遺物は、きわめて少なく、須恵器では坏・甕、土師器では甕の破片が出土したのみである。また、カマド中からは3の磨製石鏃が出土している。

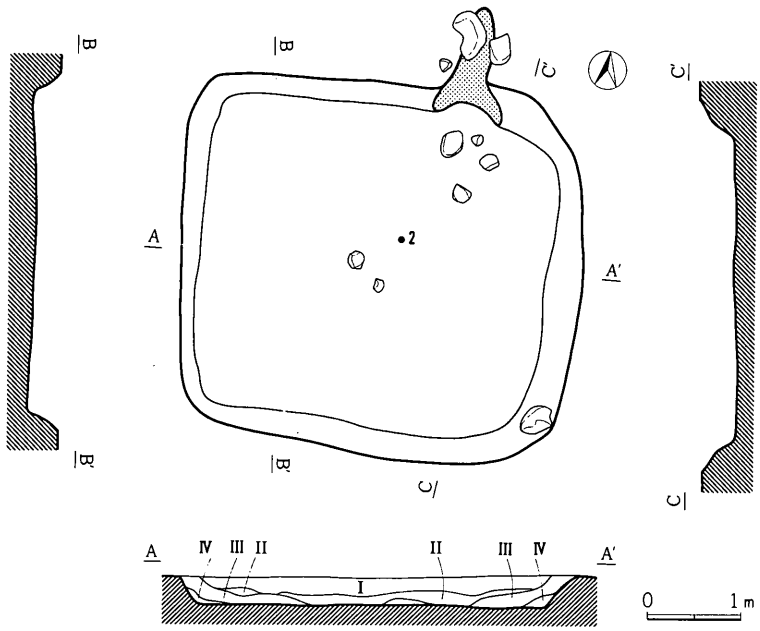
1は回転ヘラキリののち、手持ちヘラケズリの加えられた底部をみせる須恵器坏である。その形態の古さから本住居址には伴わないものと考えられる。

2は、土師器小形球胴甕である。

3は粘板岩の磨製石鏃で、両面に研磨がなされ両側から一つの穿孔がなされたものである。

時　期

本住居址は、遺物が少ないためその時期決定は困難であるが、八世紀前半代の所産とみて大過あるまい。



第189図　H－51号住居址実測図（1：80）

(51)　H－51号住居址

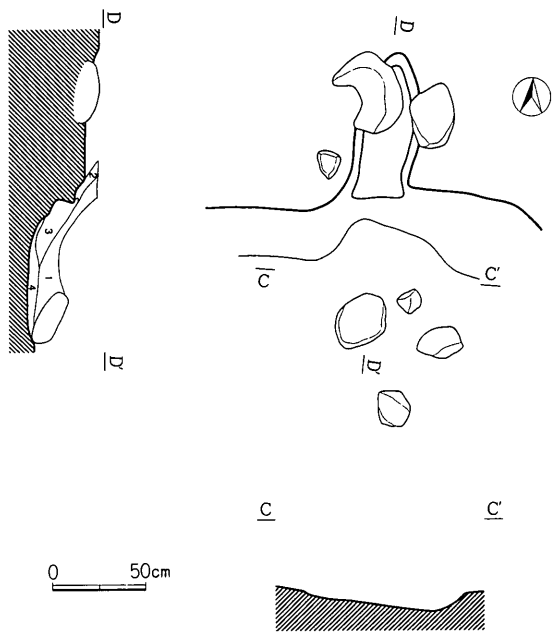
住居址　第189図

H－51号住居址は、第Ⅱ区へ－31グリッドにおいて検出された。

本住居址は、南北4.0m東西4.2mの歪んだ隅丸長形を呈し、床面積12.0m²を測り、南北軸方向はN－11°－Wを指す。壁高は、30～35cmを測る。壁溝は認められなかった。床面は、貼り床ではないが全体にかなり硬質な床となっている。

ピットは認められなかった。

遺物は、いずれも覆土中からの出土である。なお、自然遺物として2の馬歯が床面直上から出土している。



第190図　H－51号住居址カマド実測図（1：40）

覆土は、4層に分層された。Ⅰ層は細粒パミスを多量に含みローム粒子を含む黒褐色土層（10YR 2/2）、Ⅱ層は細粒パミスを多量に含みローム粒子をよく含む黒褐色土層（10YR 2/3）、Ⅲ層は細粒パミスを多量に含みローム粒子を含まない黒色土層（10YR 1.7/1）、Ⅳ層は細粒パミスを

第75表　H－51号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

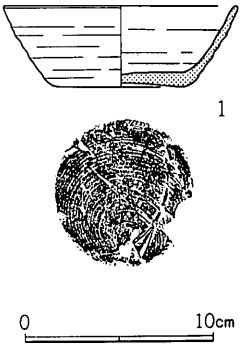
挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1（回）	坏（須）	〈12.4〉 4.3 7.2	体部は外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り、未調整。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み灰白色（7.5Y7/1）

多量に含みローム粒子をよく含む黒褐色土層（10YR 2/3）であった。

カマド　第190図

カマドは、住居址の北壁やや東よりにあるが、完全に破壊された状態にあり、住居址内にはその構材である安山岩礫数個が散乱していた。

本カマド内の土層は、4層に分層された。1層は焼土・カーボンを含む黒褐色土層（5 YR 2/2）、2層は焼土を含む赤褐色土層（5 YR 4/4）、3層は焼土を多く含み灰を含む暗赤褐色土層（5 YR 3/3）、4層は焼土・灰を含む暗赤褐色土層（5 YR 3/2）であった。



第191図　H－51号住居址出土遺物（1：4）

遺物・第191図

遺物の出土量は少なく、図示したもの以外には、須恵器では蓋・坏・甕の破片十数片、土師器では甕の破片数十片が出土しているにすぎない。

1は回転糸切りによる底部をみせる須恵器坏である。

このほか、自然遺物として2の馬歯一個が床面直上から出土している。

時期

本住居址は、八世紀後半～九世紀前葉の所産と考えられる。

(52)　H－52号住居址

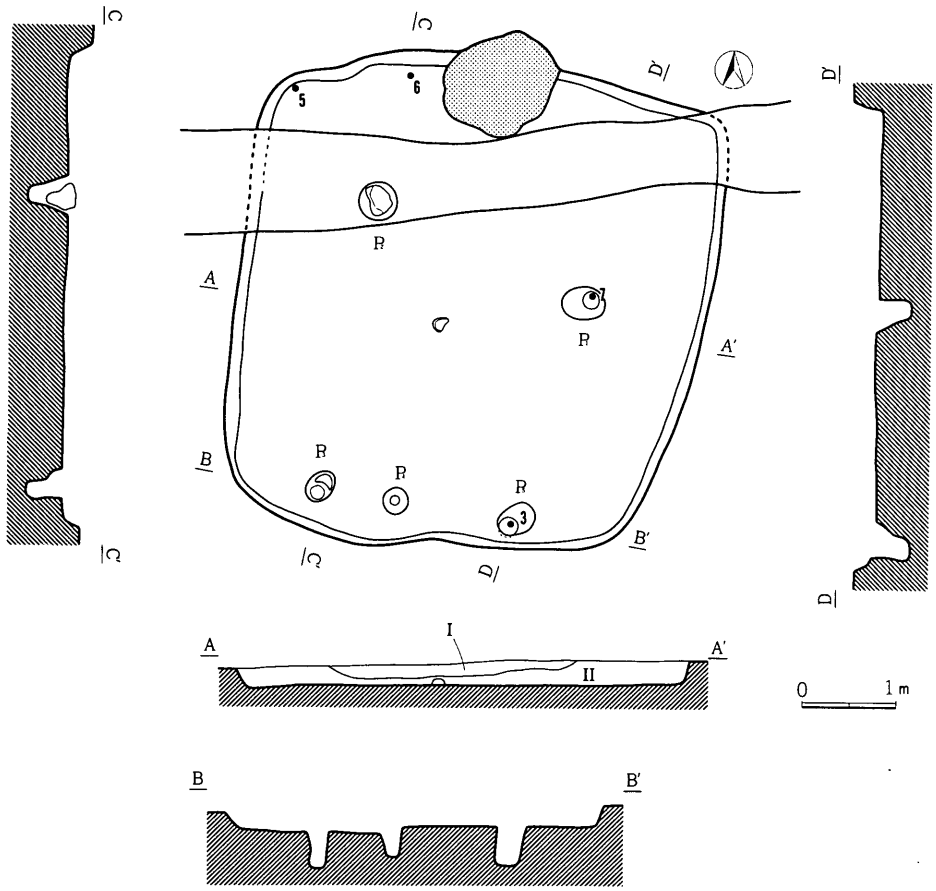
住居址　第192図

H－52号住居址は、第II区へ－31グリッドにおいて検出された。

本住居址はその上部を新しい溝によって破壊されている。

本住居址は、南北5.2m東西5.0mの隅丸方形を呈し、床面積21.8m²を測り、南北軸方向はN－5°－Wを指す。壁高は、20～30cmを測る。壁溝は認められない。床面は、全体にかなり硬質な貼り床となっている。

ピットは、P_1～P_5の五個のピットが認められた。このうちの、P_3～P_5は南壁際にそろって認

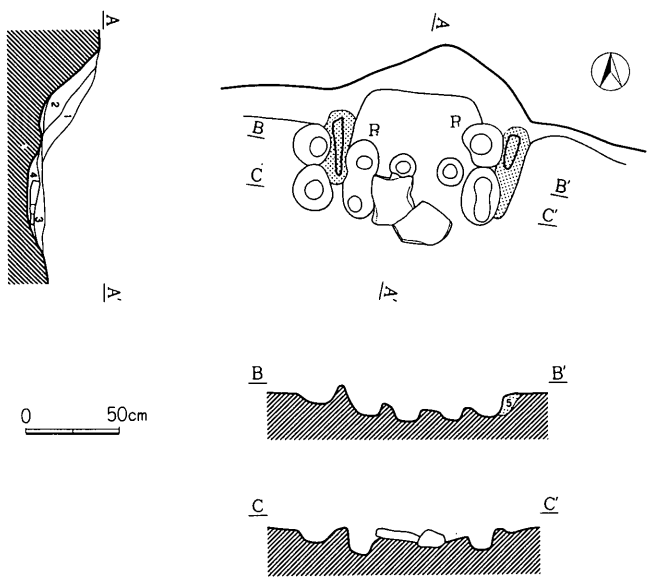


第192図　Ｈ－52号住居址実測図（１：80）

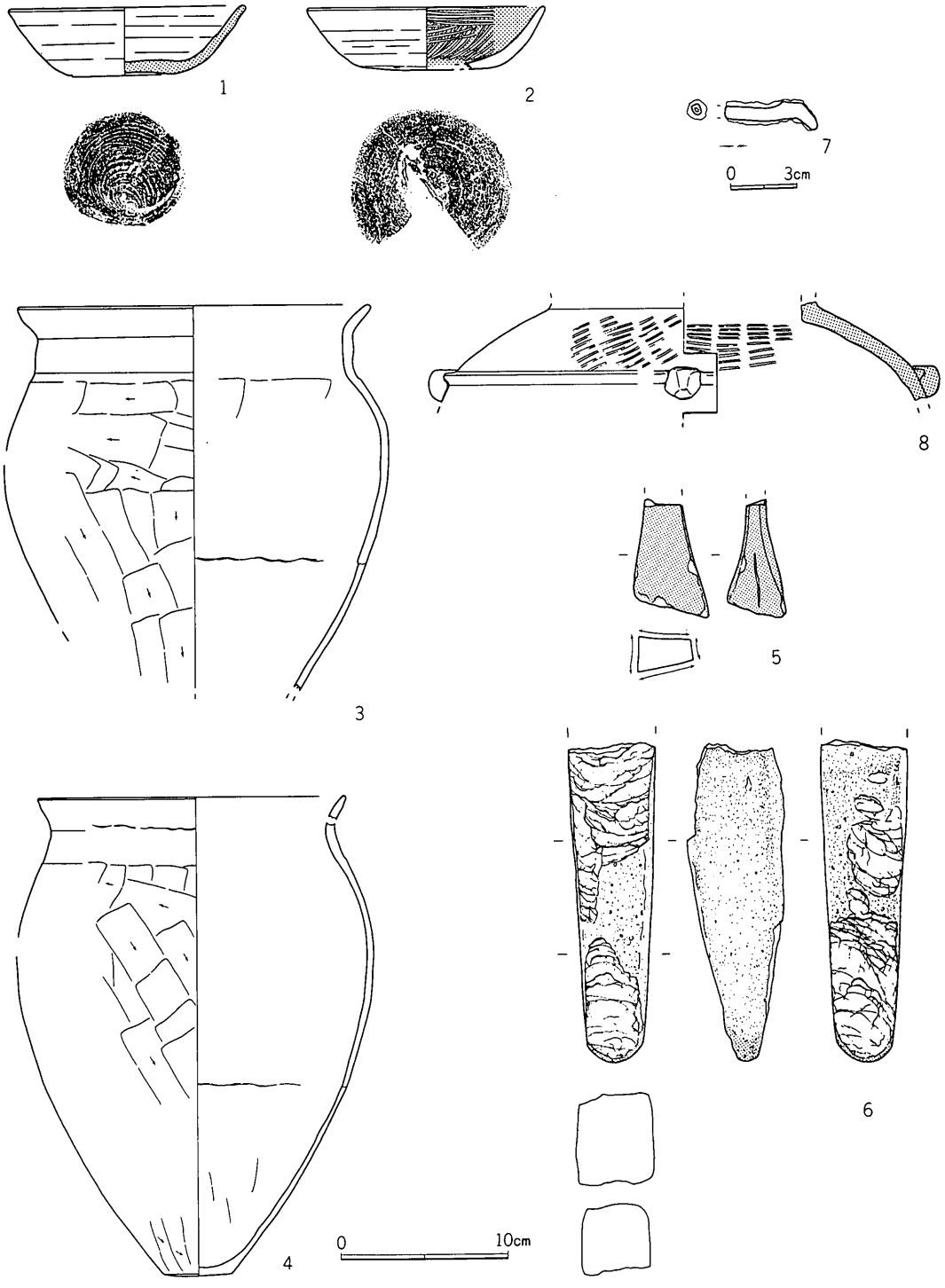
められるものであった。P_1は45×35cm深さ35cm、P_2は40×40cm深さ45cm、P_3は35×25cm深さ40cm、Ｐ4は25×25cm深さ40cm、Ｐ5は40×30cm深さ40cmを測る。

遺物は、３の土師器甕が床面より20cm浮いて、また、５の砥石・６の敲石が床面より２cm浮いて、７の鉄製品が床面より10cm浮いて出土した。この他はいずれも覆土中からの出土である。

覆土は２層に分層された。Ⅰ



第193図　Ｈ－52号住居址カマド実測図（１：40）



第194図　H－52号住居址出土遺物（1：4）

第76表　H－52号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1（完）	坏（須）	14.2 4.1 6.6	体部は外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り、未調整。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を多く含み灰白色（10Y7/1）
2（完）	坏（土）	14.2 3.7 8.3	体部は外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。 底部回転ヘラケズリ。 内面　黒色研磨。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を多く含み浅黄橙色（7.5YR8/3）
3（完）	甕（土）	21.0 — —	口縁部はコの字状に外反する。 胴部はやや肩が張った後、すぼまる。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含み赤褐色（5YR4/6）
4（完）	甕（土）	18.3 28.5 （4.0）	口縁部はコの字状に外反し、胴部は弓なりに外反し、底部平底。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は比較的精選され浅黄橙色（7.5YR8/3）
8（回）	四耳壺（須）	— — —	胴部上半には断面三角形の凸帯が巡らされ、その上に孔を持たない耳部が貼り付けられる。	外面　叩きの後、ヨコナデ。 内面　ヨコナデ。	胎土は比較的精選され、褐灰色（7.5 YR 4/1）を呈する。

第77表　H－52号住居址出土遺物一覧表〈鉄器・石器〉

挿図番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
5	砥石	砂岩	(7.0)	4.4	3.3	(90)	一部欠損
6	不明	輝石安山岩	(19.0)	5.2	5.6	(790)	一部欠損
7	鉄鏃？	鉄	(4.2)	0.7	0.4	(6.1)	基部

層は細粒パミス・ローム粒子を含む黒褐色土層（10YR 2/2）、II層は細粒パミスを含む黒色土層（10YR 1.7/1）であった。

カマド　第193図

カマドは、住居址の北壁中央にあるが、ほぼ完全に破壊された状態にあり、袖石・支脚石の抜き取り痕が残っているにすぎなかった。なお、その構材には面取り軽石と暗褐色粘土（5層　10YR 3/4）が用いられていた。

本カマド内の土層は、4層に分層された。1層は焼土とローム粒子を含む黒褐色土層（7.5YR 3/2）、2層は焼土を含み若干の灰・カーボンを含む極暗赤褐色土層（5 YR 2/4）、3層は焼土・灰・カーボンを含み若干の焼土を含む黒褐色土層（5 YR 2/2）、4層は焼土とローム粒子を含む赤褐色土層（5 YR 4/6）であった。

遺　物　第194図

遺物は、須恵器では坏・四耳壺・甕、土師器では坏・甕などが出土している。

1は回転糸切りによる底部をみせる須恵器坏である。

2は、内面黒色研磨のなされたロクロ土師器坏であるが、回転ヘラケズリの加えられた底部をみせ、その切り離し手法は不明である。

3・4は、コの字状口縁の土師器甕で、その最大径が胴部にあるものである。

8は、須恵器四耳壺の破片である。

5は、四面が研砥に供された砥石である。

6は、棒状礫の先端に磨痕（網点）のみられるもので、その剝離痕も使用に伴うものと考えられる。また、本石器は熱も被っている。

7は、鉄鏃基部の破片であろう。

時　期

本住居址は、九世紀前葉、十二遺跡第V期に位置付けられよう。

(53)　H－53号住居址

住居址　第195図

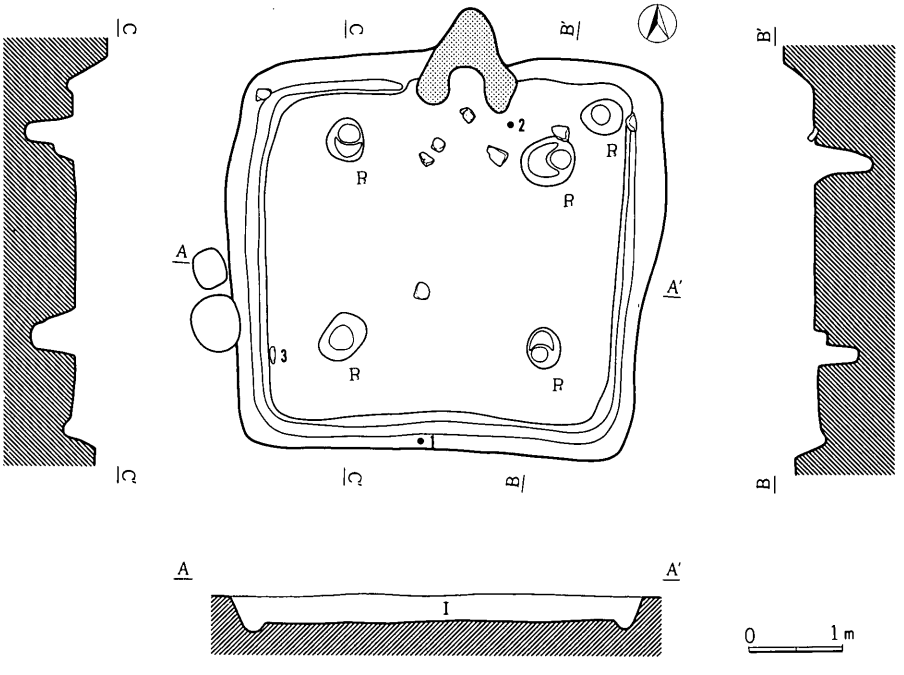
H－53号住居址は、第II区フ－30グリッドにおいて検出された。

本住居址は、F－69号掘立柱建物址と重複するが、両者の新旧関係はとらえられなかった。

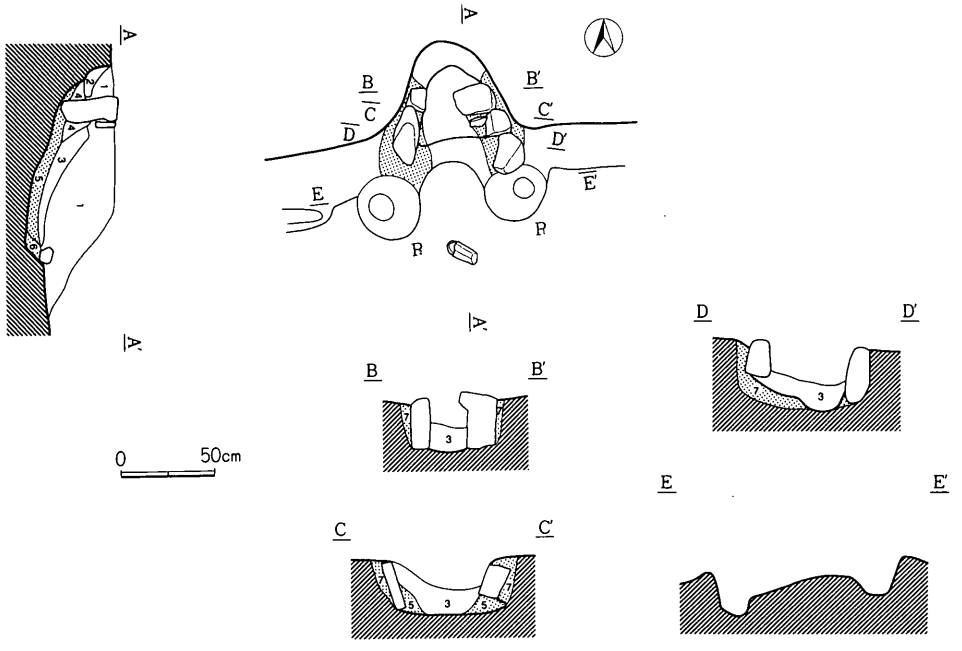
本住居址は、南北4.2m東西4.7mの隅丸方形を呈し、床面積12.8m²を測り、南北軸方向はN－6°－Wを指す。壁高は、25～35cmを測る。壁溝は、幅約15～20cm深さ5～10cmを測るものが、北壁の一部を除きほぼ全周する。床面は、貼り床で全体にかなり硬質なものであった。

ピットは、P_1～P_4の四個のピットが対で認められたほか、東北コーナーでP_5が検出された。P_1は60×50cm深さ65cm、P_2は45×40cm深さ50cm、P_3は55×50cm深さ50cm、P_4は45×35cm深さ50cm、P_5は45×35cmを測る。

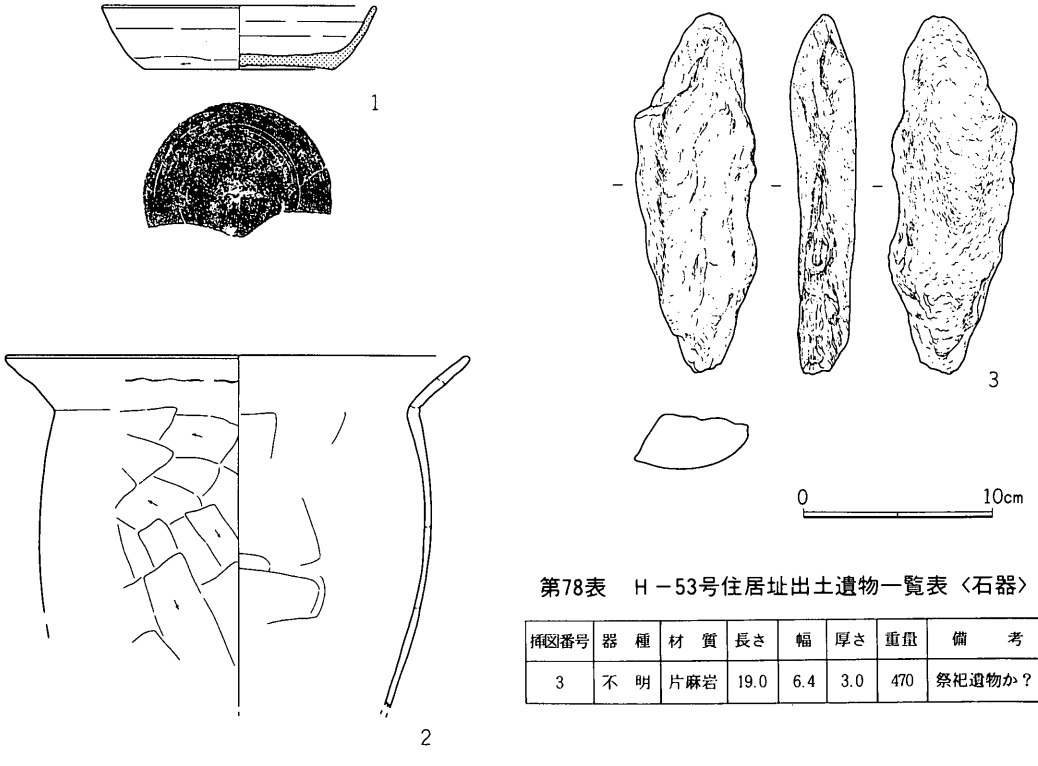
遺物は、2の土師器甕が、カマド手前の床面直上より出土している。また、3の石材が西壁際



第195図　H－53号住居址実測図（1：80）



第196図　Ｈ－53号住居址カマド実測図（１：40）



第78表　Ｈ－53号住居址出土遺物一覧表〈石器〉

挿図番号	器　種	材　質	長さ	幅	厚さ	重量	備　　考
3	不　明	片麻岩	19.0	6.4	3.0	470	祭祀遺物か？

第197図　Ｈ－53号住居址出土遺物（１：４）

第79表　H－53号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1 (回)	坏 (須)	〈14.5〉 3.4 (10.0)	体部は外反し、底部平底の盤状の器形を呈する。	外面　体部ロクロヨコナデ。 底部回転ヘラキリの後、回転ヘラケズリ。 内面　ロクロヨコナデ。(ロクロ右回転)	胎土は比較的精選され灰白色 (10Y7/1)
2 (回)	甕 (土)	(24.5) — —	口縁部はくの字状に外反する。 最大径は口縁部にある。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を多く含み橙色 (5YR6/6)

の床面直上より出土している。この他遺物は、いずれも覆土中からの出土である。

覆土は、Ⅰ層のみで小粒パミスをよく含む黒色土層（10YR 2/1）であった。

カマド　第196図

カマドは、住居址の北壁中央にあり、天井部と左右両袖の大半を破壊されているが、僅か煙道部の両壁の一部をとどめていた。その煙道部の両壁の芯には、面取り軽石が用いられているが、中でもBの断面にみられるものは『状に面取りされたものであった。これらの石材を包むのは、にぶい橙色土層（5層　7.5YR 7/4)、灰褐色粘土層（7層　7.5YR 6/1）であった。また、火床部には、角柱状に面取りされた軽石の支脚が残置されていた。

本カマドの土層は、4層に分層された。1層は焼土・カーボン・灰を含む黒褐色土層（7.5YR 2/2)、2層はロームブロック、3層は灰を多量に含む赤褐色土層（5 YR 4/6)、4層はにぶい赤褐色土層（5 YR 4/3）であった。

遺　物　第197図

遺物の出土量は少なく、図示したもの以外には、須恵器では坏・甕の破片、土師器では坏・甕破片が検出されているのみである。

1は、回転ヘラキリの後底部全面に回転ヘラケズリがなされる須恵器坏である。

2は、くの字状口縁の土師器甕で、その口縁部に最大径をもつものである。

このほか、見込部にラセン暗文をもつ畿内系暗文土器底部破片も認められた。

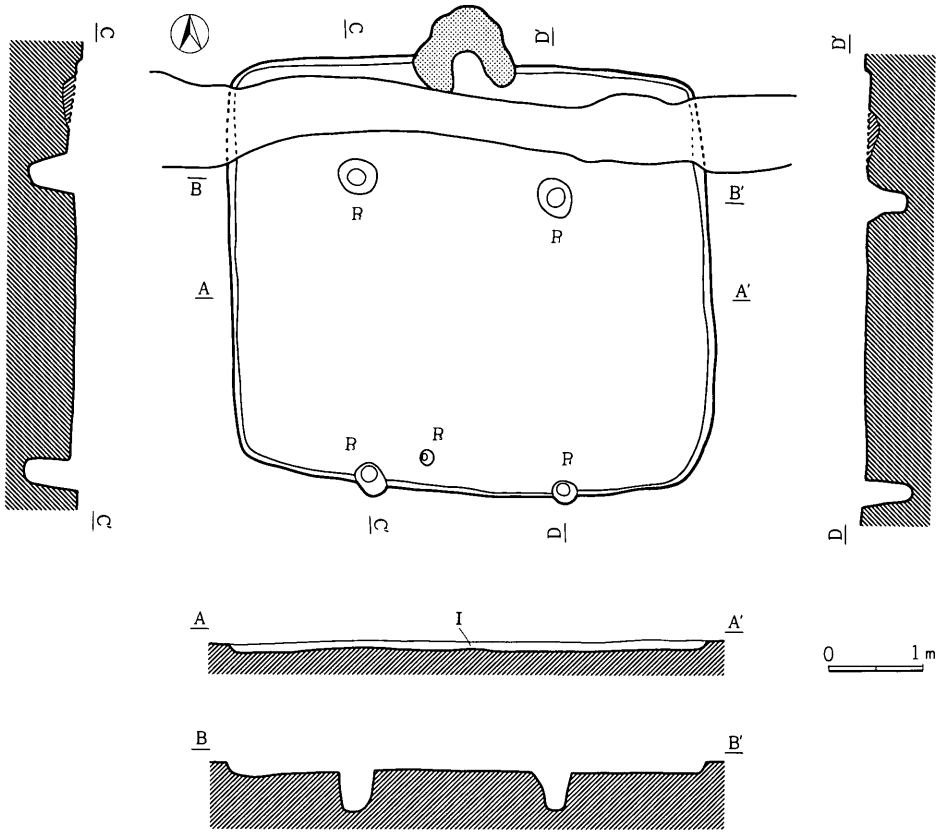
また、3の片麻岩片は、器種がわからないが、石器の素材にはあまり適していないものである。祭祀等にかかわる資料であろうか。

時　期

本住居址は、八世紀第Ⅰ四半期、十二遺跡第Ⅰ期に位置付けられよう。

(54)　H－54号住居址

住居址　第198図



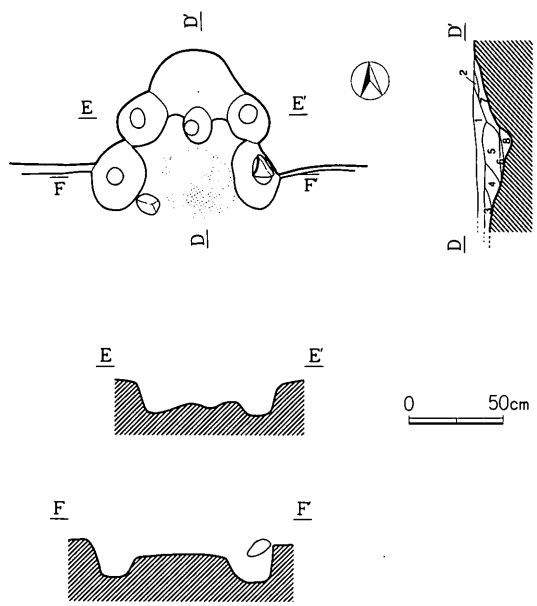
第198図　Ｈ－54号住居址実測図（１：80）

Ｈ－54号住居址は、第Ⅱ区へ－30グリッドにおいて検出された。

本住居址は、Ｈ－55号住居址・Ｈ－56号住居址を切って存在している。また、その上部を溝によって破壊されている。

本住居址は、南北4.5m東西5.1mの隅丸方形を呈し、床面積21.1m²を測り、南北軸方向はＮ－９°－Ｗを指す。壁高は、10～15cmを測る。壁溝は認められない。床面は、貼り床で全体にかなり硬質なものであった。

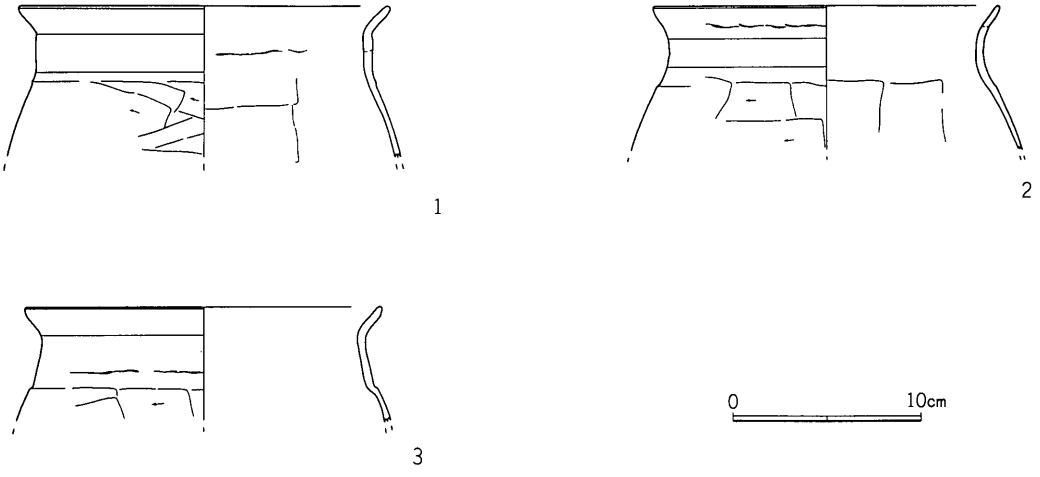
ピットは、P_1～P_4の四個のピットが対で認められ、ことにP_3・P_4は南壁中に認められる特徴的なものであった。このほか



第199図　Ｈ－54号住居址カマド実測図（１：40）

第80表　H－54号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1（回）	甕（土）	(19.7) — —	口縁部はコの字状に外反する。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含み明赤褐色（5YR5／8）
2（回）	甕（土）	〈18.4〉 — —	口縁部はコの字状に外反する。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みにぶい橙色（7.5YR7/3）
3（回）	甕（土）	(18.9) — —	口縁部はコの字状に外反する。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みにぶい赤褐色（5YR5/4）



第200図　H－54号住居址出土遺物（1：4）

P_5がP_3の近くにある。P_1は45×35cm深さ40cm、P_2は40×35cm深さ50cm、P_3は35×30cm深さ50cm、P_4は25×25cm深さ50cm、P_5は15×10cmを測る。

遺物は、いずれも覆土中からの出土である。

覆土は、Ⅰ層はのみで細粒パミスを含む黒色土層（10YR 1.7/1）であった。

カマド　第199図

カマドは、住居址の北壁中央にあるが、完全に破壊されており、袖石および支脚石の抜き取り痕をとどめているにすぎなかった。

本カマドの土層は、8層に分層された。

1層は灰を多く含む黒褐色土層（10YR 2/2）、2層は焼土を多量に含む赤褐色土層（5 YR 4/6）3層は焼土を若干含む暗褐色土層（10YR 3/3）、4層は焼土・粘土を含み灰を多量に含むにぶい黄褐色土層（10YR 4/3）、5層は焼土・灰を含み僅かにカーボンを含む明赤褐色土層（5 YR 5/6）、6層は赤褐色焼土層（5 YR 4/8）、7層は焼土を若干含む暗褐色土層（10YR 3/4）、8層は灰が多量に混じる褐灰色粘土層（10YR 4/1）であった。

遺　物　第200図

遺物の出土量は総じて少なく、土師器では甕が、須恵器では坏の破片数片が検出されているにすぎない。

１～３はコの字状口縁の土師器甕で、最大径を胴部上半にもつものである。

時　期

本住居址は、時期決定のための遺物に乏しいが、その切り合いから九世紀第末葉、十二遺跡第Ⅶ期に位置付けられようか。

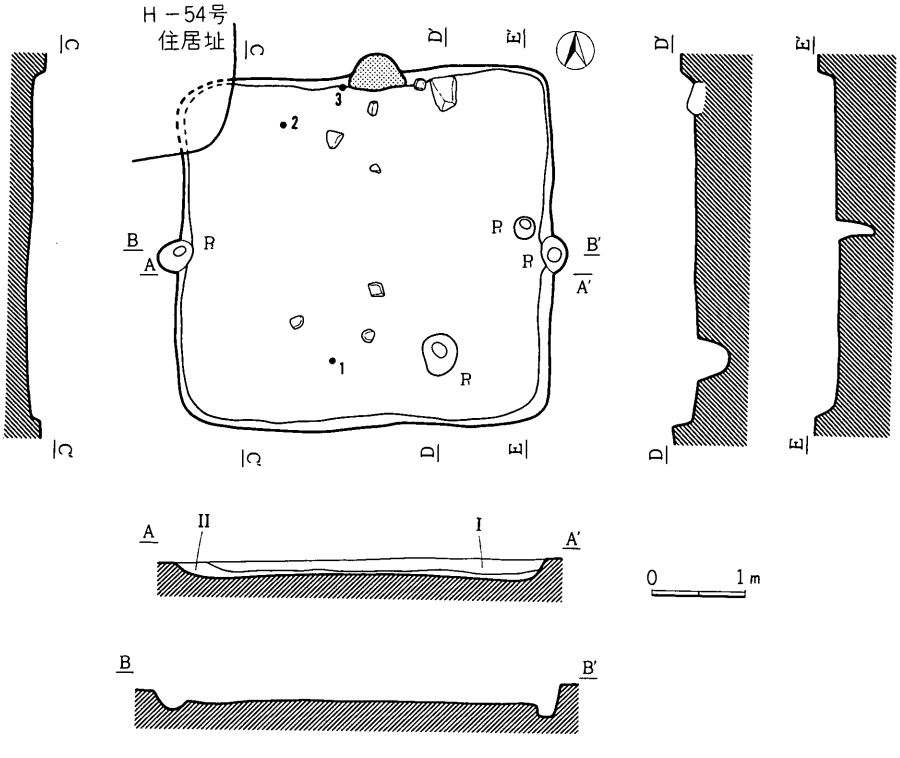
(55)　Ｈ－55号住居址

住居址　第201図

Ｈ－55号住居址は、第Ⅱ区へ－30グリッドにおいて検出された。

本住居址は、Ｈ－54号住居址に切られて存在している。

本住居址は、南北3.8m東西3.9mの隅丸方形を呈し、床面積13.5m²を測り、南北軸方向はＮ－5°－Ｗを指す。壁高は、10～25cmを測る。壁溝は認められない。床面は、貼り床で全体にかなり



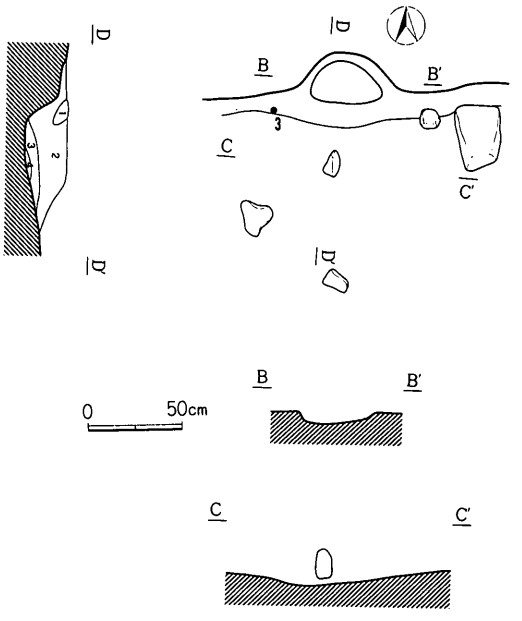
第201図　Ｈ－55号住居址実測図（１：80）

硬質なものであった。

ピットは、P_1・P_2の二個のピットが対で認められた。また、このほかP_3・P_4が検出されている。P_1は40×25cm深さ15cm、P_2は40×30cm深さ10cm、P_3は45×40cm深さ35cm、P_4は25×25cm深さ40cmを測る。

遺物は、1の灰釉陶器が割れて床面よりやや浮いて、2・3の土師器が床面直上より出土した。この他は、いずれも覆土中からの出土である。

覆土は、3層に分層された。I層は黒色土層（10YR 2/1）でスコリア・細粒パミスを多く含み、II層は黒色土層（10YR 1.7/1）スコリア・細粒パミスを多く含み、III層はローム粒子を多く含む黄褐色土層（10YR 5/6）であった。



第202図　H－55号住居址カマド実測図（1：40）

カマド　第202図

カマドは、住居址の北壁中央にあり、完全に破壊されていた。付近には、その構材に用いられていた安山岩礫と、13cmを計る面取り軽石の支脚が残置されていた。

本カマドの土層は、4層に分層された。

1層は暗褐色（10YR 4/4）焼土ブロック、2層は若干の灰を含む黒褐色土層（10YR 2/3）、3層は多量の焼土を含む褐色土層（10YR 4/4）、4層は褐色焼土層（10YR 4/4）であった。

遺　物　第203図

遺物は、灰釉陶器埦、須恵器では蓋・甕、土師器では坏・甕が検出されている。

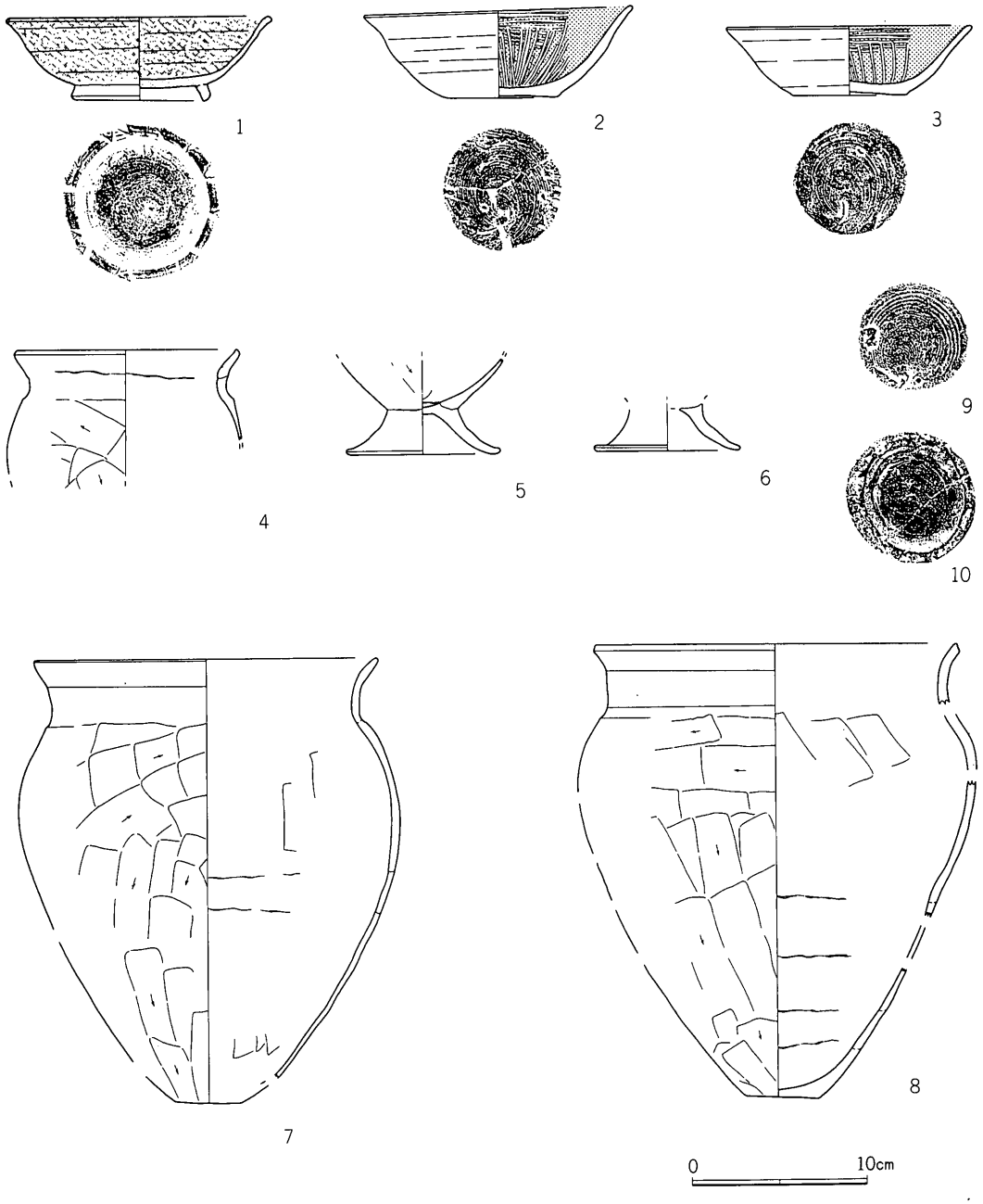
1は、刷毛掛けによる灰釉陶器埦である。

2・3は土師器坏で、3には内面黒色研磨がなされている。

4は土師器小形甕、5・6は土師器台付甕脚部、7・8はコの字状口縁の土師器甕で、最大径を胴部上半にもつものである。

時　期

本住居址は、九世紀後葉、十二遺跡第VI期に位置付けられよう。



第203図　Ｈ－55号住居址出土遺物（１：４）

第81表　H－55号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1（完）	塊（灰）	15.2 4.7 7.5	体部は丸味を帯びて外反し、底部には高台が貼り付けられる。	外面　体部ロクロヨコナデ。底部回転ヘラケズリ。体部には灰釉が刷毛塗りされる。 内面　ロクロヨコナデ。体部には灰釉が刷毛塗りされる。（ロクロ右回転）	胎土は精選され灰白色(10Y8/1)見込み部には重ね焼き時の高台部が一部に貼り付く
2（完）	坏（土）	15.5 5.1 6.1	体部は丸味を帯びて外反し、口縁部でゆるやかな変換をもって外反する。底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。底部回転糸切り、未調整。 内面　黒色研磨。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含みにぶい赤褐色（5YR5/3）
3（回）	坏（土）	(14.0) 3.9 6.2	体部は丸味を帯びて外反し、口縁部でゆるやかな変換をもって外反する。底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。底部回転糸切り、未調整。 内面　ヘラミガキ。一部黒色となる。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み浅黄橙色（10YR8/3）
4（完）	甕（土）	13.9 — —	口縁部は丸味を帯びて外反する小形な器形。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は比較的精選されにぶい赤褐色(5YR5/4)
5（回）	台付甕（土）	(8.8) — —	台部はゆるく八の字状に開く。	外面　台部ヨコナデ。 内面　台部ヨコナデ。	胎土は砂粒を含みにぶい赤褐色（5YR5/4）
6（完）	台付甕（土）	— — 8.4	台部は八の字状に開く。	外面　ヨコナデ。 内面　ヨコナデ。	胎土は比較的精選されにぶい赤褐色(5YR5/4)
7（完）	甕（土）	19.7 25.3 (3.8)	口縁部はコの字状に外反し、胴部上半に最大径をもち、ゆるくすぼまり底部へと至る器形。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は比較的精選されにぶい褐色(7.5YR6/3)
8（完）	甕（土）	21.0 25.8 4.1	口縁部はコの字状に外反し、胴部上半に最大径をもち、ゆるくすぼまり底部へと至る器形。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は比較的精選されにぶい褐色(7.5YR6/3)

(56)　H－56号住居址

住居址　第204図

H－56号住居址は、第II区へ－30グリッドにおいて検出された。

本住居址は、H－54号住居址に僅かに切られて存在している。また、その上部を溝によって破壊されている。

本住居址は、南北3.5m東西3.4mの隅丸方形を呈し、床面積9.0m²を測り、南北軸方向はN－2°－Wを指す。壁高は、35～45cmを測る。壁溝は全体に認められ、幅10～15cm深さ5cmを測る。床面は、貼り床で全体にかなり硬質なものであった。

ピットは認められなかった。

遺物は、1の土師器坏が床面直上より検出された。この他の遺物は、いずれも覆土中からの出土である。

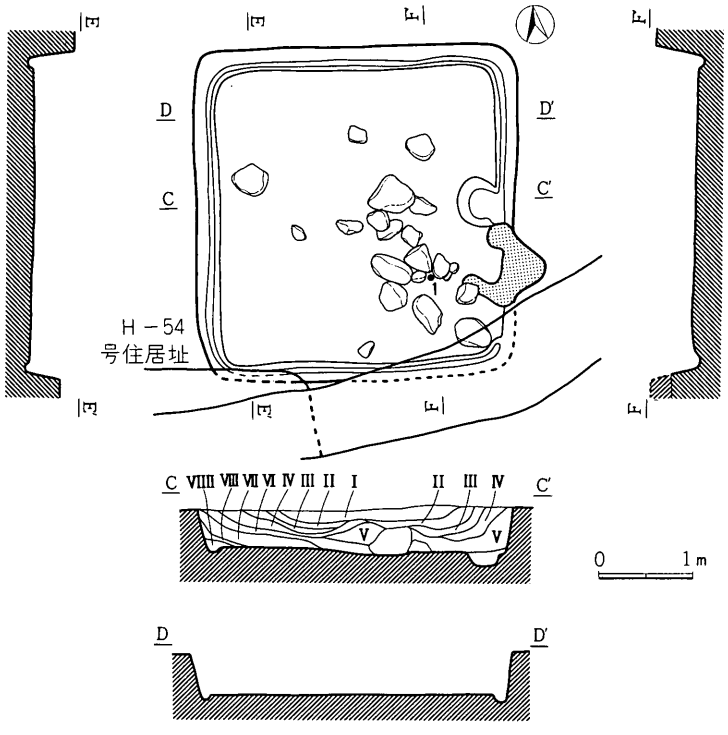
覆土は、10層に分層され、埋土的な様相を呈していた。I層は黒褐色土層（10YR 2/3）でローム粒子を多量に含み、II層はローム粒子をよく含む黒色土層（10YR 2/1）、III層はローム粒子を多量に含む黒褐色土層（10YR 2/3）、IV層はローム粒子をよく含む黒色土層（10YR 2/1）、V層はローム粒子を多量に含む黒褐色土層（10YR 2/3）、VI層はローム粒子を多く含む黒色土層（10YR 2/1）、VII層はローム粒子を僅かに含む黒色土層（10YR 1.7/1）、VIII層はローム粒子を多量に

含む黒褐色土層（10YR 2/3）、Ⅸ層はローム粒子をあまり含まない黒色土層（10YR 2/1）、Ⅹ層はローム粒子をあまり含まない黒色土層（10YR 2/1）であった。

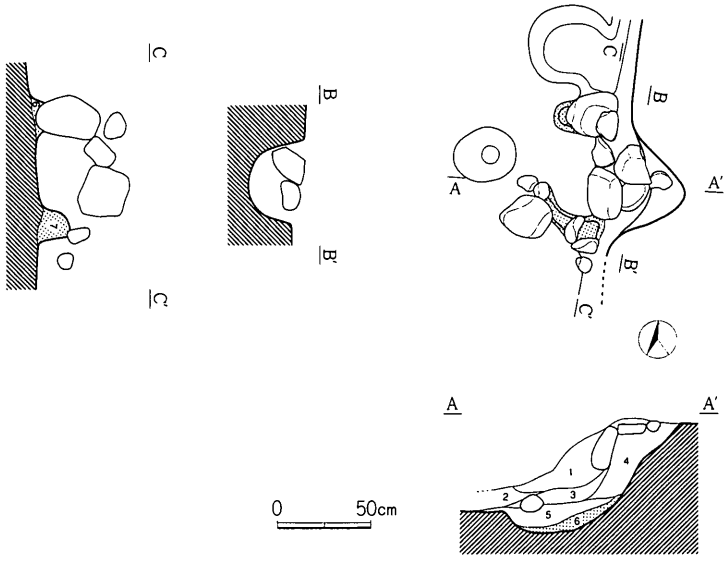
カマド　第205図

カマドは、住居址の北壁中央にあるが、その一部の石組（安山岩礫・面取り軽石）をとどめるのみで、ほぼ全体を破壊されていた。その構材に用いられていたと考えられる安山岩礫・面取り軽石十数個が住居内に散乱していた。

本カマドの土層は、6層に分層された。1層は焼土・灰を僅かに含むにぶい赤褐色土層（5 YR 5/3）、2層は焼土・カーボンを僅かに含む極暗赤褐色土層（5 YR 2/3）、3層は焼土・灰を含むにぶい褐色土層（7.5YR 5/4）、4層は焼土を含む極暗赤褐色土層（5 YR 2/4）、5層は赤褐色焼土層（5 YR 4/6）、6層は黒褐色焼土層（7.5YR 3/1）であった。



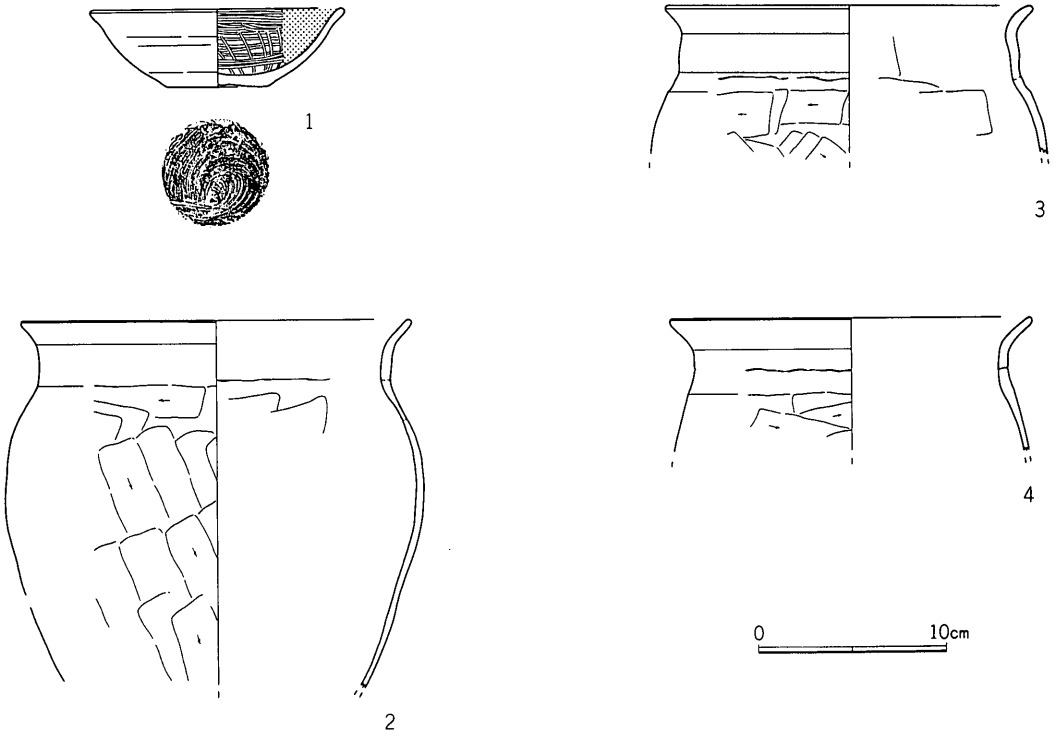
第204図　H－56号住居址実測図（1：80）



第205図　H－56号住居址カマド実測図（1：40）

第82表　H－56号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1（回）	坏（土）	〈13.6〉 4.1 5.4	体部は丸味を帯びて外反し、口縁部でゆるやかな変換をもって外反する。底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り、未調整。 内面　黒色研磨。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み浅黄橙色（7.5YR8/3）
2（完）	甕（土）	20.7 — —	口縁部はコの字状に外反し、胴部上半に最大径をもつ。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みにぶい褐色（7.5YR5/4）
3（回）	甕（土）	〈19.5〉 — —	口縁部はコの字状に外反する。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は比較的精選されにぶい褐色(7.5YR6/3)
4（回）	甕（土）	〈19.2〉 — —	口縁部はコの字状に外反する。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みにぶい赤褐色（5YR5/4）



第206図　H－56号住居址出土遺物（1：4）

遺　物　第206図

遺物は、須恵器では坏・高台付坏・甕、土師器では坏・甕が検出されている。

1は、土師器坏で、回転糸切りのまま未調整の底部をみせている。

2～4はコの字状口縁の土師器甕で、最大径を胴部上半にもつものである。

時　期

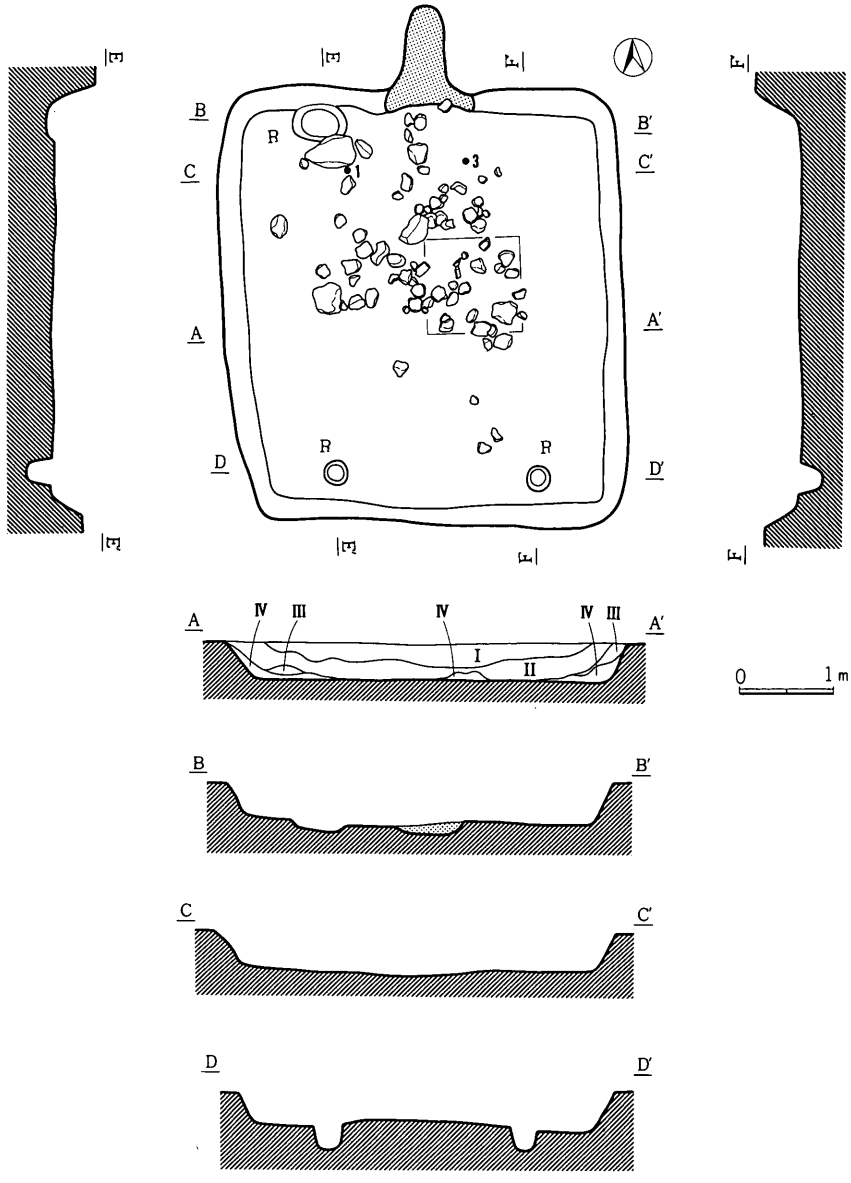
本住居址は、九世紀後葉、十二遺跡第Ⅳ期に位置付けられよう。

(57)　Ｈ－57号住居址

住居址　第207図

Ｈ－57号住居址は、第Ⅱ区フ－30グリッドにおいて検出された。

本住居址は、Ｆ－68号堀立柱建物址と重複するが、この両者の切り合い関係は非常に微妙であった。とりあえずは、本住居址の確認面上において、Ｆ－68号堀立柱建物址のプランが確認されなかったので、Ｆ－68が本址に先行する可能性を考えておこう。



第207図　Ｈ－57号住居址実測図（１：80）

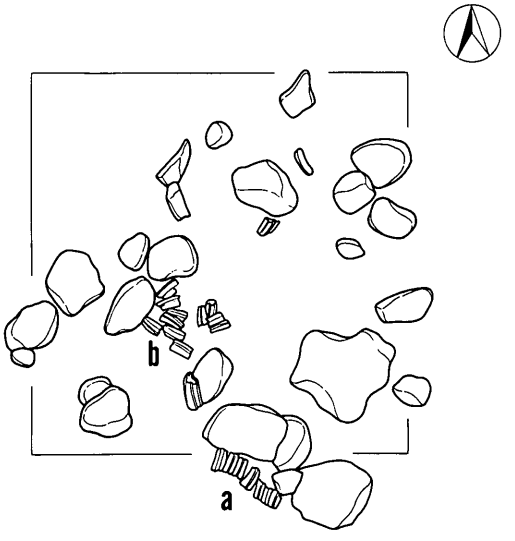
1　竪穴住居址

本住居址は、南北4.65m東西4.25mの隅丸長方形を呈し、床面積15.5m²を測り、南北軸方向はN－7°－Wを指す。壁高は、40～45cmを測る。壁溝は認められない。床面は、全体に硬質な貼り床となっている。住居址の床面には、カマドの構材である面取り軽石と安山岩礫が70個以上散乱している状況にあった。

ピットは、P_1・P_2の二個のピットが対で認められたほか、カマド西脇にはP_3が認められた。P_1は25×25cm深さ20cm、P_2は25×25cm深さ25cm、P_3は60×35cm深さ10cmを測る。

遺物は、1・2の須恵器坏、3の須恵器長頸瓶が床面直上より出土している。この他遺物は、いずれも覆土中からの出土である。

なお、住居の中央部床面直上より馬歯が出土した。これは、馬の上下両顎の馬歯1セット分にあたるものである。これらは出土状況から考えて、馬の上顎・下顎が分離した状態で住居内に廃棄されたものと考えられる。

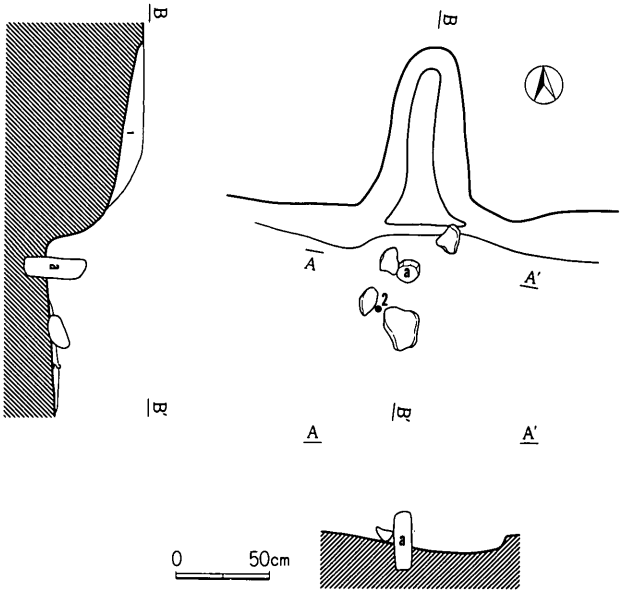


第208図　H－57号住居址馬歯出土状態（1：20）

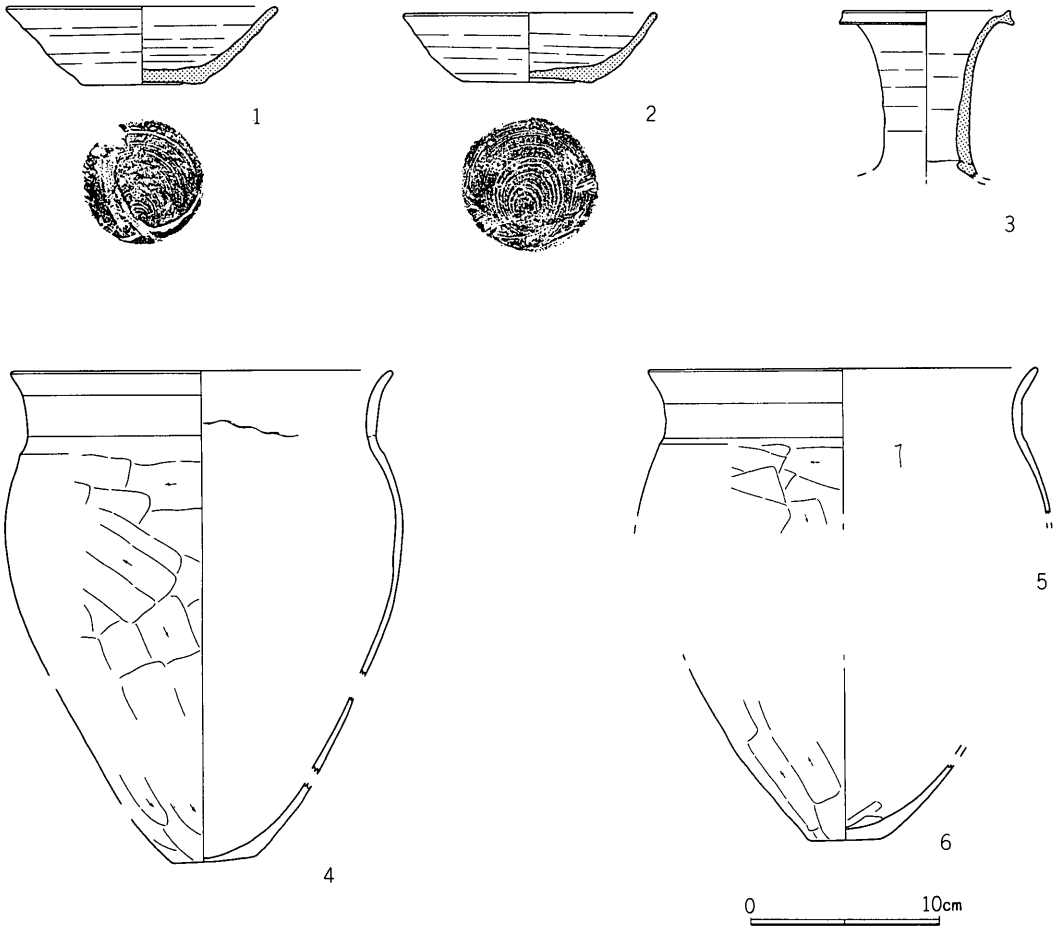
覆土は、4層に分層され、埋土的な様相を呈していた。I層は小粒スコリアを多量に含む黒色土層（10YR 2/1）、II層はローム粒子を多量に含む暗褐色土層（10YR 3/3）、III層は黒色土層（10YR 1.7/1）、IV層はローム粒子を大量に含む暗褐色土層（10YR 3/4）であった。

カマド　第209図

カマドは、住居址の北壁中央にあるが、角柱状に面取りのなされた軽石の支脚をとどめているのみで、他の部分は完全に破壊され、住居址の床面にはカマドの構材である面取り軽石と安山岩礫が70個以上が散乱している状況にあった。



第209図　H－57号住居址カマド実測図（1：40）



第210図　Ｈ－57号住居址出土遺物（１：４）

第83表　Ｈ－57号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1（完）	坏（須）	14.4 4.1 6.7	体部は外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り、未調整。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は精選されず砂粒を多く含み灰色（10Y6/1）
2（完）	坏（須）	13.5 3.6 6.7	体部は外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り、未調整。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み灰色（10Y6/1）内外面に火襷きあり
3（完）	長頸瓶（須）	8.8 — —	頸部から口縁部はラッパ状に外反する。口唇部は帯状を呈する。	外面　ロクロヨコナデ。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は精選される。完全な還元炎焼成となっておらず明赤褐色(5YR5/6)
4（完）	甕（土）	20.3 25.9 3.8	口縁部は弱くコの字状に外反し、胴部上半に最大径をもち、ゆるくすぼまり、底部に至る。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含み橙色（7.5YR7/6）
5（回）	甕（土）	(20.6) — —	口縁部はコの字状に外反する。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みにぶい褐色（7.5YR5/4）
6（完）	甕（土）	— — 3.7	底部平底。	外面　ヘラケズリ。 内面　ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みにぶい褐色（7.5YR6/3）

なお、その前庭部からは2の須恵器坏が出土した。

本カマドの土層は、1層が焼土をよく含む黒色土層（10YR 2/1）、2層はカーボンを含む黒色土層（10YR 1.7/1）であった。

遺　物　第210図

遺物は、須恵器では坏・長頸瓶・甕、土師器では甕が検出されている。

1・2は、回転糸切り未調整の底部をみせる須恵器坏である。

3は、須恵器長頸瓶頸部である。

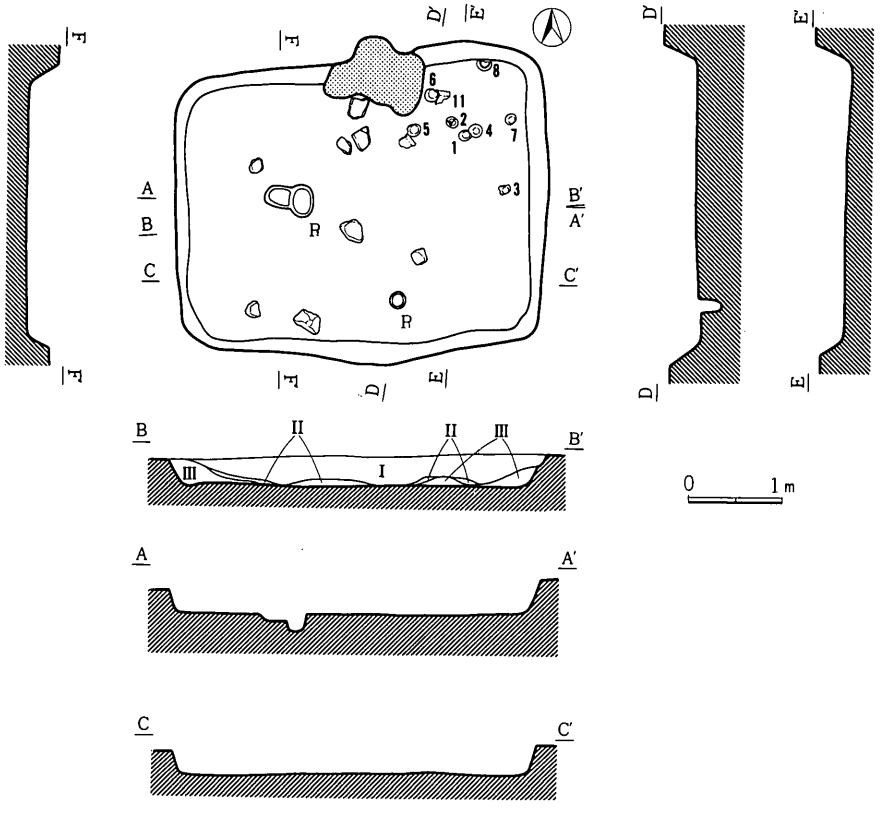
4・5は、コの字状口縁の土師器甕である。いずれもその胴上半部に最大径をもつものである。

時　期

本住居址は、九世紀前葉、十二遺跡第Ⅴ期に位置付けられよう。

(58)　H－58号住居址

住居址　第211図



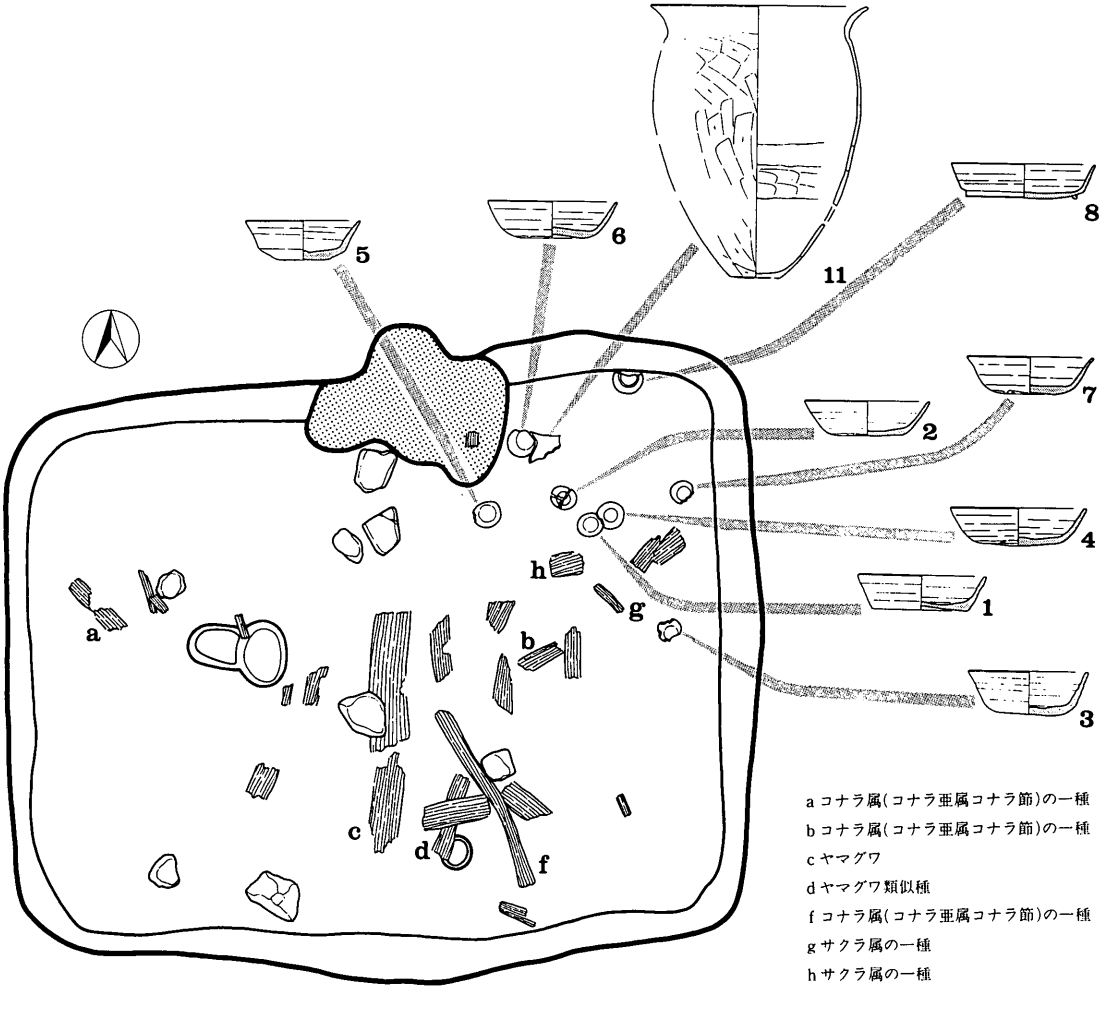
第211図　H－58号住居址実測図（1：80）

Ｈ－58号住居址は、第Ⅱ区フ・へ－29グリッドにおいて検出された。

本住居址は、南北3.2m東西4.0mの隅丸長方形を呈し、床面積9.9m²を測り、南北軸方向はＮ－7°－Ｗを指す。壁高は、20～40cmを測る。壁溝は認められない。床面は、全体に平坦で硬質な貼り床となっている。

ピットは、P_1・P_2が認められた。P_1は15×15cm深さ25cm、P_2は35×25cm深さ20cmを測り横に浅いピットを伴う。

本住居址は焼失家屋であり、炭化材が住居内に散在していた(第212図)。材の樹種等については付編に詳しい報告があるが、ここで簡単にふれておく。図のａ・ｂ・ｆはコナラ亜属コナラ節の樹木、ｃがヤマグワ、ｄがヤマグワ類似の樹木、ｇ・ｈがサクラ属の樹木の一種であった。この

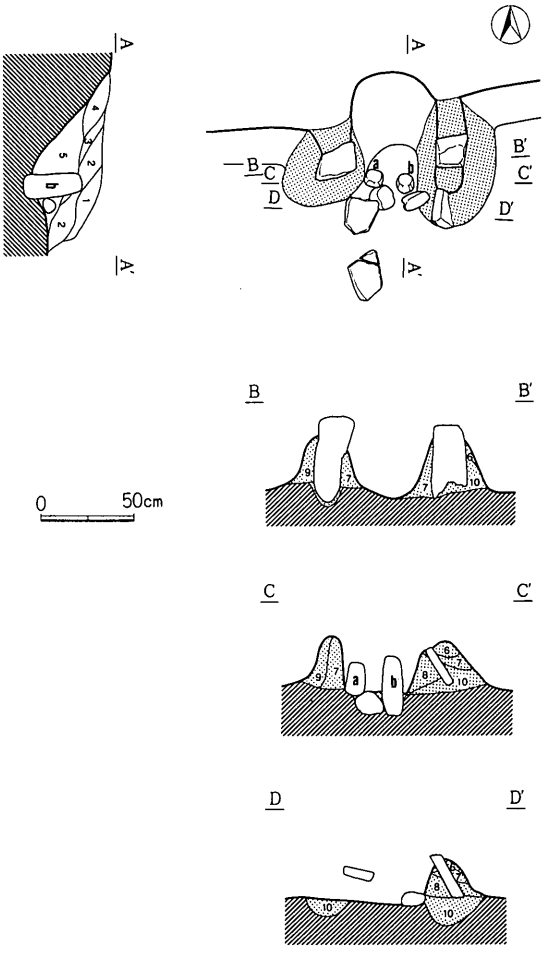


第212図　Ｈ－58号住居址炭化材及び遺物分布図（１：40）

他、出土位置は不明であるが、屋根をふいたと考えられるカヤ（ススキ）の一種、エゴノキ属の一種の樹木が検出されている。

遺物は、カマド東側より一括出土した。それらは住居焼失のため原位置に置き去りにされたものと考えられる。このうち1・5・7の須恵器坏は床面直上より正常位で、2・4・6・8の須恵器坏は床面直上に伏せられた状態で出土している。この他の遺物は、いずれも覆土中からの出土である。

覆土は、3層に分層された。I層は小粒パミスを若干含み小粒スコリアを多く含む黒色土層(7.5YR 2/1)、II層はカーボンを含む褐色焼土層（7.5YR 4/6)、III層は黒色土層(7.5YR 1.7/1)であった。



第213図　H－58号住居址カマド実測図（1：40）

カマド　第213図

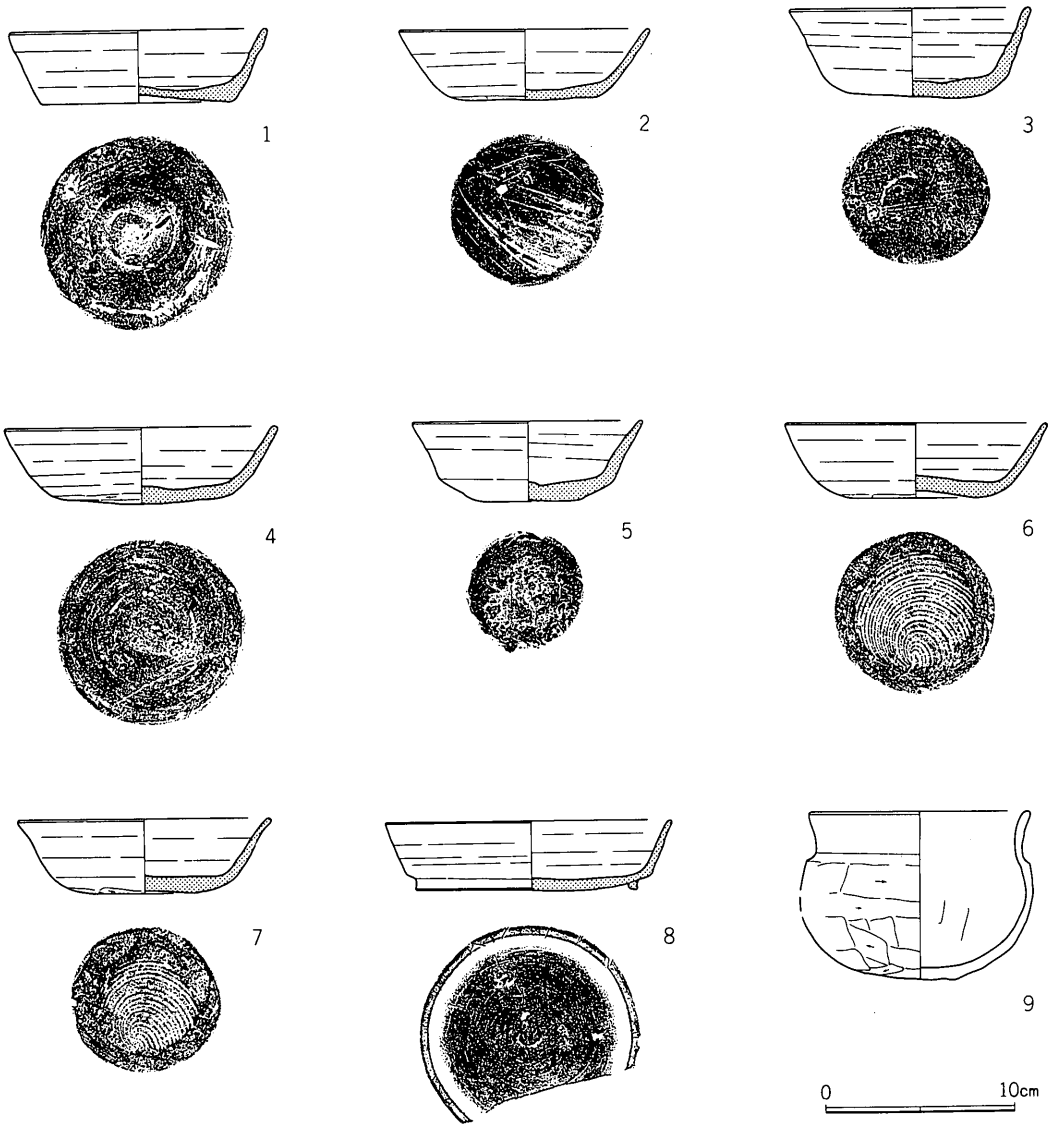
カマドは、住居址の北壁中央にあり、僅かに西袖の一部を破壊されているのみで、その大半は破壊されず残っていた。その袖の芯には面取り軽石が据えられ、黒褐色土層(6層　7.5YR 3/2)、黒色土層(7層　7.5YR 1.7/1)、暗褐色土層(8層　7.5YR 3/2)、明褐色粘土層(9層　7.5YR 5/6)、褐色土層(10層　7.5YR 4/4）が貼られていた。支脚a・bも角柱状に面取りされた軽石である。

本カマド内の土層は、5層に分層された。1層は灰を多く含む灰黄褐色土層（10YR 4/2)、2層はカーボン・灰を若干含む黒色土層（10YR 2/1)、3層は灰を多く含む灰黄褐色土層（10YR 4/2)、4層はカーボン・灰を若干含む黒色土層（10YR 2/1）であった。

遺　物　第214・215図

遺物は、須恵器では坏・高台付坏・甕、土師器では甕が検出されている。

1～7は須恵器坏である。このうち1・3・5はヘラキリによる底部をみせるもの、6・7は回転糸切りの後外周手持ちヘラケズリのなされた底部をみせる須恵器坏である。土器組成全体か



第214図　H－58号住居址出土遺物（1：4）

ら考え、この回転糸切り痕をみせる須恵器坏はきわめて古いものと考えられよう。

8は、底部に回転ヘラケズリ痕をみせる須恵器高台付坏である。

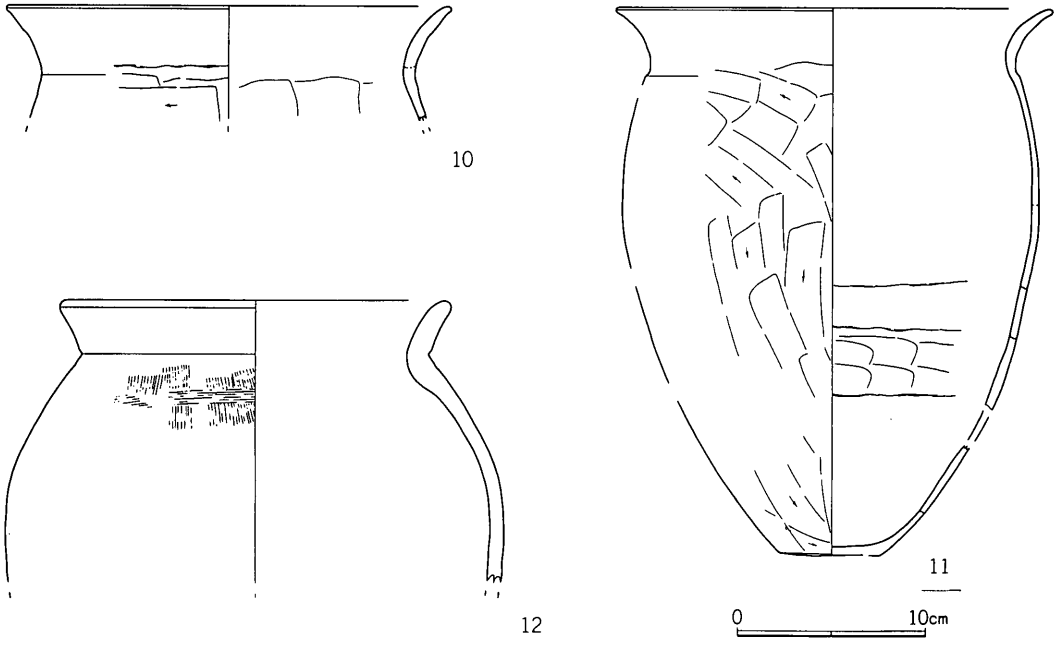
9は、土師器小形球胴甕である。

10・11は、くの字状口縁の土師器甕である。

12は、肉厚な土師器球胴甕である。

時　期

本住居址は、八世紀第II四半期、十二遺跡第II期に位置付けられよう。



第215図　H－58号住居址出土遺物（1：4）

第84表　H－58号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1（完）	坏（須）	13.8 3.8 10.0	体部は直線的に外反し、底部平底の盤状の器形。	外面　体部ロクロヨコナデ。底部回転ヘラキリの後、若干の手持ちヘラケズリ。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み灰色（N 6/0）
2（完）	坏（須）	13.4 3.7 7.8	体部は外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。底部全面手持ちヘラケズリ。切り離し方法不明。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み灰色（10Y6/1）
3（完）	坏（須）	12.9 4.6 7.4	体部は外反し、底部は丸味を帯びた平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。底部回転ヘラキリ、未調整。平行する圧痕あり。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み灰色（10Y5/1）内外面の一部に自然釉付着
4（回）	坏（須）	〈14.5〉 4.0 9.5	体部は外反し、底部は丸味を帯びた平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。底部回転ヘラケズリ。切り離し方法不明。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み灰白色（10Y7/1）
5（完）	坏（須）	12.3 4.2 5.9	体部は外反し、底部は丸味を帯びた平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。底部回転ヘラキリ、未調整。 内面　体部ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	完全な還元炎焼成となっておらずにぶい黄橙色（10YR7/4）胎土は精選されない
6（回）	坏（須）	（13.9） 3.5 6.3	体部は外反し、底部平底。底部から体部への変換点は明瞭な稜をなしていない。	外面　体部ロクロヨコナデ。底部回転糸切りの後、周囲手持ちヘラケズリ。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み灰色（10Y6/1）
7（回）	坏（須）	（13.4） 3.8 5.5	体部は外反し、底部平底。底部から体部への変換点は、明瞭な稜をなしていない。	外面　体部ロクロヨコナデ。底部回転糸切りの後、周囲手持ちヘラケズリ。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み灰色（10Y6/1）。外面に「井」の火襷きあり

第85表　Ｈ－58住居址出土遺物一覧表〈土器〉

8 (完)	坏 (須)	15.2 3.6 11.8	体部は直線的に外反し、底部には高台が貼り付けられる。	外面　体部ロクロヨコナデ。底部回転ヘラケズリ。切り離し方法不明。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み灰色 （10Y5/1）
9 (完)	甕 (土)	11.7 8.8 —	体部はゆるく外反し、胴部は球状を呈し底部は偏平な丸底を呈する。小形な器形。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部～底部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みにぶい橙色 （7.5YR6/3）
10 (回)	甕 (土)	(23.6) — —	口縁部はくの字状に外反する。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みにぶい褐色 （7.5YR6/3）
11 (完)	甕 (土)	(22.7) 28.7 5.3	口縁部はくの字状に外反し、胴部は弓状に膨らみ、底部平底。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みにぶい黄橙色 （10YR7/3）

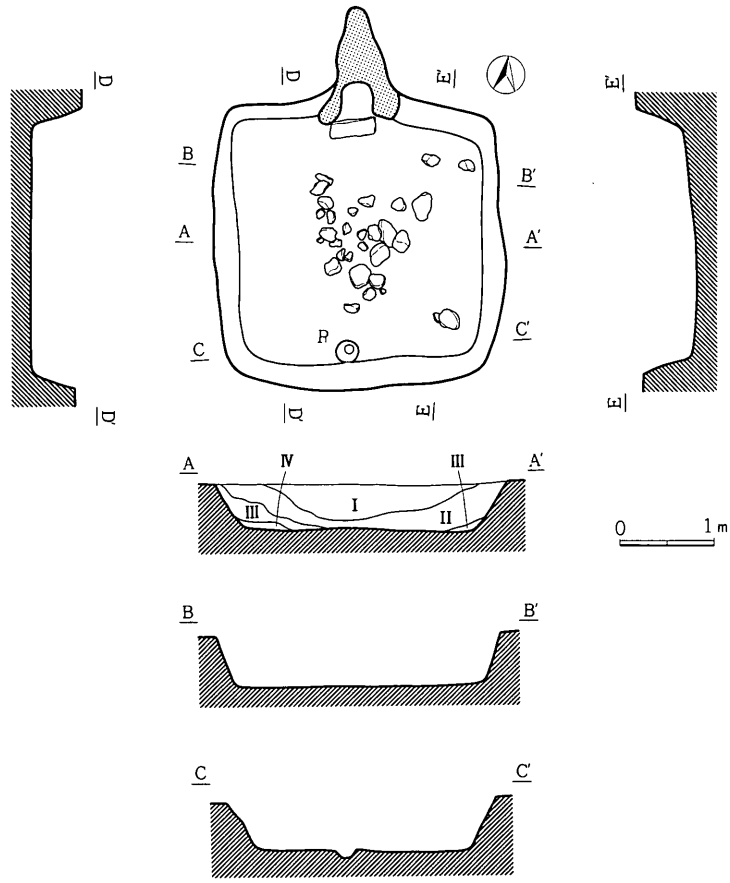
(59)　Ｈ－59号住居址

住居址　第216図

Ｈ－59号住居址は、第II区へ－30グリッドにおいて検出された。

本住居址は、南北3.0m東西3.0mの隅丸方形を呈し、床面積6.5m²を測り、南北軸方向はＮ－15°－Ｗを指す。壁高は50cmを測る。壁溝は認められない。床面は、貼り床でなく全体に軟弱なものとなっている。なお、住居内には安山岩礫が30個程認められた。これらはおそらく住居廃絶後のＩ層もしくはII層堆積時に住居のくぼみに投げ込まれたものと考えられる。

ピットは、南壁際中央にP_1が認められたのみであった。P_1は25×25cm深さ10



第216図　Ｈ－59号住居址実測図（１：80）

cmを測る。

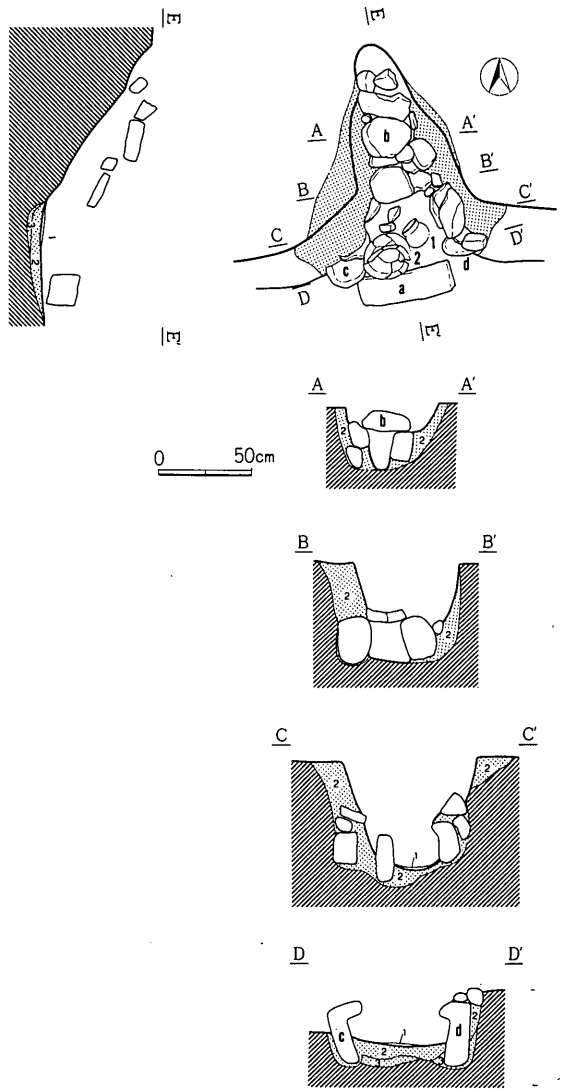
遺物は、1・2の土師器甕がカマド火床面直上より出土している。この他、遺物の出土は認められなかった。

覆土は、4層に分層され、埋土的な様相を呈していた。

I層は小粒スコリアを多く含む黒色土層（10YR 2/1）、II層はローム粒子を多く含む暗褐色土層（10YR 3/3）、III層はローム粒子を余り含まない黒色土層（10YR 1.7/1）、IV層はローム粒子を多く含む暗褐色土層（10YR 3/3）であった。

カマド　第217図

カマドは、住居址の北壁中央にあり、左右両袖と煙道部天井・支脚石等をとどめていた。カマドの左右両袖の芯には面取り軽石と安山岩礫が据えられ、その上に煙道部天井として扁平な面取り軽石と安山岩礫が乗せられ、黒色土（2層　10YR 2/1）・褐色ローム（2層　10YR 4/6）・灰褐色粘土（10YR 4/1）が貼られていた。また、焚口部には『状に面取りされた軽石が左右に配され（c・d）、四角柱に面取りされた安山岩礫（a）がその上に乗せられていたものと考えられる。支脚石には角柱状に面取りのなされた軽石が据えられていた。



第217図　H－59号住居址カマド実測図（1：40）

本カマドの火床面には、焼土を多く含む黒褐色土層（1層　10YR 2/2）の堆積が認められた。また、1・2の土師器甕がカマド火床面直上より出土している。

遺　物　第218図

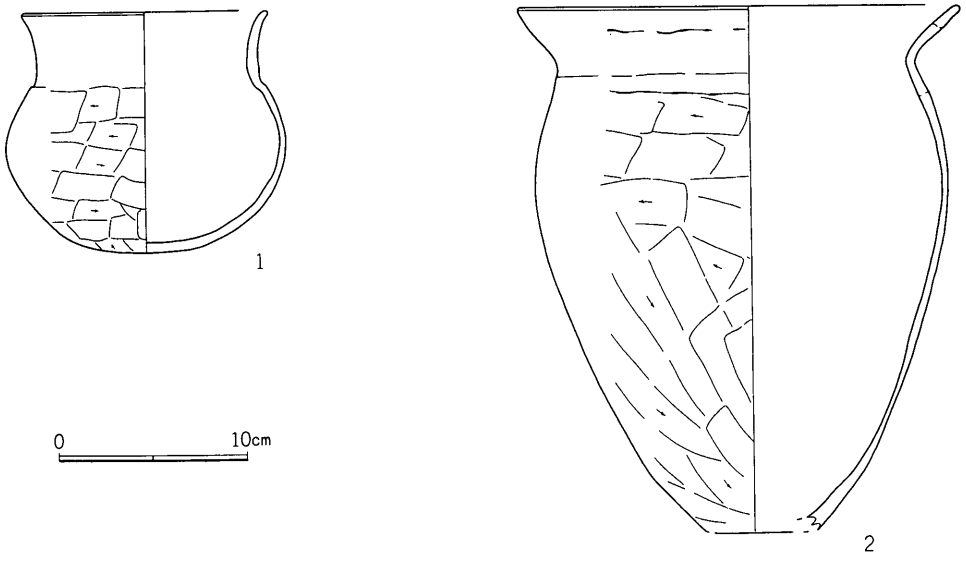
遺物は、図示したカマド火床面直上出土の土師器甕以外には、まったく検出されていない。

1は完形の土師器小形球胴甕である。

2はくの字状口縁の土師器甕で、口縁に最大径をもつものである。

第86表　Ｈ－59号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1（完）	甕（土）	13.0 12.6 —	口縁部は直立気味に外反し、胴～底部は球状を呈する小形な器形。	外面　口縁部ヨコナデ。胴～底部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。 内面には炭化物が付着。	胎土は精選されず砂粒を含みにぶい褐色（7.5YR5/3）
2（完）	甕（土）	23.5 27.5 —	口縁部はくの字状に外反し、胴部上半で膨らんだ後、底部にかけてすぼまる。底部は平底となるものと思われる。最大径は口縁部にある。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を多く含み明赤褐色（5YR5/8）



第218図　Ｈ－59号住居址出土遺物（１：４）

時　期

本住居址は、１・２の土師器甕以外には遺物がまったく検出されていないため時期決定が困難であるが、八世紀後半のものとみて大過あるまい。

(60)　Ｈ－60号住居址

住居址　第219図

Ｈ－60号住居址は、第Ⅱ区へ－30グリッドにおいて検出された。

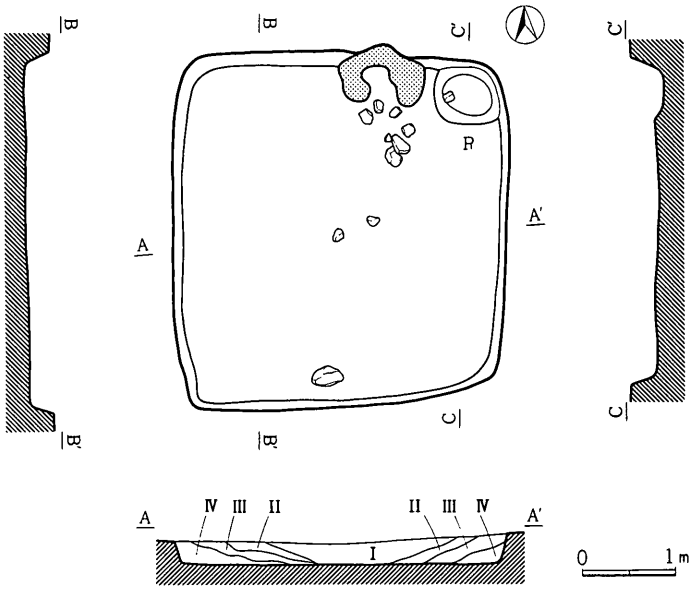
本住居址は、南北3.75m東西3.55mの小形隅丸方形を呈し、床面積11.4m²を測り、南北軸方向はＮ－４°－Ｗを指す。壁高は、20～25cmを測る。壁溝は認められない。床面は全体に硬質な貼り床となっている。

ピットは、カマド東・東北コーナーおいてP_1が認められたのみである。P_1は80×60cm深さ10cm

を測る。

遺物は、1の土師器坏がカマドの火床面直上より出土している。この他遺物は、いずれもカマド中からの出土である。

覆土は、4層に分層され、埋土的な様相を呈していた。Ⅰ層は小粒パミス・小粒スコリア・ローム粒子を若干含む黒色土層（10YR 2/1）、Ⅱ層はローム粒子を多量に含む暗褐色土層（10YR 3/3）、Ⅲ層はローム粒子を僅かに含む黒色土層（10YR 1.7/1）、Ⅳ層はローム粒子を多量に含む暗褐色土層（10YR 3/4）であった。

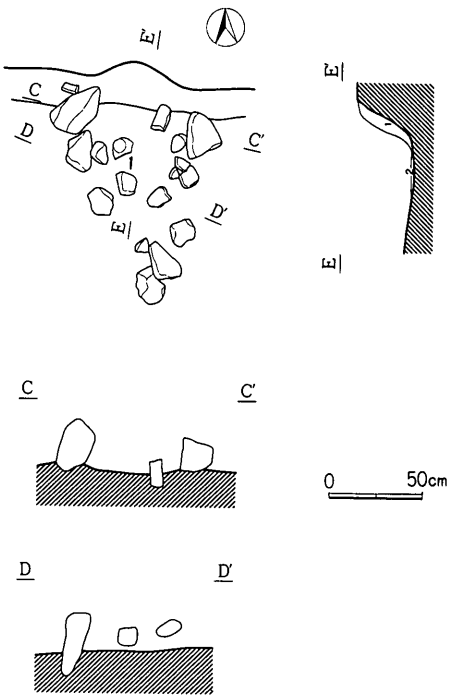


第219図　H－60号住居址実測図（1：80）

カマド　第220図

カマドは、住居址の北壁中央よりやや東よりにあり、左右両袖の芯の一部（面取り軽石・安山岩礫）と支脚石（角柱状面取り軽石）をとどめるが、その他は破壊されている状況にあった。また、カマドの前方の床面上には、その構材である面取り軽石と安山岩礫の一部が散乱している状況にあった。

本カマドの土層は、1層が焼土をよく含む極暗褐色土層(7.5YR 2/3)、2層は褐色焼土層(7.5YR 4/6) であった。

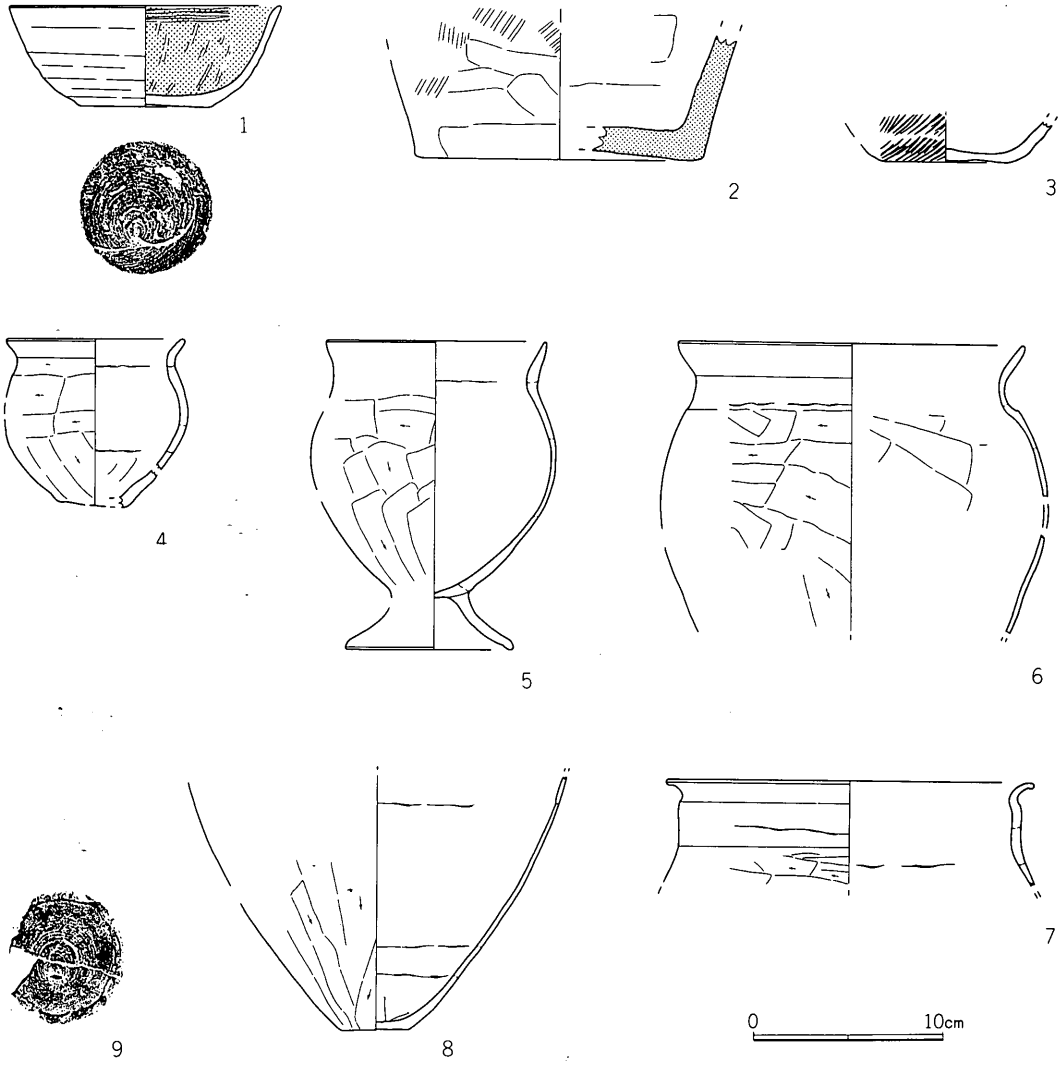


第220図　H－60号住居址カマド実測図（1：40）

遺　物　第221図

遺物は、須恵器では高台付坏・甕、土師器では坏・高台付坏・台付甕・甕が検出されている。

1は、内面に黒色研磨のなされたロクロ土師器坏で、回転糸切り未調整の底部をみせるものである。



第221図　Ｈ－60号住居址出土遺物（１：４）

２は、須恵器甕底部である。

３は、土師器小形甕底部で、外面に条痕状の調整痕の認められるものである。

４は、コの字状口縁の土師器小形甕である。

５は、土師器小形台付甕である。

６・７は、コの字状口縁の土師器小形甕で、胴部上半に最大径をもつものである。

時　期

本住居址は、九世紀末葉、十二遺跡第Ⅶ期に位置付けられよう。

第87表　H－60号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1（回）	坏（土）	〈14.4〉 5.3 6.9	体部は丸味を帯びて外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り、未調整。 内面　黒色研磨。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含みにぶい橙色（5YR7/4）
2（完）	甕（須）	— — 13.9	底部平底。	外面　胴部には叩きがなされる。底部ヘラケズリ。 内面　ヘラナデ。	胎土は精選されず砂粒を多く含み灰色(N 6/0)
3（完）	（土）	— — 6.3	器種不明。 底部平底。	外面　体部には平行する条痕がみられる。 内面　ヨコナデ。	胎土は精選されず砂粒を多量に含み淡黄色（2.5Y8/3）焼成不良
4（完）	小形甕（土）	9.5 9.8 3.3	口縁部はコの字状に外反し、胴部は弓なりに湾曲、底部平底の小形な器形。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は精選されず砂粒を多量に含みにぶい橙色（7.5YR6/4）焼成不良。
5（完）	台付甕（土）	11.7 16.3 8.7	口縁部はゆるく外反し、胴部は球状を呈し、底部には八の字状に開く高台部が貼り付けられる。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 脚部ヨコナデ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は比較的精選されにぶい赤褐色（5YR5/3）
6（完）	甕（土）	18.3 — —	口縁部はコの字状に外反し、胴部上半に最大径をもつ	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は比較的精選されにぶい橙色（5YR6/4）焼成良好。
7（回）	甕（土）	(19.4) — —	口縁部はコの字状に外反するが、ことにその口唇部は強く巻き込むような状態で外反する。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は比較的精選され焼成良好浅黄橙色（7.5YR8/3）
8（完）	甕（土）	— — 3.5	底部平底。	外面　胴・底部ヘラケズリ。 内面　ヘラナデ。	胎土は比較的精選され焼成良好にぶい橙色（7.5YR7/3）

(61)　H－61号住居址

住居址　第222図

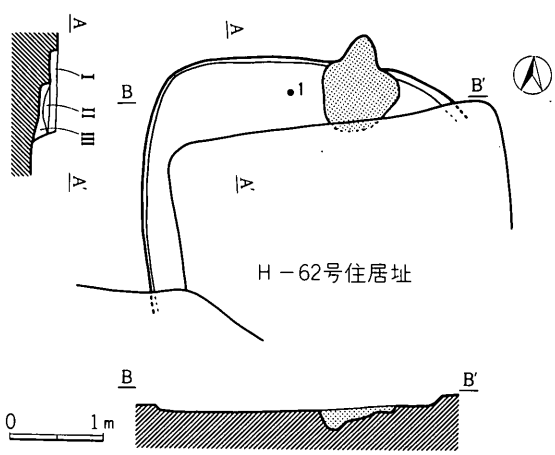
H－61号住居址は、第II区ヒ－30グリッドにおいて検出されたが、H－62号住居址にその大部分を切られており、そのカマド部分を含む一部がかろうじて存在していた。

本住居址は、隅丸方形を呈するものとおもわれ、南北軸方向はN－21°－Wを指す。壁高は10cm程度を測る。壁溝は現存部には認めらない。床面は全体に硬質な貼り床である。

ピットは認められない。

遺物は、1の甕が床面直上より出土している。この他遺物は、いずれもカマドからの出土である。

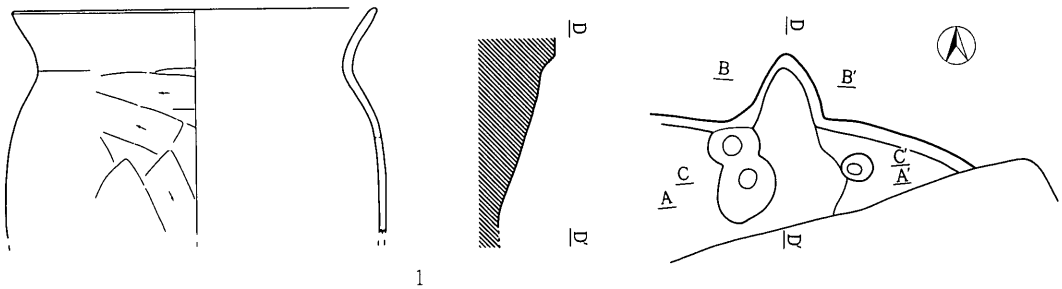
覆土は、I層は黒色土層（10YR 2/1）でローム粒子をよく含み、II層はローム



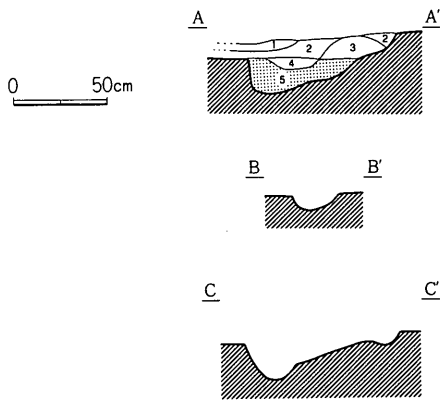
第222図　H－61号住居址実測図（1：80）

第88表　H－61号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1（回）	甕（土）	〈17.2〉 — —	口縁部はくの字状に外反する。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みにぶい橙色（7.5YR7/3）



第223図　H－61号住居址出土遺物（1：4）



第224図　H－61号住居址カマド実測図（1：40）

粒子をよく含む床の構築土である暗褐色土層（10YR 3/3）、Ⅲ層はローム粒子をよく含む床の構築土である黒色土層（10YR 1.7/1）であった。

カマド　第224図

カマドは、住居址の北壁にあり、ほぼ全体を破壊されていた。

本カマド内の土層は、5層に分層された。1層は灰を多量に含み粘土をよく含む褐色土層（7.5YR 4/3）、2層は焼土・灰・カーボンを含まない黒色土層（7.5YR 1.7/1）、3層は焼土をよく含む黒色土層（7.5YR 2/1）、4層は焼土を大量に含む極暗褐色土層（7.5YR 2/3）、5層はカマドの火床部を構成する黒色土層（7.5YR 2/1）であった。

遺　物　第223図

遺物は、図示した1の土師器甕以外に、土師器甕の破片数片が検出されているのみである。

1は、口縁部がゆるくコの字状に外反する土師器甕である。

時　期

本住居址は、遺物からの時期決定が非常に困難である。本住居址は、H－62号住居址以前のものであることは間違いない。おおよそは八世紀代の住居とみることができる。

(62)　H－62号住居址

住居址　第225図

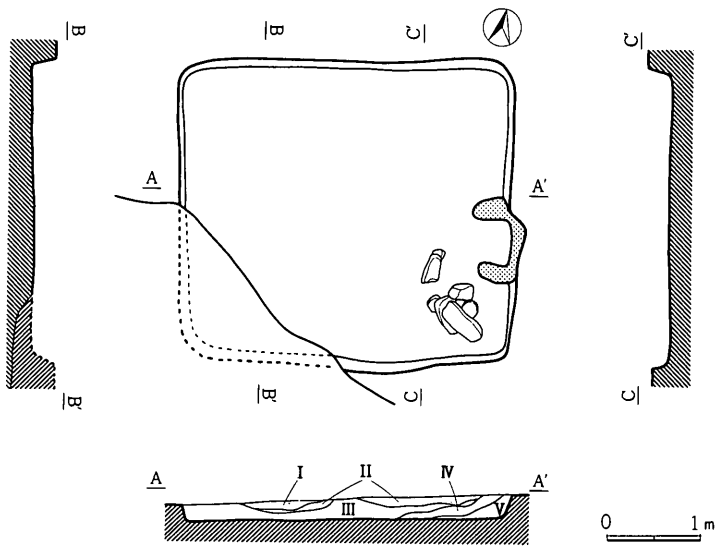
H－62号住居址は、第II区ヒ－30グリッドにおいて検出された。

本住居址は、H－61号住居址の大部分を切って存在する。また、本住居址の西南コーナーは溝によって破壊されている。

本住居址は、南北3.25m東西3.5mの隅丸方形を呈し、推定床面積10m²を測り、南北軸方向はN－21°－Wを指す。壁高は、15～20cmを測る。壁溝は認められない。床面は全体に硬質な貼り床である。

ピットは認められない。

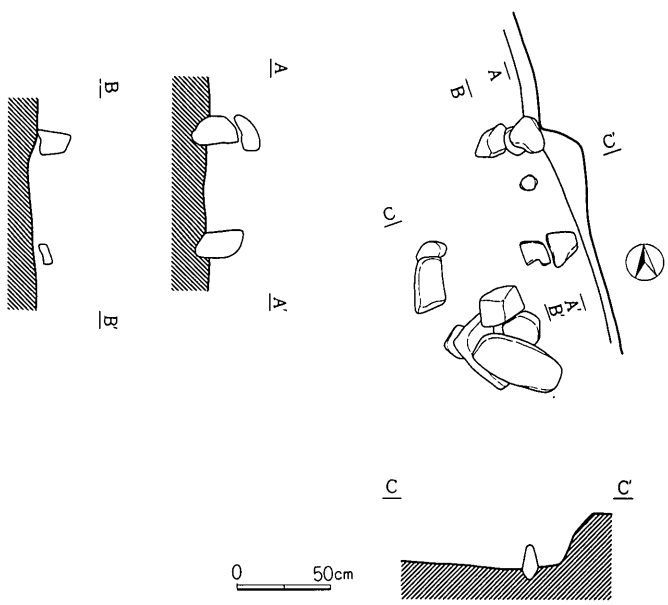
覆土は5層に分層され、埋土的な様相を呈していた。I層は黒褐色土層（10YR 2/2）でローム粒子を若干含み、II層は黒褐色土層（10YR 3/2）でローム粒子を多く含み、III層は黒色土層（10YR 2/1）で小粒スコリアをよく含み、IV層は黒褐色土層（10YR 3/2）でローム粒子を多く含み、V層は黒褐色土層（10YR 2/2）でローム粒子を若干含む層であった。



第225図　H－62号住居址実測図（1：80）

カマド　第226図

カマドは、住居址の東壁中央よりやや南よりにあり、大部分を破壊されていた。ただし、A・Bの断面にはその袖石である面取り軽石と安山岩礫が、Cの断



第226図　H－62号住居址カマド実測図（1：40）

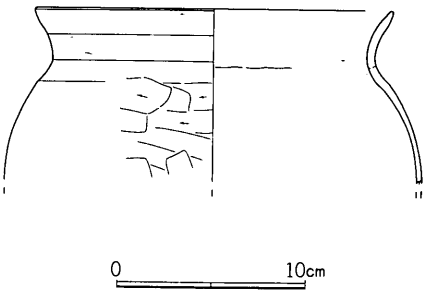
第89表　Ｈ－62号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1（回）	甕（土）	〈20.0〉 — —	口縁部は僅かコの字状に外反する。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は比較的精選され焼成良好橙色(5YR6/6)

面には面取り軽石の支脚石が残っていた。これ以外は、面取り軽石と面取り安山岩礫がカマドの南脇に集積されていた。

遺　物　第227図

遺物の出土はきわめて少ない。須恵器では坏・甕の破片数片、土師器では甕が検出されているいるのみにとどまっている。このうち図示し得たのは１のみである。



第227図　Ｈ－62号住居址出土遺物（１：４）

１は、口縁が僅かコの字状に外反する土師器球胴甕である。

時　期

本住居址は、遺物からの時期決定が非常に困難である。本住居址が、Ｈ－61号住居址を切り、カマドが東にあることを考え、九世紀前葉、十二遺跡第Ⅴ期に位置付けておこう。

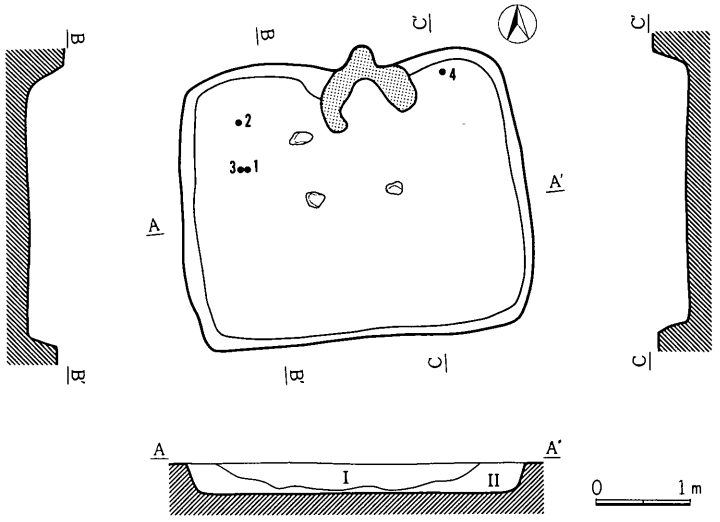
(63)　Ｈ－63号住居址

住居址　第228図

Ｈ－47号住居址は、第Ⅱ区へ－31グリッドにおいて検出された。

本住居址は、Ｆ－60号掘立柱建物址を切って存在している。

本住居址は、南北3.0m東西3.6mの隅丸方形を呈し、床面積8.9m²を測り、南北軸方向はＮ－10°－Ｗを指す。壁高は、



第228図　Ｈ－63号住居址実測図（１：80）

30～35cmを測る。壁溝は認められない。床面は全体に硬質な貼り床である。

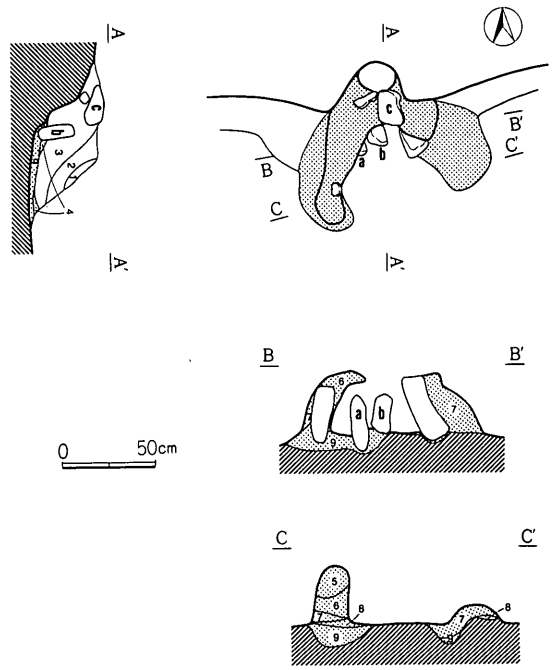
ピットは認められない。

遺物は、1・3が床面より30cm上で出土している。また、2・4がが床面直上より出土している。この他の遺物は、いずれも覆土中からの出土である。

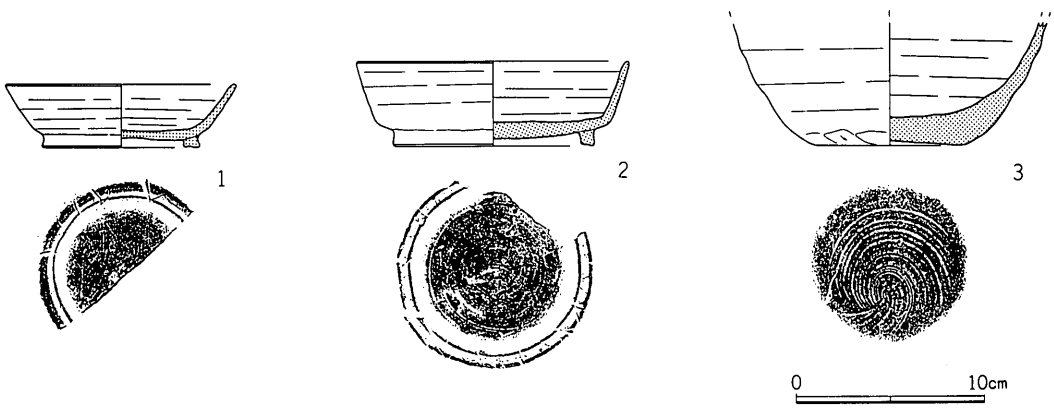
覆土は2層に分層され、埋土的な様相を呈していた。I層は黒褐色土層(10YR 2/3)でロームブロックを多量に含み、II層は黒色土層（10YR 2/1）でローム粒子・小粒スコリアを多く含む層であった。

カマド　第229図

カマドは、住居址の北壁中央にあり、



第229図　H－63号住居址カマド実測図（I：40）



第230図　H－63号住居址出土遺物（I：4）

第90表　H－63号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1 (回)	坏 (須)	(12.3) 3.3 (8.4)	体部は比較的直線的に外反し、底部には高台が貼り付けられる。	外面　体部ロクロヨコナデ。 底部ヨコナデ。切り離し方法不明。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	完全な環元炎焼成となっておらず明赤褐色（2.5YR5/6）
2 (回)	坏 (須)	(14.4) 4.5 10.7	体部は直線的に外反し、底部には高台が貼り付けられる。	外面　体部ロクロヨコナデ。 底部回転ヘラケズリ。切り離し方法不明。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は白色の砂粒を特徴的に含み灰白色（10Y7/1）
3 (回)	(須)	— — 17.7	器種不明。 底部平底。	外面　胴部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切りの後、周囲手持ちヘラケズリ。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み灰白色（10Y8/1）

左右両袖と煙道部天井・面取り軽石の支脚（a・b）をとどめている。その袖の芯には、面取り軽石が埋め込まれていた。また、その構材にはにぶい黄褐色ローム（5層　10YR 5/4）・黒色土（6層　10YR 2/1）・にぶい黄橙色粘土（7層　10YR 6/3）・黒色土（8層　10YR 1.7/1）・褐色土（9層　10YR 4/6）が用いられていた。

本カマドの土層は、4層に分層された。1層は暗褐色土層（10YR 3/4）、2層は粘土を含む黒褐色土（10YR 2/3）、3層は焼土・カーボンをわずかに含む暗赤褐色土層（5 YR 3/4）、4層は灰を多量に含みカーボンを含む灰褐色土層（5 YR 5/2）であった。

遺　物　第230図

遺物の出土量は、総じて少ないが、須恵器では坏・高台付坏・甕、土師器では甕が検出されている。

1・2は、須恵器高台付坏で、回転ヘラケズリの底部をみせており切り離し方法は不明。

3は須恵器であるが、器種は不明である。回転糸切りの底部をみせている。

時　期

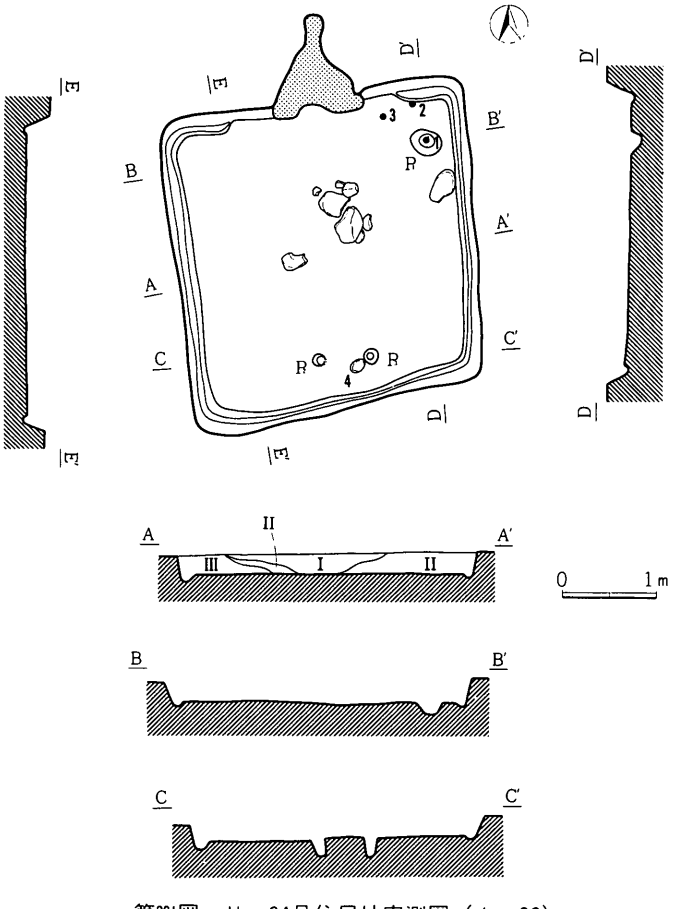
本住居址は、八世紀第Ⅳ四半期～九世紀初頭、十二遺跡第Ⅳ期に位置付けられよう。

(64)　H－64号住居址

住居址　第231図

H－64号住居址は、第Ⅱ区ハ－30グリッドにおいて検出された。

本住居址は、南北3.3m東西3.2mの隅丸方形を呈し、床面積8.3m²を測り、南北軸方向はN－12°－Wを指す。壁高は、20～30cmを測る。壁溝はカマドの両脇を除いてほぼ住居址の全周に認められ、幅10～15cm深さ5cm程度を測る。床面



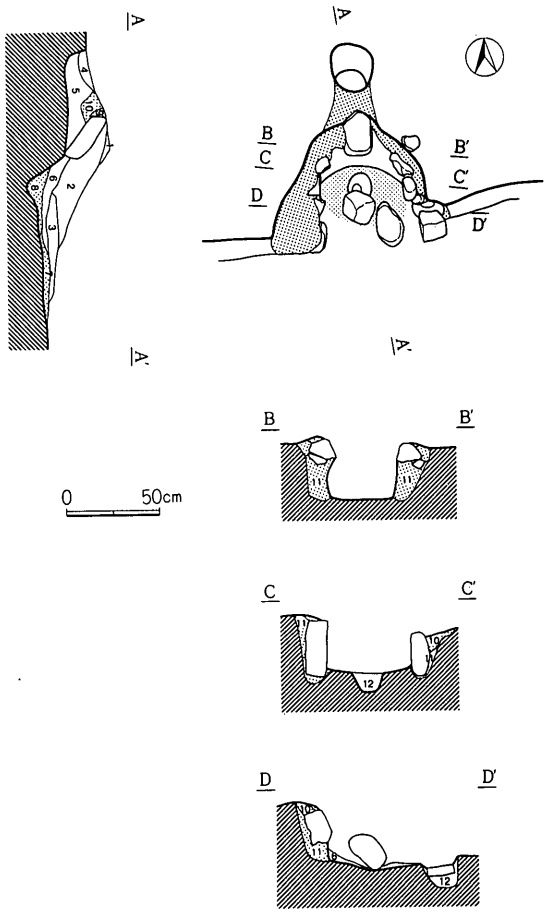
第231図　H－64号住居址実測図（1：80）

は、全体に硬質な貼り床となっている。

ピットは、東北コーナーからP_1が、南壁際中央にP2・P3が対で認められた。P_1は35×25cm深さ10cm、P_2は10×10cm深さ15cm、P_3は15×15cm深さ20cmを測る。

遺物は、2・3の土師器甕がカマド東脇の床面直上から出土している。また、4がP_3に接した床面直上から出土している。この他はいずれも覆土中からの出土である。

覆土は、3層に分層され .埋土的な様相を呈していた。I層はロームブロックをよく含む黒色土層（10YR 1.7/1）、II層はロームブロックを多量に含む黒色土層（10YR 2/1）、III層はローム粒子を若干含む黒色土層（10YR 1.7/1）であった。



第232図　H－64号住居址カマド実測図（1：40）

第91表　H－64号住居址出土遺物一覧表〈石器〉

挿図番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
4	磨石	輝石安山岩	14.8	11.3	6.7	1,780	

カマド　第232図

カマドは、住居址の北壁中央にあり、左右両袖は破壊され、その構材である面取り軽石と安山岩礫が住居内に認められた。カマドの残された基部側をみると面取り軽石と安山岩礫が埋められ、黒褐色土（10層　10YR 3/2）、褐色土（11層　10YR 4/6）で固められていた。また、その火床部には黒褐色土（7層　5 YR 2/1）・褐色土（8層　10YR 4/6）が貼られていた。

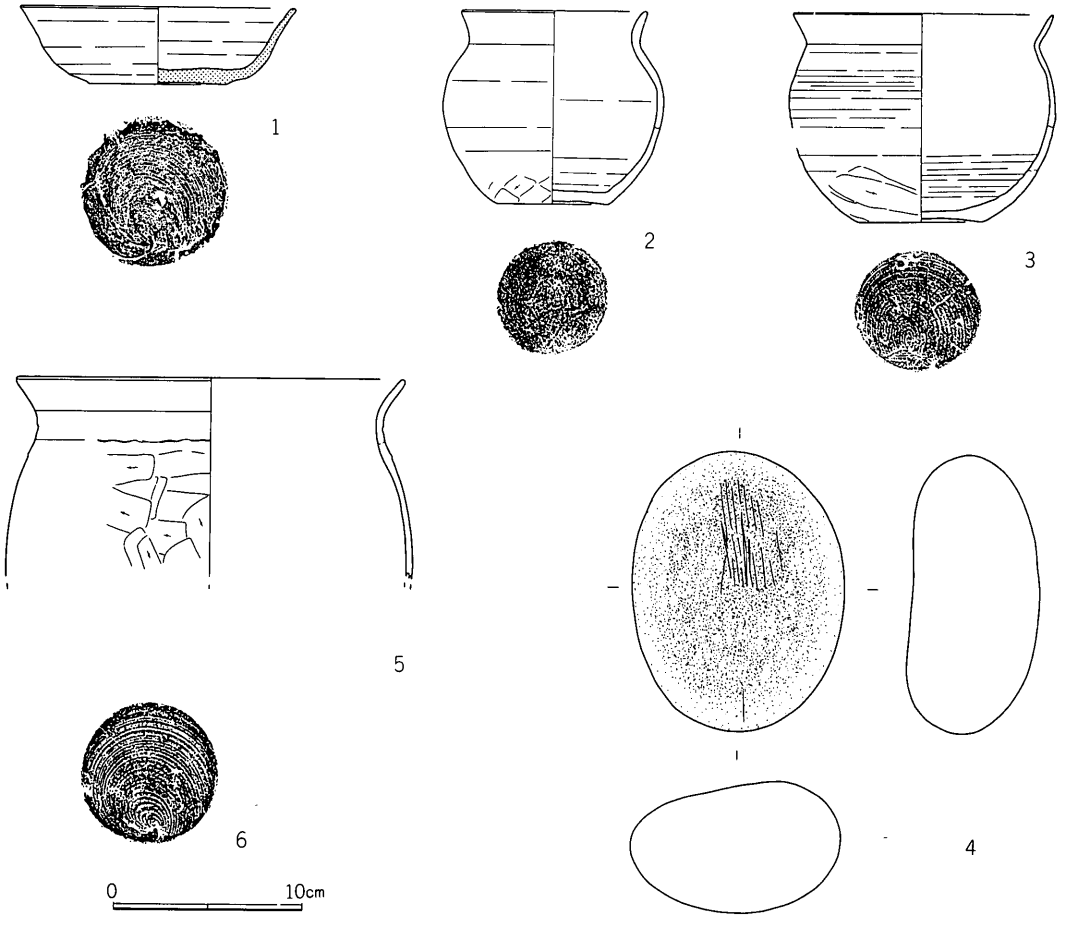
本カマド内の土層は、6層に分層された。1層は粘土を含むにぶい黄褐色土層（10YR 5/4）、2層は焼土を僅かに含む黒褐色土層（10YR 2/2）、3層は灰を多量に含みカーボンを若干含むにぶい褐色土層（7.5YR 5/3）、4層は灰褐色土層（7.5YR 4/3）、5層は褐色土層（10YR 4/6）、6層はカーボン・焼土・灰を含む暗赤褐色土層（5 YR 3/4）であった。

遺　物　第233図

遺物の検出量は少ないが、須恵器の器種には坏・甕が、土師器には甕が認められた。図示した

第92表　Ｈ－64号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1 (完)	坏 (須)	14.7 4.1 7.3	体部は外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り、未調整。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み灰白色 (10Y 8/1)
2 (完)	甕 (土)	9.9 10.2 5.9	口縁部はゆるく外反し、球胴を呈し、底部平底の小形な器形。肉薄。	外面　口縁～胴部ロクロヨコナデ。 胴部最下位ヘラケズリ。 底部回転糸切り、未調整。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は精選されず砂粒を多く含みにぶい褐色(7.5YR 5/4)焼成不良
3 (完)	甕 (土)	13.8 11.0 6.5	口縁部はくの字状に外反し、胴部球状。底部平底の小形な器形。肉薄。	外面　口縁～胴部ロクロヨコナデ。 胴部下位ヘラケズリ。 底部回転糸切り、未調整。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含みにぶい橙色 (7.5YR 5/4)
5 (回)	甕 (土)	〈20.6〉 — —	口縁部は僅かコの字状に外反する。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みにぶい橙色 (10YR 6/4)



第233図　Ｈ－64号住居址出土遺物（1：4）

遺物が主だったものである。

1は須恵器坏で、回転糸切り未調整の底部をみせるものである。

2・3は、ロクロ土師器小形甕で、回転糸切り未調整の底部をみせるものである。

5は、くの字状口縁の土師器甕である。

4は、器体全体に摩滅痕を有する磨石である。

時　期

本住居址は、九世紀前葉、十二遺跡第Ⅴ期に位置付けられよう。

(65)　H－65号住居址

住居址　第234図

H－65号住居址は、第II区ノ－30グリッドにおいて検出された。

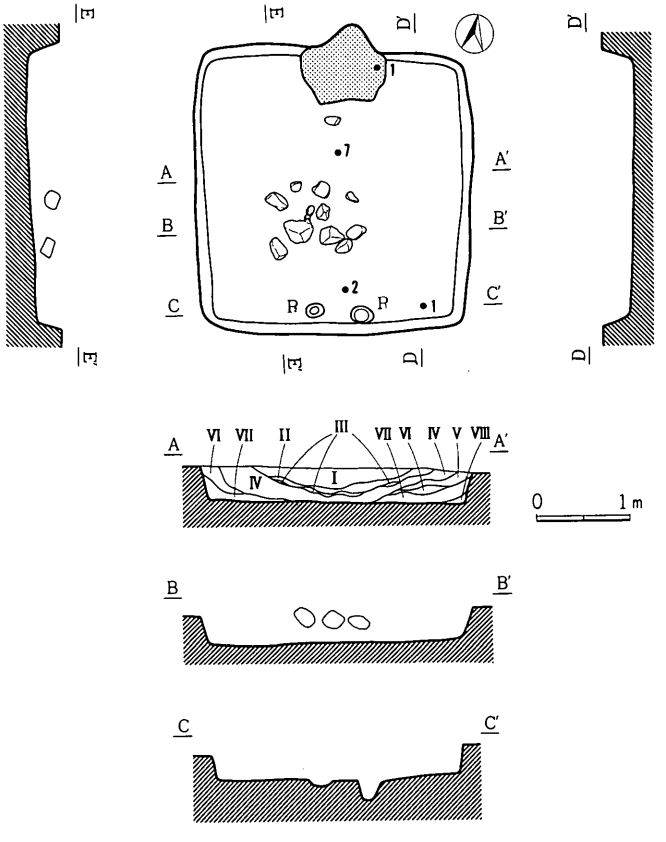
本住居址は、南北3.1m東西2.9mの隅丸方形を呈し、床面積7.4m²を測り、南北軸方向はN－13°－Wを指す。壁高は、30～35cmを測る。壁溝は認められない。床面は全体に硬質な貼り床となっている。

ピットは、P_1・P_2の二個のピットが南壁際中央に対で認められた。P_1は25×15cm深さは20cm、P_2は20×15cm深さは5cmを測る。

遺物は、1の須恵器蓋がカマドの東袖に貼り付いて検出されている。この他はいずれも覆土中からの出土である。

覆土は、8層に分層された。

I層は黒色土層（7.5YR 2/1）、II層は褐色焼土層（7.5YR 4/6）、III層は黒色カーボン層(7.5YR 1.7/1)、IV層はローム粒子をよく含む黒褐



第234図　H－65号住居址実測図（1：80）

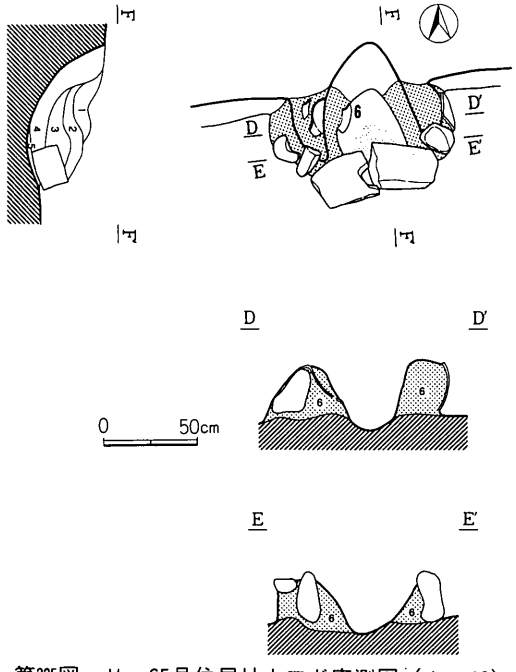
色土層(7.5YR 3/1)、Ⅴ層は黒色土層(5 YR 1.7/1)、Ⅵ層はローム粒子を大量に含む黒褐色土層(7.5YR 3/2)、Ⅶ層は黒色土層(5 YR 1.7/1)、Ⅷ層はローム粒子を若干含む黒褐色土層(7.5YR 3/2)であった。

このセクションをみると、Ⅱ層が焼土層、Ⅲ層がカーボン層であることが注意される。これらはおそらく、Ⅳ層堆積後の住居のくぼみにおいて火が焚かれたことを示すものと考えられる。また、住居中央に認められる礫数点はその時点でくぼみに投げ込まれたものと考えられた。

カマド　第235図

カマドは、住居址の北壁中央にあり、左右両袖をとどめていた。その袖の芯には面取り軽石が据えられ、粘土の混じる黒色土(6層10YR 2/1)が貼られていた。6の土師器甕はその西袖中に埋め込まれていたものである。また、面取り軽石の天井石が火床部に崩落していた。

本カマド内の土層は、5層に分層された。



第235図　H－65号住居址カマド実測図(1：40)

第93表　H－65号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1(完)	蓋(須)	4.4 1.7 23.8	つまみ部は偏平な擬宝珠形を呈し体部は偏平、径が非常に大きな器形。	外面　体部ロクロヨコナデの後、中央部回転ヘラケズリ。 内面　ロクロヨコナデ。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み灰色(10Y 6/1)
2(完)	坏(須)	14.9 4.3 7.2	体部は外反し、底部平底。	外面　ロクロヨコナデ。底部全面手持ちヘラケズリ。切り離し方法不明。 内面　ロクロヨコナデ。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み灰白色(10Y 8/1)
3(回)	坏(土)	(11.2) 3.8 —	体部は丸味を帯びて湾曲し、底部は偏平な丸底。	外面　口唇部ヨコナデ。体部～底部ヘラケズリ。 内面　ヨコナデ。	胎土は比較的精選されにぶい黄橙色(10YR7/4)
4(回)	坏(土)	〈12.2〉 — —	体部は丸味を帯びて湾曲する。	外面　口唇部ヨコナデ。体部～底部ヘラケズリ。 内面　ヘラミガキ	胎土は砂粒を含む浅黄橙色(10YR8/3)
5(回)	鉢(土)	〈15.8〉 8.6 5.5	体部は外反し、底部平底。	外面　ヘラミガキ。 内面　ヘラミガキ。黒色処理。	胎土は砂粒を多く含み灰白色(5Y 7/2)
6(完)	甕(土)	24.0 — —	口縁部はくの字状に外反する。その変換点はシャープである。最大径は口縁部にある。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みにぶい橙色(7.5YR6/4)
7(回)	甕(土)	〈25.4〉 — —	口縁部はゆるく外反する。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヨコヘラミガキ。 内面　口縁部ヨコヘラミガキ。胴部ヨコヘラミガキ。	胎土は砂粒を含みにぶい橙色を呈する。(7.5YR7/4)

1層は粘土を多量に含む灰褐色土層（7.5YR 4/2）、2層は黒色土層（7.5YR 1.7/1）、3層は粘土を多量に含み灰を含む灰褐色土層（7.5YR 4/2）、4層は焼土・カーボンを含む黒色土層（7.5YR 2/1）、5層は褐色焼土層（7.5YR 4/6）であった。

遺　物　第236図

遺物は、須恵器では蓋・坏・甕、土師器では坏・甕が出土している。

1は須恵器蓋で、比較的法量の大きなものである。

2は、手持ちヘラケズリのなされた底部をみせる須恵器坏で、その切り離し手法は不明。

3・4は、体部が湾曲する土師器坏である。

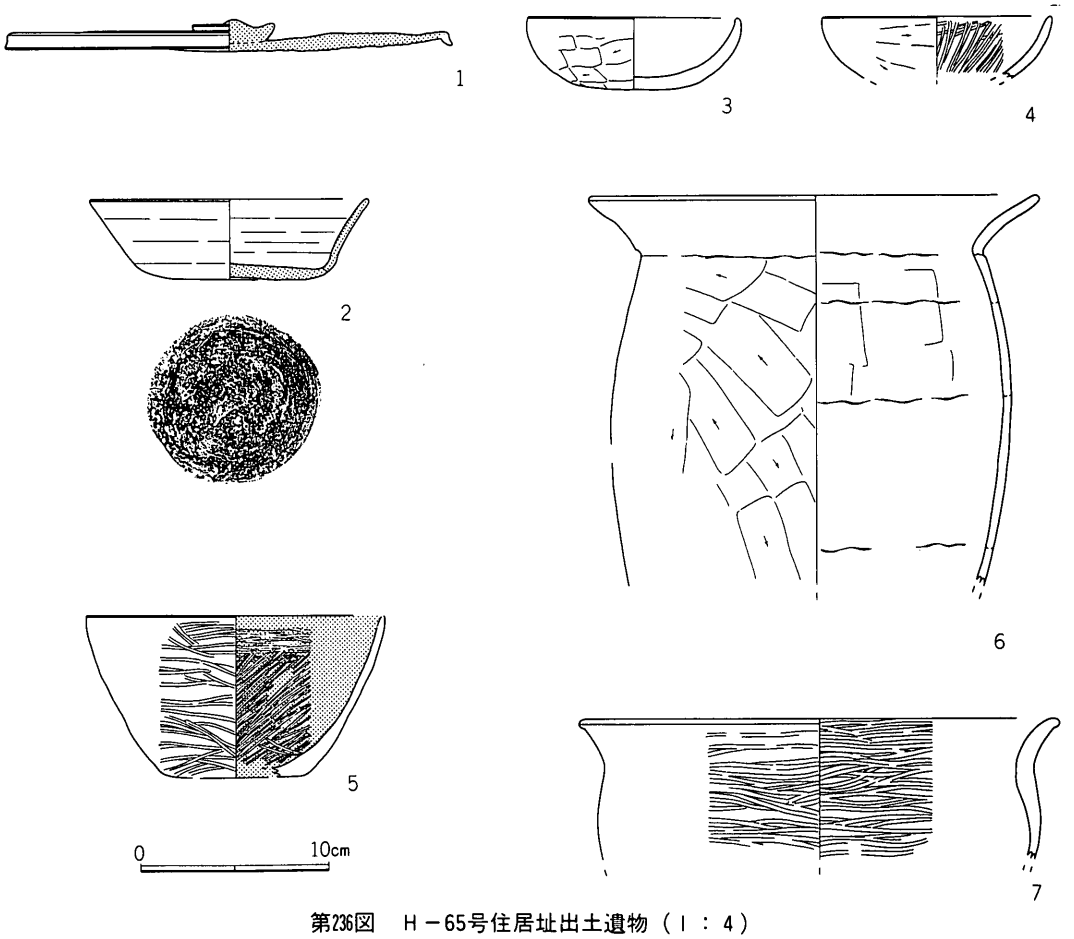
5は内面黒色研磨のなされた土師器鉢である。

6は、くの字状口縁の土師器甕で、その最大径が口縁部にあるものである。

7は、内外面にヘラミガキのなされた土師器甕で、頸部のくびれが強くないものである。

時　期

本住居址は、八世紀第Ⅰ四半期、十二遺跡第Ⅰ期に位置付けられよう。



第236図　H－65号住居址出土遺物（1：4）

(66)　H－66号住居址

住居址　第237図

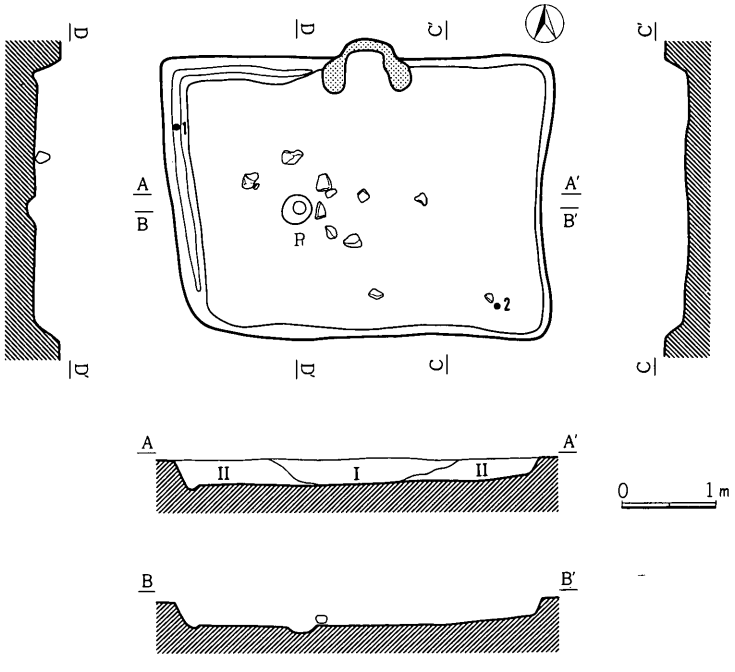
H－66号住居址は、第II区ノ－30グリッドにおいて検出された。

本住居址は、南北3.0m東西4.1mの隅丸長方形を呈し、床面積9.8m²を測り、南北軸方向はN－8°－Wを指す。壁高は、20～25cmを測る。壁溝は、カマドの西脇より西壁にかけて、幅20cm深さ5cm程度のものが認められた。床面は、貼り床ではないが、全体にかなり硬質な床となっている。

本住居址に付随するピットは、35cm×30cm深さ10cmを測るP_1が認められたのみであった。

遺物は、2が床面直上より検出されている以外は、良好な出土状態を示すものがなく、いずれも覆土中からの出土である。

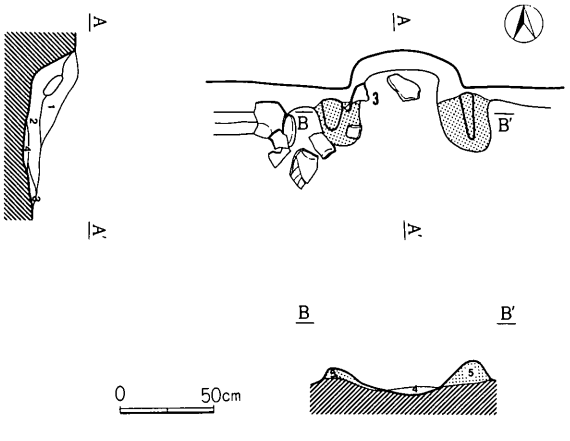
覆土は、2層に分層された。I層は細粒パミスを多く含む黒色土層（10YR 2/1）、II層は細粒パミスを若干含む黒色土層（10YR 1.7/1）であった。



第237図　H－66号住居址実測図（1：80）

カマド　第238図

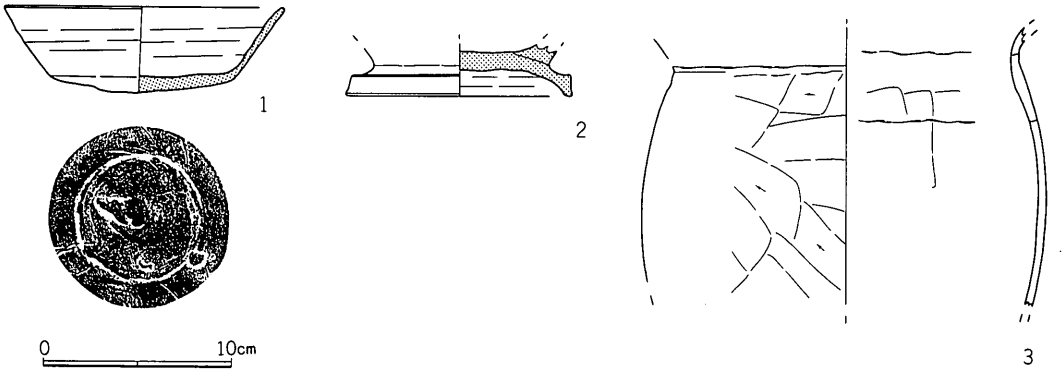
カマドは、住居址の北壁中央にあり、左右両袖の一部をとどめるのみで、その他の部分は破壊されていた。その構材の一部である軽石・安山岩はP_1の付近に散乱していた。また、その袖の構材にはにぶ



第238図　H－66号住居址カマド実測図（1：40）

第94表　H－66号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1（完）	坏（須）	14.9 4.6 9.5	体部は外反し、底部は丸味を帯びた平底。器形のゆがみが激しい。	外面　ロクロヨコナデ。底部回転ヘラキリ。未調整 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み灰色（10Y 6/1）
2（完）	（須）	— — 11.8	長頸瓶の高台部か。	外面　ロクロヨコナデ。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み灰色（10Y 6/1）
3（完）	甕（土）	— — —	口縁部はくの字状に外反する。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みにぶい褐色（7.5YR 5/3）



第239図　H－66号住居址出土遺物（1：4）

い褐色土（5層　7.5YR 5/4）が用いられていた。

本カマド内の土層は、4層に分層された。1層は若干の灰を含む黒褐色土層(7.5YR 4/2)、2層は多量の灰を含み焼土を若干含むにぶい赤褐色土層（5 YR 4/3)、3層はカーボンを若干含む暗褐色土層（10YR 3/4)、4層は暗赤褐色焼土層（5 YR 3/6）であった。

遺　物　第239図

出土遺物は、須恵器では坏・長頸瓶・甕、土師器では坏・甕が出土している。

1は回転ヘラキリのなされた底部をみせる須恵器坏である。

2は、須恵器長頸瓶の高台部である。

3は、くの字状口縁の土師器甕である。

時　期

本住居址は、八世紀第Ⅰ四半期、十二遺跡第Ⅰ期に位置付けられよう。

(67)　H－67号住居址

住居址　第240図

H－67号住居址は、第II区ネ－30グリッドにおいて検出された。

本住居址は、H－70号住居址の大部分を切って存在している。

本住居址は、南北4.0m東西3.9mの隅丸方形を呈し、床面積13.1m²を測り、南北軸方向はN－8°－Wを指す。壁高は、30～35cmを測る。壁溝は認められなかった。床面は全体にかなり硬質な貼り床となっている。なお、本住居址中には軽石・安山岩礫が50個以上も認められた。これらはおそらく、埋没途中の本住居のくぼみに一括して廃棄されたものと考えられる。7の砥石・8の石鉢もまたこれと同様に本住居のくぼみに一括して廃棄されたものと考えられる。

ピットは認められなかった。

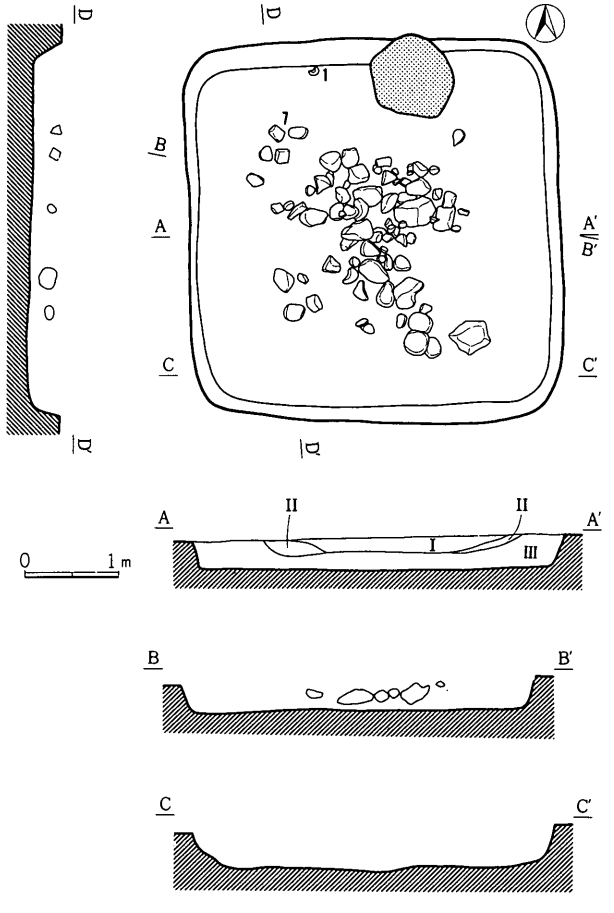
遺物は、1の須恵器坏がカマド西脇の床面直上から出土している。この他の遺物はいずれも覆土中からの出土である。

覆土は、3層に分層された。I層は極大パミスを若干含み細粒パミスを多量に含む黒褐色土層（10YR 2/3）、II層はローム粒子を多量に含む暗褐色土層（10YR 3/4）、III層は小粒スコリア・細粒パミスをよく含む黒褐色土層（10YR 2/3）であった。

カマド　第241図

カマドは、住居址の北壁中央よりやや東よりにあり、左右両袖をとどめていた。その左右両袖の芯には面取り軽石と安山岩礫が用いられ、黒褐色土（5・6層　10YR 2/3）が貼られていた。

本カマド内の土層は、4層に分層された。1層は焼土・粘土を僅かに含む極暗赤褐色



第240図　H－67号住居址実測図（1：80）

土層(5 YR 2/4)、2層は赤褐色焼土層(5 YR 4/6)、3層は褐色土層(10YR 4/6)、4層は焼土・灰を若干含む黒褐色土層(10YR 3/1)であった。

遺　物　第242図

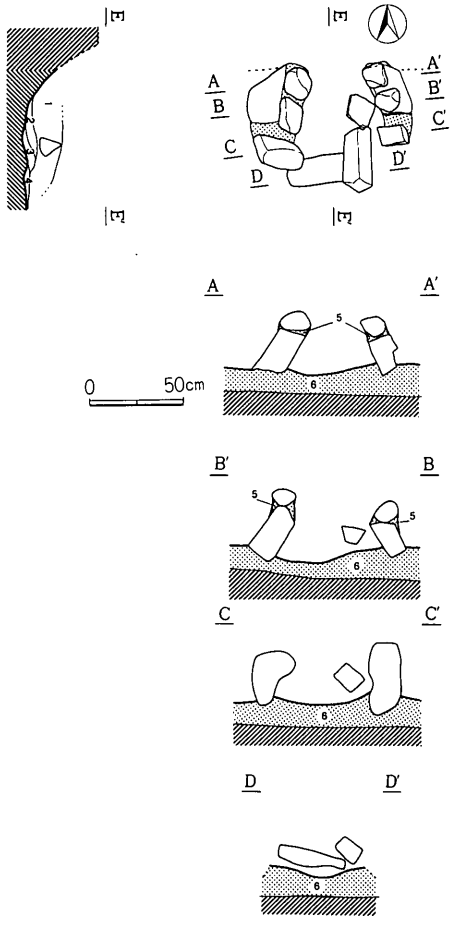
遺物の出土量は少なく、図示したもの以外には、須恵器では坏・甕の破片、土師器では坏・甕の破片が出土しているにすぎない。

1～4は須恵器坏で、このうち1・4は回転ヘラキリによる底部をみせるが、2・3の切り離し手法は不明。

5は、内面体部に放射状暗文・見込部にラセン暗文のみえる畿内系暗文土師器坏である。

6は、くの字状口縁の土師器甕である。

7は、大形の砥石で、二面が研砥に供された



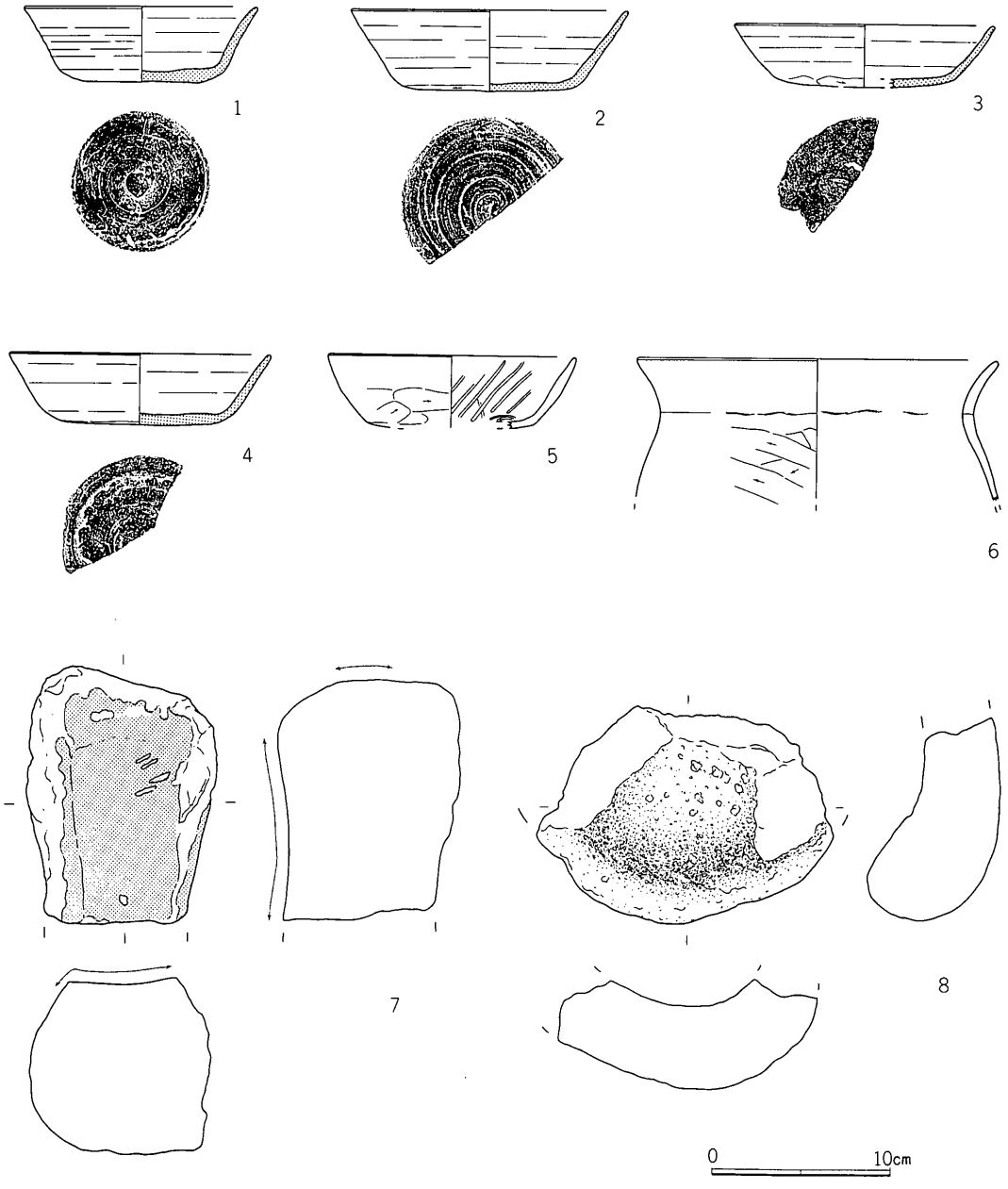
第241図　H－67号住居址カマド実測図(1：40)

第95表　H－67号住居址出土遺物一覧表〈石器〉

挿図番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
7	砥石	砂岩	(14.3)	10.5	10.2	(2,080)	
8	石鉢	輝石安山岩	(11.5)	(16.5)	7.5	(660)	

第96表　H－67号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1(完)	坏(須)	13.1 4.2 6.4	体部は外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。 底部回転ヘラキリ、未調整。 内面　ロクロヨコナデ。(ロクロ右回転)	完全な還元焼成となっていない。胎土は精選されず淡黄色(2.5Y8/3)
2(回)	坏(須)	〈15.7〉 4.5 8.0	体部は外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。 底部回転ヘラケズリ。切り離し方法不明。 内面　ロクロヨコナデ。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み灰色(10Y 6/1)
3(回)	坏(須)	〈14.6〉 — 〈7.1〉	体部は外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。 底部手持ちヘラケズリ。切り離し方法不明。 内面　ロクロヨコナデ。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み灰白色(10Y 7/1)
4(回)	坏(須)	〈14.7〉 3.9 (8.0)	体部は外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。 底部回転ヘラキリの後、回転ヘラケズリ。 内面　ロクロヨコナデ。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み灰白色(7.5Y 7/1)
5(回)	坏(土)	〈13.9〉 4.1 〈9.4〉	体部は外反し、底部平底。	外面　口縁部ヨコナデ。体部～底部ヘラケズリ。 内面　ヨコナデ。体部に放射状暗文、見込み部にラセン暗文が施こされる。	胎土は赤褐色の粒子を特徴的に含みにぶい黄橙色(10YR 7/4)
6(回)	甕(土)	〈20.2〉 — —	口縁部はゆるくくの字状に外反する。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含み橙色を呈する(5YR 6/6)



第242図　H－67号住居址出土遺物（1：4）

ものである。

8は、石鉢の断片である。

時　期

本住居址は、八世紀第II四半期、十二遺跡第II期に位置付けられよう。

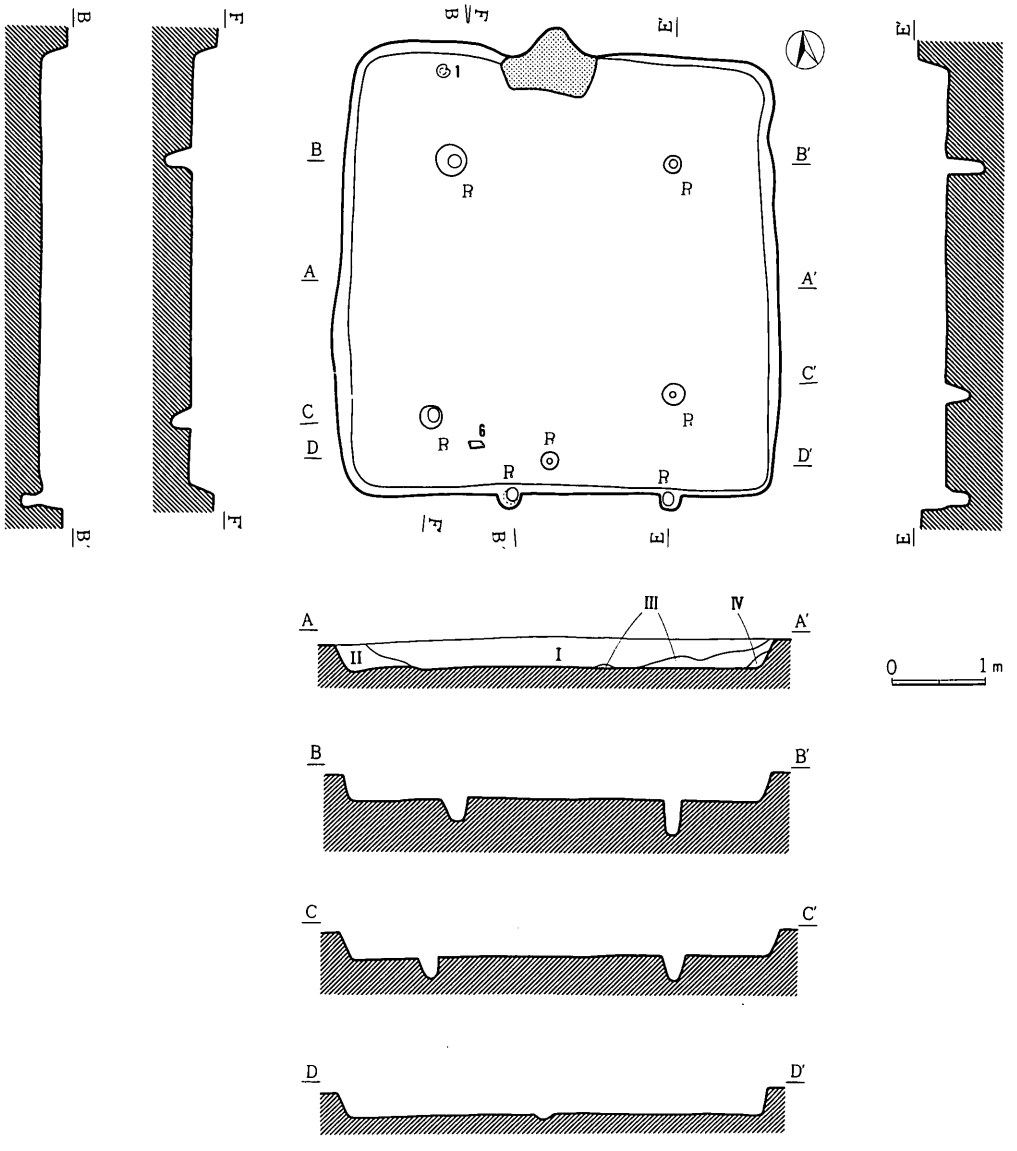
(68)　H－68号住居址

住居址　第243図

H－68号住居址は、第II区ネ－30グリッドにおいて検出された。

本住居址は、南北4.8m東西4.7mの隅丸方形を呈し、床面積19.6m²を測り、南北軸方向はN－2°－Eを指す。壁高は、25～30cmを測る。壁溝は認められない。床面は、貼り床ではないが全体にかなり硬質な床となっている。

ピットは、P_1～P_7の七個のピットが認められた。このうちP_1～P_4の四個が住居内に対で、

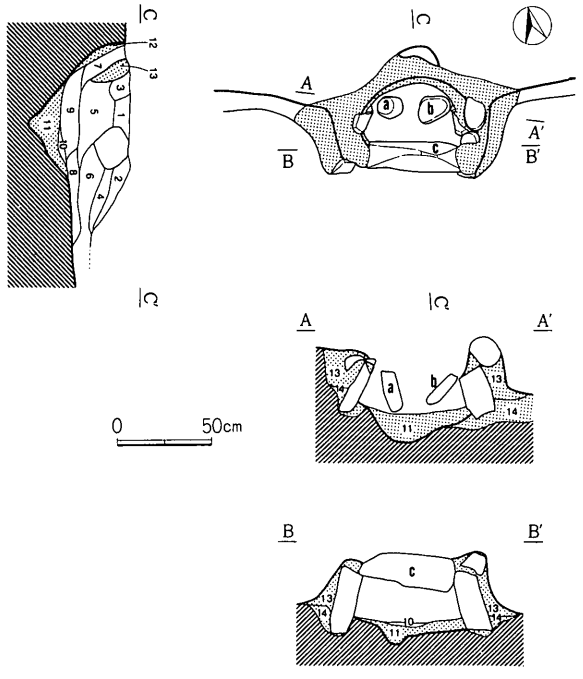


第243図　H－68号住居址実測図（1：80）

P_5・P_6は南壁中にそろって認められるものであった。また、P_7は南壁際中央に認められた。P_1は20×20cm深さ40cm、P_2は35×30cm深さ30cm、P_3は25×25cm深さ20cm、P_4は20×20cm深さ25cm、P_5は25×25cm深さ25cm、P_6は25×25cm深さ25cm、P_7は20×20cm深さ5cmを測る。

遺物は、1の須恵器坏が床面に伏せられた状態で、また、6の石器が床面直上より出土した。この他はいずれも覆土中からの出土である。

覆土は4層に分層された。Ⅰ層は細粒パミスを多く含む黒色土層（10YR 2/1）、Ⅱ層はローム粒子を若干含む黒褐色土層（10YR 2/2）、Ⅲ層はローム粒子を多量に含む黒褐色土層（10YR 3/2）、Ⅳ層はローム粒子を含まない黒色土層（10YR 1.7/1）であった。



第244図　H－68号住居址カマド実測図（1：40）

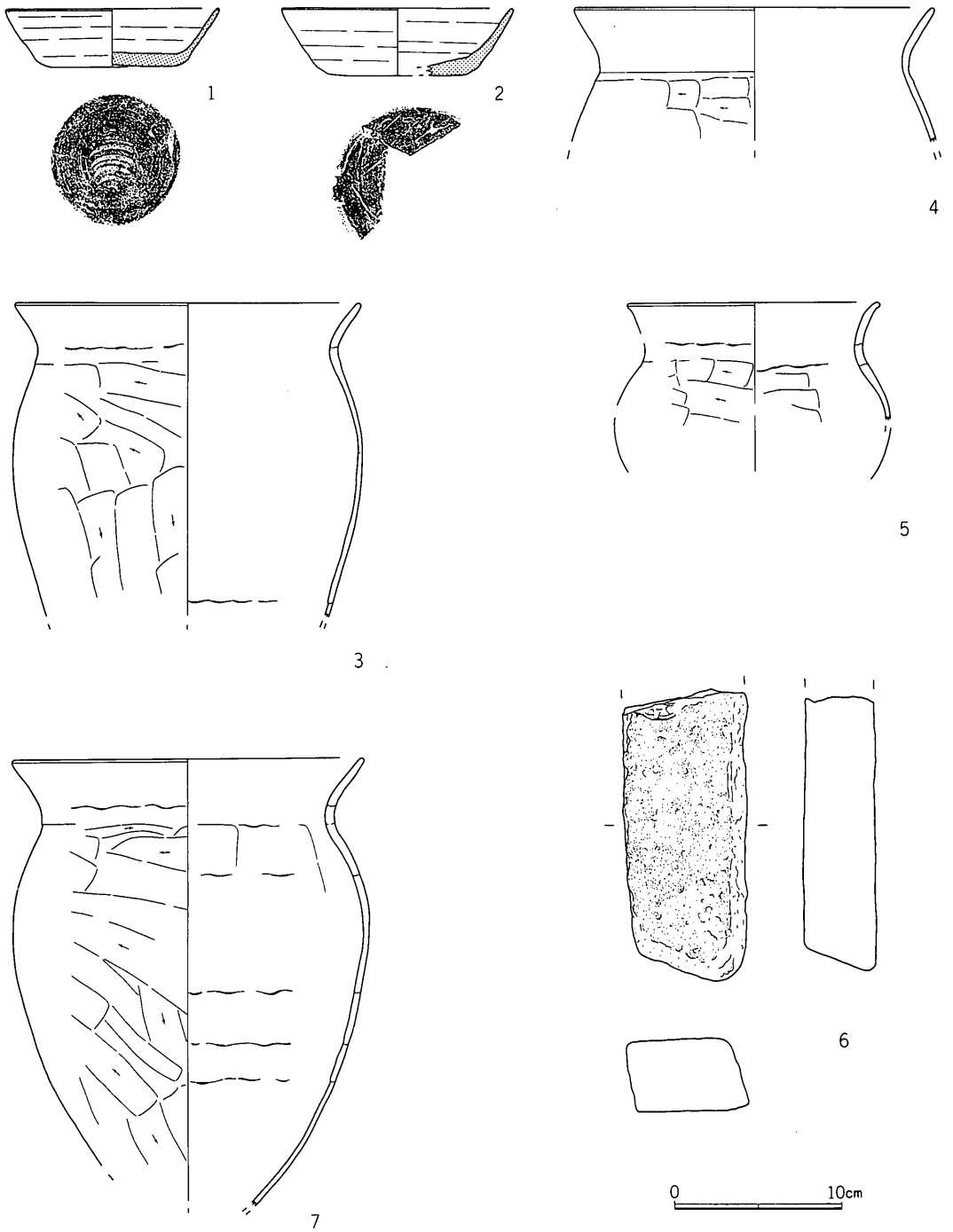
カマド　第244図

カマドは、住居址の北壁中央にあり、左右両袖・天井石（c）・支脚石（a・b）をとどめていた。その袖の芯には面取り軽石・安山岩・砂岩が据えられ、粘土とロームの混じる13層・にぶい黄褐色土（14層　10YR 4/3）が貼られていた。また、火床を構成するのは黒褐色土（11層　10YR 2/2）である。なお、天井石（c）に用いられていたのは角柱状に面取りされた砂岩、支脚石（a・b）に用いられていたのは角柱状に面取りされた軽石である。

本カマド内の土層は、10層に分層された。1層は焼土・灰を僅かに含む黒褐色土層（10YR 2/3）、2層は粘土・灰を僅かに含む黒色土層（10YR 2/1）、3層は粘土・焼土・灰を含む褐色土層（7.5YR 4/4）、4層は焼土・灰・カーボンを含む暗褐色土層（10YR 3/4）、5層は焼土・灰・カーボンを含むにぶい黄褐色土層（10YR 4/3）、6層は焼土を含む暗褐色土層（10YR 3/3）、7層は赤褐色焼土層（5 YR 4/6）、8層は焼土・カーボンを含む黒色土層（10YR 2/1）、9層は焼土を含む黒褐色土層（5 YR 2/1）、10層は赤褐色焼土層（5 YR 4/6）であった。

遺　物　第245図

遺物は、須恵器では坏・甕、土師器では甕などが出土している。



第245図　H－68号住居址出土遺物（1：4）

第97表　H－68号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1（完）	坏（須）	12.8 3.5 7.5	体部は外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。 底部回転ヘラケズリ。切り離し方法不明。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は白色砂粒を特徴的に含み灰色(N6/0)
2（回）	坏（須）	〈13.9〉 4.1 （7.3）	体部は外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。 底部回転ヘラキリ、未調整。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み灰白色（10Y 7／1）
3（回）	甕（土）	（26.0） — —	口縁部はくの字状に外反する。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みにぶい橙色（5YR6／4）
4（回）	甕（土）	〈35.0〉 — —	口縁部はくの字状に外反する。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みにぶい橙色（7.5YR7/4）
5（回）	甕（土）	〈15.1〉 — —	口縁部はゆるく外反し、胴部は球状を呈する。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みにぶい褐色（7.5YR6/3）
7（完）	甕（土）	21.0 — —	口縁部はくの字状に外反する。 最大径は口縁部にある。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を多く含み橙色（5YR6/6）を呈する。

1・2は須恵器坏で、1は回転ヘラケズリの加えられた底部をみせ切り離し手法は不明、2は回転ヘラキリによる底部をみせている。

第98表　H－68号住居址出土遺物一覧表〈石器〉

挿図番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
6	不明	輝石安山岩	(17.4)	7.2	4.3	(1,090)	

3・4・7は、くの字状口縁の土師器甕である。

5は、土師器小形球胴甕である。

6は、器種がわからないが、未加工の角柱状礫である。

時　期

本住居址は、八世紀第II四半期、十二遺跡第II期に位置付けられよう。

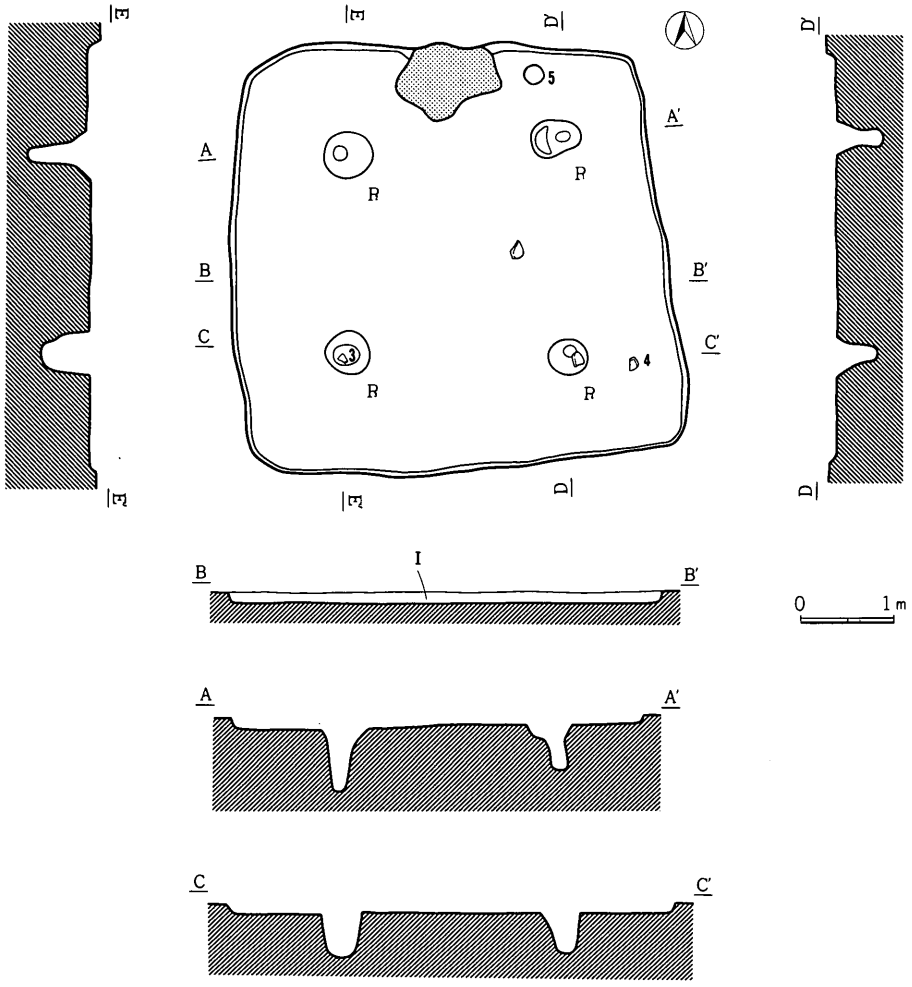
(69)　H－69号住居址

住居址　第246図

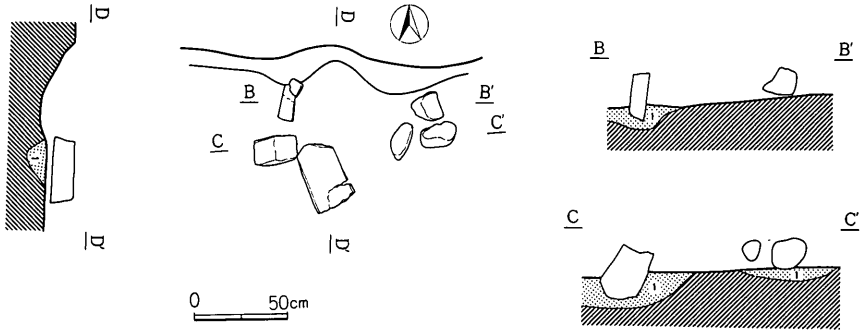
H－69号住居址は、第II区ヌ－30グリッドにおいて検出された。

本住居址は、南北4.5m東西4.7mのいびつな隅丸方形を呈し、床面積19.0m²を測り、南北軸方向はN－11°－Wを指す。壁高は、10cmを測る。壁溝は認められない。床面は全体に硬質な貼り床となっている。

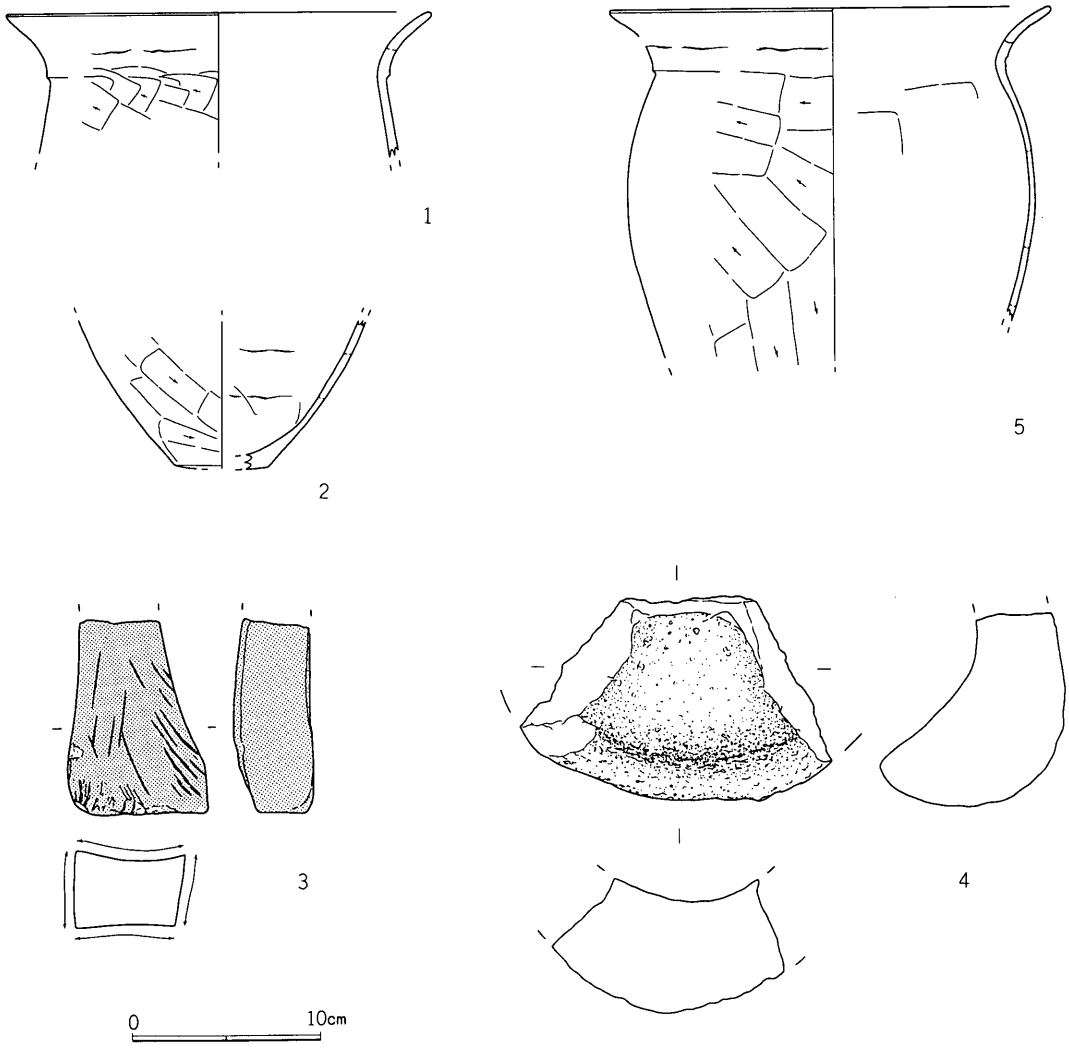
ピットは、P_1～P_4の四個のピットが対で認められた。P_1は55×40cm深さは50cm、P_2は55×50cm深さは65cm、P_3は50×45cm深さは50cm、P_4は45×40cm深さは40cmを測った。



第246図　Ｈ－69号住居址実測図（１：80）



第247図　Ｈ－69号住居址カマド実測図（１：40）



第248図　Ｈ－69号住居址出土遺物（１：４）

第99表　Ｈ－69号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1（回）	甕（土）	〈23.6〉 — —	口縁部はくの字状に外反する。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みにぶい橙色（5YR6/4）
2（回）	甕（土）	— — （5.0）	底部平底。	外面　胴・底部ヘラケズリ。 内面　ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みにぶい褐色（7.5YR5/3）
5（完）	甕（土）	（23.3） — —	口縁部はくの字状に外する。 最大径は口縁部にある。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みにぶい橙色（7.5YR7/3）を呈する。

遺物は、4の石鉢は床面直上の出土、3の砥石はP_3中からの出土、5の甕はカマド東脇に埋め込まれた状態で検出されている。この他はいずれも覆土中からの出土である。

第100表　H－69号住居址出土遺物一覧表〈石器〉

挿図番号	器　種	材　質	長さ	幅	厚さ	重量	備　　考
3	砥　石	砂　岩	(10.2)	7.3	4.0	(410)	半分欠損
4	石　鉢	輝　石 安山岩	(10.5)	(16.5)	9.8	(710)	破片

覆土は、細粒パミス・小粒スコリアをよく含みローム粒子を若干含む黒色土層（10YR 1.7/1）Ⅰ層のみであった。

カマド　第247図

カマドは、住居址の北壁中央にあるが、ほぼ完全に破壊された状態にあった。その袖に用いられていた面取り軽石・安山岩礫が認められた。また、その構材には、黒褐色土層（1層　10YR 2/2）も用いられていた。

遺　物　第248図

遺物の出土量は少なく、須恵器では蓋・坏・甕の破片が、土師器では坏・甕の破片が出土しているのみである。

1・5は、くの字状口縁の土師器甕で、その最大径が口縁部にあるものである。2は土師器甕の底部である。

3は、砂岩の砥石で、四面が研砥に供されたものである。半分を古く欠損する。

4は、石鉢で、完形の四分の一程度の破片である。

時　期

本住居址は、八世紀第Ⅱ四半期、十二遺跡第Ⅱ期に位置付けられよう。

(70)　H－70号住居址

住居址　第249図

H－70号住居址は、第Ⅱ区ネ－30グリッドにおいて検出された。

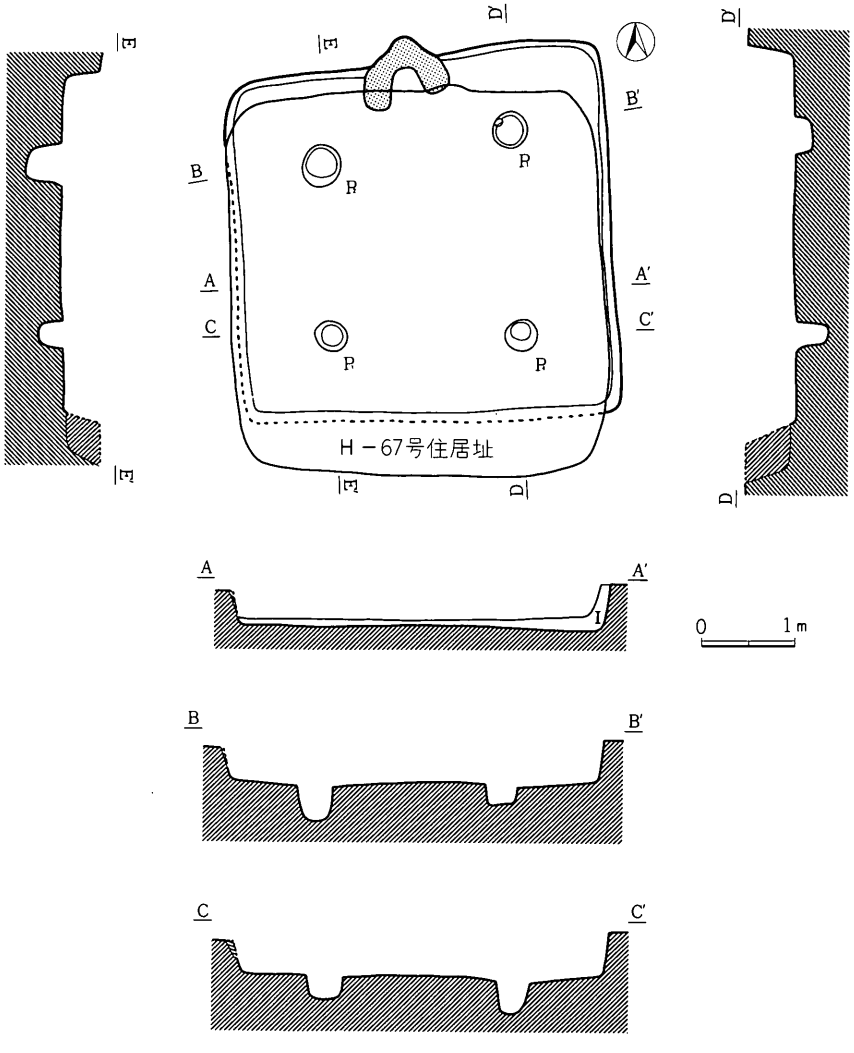
本住居址の大部分は、H－67号住居址に切られている。

本住居址は、推定南北3.9m東西4.0mの隅丸方形を呈し、床面積13.9m²を測り、南北軸方向はN－8°－Wを指す。壁高は、40～50cmを測る。壁溝は認められなかった。床面は、全体に硬質な貼り床となっている。

ピットは、P_1～P_4の四個のピットが対で認められた。P_1は40×40cm深さは15cm、P_2は45×40cm深さは35cm、P_3は35×30cm深さは30cm、P_4は35×35cm深さは35cmを測った。

遺物は、カマド中からのみ出土しているが、良好な出土状態を示していない。

覆土は、ローム粒子を多量に含む黒褐色土層（10YR 3/2）のⅠ層のみであった。

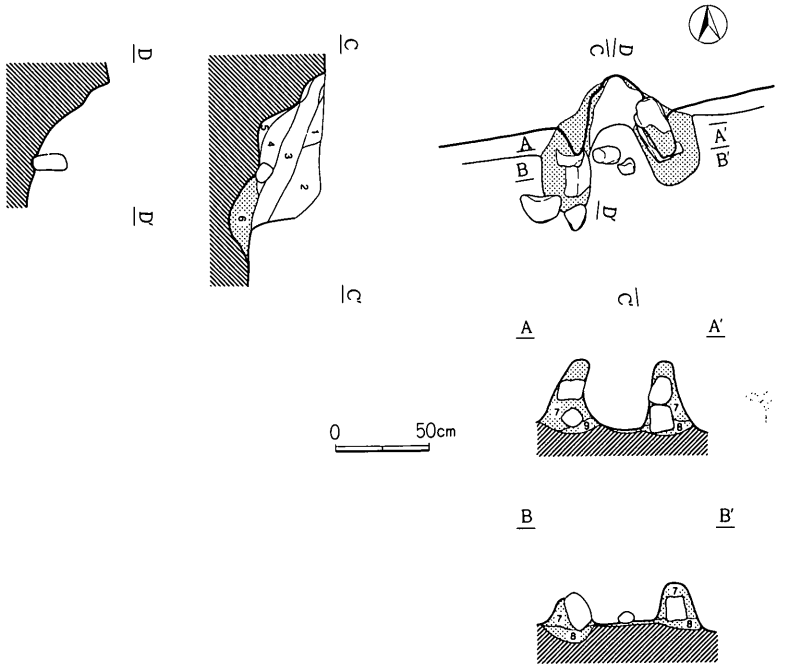


第249図　H－70号住居址実測図（1：80）

カマド　第250図

カマドは、住居址の北壁中央にあり、左右両袖の一部と支脚石をとどめていた。その袖の芯には面取り軽石・安山岩・集塊岩が用いられ、その上には灰黄褐色粘土（7層　10YR 4/6）・黒色土（8層　10YR 1.7/1）・黄褐色土（9層　10YR 5/8）が貼られていた。また、火床には黒褐色土層（6層　5 YR 2/2）が貼られていた。

本カマド内の土層は、5層に分層された。1層は焼土・粘土を含む褐色土層（7.5YR 4/3）、2層は粘土・カーボンを僅かに含む黒褐色土層（7.5YR 3/2）、3層は焼土・灰・カーボンを含む褐色土層（7.5YR 4/6）、4層は灰を多量に含みカーボンを含む灰褐色土層（5 YR 4/2）5層は赤褐色焼土層（5 YR 4/6）であった。



第250図　Ｈ－70号住居址カマド実測図（１：40）

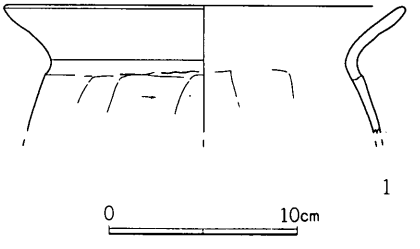
第101表　Ｈ－70号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1 (回)	甕 (土)	〈21.3〉 — —	口縁部はくの字状に強く外反する。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含み橙色 （7.5YR7/6）

遺　物　第251図

遺物はカマド中から土師器甕の破片が数片出土したのみである。

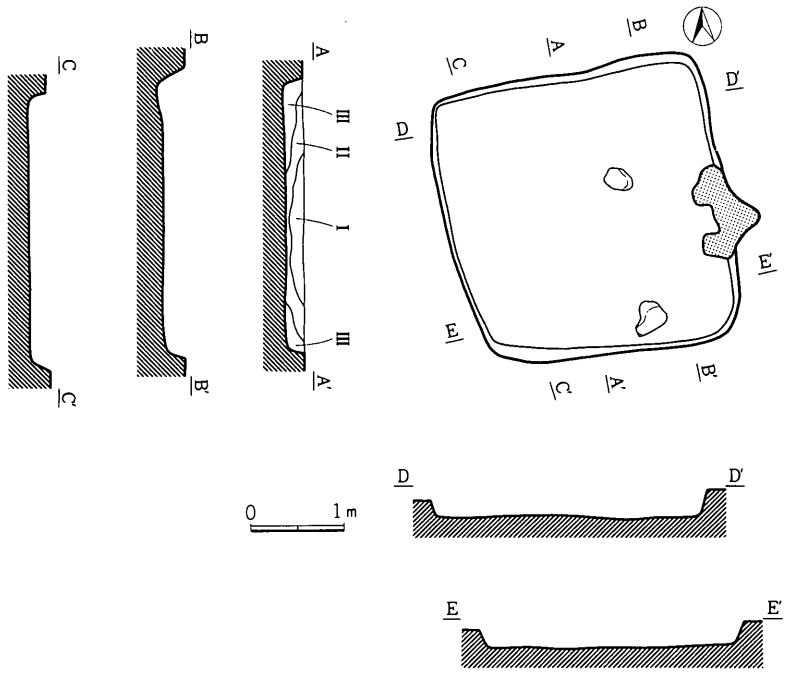
１はくの字状口縁の土師器甕で、その最大径が口縁部にあるものである。



第251図　Ｈ－70号住居址出土遺物（１：４）

時　期

本住居址は、Ｈ－67号住居址に切られていることも考慮すると、八世紀第Ｉ四半期、十二遺跡第Ｉ期に位置付けられよう。



第252図　H－71号住居址実測図（1：80）

(71)　H－71号住居址

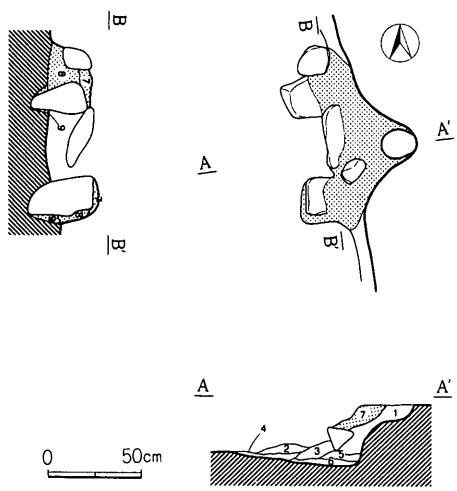
住居址　第252図

H－71号住居址は、第Ⅱ区ハ－29グリッドにおいて検出された。

本住居址は、南北3.0m東西3.0mの隅丸方形を呈し、床面積7.8m²を測り、南北軸方向はN－15°－Wを指す。壁高は、20～30cmを測る。壁溝は認められなかった。床面は全体にかなり硬質な貼り床となっている。

ピットは認められなかった。

遺物は、覆土中から一点出土しているのみである。



第253図　H－71号住居址カマド実測図（1：40）

覆土は、3層に分層された。Ⅰ層は細粒パミスをよく含む黒色土層（10YR 1.7/1）、Ⅱ層はローム粒子をよく含む黒色土層（10YR 2/1）、Ⅲ層は中粒パミスをよく含む黒色土層（10YR 1.7/1）であった。

カマド　第253図

カマドは、住居址の東壁やや南よりにあり、左右両袖の一部と天井部をとどめていた。その袖の芯には面取り軽石・安山岩が用いられ、その上には明褐色土（7層　10YR 5/6）・黒褐色土（8層　10YR 3/2）・にぶい黄褐色土（9層　10YR 4/3）が貼られていた。

本カマド内の土層は、6層に分層された。1層は焼土を含む褐色土層(7.5YR 4/4)、2層は暗褐色土層（10YR 3/4)、3層は焼土を多量に含む暗赤褐色土層（5 YR 3/4)、4層は焼土・カーボンを含む極暗褐色土層（7.5YR 2/3)、5層は赤褐色焼土層（5 YR 4/6)、6層は焼土・カーボンを含む極暗褐色土層（5 YR 2/4）であった。

遺　物

遺物は、土師器甕の破片一片が出土しているのみで、図示し得なかった。

時　期

本住居址は、遺物の出土が無いにひとしいため時期決定がし難いが、カマドが住居址の東壁やや南よりにあることを考慮すると、さほど古いものとはおもわれない。とりあえずは九世紀代の所産とみて大過あるまい。

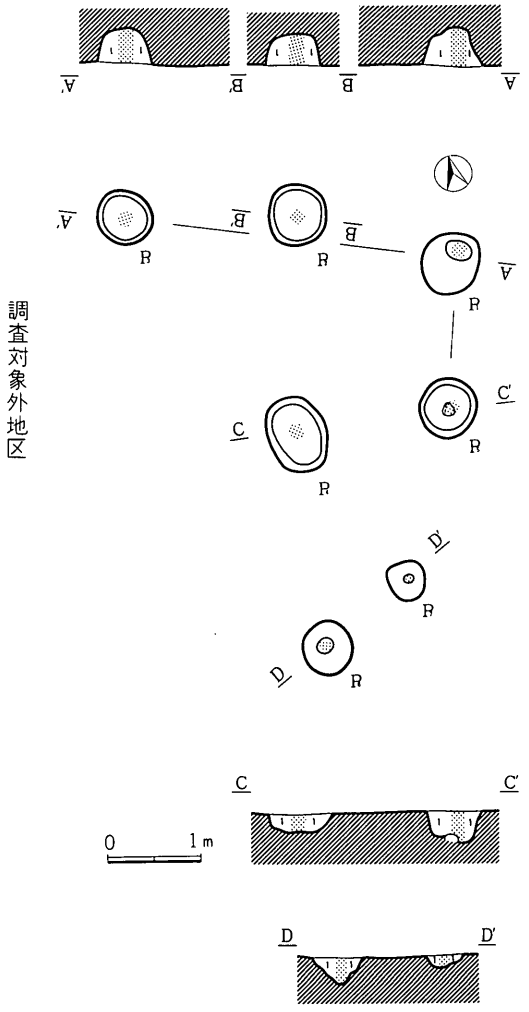
2　掘立柱建物址

（Ｉ）　Ｆ－Ｉ号掘立柱建物址

第254図

Ｆ－１号掘立柱建物址は、第Ｉ区ネ－33グリッドにおいて検出された。

本掘立柱建物址の約半分は、調査対象外地区である西側にのびておりその全容をつかみ得なかったが、いずれにしてもやや不規則なピットの配置をみせるものであった。



第254図　Ｆ－Ｉ号掘立柱建物址実測図（Ｉ：80）

その南北軸方向は、N－12°－Eを指す。

柱間は、P_1P_2間で1.8m、P_1P_5間で1.6mを測る。

各ピットの掘り方のプランは、いずれも円形ないしは楕円形を呈していた。

その埋土は、スコリア・パミスを全く含まない黒色土層（10YR 1.7/1）Ⅰ層のみであった。

各ピットにおける柱痕部分は、とりあえず図中にはスクリーントーンで示したが、明確にとらえられるものではなかった。

遺物は、全く出土していない。

（2）　F－2号掘立柱建物址

第255図

F－2号掘立柱建物址は、第Ⅰ区ノ－33グリッドにおいて検出された。

本掘立柱建物址の半分以上は、調査対象外地区である西側にのびておりその全容をつかみ得ず、ピット3個が確認されたのみであった。

その南北軸方向は、N－5°－Wを指す。

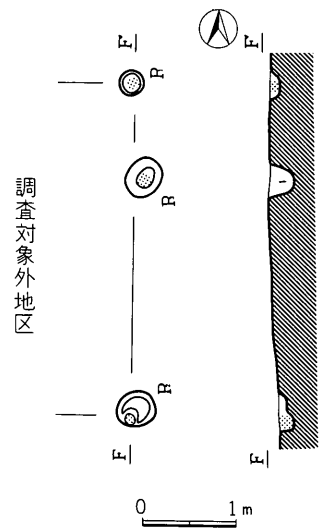
柱間は、P_1P_3間で、1.0m、P_2P_3間で2.5mを測る。

各ピットの掘り方のプランは、いずれも円形ないしは楕円形を呈していた。

その埋土は、スコリア・パミスを全く含まない黒色土層（10YR 1.7/1）Ⅰ層のみであった。

各ピットにおける柱痕部分は、とりあえず図中にはスクリーントーンで示したが、明確にとらえられるものではなかった。

遺物は、全く出土していない。



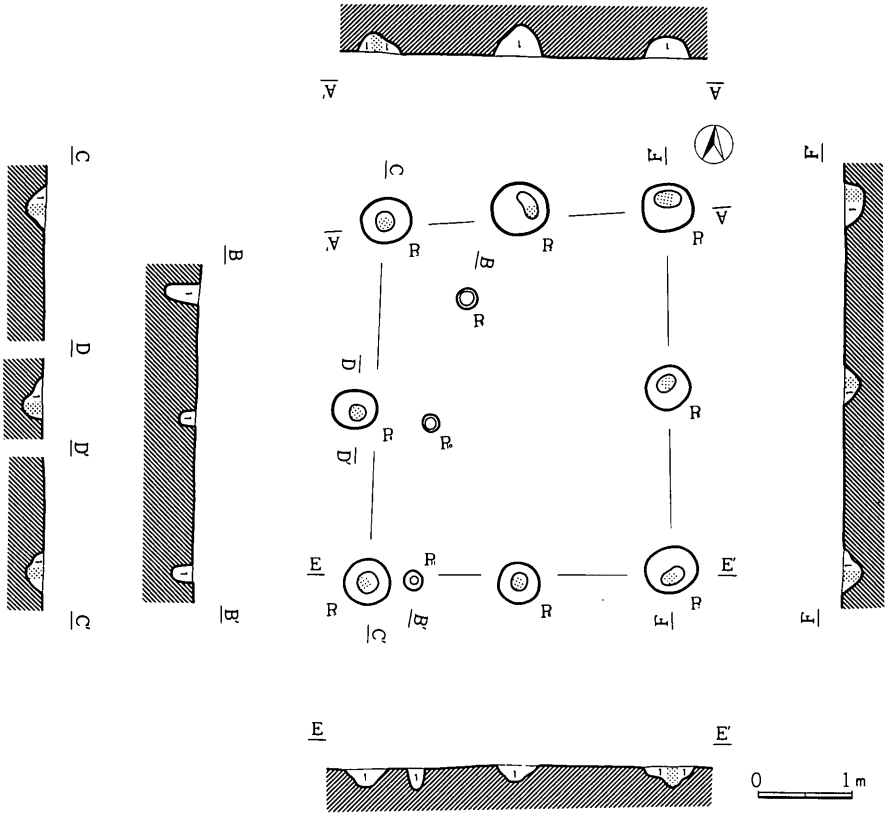
第255図　F－2号掘立柱建物址
実測図（1：80）

（3）　F－3号掘立柱建物址

第256図

F－3号掘立柱建物址は、第Ⅰ区ノ－33グリッドにおいて検出された。

本掘立柱建物址は、2間×2間の側柱式の掘立柱建物址で、南北4.0m東西3.2mの矩形のプランを呈し、床面積12.8m²を測る。柱間は、南北列では1.2～1.6m、東西列では1.8～2.0m測る。



第256図　F－3号掘立柱建物址実測図（1：80）

なお、本址に伴うかどうかわからないが、ほぼ直線上に並ぶP_9～P_{11}の3個のピットも認められた。

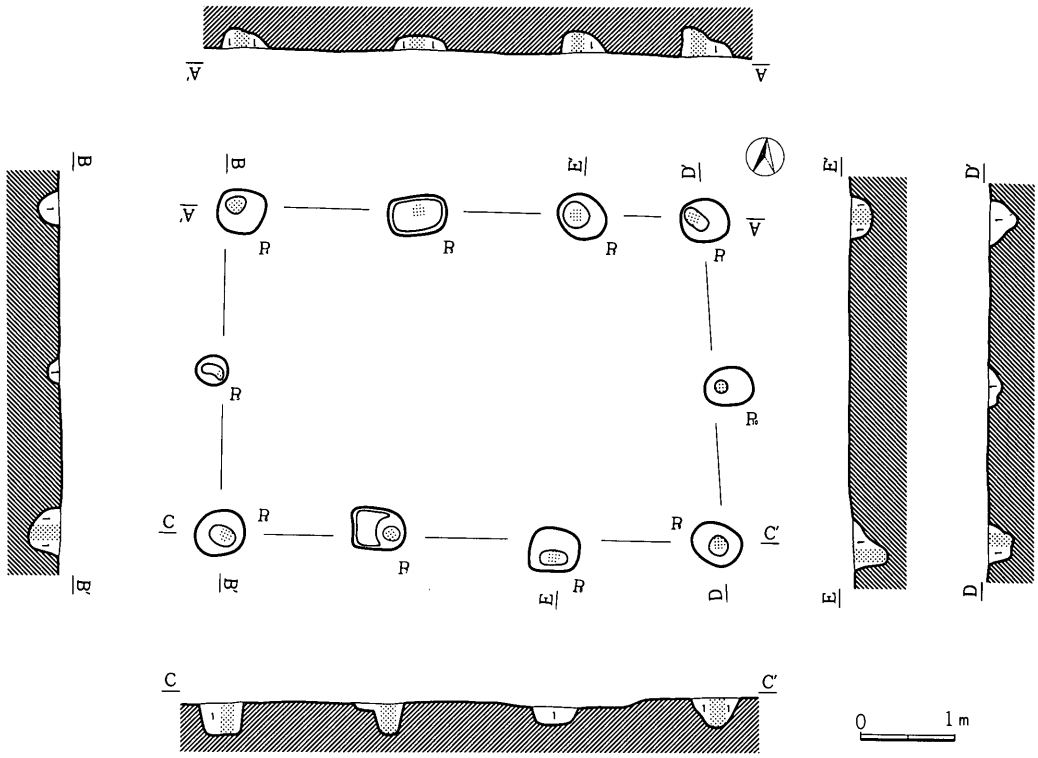
本址の南北軸方向は、N－12°－Wを指す。

各ピットの掘り方のプランは、いずれも円形ないしは楕円形を呈していた。

その埋土は、スコリア・パミスを全く含まない黒色土層（10YR 1.7/1）Ⅰ層のみであった。

各ピットにおける柱痕部分は、とりあえず図中にはスクリーントーンで示したが、明確にとらえられるものではなかった。

遺物は、全く出土していない。



第257図　F－4号掘立柱建物址実測図（1：80）

（4）　F－4号掘立柱建物址

第257図

F－4号掘立柱建物址は、第I区ノ－33グリッドにおいて検出された。

本掘立柱建物址は、H－3号住居址の北側を切って存在している。

本掘立柱建物址は、2間×3間の側柱式の掘立柱建物址で、南北3.4m東西5.2mの矩形のプランを呈し、床面積17.7m²を測る。柱間は、南北列では1.2～1.9m、東西列では1.7mを測る。

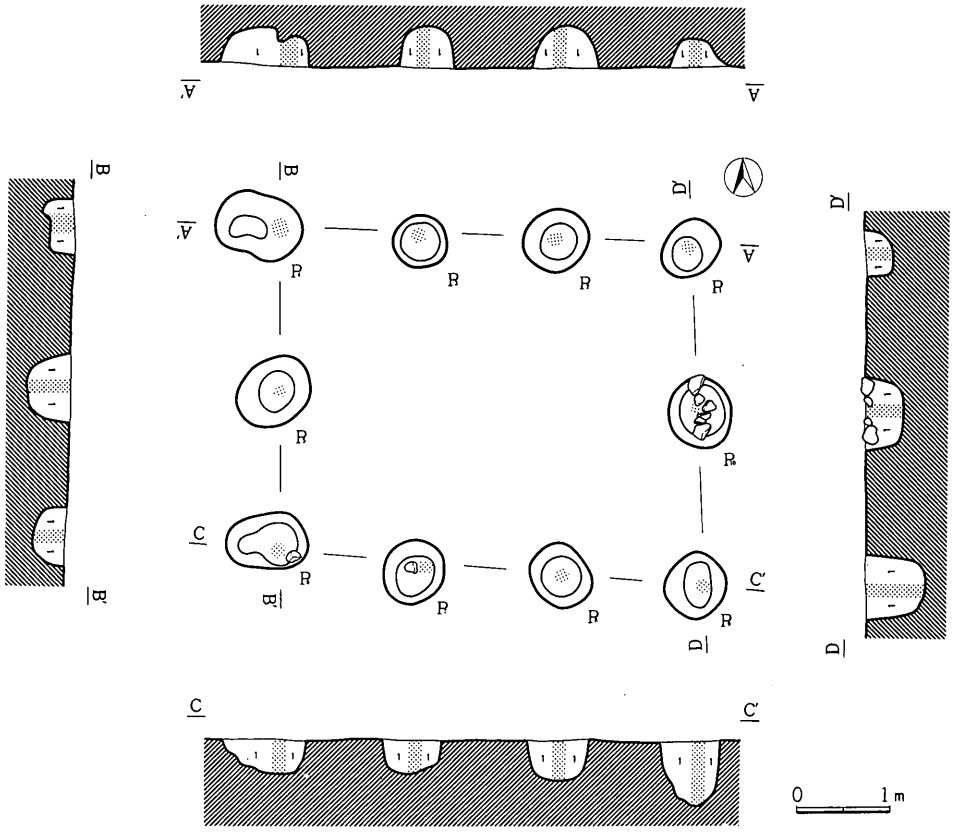
本址の南北軸方向は、N－11°－Wを指す。

各ピットの掘り方のプランは、円形・楕円形・隅丸方形を呈していた。

その埋土は、スコリア・パミスを全く含まない黒色土層（10YR 1.7/1）I層のみであった。

各ピットにおける柱痕部分は、とりあえず図中にはスクリーントーンで示したが、明確にとらえられるものではなかった。

遺物は、ピットの埋土中より、奈良・平安時代の須恵器坏・甕、土師器甕の破片4片が出土している。よって本掘立柱建物址所産期は、遺物の示す奈良・平安時代かそれ以降であることが少なくともいえよう。



第258図　Ｆ－５号掘立柱建物址実測図（１：80）

（５）　Ｆ－５号掘立柱建物址

第258図

Ｆ－５号掘立柱建物址は、第Ｉ区ノ－33グリッドにおいて検出された。

本掘立柱建物址は、２間×３間の側柱式の掘立柱建物址で、南北3.4m東西4.4mの矩形のプランを呈し、床面積15.0m²を測る。柱間は、南北列では1.4m、東西列では1.6～1.8mを測る。

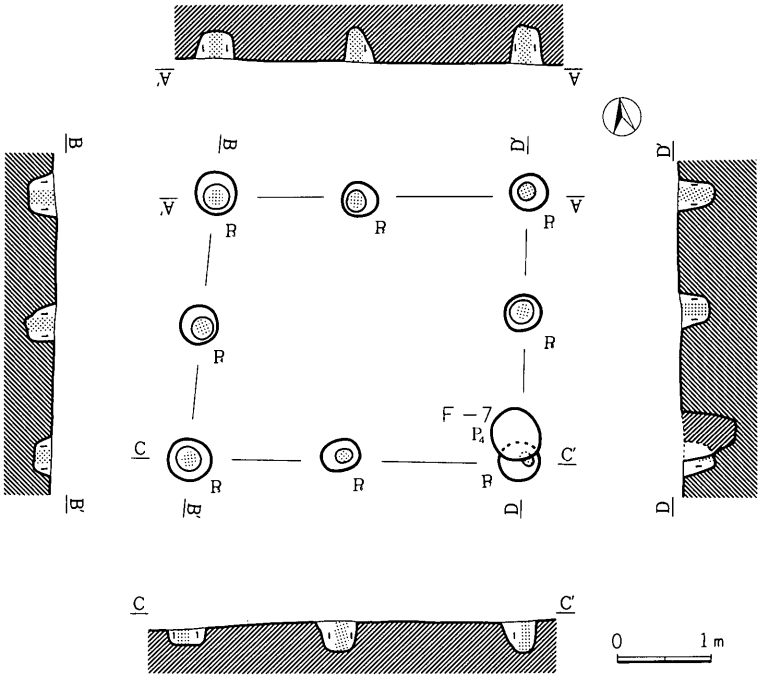
本址の南北軸方向は、Ｎ－７°－Ｗを指す。

各ピットの掘り方のプランは、円形もしくは楕円形を呈していた。

その埋土は、スコリア・パミスを全く含まない黒色土層（10YR 1.7/1）Ｉ層のみであった。

各ピットにおける柱痕部分は、とりあえず図中にはスクリーントーンで示したが、明確にとらえられるものではなかった。なお、P_{10}の上面には礫５個が認められた。

遺物は、P_2の埋土中より、奈良・平安時代の土師器甕の破片５片が出土している。よって本掘立柱建物址所産期は、遺物の示す奈良・平安時代かそれ以降であることが少なくともいえよう。



第259図　Ｆ－６号掘立柱建物址実測図（１：80）

（６）　Ｆ－６号掘立柱建物址

第259図

Ｆ－６号掘立柱建物址は、第Ｉ区ノ－33グリッドにおいて検出された。

本掘立柱建物址のP_7は、Ｆ－７号掘立柱建物址のP_5に切られている。よって本掘立柱建物址はＦ－７号掘立柱建物址より古いものといえる。

本掘立柱建物址は、２間×２間の側柱式の掘立柱建物址で、南北2.8m東西3.6mの矩形のプランを呈し、床面積10.1m²を測る。柱間は、南北列では1.4～1.6m東西列では1.4～1.6mを測る。

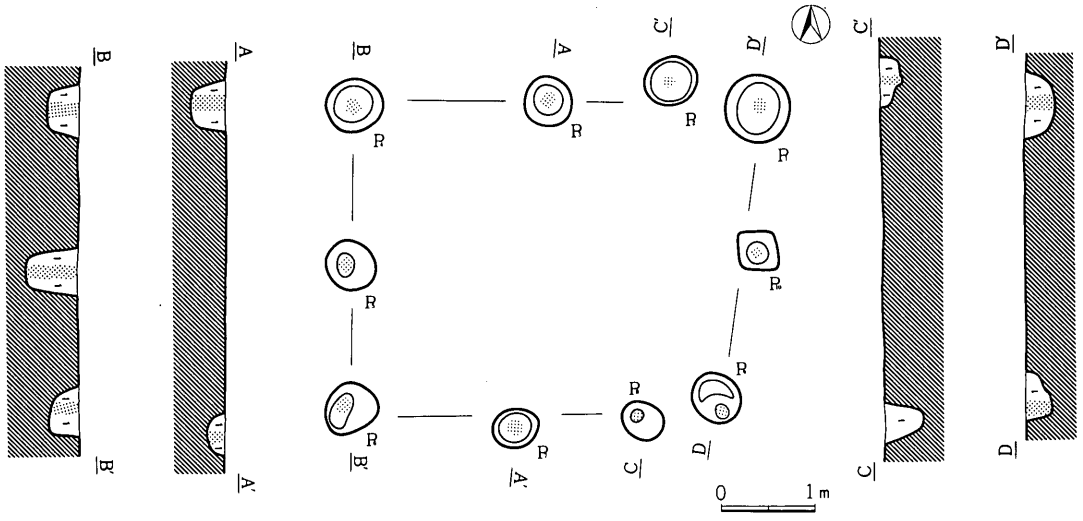
本址の南北軸方向は、Ｎ－２°－Ｅを指す。

各ピットの掘り方のプランは、円形もしくは楕円形を呈していた。

その埋土は、スコリア・パミスを全く含まない黒色土層（10YR 1.7/1）Ｉ層のみであった。

各ピットにおける柱痕部分は、とりあえず図中にはスクリーントーンで示したが、明確にとらえられるものではなかった。

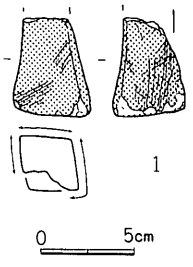
遺物は、出土していない。



第260図　F－7号掘立柱建物址実測図（1：80）

第102表　F－7号掘立柱建物址出土遺物一覧表〈石器〉

挿図番号	器　種	材　質	長さ	幅	厚さ	重量	備　考
1	砥　石	砂　岩	(5.2)	4.1	3.8	85	P10出土



第261図　F－7号掘立柱建物址出土遺物（1：4）

（7）　F－7号掘立柱建物址

第260図

F－7号掘立柱建物址は、第I区ノ－33グリッドにおいて検出された。

本掘立柱建物址のP_5は、F－6号掘立柱建物址のP_7を切って存在している。よって本掘立柱建物址はF－6号掘立柱建物址より新しいものといえる。本掘立柱建物址は、2間×3間の側柱式の掘立柱建物址で、南北3.2m東西4.4mの歪んだ矩形のプランを呈し、床面積13.5m²を測る。柱間は、南北列では0.8～2.0m東西列では1.6mを測る。

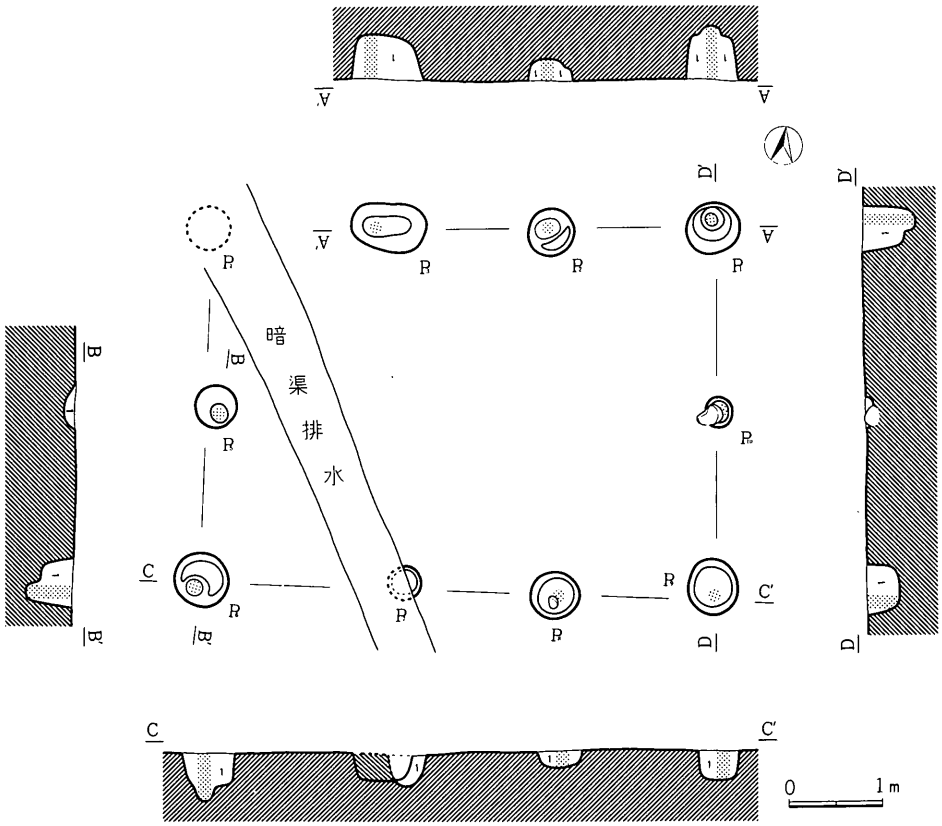
本址の南北軸方向は、N－10°－Eを指す。

各ピットの掘り方のプランは、円形もしくは楕円形・方形を呈している。

その埋土は、スコリア・パミスを全く含まない黒色土層（10YR 1.7/1）I層のみであった。

各ピットにおける柱痕部分は、とりあえず図中にはスクリーントーンで示したが、明確にとらえられるものではなかった。なお、P_2中には炭化材が認められた。

遺物はP_7の埋土中より、第261図1の砥石が検出された。また、P_3の埋土中より奈良・平安時代の土師器甕の破片が出土している。よって本掘立柱建物址所産期は、遺物の示す奈良・平安時代かそれ以降であることが少なくともいえよう。



第262図　Ｆ－８号掘立柱建物址実測図（１：80）

（８）　Ｆ－８号掘立柱建物址

第262図

Ｆ－８号掘立柱建物址は、第Ｉ区ハ－36グリッドにおいて検出された。

本掘立柱建物址は、Ｈ－30号住居址の東側と重複するが、両者の新旧関係はとらえられなかった。また、その一部を暗渠排水によって破壊されている。

本址は、２間×３間の側柱式の掘立柱建物址で、南北4.0m東西5.6mの矩形のプランを呈し、床面積22.4m²を測る。柱間は、南北列では1.6～2.2m、東西列では1.8～2.0mを測る。

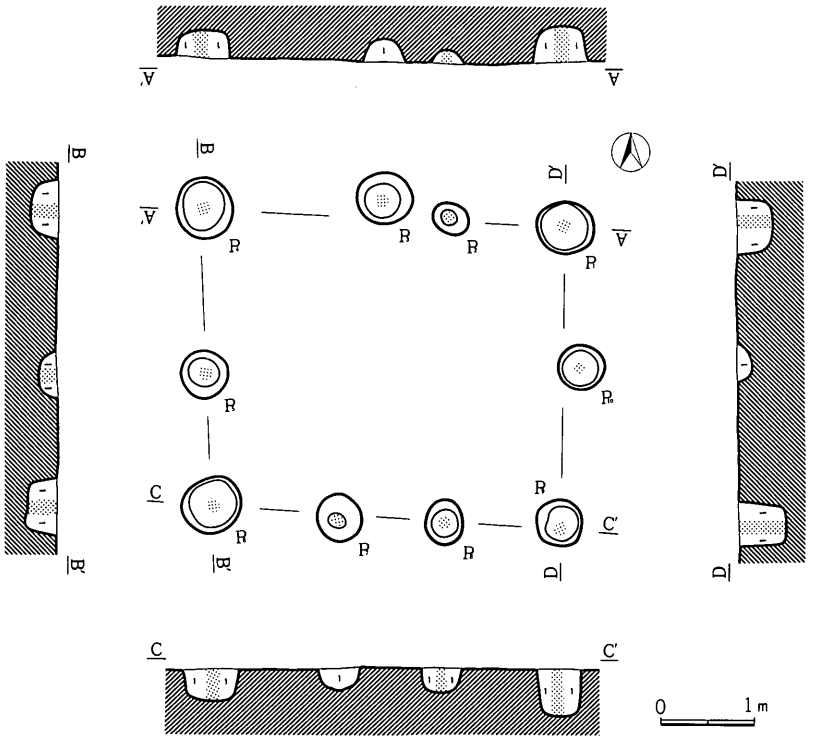
本址の南北軸方向は、Ｎ－17°－Ｗを指す。

各ピットの掘り方のプランは、円形もしくは楕円形を呈していた。

その埋土は、スコリア・パミスを全く含まない黒色土層（10YR 1.7/1）Ｉ層のみであった。

各ピットにおける柱痕部分は、とりあえず図中にはスクリーントーンで示したが、明確にとらえられるものではなかった。

遺物は、出土していない。



第263図　Ｆ－９号掘立柱建物址実測図（１：80）

（９）　Ｆ－９号掘立柱建物址

第263図

Ｆ－９号掘立柱建物址は、第Ｉ区ノ－33グリッドにおいて検出された。

本掘立柱建物址は、２間×３間の側柱式の掘立柱建物址で、南北3.2m東西3.8mの矩形のプランを呈し、床面積12.2m²を測る。柱間は、南北列では0.8～1.8m、東西列では1.4～1.8mを測る。なお、北列のピットの配置は不規則なものであった。

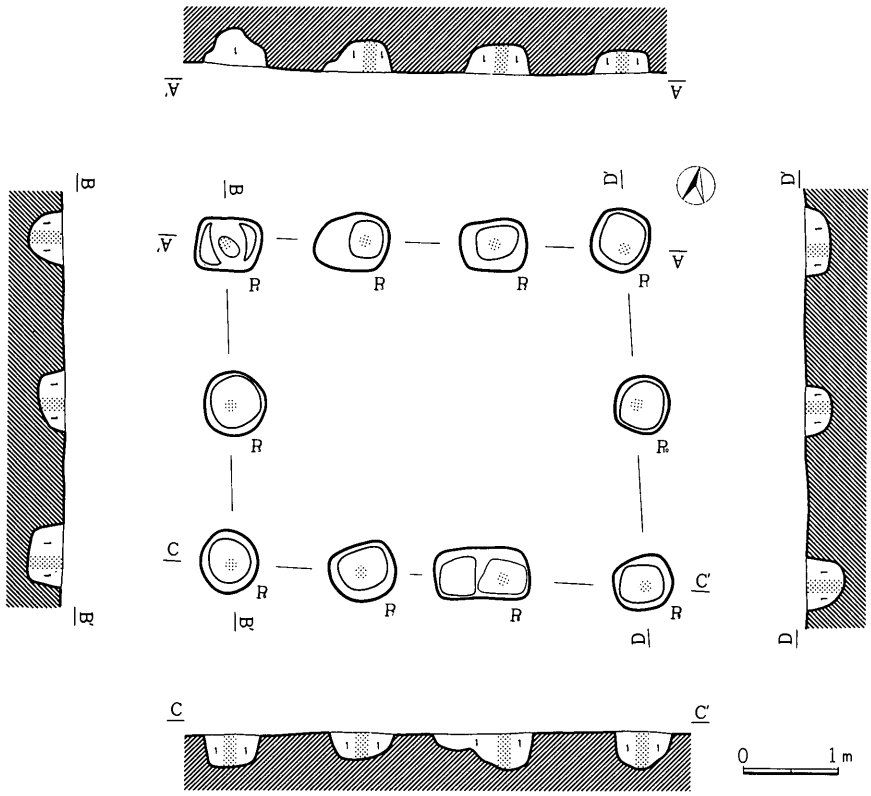
本址の南北軸方向は、Ｎ－３°－Ｗを指す。

各ピットの掘り方のプランは、円形もしくは楕円形を呈していた。

その埋土は、スコリア・パミスを全く含まない黒色土層（10YR 1.7/1）Ｉ層のみであった。

各ピットにおける柱痕部分は、とりあえず図中にはスクリーントーンで示したが、明確にとらえられるものではなかった。

遺物は出土していない。



第264図　F－10号掘立柱建物址実測図（1：80）

(10)　F－10号掘立柱建物址

第264図

F－10号掘立柱建物址は、第Ⅰ区ハ－33グリッドにおいて検出された。

本掘立柱建物址は、2間×3間の側柱式の掘立柱建物址で、南北3.4m東西4.4mの矩形のプランを呈し、床面積15.0m²を測る。柱間は、南北列では1.4m、東西列では1.6～1.8mを測る。

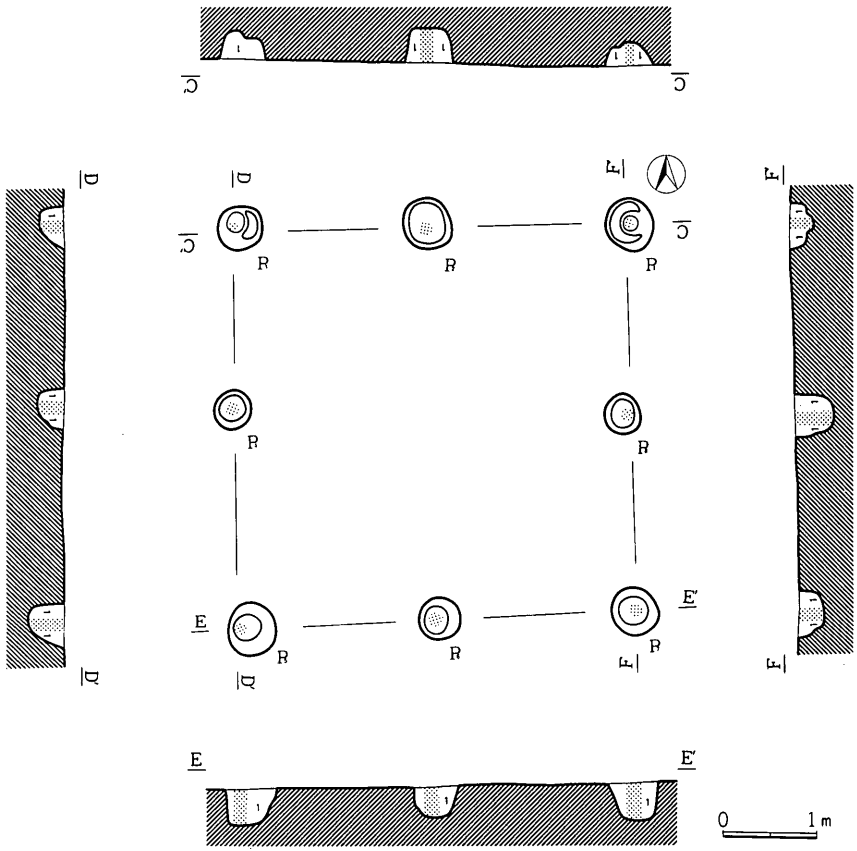
本址の南北軸方向は、N－17°－Wを指す。

各ピットの掘り方のプランは、円形・楕円形もしくは方形を呈していた。

その埋土は、スコリア・パミスを全く含まない黒色土層（10YR 1.7/1）Ⅰ層のみであった。

各ピットにおける柱痕部分は、とりあえず図中にはスクリーントーンで示したが、明確にとらえられるものではなかった。

遺物は出土していない。



第265図　F－11号掘立柱建物址実測図（1：80）

（11）　F－11号掘立柱建物址

第265図

F－11号掘立柱建物址は、第Ⅰ区ノ－33グリッドにおいて検出された。

本掘立柱建物址は、2間×2間の側柱式の掘立柱建物址で、南北4.2m東西4.2mの方形のプランを呈し、床面積17.6m²を測る。柱間は、南北列では2.2m東西列では2.0mを測る。

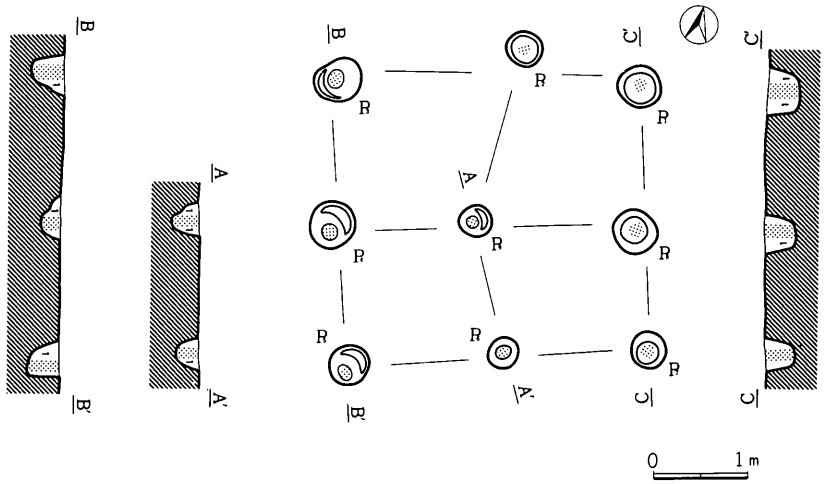
その南北軸方向は、N－8°－Wを指す。

各ピットの掘り方のプランは、いずれも円形ないしは楕円形を呈していた。

その埋土は、スコリア・パミスを全く含まない黒色土層（10YR 1.7/1）Ⅰ層のみであった。

各ピットにおける柱痕部分は、とりあえず図中にはスクリーントーンで示したが、明確にとらえられるものではなかった。

遺物は、全く出土していない。



第266図　Ｆ－12号掘立柱建物址実測図（１：80）

(12)　Ｆ－12号掘立柱建物址

第266図

Ｆ－12号掘立柱建物址は、第Ｉ区ハ－33グリッドにおいて検出された。

本掘立柱建物址は、Ｈ－６号住居址の東側を切って存在している。

本址は、２間×２間の総柱式の掘立柱建物址で、南北3.2m東西3.2mの方形のプランを呈し、床面積10.2m²を測る。ピットの配置は、北列においてやや不規則である。柱間は、南北列では1.4～2.0m、東西列では1.2～1.6mを測る。

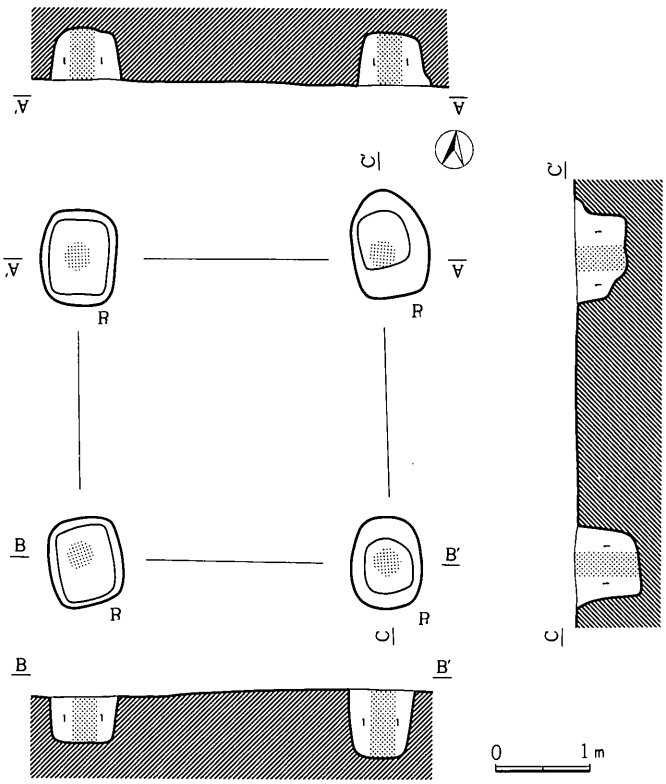
その南北軸方向は、Ｎ－11°－Ｗを指す。

各ピットの掘り方のプランは、いずれも円形を呈していた。

その埋土は、スコリア・パミスを全く含まない黒色土層（10YR 1.7/1）Ｉ層のみであった。

各ピットにおける柱痕部分は、とりあえず図中にはスクリーントーンで示したが、明確にとらえられるものではなかった。

遺物は、P_8の埋土中より、奈良・平安時代の土師器甕の破片３片が出土している。よって本掘立柱建物址所産期は、遺物の示す奈良・平安時代か、それ以降であることが少なくともいえよう。



第267図　F－13号掘立柱建物址実測図（1：80）

(13)　F－13号掘立柱建物址

第267図

F－13号掘立柱建物址は、第Ⅰ区ハ－36グリッドにおいて検出された。

本掘立柱建物址は、F－50号掘立柱建物址と重複するが、両者は直接的な切り合い関係を持たないためその新旧はとらえられなかった。

本掘立柱建物址は、1間×1間の側柱式の掘立柱建物址で、南北3.2m東西3.2mの方形のプランを呈し、床面積10.2m²を測る。柱間は、南北列・東西列共に3.2mを測る。

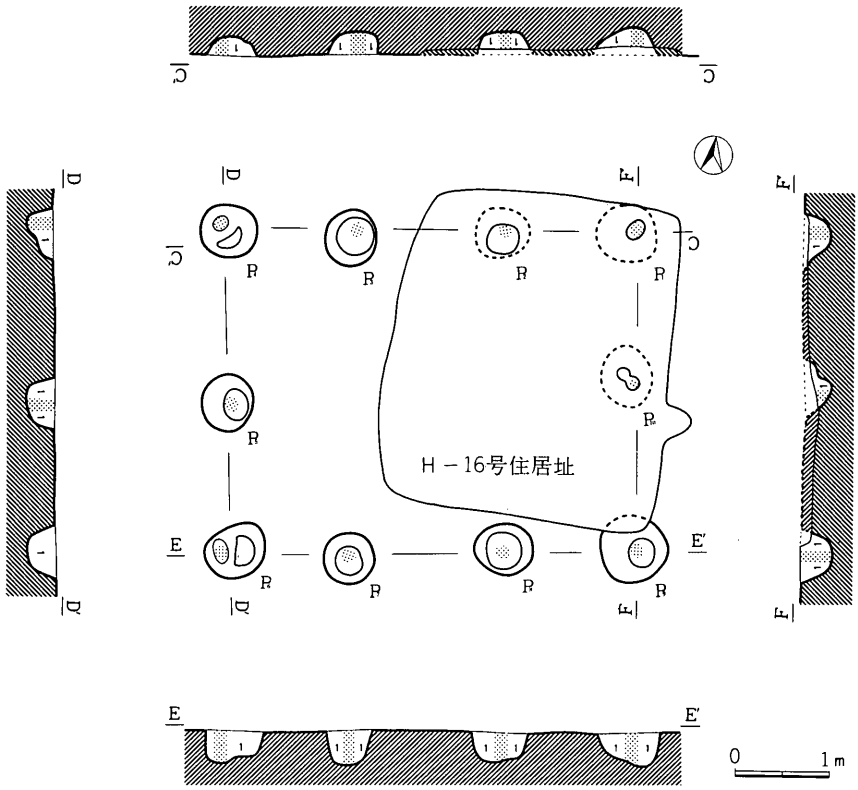
本址の南北軸方向は、N－17°－Wを指す。

各ピットの掘り方のプランは、いずれもほぼ方形を呈しており、その長径はおおよそ1m前後を測る大きなものであった。

その埋土は、スコリア・パミスを全く含まない黒色土層（10YR 1.7/1）Ⅰ層のみであった。

各ピットにおける柱痕部分は、とりあえず図中にはスクリーントーンで示したが、明確にとらえられるものではなかった。

遺物は、全く出土していない。



第268図　F－14号掘立柱建物址実測図（1：80）

(14)　F－14号掘立柱建物址

第268図

F－14号掘立柱建物址は、第Ⅰ区フ－33グリッドにおいて検出された。

本掘立柱建物址は、H－16号住居址に切られて存在している。

本掘立柱建物址は、2間×3間の側柱式の掘立柱建物址で、南北3.4m東西4.4mの矩形のプランを呈し、床面積15.0m²を測る。柱間は、南北列では1.4～1.6m、東西列では1.6～1.8mを測る。

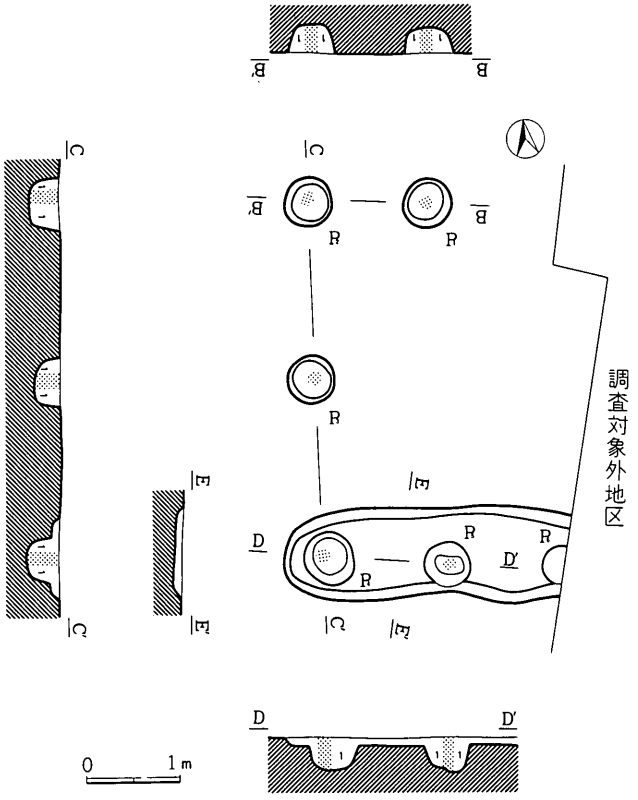
本址の南北軸方向は、N－14°－Wを指す。

各ピットの掘り方のプランは、円形ないしは楕円形を呈していた。

その埋土は、スコリア・パミスを全く含まない黒色土層（10YR 1.7/1）Ⅰ層のみであった。

各ピットにおける柱痕部分は、とりあえず図中にはスクリーントーンで示したが、明確にとらえられるものではなかった。

遺物は、全く出土していない。



第269図　F－15掘立柱建物址（1：80）

(15)　F－15号掘立柱建物址

第269図

F－15号掘立柱建物址は、第Ⅰ区ネ－32グリッドにおいて検出された。そのプランの東側は調査対象外地区にのびており、全体を検出するには至らなかった。

本掘立柱建物址は、西列が2間となる側柱式の掘立柱建物址で、南列では幅1m前後の浅い溝をもつ。南北3.8mを測る。柱間は西列では1.8～2.0mを測る。

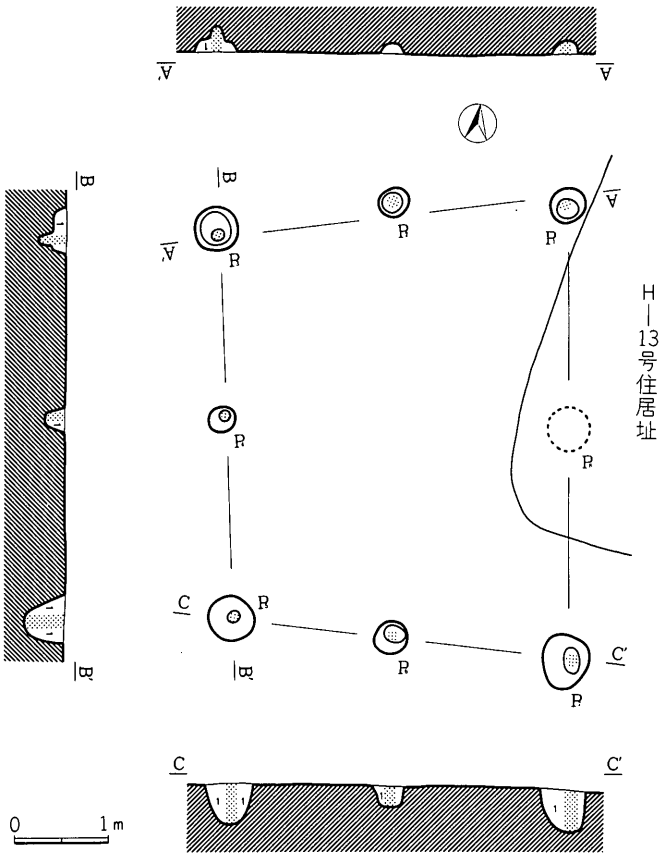
本址の南北軸方向は、N－6°－Eを指す。

各ピットの掘り方のプランは、円形を呈していた。

その埋土は、スコリア・パミスを全く含まない黒色土層（10YR 1.7/1）Ⅰ層のみであった。

各ピットにおける柱痕部分は、とりあえず図中にはスクリーントーンで示したが、明確にとらえられるものではなかった。

遺物は、全く出土していない。



第270図　Ｆ－16号掘立柱建物址実測図（１：80）

(16)　Ｆ－16号掘立柱建物址

第270図

Ｆ－16号掘立柱建物址は、第Ⅰ区ヒ－34グリッドにおいて検出された。

本掘立柱建物址は、Ｈ－13号住居址と重複するが、その新旧関係は把握できなかった。

本掘立柱建物址は、２間×２間の側柱式の掘立柱建物址で、南北4.0～4.8m東西3.6mの歪んだ矩形のプランを呈し、床面積16.0m²を測る。柱間は、南北列では1.8～2.0m西列では1.8～2.2mを測る。

本址の南北軸方向は、Ｎ－17°－Ｗを指す。

各ピットの掘り方のプランは、円形もしくは楕円形を呈していた。

その埋土は、スコリア・パミスを全く含まない黒色土層（10YR 1.7/1）Ⅰ層のみであった。

各ピットにおける柱痕部分は、とりあえず図中にはスクリーントーンで示したが、明確にとらえられるものではなかった。遺物は、出土していない。

(17)　F－17号掘立柱建物址

第271図

F－17号掘立柱建物址は、第Ⅰ区ヒ－33グリッドにおいて検出された。

本掘立柱建物址は、H－13号住居址と重複しその新旧関係は微妙であったが、一応本掘立柱建物址はH－13号住居址に先行して存在するものと把握された。

本掘立柱建物址は、2.6mを測る東列の2間が検出されたのみで、その柱間は、1.2～1.4mを測る。

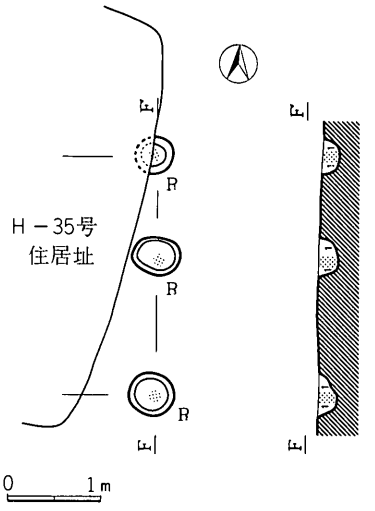
本址の南北軸方向は、N－14°－Wを指す。

各ピットの掘り方のプランは、円形もしくは楕円形を呈している。

その埋土は、スコリア・パミスを全く含まない黒色土層（10YR 1.7/1）Ⅰ層であった。

各ピットにおける柱痕部分は、とりあえず図中にはスクリーントーンで示したが、明確にとらえられるものではなかった。

遺物は、出土していない。



第271図　F－17号掘立柱建物址実測図（1：80）

(18)　F－18号掘立柱建物址

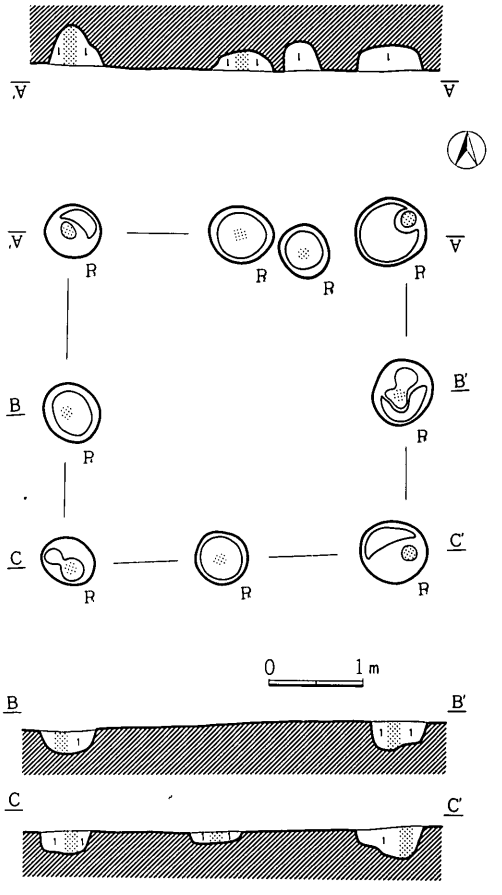
第272図

F－18号掘立柱建物址は、第Ⅰ区ヒ－32グリッドにおいて検出された。

本址は、P_9が不規則な配置をみせるが、基本的には2間×2間の側柱式の掘立柱建物址で、南北3.6m東西3.6mの方形のプランを呈し、床面積13.0m²を測る。柱間は、南北列では1.8m、東西列では1.8～2.0mを測る。

本址の南北軸方向は、N－12°－Wを指す。

各ピットの掘り方のプランは、円形もしくは楕円形を呈していた。



第272図　F－18号掘立柱建物址実測図（1：80）

その埋土は、スコリア・パミスを全く含まない黒色土層（10YR 1.7/1）Ⅰ層のみであった。

各ピットにおける柱痕部分は、とりあえず図中にはスクリーントーンで示したが、明確にとらえられるものではなかった。

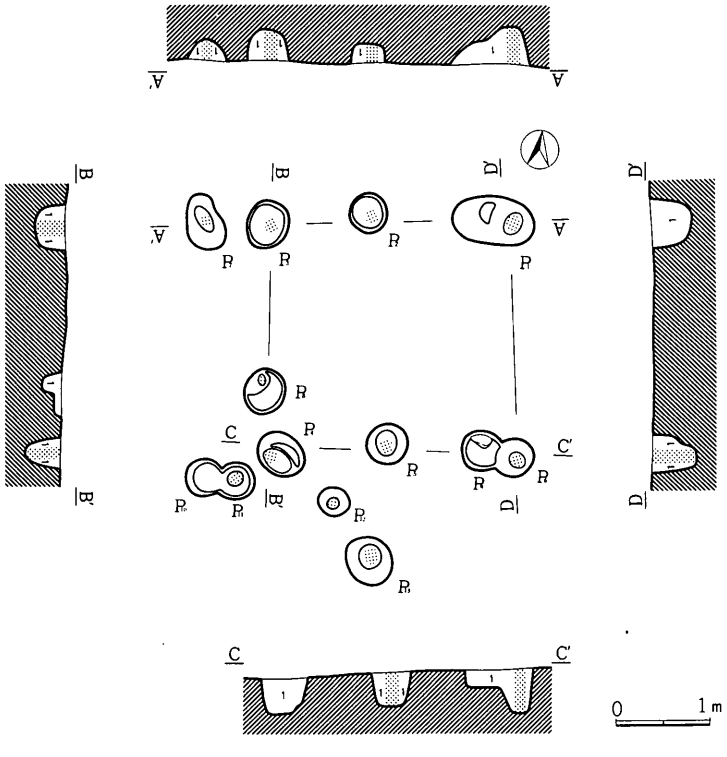
遺物は、P_2の埋土中より、奈良・平安時代の土師器甕の破片４片が出土しているほか、八世紀第Ⅱ四半期に特徴的な須恵器坏の破片も認められた。よって本掘立柱建物址所産期は、遺物の示す八世紀第Ⅱ四半期か、それ以降であることが少なくともいえよう。

（19）　Ｆ－19号掘立柱建物址

第273図

Ｆ－19号掘立柱建物址は、第Ⅰ区ヒ－32グリッドにおいて検出された。

本掘立柱建物址は、東列１間×西南北列２間の側柱式の掘立柱建物址で、南北2.4m東西2.4mの方形のプランを呈し、床面積5.8m²を測る。柱間は、南北列では1.0～1.4m、東西列では0.8～2.4mを測る。なお、本址の周囲にいくつかのピットが認められるが、本址に付随するものかどうかはわからない。



第273図　Ｆ－19号掘立柱建物址実測図（１：80）

本址の南北軸方向は、N－12°－Wを指す。

各ピットの掘り方のプランは、円形もしくは楕円形を呈していた。

その埋土は、スコリア・パミスを全く含まない黒色土層（10YR 1.7/1）Ⅰ層のみであった。

各ピットにおける柱痕部分は、とりあえず図中にはスクリーントーンで示したが、明確にとらえられるものではなかった。

遺物は出土していない。

(20)　F－20号掘立柱建物址

第274図

F－20号掘立柱建物址は、第Ⅰ区ヒ－33グリッドにおいて検出された。

本掘立柱建物址は不規則なピットの配置をみせているが、一応、総柱式の掘立柱建物址ととらえられよう。南北4.0m東西2.6～3.4mの歪んだ矩形のプランを呈し、床面積11.5m²を測る。

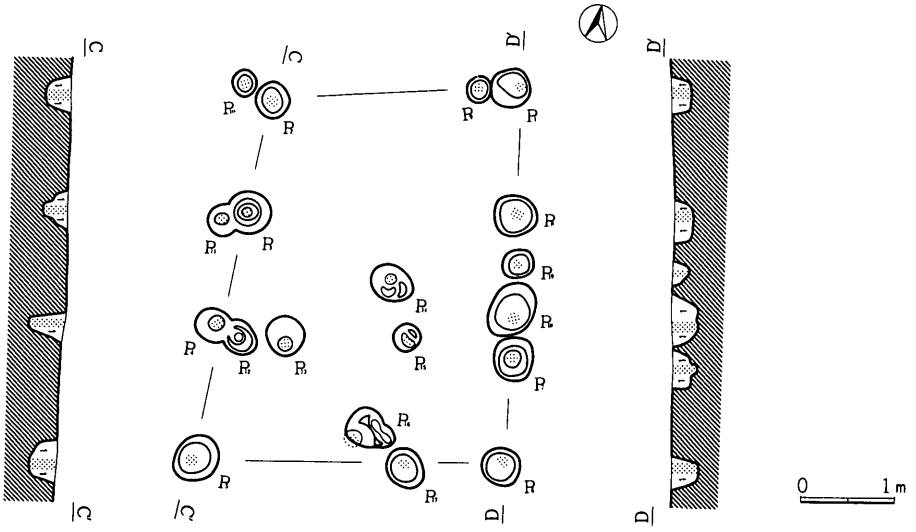
本址の南北軸方向は、N－16°－Wを指す。

各ピットの掘り方のプランは、円形・楕円形もしくは方形を呈していた。

その埋土は、スコリア・パミスを全く含まない黒色土層（10YR 1.7/1）Ⅰ層のみであった。

各ピットにおける柱痕部分は、とりあえず図中にはスクリーントーンで示したが、明確にとらえられるものではなかった。

遺物は出土していない。



第274図　F－20号掘立柱建物址実測図（1：80）

(21)　F－21号掘立柱建物址

第275図

F－21号掘立柱建物址は、第Ⅰ区フ－33グリッドにおいて検出された。

本掘立柱建物址は、2間×3間の側柱式の掘立柱建物址で、南北4.2m東西3.4mの矩形のプランを呈し、床面積14.3m²を測る。柱間は、南北列では1.6m、東西列では1.2～1.6mを測る。

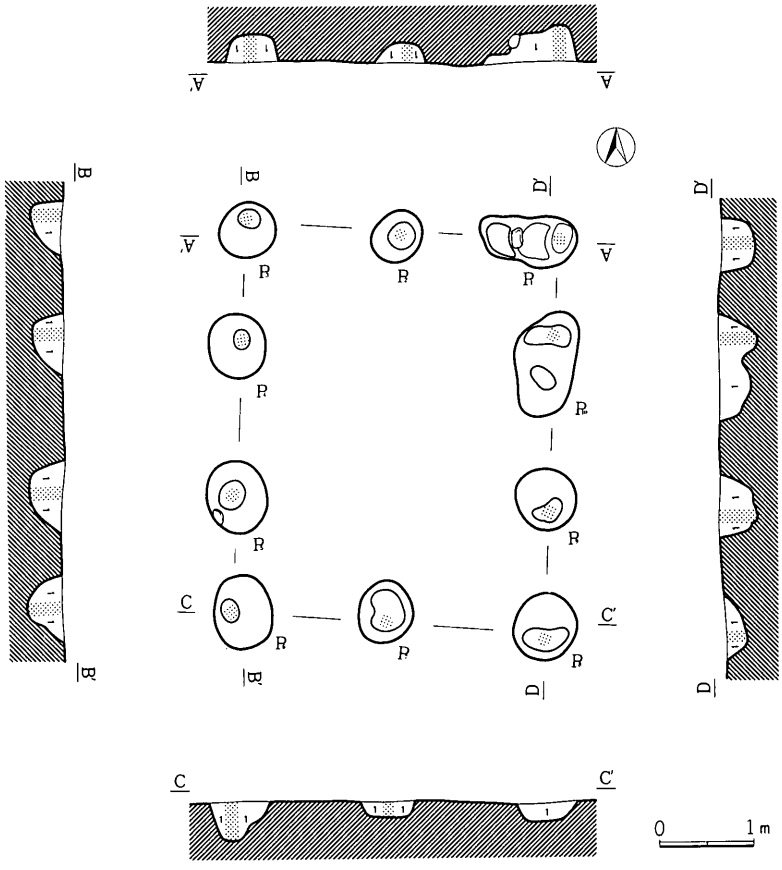
その南北軸方向は、N－9°－Wを指す。

各ピットの掘り方のプランは、いずれも歪んだ円形ないしは楕円形を呈していた。

その埋土は、スコリア・パミスを全く含まない黒色土層（10YR 1.7/1）Ⅰ層のみであった。

各ピットにおける柱痕部分は、とりあえず図中にはスクリーントーンで示したが、明確にとらえられるものではなかった。

遺物は、P_7の埋土中より奈良・平安時代の土師器甕の破片1片が出土している。よって本掘立柱建物址所産期は、遺物の示す奈良・平安時代かそれ以降であることが少なくともいえよう。



第275図　F－21号掘立柱建物址実測図（1：80）

(22)　F－22号掘立柱建物址

第276図

F－22号掘立柱建物址は、第Ⅰ区フ－33グリッドにおいて検出された。

本掘立柱建物址は、2間×3間の側柱式の掘立柱建物址で、南北3.8m東西4.8mの矩形のプランを呈し、床面積18.2m²を測る。柱間は、南北列では1.4～1.8m、東西列では1.8mを測る。

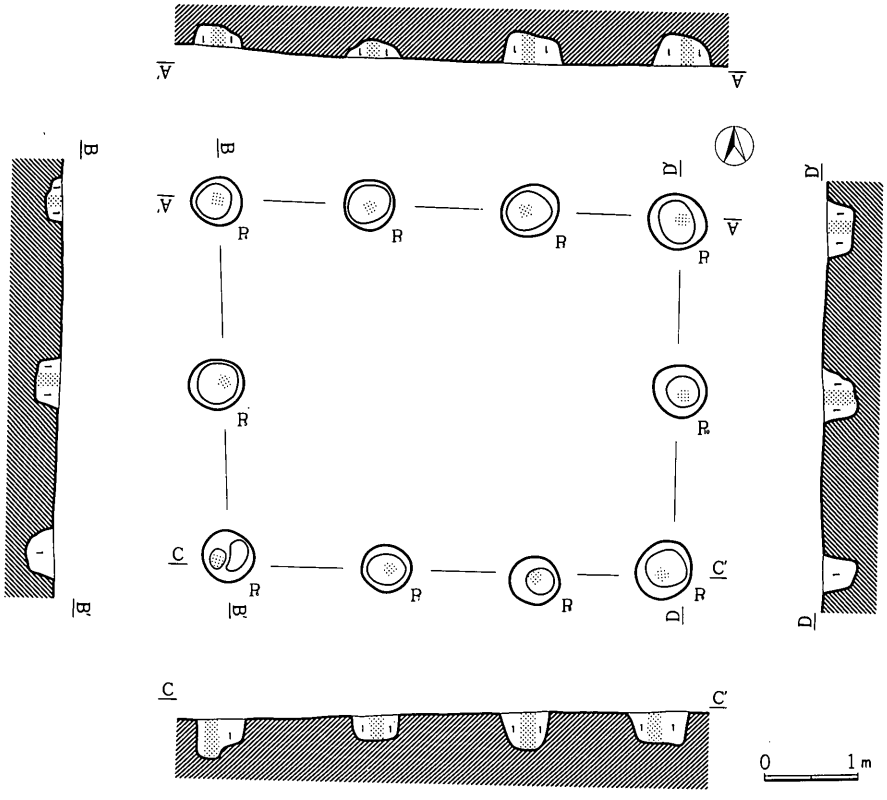
その南北軸方向は、N－1°－Wを指す。

各ピットの掘り方のプランは、いずれも円形を呈していた。

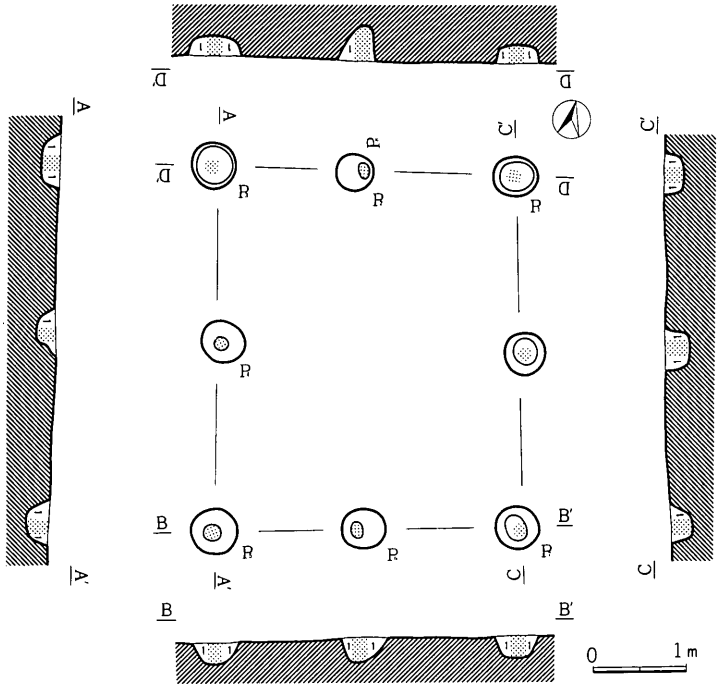
その埋土は、スコリア・パミスを全く含まない黒色土層（10YR 1.7/1）Ⅰ層のみであった。

各ピットにおける柱痕部分は、とりあえず図中にはスクリーントーンで示したが、明確にとらえられるものではなかった。

遺物は、ピットの埋土中より、奈良時代の須恵器坏・高台付坏・土師器甕の破片が出土している。よって本掘立柱建物址所産期は、遺物の示す奈良時代かそれ以降であることが少なくともいえよう。



第276図　F－22号掘立柱建物址実測図（1：80）



第277図　Ｆ－23号掘立柱建物址実測図（Ｉ：80）

(23)　Ｆ－23号掘立柱建物址

第277図

Ｆ－23号掘立柱建物址は、第Ｉ区ヒ－32グリッドにおいて検出された。

本掘立柱建物址は、Ｈ－21号住居址およびＦ－33号掘立柱建物址の東側と重複するが、両者との新旧関係はとらえられなかった。

本掘立柱建物址は、２間×２間の側柱式の掘立柱建物址で、南北3.8m東西3.2mの矩形のプランを呈し、床面積12.2m²を測る。柱間は、南北列では1.6m、東西列では1.8～2.0mを測る。

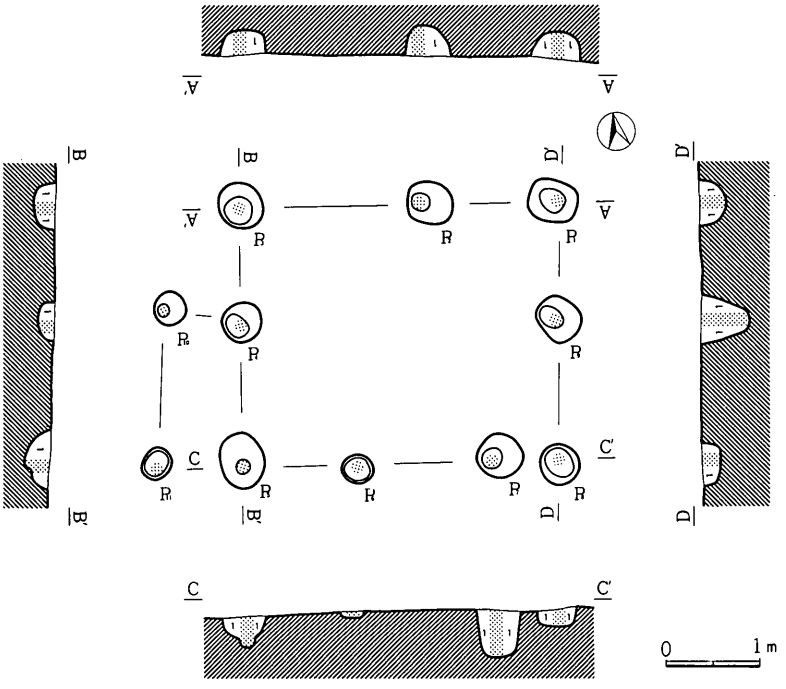
本址の南北軸方向は、Ｎ－20°－Ｗを指す。

各ピットの掘り方のプランは、いずれも円形を呈していた。

その埋土は、スコリア・パミスを全く含まない黒色土層（10YR 1.7/1）Ｉ層のみであった。

各ピットにおける柱痕部分は、とりあえず図中にはスクリーントーンで示したが、明確にとらえられるものではなかった。

遺物は、ピットの埋土中より、奈良・平安時代の土師器甕の破片２片が出土している。よって本掘立柱建物址所産期は、遺物の示す奈良・平安時代かそれ以降であることが少なくともいえよう。



第278図　F－24号掘立柱建物址実測図（1：80）

(24)　F－24号掘立柱建物址

第278図

F－24号掘立柱建物址は、第Ⅰ区ヌ－32・33グリッドにおいて検出された。

本掘立柱建物址は、東西北列2間×南列3間の側柱式の掘立柱建物址で、西列にはいわゆる廂をもっている。南北2.8m東西3.4mの矩形のプランを呈し、床面積9.5m²を測る。柱間は、南北列では0.8～2.0m、東西列では1.4～1.2mを測る。なお廂部は西列より約1m離れて存在する。

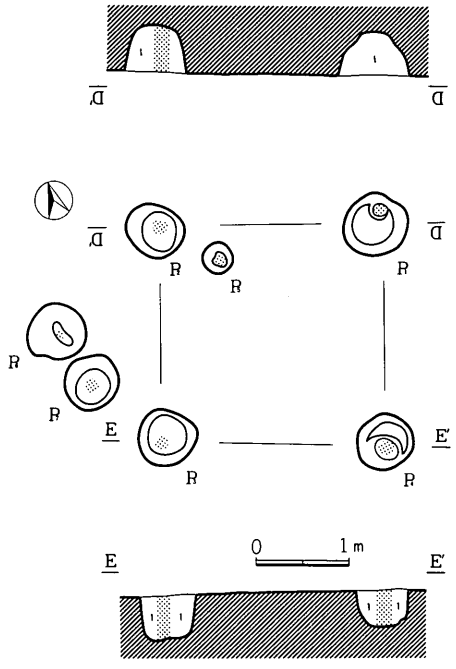
本址の南北軸方向は、N－9°－Eを指す。

各ピットの掘り方のプランは、円形ないしは楕円形を呈していた。

その埋土は、スコリア・パミスを全く含まない黒色土層（10YR 1.7/1）Ⅰ層のみであった。

各ピットにおける柱痕部分は、とりあえず図中にはスクリーントーンで示したが、明確にとらえられるものではなかった。

遺物は、ピットの埋土中より、奈良・平安時代の須恵器坏・甕、土師器甕の破片4片が出土している。よって本掘立柱建物址所産期は、遺物の示す奈良・平安時代かそれ以降であることが少なくともいえよう。



第279図　Ｆ－25号掘立柱建物址実測図（１：80）

(25)　Ｆ－25号掘立柱建物址

第279図

Ｆ－25号掘立柱建物址は、第Ｉ区ヌ－32グリッドにおいて検出された。

本掘立柱建物址は、１間×１間の側柱式の掘立柱建物址で、南北2.4m東西2.4mの方形のプランを呈し、床面積5.8m²を測る。なお、本掘立柱建物址の周囲にはいくつかピットが認められるが（P_5～P_7）、本址に伴うものかどうかはわからない。

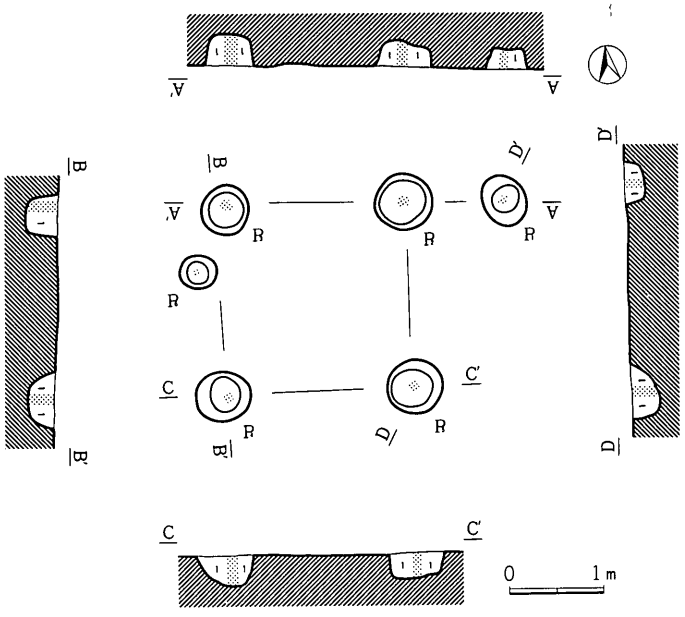
本址の南北軸方向は、Ｎ－９°－Ｅを指す。

各ピットの掘り方のプランは、円形もしくは楕円形を呈していた。

その埋土は、スコリア・パミスを全く含まない黒色土層（10YR 1.7/1）Ｉ層のみであった。

各ピットにおける柱痕部分は、とりあえず図中にはスクリーントーンで示したが、明確にとらえられるものではなかった。

遺物は、出土していない。



第280図　Ｆ－26号掘立柱建物址

(26)　Ｆ－26号掘立柱建物址

第280図

Ｆ－26号掘立柱建物址は、第Ｉ区フ－33グリッドにおいて検出された。

本掘立柱建物址は、１間×１間の側柱式の掘立柱建物址で、南北2.0m東西2.0mの方形のプランを呈し、床面積4.0m²を測る。なお、本址には図のP_5P_6が付随する可能性がある。

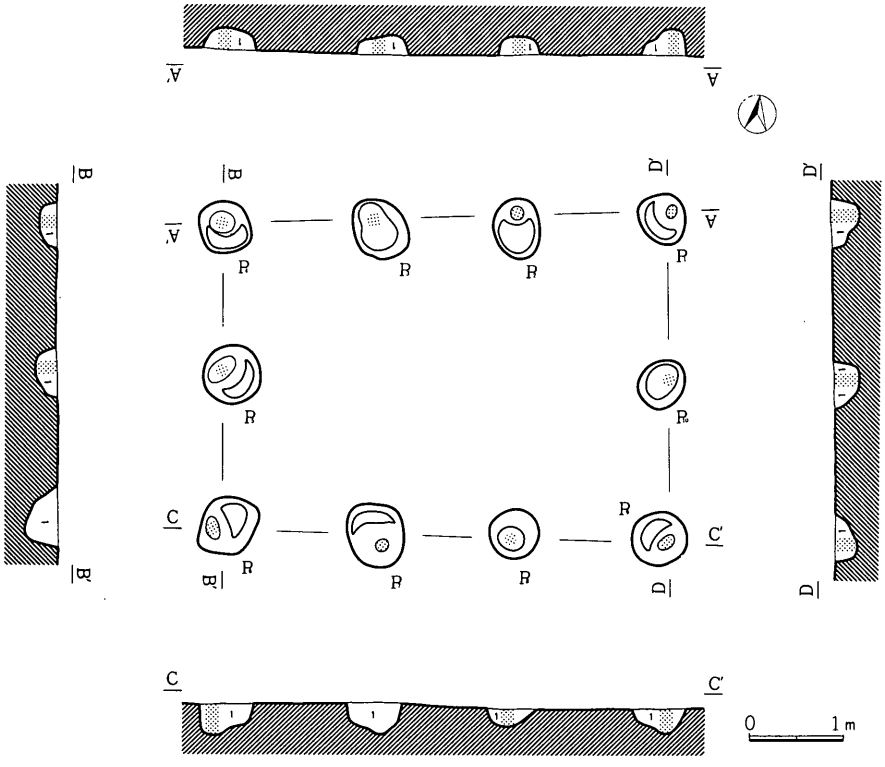
本址の南北軸方向は、Ｎ－１°－Ｗを指す。

各ピットの掘り方のプランは、円形もしくは楕円形を呈していた。

その埋土は、スコリア・パミスを全く含まない黒色土層（10YR 1.7/1）Ｉ層のみであった。

各ピットにおける柱痕部分は、とりあえず図中にはスクリーントーンで示したが、明確にとらえられるものではなかった。

遺物は、ピットの埋土中より、奈良・平安時代の須恵器坏・甕、土師器甕の破片が出土している。よって本掘立柱建物址所産期は、遺物の示す奈良・平安時代かそれ以降であることが少なくともいえよう。



第281図　F－27号掘立柱建物址実測図（1：80）

(27)　F－27号掘立柱建物址

第281図

F－27号掘立柱建物址は、第Ⅰ区ハ－33グリッドにおいて検出された。

本掘立柱建物址は、2間×3間の側柱式の掘立柱建物址で、南北3.2m東西4.8mの矩形のプランを呈し、床面積15.4m²を測る。柱間は、南北列では1.6m東西列では1.6mを測る。

本址の南北軸方向は、N－14°－Wを指す。

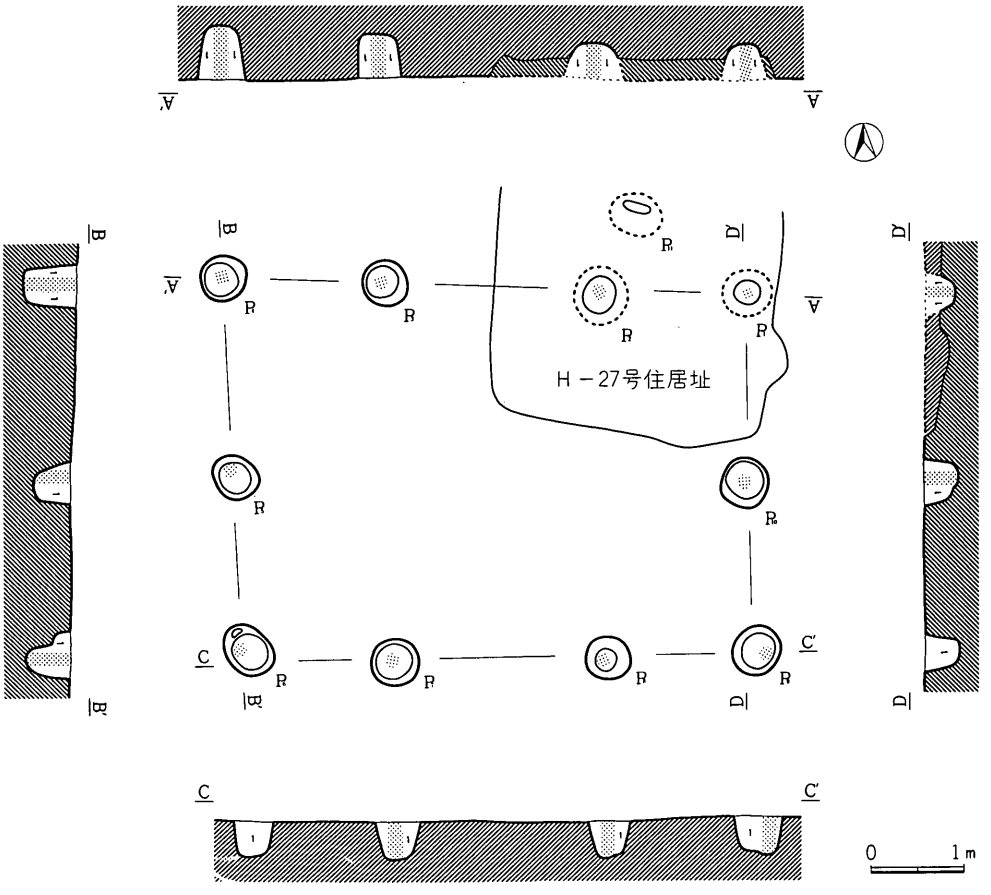
各ピットの掘り方のプランは、円形もしくは楕円形・方形を呈している。

その埋土は、スコリア・パミスを全く含まない黒色土層（10YR 1.7/1）Ⅰ層のみであった。

各ピットにおける柱痕部分は、とりあえず図中にはスクリーントーンで示したが、明確にとらえられるものではなかった。

遺物は、出土していない。

2　掘立柱建物址



第282図　F－28号掘立柱建物址実測図（1：80）

第103表　F－28号掘立柱建物址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1（回）	甕（土）	〈21.0〉 — —	口縁部はコの字状に外反する。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みにぶい褐色（7.5 YR 5/3）

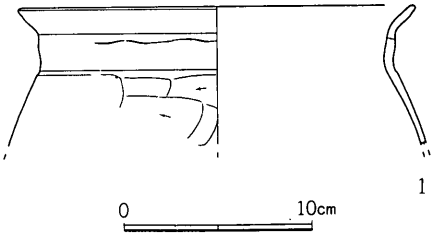
(28)　F－28号掘立柱建物址

第282図

F－28号掘立柱建物址は、第Ⅰ区ヒ－34グリッドにおいて検出された。

本掘立柱建物址はH－27号住居址と重複するが、本掘立柱建物址が古いものとしてとらえられた。

本址は、2間×3間の側柱式の掘立柱建物址で、



第283図　F－28号掘立柱建物址出土遺物（1：4）

南北4.0m東西5.6mの矩形のプランを呈し、床面積22.4m²を測る。柱間は、南北列では1.6～2.2m、東西列では1.8～2.0mを測る。

本址の南北軸方向は、N－7°－Wを指す。

各ピットの掘り方のプランは、円形を呈していた。

その埋土は、スコリア・パミスを全く含まない黒色土層（10YR 1.7/1）Ⅰ層のみであった。

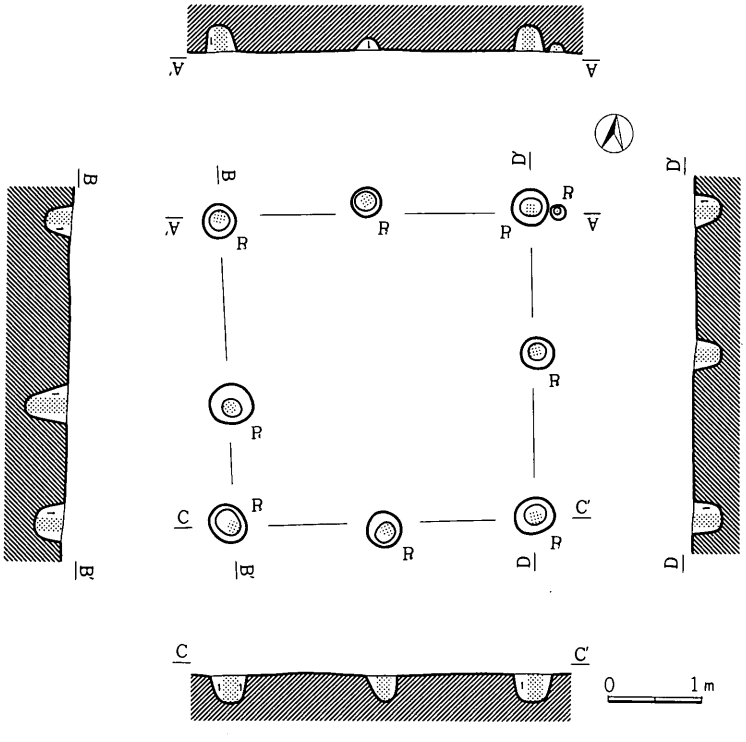
各ピットにおける柱痕部分は、とりあえず図中にはスクリーントーンで示したが、明確にとらえられるものではなかった。

遺物は、P_5の埋土中より第283図1の平安時代のコの字状口縁土師器甕の破片が出土している。よって本掘立柱建物址所産期は、遺物の示す平安時代のある時期かそれ以降で、また、H－27号住居址の所産期以前であることが少なくともいえよう。

(29)　F－29号掘立柱建物址

第284図

F－29号掘立柱建物址は、第Ⅰ区ハ－35グリッドにおいて検出された。



第284図　F－29号掘立柱建物址実測図（1：80）

本掘立柱建物址は、２間×２間の側柱式の掘立柱建物址で、南北3.3m東西3.3mの方形のプランを呈し、床面積11.0m²を測る。柱間は、南北列では1.4～1.7m、東西列では1.2～2.0mを測る。なお、P_1の脇には小形のピットP_9が付随する。

本址の南北軸方向は、N－14°－Wを指す。

各ピットの掘り方のプランは、円形を呈していた。

その埋土は、スコリア・パミスを全く含まない黒色土層（10YR 1.7/1）Ⅰ層のみであった。

各ピットにおける柱痕部分は、とりあえず図中にはスクリーントーンで示したが、明確にとらえられるものではなかった。

遺物は出土していない。

(30)　Ｆ－30号掘立柱建物址

第285図

Ｆ－30号掘立柱建物址は、第Ⅰ区ハ－33グリッドにおいて検出された。

本掘立柱建物址は、２間×２間の掘立柱建物址で、P_9が付随すれば総柱式、P_9が付随しなければ側柱式のプランとなる。南北2.8m東西3.2mの矩形のプランを呈し、床面積9.0m²を測る。柱間は、南北列では0.6～2.6m、東西列では1.4mを測る。

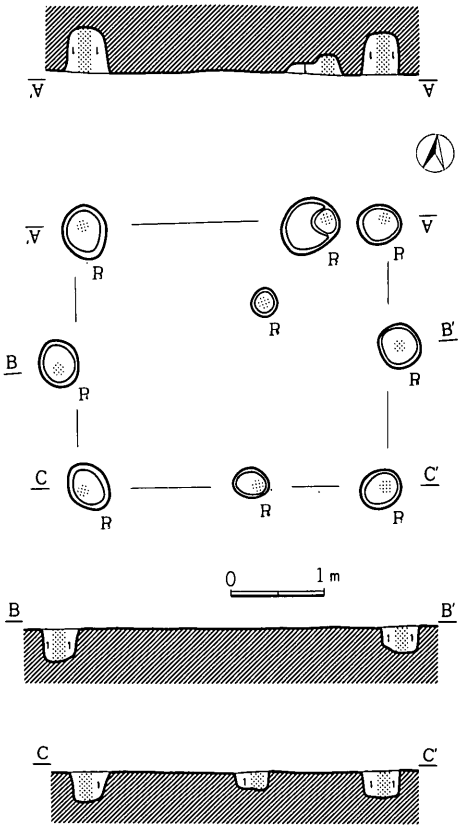
本址の南北軸方向は、N－17°－Wを指す。

各ピットの掘り方のプランは、円形・楕円形もしくは方形を呈していた。

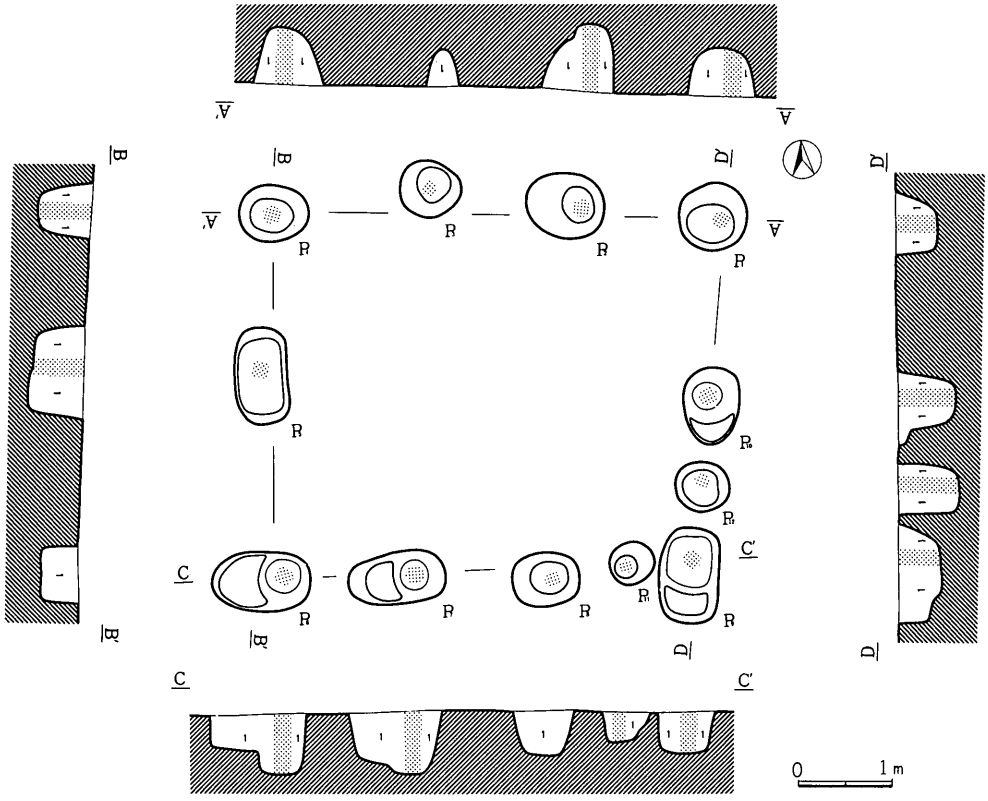
その埋土は、スコリア・パミスを全く含まない黒色土層（10YR 1.7/1）Ⅰ層のみであった。

各ピットにおける柱痕部分は、とりあえず図中にはスクリーントーンで示したが、明確にとらえられるものではなかった。

遺物は出土していない。



第285図　Ｆ－30号掘立柱建物址実測図（Ⅰ：80）



第286図　Ｆ－31号掘立柱建物址実測図（１：80）

(31)　Ｆ－31号掘立柱建物址

第286図

Ｆ－31号掘立柱建物址は、第Ⅰ区フ－34グリッドにおいて検出された。

本址は、Ｈ－26号住居址を切って存在している。またＦ－48号掘立柱建物址と重複するが、両者の新旧関係はとらえられなかった。

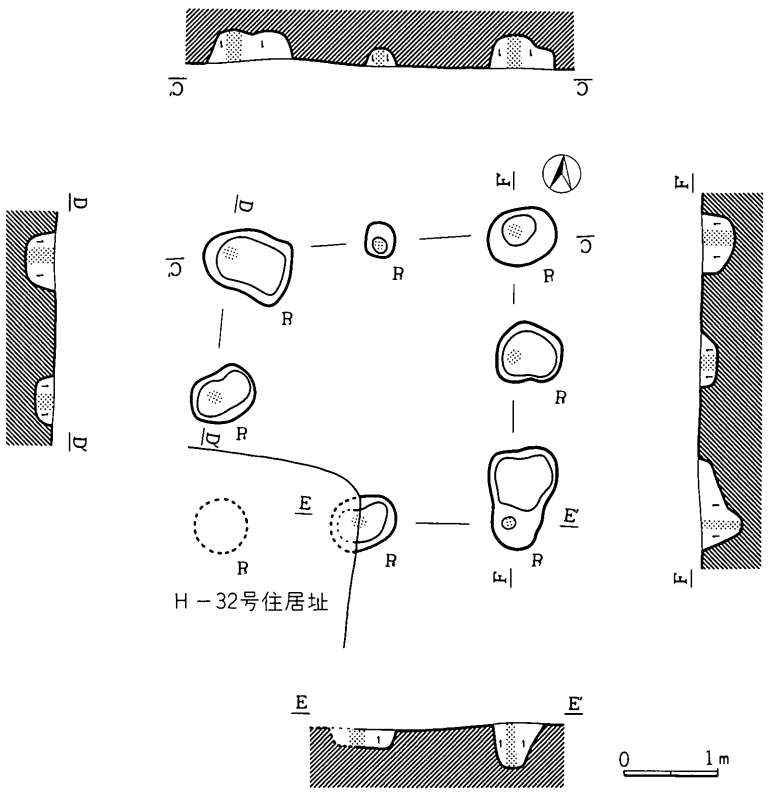
本掘立柱建物址は、西列２間・東列３間×北列３間・南列４間の側柱式の掘立柱建物址で、南北3.8m東西4.8mの方形のプランを呈し、床面積18.2m²を測る。柱間は、南北列では0.8～1.6m、東西列では0.8～2.2mを測る。

その南北軸方向は、Ｎ－０°－Ｓを指す。

各ピットの掘り方のプランは、円形・楕円形ないし方形を呈していた。

その埋土は、ロームを多量に含む褐色土層（10YR 4/4）で、その柱痕部分は黒色土（10YR 1.7/1）として明確にとらえられ、図中にはスクリーントーンで示した。

遺物は、P_5の埋土中より、奈良・平安時代の土師器甕の破片が出土している。よって本掘立柱建物址所産期は、遺物の示す奈良・平安時代か、それ以降であることが少なくともいえよう。



第287図　F－32号掘立柱建物址実測図（1：80）

(32)　F－32号掘立柱建物址

第287図

F－32号掘立柱建物址は、第Ⅰ区ハ－36グリッドにおいて検出された。

本掘立柱建物址はH－32号住居址と重複するが、新旧関係はとらえられなかった。

本掘立柱建物址は、2間×2間の側柱式の掘立柱建物址で、南北3.0m東西3.0mの方形のプランを呈し、床面積9.0m²を測る。柱間は、南北列では1.4～1.6m東西列では1.3～1.6mを測る。

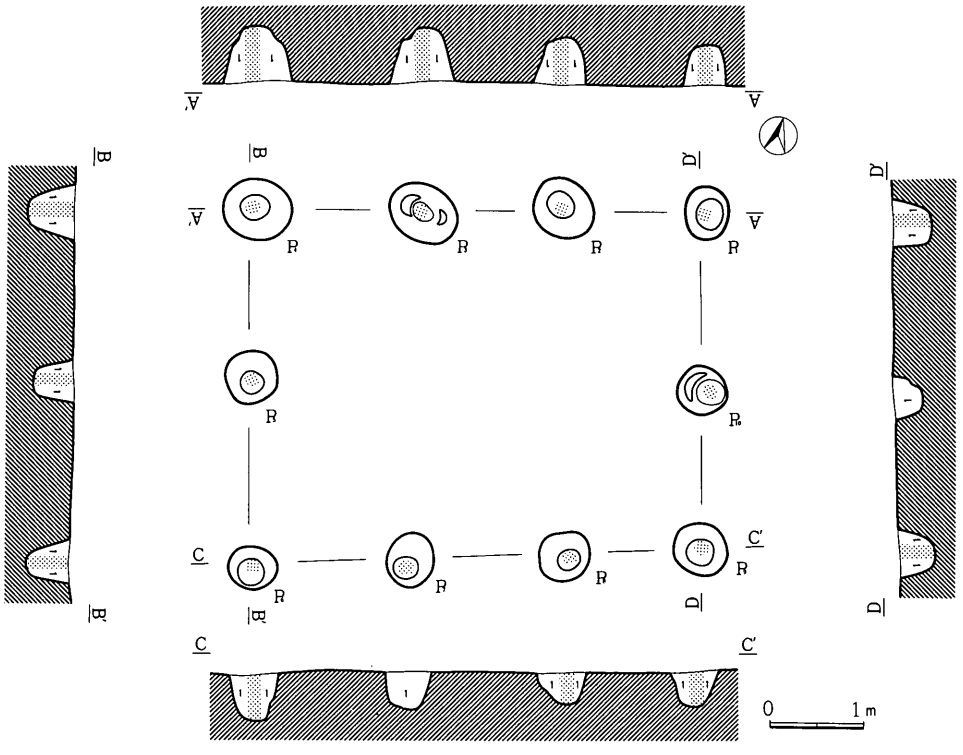
その南北軸方向は、N－12°－Wを指す。

各ピットの掘り方のプランは、歪んだ円形ないし楕円形を呈していた。

その埋土は、スコリア・パミスを全く含まない黒色土層（10YR 1.7/1）Ⅰ層のみであった。

各ピットにおける柱痕部分は、とりあえず図中にはスクリーントーンで示したが、明確にとらえられるものではなかった。

遺物は、出土していない。



第288図　Ｆ－33号掘立柱建物址実測図（Ｉ：80）

(33)　Ｆ－33号掘立柱建物址

第288図

Ｆ－33号掘立柱建物址は、第Ｉ区ヒ－32グリッドにおいて検出された。

本址は、Ｈ－21号住居址を切って存在している。またＦ－23号掘立柱建物址と重複するが、両者の新旧関係はとらえられなかった。

本掘立柱建物址は、２間×３間の側柱式の掘立柱建物址で、南北3.8m東西4.8mの矩形のプランを呈し、床面積18.2m²を測る。柱間は、南北列では1.4～1.8m東西列では1.6～2.0mを測る。

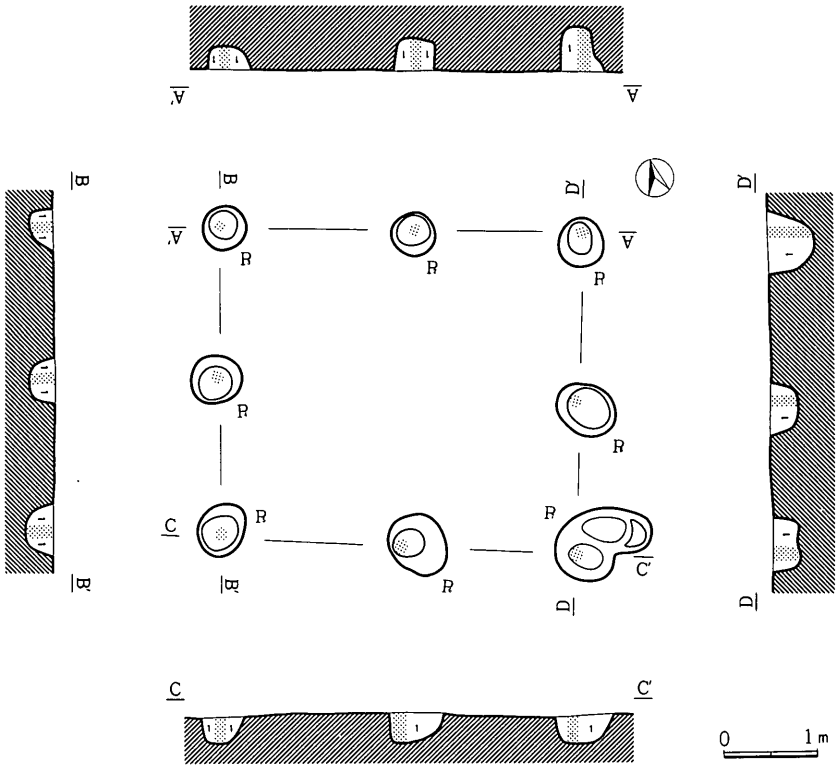
本址の南北軸方向は、Ｎ－22°－Ｗを指す。

各ピットの掘り方のプランは、いずれも円形ないし楕円形を呈していた。

その埋土は、スコリア・パミスを全く含まない黒色土層（10YR 1.7/1）Ｉ層のみであった。

各ピットにおける柱痕部分は、とりあえず図中にはスクリーントーンで示したが、明確にとらえられるものではなかった。

遺物は、P_7の埋土中より、奈良・平安時代の須恵器甕の破片が出土している。よって本掘立柱建物址所産期は、遺物の示す奈良・平安時代か、それ以降であることが少なくともいえよう。



第289図　Ｆ－34号掘立柱建物址実測図（Ｉ：80）

(34)　Ｆ－34号掘立柱建物址

第289図

Ｆ－34号掘立柱建物址は、第Ｉ区ヒ－34グリッドにおいて検出された。

本掘立柱建物址はＨ－33号住居址と重複するが、本址が新しいものとしてとらえられた。

本掘立柱建物址は、２間×２間の側柱式の掘立柱建物址で、南北3.2m東西3.8mの矩形のプランを呈し、床面積12.2m²を測る。柱間は、南北列では1.8～2.0m、東西列では1.6～1.8mを測る。

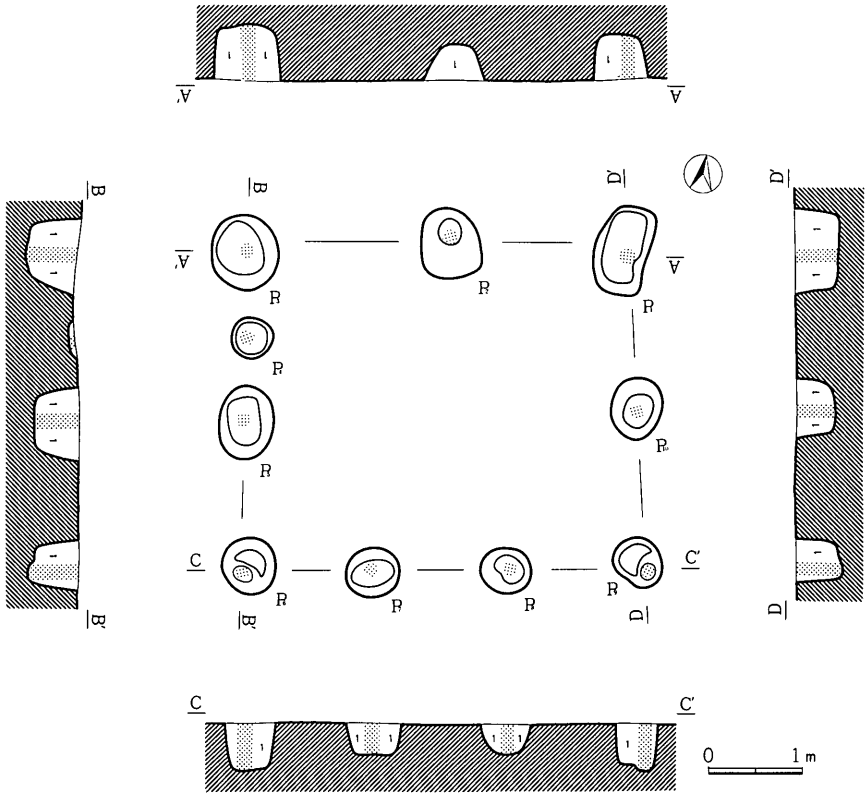
本址の南北軸方向は、Ｎ－５°－Ｗを指す。

ピットの掘り方のプランは、P_7を除いて円形を呈していた。

その埋土は、スコリア・パミスを全く含まない黒色土層（10YR 1.7/1）Ｉ層のみであった。

各ピットにおける柱痕部分は、とりあえず図中にはスクリーントーンで示したが、明確にとらえられるものではなかった。

遺物は、出土していない。



第290図　Ｆ－35号掘立柱建物址実測図（１：80）

(35)　Ｆ－35号掘立柱建物址

第290図

Ｆ－35号掘立柱建物址は、第Ｉ区ハ－36グリッドにおいて検出された。

本掘立柱建物址は、東列２間・西列３間×北列２間・南列３間の側柱式の掘立柱建物址で、南北3.4m東西4.3mの矩形のプランを呈し、床面積14.6m²を測る。柱間は、南北列では1.4～2.0m、東西列では0.8～1.6mを測る。

本址の南北軸方向は、Ｎ－17°－Ｗを指す。

各ピットの掘り方のプランは、円形・楕円形もしくは方形を呈していた。

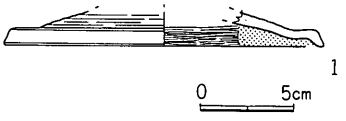
その埋土は、スコリア・パミスを全く含まない黒色土層（10YR 1.7/1）Ｉ層のみであった。

各ピットにおける柱痕部分は、とりあえず図中にはスクリーントーンで示したが、明確にとらえられるものではなかった。

遺物は、P_1の埋土中より、奈良・平安時代の須恵器甕の破片が出土している。また、第291図１は奈良・平安時代の須恵器模倣の土師器蓋で、内面黒色研磨のなされたものである。よって本掘

第104表　F－35掘立柱建物址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1（完）	蓋（土）	― ― 〈17.0〉	須恵器蓋の模倣かと考えられる。	外面　ロクロヨコナデ。 内面　黒色研磨 （ロクロ左回転）	胎土は砂粒を含みにぶい褐色（7.5 YR 5/4）



第291図　F－35号掘立柱建物址出土遺物（1：4）

立柱建物址所産期は、遺物の示す奈良・平安時代か、それ以降であることが少なくともいえよう。

(36)　F－36号掘立柱建物址

第292図

F－36号掘立柱建物址は、第Ⅰ区ヒ－36グリッドにおいて検出された。

本掘立柱建物址は、1間×1間の側柱式の掘立柱建物址で、南北2.2m東西2.2mの方形のプランを呈し、床面積4.8m²を測る。なお、本址のP_2は暗渠排水によってその一部を破壊されている。

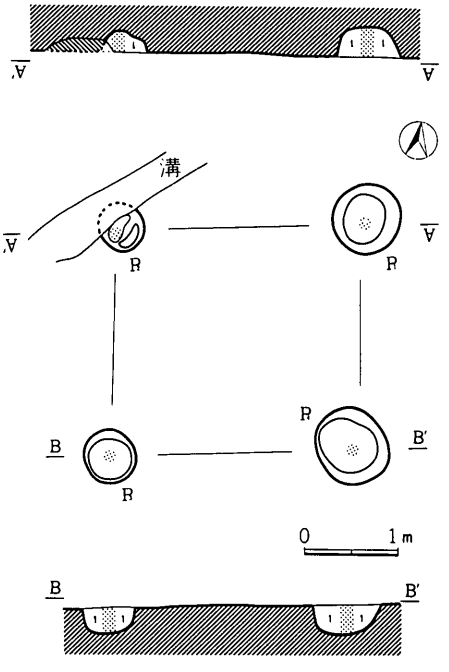
本址の南北軸方向は、N－15°－Wを指す。

各ピットの掘り方のプランは、円形もしくは楕円形を呈していた。

その埋土は、スコリア・パミスを全く含まない黒色土層（10YR 1.7/1）Ⅰ層のみであった。

各ピットにおける柱痕部分は、とりあえず図中にはスクリーントーンで示したが、明確にとらえられるものではなかった。

遺物は、出土していない。



第292図　F－36号掘立柱建物址（1：80）

(37)　F－37号掘立柱建物址

第293図

F－37号掘立柱建物址は、第Ⅰ区ハ－36グリッドにおいて検出された。

本掘立柱建物址は、1間×1間の側柱式の掘立柱建物址で、南北2.0m東西2.0mの方形のプランを呈し、床面積4.0m²を測る。なお、本址のP_3は暗渠排水によってその一部を破壊されている。

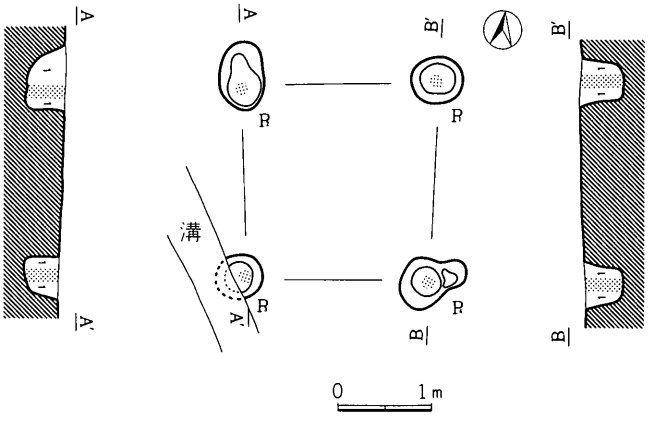
本址の南北軸方向は、N－14°－Wを指す。

P_4を除く各ピットの掘り方のプランは、円形ないし楕円形を呈している。

その埋土は、スコリア・パミスを全く含まない黒色土層（10YR 1.7/1）Ⅰ層のみであった。

各ピットにおける柱痕部分は、とりあえず図中にはスクリーントーンで示したが、明確にとらえられるものではなかった。

遺物は、出土していない。



第293図　F－37号掘立柱建物址実測図（1：80）

(38)　F－38号掘立柱建物址

第294図

F－38号掘立柱建物址は、第Ⅰ区ヒ－35グリッドにおいて検出された。

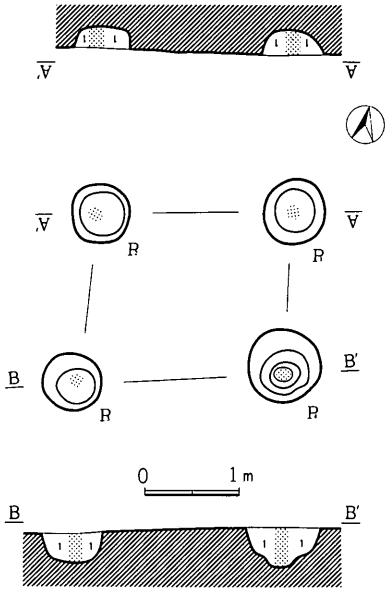
本掘立柱建物址は、1間×1間の側柱式の掘立柱建物址で、南北1.8m東西2.2mの矩形のプランを呈し、床面積4.0m²を測る。

本址の南北軸方向は、N－14°－Wを指す。

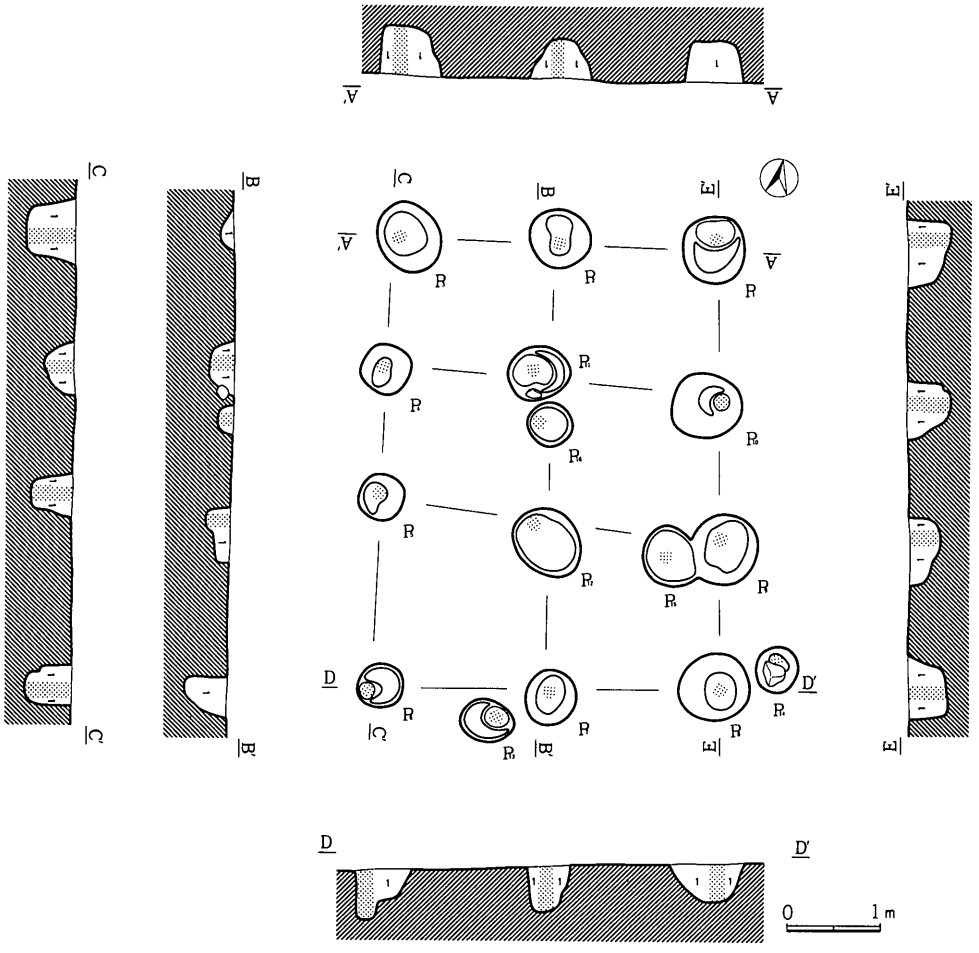
各ピットの掘り方のプランは、円形を呈していた。

その埋土は、スコリア・パミスを全く含まない黒色土層（10YR 1.7/1）Ⅰ層のみであった。

各ピットにおける柱痕部分は、とりあえず図中にはスクリーントーンで示したが、明確にとらえられるものではなかった。



第294図　F－36号掘立柱建物址実測図（1：80）



第295図　Ｆ－39号掘立柱建物址実測図（１：80）

遺物は、出土していない。

(39)　Ｆ－39号掘立柱建物址

第295図

Ｆ－39号掘立柱建物址は、第Ｉ区ハ－35グリッドにおいて検出された。

本掘立柱建物址は、２間×３間の総柱式の掘立柱建物址で、南北4.8m東西3.8mの矩形のプランを呈し、床面積18.2m²を測る。柱間は、南北列では1.6～1.9m東西列では1.4～2.2mを測る。なお、図の P_{13} ～ P_{16} は本址に伴うものかどうかわからない。

本址の南北軸方向は、N－15°－Wを指す。

各ピットの掘り方のプランは、円形ないしは楕円形を呈していた。

その埋土は、スコリア・パミスを全く含まない黒色土層（10YR 1.7/1）Ⅰ層のみであった。

各ピットにおける柱痕部分は、とりあえず図中にはスクリーントーンで示したが、明確にとらえられるものではなかった。

遺物は出土していない。

(40)　F－40号掘立柱建物址

第297図

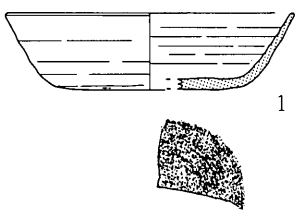
F－40号掘立柱建物址は、第Ⅰ区ハ－37グリッドにおいて検出された。

本掘立柱建物址の西列は調査対象地区外にのびてしまっているが、2間×3間の側柱式の掘立柱建物址となるものとおもわれ、南北3.7mの矩形のプランが推定される。

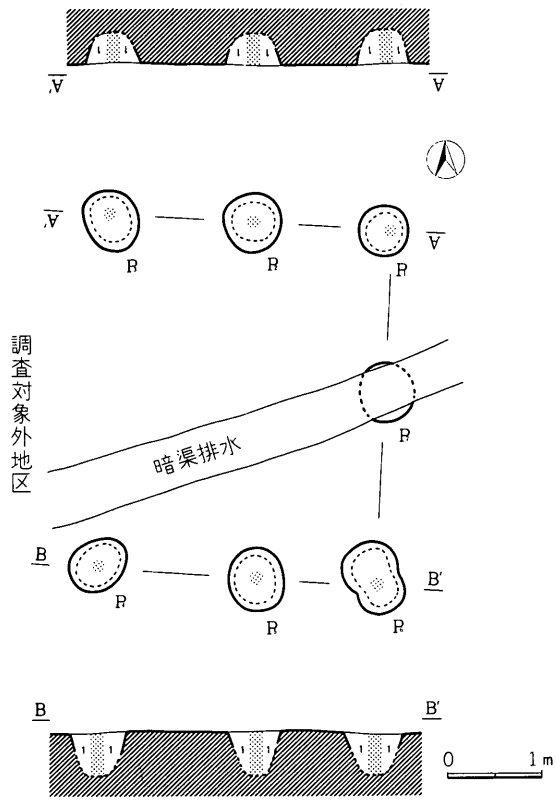
本址の南北軸方向は、N－6°－Wを指す。

各ピットの掘り方のプランは、円形を呈していた。

その埋土は、スコリア・パミスを全く含



第296図　F－40号掘立柱建物址出土遺物（1：4）



第297図　F－40号掘立柱建物址実測図（1：80）

第105表　F－40号掘立柱建物址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1（回）	坏（須）	〈15.3〉 4.1 〈10.0〉	体部は外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。 底部回転ヘラケズリ、切り離し方法不明 内面　体部ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み灰白色（10Y 7/1）

まない黒色土層（10YR 1.7/1）Ⅰ層のみであった。

各ピットにおける柱痕部分は、とりあえず図中にはスクリーントーンで示したが、明確にとらえられるものではなかった。

遺物は、P_5の埋土中より、奈良時代の須恵器坏・甕、土師器甕の破片が出土している。また、第296図1はP_2より出土した奈良時代（八世紀後半）の須恵器坏である。よって本掘立柱建物址所産期は、遺物の示す奈良時代（八世紀後半）か、それ以降であることが少なくともいえよう。

(41)　F－41号掘立柱建物址

第298図

F－41号掘立柱建物址は、第Ⅰ区ノ－36グリッドにおいて検出された。

本址は、H－26号住居址と重複するが、両者の新旧関係はとらえられなかった。

本掘立柱建物址は、東列2間の掘立柱建物址で、南北4.0mを測る。柱間は、東列では2.0mを測る。

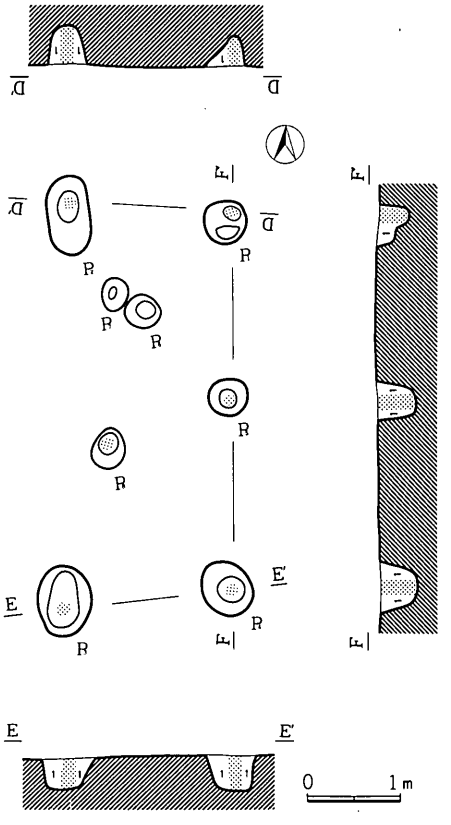
その南北軸方向は、N－12°－Wを指す。

各ピットの掘り方のプランは、円形・楕円形ないし方形を呈していた。

その埋土は、スコリア・パミスを全く含まない黒色土層（10YR 1.7/1）Ⅰ層のみであった。

各ピットにおける柱痕部分は、とりあえず図中にはスクリーントーンで示したが、明確にとらえられるものではなかった。

遺物は、出土していない。



第298図　F－41号掘立柱建物址実測図（1：80）

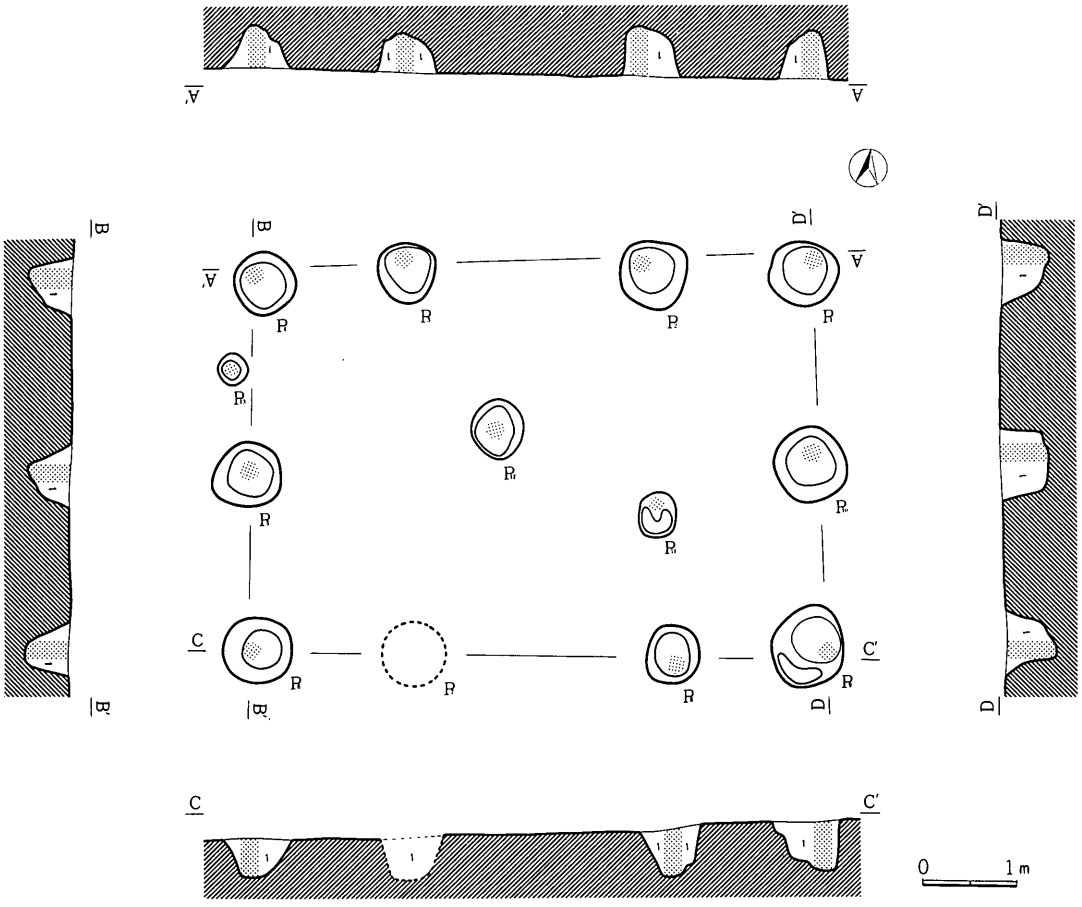
(42)　F－42号掘立柱建物址

第299図

F－42号掘立柱建物址は、第Ⅰ区ハ－35グリッドにおいて検出された。

本掘立柱建物址はH－34号住居址と重複するが、本址が新しいものとしてとらえられた。

本掘立柱建物址は、2間×3間の側柱式の掘立柱建物址で、南北4.0m東西6.0mの矩形のプラ



第299図　F－42号掘立柱建物址実測図（1：80）

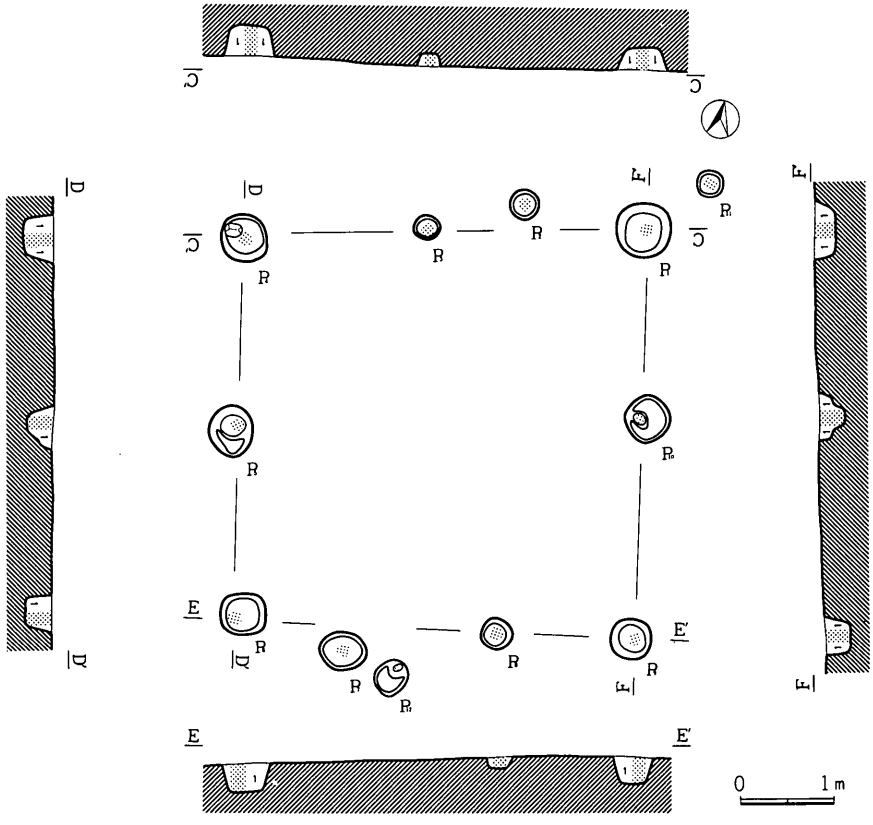
ンを呈し、推定床面積24.0m²を測る。柱間は、南北列では2.0～2.6m東西列では2.0mを測る。なお、図の P_{11} ～ P_{13} はこれに伴うものかどうかわからない。

その南北軸方向は、N－16°－Wを指す。

各ピットの掘り方のプランは、歪んだ円形ないし楕円形を呈していた。

その埋土は、ロームを多量に含む褐色土層（10YR 4/4）I層のみであった。また、各ピットにおける柱痕部分は、黒色土（10YR 1.7/1）として明確にとらえられた。図中にはスクリーントーンで示した。

遺物は、出土していない。



第300図　F－43号掘立柱建物址実測図（1：80）

(43)　F－43号掘立柱建物址

第300図

F－43号掘立柱建物址は、第Ⅰ区ハ－36グリッドにおいて検出された。

本掘立柱建物址は、2間×3間の側柱式の掘立柱建物址で、南北4.2m東西4.2mの方形のプランを呈し、床面積17.6m²を測る。柱間は、南北列では0.8～1.8m、東西列では2.0～2.4mを測る。なお、その南北列のP_2・P_7はややずれた配置をみせている。また、P_{11}・P_{12}は本址に伴うものかどうかはわからない。

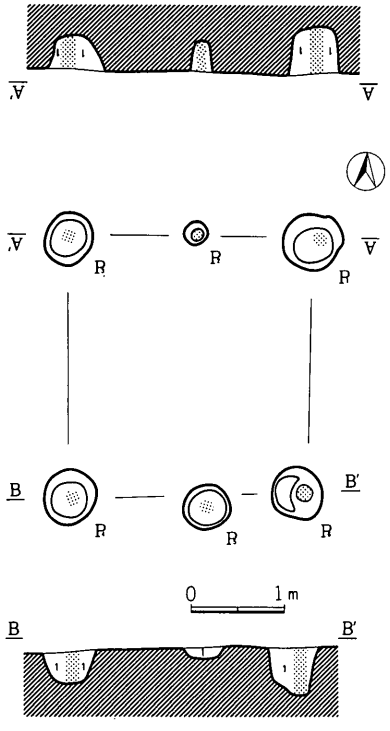
本址の南北軸方向は、N－17°－Wを指す。

各ピットの掘り方のプランは、いずれも円形ないし楕円形を呈していた。

その埋土は、スコリア・パミスを全く含まない黒色土層（10YR 1.7/1）Ⅰ層のみであった。

各ピットにおける柱痕部分は、とりあえず図中にはスクリーントーンで示したが、明確にとらえられるものではなかった。

遺物は、出土していない。



第301図　Ｆ－44号掘立柱建物址実測図（１：80）

(44)　Ｆ－44号掘立柱建物址

第301図

Ｆ－44号掘立柱建物址は、第Ｉ区ヒ－35グリッドにおいて検出された。

本址は、Ｆ－46号掘立柱建物と重複するが、両者の新旧関係はとらえられなかった。

本掘立柱建物址は、１間×２間の側柱式の掘立柱建物址で、南北2.6m東西2.6mの方形のプランを呈し、床面積6.8m²を測る。柱間は、南北列では1.0～1.4m、東西列では2.6mを測る。

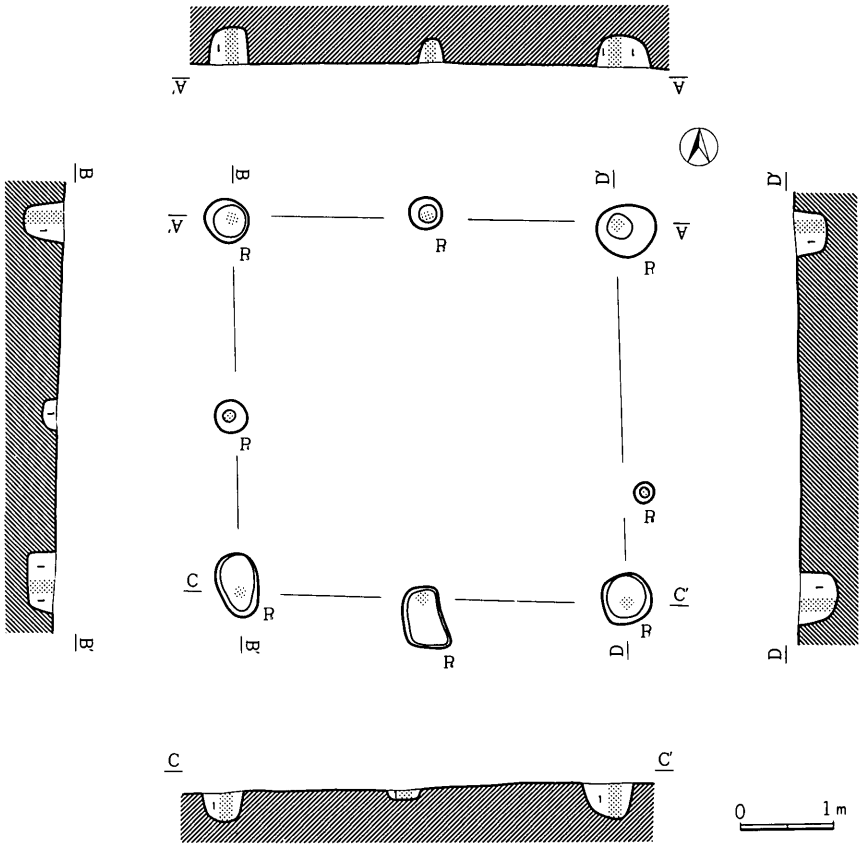
本址の南北軸方向は、Ｎ－20°－Ｗを指す。

各ピットの掘り方のプランは、円形を呈していた。

その埋土は、スコリア・パミスを全く含まない黒色土層（10YR 1.7/1）Ｉ層のみであった。

各ピットにおける柱痕部分は、とりあえず図中にはスクリーントーンで示したが、明確にとらえられるものではなかった。

遺物は、出土していない。



第302図　Ｆ－45号掘立柱建物址実測図（１：80）

(45)　Ｆ－45号掘立柱建物址

第302図

Ｆ－45号掘立柱建物址は、第Ｉ区ハ－36グリッドにおいて検出された。

本掘立柱建物址は、２間×２間の側柱式の掘立柱建物址で、南北4.0m東西4.0mの方形のプランを呈し、床面積16.0m²を測る。柱間は、南北列では2.0～2.2m、東西列では1.2～2.8mを測る。

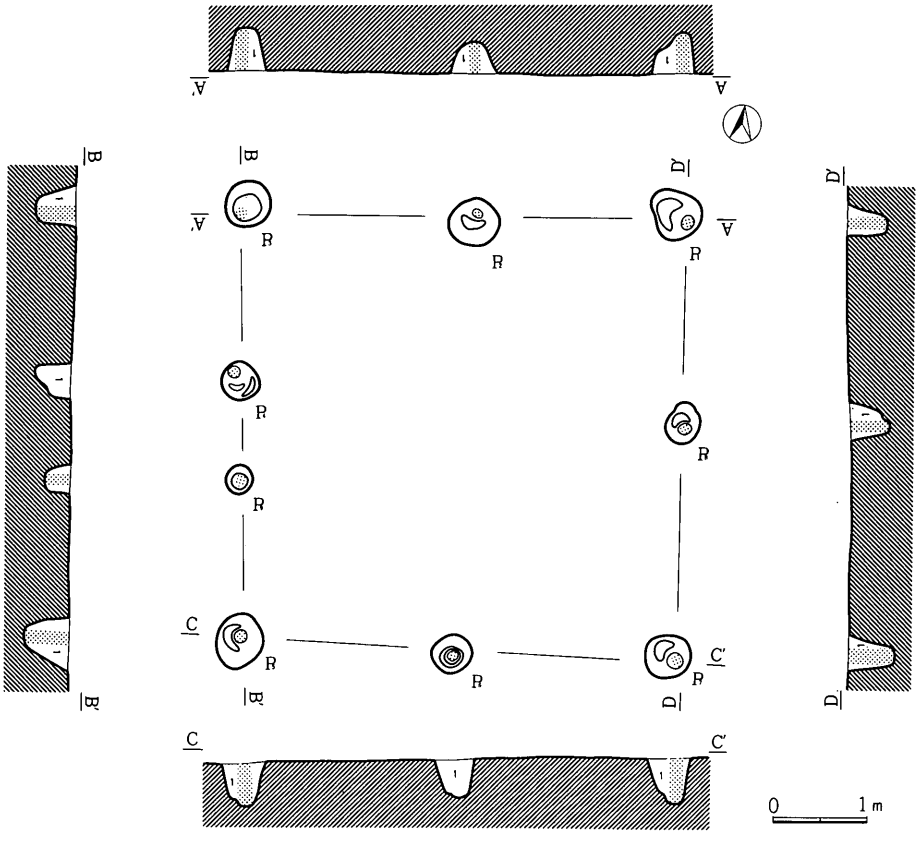
本址の南北軸方向は、Ｎ－14°－Ｗを指す。

各ピットの掘り方のプランは、円形もしくは歪んだ楕円形を呈していた。

その埋土は、スコリア・パミスを全く含まない黒色土層（10YR 1.7/1）Ｉ層のみであった。

各ピットにおける柱痕部分は、とりあえず図中にはスクリーントーンで示したが、明確にとらえられるものではなかった。

遺物は、出土していない。



第303図　Ｆ－46号掘立柱建物址実測図（１：80）

(46)　Ｆ－46号掘立柱建物址

第303図

Ｆ－46号掘立柱建物址は、第Ｉ区ヒ－35グリッドにおいて検出された。

本址は、Ｆ－44号掘立柱建物址と重複するが、両者の新旧関係はとらえられなかった。

本掘立柱建物址は、南・北・東列２間×西列３間の側柱式の掘立柱建物址で、南北4.6m東西4.6mの方形のプランを呈し、床面積21.2m²を測る。柱間は、南北列では2.2～2.4m、東西列では1.2～2.4mを測る。

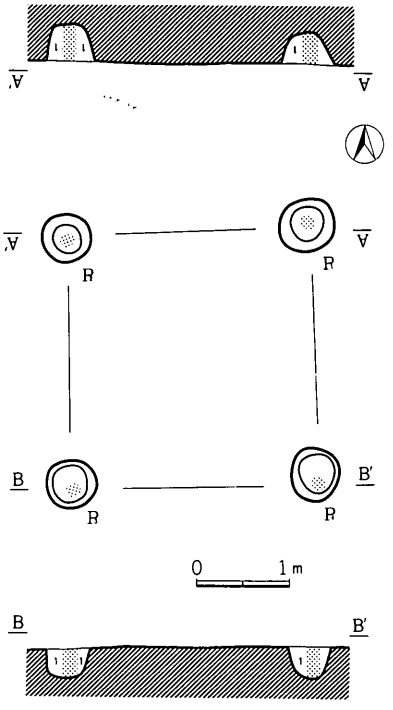
本址の南北軸方向は、Ｎ－19°－Ｗを指す。

各ピットの掘り方のプランは、円形もしくは楕円形を呈していた。

その埋土は、スコリア・パミスを全く含まない黒色土層（10YR 1.7/1）Ｉ層のみであった。

各ピットにおける柱痕部分は、とりあえず図中にはスクリーントーンで示したが、明確にとらえられるものではなかった。

遺物は、出土していない。



第304図　Ｆ－47号掘立柱建物址（１：80）

(47)　Ｆ－47号掘立柱建物址

第304図

Ｆ－47号掘立柱建物址は、第Ｉ区フ－34グリッドにおいて検出された。

本掘立柱建物址は、１間×１間の側柱式の掘立柱建物址で、南北2.6m東西2.6mの方形のプランを呈し、床面積6.8m²を測る。

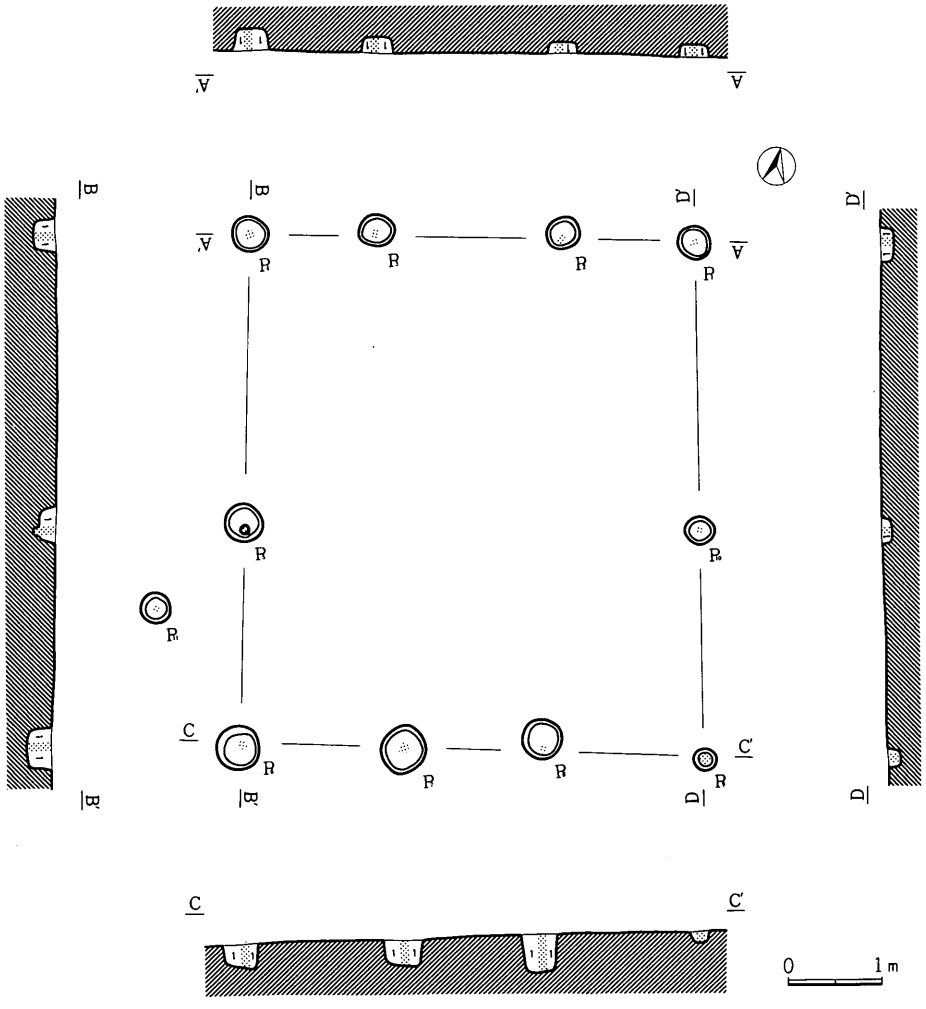
本址の南北軸方向は、Ｎ－10°－Ｗを指す。

各ピットの掘り方のプランは、円形を呈している。

その埋土は、スコリア・パミスを全く含まない黒色土層（10YR 1.7/1）Ｉ層のみであった。

各ピットにおける柱痕部分は、とりあえず図中にはスクリーントーンで示したが、明確にとらえられるものではなかった。

遺物は、P_1の埋土中より、奈良・平安時代の土師器甕の破片が出土している。よって本掘立柱建物址所産期は、遺物の示す奈良・平安時代か、それ以降であることが少なくともいえよう。



第305図　Ｆ－48号掘立柱建物址実測図（１：80）

(48)　Ｆ－48号掘立柱建物址

第305図

Ｆ－48号掘立柱建物址は、第Ｉ区フ－34グリッドにおいて検出された。

本址は、Ｆ－31号掘立柱建物址と重複するが、両者の新旧関係はとらえられなかった。また、本掘立柱建物址はＨ－33号住居址と重複するが、本址が新しいものとしてとらえられた。

本掘立柱建物址は、２間×３間の側柱式の掘立柱建物址で、南北5.4m東西5.0mの矩形のプランを呈し、床面積27.0m²を測る。

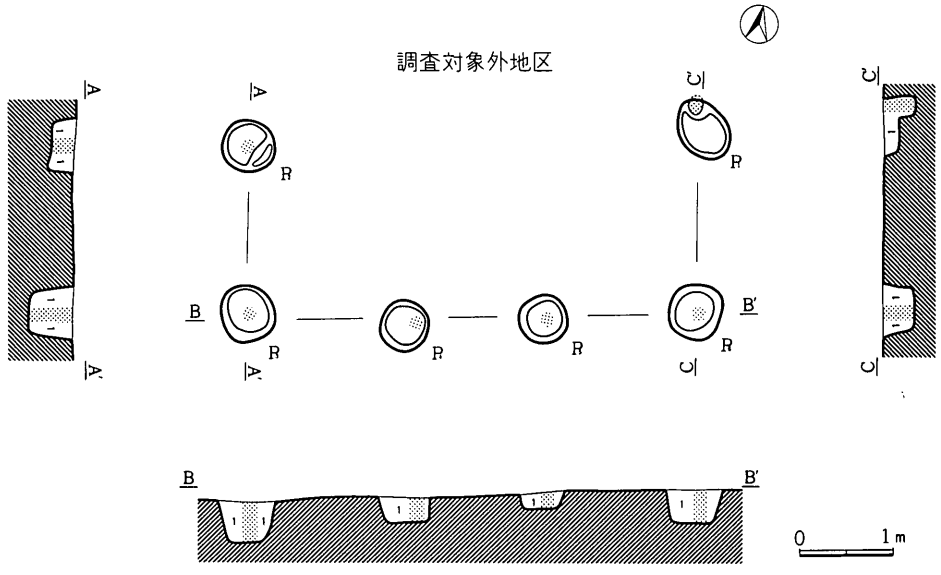
本址の南北軸方向は、Ｎ－22°－Ｗを指す。

各ピットの掘り方のプランは、円形を呈していた。

その埋土は、スコリア・パミスを全く含まない黒色土層（10YR 1.7/1）Ｉ層のみであった。

各ピットにおける柱痕部分は、とりあえず図中にはスクリーントーンで示したが、明確にとらえられるものではなかった。

遺物は、出土していない。



第306図　F－49号掘立柱建物址実測図（1：80）

(49)　F－49号掘立柱建物址

第306図

F－49号掘立柱建物址は、第Ⅰ区フ－35グリッドにおいて検出された。

本掘立柱建物址は、2間×3間の側柱式となるものと考えられるが、そのプランの北側は調査対象地区外へのびてしまっており、全容がつかめない。東西4.7m、柱間は、南列では1.4～1.8m、東西列では1.8mを測る。

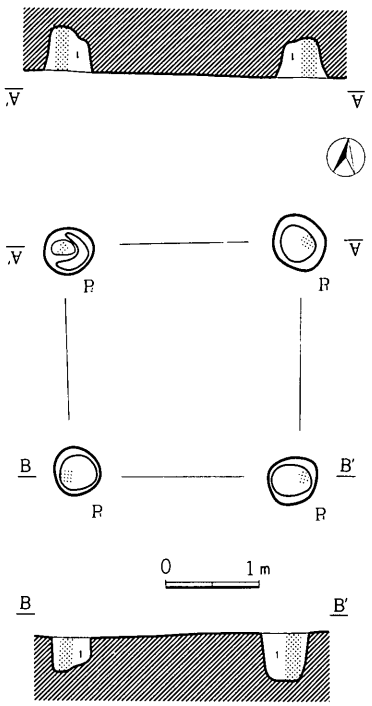
本址の南北軸方向は、N－13°－Wを指す。

各ピットの掘り方のプランは、円形ないしは楕円形を呈していた。

その埋土は、スコリア・パミスを全く含まない黒色土層（10YR 1.7/1）Ⅰ層のみであった。

各ピットにおける柱痕部分は、とりあえず図中にはスクリーントーンで示したが、明確にとらえられるものではなかった。

遺物は、出土していない。



第307図　Ｆ－50号掘立柱建物址実測図（１：80）

(50)　Ｆ－50号掘立柱建物址

第307図

Ｆ－50号掘立柱建物址は、第Ｉ区ハ－36グリッドにおいて検出された。

本址は、Ｆ－13号掘立柱建物址と重複するが、両者の新旧関係はとらえられなかった。

本掘立柱建物址は、１間×１間の側柱式の掘立柱建物址で、南北2.4m東西2.4mの方形のプランを呈し、床面積5.8m²を測る。

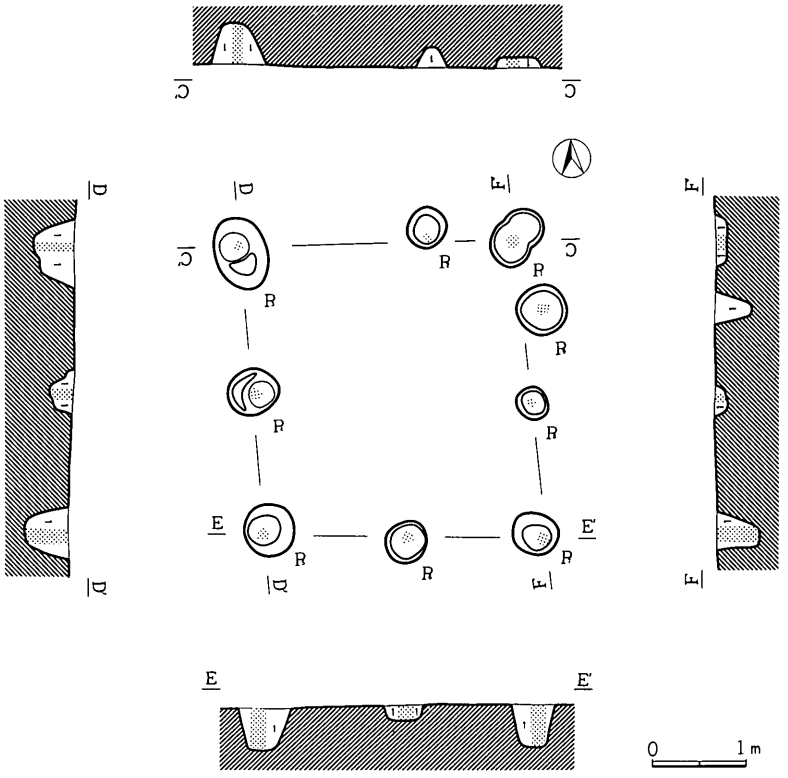
本址の南北軸方向は、Ｎ－15°－Ｗを指す。

各ピットの掘り方のプランは、円形を呈していた。

その埋土は、スコリア・パミスを全く含まない黒色土層（10YR 1.7/1）Ｉ層のみであった。

各ピットにおける柱痕部分は、とりあえず図中にはスクリーントーンで示したが、明確にとらえられるものではなかった。

遺物は、出土していない。



第308図　F－51号掘立柱建物址実測図（1：80）

(51)　F－51号掘立柱建物址

第308図

F－51号掘立柱建物址は、第Ⅰ区フ－34グリッドにおいて検出された。

本掘立柱建物址は、南・北・西列2間×東列3間の側柱式の掘立柱建物址で、南北3.0m東西3.0mの方形のプランを呈し、床面積9.0m²を測る。柱間は、南北列では0.8～1.4m、東西列では0.8～1.6mを測る。

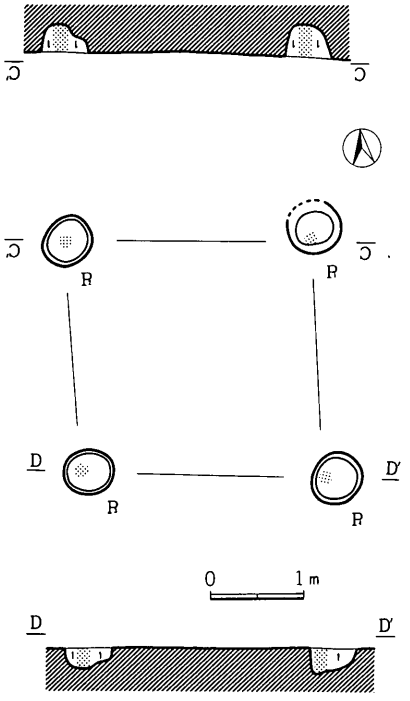
その南北軸方向は、N－9°－Wを指す。

各ピットの掘り方のプランは、円形ないし楕円形を呈していた。

その埋土は、スコリア・パミスを全く含まない黒色土層（10YR 1.7/1）Ⅰ層のみであった。

各ピットにおける柱痕部分は、とりあえず図中にはスクリーントーンで示したが、明確にとらえられるものではなかった。

遺物は、P_4・P_9の埋土中より、奈良・平安時代の土師器甕の破片が出土している。よって本掘立柱建物址所産期は、遺物の示す奈良・平安時代か、それ以降であることが少なくともいえよう。



第309図　Ｆ－52号掘立柱建物址実測図（１：80）

(52)　Ｆ－52号掘立柱建物址

第309図

Ｆ－52号掘立柱建物址は、第Ｉ区フ－34グリッドにおいて検出された。

本址は、Ｆ－57号掘立柱建物址と重複するが、両者の新旧関係はとらえられなかった。

本掘立柱建物址は、１間×１間の側柱式の掘立柱建物址で、南北2.2m東西2.2mの方形のプランを呈し、床面積4.8m²を測る。

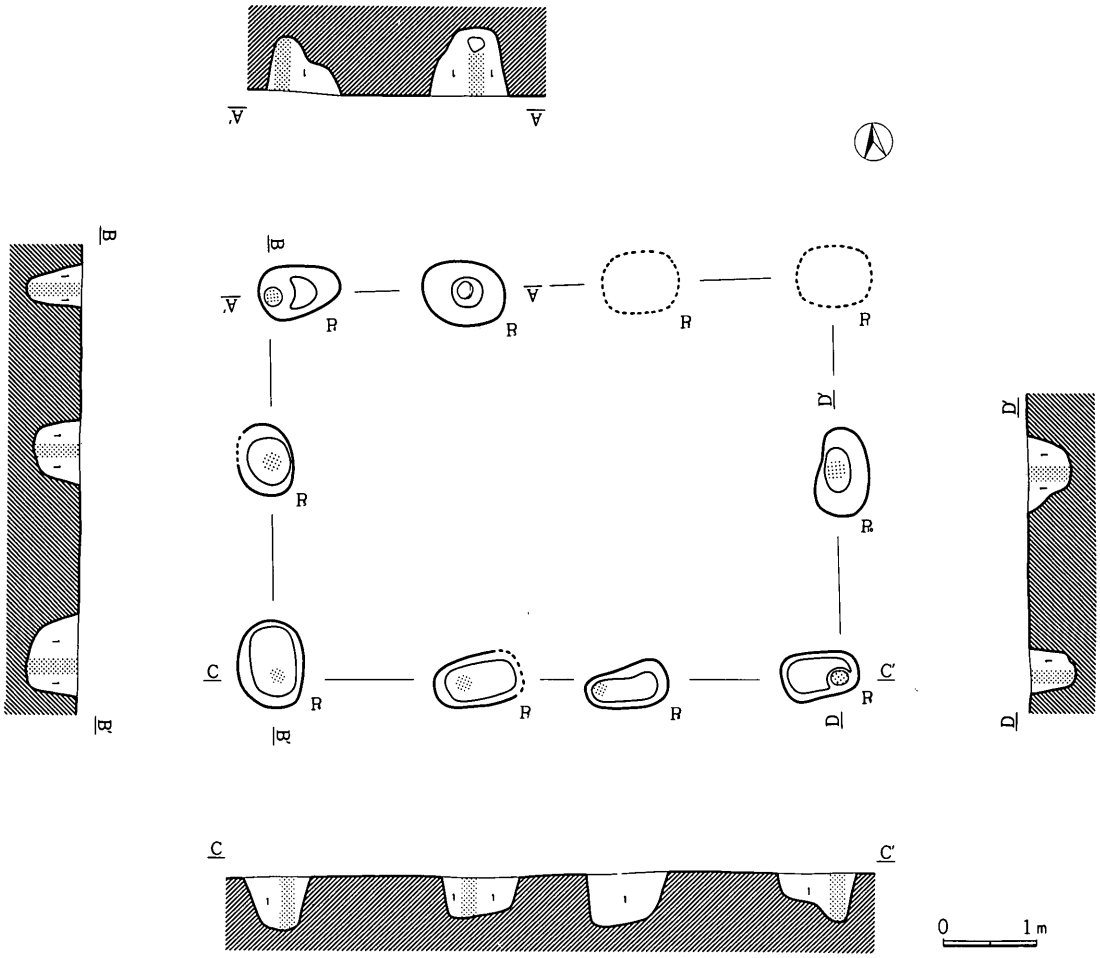
その南北軸方向は、N－10°－Wを指す。

各ピットの掘り方のプランは、円形を呈していた。

その埋土は、スコリア・パミスを全く含まない黒色土層（10YR 1.7/1）Ｉ層のみであった。

各ピットにおける柱痕部分は、とりあえず図中にはスクリーントーンで示したが、明確にとらえられるものではなかった。

遺物は、出土していない。



第310図　F－53号掘立柱建物址実測図（1：80）

(53)　F－53号掘立柱建物址

第310図

F－53号掘立柱建物址は、第Ⅰ区ヒ－34グリッドにおいて検出された。

本址は、F－70号掘立柱建物址と重複するが、両者の新旧関係はとらえられなかった。また、本掘立柱建物址はH－40号住居址と重複するが、本址が新しいものとしてとらえられた。

本掘立柱建物址は、2間×3間の側柱式の掘立柱建物址で、南北4.0m東西6.0mの矩形のプランを呈し、床面積24.0m²を測る。柱間は、南北列では1.4～2.4m東西列では1.8mを測る。

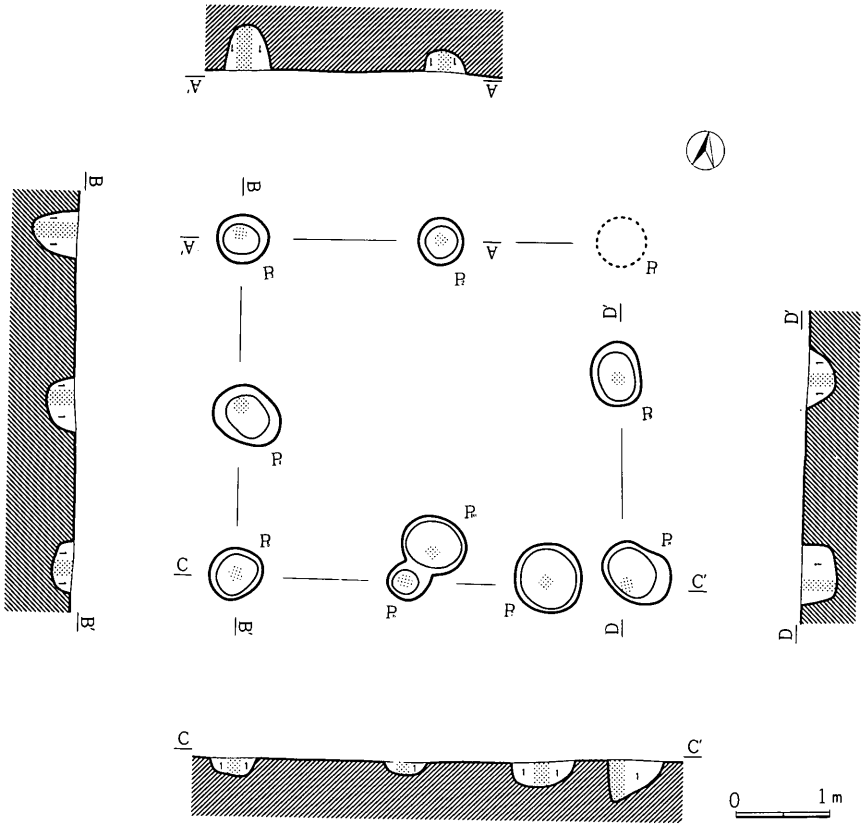
本址の南北軸方向は、N－2°－Wを指す。

各ピットの掘り方のプランは、楕円形ないし隅丸方形を呈していた。

その埋土は、ロームをよく含む褐色土層（10YR 4/4）Ⅰ層で、各ピットにおける柱痕部分は黒

色土（10YR 1.7/1）として明確にとらえられ、図中にはスクリーントーンで示した。

遺物は、P_1の埋土中より、奈良・平安時代の土師器甕・須恵器甕の破片が出土している。よって本掘立柱建物址所産期は、遺物の示す奈良・平安時代か、それ以降であることが少なくともいえよう。



第311図　F－54号掘立柱建物址実測図（1：80）

(54)　F－54号掘立柱建物址

第311図

F－54号掘立柱建物址は、第I区ヒ－33グリッドにおいて検出された。

本址は、H－9号掘立柱建物址と重複するが、両者の新旧関係はとらえられなかった。

本掘立柱建物址は、北・東・西列2間×南列3間の側柱式の掘立柱建物址で、南北3.6m東西4.2mの矩形のプランを呈し、床面積15.1m²を測る。柱間は、南北列では0.8～2.1m、東西列では1.8～2.2mを測る。

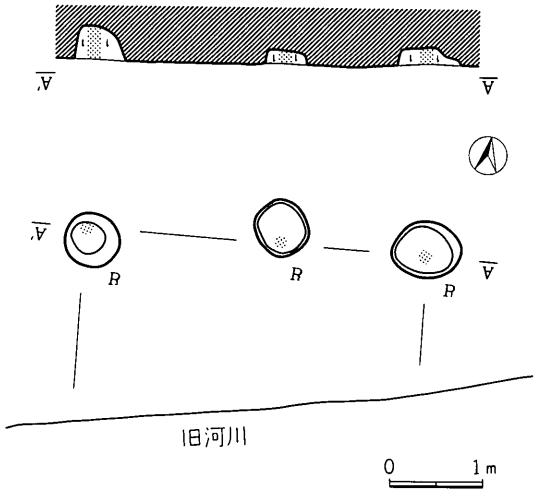
本址の南北軸方向は、N－17°－Wを指す。

各ピットの掘り方のプランは、円形もしくは楕円形を呈していた。

その埋土は、スコリア・パミスを全く含まない黒色土層（10YR 1.7/1）Ⅰ層のみであった。

各ピットにおける柱痕部分は、とりあえず図中にはスクリーントーンで示したが、明確にとらえられるものではなかった。

遺物は、出土していない。



第312図　F－55号掘立柱建物址実測図（1：80）

(55)　F－55号掘立柱建物址

第312図

F－55号掘立柱建物址は、第Ⅰ区ヒ－33グリッドにおいて検出された。

本掘立柱建物址の南側は、旧河川によって破壊されておりそのプランの全容をつかみ得なかった。ちなみに、北列は3.6m、その柱間は1.5～2.0mを測る。

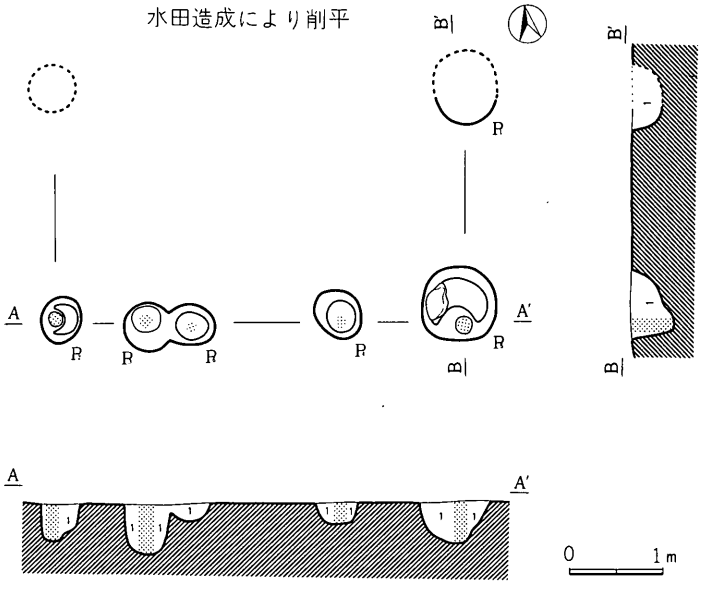
本址の南北軸方向は、N－12°－Wを指す。

各ピットの掘り方のプランは、円形を呈していた。

その埋土は、スコリア・パミスを全く含まない黒色土層（10YR 1.7/1）Ⅰ層のみであった。

各ピットにおける柱痕部分は、とりあえず図中にはスクリーントーンで示したが、明確にとらえられるものではなかった。

遺物は、出土していない。



第313図　F－56号掘立柱建物址実測図（1：80）

(56)　F－56号掘立柱建物址

第313図

F－56号掘立柱建物址は、第I区フ－34グリッドにおいて検出された。

本址は、F－57号掘立柱建物址と重複するが、本址が新しいものとしてとらえられた。また、本址の北半分は、水田造成により削平されてしまっている。よって本掘立柱建物址は、南列と東列の一部が検出されたにすぎない。ちなみに南列は4間で4.4mを測る。

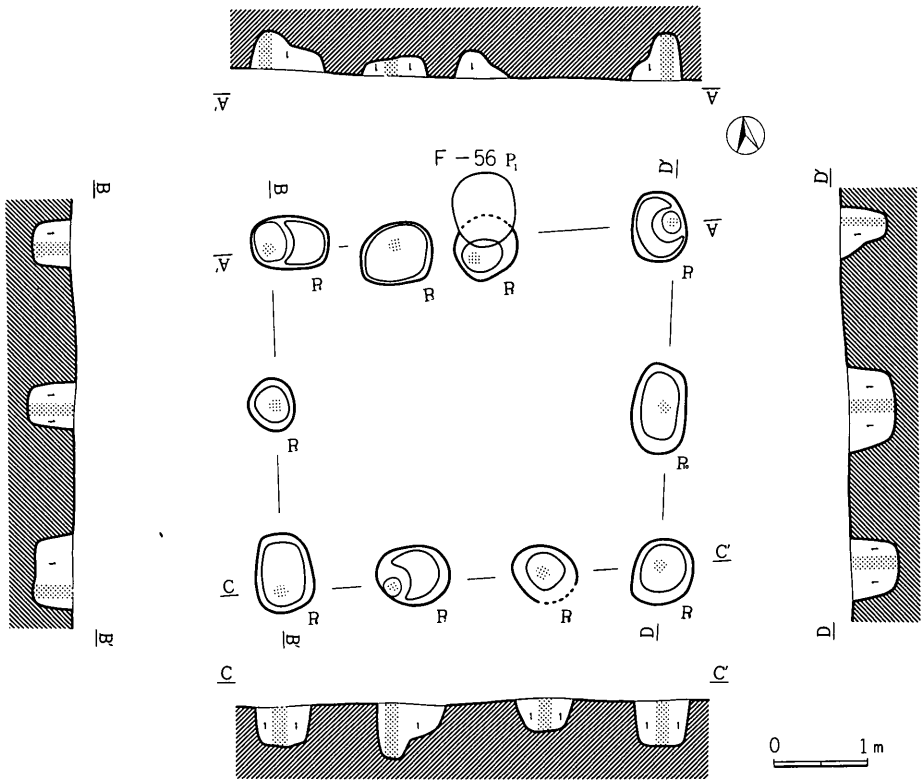
本址の南北軸方向は、N－8°－Wを指す。

各ピットの掘り方のプランは、円形を呈していた。

その埋土は、スコリア・パミスを全く含まない黒色土層（10YR 1.7/1）I層のみであった。

各ピットにおける柱痕部分は、とりあえず図中にはスクリーントーンで示したが、明確にとらえられるものではなかった。

遺物は、P_7P_8の埋土中より、奈良・平安時代の土師器甕の破片4片が出土している。よって本掘立柱建物址所産期は、遺物の示す奈良・平安時代か、それ以降であることが少なくともいえよう。



第314図　F－57号掘立柱建物址実測図（1：80）

(57)　F－57号掘立柱建物址

第314図

F－57号掘立柱建物址は、第I区フ－34グリッドにおいて検出された。

本址は、F－56号掘立柱建物址と重複するが、本址が古いものとしてとらえられた。

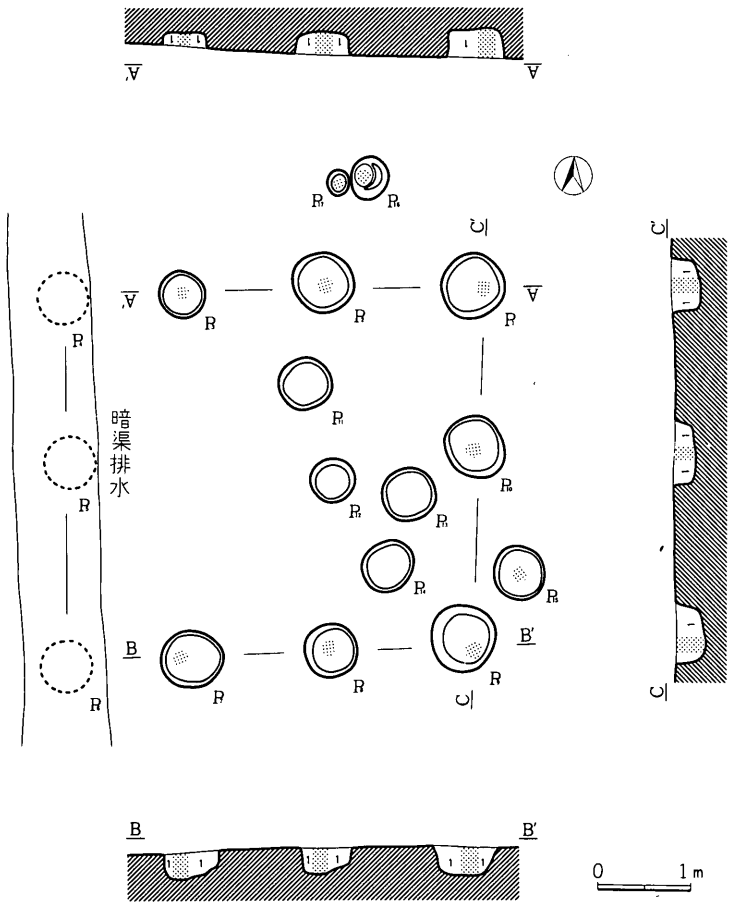
本掘立柱建物址は、2間×3間の側柱式の掘立柱建物址で、南北3.6m東西4.0mの矩形のプランを呈し、床面積14.4m²を測る。柱間は、南北列では1.0～2.0m、東西列では1.6mを測る。

本址の南北軸方向は、N－2°－Wを指す。

各ピットの掘り方のプランは、歪んだ円形・楕円形ないし方形を呈している。

その埋土はロームをよく含む褐色土層（10YR 4/4）I層で、各ピットにおける柱痕部分は黒色土（10YR 1.7/1）として明確にとらえられ、図中にはスクリーントーンで示した。

遺物は、P_3P_{10}の埋土中より、奈良・平安時代の土師器甕の破片が出土している。よって本掘立柱建物址所産期は、遺物の示す奈良・平安時代かそれ以降、F－56号掘立柱建物址所産期以前であることが少なくともいえよう。



第315図　F－58号掘立柱建物址実測図（1：80）

(58)　F－58号掘立柱建物址

第315図

F－58号掘立柱建物址は、第II区フ－32グリッドにおいて検出された。

本址は、その西列を暗渠排水によって破壊されているが、2間×3間の側柱式の掘立柱建物址で、南北3.8m東西4.2mの矩形のプランを呈し、床面積16.0m²を測るものと推定される。柱間は、南北列では1.6m、東西列では1.6～2.0mを測る。なお、本址の周辺には幾つかのピットが認められるが（P_{11}～P_{17}）、本址に伴うものかどうかはわからない。

本址の南北軸方向は、N－14°－Wを指す。

各ピットの掘り方のプランは、円形を呈していた。

その埋土は、スコリア・パミスを全く含まない黒色土層（10YR 1.7/1）I層のみであった。

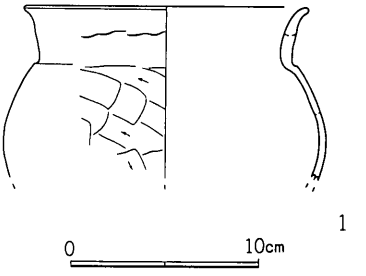
各ピットにおける柱痕部分は、とりあえず図中にはスクリーントーンで示したが、明確にとら

第106表　F－58号掘立柱建物址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1（回）	甕（土）	(15.1) — —	口縁部は僅かコの字状に外反し、胴部球状を呈する小形の器形。	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含み橙色（7.5 YR 6/6）

えられるものではなかった。

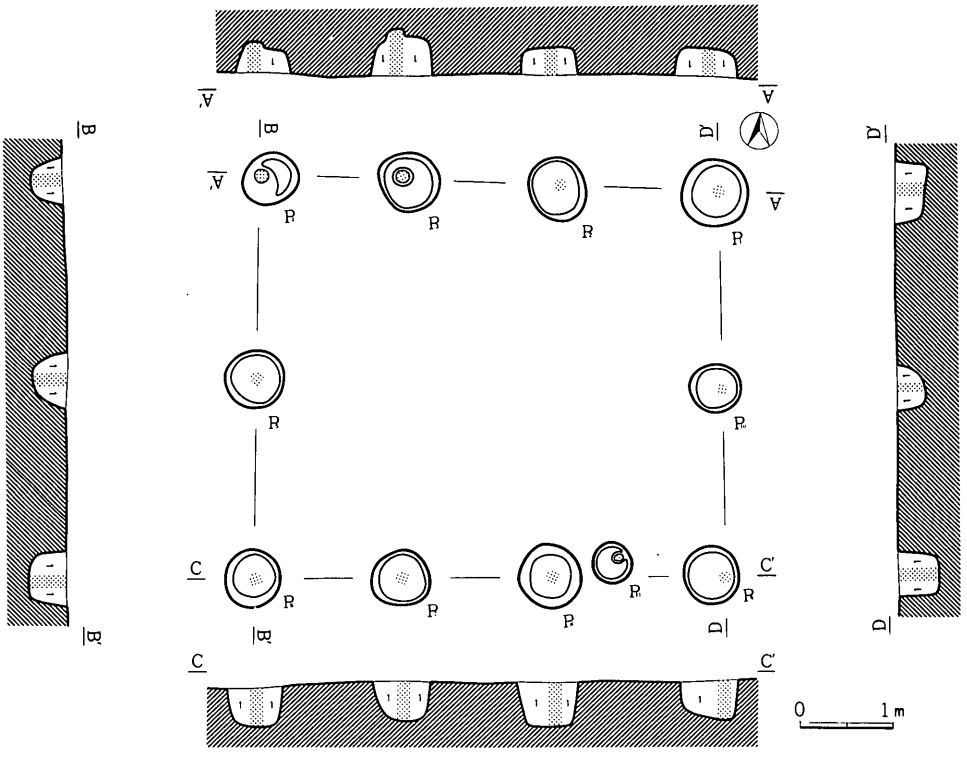
遺物は、P_{11}の埋土中から、第316図1の土師器甕が検出されている。ただし、P_{11}が本址に伴うものかどうかはわからないので、この遺物が時期決定の手掛かりとはなり得ない。



第316図　F－58号掘立柱建物址出土遺物（1：4）

(59)　F－59号掘立柱建物址

第317図



第317図　F－59号掘立柱建物址実測図（1：80）

Ｆ－59号掘立柱建物址は、第Ⅱ区フ－35グリッドにおいて検出された。

本掘立柱建物址は、２間×３間の側柱式の掘立柱建物址で、南北4.2m東西4.8mの矩形のプランを呈し、床面積20.2m²を測る。柱間は、南北列では1.6m、東西列では2.0mを測る。なお、やや列から外れるがP_8の脇にP_{11}が付随する。

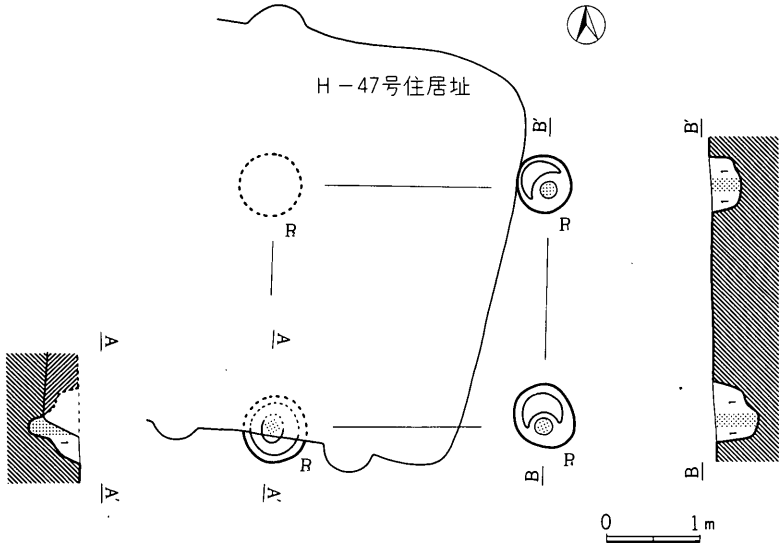
本址の南北軸方向は、Ｎ－６°－Ｗを指す。

各ピットの掘り方のプランは、円形を呈していた。

その埋土は、スコリア・パミスを全く含まない黒色土層（10YR 1.7/1）Ⅰ層のみであった。

各ピットにおける柱痕部分は、とりあえず図中にはスクリーントーンで示したが、明確にとらえられるものではなかった。

遺物は出土していない。



第318図　Ｆ－60号掘立柱建物址実測図（１：80）

(60)　Ｆ－60号掘立柱建物址

第318図

Ｆ－60号掘立柱建物址は、第Ⅱ区へ－31グリッドにおいて検出された。

本掘立柱建物址はＨ－47号住居址と重複するが、本址が古いものとしてとらえられた。

本掘立柱建物址は、１間×１間の側柱式の掘立柱建物址で、南北2.6m東西2.8mのほぼ方形のプランを呈し、床面積7.3m²を測る。

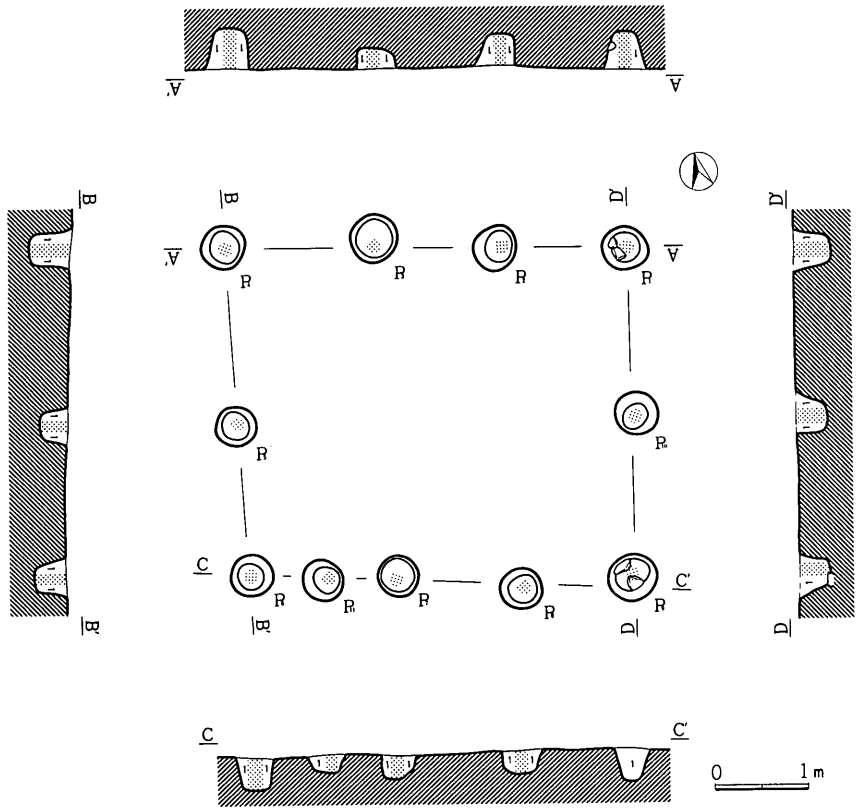
本址の南北軸方向は、Ｎ－８°－Ｗを指す。

各ピットの掘り方のプランは、円形を呈していた。

その埋土は、スコリア・パミスを全く含まない黒色土層（10YR 1.7/1）Ⅰ層のみであった。

各ピットにおける柱痕部分は、とりあえず図中にはスクリーントーンで示したが、明確にとらえられるものではなかった。

遺物は出土していない。



第319図　Ｆ－61号掘立柱建物址実測図（１：80）

(61)　Ｆ－61号掘立柱建物址

第319図

Ｆ－61号掘立柱建物址は、第Ⅱ区ハ－31グリッドにおいて検出された。

本掘立柱建物址は、東・西列２間×北列３間・南列４間の側柱式の掘立柱建物址で、南北3.4m東西4.2mの矩形のプランを呈し、床面積14.3m²を測る。柱間は、南北列では0.8～1.4m、東西列では1.6～1.8mを測る。

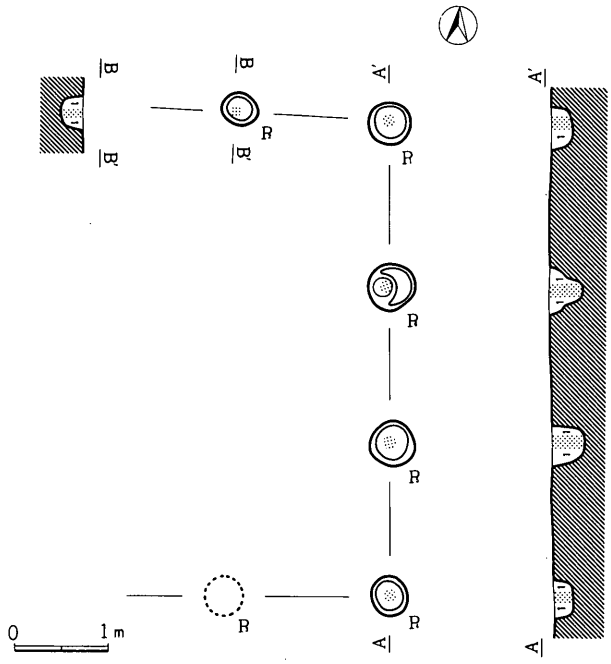
その南北軸方向は、Ｎ－８°－Ｅを指す。

各ピットの掘り方のプランは、円形を呈していた。

その埋土は、スコリア・パミスを全く含まない黒色土層（10YR 1.7/1）Ⅰ層のみであった。

各ピットにおける柱痕部分は、とりあえず図中にはスクリーントーンで示したが、明確にとらえられるものではなかった。

遺物は、P_4の埋土中より、奈良・平安時代の土師器甕の破片が出土している。よって本掘立柱建物址所産期は、遺物の示す奈良・平安時代か、それ以降であることが少なくともいえよう。



第320図　F－62号掘立柱建物址実測図（1：80）

(62)　F－62号掘立柱建物址

第320図

F－62号掘立柱建物址は、第II区フ－32グリッドにおいて検出された。

本址は、その西側を暗渠排水によって破壊されているため、全体のプランをつかめなかった。南北3間で3.8m、柱間は1.6mを測る。

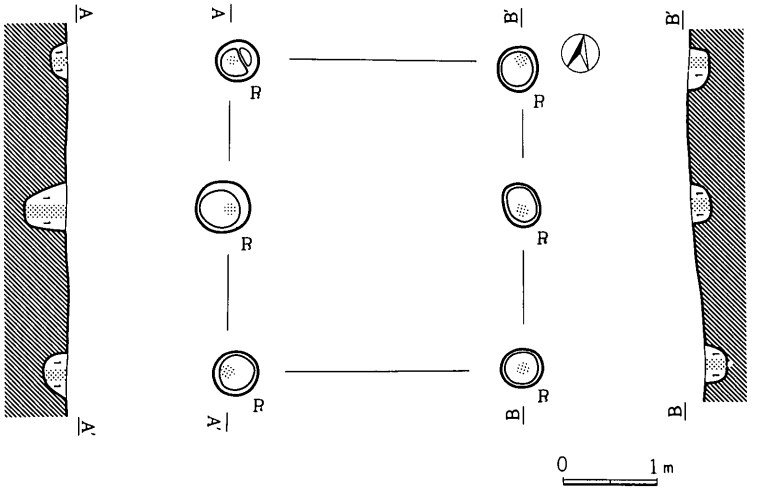
その南北軸方向は、N－14°－Wを指す。

各ピットの掘り方のプランは、円形を呈していた。

その埋土は、スコリア・パミスを全く含まない黒色土層（10YR 1.7/1）I層のみであった。

各ピットにおける柱痕部分は、とりあえず図中にはスクリーントーンで示したが、明確にとらえられるものではなかった。

遺物は、出土していない。



第321図　F－63号掘立柱建物址実測図（1：80）

(63)　F－63号掘立柱建物址

第321図

F－63号掘立柱建物址は、第II区フ－31グリッドにおいて検出された。

本掘立柱建物址はH－43号住居址と重複するが、本址が新しいものとしてとらえられた。

本掘立柱建物址は、1間×2間の側柱式の掘立柱建物址で、南北3.6m東西3.6mの方形のプランを呈し、床面積13.0m²を測る。柱間は、東西列では1.6～1.8mを測る。

本址の南北軸方向は、N－14°－Wを指す。

各ピットの掘り方のプランは、円形を呈していた。

その埋土は、スコリア・パミスを全く含まない黒色土層（10YR 1.7/1）I層のみであった。

各ピットにおける柱痕部分は、とりあえず図中にはスクリーントーンで示したが、明確にとらえられるものではなかった。

遺物は、出土していない。

(64)　F－64号掘立柱建物址

第322図

F－64号掘立柱建物址は、第I区へ－32グリッドにおいて検出された。

本址は、H－46号住居址と重複するが、両者の新旧関係はとらえられなかった。

本掘立柱建物址は、1間×1間の側柱式の掘立柱建物址で、南北2.4～2.8m東西3.6mの歪んだ

矩形のプランを呈し、床面積9.0m²を測る。

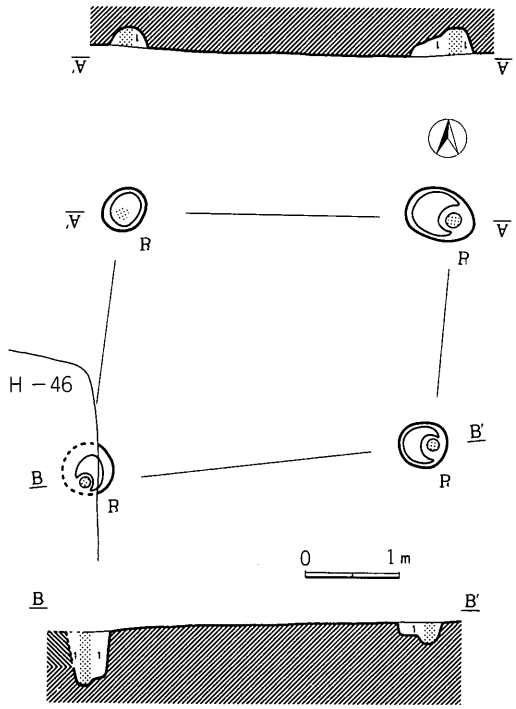
本址の南北軸方向は、N－5°－Wを指す。

各ピットの掘り方のプランは、円形もしくは楕円形を呈していた。

その埋土は、スコリア・パミスを全く含まない黒色土層（10YR 1.7/1）Ⅰ層のみであった。

各ピットにおける柱痕部分は、とりあえず図中にはスクリーントーンで示したが、明確にとらえられるものではなかった。

遺物は、P_2の埋土中より、奈良・平安時代の土師器甕の破片が出土している。よって本掘立柱建物址所産期は、遺物の示す奈良・平安時代か、それ以降であることが少なくともいえよう。



第322図　F－64号掘立柱建物址実測図（1：80）

(65)　F－65号掘立柱建物址

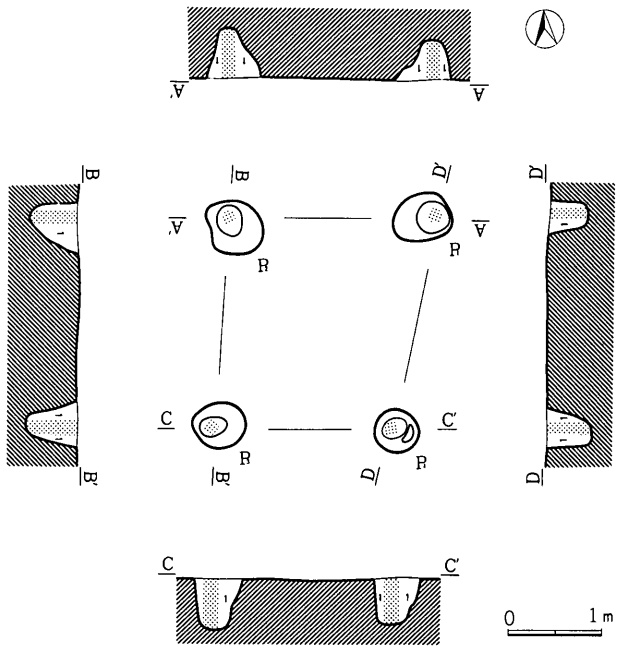
第323図

F－65号掘立柱建物址は、第II区へ－30グリッドにおいて検出された。

本掘立柱建物址は、1間×1間の側柱式の掘立柱建物址で、南北2.2m東西2.0～2.1mのやや歪んだ方形のプランを呈し、床面積4.6m²を測る。

本址の南北軸方向は、N－6°－Wを指す。

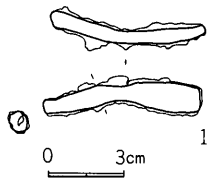
各ピットの掘り方のプランは、



第323図　F－65号掘立柱建物址実測図（1：80）

第107表　F－65号掘立柱建物址出土遺物一覧表
〈鉄器〉

挿図番号	器　種	材　質	長さ	幅	厚さ	重量	備　考
1	不　明	鉄	(6.2)	(1.1)	0.8	(8.5)	鉄鏃基部？ P 2 出土



第324図　F－65号掘立柱建物址出土遺物
（1：3）

歪んだ円形を呈していた。その埋土は、スコリア・パミスを全く含まない黒色土層（10YR 1.7/1）Ⅰ層のみであった。

各ピットにおける柱痕部分は、とりあえず図中にはスクリーントーンで示したが、明確にとらえられるものではなかった。

遺物は、P_2の埋土中より、奈良・平安時代の土師器甕の破片が出土している。よって本掘立柱建物址所産期は、遺物の示す奈良・平安時代か、それ以降であることが少なくともいえよう。また、第324図1はP_2の埋土中より出土した鉄器で、鉄鏃の基部であろうか。

(66)　F－66号掘立柱建物址

第325図

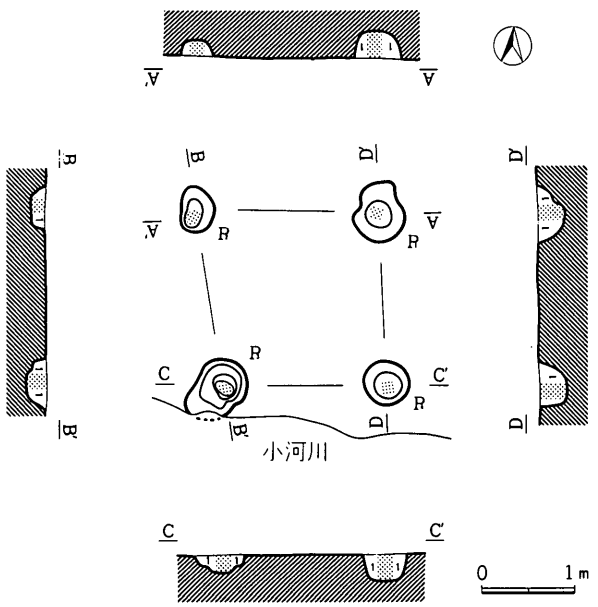
F－66号掘立柱建物址は、第Ⅰ区へ－31グリッドにおいて検出された。

本掘立柱建物址は、1間×1間の側柱式の掘立柱建物址で、南北1.8m東西1.8mのやや歪んだ方形のプランを呈し、床面積3.3m²を測る。なお、本址P_3は小河川によって破壊されている。

本址の南北軸方向は、N－15°－Wを指す。

各ピットの掘り方のプランは、歪んだ円形を呈していた。

その埋土は、スコリア・パミスを全く含まない黒色土層（10YR 1.7/

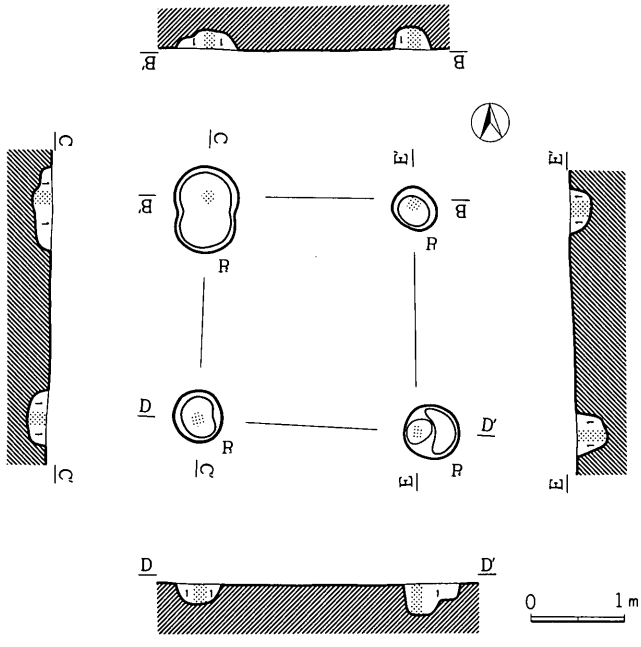


第325図　F－66号掘立柱建物址実測図（1：80）

1) Ⅰ層のみであった。

各ピットにおける柱痕部分は、とりあえず図中にはスクリーントーンで示したが、明確にとらえられるものではなかった。

遺物は、出土していない。



第326図　Ｆ－67号掘立柱建物址実測図（１：80）

(67)　Ｆ－67号掘立柱建物址

第326図

Ｆ－67号掘立柱建物址は、第Ⅱ区フ－30グリッドにおいて検出された。

本址は、Ｆ－69号掘立柱建物址と重複するが、両者の新旧関係はとらえられなかった。

本掘立柱建物址は、１間×１間の側柱式の掘立柱建物址で、南北2.3m東西2.3mの方形のプランを呈し、床面積5.3m²を測る。

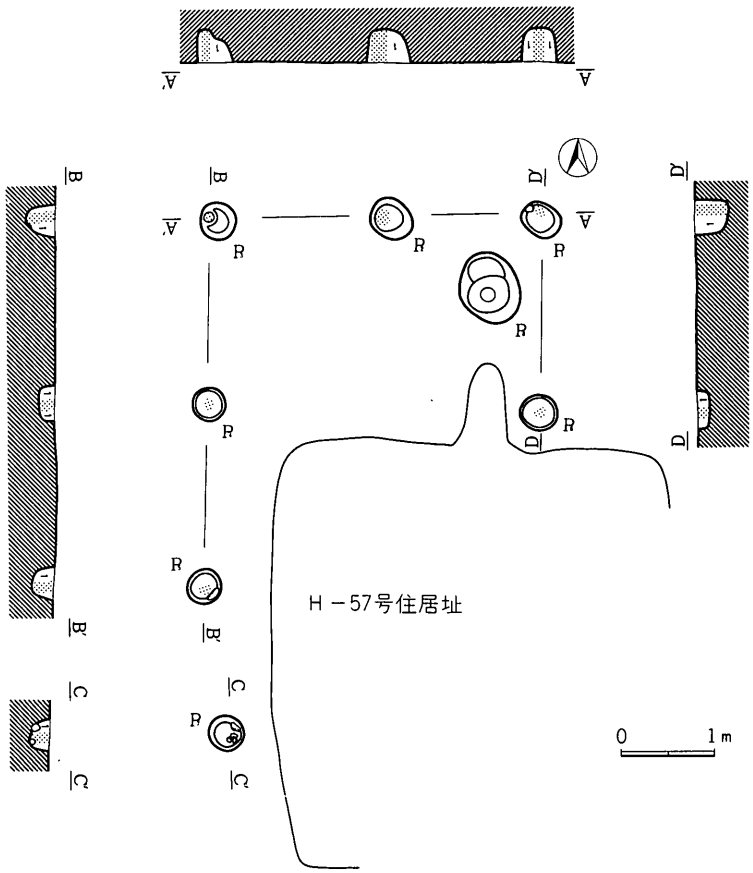
本址の南北軸方向は、N－6°－Wを指す。

各ピットの掘り方のプランは、歪んだ円形・楕円形ないし方形を呈している。

その埋土は、スコリア・パミスを全く含まない黒色土層（10YR 1.7/1）Ⅰ層のみであった。

各ピットにおける柱痕部分は、とりあえず図中にはスクリーントーンで示したが、明確にとらえられるものではなかった。

遺物は、P_1の埋土中より、平安時代の須恵器坏の破片が出土している。よって本掘立柱建物址所産期は、遺物の示す平安時代かそれ以降であることが少なくともいえよう。



第327図　F－68号掘立柱建物址実測図（1：80）

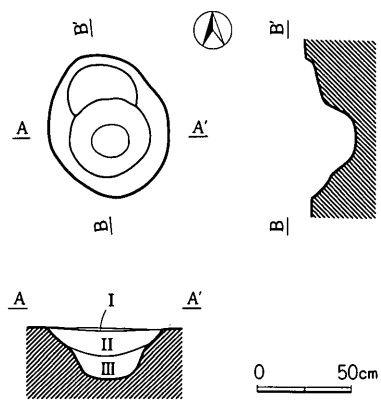
(68)　F－68号掘立柱建物址

第327図

F－68号掘立柱建物址は、第II区フ－31グリッドにおいて検出された。

本址は、2間×2間の側柱式の掘立柱建物址旧関係はとらえられなかった。

本址は、2間×2間の側柱式の掘立柱建物址で、南北3.9m東西3.7mの矩形のプランを呈し、床面積14.4m²を測るものと推定される。柱間は、南北列では1.7m、東西列では2.0mを測る。本址の北東コーナーには、炉址かと考えられるP_8が検出された。



第328図　F－68号掘立柱建物址炉址実測図（1：40）

なお、本址のP_5の隣にはP_7が認められるが、本址に伴うものかどうかはわからない。

本址の南北軸方向は、N－9°－Wを指す。

各ピットの掘り方のプランは、円形を呈していた。

その埋土は、スコリア・パミスを全く含まない黒色土層（10YR 1.7/1）Ⅰ層のみであった。また、P_8の覆土は、Ⅰ層が焼土を含む黒色土層（10YR 2/1）、Ⅱ層がカーボンを含む黒色土層（10YR 2/1）、Ⅲ層はロームを大量に含む褐色土層（10YR 4/6）であった。

各ピットにおける柱痕部分は、とりあえず図中にはスクリーントーンで示したが、明確にとらえられるものではなかった。

遺物は、P_2の埋土中より、奈良・平安時代の土師器甕の破片が出土している。よって本掘立柱建物址所産期は、遺物の示す奈良・平安時代か、それ以降であることが少なくともいえよう。

(69)　F－69号掘立柱建物址

第329図

F－69号掘立柱建物址は、第Ⅱ区フ－35グリッドにおいて検出された。

本址は、F－67号掘立柱建物址・H－47号住居址と重複するが、これらとの新旧関係はとらえられなかった。

本掘立柱建物址は、1間×1間の側柱式の掘立柱建物址で、南北2.2m東西2.2mの方形のプランを呈し、床面積4.8m²を測る。なお、P_1の脇にはP_5が付随する。

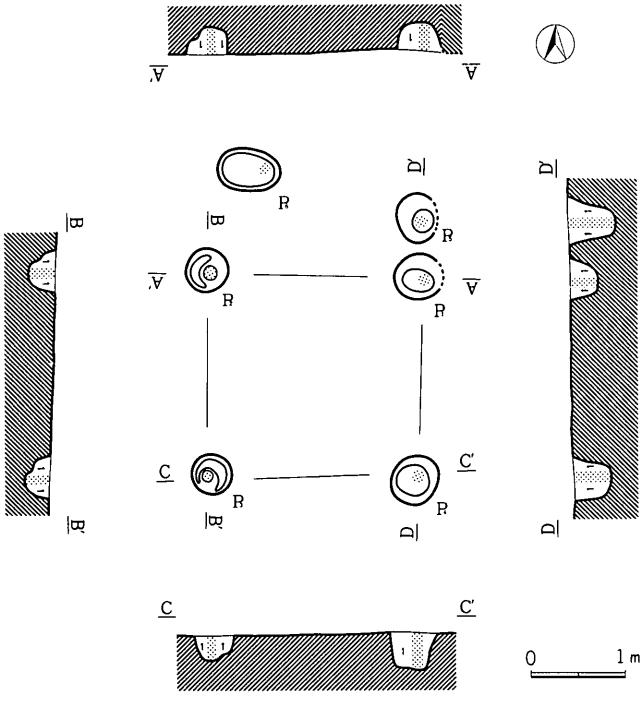
本址の南北軸方向は、N－6°－Wを指す。

各ピットの掘り方のプランは、円形を呈していた。

その埋土は、スコリア・パミスを全く含まない黒色土層（10YR 1.7/1）Ⅰ層のみであった。

各ピットにおける柱痕部分はとりあえず図中にはスクリーントーンで示したが、明確にとらえられるものではなかった。

遺物は、出土していない。



第329図　F－69号掘立柱建物址実測図（1：80）

(70)　F－70号掘立柱建物址

第330図

F－70号掘立柱建物址は、第Ⅰ区ヒ－34グリッドにおいて検出された。

本址は、F－67号掘立柱建物址と重複するが、これとの新旧関係はとらえられなかった。

本掘立柱建物址は、2間×2間の総柱式の掘立柱建物址で、南北3.6～4.0m東西3.4～3.6mの歪んだ方形のプランを呈し、床面積13.4m²を測る。柱間は、南北列では1.2～1.8m、東西列では1.6～2.2mを測る。

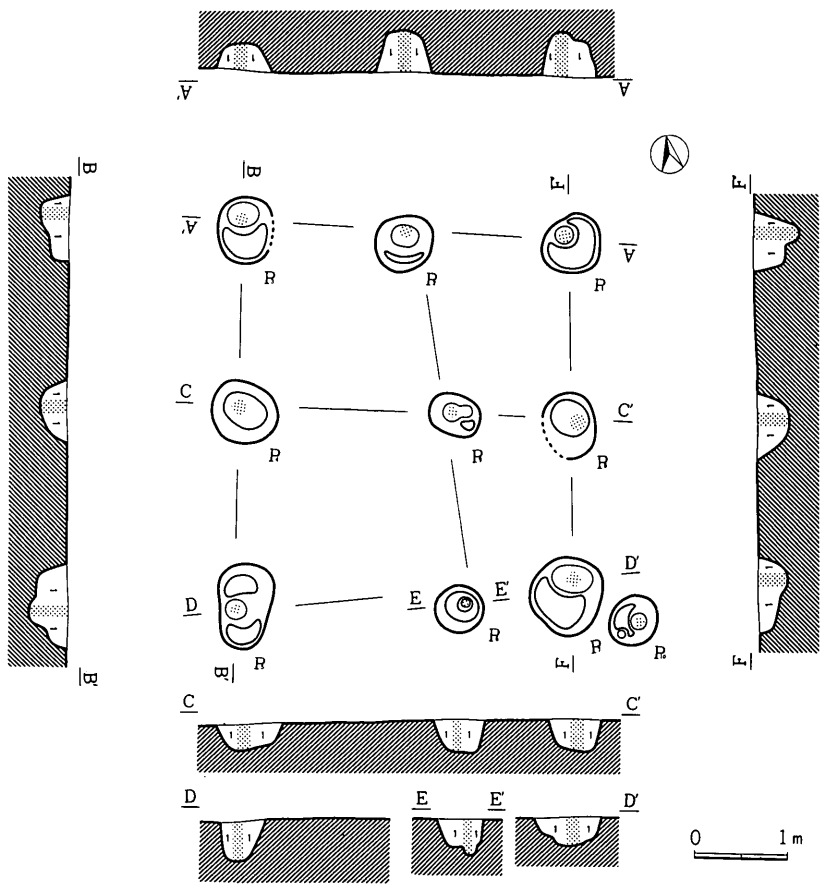
本址の南北軸方向は、N－3°－Eを指す。

各ピットの掘り方のプランは、歪んだ円形ないし楕円形を呈していた。

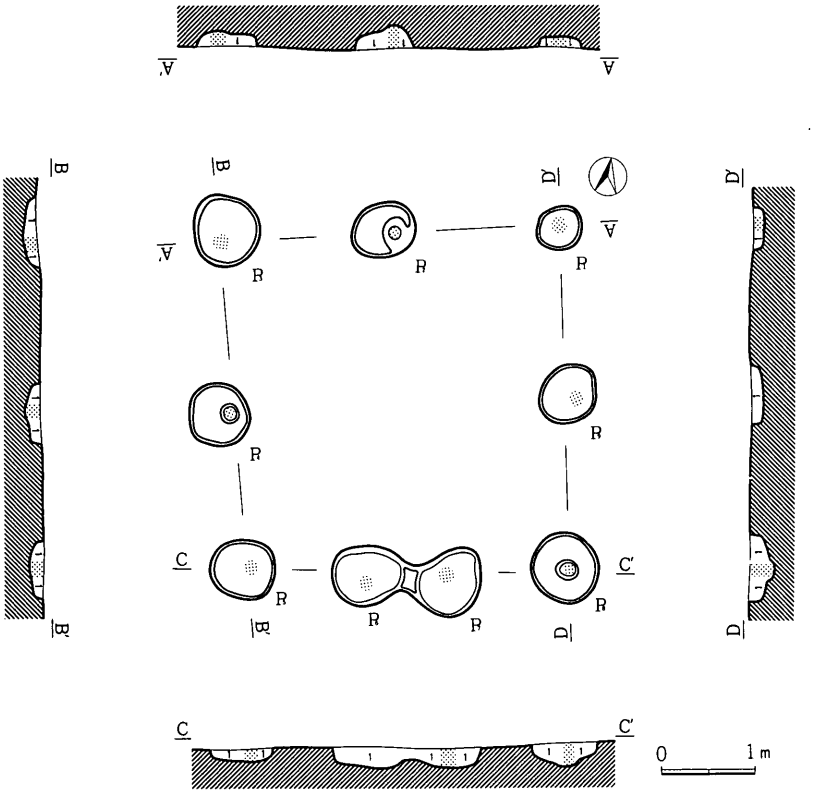
その埋土は、スコリア・パミスを全く含まない黒色土層（10YR 1.7/1）Ⅰ層のみであった。

各ピットにおける柱痕部分は、とりあえず図中にはスクリーントーンで示したが、明確にとらえられるものではなかった。

遺物は、P_4の埋土中より、奈良・平安時代の須恵器埦の破片が出土している。よって本掘立柱建物址所産期は、遺物の示す奈良・平安時代か、それ以降であることが少なくともいえよう。



第330図　F－70号掘立柱建物址実測図（1：80）



第331図　F－71号掘立柱建物址実測図（1：80）

(71)　F－71号掘立柱建物址

第331図

F－71号掘立柱建物址は、第II区ヒ－30グリッドにおいて検出された。

本掘立柱建物址は、東・西列2間×北列2間・南列3間の側柱式の掘立柱建物址で、南北3.4m東西3.4mの方形のプランを呈し、推定床面積11.6m²を測る。柱間は、南北列では0.8～1.8m東西列では1.6～1.8mを測る。

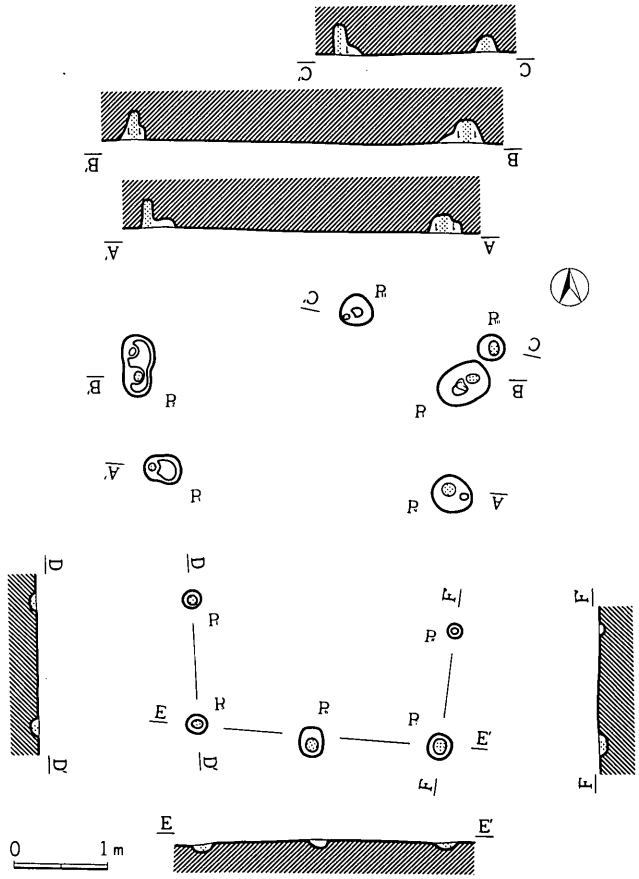
その南北軸方向は、N－21°－Wを指す。

各ピットの掘り方のプランは、円形・楕円形ないし方形を呈していた。

その埋土は、スコリア・パミスを全く含まない黒色土層（10YR 1.7/1）I層のみであった。

各ピットにおける柱痕部分は、とりあえず図中にはスクリーントーンで示したが、明確にとらえられるものではなかった。

遺物は、出土していない。



第332図　F－72号掘立柱建物址実測図（1：80）

(72)　F－72号掘立柱建物址

第332図

F－72号掘立柱建物址は、第II区ハ－29グリッドにおいて検出された。

本掘立柱建物址は、P_4～P_8を除くピットは不規則な配置をみせるものであるが、基本的には2間×3間の側柱式の掘立柱建物址と考えられる。南北3.8m東西2.6～3.6mの歪んだ矩形のプランを呈し、推定床面積11.8m²を測る。

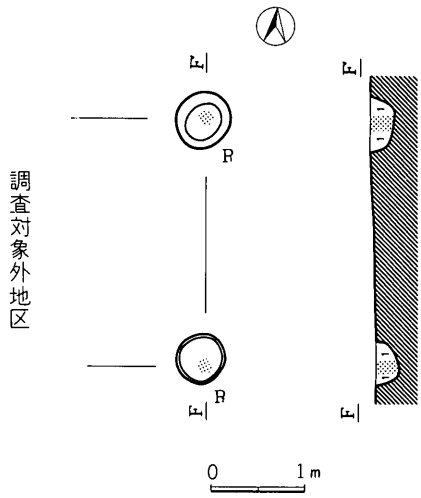
本址の南北軸方向は、N－0°－Sを指す。

各ピットの掘り方のプランは、歪んだ円形ないし楕円形を呈していた。

その埋土は、スコリア・パミスを全く含まない黒色土層（10YR 1.7/1）I層のみであった。

各ピットにおける柱痕部分は、とりあえず図中にはスクリーントーンで示したが、明確にとらえられるものではなかった。

遺物は、出土していない。



第333図　Ｆ－73号掘立柱建物址実測図（Ｉ：80）

(73)　Ｆ－73号掘立柱建物址

第333図

Ｆ－73号掘立柱建物址は、第Ⅱ区ハ－30グリッドにおいて検出された。

本掘立柱建物址の西半分は調査対象地区外にのびるが、１間×１間の方形のプランを呈する側柱式の掘立柱建物址と推定される。南北2.6mを測る。

本址の南北軸方向は、Ｎ－11°－Ｗを指す。

各ピットの掘り方のプランは、いずれも円形ないし楕円形を呈していた。

その埋土は、スコリア・パミスを全く含まない黒色土層（10YR 1.7/1）Ｉ層のみであった。

各ピットにおける柱痕部分は、とりあえず図中にはスクリーントーンで示したが、明確にとらえられるものではなかった。

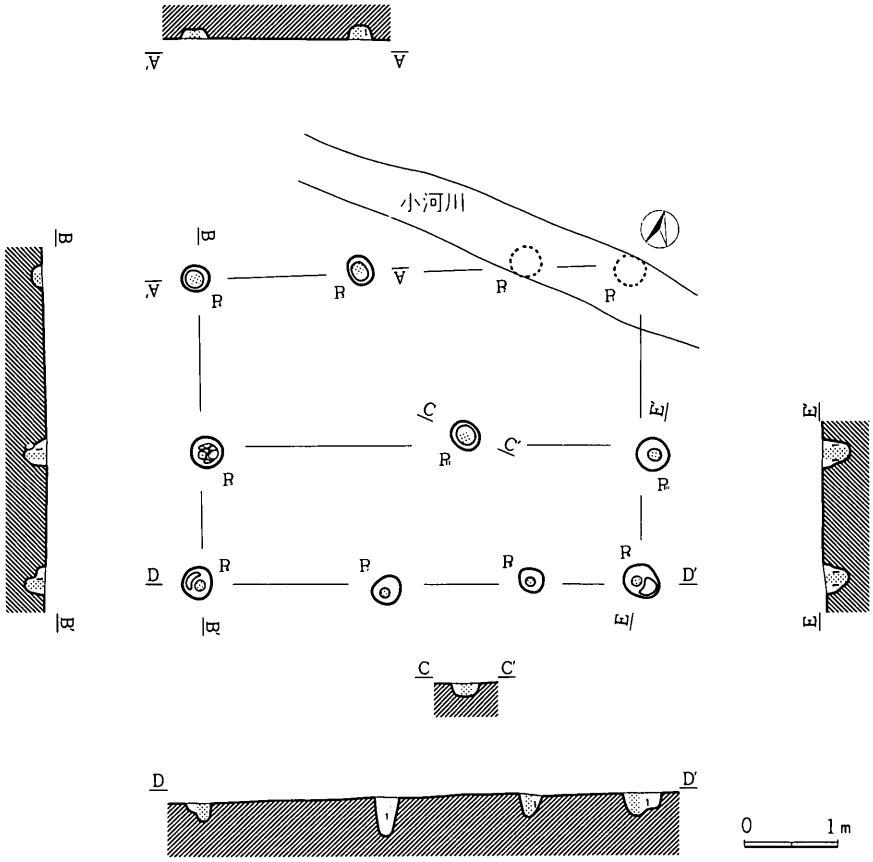
遺物は、出土していない。

(74)　Ｆ－74号掘立柱建物址

第334図

Ｆ－74号掘立柱建物址は、第Ⅱ区ヒ－29グリッドにおいて検出された。

本掘立柱建物址は、２間×３間の総柱式の掘立柱建物址で、南北3.2m東西4.6mの矩形のプラ



第334図　F－74号掘立柱建物址実測図（1：80）

ンを呈し、床面積14.7m²を測る。柱間は、南北列では1.2～2.0m、東西列では1.4～1.8mを測る。なお、本址の北東コーナーは小河川によって破壊されていた。

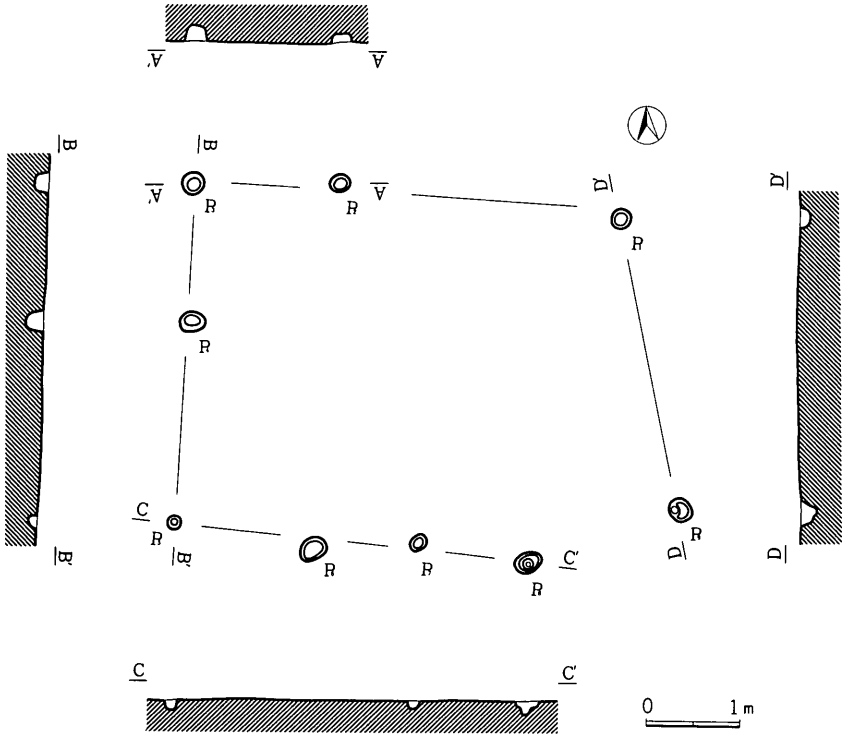
本址の南北軸方向は、N－21°－Wを指す。

各ピットの掘り方のプランは、円形を呈していた。

その埋土は、スコリア・パミスを全く含まない黒色土層（10YR 1.7/1）Ⅰ層のみであった。

各ピットにおける柱痕部分は、とりあえず図中にはスクリーントーンで示したが、明確にとらえられるものではなかった。

遺物は、出土していない。



第335図　Ｆ－75号掘立柱建物址実測図（１：80）

(75)　Ｆ－75号掘立柱建物址

第335図

Ｆ－75号掘立柱建物址は、第Ⅱ区ヒ－30グリッドにおいて検出された。

本掘立柱建物址は、不規則なピットの配置をみせる側柱式の掘立柱建物址で、南北3.6m東西5.2mの矩形のプランを呈し、床面積18.7m²を測る。

本址の南北軸方向は、Ｎ－３°－Ｗを指す。

各ピットの掘り方のプランは、円形もしくは歪んだ楕円形を呈していた。

その埋土は、スコリア・パミスを全く含まない黒色土層（10YR 1.7/1）Ｉ層のみであった。

各ピットにおける柱痕部分は、明確にとらえられるものではなかった。

遺物は、出土していない。

第108表　掘立柱建物址ピット一覧表〈その1〉

	No.	長径	短径	深さ
F－1	P_1	65	55	40
	P_2	55	55	30
	P_3	55	55	35
	P_4	80	60	15
	P_5	65	60	30
	P_6	55	50	25
	P_7	60	40	10
F－2	P_1	25	25	10
	P_2	40	35	15
	P_3	40	35	25
F－3	P_1	50	45	20
	P_2	55	50	20
	P_3	50	45	20
	P_4	45	35	20
	P_5	45	45	15
	P_6	40	40	15
	P_7	55	45	20
	P_8	45	45	20
	P_9	20	20	35
	P_{10}	20	15	15
	P_{11}	20	20	20
F－4	P_1	50	45	20
	P_2	50	45	20
	P_3	65	40	15
	P_4	50	45	20
	P_5	35	20	10
	P_6	55	50	30
	P_7	55	45	30
	P_8	50	45	35
	P_9	50	40	30
	P_{10}	50	40	15
F－5	P_1	65	55	30
	P_2	70	60	45
	P_3	55	60	45
	P_4	90	60	25
	P_6	85	70	45
	P_6	90	55	35
	P_7	70	65	30
	P_8	70	55	40

	No.	長径	短径	深さ
F－5	P_9	70	65	70
	P_{10}	80	65	40
F－6	P_1	40	40	40
	P_2	40	35	35
	P_3	45	45	40
	P_4	40	40	30
	P_5	45	45	20
	P_6	40	30	30
	P_7	45	40	30
	P_8	40	40	30
F－7	P_1	70	65	30
	P_2	55	50	25
	P_3	50	50	35
	P_4	60	55	35
	P_5	55	50	55
	P_6	55	50	30
	P_7	50	30	20
	P_8	45	40	40
	P_9	55	50	20
	P_{10}	50	45	－
F－8	P_1	55	55	55
	P_2	50	45	20
	P_3	80	50	45
	P_5	40	40	10
	P_6	55	50	50
	P_7	35	35	30
	P_8	50	45	15
	P_9	55	50	35
	P_{10}	30	25	10
F－9	P_1	60	55	35
	P_2	35	30	15
	P_3	55	50	25
	P_4	60	55	30
	P_5	50	45	20
	P_6	60	55	35
	P_7	50	45	20
	P_8	45	35	25
	P_9	50	45	50
	P_{10}	50	45	40

	No.	長径	短径	深さ
F－10	P_1	65	55	25
	P_2	70	50	30
	P_3	75	55	35
	P_4	65	50	40
	P_5	65	60	25
	P_6	65	55	35
	P_7	70	55	25
	P_8	95	50	40
	P_9	60	50	40
	P_{10}	60	55	30
F－11	P_1	55	50	25
	P_2	50	45	35
	P_3	50	50	30
	P_4	40	35	30
	P_5	55	45	35
	P_6	45	40	30
	P_7	50	45	40
	P_8	40	35	40
F－12	P_1	45	40	35
	P_2	35	35	－
	P_3	50	40	35
	P_4	45	45	20
	P_5	40	40	35
	P_6	30	30	20
	P_7	40	35	30
	P_8	45	40	30
	P_9	30	30	25
F－13	P_1	110	75	55
	P_2	100	80	55
	P_3	95	75	50
	P_4	95	70	70
F－14	P_1	(60)	(55)	(30)
	P_2	(55)	(50)	(25)
	P_3	55	50	20
	P_4	60	50	30
	P_5	55	50	30
	P_6	65	50	30
	P_7	50	50	35
	P_8	60	50	30

※単位はcm

第108表　掘立柱建物址ピット一覧表〈その２〉

	No.	長径	短径	深さ
F－14	P_9	70	65	35
	P_{10}	(60)	(50)	25
F－15	P_1	50	50	25
	P_2	50	50	30
	P_3	50	50	25
	P_4	55	50	35
	P_5	45	45	35
	P_6	40	－	－
F－16	P_1	40	35	15
	P_2	30	25	10
	P_3	45	45	25
	P_4	25	25	20
	P_5	50	45	40
	P_6	35	30	20
	P_7	55	45	45
	P_8	－	－	－
F－17	P_1	40	35	20
	P_2	45	45	20
	P_3	50	35	20
F－18	P_1	75	65	25
	P_2	70	60	20
	F_3	60	55	40
	P_4	65	55	20
	P_5	55	45	25
	P_6	55	50	10
	P_7	70	65	35
	P_8	65	55	30
	P_9	55	50	30
F－19	P_1	75	45	40
	P_2	40	40	20
	P_3	50	40	30
	P_4	50	40	35
	P_5	40	40	35
	P_6	40	40	45
	P_7	55	30	20
	P_8	45	40	20
	P_9	40	40	15
	P_{10}	40	35	－
	P_{11}	40	35	－

	No.	長径	短径	深さ
F－19	P_{12}	30	25	－
	P_{13}	50	45	－
F－20	P_1	40	35	20
	P_2	35	35	25
	P_3	45	40	25
	P_4	35	30	40
	P_5	50	45	30
	P_6	40	40	30
	P_7	45	40	25
	P_8	45	40	20
	P_9	25	20	－
	P_{10}	25	20	－
	P_{11}	30	30	－
	P_{12}	30	25	－
	P_{13}	40	35	－
	P_{14}	45	30	－
	P_{15}	25	25	－
	P_{16}	50	35	－
	P_{17}	45	35	－
	P_{18}	60	45	25
	P_{19}	30	25	15
F－21	P_1	100	45	40
	P_2	55	45	20
	P_3	60	50	30
	P_4	65	55	30
	P_5	70	60	35
	P_6	75	60	40
	P_7	65	55	15
	P_8	70	65	20
	P_9	60	60	40
	P_{10}	110	50	40
F－22	P_1	60	55	30
	P_2	60	50	30
	P_3	50	50	20
	P_4	50	45	20
	P_5	55	50	25
	P_6	50	50	40
	P_7	50	45	25
	P_8	50	45	40

	No.	長径	短径	深さ
F－22	P_9	60	55	35
	P_{10}	55	50	35
F－23	P_1	45	40	20
	P_2	35	35	35
	P_3	45	45	20
	P_4	45	40	20
	P_5	45	45	20
	P_6	45	40	20
	P_7	45	45	20
	P_8	45	40	25
F－24	P_1	50	40	30
	P_2	45	40	30
	P_3	50	45	25
	P_4	40	35	15
	P_5	55	45	30
	P_6	30	30	5
	P_7	45	45	50
	P_8	40	40	20
	P_9	50	40	50
	P_{10}	35	30	－
	P_{11}	35	30	－
F－25	P_1	70	60	45
	P_2	60	50	50
	P_3	60	55	45
	P_4	60	55	40
	P_5	30	30	－
	P_6	60	55	－
	P_7	60	55	－
F－26	P_1	50	40	20
	P_2	60	60	25
	P_3	50	50	30
	P_4	55	50	30
	P_5	55	55	25
	P_6	40	35	－
F－27	P_1	55	45	30
	P_2	60	50	20
	P_3	70	55	20
	P_4	60	50	20
	P_5	60	60	20

※単位はcm

第108表　掘立柱建物址ピット一覧表〈その3〉

	No.	長径	短径	深さ
F－27	P6	70	55	35
	P7	70	55	35
	P8	50	50	20
	P9	55	55	25
	P10	50	40	25
F－28	P1	(50)	(45)	(40)
	P2	(60)	(55)	(35)
	P3	50	45	45
	P4	45	45	55
	P5	50	40	40
	P6	60	45	45
	P7	50	50	40
	P8	45	45	40
	P9	55	45	40
	P10	50	45	35
	P11	－	－	－
F－29	P1	35	35	25
	P2	30	30	15
	P3	35	30	30
	P4	45	40	45
	P5	40	35	30
	P6	35	35	25
	P7	45	35	30
	P8	35	35	30
	P9	15	15	10
F－30	P1	45	40	45
	P2	65	55	20
	P3	60	45	45
	P4	50	40	35
	P5	50	40	30
	P6	40	30	20
	P7	45	40	30
	P8	45	45	25
	P9	30	25	－
F－31	P1	70	70	50
	P2	80	65	70
	P3	60	60	40
	P4	70	60	60
	P5	100	55	60

	No.	長径	短径	深さ
F－31	P6	105	60	65
	P7	100	50	65
	P8	70	65	45
	P9	100	60	45
	P10	80	60	60
	P11	45	40	30
	P12	55	50	65
F－32	P1	70	55	35
	P2	35	30	20
	P3	95	65	35
	P4	70	50	20
	P5	－	－	－
	P6	70	50	20
	P7	110	60	45
	P8	70	55	20
F－33	P1	55	45	40
	P2	65	60	50
	P3	75	60	55
	P4	70	65	55
	P5	55	55	40
	P6	50	45	50
	P7	55	45	40
	P8	55	50	35
	P9	60	55	35
	P10	50	50	30
F－34	P1	50	45	50
	P2	45	45	35
	P3	45	45	25
	P4	50	50	30
	P5	55	45	30
	P6	70	55	30
	P7	105	55	30
	P8	65	50	30
F－35	P1	90	55	45
	P2	70	60	35
	P3	80	70	60
	P4	45	40	5
	P5	75	55	45
	P6	60	55	50

	No.	長径	短径	深さ
F－35	P7	55	50	35
	P8	50	45	30
	P9	55	45	50
	P10	65	50	40
F－36	P1	70	70	30
	P2	50	45	20
	P3	55	50	25
	P4	80	70	30
F－37	P1	55	45	45
	P2	70	45	40
	P3	50	45	35
	P4	70	45	40
F－38	P1	70	60	25
	P2	60	60	20
	P3	60	60	30
	P4	75	75	40
F－39	P1	70	70	45
	P2	65	60	40
	P3	75	60	50
	P4	55	50	30
	P5	50	45	45
	P6	50	45	50
	P7	60	50	45
	P8	75	70	40
	P9	95	70	30
	P10	75	70	45
	P11	65	55	25
	P12	80	65	25
	P13	55	45	－
	P14	45	45	－
	P15	65	55	－
	P16	45	45	15
F－40	P1	50	50	35
	P2	60	60	35
	P3	65	55	30
	P4	65	50	45
	P5	65	55	40
	P6	75	50	45
	P7	65	55	－

※単位はcm

第108表　掘立柱建物址ピット一覧表〈その４〉

	No.	長径	短径	深さ
F—41	P1	45	45	30
	P2	80	45	40
	P3	75	55	30
	P4	60	50	40
	P5	40	40	40
	P6	40	35	−
	P7	35	25	−
	P8	45	35	−
F—42	P1	75	65	50
	P2	75	75	50
	P3	65	60	40
	P4	60	60	45
	P5	75	65	45
	P6	75	70	45
	P7			
	P8	60	55	50
	P9	90	75	50
	P10	80	75	50
	P11	50	40	−
	P12	60	55	−
	P13	35	30	−
F—43	P1	60	60	25
	P2	30	30	−
	P3	25	25	15
	P4	50	50	30
	P5	50	45	25
	P6	50	45	30
	P7	50	40	−
	P8	35	30	10
	P9	45	45	25
	P10	50	45	25
	P11	30	30	−
	P12	40	35	−
F—44	P1	60	55	50
	P2	25	25	30
	P3	55	50	35
	P4	55	55	35
	P5	50	45	10
	P6	60	50	50

	No.	長径	短径	深さ
F—45	P1	60	50	35
	P2	30	30	25
	P3	45	40	40
	P4	35	30	15
	P5	65	45	30
	P6	70	40	10
	P7	55	55	35
	P8	20	20	−
F—46	P1	55	50	40
	P2	50	50	30
	P3	50	45	45
	P4	40	35	35
	P5	60	45	45
	P6	40	35	40
	P7	50	45	45
	P8	40	35	40
	P9	30	25	25
F—47	P1	60	50	30
	P2	50	50	35
	P3	50	50	30
	P4	55	50	30
F—48	P1	35	30	15
	P2	35	30	10
	P3	35	30	15
	P4	35	35	25
	P5	40	40	25
	P6	45	45	25
	P7	50	45	25
	P8	40	40	40
	P9	20	20	10
	P10	30	30	10
	P11	30	30	10
F—49	P1	70	50	35
	P2	55	50	25
	P3	60	60	45
	P4	50	50	25
	P5	50	50	15
	P6	60	60	35
F—50	P1	60	50	40

	No.	長径	短径	深さ
F—50	P2	50	45	45
	P3	50	45	35
	P4	55	45	50
F—51	P1	65	40	10
	P2	40	40	20
	P3	75	50	40
	P4	50	45	25
	P5	55	50	45
	P6	45	40	15
	P7	50	45	45
	P8	35	30	10
	P9	50	50	40
F—52	P1	55	55	35
	P2	55	45	30
	P3	50	45	20
	P4	55	50	25
F—53	P1			
	P2			
	P3	85	65	70
	P4	85	55	55
	P5	75	55	50
	P6	90	70	55
	P7	90	50	40
	P8	85	40	55
	P9	80	45	50
	P10	90	50	45
F—54	P1			
	P2	45	45	20
	P3	50	45	45
	P4	75	55	30
	P5	55	50	20
	P6	45	40	15
	P7	75	70	25
	P8	75	55	45
	P9	65	50	25
	P10	65	55	−
F—55	P1	70	60	15
	P2	60	55	15
	P3	55	55	35

※単位はcm

第108表　掘立柱建物址ピット一覧表〈その5〉

	No.	長径	短径	深さ
F—56	P1	75	65	30
	P2	45	40	35
	P3	50	50	50
	P4	55	45	20
	P5	80	80	45
	P6	50	40	20
F—57	P1	70	55	50
	P2	65	65	30
	P3	80	65	20
	P4	80	55	40
	P5	55	45	50
	P6	80	60	45
	P7	75	60	60
	P8	70	55	35
	P9	70	60	50
	P10	95	55	45
F—58	P1	65	60	30
	P2	65	60	25
	P3	50	45	15
	P4			
	P5			
	P6			
	P7	65	55	25
	P8	55	55	25
	P9	70	70	30
	P10	65	60	20
	P11	55	55	−
	P12	45	45	−
	P13	55	55	−
	P14	55	50	−
	P15	60	55	−
	P16	45	40	−
	P17	25	20	−
F—59	P1	70	70	30
	P2	65	60	30
	P3	65	60	50
	P4	60	50	35
	P5	60	60	35
	P6	60	55	40
F—59	P7	60	60	45
	P8	65	65	45
	P9	60	55	40
	P10	55	50	30
	P11	40	40	−
F—60	P1	60	55	30
	P2			
	P3	70	65	50
	P4	70	60	45
F—61	P1	50	45	40
	P2	45	40	30
	P3	50	50	20
	P4	45	45	45
	P5	40	40	30
	P6	40	40	30
	P7	45	40	25
	P8	45	40	25
	P9	50	45	35
	P10	45	45	35
	P11	45	40	20
F—62	P1	45	45	20
	P2	40	30	20
	P3			
	P4	40	35	20
	P5	45	45	35
	P6	50	45	35
F—63	P1	45	40	20
	P2	40	40	15
	P3	55	55	45
	P4	45	45	25
	P5	45	35	20
	P6	45	35	20
F—64	P1	70	50	25
	P2	45	40	20
	P3	55	50	55
	P4	50	45	20
F—65	P1	60	50	40
	P2	65	55	50
	P3	55	45	55
F—65	P4	45	40	45
F—66	P1	65	50	30
	P2	50	30	15
	P3	70	45	20
	P4	45	40	30
F—67	P1	45	40	25
	P2	90	60	20
	P3	55	50	20
	P4	55	55	30
F—68	P1	40	30	35
	P2	45	40	35
	P3	40	35	35
	P4	35	35	15
	P5	35	35	20
	P6	40	35	10
	P7	35	35	20
	P8	75	60	−
F—69	P1	50	45	30
	P2	45	40	30
	P3	40	40	25
	P4	50	45	40
	P5	50	40	50
	P6	65	40	−
F—70	P1	65	60	50
	P2	65	55	45
	P3	70	55	30
	P4	70	65	30
	P5	85	50	40
	P6	50	50	40
	P7	80	75	30
	P8	65	55	35
	P9	55	40	35
	P10	55	45	−
F—71	P1	50	40	10
	P2	65	55	25
	P3	75	70	15
	P4	65	60	15
	P5	65	60	15
	P6	75	60	20

※単位はcm

第108表　掘立柱建物址ピット一覧表〈その６〉

	No.	長径	短径	深さ
F—71	P_7	75	65	20
	P_8	75	70	25
	P_9	65	55	10
F—72	P_1	55	40	25
	P_2	65	25	30
	P_3	40	25	30
	P_4	15	15	5
	P_5	20	20	10
	P_6	30	25	10
	P_7	25	25	10
	P_8	15	15	5
	P_9	40	35	20
	P_{10}	25	25	15
	P_{11}	35	30	30
F—73	P_1	60	55	25
	P_2	50	50	25
F—74	P_1	–	–	–
	P_2	–	–	–
	P_3	30	25	15
	P_4	30	25	10
	P_5	30	30	25
	P_6	35	30	20
	P_7	30	25	40
	P_8	25	25	25
	P_9	40	35	25
	P_{10}	30	30	30
	P_{11}	30	25	15
F—75	P_1	20	20	10
	P_2	20	15	10
	P_3	20	20	15
	P_4	25	20	20
	P_5	15	15	10
	P_6	30	20	–
	P_7	20	15	10
	P_8	30	20	15
	P_9	25	20	15

3　井戸址

(1)　Ⅰ－1号井戸址

遺　構　第337図

Ⅰ－1号井戸址は、第Ⅰ区ヒ－33グリッドにおいて検出された。

本址は、径2.8～3.0m深さ1.8m前後を測る素掘りの井戸である。その脇には50×40cm深さ25cmを測るピットが付随する。

井戸のある地表面から1.3mほど下位は、透水層であるP1の礫層で(図の網点部)、本址はこの層を50cmほどくり抜いて設けられている。その湧水の状況は図版百五十二からもわかる。

その覆土は、激しい湧水のため分層が不可能で、とりあえず上位にパミス下位に砂・小石を多量に含む黒色土層（10YR 1.7/1）としてとらえた。

遺　物　第336図

本址から検出された遺物には、主なものに第336図1・2・3の須恵器が、この他須恵器蓋・坏・甕の破片、土師器坏・甕の破片が検出されている。

第336図1は、ほぼ完形の須恵器坏で、その底部は切り離しの後全面に手持ちヘラケズリのなされたものである。その形態的特徴から、八世紀前半の遺物と考えられよう。井戸使用中に過って井戸内に落してしまったものであろう。

2は、回転糸切りによる須恵器坏底部である。八世紀末から九世紀初頭の遺物と考えられる。

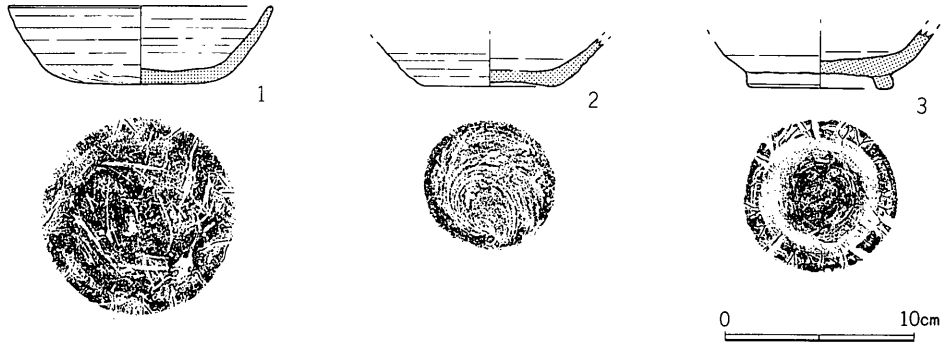
3は、高台付の須恵器底部で、器種は長頸瓶となろうか。

時　期

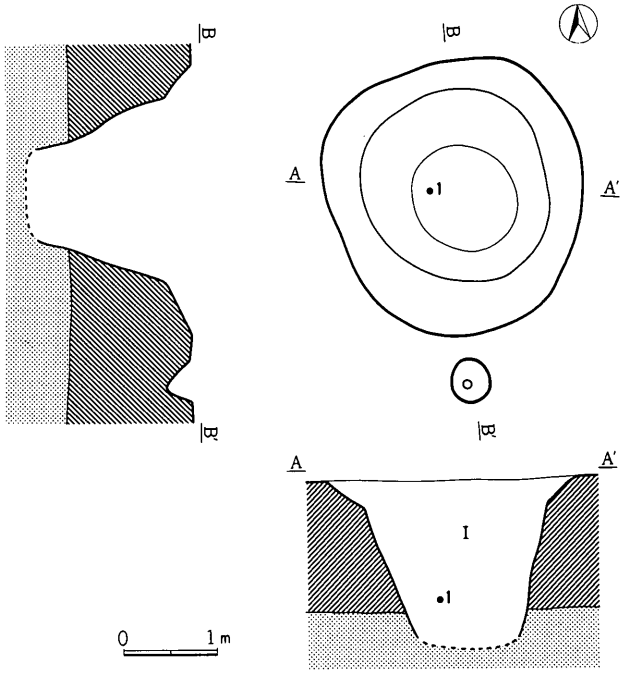
本井戸の使用期間は、少なくとも1の遺物の示す八世紀前半から2の遺物の示す八世紀末～九世紀初頭と考えておこう。つまりこの期間を通じて集落に本井戸から水が供給されたものと想定しておこう。

第109表　Ⅰ－Ⅰ号井戸址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1（完）	坏（須）	14.0 4.1 7.9	体部は外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。 底部回転ヘラキリの後、全面手持ちヘラケズリ。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み灰白色（10Y 8/1）全体に水磨が激しい。
2（回）	坏（須）	— — 7.0	体部は外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り未調整 内面　ロクロヨコナデ。 （ロクロ回転方向不明）	胎土は砂粒を含み圧色（10Y6/1）全体に水磨が激しい。
3（完）	（須）	— — 7.8	底部には高台が貼り付けられる。	外面　ロクロヨコナデ。 底部回転ヘラケズリ、切り離し方法不明 内面　ロクロヨコナデ。 （ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み灰色（10Y 6/1）



第336図　Ⅰ－Ⅰ号井戸址出土遺物（1：4）



第337図　Ⅰ－Ⅰ号井戸址実測図（1：80）

4　土　　壙

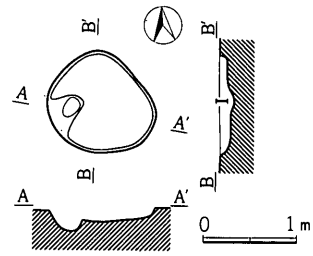
（1）　D－1号土壙

第338図

D－1号土壙は、第Ⅰ区ノ－33グリッドにおいて検出された。

本土壙は、長径1.15m短径1mを測る歪んだ楕円形を呈し、深さ10cm程のきわめて浅いものでその底面に楕円形のピットをもつものである。

その覆土は、パミス・スコリア・ローム粒子を含まない黒色土層（10YR 1.7/1）であった。



第338図　D－1号土壙実測図（1：80）

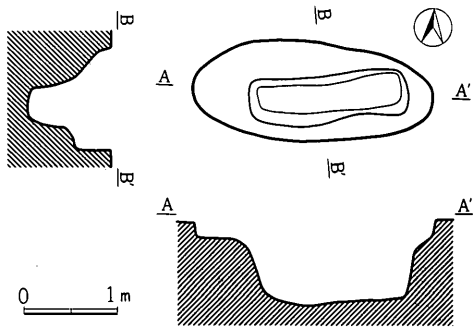
なお、本土壙からは遺物が一点も出土していない。したがってその時期判定も難しいが、いずれにしてもこの奈良・平安時代の集落のある時期に付随するものとみられようか。

（2）　D－2号土壙

第339図

D－2号土壙は、第Ⅰ区ヒ－36グリッドにおいて検出された。

本土壙は、その上面のプランは長径2.55m短径1.1mを測る長楕円形を呈し、下面のプランは長径1.65m短径0.5mを測る長方形を呈している。その断面は、逆凸状を呈しており深さ85cmを測った。



第339図　D－2号土壙実測図（1：80）

本土壙からは遺物が一点も出土していない。したがってその時期判定も難しいが、いずれにしてもこの奈良・平安時代の集落のある時期に付随するものとみられようか。

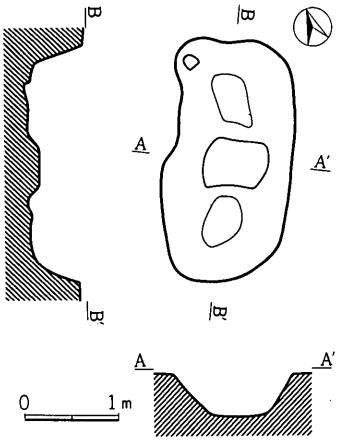
（3）　D－3号土壙

第340図

D－3号土壙は、第Ⅰ区ヒ－36グリッドにおいて検出された。

本土壙は、東西1.4m南北1.1mを測る不整楕円形を呈している。その断面は、逆台形状を呈しており深さ60cmを測った。なお、土壙の底面中央はテラス状に一段高くなっていた。

本土壙からは遺物が一点も出土していない。したがってその時期判定も難しいが、D－1・2と同様にこの奈良・平安時代の集落のある時期に付随するものとみられようか。



第340図　D－3号土壙実測図（1：80）

（4）　D－4号土壙

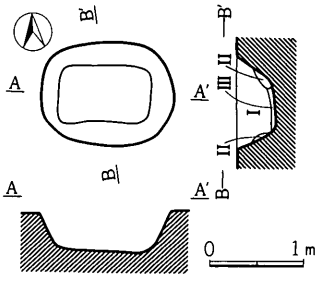
第341図

D－4号土壙は、第II区ネ－30グリッドにおいて検出された。

本土壙は、長径2.5m短径1.4mを測る隅丸方形を呈している。その断面は、逆台形状を呈しており深さ40cmを測った。

その覆土は、I層が小粒スコリアを多量に含み、焼土・カーボンをまったく含まない黒色土層（10YR 2/1）、II層が焼土を多量に含む黒褐色土層（10YR 3/2）、III層が若干のカーボン・ローム粒子が混入する黒色土層（10YR 2/1）であった。この覆土の堆積状況から察して、本土壙においては火が焚かれたことが推察される。

本土壙からは遺物が一点も出土していない。したがってその時期判定も難しいが、この奈良・平安時代の集落のある時期に付随するものとみられようか。



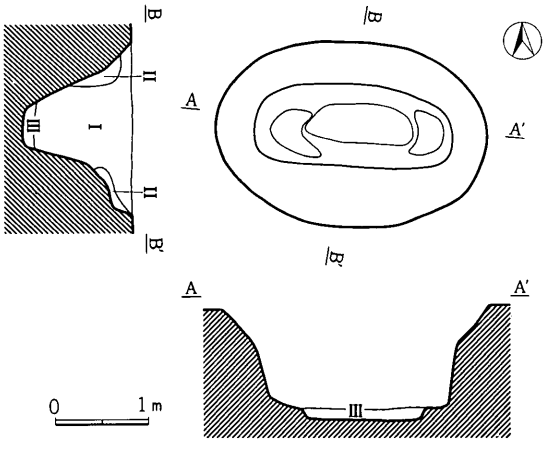
第341図　D－4号土壙実測図（1：80）

（5）　D－5号土壙

第342図

D－5号土壙は、第II区ノ－30グリッドにおいて検出された。

本土壙は、その上面のプランは長径2.85m短径2.0mを測る長楕円形を呈し、下面の



第342図　D－5号土壙実測図（1：80）

プランは長径2.1m短径0.85mを測る長楕円形を呈している。その断面は、逆凸状を呈しており深さ120cmを測った。そのプランはD－2・D－6に近似している。

その覆土は、I層がスコリアを若干含み、ローム粒子をまったく含まない黒色土層（10YR 1.7/1)、II層がローム粒子を多量に含む黒褐色土層（10YR 3/2)、III層が砂層であった。

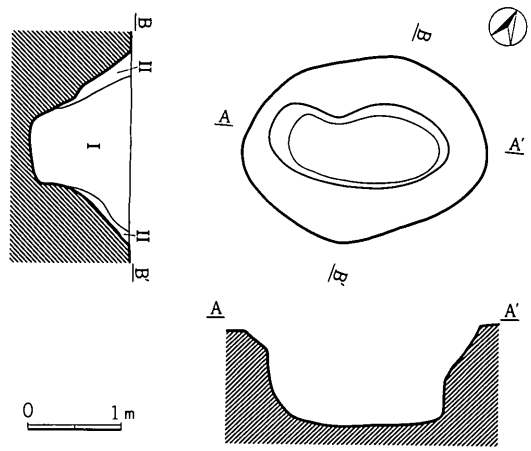
本土壙からは遺物が一点も出土していない。したがってその時期判定も難しいが、いずれにしてもこの奈良・平安時代の集落のある時期に付随するものとみられようか。

（6）　D－6号土壙

第343図

D－6号土壙は、第II区ハ－30グリッドにおいて検出された。

本土壙は、その上面のプランは長径2.6m短径1.9mを測る楕円形を呈し、下面のプランは長径1.7m短径0.9mを測る楕円形を呈している。その断面は、逆凸状を呈しており深さ1mを測った。そのプランはD－2・D－5に近似している。



第343図　D－6号土壙実測図（1：80）

その覆土は、I層がローム粒子を若干含み粘性のある黒褐色土層（10YR 2/2)、II層がローム粒子を多量に含む褐色土層（10YR 4/6）であった。

本土壙からは遺物が一点も出土していない。したがってその時期判定も難しいが、いずれにしてもこの奈良・平安時代の集落のある時期に付随するものとみられようか。

5　溝状遺構

（Ｉ）　Ｍ－Ｉ号溝状遺構

遺　構　第345図

Ｍ－１号溝状遺構は、第Ｉ区ヌ・ネ・ノ－32・33グリッドにおいて検出された南北に延びる長い溝状遺構である。

本溝状遺構は、発掘調査地区において検出された部分は60m程であるが、その北側は旧河川に接続し、また南側にはさらに延びるものと考えられよう。その幅は50～130cmを測った。

溝の底面には、図版に見るように礫が幾つか認められる箇所があった。

その覆土は、２層に分層された。Ｉ層は砂を含まない黒色土層（10YR 1.7/1)、II層は砂を含む黄橙色砂層（10YR 8/6）であった。II層の存在から本溝状遺構の機能時には水流があったことが認められる。その機能は、旧河川より引水した水路であることも考えられよう。

遺　物　第344図

本溝状遺構の底面から検出された遺物を第344図に示した。

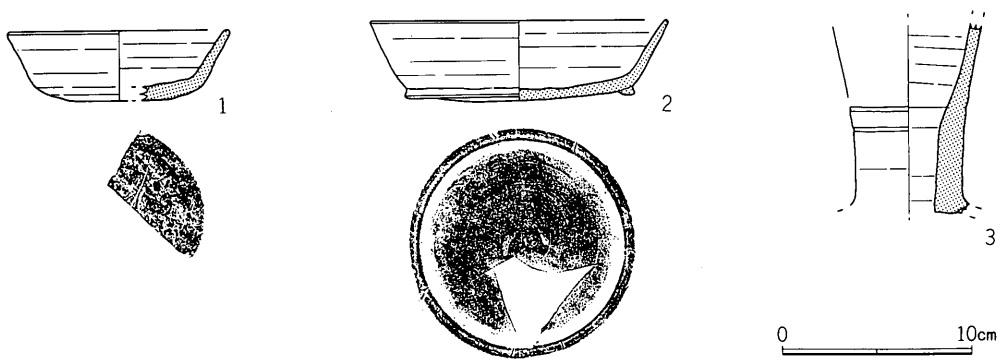
１は、回転ヘラキリによる底部をみせる須恵器坏である。

２は、回転ヘラケズリによる底部をみせる須恵器高台付坏で、その底部は高台部より若干とび出ているのが特徴である。

３は須恵器長頸瓶の頸部で、二条の沈線が施されている。

時　期

本溝状遺構の底面から検出された１・２の遺物は、本溝状遺構機能時に混入したものと考えら



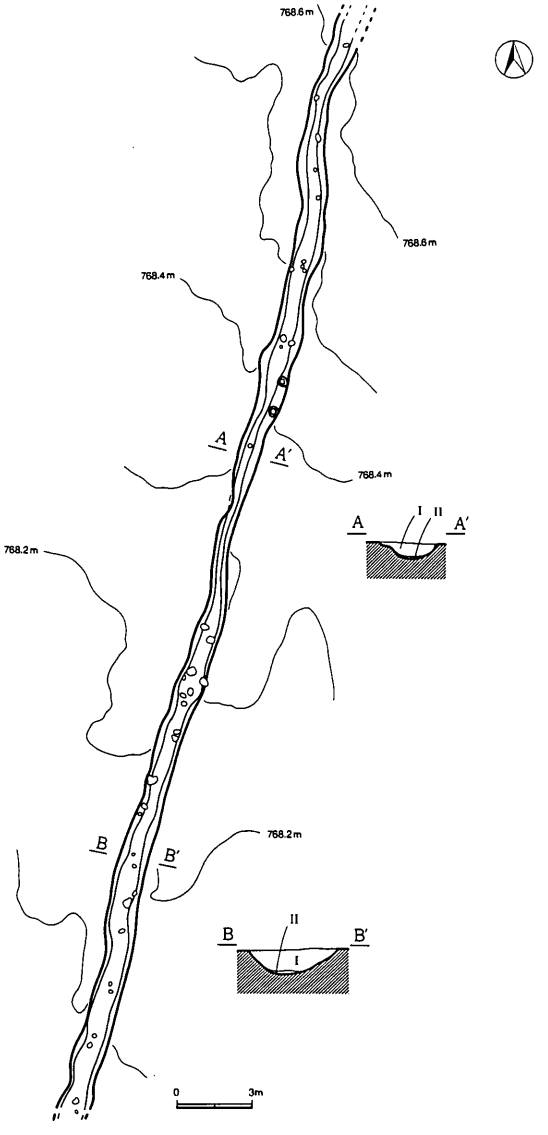
第344図　Ｍ－Ｉ号溝状遺構出土遺物（Ｉ：４）

第110表　M－Ⅰ号掘立柱建物址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1（回）	坏（須）	〈11.8〉 3.7 〈6.0〉	体部は外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ。 底部回転ヘラキリ未調整 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み灰色（10Y 6/1）
2（完）	坏（須）	15.8 4.3 12.1	体部は外反する。 底部には高台が貼り付けられるが、高台部より底部が突出する。	外面　体部ロクロヨコナデ。 底部回転ヘラケズリ、切り離し方法不明 内面　体部ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は比較的精選され焼成良好灰色(10Y6/1)を呈する。
3（完）	長頸瓶（須）	― ― ―	頸部はラッパ状に広がる。 中間には二本の沈線が施こされる。	外面　ロクロヨコナデ。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は精選され灰色(10Y6/1)外面には自然釉が付着する。

る。遺物自体は八世紀前半のものと考えられるので、本溝状遺構が機能していた時期を八世紀前半以降と推定できる。なお、竪穴住居址等その他の遺構が本遺構を避けて分布する傾向も見受けられないこともない。したがって本遺構が集落の存続期間に機能していた可能性も残る。

しかし一方で、本溝状遺構のたどり着く旧河川が九世紀以降の所産である可能性も残るため、その時期は微妙である。



第345図　M－Ⅰ号溝状遺構実測図（1：300）

6　旧河川

遺　構　第346図

第II区から第I区にかけては、自然流路と考えられる比較的大きな旧河川跡が検出された。

第II区29・30列において二又に分かれていたものが、31列以降合流し、西へと延びるものであった。その幅は、二又時においては最大５ｍ～最小１ｍ、それ以西では最大12ｍ～最小５ｍ、深さは33列付近で１ｍ前後を測った。本跡の堆積土層は、河川堆積に特有な多量な砂利層であった。

遺　物　第347図

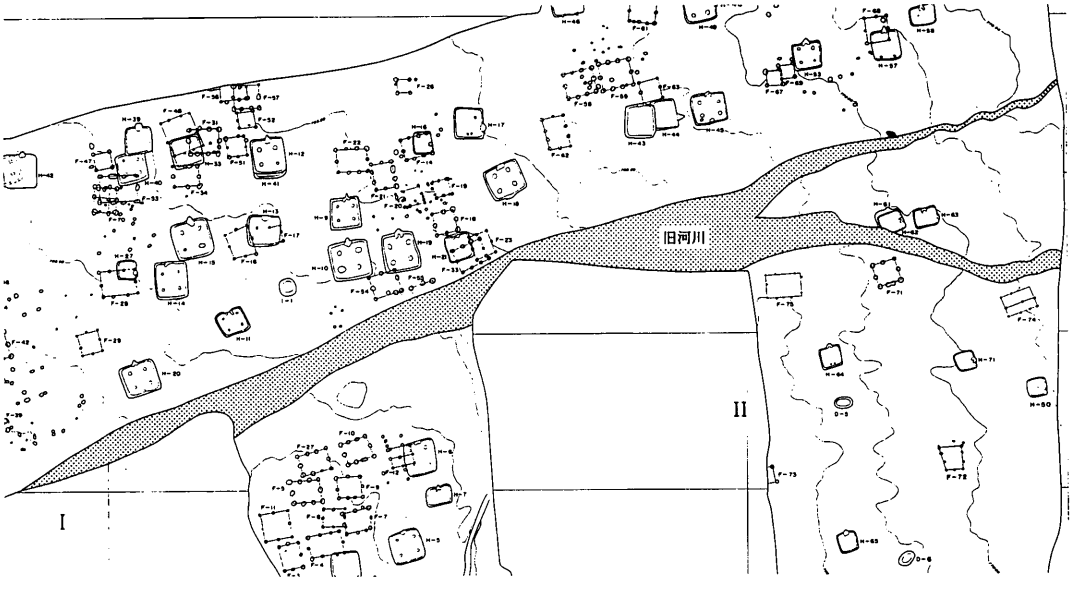
本跡の堆積層からは、第347図１・２の須恵器坏の他、馬歯１点が検出されている。

１・２は、回転糸取りによる須恵器坏の底部である。

時　期

本跡から検出された１・２の遺物は、本跡機能時に混入したものと考えられる。遺物自体は八世紀末から九世紀にかけてのものと考えられるので、本溝状遺構が機能していた時期を八世紀末から九世紀以降と推定できる。また、本跡はＨ－61・62号竪穴住居址・Ｆ－55号掘立柱建物址の一部を破壊している。Ｈ－62は九世紀以降の所産である。

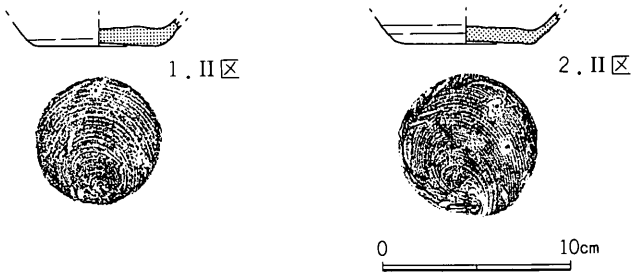
一方、それ以外の竪穴住居址・掘立柱建物址が、本遺構を微妙に避けて分布する傾向も見受け



第346図　旧河川

第III表　旧河川出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1 (完)	坏 (須)	— — 6.7	底部平底。	外面　ロクロヨコナデ。底部回転糸切り、未調整 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み灰色 （N6/0）
2 (完)	坏 (須)	— — 7.5	底部平底。	外面　ロクロヨコナデ。底部回転糸切り、未調整 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は比較的精選され赤灰色 （5R6/1）



第347図　旧河川出土遺物（1：4）

られないこともない。したがって本遺構が集落の存続期間に機能していた可能性も残しておかねばなるまい。

7　表面採集遺物

遺　物　第348図

表面採集遺物は数多くあるが、図示し得たのは第348図１・２・３のみであった。

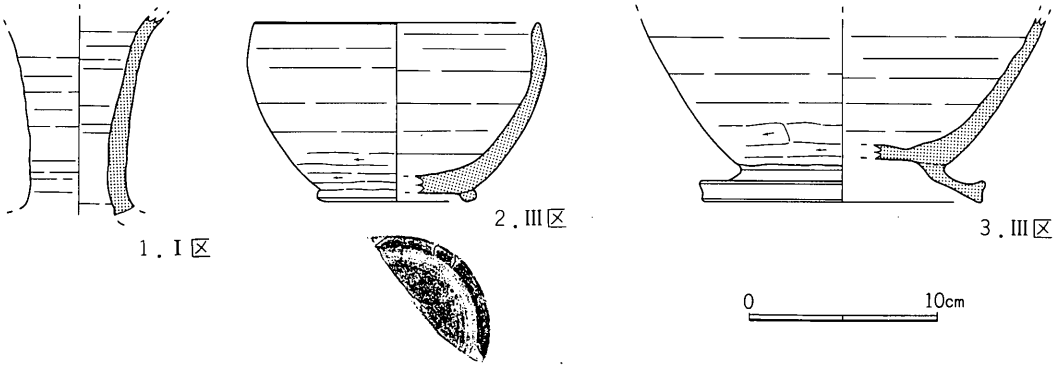
１は、Ⅰ区で採集された須恵器長頸瓶頸部である。

２は、Ⅲ区で採集された須恵器高台付埦で、底部の切り離し方法は不明である。

３は、長い足のついた高台付の須恵器で、その器種は不明である。

いずれの遺物も、奈良・平安時代の遺物といえるが、細かな時期決定するにはいたらなかった。

この他、４の鎌、５の石鏃が採集されている。



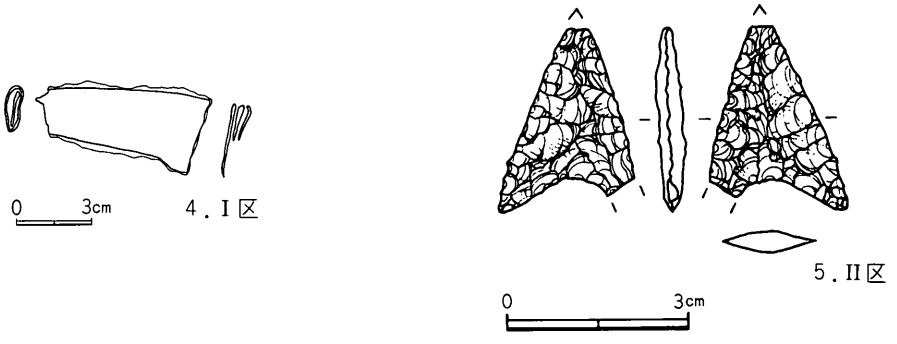
第348図　表面採集遺物（１：４）

第112表　表面採集遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1（完）	長頸瓶（須）	― ― ―	頸部はラッパ状にひろがる。	外面　ロクロヨコナデ。 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み灰色（N 5/0）を呈する。 Ⅰ区表採。
2（回）	埦（須）	〈15. 1〉 9. 4 (8. 4)	体部は丸味を帯びて外反し、底部には高台が貼り付けられる。	外面　体部ロクロヨコナデ。 底部回転ヘラケズリ（切り離し方法不明） 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ左回転）	胎土は砂粒を含み灰色（N 6/0）を呈する。 Ⅲ区表採。
3（回）	（須）	― ― 〈14. 8〉	器種不明 底部には高台が貼り付けられる。	外面　胴部ロクロヨコナデ。底部切り離し方法不明 内面　ロクロヨコナデ。（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含み灰白色を呈する。（N 7/0）

第113表　表面採集遺物一覧表〈石器・鉄器〉

挿図番号	器　種	材　質	長さ	幅	厚さ	重量	備　考
5	石　鏃	流紋岩	(3.0)	(2.2)	0.4	(1.9)	Ⅱ区表採
4	鏃？	鉄	(6.8)	(3.0)	0.7	(22.8)	Ⅰ区表採



第349図　表面採集遺物（4＝1：3　5＝4：5）

V　総　　括

1　十二遺跡における土器様相

（1）　はじめに

十二遺跡は、奈良・平安時代の集落址である。したがって、そこから検出された遺物もまた当然のことながら奈良・平安時代のものである。ここでは、その奈良・平安時代の土器様相を把握することを目的とする。

十二遺跡における奈良・平安時代の土器様相を把握するにあたっては、次の方法・手順を用いる。

① 出土した土器すべてについて、統一した観点からの器種・形態分類をおこなう。

② 分類した器種・形態の特徴的組成を、遺物の一括性・共伴頻度を考慮したうえで導き出す。

③ その特徴的組成の時間的関係を、遺構の切り合い関係および形態変遷の妥当性などに基づいて把握する。

④ 遺物の特徴的組成を、あらためて土器様相としてとらえなおす。

なお、この検討を進めるにあたっては、本遺跡と隣接する前田遺跡において把握された土器様相（堤　1987）から教えられる部分も少なくない。

（2）　器種・形態分類

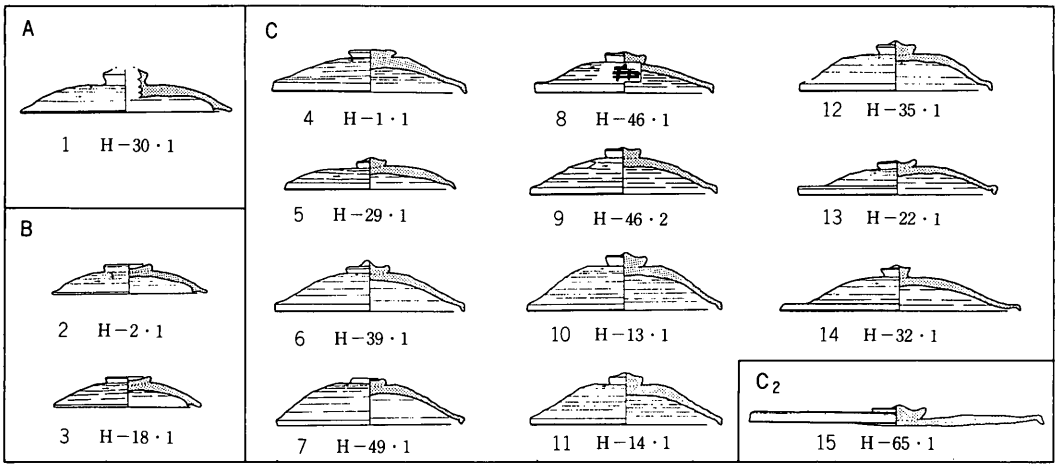
十二遺跡から検出された土器の種類としては、土師器・須恵器・灰釉陶器がある。いわゆる黒色土器は、黒色土師器として土師器の範疇でとらえた。

一般に土器は、その機能に基づいて、基本的には「共献具（食膳具）」・貯蔵具・煮炊具に分類されるという。無論、この三分類がすべての土器の機能のカバーし得るものとは思われないが、ここではとりあえずその分類・序列に従い、十二遺跡の土器の器種・形態について論じることにしよう。

1）　蓋

1　須恵器蓋　第350図

須恵器蓋は25点を図示した。これらはさらに、①内面のかえりの有無、②つまみ部の形状、③扁平度の三つの視点から形態分類が可能である。



第350図　須恵器蓋分類図（1：6）

形態　A

宝珠形のつまみ部を有し、内面にかえりのあるもの。1点のみしか検出されていない（1）

形態　B

径が大きく中央のくぼむ皿状のつまみ部を有し、内面にかえりのあるもの（2・3等）。

形態　C

宝珠形もしくはその潰れた形状のつまみ部を有し、内面にかえりのないもの。

さらに形態Cは、その中央部において器高の高まるC_1（1～14等）と、器高が高まらず扁平なC_2（15）とに分類される。ちなみにC_1は14点を図示した。

なお、ここでは認められなかったが、径が大きく中央のくぼむ皿状のつまみ部を有し内面にかえりのない形態の蓋の存在も予測できる。

2　土師器蓋　第351図

須恵器の蓋を模倣したと考えられる土師器蓋が1点検出されている。つまみ部の形状は不明であるが、ロクロ整形により内面黒色研磨のなされたものである。

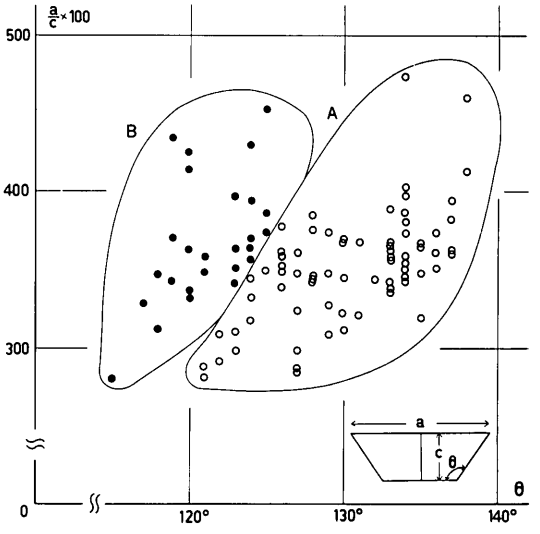
第351図　土師器蓋（1：6）

2）　坏

1　須恵器坏　第353図

須恵器坏は、十二遺跡の土器群中にあってもっとも普遍的に認められる器種である。

これらはさらに、口径・深さ・体部外傾度による法量分化（第352図）から、次のA・Bの二者に形態分類が可能である。このA・Bは前田遺跡の須恵器坏の形態分類と共通する。



第352図　須恵器坏の法量分化

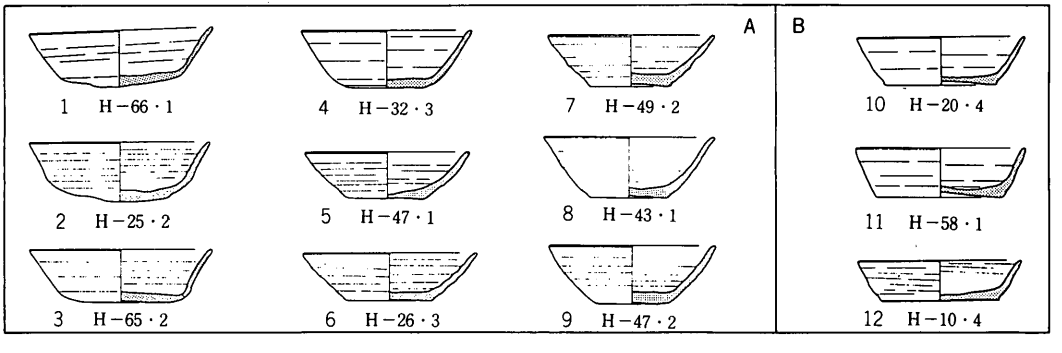
形態　A

体部が外反し、底部が平底となる器形。形態Bと比べ口径と底径に差があり、体部の外反度が強い。

口径12.3～15.7cm、底径5.2～9.8cm、深さ3.0～4.8cm、外傾度115～140度の範囲におよぶものを本形態とする。本形態は図示したうちでは91個体を数える。

形態　B

体部が外反し、底部が平底となる器形。形態Aと比べ口径と底径に差がなく、体部の外傾度が弱いいわゆる盤状の形態を呈する。口径11.2～14.8cm、底径7.4～11.6cm、深さ3.2～4.1cm、外傾度117～125度の範囲におよぶものを本形態とする。本形態は図示したうちでは21個体を数える。

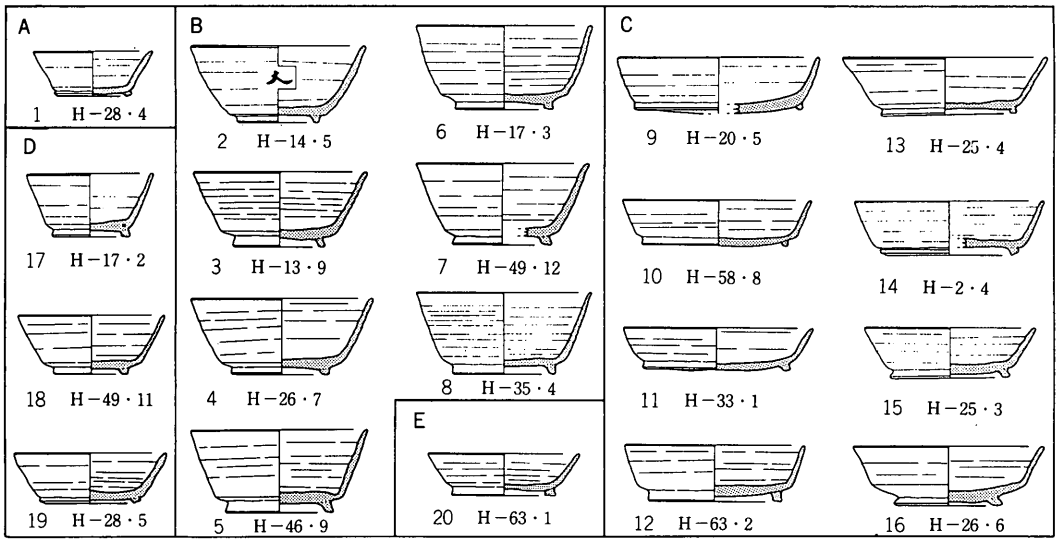


第353図　須恵器坏分類図（1：6）

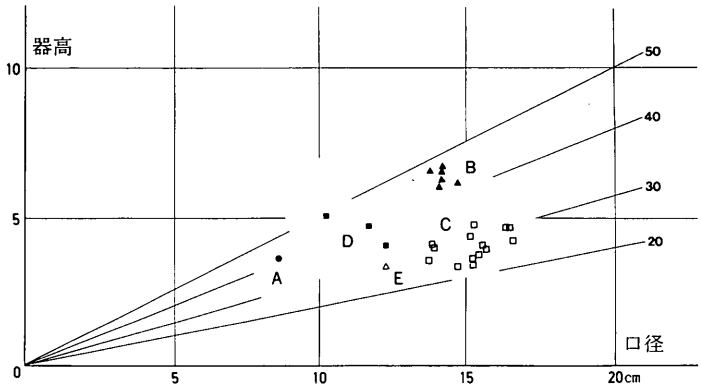
2　須恵器高台付坏　第354図

須恵器高台付坏も、須恵器坏についで普遍的に認められる器種である。

これはさらに口径・底径・深さによる法量分化（第355図）から、次のA・B・C・D・Eの五者



第354図　須恵器高台付坏の法量分化



第355図　須恵器高台付坏A（●）E（▲）C（□）D（■）E（△）法量分化

に形態分類が可能である。このうちA・B・Cは前田遺跡の須恵器高台付坏の形態分類と共通する。

形態、A

体部が外反し、底部が平底となる小形な器形。形態B・Dと相似形をなす。一点検出されているのみであり（1）、口径9.7cm、底径6.2cm、深さ3.6cmを測る。

形態　B

体部が外反し、底部が平部となる大形な器形。形態A・Dと相似形をなす。口径13.8～14.6cm、底径7.4～8.6cm、深さ5.7～6.6cmの範囲におよんでいる。本形態は図示したうちでは7個体（2～8）を数えるが、その法量はばらつきが少なくまとまった分布をみせる。

形態　C

体部が外反し、底部が平底となる、いわゆる盤状の形態を呈する。中には底部が高台部より飛出してしまっているものもある。形態Eと相似形をなす。口径13.7～16.6cm、底径8.0～13cm、深さ3.3～4.7cmの範囲におよんでいる。本形態は図示したうちでは15個体を数える（9～16）。

形態　D

体部が外反し、底部が平底となる器形。形態A・Bと相似形をなす。3点（17～19）検出されたのみであるが口径10.2～12.2cm、底径5.9～8.1cm、深さ4.0～5.0cmの範囲におよんでいる。

形態　E

体部が外反し、底部が平底となる器形。形態Cと相似形をなす。一点（20）検出されているのみであり、口径12.3cm、底径8.4cm、深さ3.3cmを測る。

なお、形態D・形態Eの法量分化はさほど顕著とはいえず、この両者を同一形態におけるばらつきの範囲でおさえておくことも可能かと考えられる。

3　土師器坏　第356図

土師器坏は、その整形におけるロクロの使用・未使用、およびその形状からA・B・C・Dの四者に形態分類が可能である。さらにその四形態下においても幾つかの相違がみられる。

形態　A

ロクロ未使用。体部は湾曲し、底部は扁平な丸底となる器形。形態Bと比べ肉薄である。外面口縁部はヨコナデ、それ以下はヘラケズリによる。内面はヨコナデによる。本形態は図示したうちでは4個体を数えるのみである（1～4）。

形態　B

ロクロ未使用。体部は湾曲し、底部は扁平な丸底となる器形。形態Aと比べ肉厚である。

B_1　外面口縁部ヨコナデそれ以下はヘラケズリ、内面はヨコナデによるもの（5・6）

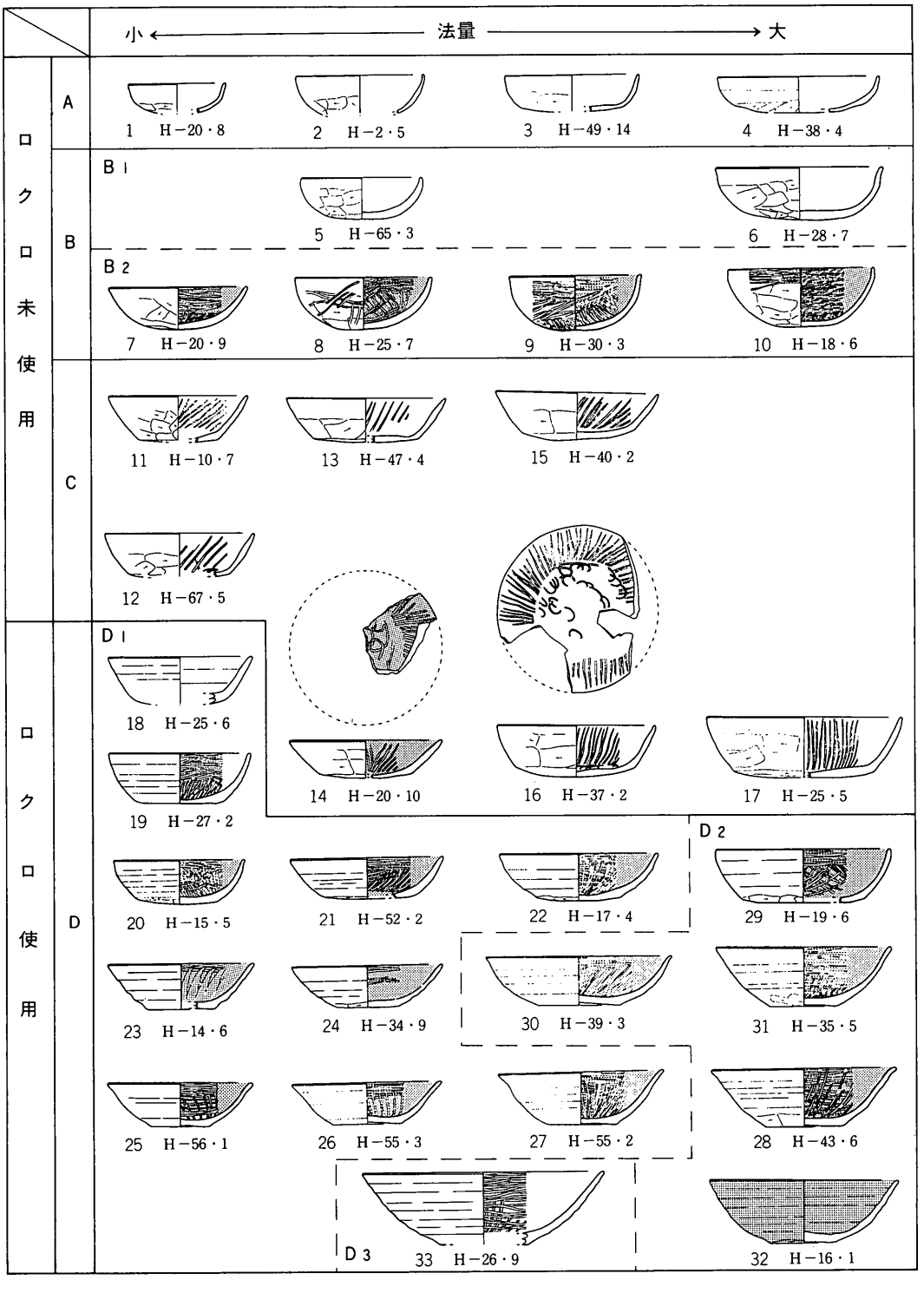
B_2　内面に黒色研磨がなされるもの（7～10）。

本形態は図示したうちでは6個体を数えるのみである。

形態　C

ロクロ未使用。体部は外反し、底部は平底。底部と体部は稜をもって変換する。

外面口縁部はヨコナデ、それ以下の体部・底部はヘラケズリによる。内面は、体部には一団の放射状暗文が施されている。また、見込部の観察できるものについてはラセン暗文が認められた。内面黒色処理のなされたものも一点ある（14）。

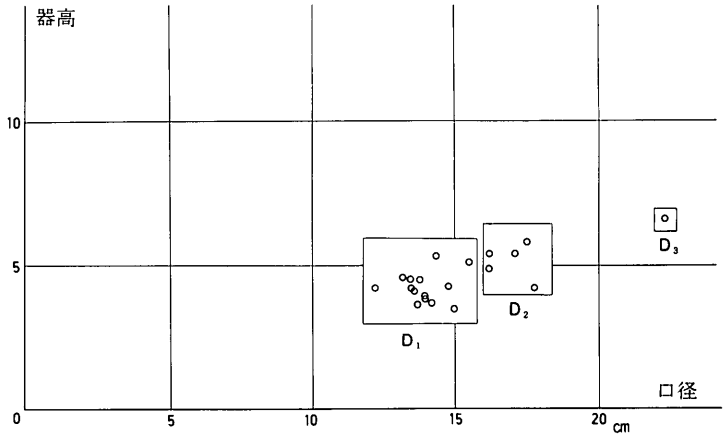


第356図　土師器坏分類図（1：6）

本形態は、畿内系暗文土器（堤　1987）と認識されるものである。7個体検出された。

形態　D

ロクロ使用。体部は外反し、底部は平底。底部と体部は稜をもって変換する。



第357図　土師器坏形態Dの法量分化

形態Dは、その法量をみると、おおよそ三つの分化が認められる。これを$D_1 D_2 D_3$とする（第357図）。

D_1　口径12～16cm、器高3.5～5.5cmの範囲におよぶもの。14点を図示した（18～27）

D_2　口径16～17cm、器高4.0～6.0cmの範囲におよぶもの。5点を図示した（28～32）

D_3　口径22.4cm、器高6.6cmの範囲におよぶもの。1点のみを図示した（33）。

この中には、口径と底径に比較的差のあるものと、差のないものの両者が認められる。また、その体部から口唇部にかけて微妙な屈曲をみせるものも注意される（25～28）。

それらの調整をみると、内外面ともにロクロヨコナデをみせているものが2例（18・32）あるが、それ以外は外面ロクロヨコナデ内面ヘラミガキのなされるものである。

また、内面黒色処理のなされるものが17例、内外面ともに黒色処理のなされるものが1例（32）、内外面ともに黒色処理のなされないものが2例認められた。

3）　椀

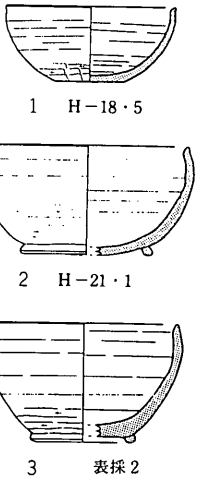
Ⅰ　須恵器椀　第358図

形態　A

ロクロ整形により、体部は湾曲し、底部平底の無台のもの。1点のみ図示し得た（1）。

形態　B

ロクロ整形により、体部は湾曲し、底部平底の高台のつけられるもの。坏類にくらべ深い法量をもつ。2点のみ図示し得た（2・3）。

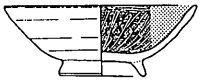


第358図　須恵器椀（Ⅰ：6）

2　土師器埦　第359図

形態　A

ロクロ整形により、体部は湾曲し、平底に高台のつけられるもの。2点のみ図示し得たが、2点とも黒色研磨がなされていた(1等)。



H－16・3

第359図　土師器埦（1：6）

2　灰釉陶器埦　第360図

H－55号住居址で1点検出されているのみである（1）。

ロクロ整形により、体部は湾曲し、平底に高台のつけられるものである。釉は、内外面体部および見込部に刷毛掛けされる。胎土は、H－42号住居址出土の灰釉陶器の段皿に比べるとやや精選されていない感があり灰色味が強い。

H－55・1

第360図　灰釉陶器埦（1：6）

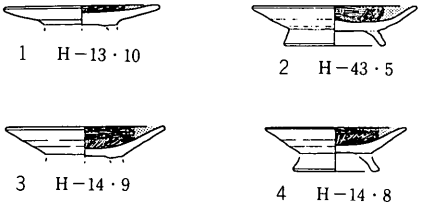
なお、本灰釉陶器は、名古屋大学斎藤孝正氏の鑑定によると、猿投窯・黒笹－90号窯式期の製品であるということであった。

4）　皿

1　土師器皿　第361図

形態　A

ロクロ整形により、扁平な形状を呈し、底部に高台のつけられるもの。4点のみ図示し得たが、4点とも内面黒色研磨がなされている（1～4）。



1　H－13・10　　2　H－43・5

3　H－14・9　　4　H－14・8

第361図　土師器皿（1：6）

2　灰釉陶器皿　第362図

H－42号住居址で1点検出されているのみである（1）。

ロクロ整形により、扁平な形状を呈し、底部に高台のつけられるもの。内面には段を有するいわゆる「段皿」である。

釉は、内面全体および外面口辺部に刷毛掛けされる。胎土は、H－55号住居址出土の灰釉陶器の埦に比べると精選されている感があり、白色味が強い。

1　H－42・1

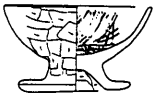
第362図　灰釉陶器皿（1：6）

なお、本灰釉陶器は、名古屋大学斎藤孝正氏の鑑定によると、東濃窯・光ケ丘1号窯式期の製品であるということであった。

5）　高　坏

1　土師器高坏　第363図

土師器高坏は数点検出されたのみであり、このうち全体の器形を知り得るのは図示した1のみであった。その坏部内面にはヘラミガキのなされ、外面はヘラケズりの後、赤色塗彩がなされている。



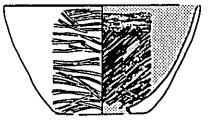
1　H－1・3

第363図　土師器高坏（1：6）

6）　鉢

1　土師器鉢　第364図

土師器鉢は図示した1が検出されたのみである。逆八の字状の形態を呈し、内面黒色研磨のなされたものである。



1　H－65・5

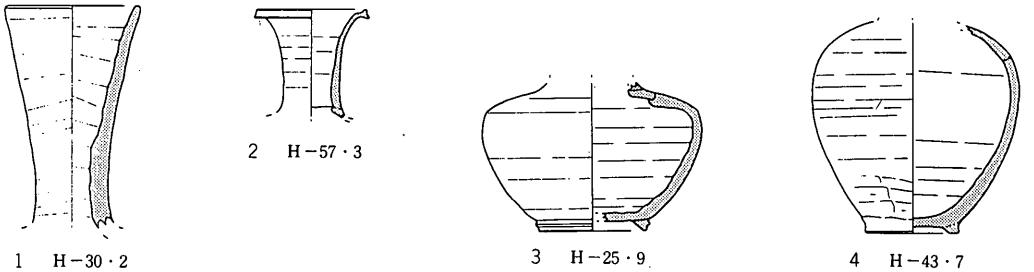
第364図　土師器鉢（1：6）

7）　瓶

1　須恵器長頸瓶　第365図

須恵器長頸瓶は全部で6点検出されているにすぎず、いずれも部分のみで全体の器形を知り得る資料ではない。

そのなかで、胴部の残るものについては、3のように肩の張るものと、4のようにそうでないものもある。この両者にはいずれも高台が付されている。また、その口縁部は、1の素口縁となるものと、2の帯状の受け口口縁となるものも認められた。



1　H－30・2　　2　H－57・3　　3　H－25・9　　4　H－43・7

第365図　須恵器長頸瓶（1：6）

2　須恵器横瓶

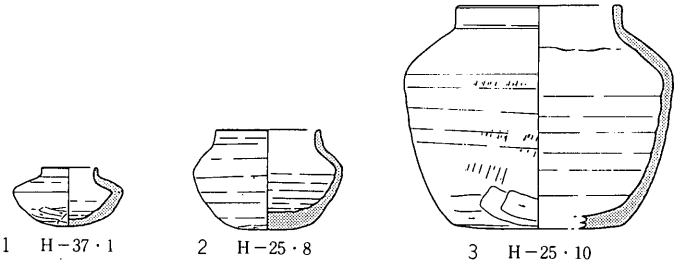
カプセル状の胴部をみせる須恵器横瓶は、H－39号住居址において1点のみ認められたが、そ

の口縁部は残っておらず全体の形状は不明である。

8）　壺・甕

1　須恵器短頸壺　第366図

須恵器短頸壺は図示し得たものは3点ある。その法量は大中小と各自様々である。

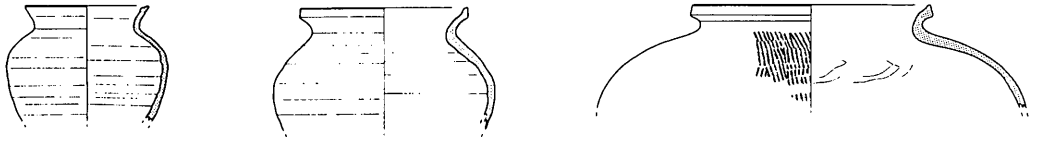


1　H－37・1　　2　H－25・8　　3　H－25・10

第366図　須恵器短頸壺（1：6）

2　須恵器壺　第367図

須恵器甕に比べ頸部のすぼまりの著しいものを須恵器壺とした。そのうち図示し得たものは6点ある。それらを一瞥した限りでも、その法量に大中小が認められる。

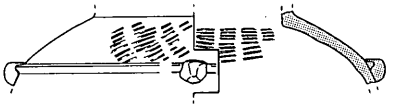


1　H－46・12　　2　H－35・6　　3　H－15・7

第367図　須恵器壺（1：6）

3　須恵器四耳壺　第368図

須恵器四耳壺の破片が、H－13およびH－52号住居址において検出されている。このうち、H－52号住居址のものを図示した。これはいわゆる凸帯付四耳壺で、断面三角形状の凸帯に耳の付されるものである。



H－52・8

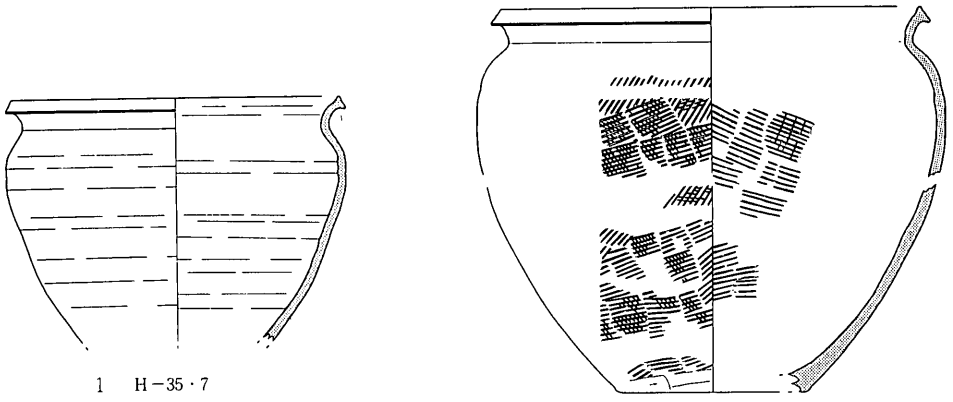
第368図　須恵器四耳壺（1：6）

その耳は、断面D字状を呈する無穿孔のもの（笹沢　1986）であった。

4　須恵器甕　第369図

須恵器壺に比べ頸部のすぼまりの著しくなく、広口ものを須恵器甕とした。そのうち図示し得たものは何点かあるが、全体の形状がわかるものは少なかった。

9）　甕



1　H－35・7

2　H－49・20

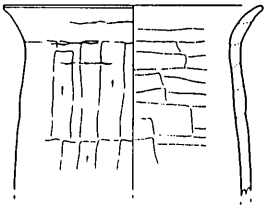
第369図　須恵器甕（1：6）

1　土師器長胴甕

1類（厚形）　第370図

土師器長胴甕で肉厚なものを1類とする。

1類は、図示できたもので3点あるのみで、いずれも全体の形状を知り得るものではない。その口縁部はゆるく外反し、胴部は比較的直線的に下降するのが特徴で、その外面には息の長い縦方向のヘラケズリがなされている。



H－31・1

第370図　土師器長胴甕1類

II類　（薄形）　第371・372図

土師器長胴甕で肉薄なものをII類とする。

II類は橙の色調をみせ、口縁部内外面がヨコナデ、外面胴部～底部がヘラケズリ、内面胴部がヘラナデの調整によっている。

II類はさらに形態A・形態Bの二者に分類できる。

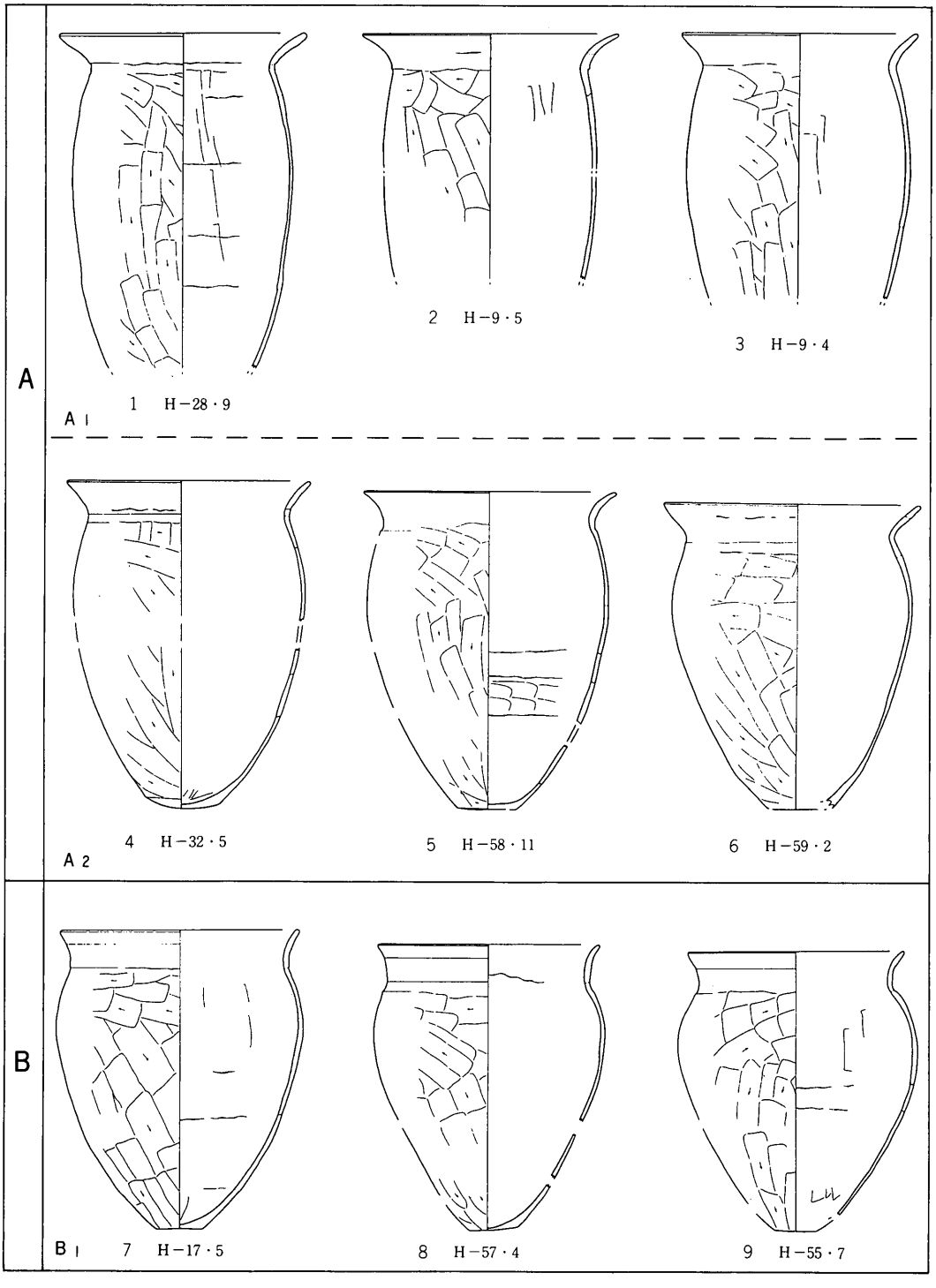
形態　A

口縁部が「くの字」状に外反するもの。A_1・A_2に細分される。

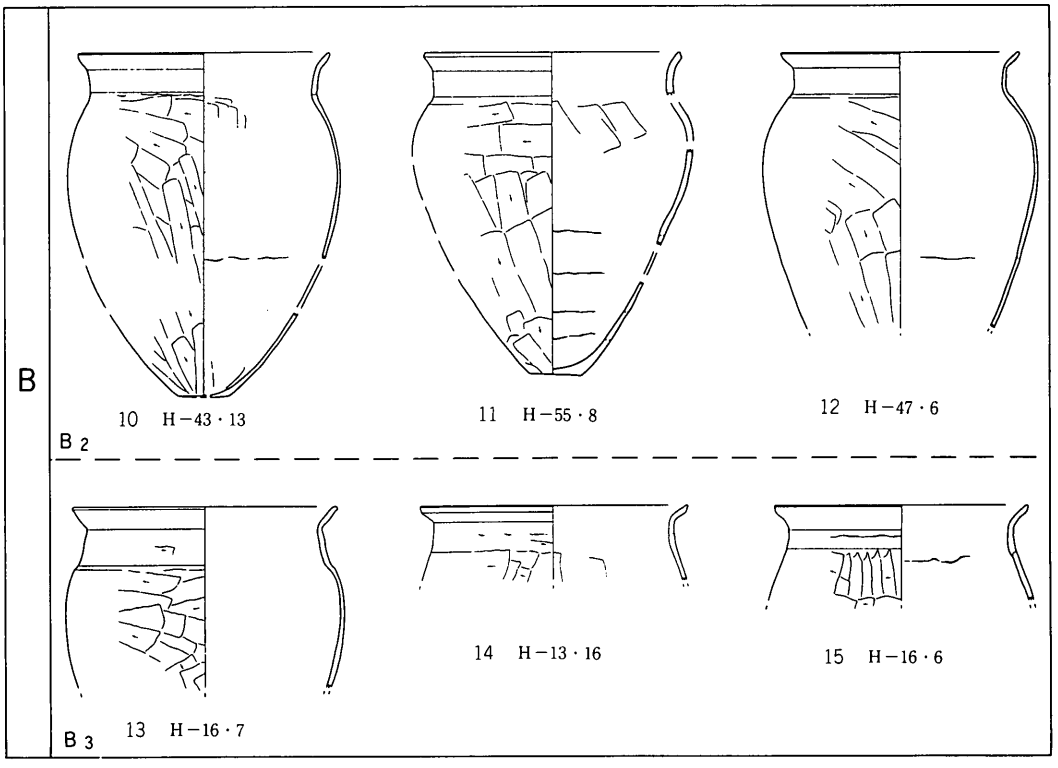
A_1　最大径が口縁部にあり、A_2に比べ胴の張りが顕著でなく器高の長いもの。図示したもので12個体確認された（1～3）。

A_2　口縁部と胴部の径がほぼ等しく、A_1に比べ胴上部の張りが顕著で器高の短いもの図示したもので21個体確認された（4～6）。

形態　B



第371図　土師器甕Ⅱ類分類図（1：6）



第372図　土師器甕Ⅱ類 分類図（1：6）

口縁部が「コの字」状に外反するもの。B_1・B_2・B_3に細分される。

B_1　口縁部と胴部の径がほぼ等しく、胴上部の張りが顕著なもの。口縁部はA_2B_2との中間的な形状を取り、「コの字」の屈曲はさほど顕著でないもの。図示したもので26個体確認された（7～9）。

B_2　最大径が口縁部から胴部上半に移り、肩の張った感が強くなる。「コの字」の屈曲は顕著である。図示したもので25個体確認された（10～12）。

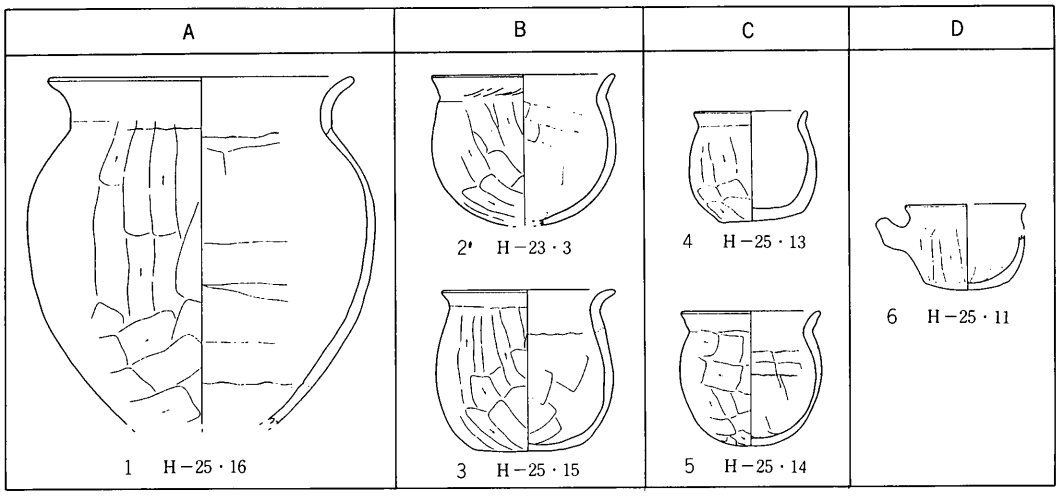
B_3　「コの字」状口縁の端部が上方に向かって微妙に折り返し、いわゆる受け口状となるもの。図示したもので7個体確認された（13～15）。

2　土師器球胴甕

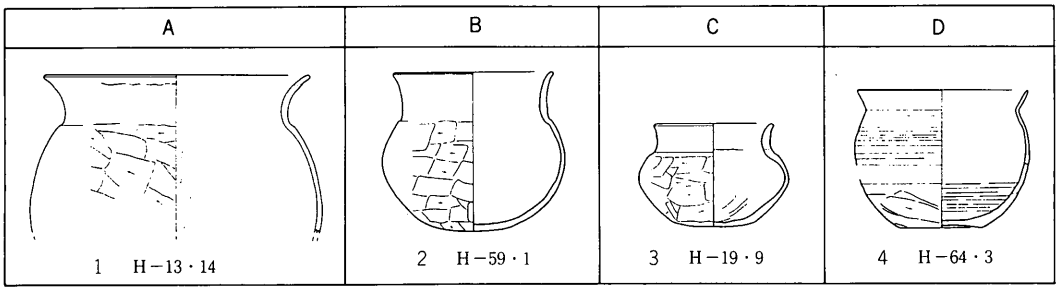
Ⅰ類　（厚形）　第373図

土師器球胴甕で肉厚なものをⅠ類とする。

Ⅰ類は、図示できたもので数点あるのみでいずれも全体の形状を知り得るものではないが、四



第373図　土師器球胴甕Ⅰ類分類図（1：6）



第374図　土師器球胴甕Ⅱ類分類図（1：6）

者に分類できる。

形態　A

大形なものを形態Aとする。その胴部の調整には、ヘラミガキ・ヘラケズリ・刷毛目状調整がなされている。5個体を図示した（1）。

形態　B

形態A・形態Cの中間の法量をもつものを形態Bとする（2・3）。

形態　C

小形なものを形態Cとする。1個体確認されたのみである（4・5）

形態　D

小形で把手付きのものを形態Dとする。1個体確認されたのみである（6）。

II類　（薄形）　第374図

土師器球胴甕で肉薄なものをII類とする。

II類は橙の色調をみせ、口縁部内外面がヨコナデ、外面胴部～底部がヘラケズリ、内面胴部がヘラナデの調整によっている。

II類はさらに形態A・形態B・形態C・形態Dの四者に分類できる。

形態　A

大形なものを形態Aとする。2個体確認されたのみである（1）。

形態　B

形態A・形態Cの中間の法量をもつものを形態Bとする（2）。

形態　C

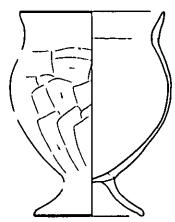
小形なものを形態Cとする。2個体確認されたのみである（3）。

形態　D

ロクロ整形によるもの。図示した4点のうち3点の底部は回転糸切りによっている（4）。

3　土師器台付甕　第375図

土師器台付甕は図示したものは5点あるが、このうち全体の器形を知り得るものは1のみであった。その口縁部は僅かコの字状を呈し、胴部上半に最大径をもち、八の字状の脚台部のつけられるものであった。



1　H－60・5

第375図　土師器台付甕

4　土師器その他の甕　第376

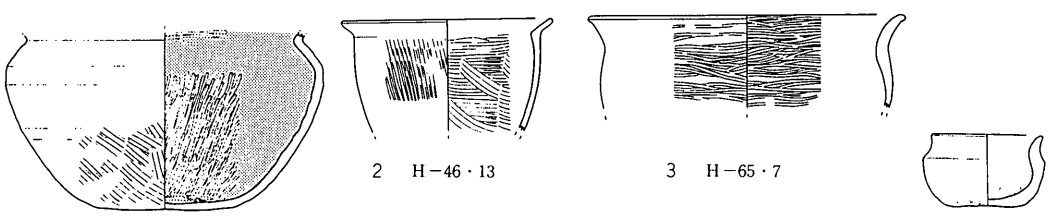
土師器甕で、その他のものを幾つかあげておく。

1は、須恵器甕の模倣と考えられるもので、ロクロ整形により、その外面にはロクロ目と並行叩き目が認められる。内面は黒色研磨がなされている。

2は、内外面に刷毛目状調整の認められるもので、松本平の系譜を引く甕であろうか。

3は、厚手の広口甕である。

4は、須恵器の小形短頸壺の模倣形態であろうか。

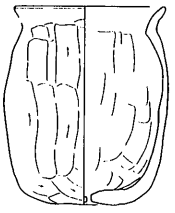


1　H－30・4　　2　H－46・13　　3　H－65・7　　4　H－25・13

第376図　土師器その他の甕（1：6）

5　土師器甑　第377図

土師器甑は、H－25において一点検出されたのみである。小形の土師器甕の平底に焼成後に三つの穿孔がなされたものである。



第377図　土師器甑

（3）　土器組成の抽出とその段階的把握

1）　はじめに

ここまででは、十二遺跡における奈良・平安時代の土器の器種およびその形態をとらえてみた。それでは、その器種・形態はどのような組み合わせをみせるのか、そしてその組み合わせはどのように段階的把握されるのかを考えてみよう。

さて、本遺跡と隣接する鋳物屋遺跡群前田遺跡の発掘調査報告書が昨年刊行された（御代田町教育委員会　1987)。そこにおいては、奈良時代を中心とする土器様相が四つの画期をもって把握され、それぞれ八世紀第Ⅰ四半期・八世紀第Ⅱ四半期・八世紀第Ⅲ四半期・八世紀第Ⅳ四半期～九世紀初頭の土器様相として時間的に位置づけられた(堤　1987ａ)。また、同1987年の11月にシンポジウム「信濃における奈良時代を中心とした編年と土器様相」が開催され（長野県考古学会1987)、前田遺跡においてとらえられた奈良時代を中心とする土器様相を骨子に佐久地方におけるの奈良時代を中心とする土器様相が明らかにされた（堤　1987ｂ)。

現時点においては、それら（堤　1987ａ）（堤　1987ｂ）の成果に基づいて十二遺跡における奈良時代を中心とする土器様相を把握することがもっとも妥当と考えられ、かつ、矛盾点も見出し得ないので、奈良時代についてはその成果に基づいて述べてゆくことにする。

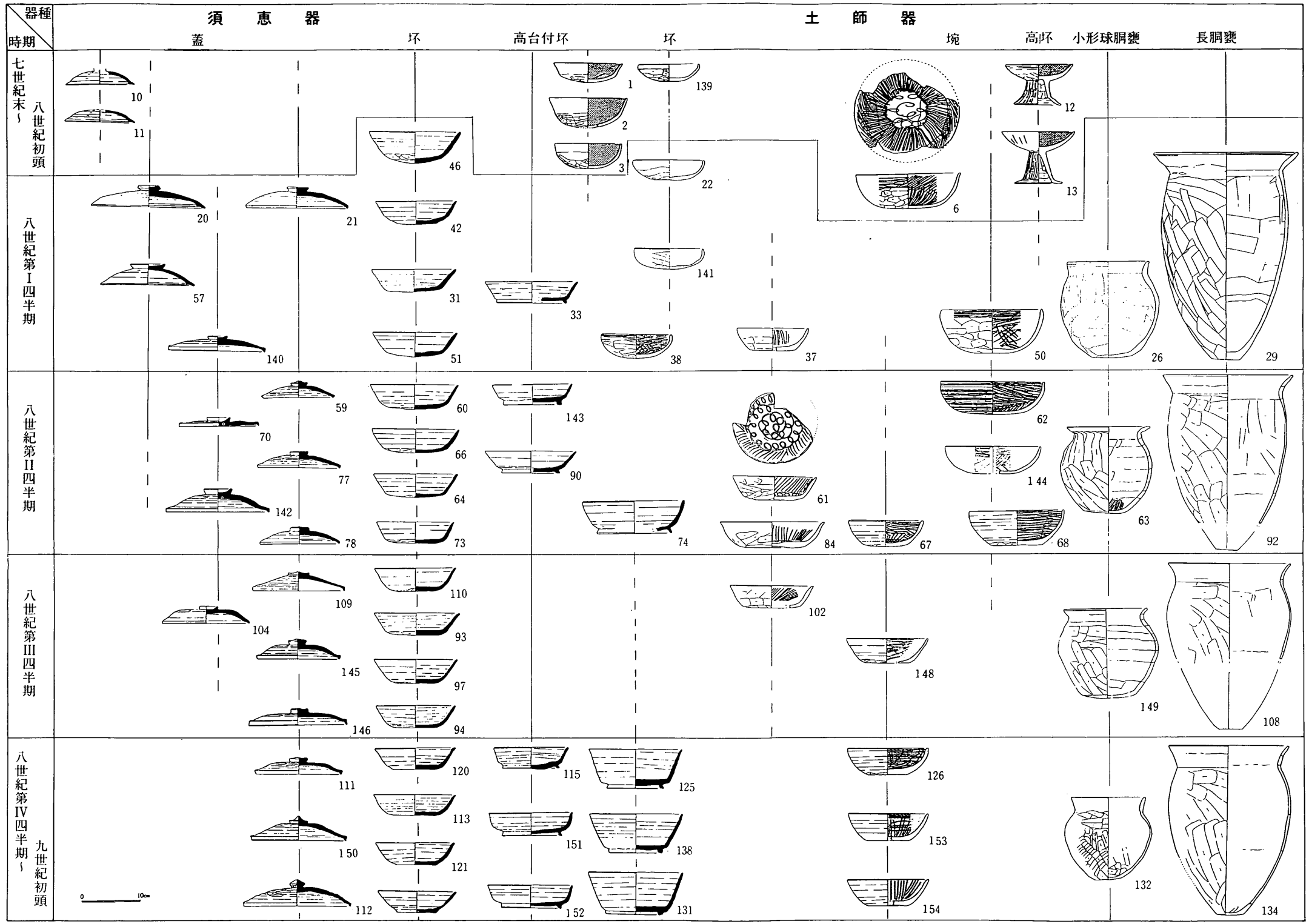
まずここで、佐久地方におけるの奈良時代を中心とする土器様相について簡単にふれておく必要があろう（第378図)。

八世紀第Ⅰ四半期

須恵器坏はいずれも回転ヘラキリによるもので、形態Ａでは中央のやや突出する底部をみせるのが特徴的である。須恵器蓋ではカエリのある形態Ｂが存在している。土師器坏では形態Ａがみられる。また、土師器高坏も残っている。土師器長胴甕では頸部の変換点が明瞭で口縁部に最大径をもつ形態A_1が特徴的である。

八世紀第Ⅱ四半期

須恵器坏形態Ａでは、回転ヘラキリの後全面手持ちヘラケズリの底部をみせるものが特徴的である。須恵器蓋ではカエリのある形態Ｂも残るが、環状ツマミでカエリのないものも存在している。土師器坏では畿内系暗文を有する形態Ｃがみられる。土師器長胴甕では形態Ａが認められる。



第378図　佐久地方における奈良時代を中心とした土器編年（1：8）（堤　1987b）

（1・2・3・6＝若宮遺跡H－9，　10～13・139＝若宮遺跡H－5，　20～22・26・29＝曽根城遺跡H－6，　その他＝前田遺跡
140＝H－101、141＝H－38、142＝H－44、　143＝H－45　、144＝H－37、145＝H－117　146＝H－72、147＝H－53、148＝H－43、149＝H－72　150＝H－25、151＝H－117、152＝H－89、　153＝H－89、154＝H－20）

八世紀第Ⅲ四半期

須恵器坏形態Aでは、回転糸切りの後周囲手持ちヘラケズリの底部をみせるものが特徴的である。須恵器蓋ではカエリのある形態Bが消失し、環状ツマミでカエリのないものもか、形態Cが存在している。土師器坏ではロクロ整形による形態Dがみられる。土師器長胴甕では形態A_2が認められる。

八世紀第Ⅳ四半期～九世紀初頭

須恵器坏形態Aでは、回転糸切り未調整のものがほとんどとなる。須恵器高台付坏では形態Bの存在が顕著となる。須恵器蓋は形態Cのみとなる。土師器坏ではロクロ整形による形態Dがみられる。土師器長胴甕は形態B_1が認められる。

以上が八世紀第Ⅰ四半期～九世紀初頭にかかる土器様相である。十二遺跡の当該期については、これまでにとらえられた様相にスライドさせて考えることとしよう。

さて、問題はそれ以降であるが、遺物の一括性・共伴関係の妥当性を考慮したうえで土器組成の抽出を試みれば、土器様相の把握もさほど困難なものとはおもわれない。

そこでまず、遺物の一括性・共伴関係の妥当性を検証しなければならないが、これについては統計学的方法によって各遺物の伴出頻度をみることで解決されよう。具体的には松村が用いたような共伴関係頻度表（松村　1977）を用いることである。

その共伴関係頻度表にも基づいて抽出された十二遺跡の特徴的な土器組成を、遺構の切り合い関係・遺物の形態変遷の妥当性に基づいて段階的に把握したのが以下である。

2）　土器組成の諸段階

1　第1段階

前述した八世紀第Ⅰ四半期の土器様相を示す段階。

須恵器坏はいずれも回転ヘラキリによるもので、形態Aでは中央のやや突出する底部をみせるのが特徴的である。須恵器蓋ではカエリのある形態Bが存在している。土師器坏では形態Aがみられる。また、土師器高坏も残っている。土師器長胴甕では頸部の変換点が明瞭で口縁部に最大径をもつ形態A_1が特徴的である。

2　第2段階

前述した八世紀第Ⅱ四半期の土器様相を示す段階。

須恵器坏形態Aでは、回転ヘラキリの後全面手持ちヘラケズリの底部をみせるものが特徴的である。須恵器蓋ではカエリのある形態Bも残るが、環状ツマミでカエリのないものも存在してい

る。土師器坏では畿内系暗文を有する形態Cがみられる。土師器長胴甕では形態Aが認められる。

3　第3段階

前述した八世紀第IV四半期～九世紀初頭の土器様相を示す段階。

須恵器坏形態Aでは、回転糸切り未調整のものがほとんどとなる。須恵器高台付坏では形態Bの存在が顕著となる。須恵器蓋は形態Cのみとなる。土師器坏ではロクロ整形による形態Dがみられる。土師器長胴甕は形態B_1が認められる。

4　第4段階

須恵器坏形態Aでは、回転糸切り未調整の坏のみとなる。この形態は、前段階の口径：底径比（底径÷口径×100）が50以上の数値を示す場合が多かったのに対し、口径：底径比の数値が45程度と低くなってくる特徴をみせる。つまり底径がより小さくなっていることがとらえられる。また、その体部の形態も湾曲ぎみなものからより直線的へと変化するようである。

須恵器高台付坏では形態Bが引続き顕著に存在するが、その法量が小形となる傾向が看取される。須恵器蓋は形態Cがある。土師器坏ではロクロ整形による形態Dがみられる。この他土師器の高台付皿も登場する。土師器長胴甕はコの字化がより強くなった形態B_2となる。土師器小形甕では、ロクロ整形による形態Dが登場している。

5　第5段階

猿投窯黒笹90号窯式、東濃窯光ケ丘1号窯式の灰釉陶器を伴う段階。

坏類は、須恵器坏形態Aにかわり土師器坏形態Dが主体をなすようになる。その土師器坏形態Dの口唇部をみると、灰釉陶器もしくは緑釉陶器の口唇を模倣したかのような微妙な屈曲をみせるものが特徴的にみいだせる（第356図25～28）。また、須恵器高台付坏の形態Bは消滅してしまっているものとおもわれる。

土師器長胴甕は、コの字化の強い形態B_2が存在する。

6　第6段階

坏類は、土師器坏形態Dが主体をなすが、そのうちでも内外面に黒色処理のなされたものが認められるようになる。

また、土師器高台付埦が登場している。

土師器長胴甕は、コの字化の強い形態B_2が存在するとともに、その口唇部が受け口状になる形態B_3の存在も認められる。

灰釉陶器は実際には出土していないが、当然伴ってくる段階である。

3）　奈良・平安時代の土器編年

1　時期設定

以上、第1段階から第6段階までの土器組成を提示した。この各段階については、時期と言い換えてとらえることもできる。したがって、その第1段階から第6段階までを、第2段階と第3段階の間の空白期も仮に一時期とみなし、それぞれ第Ⅰ期から第Ⅶ期としてとらえなおすこととしよう。

2　実年代の想定

ここでこの各時期に実年代を想定しておくこととしたい。このうち第Ⅰ期～第Ⅳ期については前述した年代観（堤　1987b）を用いておくことにする。

第Ⅰ期　八世紀第Ⅰ四半期　（第1段階）

理由　（堤　1987b）の年代観による。

第Ⅱ期　八世紀第Ⅱ四半期　（第2段階）

理由　（堤　1987b）の年代観による。

第Ⅲ期　八世紀第Ⅲ四半期　（段階設定なし）

理由　具体的には本期に属する土器様相をみいだし得なかったが、所属期不明のものが本期に属する可能性もあるためとりあえず時期設定しておいた。もし仮にいずれの所属もみられない場合は空白期としてあつかう。

第Ⅳ期　八世紀第Ⅳ四半期～九世紀初頭　（第3段階）

理由　（堤　1987b）の年代観による。

第Ⅴ期　九世紀前葉　（第4段階）

理由　土器様相の継続性から、第Ⅳ期に後続し第Ⅵ期に前出した年代があたえられるべきである。なお本時期と並行させて考えられる野火付遺跡第Ⅱ期の土器群は神功開寶を伴っており、少なくとも本時期がその初鋳年代である765年を遡ることはない。

第Ⅵ期　九世紀後葉　（第5段階）

理由　土器様相の継続性から、第Ⅴ期に後続し第Ⅵ期に前出した年代があたえられるべきである。なお本時期は猿投窯黒笹90号窯式、東濃窯光ケ丘1号窯式の灰釉陶器を伴う時期である。灰釉陶器の年代観については斎藤孝正の指摘にもあるよう

第114表　十二遺跡竪穴住居址の所属期

年代	時期	所属住居	所属期不明住居
700	Ⅰ	H－1 H－7 H－20 H－28 H－33 H－53 H－2 H－9 H－23 H－30 H－37 H－65 H－6 H－18 H－25 H－31 H－45 H－66 H－70 H－38	H－5 H－50 H－11 H－8 H－3
725	Ⅱ	H－10 H－29 H－58 H－68 H－15 H－69 H－40 H－67	H－36 H－19
750	Ⅲ		H－59
775	Ⅳ	H－17 H－22 H－27 H－63 H－44 H－48 H－32	H－61 H－21 H－4 H－51 H－41
800			
825	Ⅴ	H－12 H－13 H－24 H－14 H－49 H－39 H－35 H－34 H－46 H－47 H－57 H－52 H－64 H－26 H－62	H－71 H－62
850	Ⅵ	H－56 H－43 H－55 H－42	
875	Ⅶ	H－16 H－60 H－54	←矢印は切り合いによる新旧関係を表す。
900			

に約50年近いズレがあり(斎藤　1987)、実年代の比定にあたってそれを用いるのには現段階では困難をともなう。したがってここでは実年代の想定に灰釉陶器の年代観を用いることはしなかったが、土器様相の継続性等から結果的には灰釉陶器を古くみることとなる。

第Ⅶ期　九世紀末葉　(第6段階)

理由　土器様相の継続性から、第Ⅵ期に後続した年代があたえられるべきである。なお、本時期と並行させて考えられる根岸遺跡H－13号住居址は饒益神寶を伴出しており、少なくとも本時期がその初鋳年代である859年を遡ることはない。ちなみに根岸遺跡H－13号住居址は東濃窯光ケ丘1号窯式の灰釉陶器も伴っている。

3　各竪穴住居址の所属期について

さて、その各時期に所属すると考えられる竪穴住居址を第114表に示した。無論この所属期は遺物が住居址に伴うと仮定したうえでのものである。なお、遺物が少なくその所属期の明確でないものについては別枠に示した。遺構の切り合い関係から把握される各時期の前後関係については、←印をもって示している。

この表をみると各時期の竪穴住居址の軒数が一様でなく、かなりばらつきがあることが窺えよ

う。ちなみに各期の軒数は、第Ⅰ期20軒、第Ⅱ期８軒、第Ⅲ期０軒、第Ⅳ期７軒、第Ⅴ期15軒、第Ⅵ期４軒、第Ⅶ期３軒となった。時期不明は15軒ある。

4　奈良・平安時代の土器編年　付図２

ここまでの所見を奈良・平安時代の土器編年として付図２に示す。

土師器高坏・土師器甑の消滅、須恵器蓋のカエリの消失とつまみ部の変遷、須恵器坏における切り離し手法の変化(回転ヘラキリ→回転糸切り)、土師器坏におけるロクロ使用、須恵器高台付坏形態Ｂの登場、土師器長胴甕口縁における「くの字」から「コの字」の変化、ロクロ使用の土師器甕の登場、灰釉陶器の登場、土師器坏における内外面黒色処理（いわゆる黒色土器の登場)、土師器埦（磁器・灰釉陶器模倣形態）の登場、須恵器坏の消滅等といった土器様相の変化を、十二遺跡の奈良・平安時代の土器編年の中からみいだすことができる。

2　十二遺跡の石器・鉄器等について

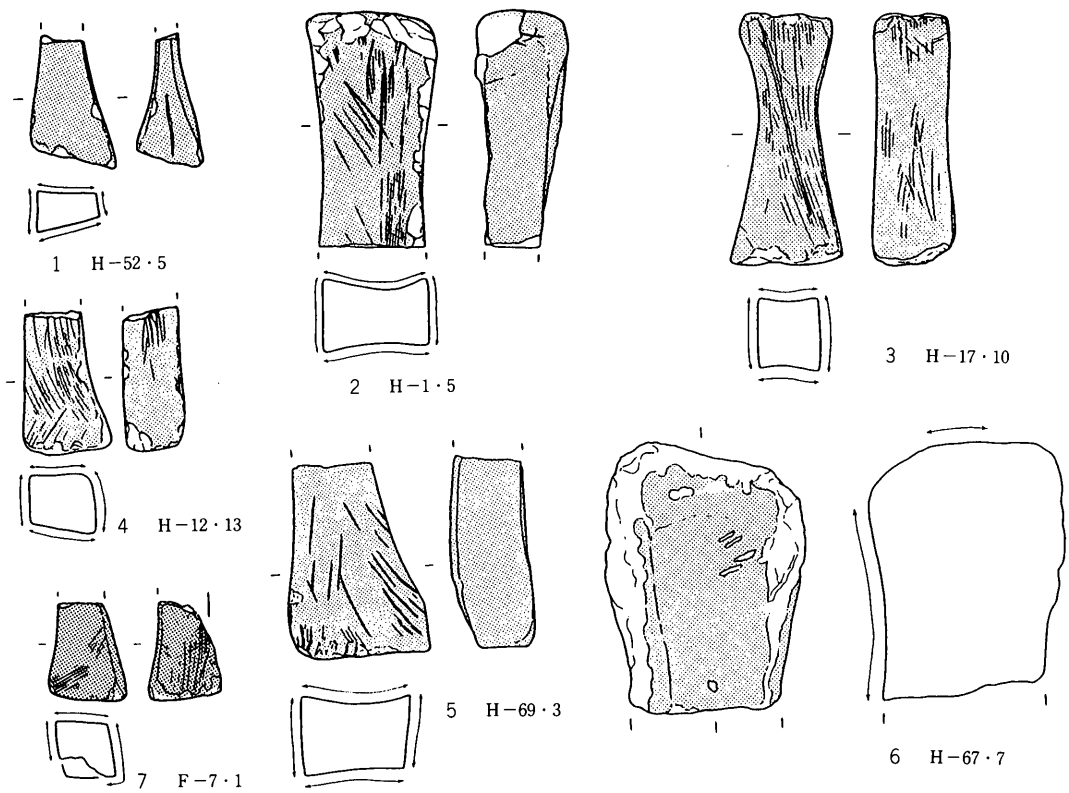
（1）　石器

本遺跡から検出されている石器には、砥石・磨石・台石・敲石・石錘・石鉢・磨製石鏃・打製石鏃・打製石斧・スクレイパー等がある。

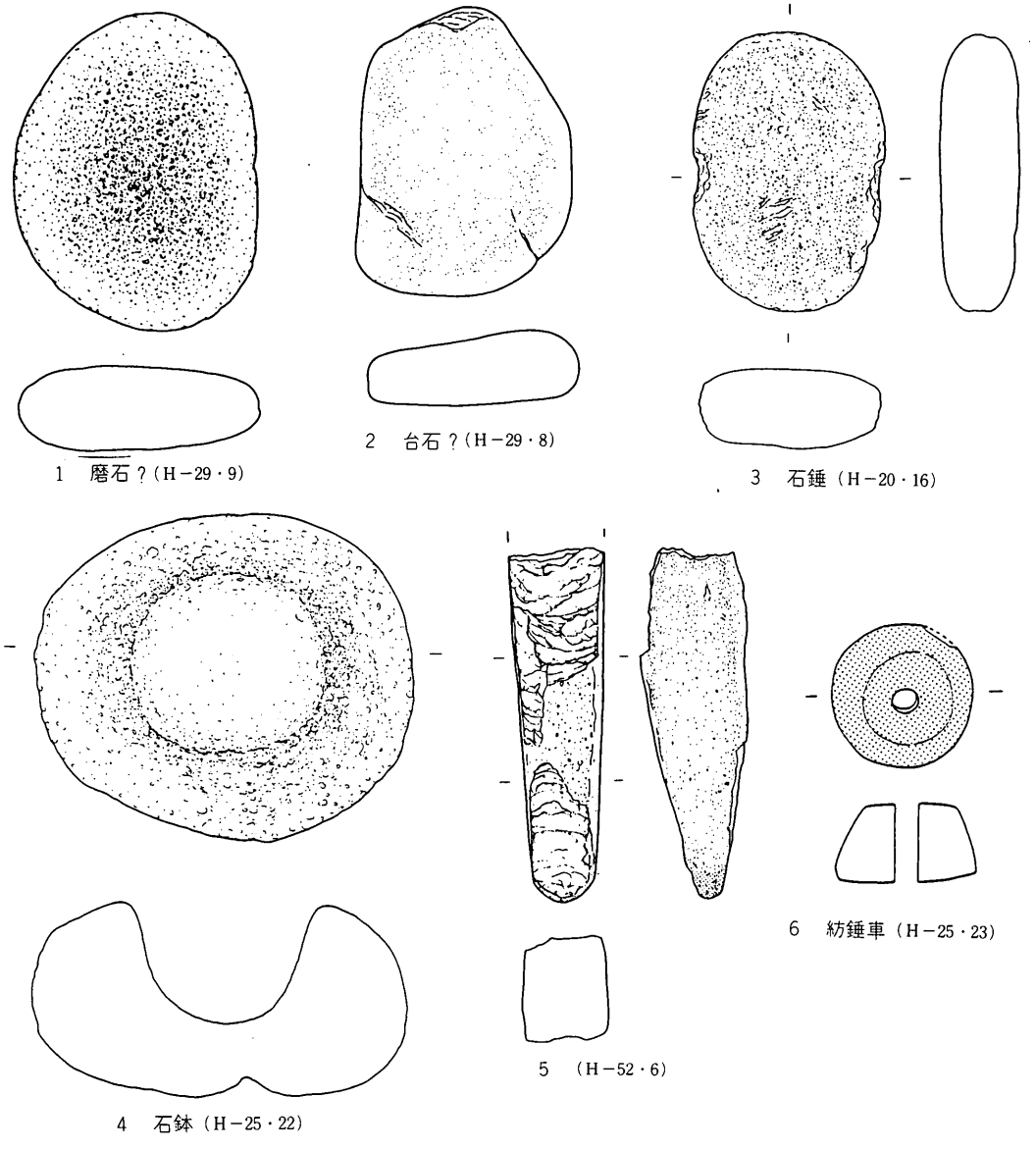
このうち磨製石鏃・打製石鏃・打製石斧・スクレイパー等が、奈良・平安時代の所産であるかどうかは不明である。

これに対し、砥石・磨石・台石・敲石・石錘・石鉢等は当該期の石器としてよいものであろう（第379・380）図。

砥石は、砂岩製のものが7点検出されている（第379図）。これらは、別に検出されている鉄器（鎌・刀子等）の研砥に共されたものと考える。



第379図　十二遺跡出土砥石（1：4）

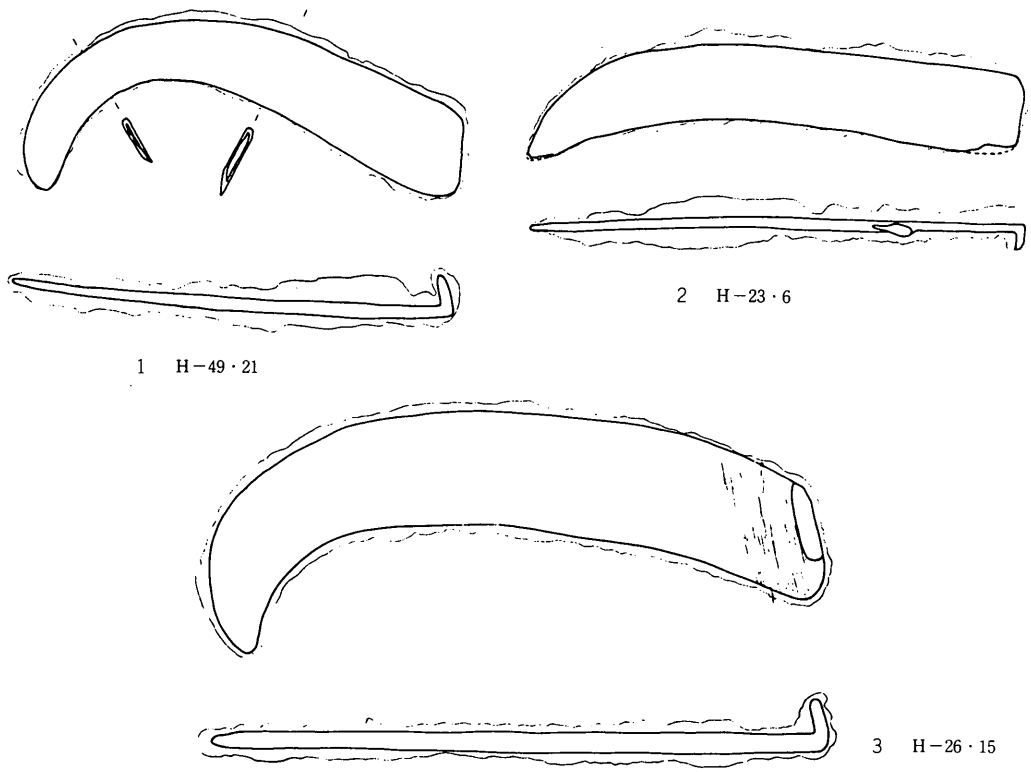


第380図　十二遺跡出土遺物（6は1：3，その他1：4）

磨石・石鉢は、食物の磨潰しに用いられたものと考えられよう。石錘は編物用の重りに用いられたのであろうか。

（2）　土製品

このほか土製品の紡錘車1点が検出されている（第380図6）。径4.4cm・厚さ2.5cm・重量54gを測るもので、その外面は黒色研磨のなされたものである。



第381図　十二遺跡出土鎌（1：3）

（3）　鉄器

本遺跡から検出された鉄器には、鎌3、鋤鏃先1、刀子2、鏃？8点がある（第381・382図）。

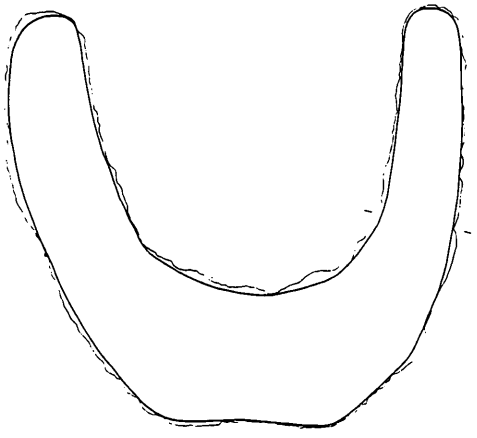
鎌は、比較的屈曲の強い1もあれば、屈曲の弱い3、その中間の2もあり様々である。その大きさは、2が大形のものといえる。

さて、出土鉄器がどの時期に帰属するかを示したのが第115表である。この表にはあわせて鉄器の研砥に共したと考えられる砥石の帰属も示した。

鉄器の遺存率の悪さを考慮したうえでこの表をみると、鉄器の保有率は、時期的に差異があるとみるよりむしろ住居址の数に比例しているものと解釈したほうが妥当かと考えられる。また、砥石の存在から鉄器の存在を類推することもでき、現出土点数以上に鉄器が存在したことを考慮し

第115表　各期における鉄器の保有

器種／時期	鎌	鋤鏃先	刀子	鏃	砥石	住居軒数
Ⅰ	1			1	1	20
Ⅱ		1			2	8
Ⅲ						0
Ⅳ					1	6
Ⅴ	2		2	5	2	15
Ⅵ						4
Ⅶ						3
不明				2	1	15
計	3	1	2	8	7	71



1　H－10・10

第382図　十二遺跡出土鋤鍬先（1：3）

第116表　遺跡毎における鉄製農具出土数

遺　　跡	竪穴数	掘立数	鋤鍬先	鎌
十　二	71	75	1	3
前田※	104	87	0	3
山田水呑	143	52	1	5
村　上	155	24	3	14
井　頭	124	12	1	10
鳶　尾	169	117	1	12
向　原	184	161	1	10

※ただし前田遺跡佐久市分を除く。

ておかねばなるまい。

ちなみに第116表には、当該期の幾つかの東国集落における鉄製農具の出土数を示しておいた。この表から、各遺跡において鎌の出土数は竪穴数にほぼ比例していることがわかる。また、鋤鍬先の出土は、村上の3例を除くといずれも1例のみと意外に少ないこともわかる。

かつて原島礼二は、鉄製農具は六世紀以降には大家族のもとにまとめて私有され、国分期になって各竪穴単位に私有が移行したとした(原島　1965)。一方、鬼頭清明は八世紀当時の集落ではどの竪穴住居においても鉄製農工具が使用されたとみている（鬼頭　1985)。

本遺跡における鉄器の出土状況をどのように解釈したらよいかはまだまだ検討の余地が残ろうが、いずれにしても当該期のごく一般的なあり方を示していることにはかわりあるまい。

3　十二遺跡における遺構および集落の様相

（1）　竪穴住居址の形態

十二遺跡においては、八世紀～九世紀末にかかる奈良・平安時代の竪穴住居址71軒が検出されている。

これら71軒の竪穴住居址の形態を、幾つかの分類基準をもってとらえてみよう。

1）　火拠のあり方

まず、火拠のあり方を問題にすると次の二者がある。

Ⅰ　住居の一隅にカマドを有するもの。67軒ある。

Ⅱ　住居内にカマドを有さないもの。H－3、H－4、H－33の3軒がある。

2）　主柱穴のあり方

次に、主柱穴のあり方であるが、基本的には次の5種とその他がある（第383図）。

A　屋内に4個の主柱穴が規則的に配されるもの。26軒ある。

B　屋内に2個の主柱穴が、その対壁に2個の主柱穴が規則的に配されるもの。3軒ある。

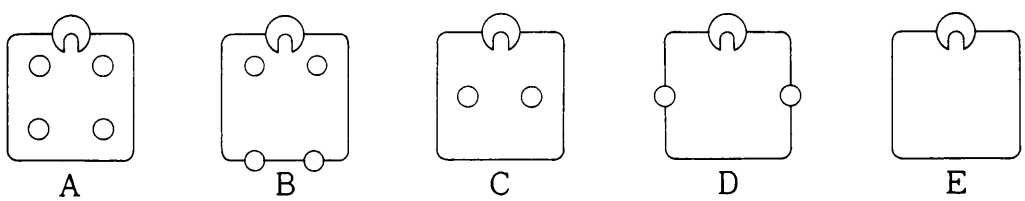
C　屋内に2個の主柱穴が対で配されるもの。3軒ある。

D　壁中に2個の主柱穴が対で配されるもの。1軒ある。

E　主柱穴の認められないもの。31軒ある。

F　その他。3軒ある。

主柱穴の認められないEがもっとも多く、次いでAの屋内に4個の主柱穴が規則的に配されるものが多いことがわかる。また、これ以外は若干認められるにすぎない。



第383図　竪穴式住居の主柱穴のあり方

3）　平面形

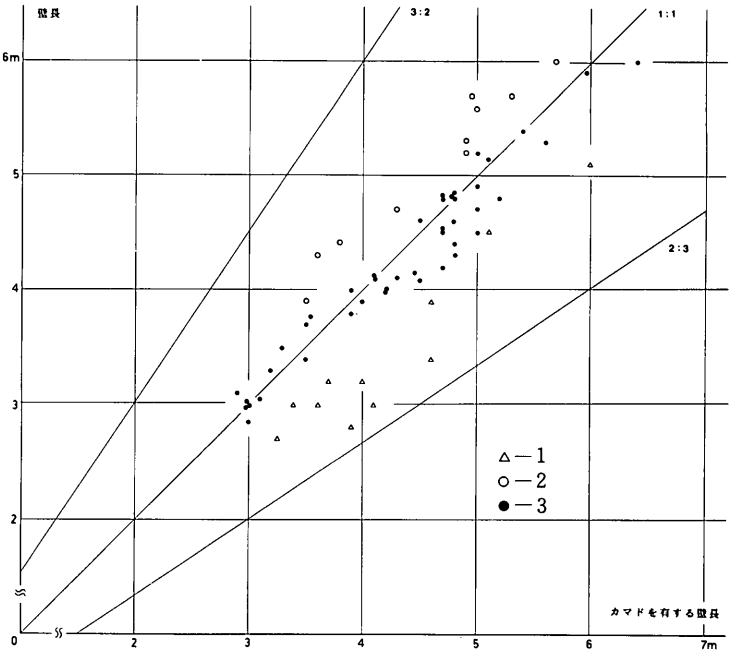
その平面形では次の三者がある（第384図）。

1　カマドを有する壁が長辺となる矩形を呈するもの。10軒ある。

2　カマドを有する壁が短辺となる矩形を呈するもの。10軒ある。

3　正方形を呈するもの。48軒ある。

このなかでは、3の正方形を呈するものが48軒ともっとも多いことが窺えよう。また、矩形を呈するものも1・3あわせて20軒ほど認められるわけであるが、その長辺と短辺の比が3：2をこえるような極端なものはないようである。



第384図　竪穴住居の長幅比

4）　面積分布

さて、その面積の分布は、主柱穴のあり方とも対応させて第385図に示した。

まず、図の最下段の全体の分布をみると、そのピークがおおよそ三つに分離されることが理解されよう。これを小形・中形・大形とする。

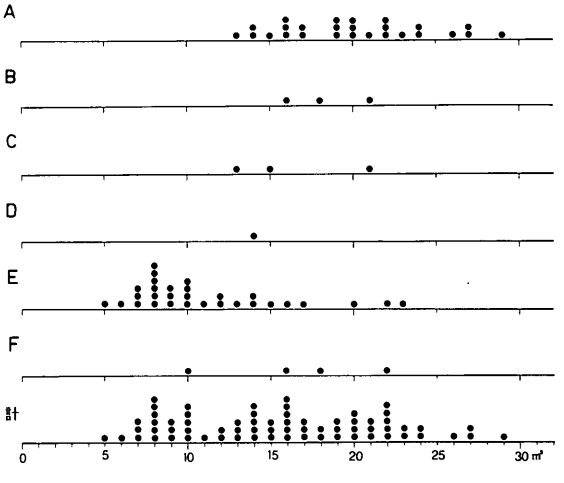
小形　10m²以下のもの。20軒ある。

中形　11m²以上～18m²以下のもの。24軒ある。

大形　19m²以上のもの。23軒ある。

一方これを主柱穴のあり方と対応させてみるとどうだろう。

4個の主柱穴をもつAではその面積の分布は13～29m²（中形・大形）におよんでいることがわかるが、そのなかでより大形の24m²以上のものはこのA



第385図　竪穴住居の形態別面積分布

のみに限られている。これとは対称的に無柱穴Eの面積の分布は10m²未満に集中することが注意される。

つまり、より大形のものは4個の主柱穴を確実にもち、小形の住居では無柱穴のEタイプがほとんどであると言い換えられよう。

このように主柱穴のあり方は、住居の大きさとも深く関連していることが窺えよう。

5）　カマド

本遺跡のカマドのほとんどには、面取りした軽石がその芯に用いられていることが非常に特徴的である。面取り軽石が多用されるのは、本遺跡の基盤でもある第1軽石流層中に軽石が豊富に含まれることに起因しよう。また、軽石は加工し易かったこともその要因であろう。

カマドの前方部両軸には『状に面取りされた軽石が、このほかには直方体状に面取りされた軽石が、支脚石には角錘状に面取りされた軽石が用いられ、粘土で覆われているものが一般的である。

カマドの位置をみると次の二者がある。

① 北壁中央にあるもの。58軒ある。

② 東壁のやや南よりまたは東南コーナーに位置するもの。9軒ある。

なお、4個の主柱穴をもつAはすべて北壁中央にカマドがあるものであることが注意される。

（2）　竪穴住居址の形態変遷

各時期における竪穴住居址の構造については付表1に示した。

また、主柱穴のあり方に主眼をおいた竪穴住居址の形態変遷については、付図3・第117表に示しておいた。

ここから、幾つか窺えることを以下にあげておこう。

① 4個の主柱穴をもつAは第Ⅰ期～第Ⅴ期にかけて認められるが、第Ⅴ期以降には衰退することが窺える。

② 無柱穴のEタイプは、当初の第Ⅰ期より第Ⅷ期まで顕在化している。

③ 壁中に2個の主柱穴が対で配されるDは第Ⅵ期に1軒あるが、前田遺跡における竪穴住居址の形態変遷からすると（堤　1987a）この形態は八世紀第Ⅳ四半期以降に顕在化するタイプであり、前田遺跡の所見と矛盾しない。

第117表　時期別住居形態一覧表

時期＼形態	A	B	C	D	E	F	計
Ⅰ	10	−	1	−	9	−	20
Ⅱ	6	−	−	−	2	−	8
Ⅲ	−	−	−	−	−	−	0
Ⅳ	−	−	−	−	4	−	4
Ⅴ	4	2	1	−	6	3	16
Ⅵ	−	−	−	1	3	−	4
Ⅶ	−	1	−	−	2	−	3
不明	6	−	1	−	5	−	12
計	26	3	3	1	31	3	67

※この他形態の捉えられないものが4軒ある。

④　カマドの位置をみると、第Ⅰ期・第Ⅱ期にかけてはすべて北壁中央にあるが、第Ⅴ期以降には東壁やや南よりに位置するカマドも登場するようである。

（3）　掘立柱建物址の形態

十二遺跡において検出された75棟の掘立建物址の形態についてみてみよう。

まず、掘立柱建物址は次の二式に分類される。

①　総柱式

②　側柱式

また、その平面形も二者がある。

Ⅰ　その平面形がおおよそ正方形を呈するもの。

Ⅱ　その平面形がおおよそ矩形を呈するもの。

次、柱（穴）の配置による間数には、以下のようなあり方が認められた。

①　総柱式

A　2間×2間で、中央に1本の柱が配されるもの。

B　3間×2間で、中央に2本の柱が配されるもの。

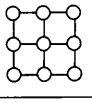
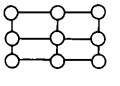
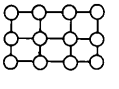
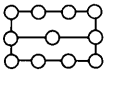
C　3間×2間で、中央に1本の柱が配されるもの。

②　側柱式

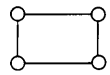
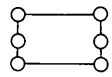
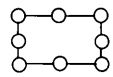
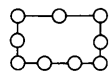
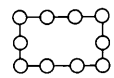
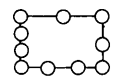
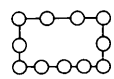
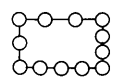
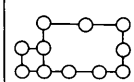
A　1間×1間となるもの。

B　2間×1間となるもの。

C　2間×2間となるもの。

Ⅰ			Ⅱ		
A		F－12	A		F－39
			B		F－74
			C		F－70

第386図　掘立柱建物址（総柱）形態一覧

I			II		
A		F－13　F－25　F－36　F－37 F－47　F－50　F－52　F－65 F－66　F－67　F－69	A		F－38　F－60　F－64
B		F－63	B		F－44
C		F－11　F－29　F－45	C		F－3　F－6　F－16　F－23 F－30　F－32　F－34
D		F－18　F－46　F－51　F－71	D		F－54
E		F－43	E		F－4　F－5　F－7　F－8 F－9　F－10　F－14　F－21 F－22　F－27　F－28　F－33 F－42　F－48　F－53　F－57
			F		F－35
			G		F－59　F－61
その他		F－19　F－20　F－72　F－75	H		F－31
不明		F－1　F－2　F－15　F－17 F－40　F－41　F－49　F－55 F－56　F－58　F－62　H－68 F－73	I		F－24

第387図　掘立柱建物址（側柱）形態一覧

D　3間・2間×2間となるもの。

E　3間×2間となるもの。

F　3間・2間×3間・2間となるもの。

G　4間・3間×2間となるもの。

H　4間・3間×3間・2間となるもの。

I　3間・2間×2間で、いわゆる廂をもつもの。

その他　不規則な柱（穴）の配置をみせるもの。

不　明　プランが不明なもの。

以上の分類基準に基づくと、①の総柱穴の掘立柱建物址は第386図のように、②の側柱式の掘立柱建物址は第387図のようにあてはまる。

これをみると、総柱式の建物では以下のことがとらえられる。

① 総柱式の建物は4棟認められるのみで、形態的にはⅠA・ⅡA・ⅡB・ⅡCがそれぞれ1棟ずつ存在していることがわかる。

次に、側柱式の掘立柱建物址についてみてみよう。

① 側柱式の掘立柱建物址は合計で71棟認められている。

② 1間×1間となるAは14棟ときわめて特徴的に認められるが、そのなかでも方形のプランを呈するⅠが多い。

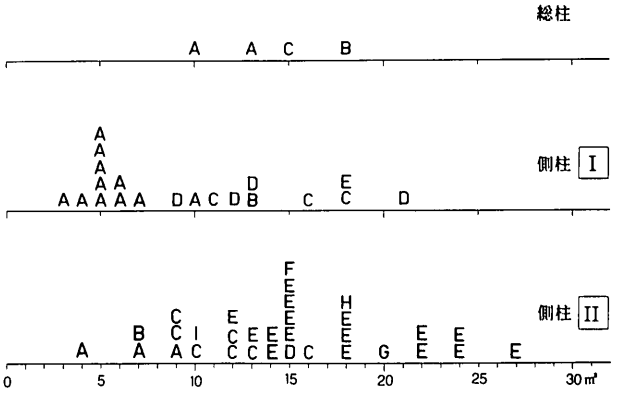
③ 2間×2間となるCも、方形のⅠ類4棟・矩形のⅡ類6棟の計10棟認められている。

④ 3間×2間となるEで矩形のⅡ類が16棟ときわめて特徴的に認められている。

⑤ ②③④をふまえると、本遺跡の側柱式の掘立柱建物址の基本的形態は、Ⅰ類A・C・Ⅱ類Eであるといえよう。

⑥ いわゆる廂をもつものも1棟認められた（Ⅰ）。

次に、各形態別の面積の分布をみてみると以下がとらえられよう。（第388図）



第388図　掘立柱建物址形態別面積分布

① 側柱式の形態Aは、いずれも10m²以下の面積をみせる小形のものである。

② 側柱式の形態Cは、9～18m²の面積をみせるいわば中形のものである。

③ 側柱式の形態Eは、12m²以上の面積をみせる全体の中では大形のものである。

（4）　掘立柱建物址の時期

掘立柱建物址の時期については、結論的にいえば、本遺跡において検出された75棟の掘立柱建物址はすべて竪穴住居址の帰属する第Ⅰ期～第Ⅶ期に位置付けられるものと想定している。

第118表　掘立柱建物址の帰属期の可能性

	F-4	F-8	F-12	F-14	F-22	F-28	F-31	F-33	F-34	F-35	F-40	F-42	F-48	F-53	F-58	F-60	F-63	F-69
I	●			●	●													
II	●	●	●	●	●		●	●	●	●	●		●					●
III	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●		●	●				●
IV	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●		●	●	●			●
V	●	●	●	●	●		●	●	●	●	●		●	●	●			●
VI	●	●	●	●	●		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●		●
VII	●	●	●		●		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●

※帰属の可能性のある時期には●をもって示した

これらの掘立柱建物址の幾つかは、竪穴住居址との切り合い、および柱穴中に時期のわかる出土遺物があるものについては、ある幅をもってその時期推定することが可能であり、そのようなものについては帰属の可能性のある時期を第118表に示した。

しかしそれ以外については、時期の明確な遺構との配置関係をもってしか時期を類推する術がなく、それとて危険性をはらんだ位置付けと言わざるをえない。

各時期において竪穴住居址と併存する掘立柱建物址の姿を想像しておくこととして、個々の掘立柱建物址の時期について詳しく言及することはその危険性から後に譲ろう。

（5）　集落の様相

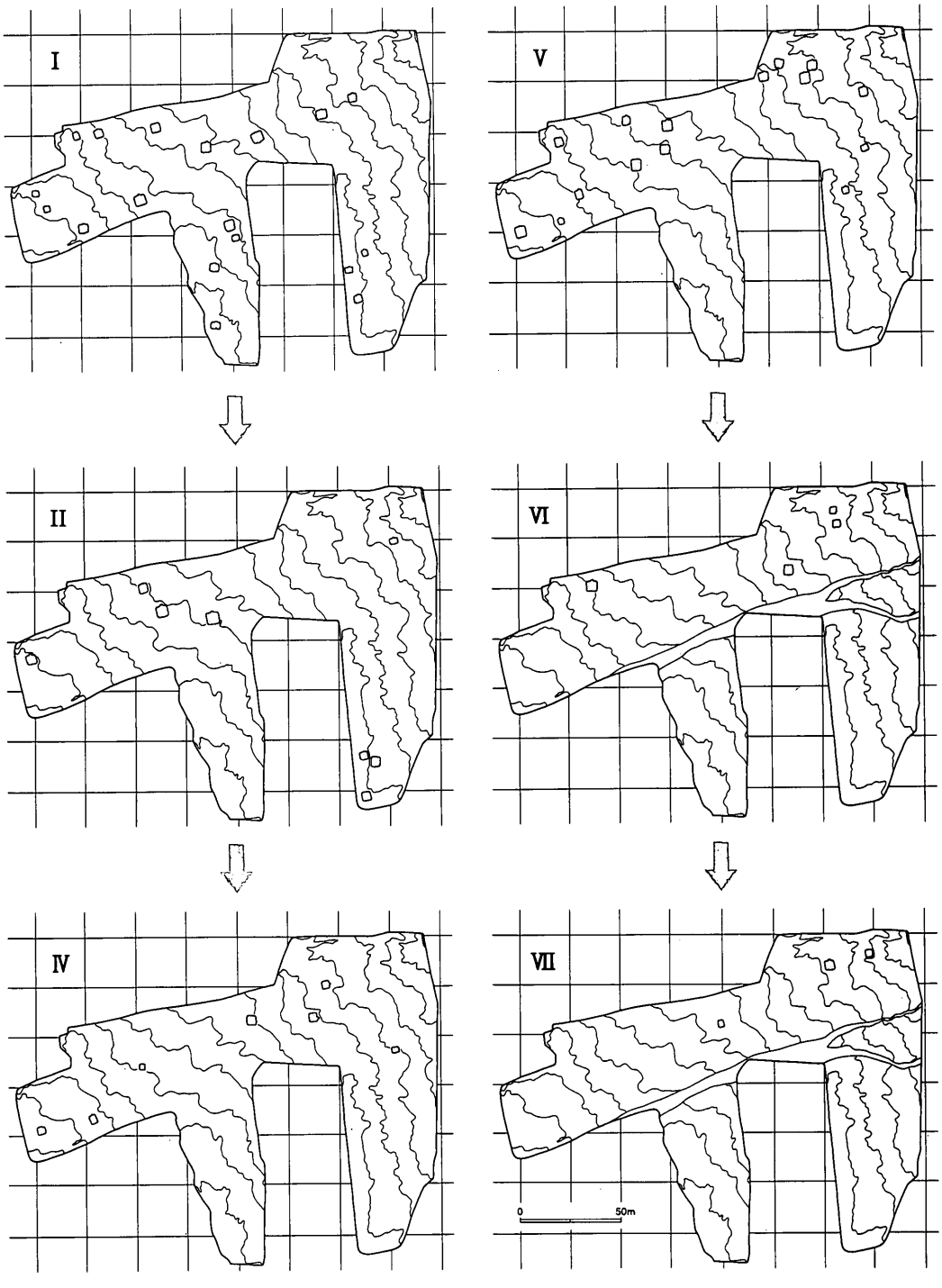
黒井峰症候群とでも言おうか、群馬県黒井峰遺跡の発掘調査によって当時（古墳時代）の集落の具体像が実に鮮明に描き出されつつあり、我々に大きな衝撃をあたえている。また、そこではごく一般的な遺跡において我々がとらえることのできる遺構以外の、幾つかの遺構が当時の集落には存在していたことが判明しており、改めて集落景観復元の困難さを教えてくれている。

我々の眼に見えない遺構の存在性をどのように考慮し、また、同時併存の遺構をどれだけ厳密に抽出できるかが、より正確な集落景観復元につながる課題であろう。

したがって、本十二遺跡においても、とうてい正確な集落景観復元にはおよばないが、これまで述べてきた遺構のあり方から導きだされる集落様相の一端を垣間見ることとしよう。

第389図には、各期における竪穴住居址の分布を示しておいた。実際にはここに掘立柱建物址の分布が加わらなければならないのだが、前述したように掘立柱建物址の時期決定がきわめて困難であることから片手落ちではあるがその分布は省いておいた。

この図をみると、第Ⅰ期では竪穴住居址の分布が調査区のほぼ全域におよんで認められる。これに対し、それ以降の第Ⅳ期～第Ⅶ期では、旧河川を目安とするとその南側に竪穴住居址の分布が



第389図　竪穴住居址の時期別分布

偏る傾向が看取されよう。

また、これに付随する掘立柱建物址のあり方を想定すると、竪穴住居址と掘立柱建物址の占地が極端に分離的でもない限り、竪穴住居址と同様な分布傾向を示すものと考えられよう。その数の増減も竪穴住居址の数と連動させて考えてよいかとおもう。各期の集落には、掘立柱建物址の基本的形態と考えられる側柱式のⅠ類A、C、Ⅱ類Eが認められたとみておこう。

この他、1基のみ認められた井戸は、少なくとも第Ⅱ期～第Ⅳ期にかけては使用されていたものとみられよう。また、残念ながら土壙の所属期は明らかでない。旧河川は遺構の分布と照らし合わせると、第Ⅴ期以降に存在したものと考えられよう。

当該期集落には、竪穴住居址のなかに掘立柱建物址が散見されるあり方と、竪穴住居址と掘立柱建物址がほぼ同等数認められるあり方の2類型があるとされるが(中田　1983)、本遺跡の集落は後者の類型でとらえられるものであろう。

(6)　集落と可耕地の問題

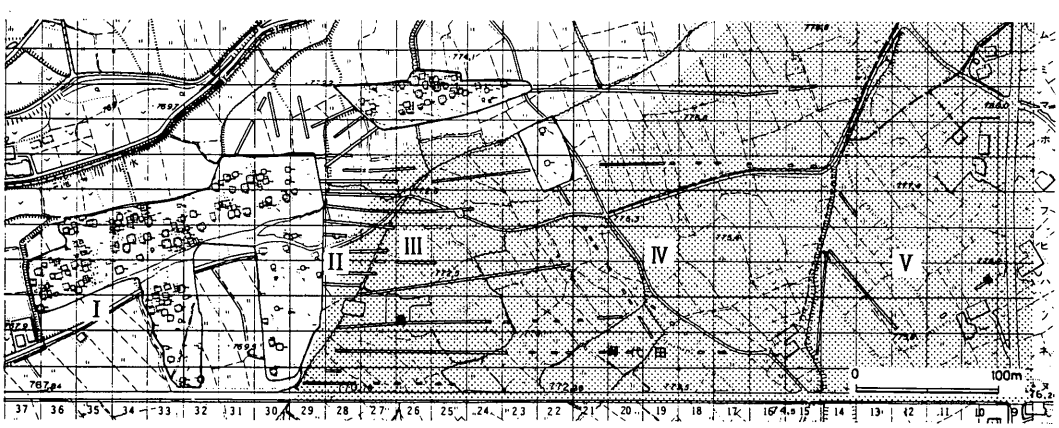
さて、集落と可耕地の問題についてふれておく。

この集落の性格付けは別としても、ここに住んだ人々はよほど特別な事情でもない限り自らの生活の糧でもあり租税の対象でもあった稲作を基本的に為していたと考えるのは自然であろう。

ではいったい彼らの耕地はどこにあったのか。

この問題を解決するために本遺跡付近の可耕地を探してみると、まず遺跡の東に隣接する広大な低地が水稲耕作の可耕地として有力視されてくる（第390図)。

この低地について水田遺構が認められないかどうか試掘トレンチをいれてみたが、水田遺構の検出はできなかった。



第390図　十二遺跡の集落と可耕地（低地)(網点)

これ以外の方法で水稲耕作の可能性を探るために、付編に掲載したプラントオパール分析と花粉分析、また、土壌観察を行なってみた。

まず、当該期の土層中に、水稲耕作に伴う特有の、鉄・マンガンの溶脱・集積するいわゆる水田土壌の形成が認められないかどうかを、長野県農事試験場の梅村弘先生に観察していただいた。その結果は、幾つかの土層断面においてそのような水田土壌の観察はまったくできず、水田土壌学の立場からはこの低地における水稲耕作の可能性は考えにくいということであった。

一方、付編１に掲載した帯広畜産大学近藤錬三先生のプラントオパール分析結果によると、集落形成以後の土層中（第III区VII層試料№１）においてはイネ起源のイチョウ形珪酸体は全ファン型珪酸体中の1.5％あり「イネ栽培が行なわれていた公算大」といえるということであった。ただし、集落存在時に対応できる土層中（第III区Ｘ層試料№２）にあってはそれは１％以下と低い数値をみせており水稲耕作の可能性を説くには微妙ともいえる結果となった。

他方、付編２のパリノサーヴェイ㈱による花粉分析結果のみからは、低地の土壌においてイネ科花粉以外の花粉が高率に出現すること、水田雑草といわれる水性植物の花粉がまったく検出されないことを考え合わせると水稲耕作の可能性は想定しにくいということであった。

以上を総合すると、可耕地として有力視される低地における水稲耕作の可能性を説くにはやや不利な状況にあるといえよう。

集落と耕地の関係については「隣接型」・「分離型」の二者が想定されようが、本遺跡の東に隣接する広大な低地に水田がなかったとすると、本集落のそれは「分離型」の可能性を残しているともいえそうである。

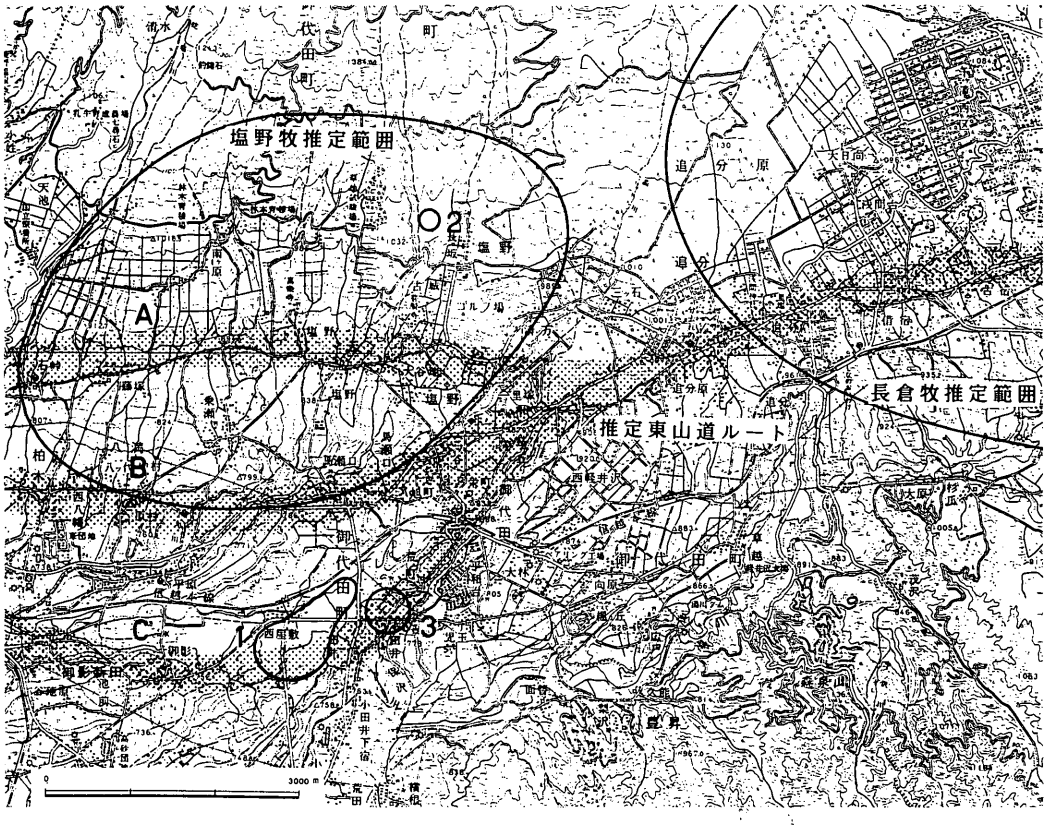
（７）　集落の性格

本集落の性格を考えるうえで、その歴史的背景をさけて考えるわけにはいかないであろう。

奈良・平安時代にあっては、本鋳師屋遺跡群の北隣には『延喜式』記載の御牧「塩野牧」が、東方には「長倉牧」が展開していたものと思われる（第391図）。

「塩野牧」は、東は濁川、西は蛇掘川、北は浅間山に画される範囲（現在の小諸市乗瀬、御代田町塩野・清万地区）を想定でき、南は牧場の入り口といった意味にも由来するかと考えられる柵口（現在の馬瀬口）付近におよんでいたものとおもわれる。この「塩野牧」の遺構として、いわゆる駒飼の土堤ともいわれる土居状遺構が塩野舟ケ沢の標高1000m付近に残されている（塩野山遺跡・第391図２）。

一方、律令制にともなって整備された新しい東山道が、少なくとも本遺跡群より４km以内を通過していたものとも考えられる。ただしそのルートは三つほど想定されているが（第391図Ａ塩野



第391図　鋳師屋遺跡群付近の歴史地図

ルート・B馬瀬口ルート・C小田井ルート)、いまだ決着をみていない。小田井ルート説では、その駅家の一つである「長倉駅」が本遺跡群の近くに設置された（第391図３）という見解もだされている（一志　1957)。

前二者の御牧では、少なくとも100頭前後の馬が飼育されていたものとみられる（堤　1986)。また、「長倉駅」には15頭の駅馬が置かれたと『延喜式』にみえる。

このような歴史的環境のなかで、本遺跡群野火付遺跡において平安時代の埋葬馬５頭が検出されたのを皮切りに、鋳師屋・前田の各遺跡から馬歯・馬骨が数多く検出され始めた。また、本十二遺跡からも３軒の住居址と旧河川から馬歯が検出されている。本遺跡群と馬との深い関わりあいが彷彿させられるのである。

そのようなことを考え合わせ、本鋳師屋遺跡群が、御牧「塩野牧」か、あるいは「長倉駅」の経営にあたった人々の残した集落ではなかったかという仮説を提示してみた(堤　1987)。そしてその仮説の検証を本遺跡群調査の今後の課題とした。

ちなみに、静岡県浜松市伊場遺跡は遠江国栗原駅家と推定されているが、ここからはそれを証

明するかのように「栗原駅長」・「馬長」・「□駅家」等といった墨書土器が検出されている（浜松市教育委員会　1975)。

また、山梨県北巨摩郡武川村宮間田遺跡は、『延喜式』記載の御牧「真衣野牧」の比定地にもあたるが、その90軒以上にもおよぶ竪穴住居址と掘立柱建物址のなかの１軒から、「牧□」と墨書された土器が検出されており（山梨文化財研究所　1987)、集落と牧との深い関連性を証明している。

遺跡の性格を決定づけるこのような直接的な資料が、本遺跡群において現在検出されていないのが不利な状況といえるが、今後、いくつかの肯定的要件・否定的要件を提示したうえで本遺跡群の性格の実像に迫らねばなるまい。

Ⅵ　付　　編

自然科学分析にあたって

（1）　はじめに

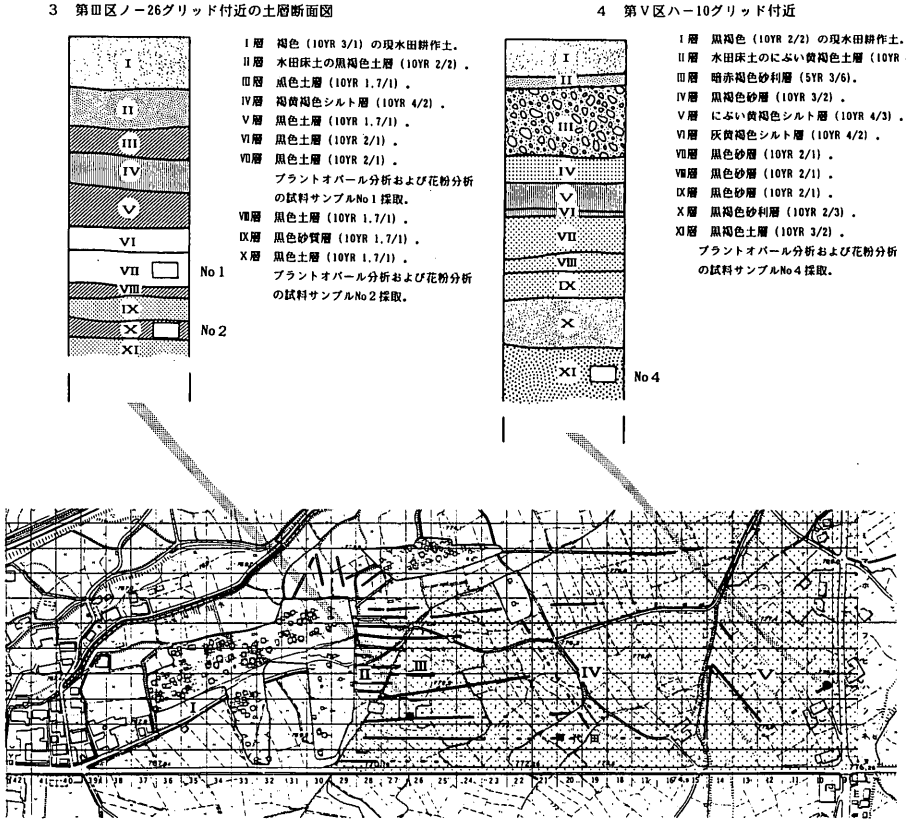
十二遺跡では、より総合的な見地からの遺跡・遺物の性格解明にあたり、自然科学分析を実施し、1～4の付編として以下に掲載した。

その付編掲載にあたっては、分析資料の性格および分析の目的について、予めふれておく必要があると考えられるため、ここで若干の補足説明を加えておくこととする。

（2）　付編1　十二遺跡土壌の植物珪酸体分析にあたって

ここでは、奈良・平安時代の十二遺跡における水田耕作の可能性を、土壌中の植物珪酸体分析によって探ってみることが目的である。

十二遺跡において水稲耕作が可能な地区として、集落の西、第Ⅲ区～第Ⅴ区（第1図網点部分）が考えられるので、分析試料はその地区より採取した。採取地点の層序も第1図に示してある。



第1図　十二遺跡植物珪酸体分析および花粉分析サンプル採取位置

試料１は、第III区第１地点（ノ－26グリッド）VII層中よりサンプリングした。VII層は、第Ⅰ・II区との土層対比から集落存続期をやや下る堆積層と推定される。

試料２は、第III区第１地点（ノ－26グリッド）Ⅹ層中よりサンプリングした。Ⅹ層は、第Ⅰ・II区との土層対比からおよそ奈良・平安時代の堆積層と推定される。

試料３は、第III区第２地点（ノ－26グリッド）で第１地点Ⅹ層に対応できる河川覆土（自然流路か人工か不明）層中よりサンプリングした。

試料４は、第Ⅴ区第１地点（ハ－10グリッド）XI層中よりサンプリングした。XI層の堆積年代は残念ながら不明であるが、第III区との土層対比から奈良・平安時代の堆積層とも考えられる。

（３）　付編２　十二遺跡の花粉分析にあたって

十二遺跡の花粉分析にあたっては、ひとつは植物珪酸体分析と同様な目的、つまり花粉分析から窺い知ることのできる水田耕作の可能性について考えてみることにした。このため試料１～４は、植物珪酸体分析試料１～４と共通する同一地点同一層序のものである。したがってその状況については前項を参照いただきたい。

一方、奈良・平安時代の集落をとりまく古環境の復元もその目的とした。上記１～４以外のサンプル５～７は、切り合い関係をもつ竪穴住居址のうち古いほうの住居址覆土から採取した。このサンプルは、古いほうの住居址の廃絶以後～新しい住居址の構築以前と位置付けられ、そこから得られたデータはおおよそ奈良・平安時代の集落存続期のものとみなされよう。

（４）　付編３　十二遺跡出土炭化材の樹種同定にあたって

十二遺跡第II区Ｈ－58号は焼失家屋であり、その上屋と推定される炭化材が多数検出された。その炭化材の樹種同定をおこない、上屋に用いられた材の種類を知ることが目的である。

（５）　付編４　十二遺跡出土須恵器の蛍光Ｘ線分析にあたって

十二遺跡出土の奈良・平安時代の須恵器の主なものについて、蛍光Ｘ線分析を実施しその原産地同定を試みることが目的である。

一方で、地元の主要な須恵器窯の製品の化学的特性を示す分析値を把握し、また、数ある在地窯について、分析値による製品の相互識別が可能かどうかを検証してみたい。

そのうえで十二遺跡の須恵器の分析値と他を対比し、十二遺跡の須恵器が在地のものか搬入品かをみきわめられればと考える。そして、十二遺跡の須恵器が搬入品であるとすれば、いったいいずれのものなのかが推定されないだろうか。また、十二遺跡における須恵器の在地品・搬入品の供給割合を時期別に追ってみれればとおもう。

付　編　1

十二遺跡土壌の植物珪酸体分析

帯広畜産大学環境土壌学研究室
近藤　錬三

（1）　植物珪酸体の分離・定量法

分析に供した試料は、十二遺跡III区（7層、10層）およびV区（11層）セクションから採取した。

これらの試料を風乾し、2㎜の篩いに通過した後、植物珪酸体分析用試料とした。

植物珪酸体の分離・調整法は近藤（1981）の方法に準じ以下のように行った。

風乾細土（<2.0㎜）10ｇを500mlトールビーカに取り、過酸化水素、熱塩酸および超音波処理後、篩いと沈降法によって10～200μmの粒径画分を得た。この画分試料0.5～1.0ｇをマルト・クイックセパレーター用遠心管に取り、比重2.3のツーレ重液20mlとよく混合した。1500～2000回転で約5分間遠心分離した後、遠心管上の浮上物（植物珪酸体）を前もって用意した濾紙に移した。この操作は、浮上物が肉眼で認められなくなるまで繰り返した(ほぼ5回)。小型蒸発皿に濾紙上の植物珪酸体を移し、乾燥させた。

植物珪酸体の形態別組成は、上記の植物珪酸体の少量をスライドグラス上に取りカナダバルサムで固定した後、佐瀬・近藤（1974)、近藤・隅田（1978、1981）の分類に準じ、偏光顕微鏡と走査型電子顕微鏡で同定した。

（2）　植物珪酸体の形態的特徴

供試試料から分離した植物珪酸体は、その形態的特徴に基づいて、Ⅰ)．イネ科草本起源珪酸体、II)．樹木起源珪酸体、III)．未記載（又は未分類）珪酸体に区分した。

プリッケルヘアー、長細胞などに由来する大型珪酸体に二大別した。さらに、小型珪酸体はタケ型、キビ型、ヒゲシバ型、ウシノケグサ型およびその他珪酸体に細別した。

樹木珪酸体は、その形態的特徴から広葉樹と針葉樹に二大別されるが、ここでは一括して樹木起源珪酸体として表示した。

未記載珪酸体の中には、植物珪酸体の破片、風化物、前述のⅠ）に属するが未だ分類されていない珪酸体、カヤツリグサ科起源珪酸体および起源不明の珪酸体が含まれている。

つぎに、図版を用いて各珪酸体の特徴を解説する。

図版１～３

a）タケ型

タケ亜科（タケ類、ササ類）および一部のダンチク亜科の葉身表皮細胞に特徴的に観察される長座鞍型珪酸体である。

b）キビ型（図版１　a～e）

暖地型イネ科草本であるキビ亜科（ススキ、チガヤ、トウモロコシなど）および一部のダンチク亜科（ダンチク、ヌマガヤなど）の葉身表皮細胞に特徴的に観察される亜鈴形、複合亜鈴形および十字形珪酸体である。試料中に検出されるキビ型珪酸体の給源植物は、エノコログサ属、ススキ属（b）、イヌビエ属（a）、チカラシバ属（c）などである。

c）ヒゲシバ型（図版１　g）

スズメガヤ亜科（シバ、ヒゲシバ、オオニワホコリなど）および一部のダンチク亜科（トタシバ、ヨシなど）の葉身表皮細胞に特徴的に観察される短座鞍型珪酸体である。試料中に検出されるヒゲシバ型珪酸体の給源植物は主にヨシである。

d）ウシノケグサ型（図版１　f）

寒地型イネ科草本であるイチゴツナギ亜科（ウシノケグサ、ノガリヤス、ムギ類など）の葉身表皮細胞に特徴的に観察される矩形、楕円形、ボート状および星状形態の珪酸体である。

e）ファン型（図版２　l～o）

イネ科草本の葉身表皮細胞にのみ特徴的に観察される機動細胞由来の扇状（または食パン状）形態の珪酸体である。ファン型珪酸体は科、属、あるいは一部種の間で形態的違いが認められる。試料中に検出されるファン型珪酸体の大部分はキビ亜科に由来するものであるが、一部ダンチク亜科およびイネに由来するものもある。a～oはイネのファン型珪酸体であり、i～oは非タケ亜科ファン型（ススキ、トウモロコシなど）珪酸体である。

f）ポイント型（図版２　s）

イネ科草本葉身表皮細胞のprickle hairに由来する矢尻状、またはかぎ状形態の珪酸体である。この種の珪酸体は、タケ亜科およびイチゴツナギ亜科に多く含有されている。

g）棒状型（図版２　p、q）

イネ科草本葉身表皮細胞の長細胞に由来する棒状形態の珪酸体である。棒状型珪酸体は小型珪酸体と異なり、イネ科植物分類グループとさほど関係が認められない。

h）樹木起源珪酸体（図版２・３　r、t、u）

樹木起源珪酸体の大部分は、葉部の表皮細胞、表皮毛、表皮毛基部および維管束細胞に由来する。試料中には、広葉樹由来の「はめ絵パズル」、「くの字」状珪酸体が検出される。

i）未記載（または、未分類）珪酸体

この種の珪酸体は、①．給源が全く不明な珪酸体、②．カヤツリグサ科由来の珪酸体、③．前述のａ）～ｈ）に分類されない珪酸体、および④．①～③の珪酸体の破片あるいは風化物が包含される。

（３）　植物珪酸体の形態別組成

表－１で明らかのように、同定される植物珪酸体の大部分（57～72%）はイネ科草本に由来するものであり、樹木起源珪酸体は１～３%を占めるにすぎない。

イネ科草本起源珪酸体の中では、大型珪酸体が圧倒的に多い(78～84%)。とくに、棒状型とファン型珪酸体が顕著である。小型珪酸体ではキビ型が比較的多く含有されている。タケ型は極めて少なく、No.4 試料では全く含有されていなかった。

これらの結果から、試料中の植物珪酸体の給源植物はススキ、チガヤなどのキビ亜科イネ科草本が主体であったと思われる。No.2、3試料ではヨシに由来するヒゲシバ型およびファン型珪酸体が含まれており、試料採取地点が湿性環境であったことが推測される。ファン型珪酸体もススキなどのキビ亜科に由来するものが多い。また、No.4 以外の試料全てにイネ起源のイチョウ形ファン型珪酸体（写真図版：ｉ～ｋ）がごく僅かに検出された。

第Ｉ表　十二遺跡土壌の植物珪酸体分析（%）

※試料	イネ・科草本起源珪酸体									樹木起源珪酸体	未記載珪酸体	計測数（個）
	小型珪酸体						大型珪酸体					
	タケ型	キビ型	ウシノケグサ型	ヒゲシバ型	ダンチク型	その他	ファン型	ポイント型	棒状型			
1	0.5	4.5	0.4	0.7	0.5	6.6	19.0	7.0	21.4	2.8	36.6	752
2	0.6	4.5	1.4	1.0		2.5	16.4	8.8	25.4	1.5	37.9	763
3	1.2	2.0	1.2	1.2		3.1	18.4	6.7	23.6	2.0	40.6	509
4		5.5	0.6	0.5	0.5	4.0	25.1	12.3	23.4	1.1	26.9	967

※　試料１は第III区第１地点、VII層試料２は第III区第１地点Ｘ層、試料３は第III区第２地点試料２と同一層と考えられる層で、河川流路（自然か人工か不明）より採取した。また試料４は第Ｖ区第１地点XI層より採取した。

試料中最も多くイネ起源ファン型珪酸体を含有した試料は、№1で全ファン型珪酸体の1.5%であった。№2、および3は1%以下であった。長野農業試験場の水田土壌表層のイネ起源ファン型珪酸体は全ファン型の9%、また、イナワラ堆肥連用（8年間、500kg／10a／年）の水田土壌表層のそれは16%であった。このデータだけでは採取地点が水田土壌であったか否かは不明であるが、少なくとも採取地点付近でイネ栽培が行われていた公算大である。

引用文献

1）近藤錬三（1981）弁天橋遺跡土壌の植物珪酸体分析、p．67－71、弁天橋遺跡調査報告書、八王子市弁天橋遺跡調査研究会

2）近藤錬三・隅田友子（1978）樹木葉のケイ酸体に関する研究（第1報）、裸子植物および単子葉被子植物樹木葉の植物ケイ酸体について、土肥誌、49、p．138－144

3）近藤錬三・ピアスン友子（1981）樹木葉のケイ酸体に関する研究（第2報）、双子葉被子植物樹木葉の植物ケイ酸体について、帯畜大研報、12、p．217－229

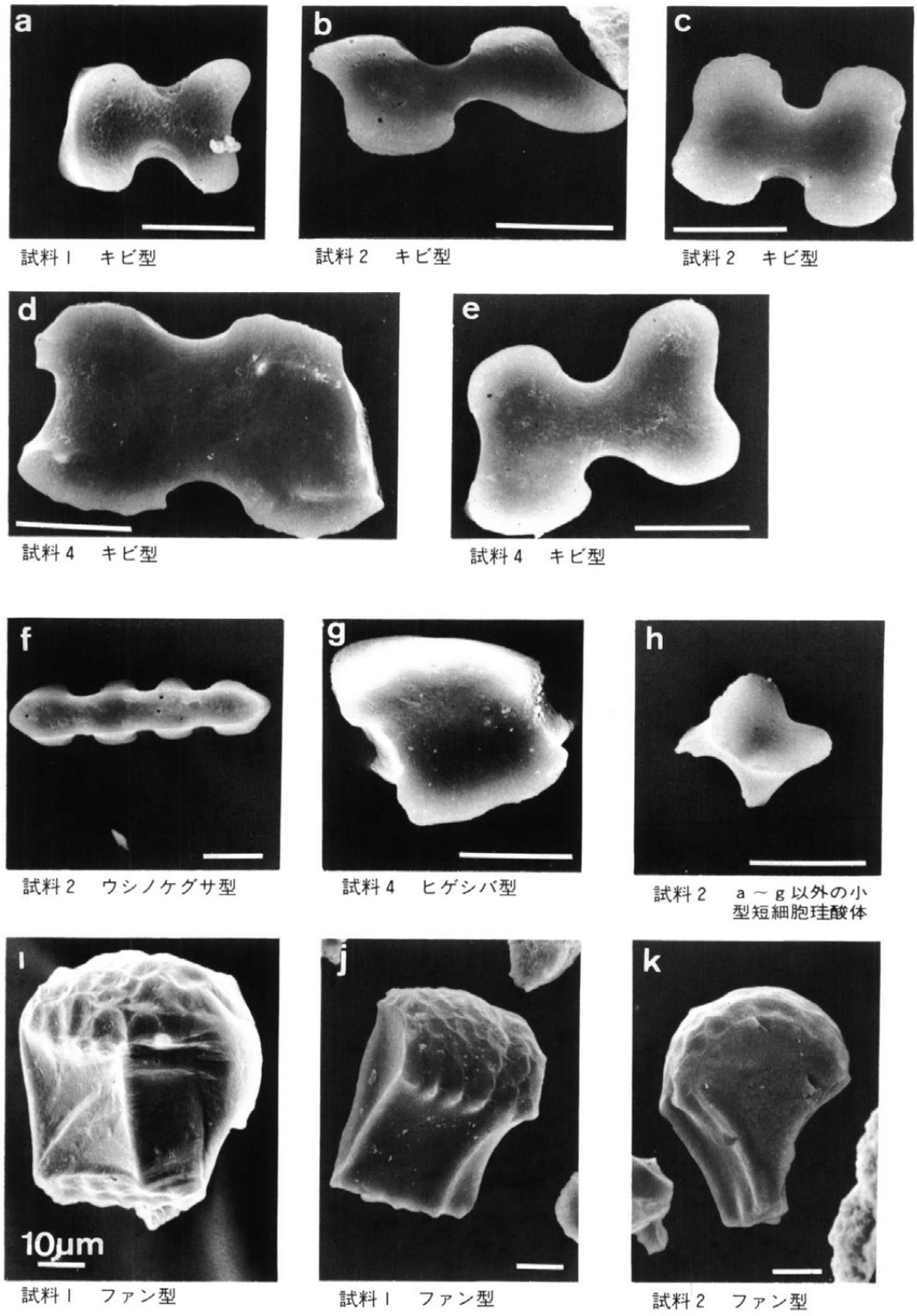
4）佐瀬　隆・近藤錬三（1974）北海道の埋没火山灰土腐植層中の植物珪酸体について、帯畜大研報、8、p．147－183

図版1～3

試料1：a、i、j、n、o～q、v～x、　試料2：b、c、f、h、k、m、r、

試料3：u、　試料4：d、e、g、l、s、t

a～e：キビ型、f：ウシノケグサ型、g：ヒゲシバ型、h：a～g以外の小型短細胞珪酸体、i～o：ファン型、p、q：棒状型、s：ポイント型、r、t、u：樹木起源珪酸体、v～x：淡水性ケイ藻



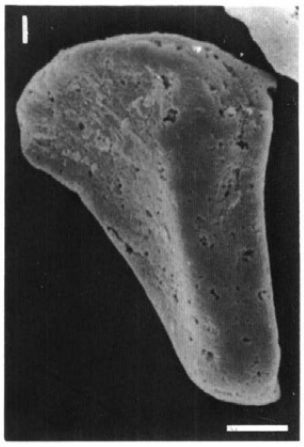
試料1　キビ型　試料2　キビ型　試料2　キビ型

試料4　キビ型　試料4　キビ型

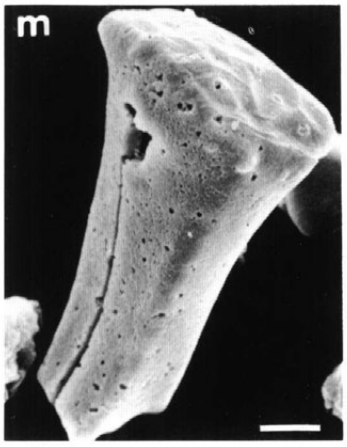
試料2　ウシノケグサ型　試料4　ヒゲシバ型　試料2　a～g以外の小型短細胞珪酸体

試料1　ファン型　試料1　ファン型　試料2　ファン型

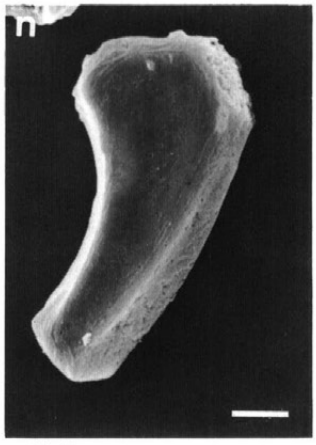
図版1　十二遺跡植物珪酸体顕微鏡写真



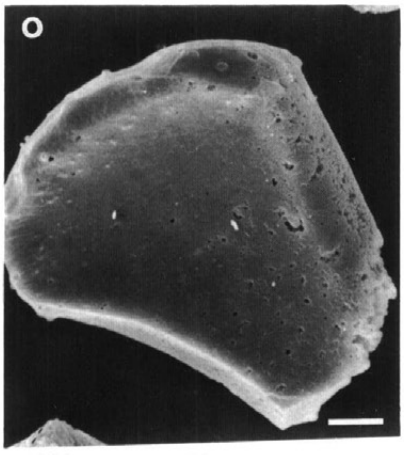
試料 4　ファン型



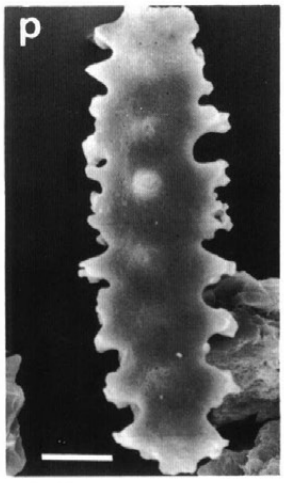
試料 2　ファン型



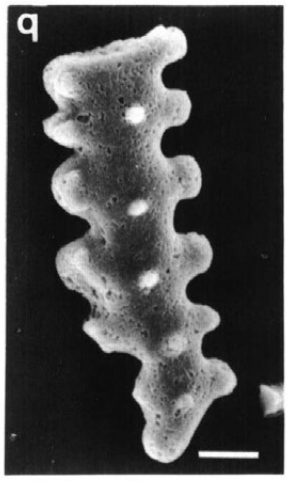
試料 1　ファン型



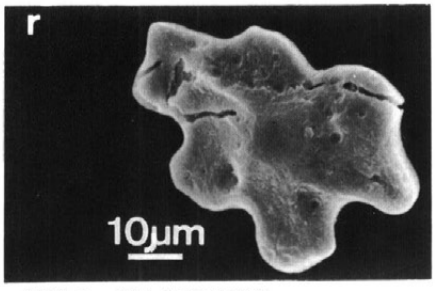
試料 1　ファン型



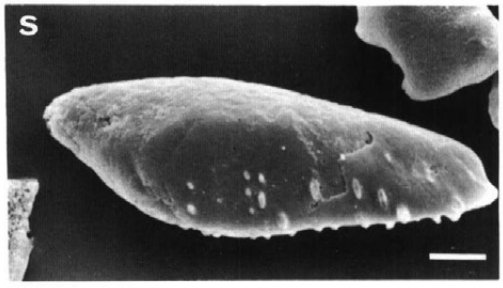
試料 1　棒状型



試料 1　棒状型

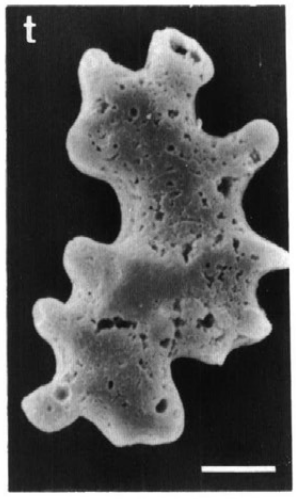


試料 2　樹木起源珪酸体

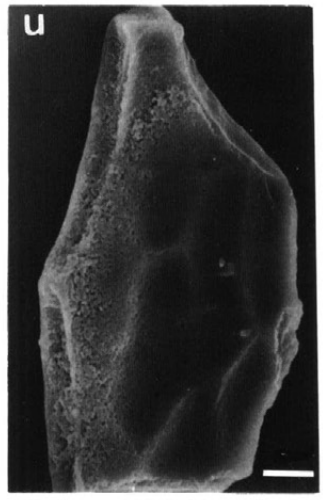


試料 3　ポイント型

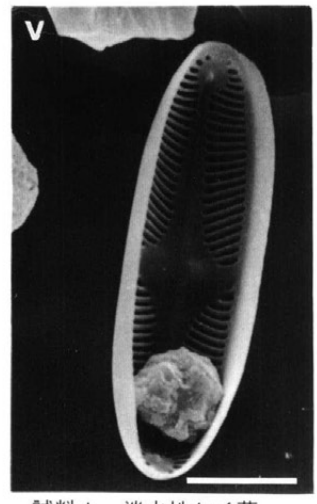
図版 2　十二遺跡植物珪酸体顕微鏡写真



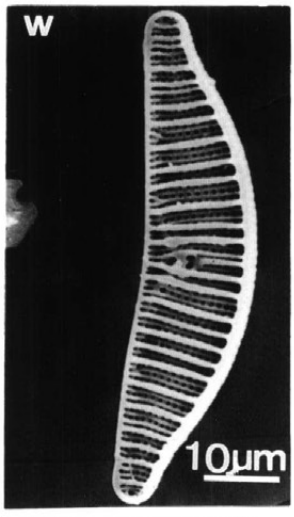
試料 4　樹木起源珪酸体



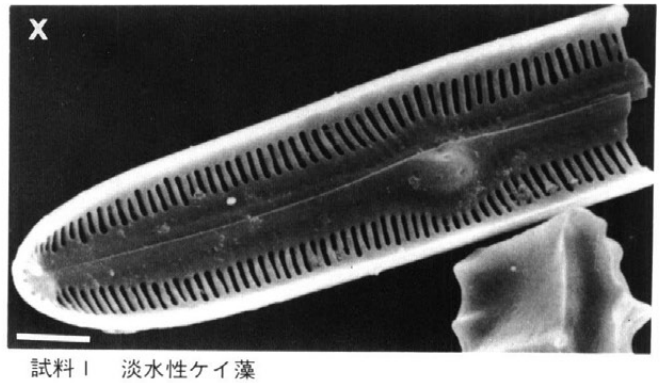
試料 3　樹木起源珪酸体



試料 1　淡水性ケイ藻



試料 1　淡水性ケイ藻



試料 1　淡水性ケイ藻

図版 3　十二遺跡植物珪酸体顕微鏡写真

付　編　2

十二遺跡の花粉分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

（1）　目　的

分析に供した試料は、奈良・平安時代？の堆積物と考えられている低地の堆積物（4点）と、奈良・平安時代の住居址（3軒）の覆土（3点）である。低地堆積物の試料では当時の植生と水田耕作の可能性について、住居址の覆土試料では当時の集落周辺の古植生について解析することを目的とする。

（2）　試　料

分析に供した試料は、第1表に示す7点である。土質は分析に先立って、当社にて観察した結果を示してある。なお、試料1～4は奈良・平安時代において水田耕作の可能性のある地点の土壌である。

第1表　十二遺跡花粉分析試料一覧表

試料番号	土　　質	採　取　地　点
1	黒褐色粘土混じり砂質シルト	低地の堆積物（Ⅲ区）
2	黒褐色砂混じり粘土質シルト	〃　（Ⅲ区）
3	黒褐色砂混じり粘土質シルト	〃　（Ⅲ区）
4	黒褐色シルト質砂	〃　（Ⅴ区）
5	〃	Ｈ－44号住居址覆土
6	黒色砂混じり粘土質シルト	Ｈ－61号住居址覆土
7	黒褐色砂混じり粘土質シルト	根岸遺跡　Ｈ－22号住居址覆土

（3）　分析方法

花粉・胞子化石の抽出方法は、以下に示す方法で行なった。

1）秤量

試料をポリエチレン製ビーカーに各15～20ｇ秤量する。

2）ＨＦ（フッ化水素）処理

本処理は、試料中のケイ酸質の溶解と、試料の泥化を目的とする。

①　試料に48％ＨＦを20ml加えて、振とう式ホットプレートで60分間加熱撹拌する。

② 処理後、試料を50mlの遠沈管に移しかえ、遠心分離（1500回転）し、上澄み液を捨てる。

③ 蒸留水を加え、攪拌し、遠心分離を行ない上澄み液を捨て処理液を取り除く（以下、水洗いとする)。この作業を２回行なう。

3）重液分離

本処理は、試料中の花粉・胞子化石などの有機物を、比重の違いを利用して分離する。花粉・胞子化石の比重は1.3～1.8以下で、鉱物質は２以上である。

① $ZnBr_2$（臭化亜鉛）を10%塩酸（HCI）に溶かし、比重を2.2に調整する。その重液を、HF処理の終わった残渣に20ml加えて、よく攪拌する。

② 遠心分離器により、800回転で15分間、続けて2500回転で10分間遠心分離する。

③ 遠心分離後の浮上物を別の遠沈管に移し、蒸留水を加え比重を下げ、遠心分離する。

④ 水洗を３回行なう。

4）アセトリシス処理

エルドマン（1934）が考案した方法で、植物遺体中のセルロースを加水分解する。

① CH_3COOH（氷酢酸）10mlを加えよく攪拌し、残渣の脱水を行なう。遠心分離する。上澄み液を捨てる。

② 残渣に、$(CH_3CO)_2O$（無水酢酸）９部にH_2SO_4（濃硫酸）１部を混入した醋化液を10ml加え、ウォーターバスで５分間湯せんする。冷却後遠心分離し、上澄み液を捨てる。

③ 水洗を３回行なう。

5）KOH処理

腐植酸の溶解を目的とする。

① 10%KOH（水酸化カリウム）を10ml加え、ウォーターバスで15分間湯せんする。

② 水洗を３回行なう。

6）封入

分析処理後の残渣をマイクロピペットで花粉・胞子数を調整し、グリセリンゼリーで封入し、検鏡した（グリセリンゼリーは、屈折率が1.43で、北米やわが国でよく使われる封入剤である)。

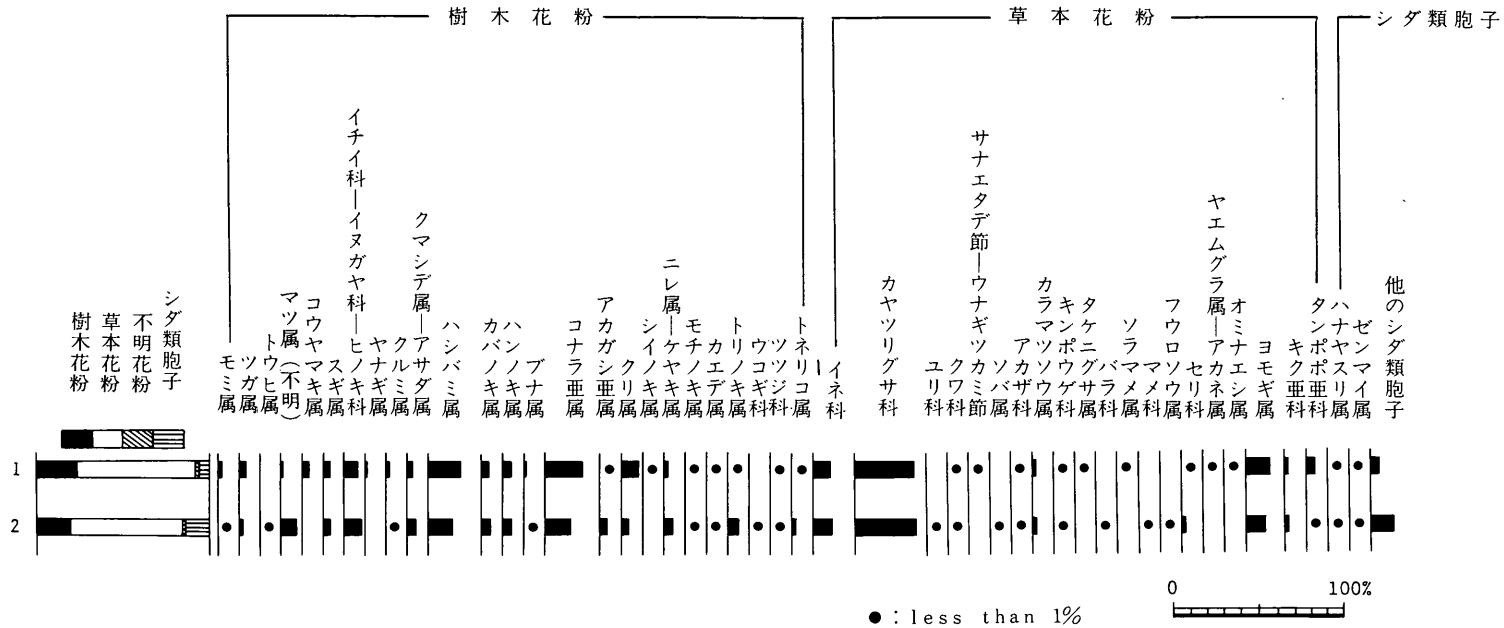
7）検鏡方法および結果の表示方法

検鏡においてはプレパラート全面を走査し、その間に出現したすべての種類（Taxa）を同定し、その個数を計数した。その結果は第２表に示し、第２表をもとに各試料における花粉・胞子化石の出現率を算出し、第１図（十二遺跡試料花粉化石群集分布）を作成した。

図表において複数の種類をハイフォン（－）で結んだものは、その間の区別が明確でないものである。また、第１図における出現率は、樹木花粉が樹木花粉の合計、草本花粉とシダ類胞子が樹木花粉・草本花粉・シダ類胞子の合計を基数とした百分率である。なお、樹木花粉の合計が百

第2表　十二遺跡試料花粉分析結果

種類	試料番号 1	2	3	4	5	6	7
樹木花粉							
モミ属	3	1	−	−	−	−	−
ツガ属	5	2	−	−	1	1	−
トウヒ属	−	1	−	−	−	−	−
複雑管束亜属（ニヨウマツ亜属）	−	−	−	−	−	1	−
マツ属（不明）	2	10	−	−	−	−	−
コウヤマキ属	6	−	1	−	−	−	−
スギ属	5	5	−	−	−	−	−
イチイ科−イヌガヤ科−ヒノキ科	11	11	1	−	−	−	−
ヤナギ属	2	−	−	−	−	−	−
クルミ属	3	1	−	−	−	−	−
クマシデ属−アサダ属	4	6	3	−	−	−	−
ハシバミ属	27	17	8	−	−	4	2
カバノキ属	5	6	1	−	−	−	−
ハンノキ属	7	6	−	−	−	−	−
ブナ属	2	1	−	−	−	−	−
コナラ亜属	29	17	2	−	−	−	−
アカガシ属	1	5	1	−	−	−	−
クリ属	13	5	2	−	−	−	−
シイノキ属	1	−	−	−	−	−	−
ニレ属−ケヤキ属	3	6	−	−	−	−	−
エノキ属−ムクノキ属	−	−	1	−	−	−	−
モチノキ属	1	1	−	−	−	−	−
カエデ属	1	1	−	−	−	−	−
トチノキ属	1	7	−	−	−	−	−
ウコギ科	−	1	1	−	−	−	−
ツツジ科	1	1	−	−	−	−	−
トネリコ属	1	2	−	−	−	−	−
草本花粉							
イネ科	55	62	3	−	2	1	1
カヤツリグサ科	192	205	9	−	−	−	−
ユリ科	−	1	−	−	−	−	−
クワ科	1	2	−	−	−	−	−
サナエタデ節−ウナギツカミ節	1	−	−	−	−	−	−
ソバ属	−	1	−	−	−	−	−
アカザ科	2	2	1	−	−	−	−
ナデシコ科	−	−	1	−	−	−	−
カラマツソウ属	9	9	1	−	−	1	2
キンポウゲ科	3	1	−	−	−	−	−
タケニグサ属	1	−	−	−	−	−	−
バラ科	−	1	−	−	−	−	−
ソラマメ属	1	−	−	−	−	−	−
マメ科	−	2	−	−	−	−	−
フウロソウ属	−	1	−	−	−	−	−
セリ科	3	9	1	−	−	−	−
ヤエムグラ属−アカネ属	2	−	−	−	−	−	−
オミナエシ属	1	−	−	−	−	−	−
ヨモギ属	74	65	8	−	3	4	3
キク亜科	9	13	1	−	1	2	2
タンポポ亜科	26	5	−	−	−	−	2
不明花粉	11	6	1	−	−	−	−
シダ類胞子							
ハナヤスリ属	−	1	−	1	−	−	−
ゼンマイ属	−	3	−	−	−	−	−
他のシダ類胞子	28	77	9	−	1	2	1
樹木花粉	134	113	21	0	1	6	2
草本花粉	380	379	25	0	6	8	10
不明花粉	11	6	1	0	0	0	0
シダ類胞子	28	81	9	1	1	2	1
総花粉・胞子	553	579	56	1	8	16	13



第１図　十二遺跡試料花粉化石群集分布

個体未満の試料については、データが歪曲されるおそれがあるので図示しなかった。

（4） 結 果

花粉分析の結果、７点の試料から樹木花粉が27種類、草本花粉が21種類、シダ類胞子が３種類検出された。花粉・胞子化石の産出は、No.１とNo.２試料が比較的良好に産出したものの、その他の試料は非常に少なかった。

以下に各試料について述べる。

○No.１試料

樹木花粉は、コナラ亜属・ハシバミ属・クリ属・イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科などが高率に出現し、ハンノキ属・カバノキ属・スギ属・コウヤマキ属などを伴なう。草本花粉は、カヤツリグサ科が非常に多く、イネ科・ヨモギ属・タンポポ亜科などを伴なう。

○No.２試料

樹木花粉・草本花粉共にNo.１試料と良く似た花粉組成を示している。

○No.３～７試料

これらの試料は、いずれも花粉・胞子化石の産出が非常に少ない。そのうちNo.３は産出がやや多く、花粉組成はNo.１・No.２試料に似た傾向がみられる。

（5） 考 察

今回の花粉分析は、奈良･平安時代の住居址覆土試料３点（No.５～No.７）、及びほぼ同時代とみられている低地堆積物試料４点（No.１～No.４）について実施した。分析の結果、低地堆積物試料２点（No.１・No.２試料）以外は花粉・胞子化石の産出が少なく、古植生の解析には至らなかった。

目的のひとつであった住居址覆土の分析結果から集落とその周辺の古植生を解析する試みは果たせなかった。

ここでは、低地堆積物試料２点の分析結果をもとに、奈良・平安時代（？）の低地及びその周辺の古植生と、当時の低地における水田耕作の可能性について検討する。また、No.３～No.７試料については、花粉・胞子化石の産出が少なかった原因に触れておきたい。

１）植生について

両試料共に、花粉組成が良く似ている。樹木花粉と草本花粉を比べると、草本花粉が樹木花粉の約３倍であり、草本花粉が非常に多い。このことは、低地にはあまり樹木が存在せず、比較的開けた空間が存在していたと考えられる。その低地には、カヤツリグサ科をはじめとしてイネ科･ヨモギ属・タンポポ亜科・カラマツソウ属などの草本植物が存在し、生育していたと推定される。

そして、樹木は低地に散在していたか、周辺の台地に存在していたと考えられ、ナラ類・ハシバミ属やクリ属などの落葉広葉樹が多く、これらに混じってイチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科やスギなどの針葉樹やカシ類の照葉樹も存在していたといえよう。なお、クリ属の花粉は虫媒花で飛散力が小さいところから、採取地付近に存在していたと考えられる。

2）水田耕作の可能性について

分析の結果イネ科花粉が比較的多く出現したが、カヤツリグサ科の方がはるかに多く出現する点、その他の草本花粉も高率に出現する点を考慮すると、低地において稲作が行なわれていた可能性は推定し難い。また、水田が存在していた場合、水田雑草と言われる水生植物の花粉（例えば、オモダカ属・ミズアオイ属・サンショウモなど）が検出される可能性は高いものと考えられる。しかし、両試料から水生植物はまったく検出されておらず、水田という水の影響を想定しがたい。

以上のように、今回の花粉分析結果のみからは、低地において水田耕作が行なわれていた可能性を想定し難い。

3）花粉・胞子化石の産出が非常に少なかったNo.3～No.7試料について

土壌中から花粉・胞子化石が少ししか産出しない原因として、一般に以下のような条件が想定される。

① 堆積物の堆積時に花粉が取り込まれなかった。

② 堆積後、堆積物の粒子が粗いため（砂等）水の移動に伴なって花粉・胞子化石が流去してしまった。

③ 堆積時あるいは堆積後、直射光と酸素によって酸化分解され、消失してしまった。

今回の分析試料の内、No.4～No.7試料は特に砂分が多かった。このような試料では、②のような原因で花粉・胞子化石が流去してしまった可能性が強い。また、台地上の試料であるNo.5～No.7などでは、③のような酸化分解による消失の可能性も考えられる。一方、花粉・胞子化石が豊富に産出したNo.1・No.2試料同様の低地の堆積物で、土質もほぼ同一であるNo.3試料の化石産出が少なかった原因としては、①のように本来取り込まれる花粉・胞子が少なかった、③のように堆積後酸化分解し消失した状況が推定される。

以上のように、花粉・胞子化石の産出状況に関与したと想定される要因はいくつか指摘されているが、いまだ未知の部分も多い。またこれらの要因が複合して影響している状況も、十分に考えられることである。今後は、背景となる堆積環境を知り得る珪藻分析等を併用し、検討されれば良いかと思われる。